
etc.ロマンス

sadaka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

e t c . ロマンズ

【Nコード】

N 3 2 6 4 P

【作者名】

s a d a k a

【あらすじ】

魔法が存在し、二月が浮かぶ世界に召喚されてしまった女子高生の、なりゆき異世界ライフ物語。 個人サイトからの転載です。

二月の浮かぶ世界（1）（前書き）

一部にイジメや暴力的な表現が含まれます。苦手な方はご注意ください。

二月の浮かぶ世界（1）

澄み切った夜空に青白い月が浮かんでいる。欠けたところのない丸い月は強烈な存在感でもって夜を支配していた。その月は、日中の青空に見る白い月とも普遍概念的な黄色の月とも色合いが違う。そして地球上で見る月と大きく異なるのは、月に寄り添うように輝く明るい星の存在だった。

二月の浮かぶ空の下、大地は降り積もった雪に覆われていた。青白い月に照らされた雪原は幻想的な色味を帯びて輝き、虫の声すら聞こえない無音の静謐を保っている。まるで自然が人間の存在を拒んでいるかのように思える静かな夜、足跡もない新雪の雪原に少女が立ち尽くしていた。彼女の出で立ちは長袖のワイシャツにチエックのスカートというものであり、その存在自体が冬の雪原に似つかわしくない。しかしそれでも、少女はその世界に存在していたのである。

少女の名は、宮島葵。十七歳の高校二年生。ピアスなどのアクセサリーはつけていないが髪は染めていて、ナチュラルなブラウン。彼女が身につけているワイシャツとチエックのスカートは高等学校の制服だった。鞆などは持っておらず、葵は身一つで雪原に佇んでいる。何が起きたのか理解出来ないといった、呆然とした様相で。

風は吹いていなかったが冬月期の外気は容赦なく体温を奪っていく、少しでも寒さを和らげようと無意識のうちに歩き出した葵は雪の上に倒れこんだ。すぐさま起き上がったものの、葵は雪の冷たさに愕然としている。彼女が驚くのは無理もないことであった。何故ならつい先刻まで彼女がいた世界は、間もなく夏を迎えようとしていた時期だったのだから。

葵は混乱していたが、彼女の置かれている状況は悠長に考え事をするような時間を与えてはくれなかった。思考よりも先に現実を取り戻した体が寒さに反応を示し、むき出しの膝がガクガクと震え出

す。血色の悪い口唇も、歯の根がかみ合わずにガチガチと音を立てた。葵は反射的に腕を抱いたが、そんなことで何とかなる寒さではない。このまま雪原に立ち尽くしていれば間違いなく凍死の末路を辿るだろう。

生命の危機を察した葵はとにかく移動をしようと考え、周囲を見回した。彼女の左遠方には雪を被った森林と思しきものがあるが、その他の方角には何も無い。果ての見えない雪原を進むのは自殺行為だと直感した葵は森の方へ行ってみることにした。だが葵は都会育ちであり、高く積もった雪の上を歩くのは初めてである。思うように前へ進まないことに焦った葵は何度も転び、美しい新雪の風景を乱していった。

「いったあゝ。また失敗しちゃったよ」

ドサツという何かが落下する音がした後、誰かの声があった。それは背後から聞こえてきたので、葵は慌てて振り返る。葵の傍にはいつの間にか金髪の少年が出現していて、彼は雪の上に尻もちをついていた。

振り向いた葵と目が合うなり、少年は跳ねるように体を起こした。彼は青い月光に晒されながらも紫色を失わない瞳で、葵をじっと見つめている。少年の目には明らかかな好奇心が覗いていたが、別のことに気をとられていた葵はそのことに気が付かなかった。

（この子、どこから出てきたの？）

少年が落下してきたように思った葵は周囲を見回してみた。だが葵達がいる辺りには木も生えておらず、平坦な雪の大地が続いているだけである。少年が雪原を歩いて近付いて来たのなら足跡が残っているはずだが、それも見当たらない。不可解に思った葵は改めてどこからか出現した少年に視線を移した。しかし問いを口にする前に、今度は別のことに気をとられて息を呑む。明らかに日本人ではない少年の姿は、間近に見れば見るほど現実離れしたものだっただ。

さらさらの金髪に紫色の瞳という少年の容貌は、海外旅行もしたことがない葵の目に物珍しく映った。年の頃は十歳くらいだろうか。

日本でいえば小学校高学年くらいの少年は人目を引く非常に愛らしい顔立ちをしており、雪原に凜然と佇む姿は幽玄の美すら感じさせる。しかし見惚れていたのも束の間、足下から上ってくる寒さに正気を取り戻した葵は大きく身震いをした。葵が身動きしたことを機に、少年が口火を切る。

「ねえ、僕の言葉わかる？」

少年の言葉は流暢な日本語であり、難なく聞き取った葵は頷いて見せた。すると何故か、少年は喜色を露わにする。だが彼は寒がる葵の様子を見てすぐ真顔に戻った。笑みを消した少年は自身が身につけていた厚手のケープを外し、精一杯の背伸びをして葵の体に巻きつけようとすする。寒さに震えていた葵はケープの温もりと、少年の優しさに感激した。

「ありがとう。でも、寒くないの？」

ケープを脱いだ少年は膝丈までのズボンに開襟のシャツ一枚という、葵と同じくらいな薄着である。しかし平気な様子で、彼は大丈夫なのだと告げた。

「今、火を出すから」

そう言い置くと、少年は胸の高さに腕を持ち上げて掌を上にした。そのままの体勢で、彼は何事かを呟いている。少年の不審な言動に葵が眉をひそめた刹那、彼の掌の上に炎が出現した。

今まさに燃え盛っている暖色の炎は、葵の目には何も無い所から唐突に出現したように映った。少年が火種を持っていたわけでもなく、その炎は彼が腕を下ろして後も空中で燃え続けている。寒かったので、葵はとりあえず手をかざしてみた。

呆けながら暖をとっている葵をその場に残し、少年は雪の上を歩き出した。その足取りは何処かへ行くというものではなく何かを探しているといった様子だったので、葵は横目で彼の姿を追う。白い呼吸を上空へ上らせながら雪原を右往左往していた少年は、やがて頭を掻きながら独白を零した。

「おかしいなあ。魔法陣からこんなに離れた場所に出現するなんて

……」
一言呟いたきり動きを止めた少年は足下を見つめながら思案に沈んでいる。不可解な単語を耳にしたような気がした葵は首をひねった。

（マホウジン……魔法陣？）

葵はその単語が何を意味するのか知っていたが、それは現実世界で一般的に口にされるようなものではない。しかし少年の独白からは日常的な響きが醸し出されており、葵は困惑した。

「あの……」

とにかく話を聞こうと思った葵は少年の思考を遮るために声を上げた。果たして、少年は我に返った様子で葵を振り返る。しかし振り向いた刹那、少年の表情は凍りついた。彼の視線が自分を通り越しているように感じた葵は背後を振り返って見る。するといつの間にか、葵の背後には第三者の姿が出現していた。

先程まで葵と少年の姿しかなかったはずの雪原に涼しい顔で佇んでいるのは、艶やかな金髪をアップスタイルにした女だった。まだ若そうだが落ち着いた雰囲気有しており、縁のないメガネが彼女の端麗な顔立ちを強調させている。見る者に知的な印象を与える女はメガネのブリッジを中指で押し上げ、静かに口火を切った。

「やっと見つけました」

葵と彼女は初対面なので、その言葉は間違いなく少年に向けられたものだった。少年は女の声に反応してビクツと体を震わせ、葵の背に逃げ込む。葵のスカートを掴んで半分だけ顔を覗かせている少年に呆れたのか、女はため息をついた。

「ユアン様、やってくださいましたね」

「レイ……もしかして怒ってる？」

ユアンと呼ばれた少年が恐る恐る尋ねると、レイと呼ばれた女は小さく首を振った。

「わたくしは呆れております。ですが、ご両親がこの事をお知りになったとしたら……お叱りは覚悟してくださいまし」

レイの言葉は、事情を呑み込めていない葵にすら無情に聞こえた。怒られるのが怖いのか、葵のスカートを握っているユアンの手に妙な力がこもる。子供の頃に似たような経験をしているだけに、葵はユアンに同情してしまった。

ユアンとの話を終えたようで、レイは葵に視線を移した。葵を観察するように眺めているレイの青い瞳も、ユアンと同じく好奇の色に染まっている。その妙な視線を感じ取った葵が微かに眉根を寄せるとレイが口を開いた。

「わたくしの言葉を理解できますか？」

ついさつきユアンにも同じ質問をされている葵は奇妙に思いながら頷いて見せる。レイは問いの意図を説明するでもなく頷き、それから口調を改めた。

「とにかく、移動しましょう。この寒さでは皆が凍えてしまいます」ユアンが出した炎もいつの間にか消えてしまっていたので、葵はすぐに賛成した。葵に異存がないことを見て取ったレイは小脇に抱えていた厚手の本を開く。葵はレイのちぐはぐな言動に困惑したが、レイがすぐに独白を始めたので口を開くことはしなかった。レイの呟きに呼応するかのように、彼女が手にしている本が光を放ち始める。初めは明滅のような頼りない光だったが、それは次第に本だけに留まらなくなっていく。足下からも光が上ってきているような気がした葵は視線を落とす、愕然とする。いつの間にか、葵達の足下には光を放つ円陣が出現していた。

雪の上で光り輝く文様は文字と図形が組み合わせられたものだった。円形の魔法陣はその内にいる者達を光のベールで包みこんでいく。やがて光は地上から空へと立ち上り、その光が治まった頃には雪原から人間の姿だけが消えていたのだった。

二月の浮かぶ世界(2)

今にも雨が降り出しそうな曇天の下、傘も持たずに佇んでいる葵は目の前にある見慣れた風景をぼんやりと見つめていた。葵が立ち尽くしている場所から直線上に伸びているのは舗装された道であり、その道の左右は対照的な眺めになっている。西側には鉄筋コンクリート造りの建物が、東側には均された地面があるのだ。雨に濡れてくすんだ色合いになっている校舎から水溜りのできているグラウンドに視線を移した後、葵は再び校舎を仰いだ。見渡す限り、人影はない。

午後三時過ぎにホームルームが終わるとすぐ、葵はいつも通りに教室を出た。部活動もしていない葵はそのまま昇降口に向かい、現在佇んでいる正門をくぐって学校を出たのである。そして駅へ向かう途中、忘れ物をしたことに気がついたのだった。

(それで……えっと……)

忘れた傘を取りに、元来た道を引き返した。そうして今見ている光景を目にしたのだが、葵の記憶はそこで途絶えている。

「……何で？」

自分の呟きが聞こえて、葵は夢から醒めた。それまで見えていた日常が一瞬にして消え去り、代わりに見覚えのない天井が映る。自室であれば視界に窓が入るはずなのだが、それらしき物は見えなかった。

(何処だろう……)

寝起きの冴えない頭で考えながら、葵は顔だけを傾けた。何処からか青い光が差し込んでいて、大理石の床に丸く影ができています。何故影がそのような形になるのか気になった葵は体を起こして背後を振り向いてみた。葵のいるベッドの後ろには窓があり、窓から青い月光を取り込むことで円柱形の影が室内に伸びている。窓自体が円柱になっているため、そうした馴染みの薄い影が生まれているの

であつた。

(きれい……)

覚醒していても夢の中にいるような感覚で、葵はベッドを下りてふらふらと窓に寄つた。丸みを帯びた飾り窓からは月光に照らされた庭園が見える。庭園では薄青い月光に染められた花々が美しく咲き誇っていたが、葵はふと違和感を覚えた。

(今つて春？ それとも冬？)

不意に、そんな疑問が頭をよぎる。何故そんなことを思いついたのか分からないまま、葵は庭園に目を凝らした。しかし植物に詳しいわけではないので、庭園の花から季節を計ることは不可能である。もやもやした気持ちのままベッドに戻つた葵は目を閉じて記憶を辿つた。先日、友人の弥也と交わした言葉が蘇ってくる。

『紫陽花がキレイだね』

青や紫に色づいている紫陽花に目を留めて、弥也がそんなことを言っていた。そしてその後、彼女は彼氏と鎌倉へ紫陽花を見に行く約束をしたと惚気話を披露したのである。あれはじめじめした、梅雨の帰り道での出来事だつた。

(そうだよ、六月に入ってから雨が続いて……)

梅雨が明ければ夏が来る。それが、昨日までの葵の日常だつた。しかし今日、葵は雪で覆われた大地に佇んでいたのである。そのことを思い出した葵は何に違和感を覚えていたのかはつきりと自覚した。目を開けて、葵は再び窓辺に寄る。青く染まっている庭園には花が咲き乱れているが雪はない。何が現実か分からなくなり、葵はますます混乱した。

(そもそも、ここは何処？)

庭園から室内に視線を戻した葵は、改めて自分の置かれている異様な状況を察した。葵がいる部屋は十畳以上の広さがあり、床は大理石である。一人用とは思われない大きなベッドがある他は棚や可

動式の台が置かれているが、広すぎるためか生活感がない。それは六畳ほどの部屋に本や洋服が取り散らかっている葵の日常からは、あまりにもかけ離れた眺めだった。

どうしたらいいのか分からず、途方に暮れた葵は薄青い光が差し込む室内で立ち尽くした。そのうちに現在が夜であることに思い至り、ハツとして手首を見る。しかしそこには、いつも身につけている腕時計はなかった。薄暗い室内を見回してみても時計のような物はない。居ても立っても居られず、葵は豪華な扉に駆け寄った。

二枚になっっている扉を押し開けて外の様子を窺うと、室外は廊下になっていた。右を見ても左を見ても、長い廊下には果てがない。おまけに人影もなく、建物全体がひっそりと静まり返っているようだった。

（今、何時なんだろう）

飾り窓から見えた外の雰囲気からすると、夜中という可能性もある。それならば寝静まっけていても不思議ではなく、一刻も早く人と出会いたかった葵は焦りを募らせた。

物音を立てないよう気を配りながら扉を閉め、葵は廊下を歩き出した。葵の左手には中庭があり、右手には一定の間隔を開けて扉が並んでいる。しかしどの部屋も静まっけていて扉を開けるのは躊躇われたので、葵はひたすら廊下を歩き続けた。

廊下を進んで行くうちに、葵はあることに気がついて足を止めた。廊下の果てが見えなかったのは緩いカーブになっていたからで、どこまで進んでも周囲の風景が変わらないのだ。寝ていた部屋を出てから常に左手に見えている中庭をまじまじと見据えた結果、葵は庭の先にも廊下が見えることを知った。つまり、この廊下は円形になっている可能性があるのだ。このまま歩き続けていれば一周してしまつかもしれない。葵はそう思ったが、ここが建物である以上は何処かに出入口が存在するはずだと思い直した。

気を取り直し、葵は再び歩を進める。しかしやはり、何処まで行っても同じ光景が続いているだけだった。階段のような物もないの

で、外への出入口は立ち並ぶ扉のどれからしい。少し迷った末、葵は扉を開けてみることにした。

「失礼しまーす……」

小声で呟きながら、葵は少しだけ扉を引いて内部の様子を窺う。扉の内側は部屋になっていたのだが、葵が寝ていた部屋とまったく同じ造りになっていた。念のため扉を開けたままにしておき、隣の扉も開けてみる。すると隣室もまったく同じ造りになっていた。

（何なの、これ）

嫌な予感を覚えた葵は一度開けた扉はそのままにしておき、次から次へと扉を開けて行った。大理石の廊下を素足で駆け回った葵は最後の一部屋を覗いて呆然と立ち尽くす。廊下はやはりループになっていた。なおかつ扉の内部は全て同じ造りの部屋になっていたのだ。建物自体の出入口のようなものは何処にもない。そして、誰もいない。

（何で？）

出入口がないのならば、自分はどうやってこの場所へ来たのか。

葵の抱いた疑問はこの後、思わぬ形で答えを得ることになる。

「お目覚めですか」

呆けていた葵は突然背後からかけられた声に驚き、過剰に体を震わせた。慌てて振り向いた葵の目に映ったのは、縁なしのメガネをかけた金髪の女。つい先程まで誰もいなかったはずの廊下に、彼女はいつの間にか出現していた。

（あ、あれ？）

目の前に佇んでいる彼女はいつ、どうやって現れたのか。そうした疑問と、どこかで見たことがある顔だという思いが葵を困惑に陥れる。葵は分厚い本を小脇に抱えている女から目を逸らし、記憶を辿った末に彼女の名前を思い出した。

「えつと……レイ、さん？」

うる覚えだったので自信がなさそうに声をかけると、女は頷いてから口を開いた。

「申し遅れました。わたくしの名はレイチエル「アロースミス。レイとお呼びくださっても構いません」

「あ、私は宮島葵です」

薄暗い廊下で名乗りあった後、葵はこの状況が奇妙であることに気付いて眉根を寄せた。レイチエルもまた、難しい表情をして何事かを呟いている。レイチエルの独白を単語として拾った葵は首を傾げた。

「ミヤジマ、アオイ、です」

それまで流暢に喋っていたレイチエルが名前の部分だけを言いにくそうに繰り返していたので、葵は改めて名前を伝えた。しかしそれでも、レイチエルが繰り返す葵の名前はカタコトである。金髪にブルーの瞳という容貌のレイチエルが日本人とは思えなかったので、葵は勝手に納得した。それよりも今は、話を進めることが先決である。

「あの、色々と聞きたいことがあるんですけど」

「解っています。順を追って、お話いたしましょう」

レイチエルは葵の名前を滑らかに発音出来ないことに納得がいかない様子だったが、申し出に応じた時には真顔に戻っていた。手近な部屋に入るよう促されたので、葵は素直に従う。後から入ってきたレイチエルは扉を閉めた後、葵にベッドへ座るよう勧めた。柔らかな感触がする上質なベッドに腰を下ろし、葵は佇んだままのレイチエルを見上げる。

「レイさんは座らないんですか？」

「わたくしのことはお気になさらずに。それと、敬称も必要ありません」

「ケイショウ？」

「レイ、とお呼びくださいということですよ」

「ああ、分かりました」

葵が納得して頷くと、レイチエルは室内に備え付けられている可動式の台に向かった。

二月の浮かぶ世界(3)

葵達が話をするために入った部屋の中には可動式の台が置かれていて、レイチエルはそれを押しながら葵が腰かけているベッドの傍へと戻って来た。台の上には白い布巾が被せられていて、レイチエルがそれを取ると、銀のトレイに乗った高価そうな茶器が姿を現した。

「紅茶でよろしいですか？」

「あ、はい」

葵が頷くとレイチエルはトレイの上に手をかざした。しかし何かに思い当たったようで、彼女は不意に掌の向きを上に変える。

「その前に、明かりをご用意いたしましょうか」

そう独白した後、レイチエルは耳慣れない言葉を口にした。葵の耳には『アン・リュミエール』と聞こえたが、発音は定かではない。レイチエルが紡いだ言葉に反応したかのように、彼女の手が突然光りを放ち出した。レイチエルの掌を覆っていた眩い光はやがて収束し、拳より少し大きいくらいの光球が形作られる。光球はすぐにレイチエルの手を離れ、天井の辺りで静止した。淡い色彩の月光は鳴りを潜め、代わりに陽光のような明るい光が鮮明に室内を映し出す。

「アン・テ」

レイチエルは次に、台の上にあるトレイに手をかざして言葉を紡いだ。すると今度は、トレイの上にある茶器が光り出す。伏せられて置かれていたカップはひとりで逆さまになり、ポットには茶葉が入れられた後、お湯が注がれていく。まるで誰かが手にしているかのように空中で紅茶が淹れられていく様子を、葵はぼかんと眺めていた。

「どうやら、貴方の世界には魔法が存在しないようですね」

口を開けたまま呆けている葵を見て、レイチエルが独り言のよう

に呟く。葵はレイチエルの言葉を理解しようと努めたが、さっぱり意味が解らなかった。

（魔法？ 私がいた世界？）

魔法という単語自体は知っている。だがそれは、日常的に話題に上る類のものではない。それまで当たり前としてきた現実と目の前にある現実の違いが混乱を招き、葵は頭を抱えた。

「どうぞ」

レイチエルの声で我に返った葵は目の前にカップが差し出されていることに気付き、礼を言いながら受け取った。ソーサーに乗った白いカップには紅茶が注がれていて、湯気と共に花の香りが漂ってくる。

「砂糖とミルクはいかがいたしますか？ それとも、レモンでも添えましょうか」

「あ、このままでいいです」

レイチエルに答えた後、葵は恐る恐るカップに口をつけた。口の中に紅茶の味と、ほのかな花の香りが広がる。知らないうちに体が冷えていたようで、温かい紅茶は体と心に沁み込んでいった。カップをソーサーに戻して一息ついた後、葵は改めてレイチエルを見る。「ここは、何処なんですか？」

「ここはフロックハート家の別邸です。もう少し正確に申しますと、別邸の敷地内にある離れになります。ユアン様と共に、雪原からこのお屋敷へ来たのですよ。覚えていますか？」

レイチエルに問われた葵は視線を逸らし、記憶を探った。雪原で出会った金髪の子供とユアンという名が一致して初めて、葵は頷いて見せる。

「ここは、あのユアンって子の家ってことですか？」

レイチエルは頷いた後、ユアン「S」フロックハートというのが彼の正式な名であると告げた。レイチエルやユアンが日本人ではないと分かった今、改めて不自然さを感じた葵は眉根を寄せる。

（何で言葉が通じるんだろう？ それに、ここは何処？）

この室内だけを見渡してみても、ここが日本であるとは思えなかった。仮に日本であるとするならば相当なお金持ちの屋敷ということになるが、いずれにせよ葵には自分がここにいる理由が分からない。

「ここは日本、ですか？」

知的な見た目からすると、レイチエルは頭の回転が早そうに見える。だが彼女は質問の意味が解らなかったようで、無言のまま眉根を寄せている。『日本』という単語が通じなかったのだと思った葵は思いつく限りの外国語を発してみたが、結果は同じだった。

(ジャパンもジャポンもジャポネもダメなら……後は何があるんだろっ)

語彙を使い果たした葵は途方に暮れてレイチエルを仰いだ。しかしレイチエルもまた「解せない」といった表情で葵を見下ろしている。

「その二ホンという所が、貴方が暮らしていた場所の名ですか？」

葵が頷くとレイチエルは口元に手を当てて思案に沈んでしまった。彼女の反応から察するに、レイチエルは日本という国を知らないようである。

(日本って、そんなに有名じゃないのかな?)

外国人観光客も増えている昨今、葵はここがヨーロッパやアメリカならば日本と言えば話が通じるだろうと考えていた。しかし事は、葵が考えていたような単純なものではないらしい。顔を上げたレイチエルは、青い瞳で真っ直ぐに葵を見つめながら口火を切った。

「よく、お聞きください。わたくし達の世界には『二ホン』という場所はございません」

「えっ……？」

レイチエルの発言をすぐには受け止められなかった葵は、彼女の言葉を胸中で繰り返した。話についていけない焦りを自覚しながら、葵は急いで問う。

「待って。それなら、ここは何処なの？」

「このお屋敷が建っている場所の地名をお尋ねですか？」
「そうそう！」

ようやく意思疎通が出来たことで安堵した葵は興奮気味に頷いたのだが、レイチエルは至って冷静に応じた。

「このお屋敷はアステルダム公国のスタッカード地方にあります」

「あ、あむすてるだむ？ すたつかーと？」

「違います。アステルダム公国のスタッカード地方です」

レイチエルがゆっくりと言い直してくれたものの、葵にはその国が何処にあるのか解らなかつた。何より、アステルダム公国などという国名は聞いたこともない。

「……地図を見ながらお話しいたしましょうか」

理解に苦しんでいる葵を見兼ねたレイチエルがそう提案し、彼女はジャケットの胸ポケットからペンを取り出した。「アン・カルテ」と呟き、レイチエルはせつかく手にしたペンを空に放る。しかし光を纏ったペンは重力に従って落下することもなく、空中で留まった。そしてすぐ、何も無い空間に線を描き出したのだった。

「これが、わたくし達の世界です」

空中で踊るように線を引いていたペンが動きを止めると、レイチエルがそう補足した。葵とレイチエルの間にある何も無い空間には見事な地図が描き出されている。しかしそれは、葵の知っている世界地図とはかけ離れた形をしていた。

「アステルダム公国はこの辺りにあります」

地図には東西に大陸があり、後は島国が点々と描かれている。レイチエルの指が示したのは東にある大陸の中程だった。西の大陸は東の大陸の三分の一ほどの大きさしかない。しかしそれらの情報は、呆けている葵の頭には容易に入ってこなかつた。

「貴方は、別の世界からわたくし達の世界へ招かれた客人なのです」
最後に、レイチエルはそんな言葉で話を締め括った。

二月の浮かぶ世界（4）

ひっそりと静まり返った屋敷の一室では内部に人がいるにもかかわらず、長いこと沈黙が流れていた。葵は何とか混乱を收拾しようと努めていたが、理解は追いついていても現実がなかなか追いついてこない。レイチエルに聞かなければならないことがありそうなのに、どんな質問をしたらいいのかさえ分らないのだ。時間が経つごとに気ばかり焦っていき、葵の思考は混乱の極みに達しようとしていた。

ふと、レイチエルが顔を傾けた。つられて葵も、彼女が見ている方向へ顔を傾ける。しかしそこには豪華な二枚扉があるだけで、開くような気配はなかった。レイチエルが扉の方を気にしていたのは一瞬のことで、彼女の視線はすぐにまた葵に注がれる。ごちゃごちゃになった思考を一度断ち切ったことで少し冷静さを取り戻した葵は、レイチエルの瞳を真っ直ぐに見つめたまま沈黙を破った。

「私、帰りたい」

ここが異世界であろうがなかるうが、無断外泊は非常にまずい。葵は母親に怒られることを危惧して発言したのだが、レイチエルは微かに眉根を寄せた。その一瞬後、彼女はさりげなく葵から視線を外す。レイチエルの行動はまるで表情の細微な変化を見られないようにしたかのようで、葵は嫌な予感を覚えた。

「まさか……帰れない？」

レイチエルが答えなかったので葵の科白は独白になってしまった。しかし直接的な返事はなくとも無言は肯定と同じであり、葵はレイチエルに詰め寄った。

「帰らなきゃ！ どうやったら帰れるの！？」

「……大変、申し上げにくいのですが」

解らないのだと、レイチエルは目を逸らしたまま言う。帰りたくても帰れないという状況は焦りを生み、葵は居ても立っても居られ

ない気持ちになった。

「じゃあ、私はどうしてこの世界に来ちゃったの!？」

「貴方は、ある理由によりこの世界へ招かれました」

「誰に! 誰に呼ばれたの!？」

「それは……」

レイチエルは言葉を濁したが葵は追及をやめなかった。葵をこの世界に招いたという者が誰なのか分かれれば、その人が元の世界に戻る方法を知っているかもしれないからだ。

「とにかく、落ち着いてください」

レイチエルは興奮している葵の肩を掴み、半ば強引にベッドへ座らせた。押さえつけられた葵は納得がいかず、レイチエルを睨み見る。葵の非難を受け止めたレイチエルは怯むこともなく、淡々と話を続けた。

「貴方をこの世界に招いた者にも、貴方が元の世界へ戻るにはどうしたらいいのか分かっていません。異世界から人間を召喚するなど前代未聞なのです。ですが非は、わたくし達にあります。調査をいたしますので、しばらく時間をください」

葵に口を挟む暇を与えず、レイチエルは口早にそう言い切った。まだ納得のいかない部分はあるもののレイチエルが協力的であることは判明したので、葵はひとまず頷く。葵が大人しくなったのを見て取ったレイチエルは手を離すと扉の方を振り返った。

「それでよろしいですね、ユアン様？」

レイチエルの声に反応して、扉が外側から開かれていく。葵とレイチエルが視線を注ぐ中、姿を現したのは金髪に紫色の瞳をした少年だった。ユアンという名の少年の顔を見た途端、葵の脳裏にある光景が蘇ってくる。

『ユアン様、やってくださいましたね』

雪原で、レイチエルはため息混じりにそう言っていた。この言葉

の意味を今理解した葵は怒気を孕んだ瞳をユアンに向ける。

「ごめんなさい！」

葵の怒りを過敏に察したユアンは彼女が何を言うより先に頭を下げた。出端を挫かれた葵は喉まで出かかった怒声を呑み込み、眉根を寄せる。しかし頭を下げられたくらいでは許す気になれなかったので、葵は閉口したままユアンを見下ろしていた。

「怒ってる？」

葵から返答がなかったため、恐る恐るといった様子で顔を上げたユアンは今にも泣き出しそうな表情をしていた。潤んだ子供の瞳に見つめられた葵は言葉に詰まり、決まりが悪く思いながらユアンから視線を外す。

「ごめんなさい、本当にごめんなさい」

傍までやって来たユアンは、わざわざ葵の顔を覗き込みながら許しを乞う。まるで自分がいじめているようだと思った葵は苦い思いで息を吐いた。

「いいよ、もう。怒ってないから」

その言葉を口にした刹那、葵にはレイチエルのため息が聞こえたような気がした。しかし振り向いてみても、レイチエルは真顔のままである。空耳かと思い、葵はユアンの方へ顔を戻した。

「ありがとう、おねえちゃん」

目が合うなり、ユアンは子供らしい素直な笑みを浮かべた。その微笑みは小さな花弁を開く花のように愛らしく、可愛いと思ってしまうた葵は白旗を掲げる。怒りはもうどこかへ吹き飛んでしまっていたが、別のことが気になった葵は渋い表情を作って口火を切った。

「おねえちゃんはやめてよ。私は宮島葵っていうの」

「ミヤジマ」

葵の名を繰り返すユアンもまた、名前の部分だけを発音し辛そうにしている。カタコトなものもさることながら、小学生くらいの子供に『ミヤジマ』呼ばわりされることに葵は違和感を覚えた。

「せめて名前で呼んでよ」

「ミヤジマ」

「あ、そっか」

ユアンが『ミヤジマ』と繰り返したことで納得のいった葵は一人で頷いた。訳が分からずに眉をひそめているユアンとレイチエルに葵は日本でのファーストネーム・ファミリーネームの決まりを説明する。ここは外国とは違うが、この世界ではファーストネームが先にくることが普通のようなのである。

「へー。面白いね、レイ」

「確かに、興味深い話題です」

ユアンとレイチエルがあまりにも真剣に話を聞いてくれるので、葵は改めて違う世界へ来てしまったのだなと実感した。言葉は通じるのに文化や風習、世界までもが違つとはおかしな話である。そうした自分の考えに、葵は疑問を抱いた。

「そつえば、どうして言葉が通じるの？」

葵が元々いた世界を考えるに、国が変われば使われている言語が違うのは当然のことである。同じ世界の内にあつてもそうなのだから、異世界の人間と普通に話が出るのは単純に考えてもおかしい。葵がそのことを口にする、レイチエルが例のペンを取り出した。今度はペンを手にしたまま、レイチエルは空中に文字らしきものを書いている。それはアルファベットの筆記体に似ていたが、葵には解読することが出来なかつた。

「読めますか？」

「読めません」

「そうですか。では、不完全な形で召喚されてしまったようですね。レイチエルは話の途中でユアンを一瞥した後、再び葵に向き直つてから説明を続けた。

「召喚とは本来、魔法陣を介して行われます。召喚したものと意思の疎通が出来ないと不便なので、召喚の呪文にはその辺りの融通が利くように予めそついう言葉が盛り込まれているのだそうです。ですから本来であれば完全な形で理解し合えるはずなのですが、何か

不手際があつたようですね」

そこで言葉を切り、レイチエルはユアンに視線を移す。ユアンはレイチエルの視線から逃れるように視線を泳がせながら話に応じた。「どうしてか解らないんだけど、アオイは魔法陣じゃない所に出現しちゃったんだよね。そのせい、かな？」

「魔法陣のない場所に出現した？ …… ユアン様、それが何を意味するのかお解かりになっていきますよね？」

「えーっと……」

明らかに理解している様子で、ユアンはレイチエルから顔を背ける。話の見えない葵が首を傾げているとレイチエルが説明を加えてくれた。

「魔法陣の外に召喚されて無事だったのは奇跡です。一步間違えれば世界の狭間を永遠に彷徨うところでした」

「え？ それって、どういうことなんですか？」

「つまり、何処の世界にも存在しなくなるといことです。世界の狭間に行った者は生きていられるのも死んでいるのでもない状態で、ただ存在しているだけなのだそうです」

レイチエルの言っている状態がどういうことなのかはピンとこなかったが、それでも葵はゾツとした。鳥肌が立ってしまった二の腕をさすり、葵は改めてユアンを睨み見る。葵と目が合うとユアンはそそくさと顔を背けた。

「疑問に思っていることがあるのですが、お尋ねしてもよろしいでしょうか？」

話が切れたのを見てレイチエルが話題を変えたので、葵は彼女の方に顔を傾けながら応じた。

「何ですか？」

「アオイのいた世界には魔法が存在しないのですよね？」

「うん。ポットがひとりでお茶を淹れてくれたり、瞬間移動することなんて出来ないです」

「シユンカンイドウ？」

「えーっと、雪原からいきなりこのお屋敷に来るみたいなのは出来ないってことです」

「アオイの世界ではそのような呼び方をするのですか。この世界では、転移魔法と呼ばれています」

「あれ、どうやってやってるんですか？」

「その疑問に答えるためには、まず魔法について話さなければなりませんね」

長い話になるのか、レイチエルはそこで一度話を切り上げた。彼女は部屋の隅の方へ目をやり、自身は動かないまま短い呪文を口にする。

「アン・テーブル、イシイ」

レイチエルが床を指しながら言うと、棚の脇に置かれていたテーブルがその位置へと移動してきた。レイチエルは続けてイスを呼び、その後、再びティーポットとカップに指示を出す。円卓を囲んで座った三人の前にそれぞれ紅茶の注がれたカップが置かれてから、レイチエルは話を再開させた。

二月の浮かぶ世界（5）

「魔法とは先人達の知識の結晶。この世界で生を受けた者に受け継がれる潜在的な血の力です」

そんな言葉で話を切り出したレイチエルは、これが魔法の大前提なのだと言った。興味をそらされた葵はさっそく横から口を出す。

「潜在的な力ってことは、私には使えないってことですか？」

「どうでしょう。それは、後で試してみましよう」

何分、異世界の人間が召喚されたのは葵が初の事例である。別の世界に生を受けた者がこの世界に受け継がれている魔法を使うなどということは葵の存在がなければ思いも寄らなかつたことなのだ。レイチエルは葵の発案に興味を示していたが、ひとまずは話を続けた。

魔法は自然界のエネルギーと人的な力が融合することで発動する。そのため魔法には火・水・土・風の属性が存在するのである。この四属性に加え、魔法には無属性というものも存在する。ユアンが雪原で火を発生させたのは火属性の魔法、転移や物を動かす魔法は無属性に分類されるのだ。そこまで話を聞いた葵は再び口を挟んだ。

「人的な力って？」

「魔法書や魔法陣、呪文なんかのことだよ。それこそが先人達の知識の結晶なんだ」

ユアンが誇らしげに教えてくれたが、その答えは魔法というものをよく知らない葵には抽象的すぎた。うまく呑み込めなかつた葵が首をひねっていると、レイチエルがさかさず助け舟を出す。

「魔法は、魔法書や魔法陣といった魔法道具マジックアイテムがないと使うことが出来ません。それらのアイテムがわたくし達の血に宿る魔力と自然界の力を融合させるのです。故に魔法書や、それに記されている魔法文字自体が先人達の知識の結晶なのです」

「ああ、なるほど。よく解りました」

「……わたくしが疑問に感じているのは、そこなのです」

レイチエルが眉根を寄せたので、葵とユアンは首を傾げた。レイチエルは手にしていたカップをソーサーに置き、改めて葵を見る。

「貴方がいた世界には魔法が存在していない。それなのに、アオイは魔法の概念を理解しているように思えます。何故ですか？」

「え、ええつと？ どういうことですか？」

「先程の説明、わたくしは理解が及ばなくても仕方がないと思って話していました。貴方の世界には魔法がないのですから、魔法に付随する事柄など解らないことだらけでしょう。それなのに、アオイは先程の説明で理解してしまいました。呑み込みが早すぎるのです」

レイチエルが何を気にしているのか理解した葵は納得して頷いた。その理由にもすぐに思い当たったので、葵は簡単なことのように答えを口にする。

「それはですね、魔法や魔法陣っていう単語はファンタジー小説でよく見かけるからです。レイが今話してくれたようなことも、小説の世界では珍しくないんですよ」

本が好きな葵は今までに読んだファンタジー小説の世界観を事例として聞かせた。中には実際に魔法が存在するこの世界よりも壮大なものもあつたのだろう、レイチエルとユアンは目を剥いている。

二人はしばらく呆然としていたが、ユアンより先に我に返ったレイチエルがメガネのブリッジを人差し指で押し上げた。

「実際に目にしたことのない世界を創り上げるなんて……アオイの世界の人々は感受性豊かなのですね」

葵がいた世界には事実は小説よりも奇なり、という言葉がある。だがやはり、現実はその逆のようである。むしろそれが普通なのだと思う葵は考えこんでしまったが、ユアンの興奮した声が静寂を破った。

「すごい、すごいよ！ もっと聞かせて、アオイ」

ユアンはテーブルの上に置いた手を握りしめ、葵に向けている瞳をキラキラと輝かせている。しかし葵には何がすごいのか分からず、

また何を話せばいいのかも分からなかった。

「ユアン様、そういつたお話はまたの機会にいたしましょう。彼女に処遇をお伝えしなければなりません」

レイチエルが介入したおかげで話が元に戻ったが、葵は彼女が発した『処遇』という言葉に不穏な気配を感じ取った。

「あの、処遇って……？」

葵が恐る恐る尋ねると、レイチエルは答えずに席を立った。ユアンに目配せをした後、レイチエルはここで待っていると言い残して去って行く。葵は扉が閉まるまでレイチエルの背を見送ってからユアンを振り向いた。

「ねえ、どういうこと？」

「アオイにはトリニスタン魔法学園に編入してもらうことになってるんだ」

突如ユアンから聞かされた決定事項に葵は耳を疑った。

「学校って……何で？」

「アオイが友達欲しいかなあと思って」

「元の世界に戻れば友達いるから。そんな気を遣うくらいなら早く帰してよ」

ユアンがあまりにもアツサリしているので葵は忘れていた怒りが蘇ってくるのを感じた。もとはといえば全ての元凶はユアンであり、本来ならばこんな場所で仲良くお茶をしている場合ではないのだ。

「大体、ユアンが私を呼んだんでしょ？ だったら私が帰る方法も分かるんじゃないの？」

「それが、分からないんだ。ごめん」

「帰し方が分からないのにどうして呼んだのよ。無責任じゃない」
「だって、まさか成功するとは思わなか……あっ」

まずいことを口走ったとばかりに、ユアンは慌てて口をつぐんだ。葵が口元を引きつらせるとユアンは席を立って頭を垂れる。

「絶対にアオイが帰れる方法を探し出すから、許して」
顔を上げたユアンは必死の形相をしていたが、今度ばかりは葵の

怒りも治まらなかつた。一步間違えば世界の狭間を彷徨うという危険な目に遭わされていたことを思えば冗談では済まされない。

「……許して、くれそうもないね?」

「当たり前でしょ!」

葵が怒鳴り散らすとユアンはイスに座りながらため息をついた。

その仕種がわざとらしくたつたのでカチンときた葵はユアンを睨み見る。すると葵の横に座っているユアンは先程までの子供らしい彼とは打って変わって、大人びた表情になっていた。

「まあ、普通は許さないよね。アオイの気持ち、分かるよ」

「なっ……!」

何を他人事みたいにと、葵はユアンを罵りたかつた。しかしあまりの豹変ぶりに驚きが隠せず、憤りがまともな言葉にならない。ユアンはふてぶてしい態度のまま、一方的に話を続けた。

「でもさ、帰れないものは帰れないんだよ。ジタバタしてもしょうがないと思わない?」

「あんたに言われたくない!」

「それもそうだね。僕に非があるのは確かだし」

怒りを煽る真似をしたと思ったら、今度は自分の非を認めて宥めすかす。そうしたユアンのテクニクにはめられた葵は一気にテンションを落とされていた。

「……もう、いい」

怒ることさえバカらしくなってしまうた葵はすっかり温くなってしまうた紅茶を一息に干した。カップをソーサーに戻し、席を立ててベッドに身を投げる。どっと疲れが出た葵はうつ伏せに倒れたまま目を閉じた。

「アオイ」

ベッドのスプリングが軋んで、耳元で囁くような優しい声が出た。声の主はユアンだが、十歳ほどの見た目に反してその響きは甘い。葵が顔だけ傾けるとユアンは彼女の髪を一房手に取り、口唇を寄せた。

「何してんの!？」

驚いた葵は悲鳴を上げて跳ね起き、ベッドの上で後ずさってユアンから体を遠ざけた。ユアンは真意の読めないにこやかな笑みを葵に向けている。

「機嫌、直った？」

身構えていた葵はユアンの一言に色々な意味で絶句した。葵から怒気も気怠さも吹き飛んだことを見て取ったユアンは平然と話を戻す。

「学園には良家の子供しかいないから大丈夫だよ。アオイには一人暮らしをしてもらうことになるけど、不自由はさせないから安心して」

「一人、暮らし？」

「うん。ちよつと事情があつて、アオイをこの家に置いておくことは出来ないんだ」

口調は柔らかかったがユアンの言葉には突き放すような響きがあった。キスの驚きも覚めるほどの心細さに襲われた葵は微かに眉根を寄せる。細微な変化を感じ取ったのか、ユアンは不意に葵の手を握った。

「大丈夫、アオイならきつと友達ができるよ」

重なり合った手を見つめたまま、葵はユアンの励ましを複雑な思いで聞いていた。今の科白も一見すると優しく思うが、自身のこと言及しないユアンが言っていることは『自分で何とかしろ』ということに他ならない。暖かな手とは裏腹にまたしても突き放された葵は唇を噛みしめた。

(何で、私がこんな目に……)

ユアンには告げる気にならなかった思いを、葵は胸中で呟いた。

二月の浮かぶ世界（6）

葵が口をつぐんだので室内には沈黙が流れていたが、やがてユアンが扉の方へ顔を傾けたことにより動きが生まれた。それまで目を伏せていた葵も視界の隅でユアンが身動いだので、同じ方向に目を向けてみる。二人が視線を注いでから少し間を置いた後、扉が開いてレイチエルが姿を現した。

「トリニスタン魔法学園への編入、ユアン様からお聞きになりましたか？」

レイチエルが沈黙を破った時、苦い気持ちになった葵は返事をしなかった。しかしその反応だけで話が済んでいることを承知したように、レイチエルは手にしていた本を葵に差し出す。訳が分からなまま本を受け取った葵は、ずしりと重いハードカバーの本に目を落とした。本の表紙には円で囲まれた五芒星ペンタグラムが描かれていて、それ自体にどことなくミステリアスな雰囲気がある。

「最初のページを開いてみてください」

ベッドに座りなおした葵はレイチエルの言葉に従い、膝の上で本を開いてみた。初めのページはそのほとんどが空白になっていて、ページの上部に少ない文字が描かれているのみである。葵が首を傾げながら顔を上げると、レイチエルはユアンを振り返った。

「ユアン様、お手本を」

レイチエルに促されたユアンは葵が手にしている本を覗き込むこともなく、短い単語を紡ぎ出した。すると、彼が顔の前で立てた人差し指から小さな火が立ち上る。ユアンと同じことをしてみるとレイチエルに言われたため、葵は見様見真似でやってみた。

「る、ふゆ？」

ユアンとレイチエルは葵が立てた人差し指に注目していたが、呪文らしきものを唱えた後も何かが起こる気配はない。しばらく待ってみても変化は訪れなかったので、レイチエルの指導が入った。

「語尾は上げずに。もう一度やってみてください」

「ル、フユ」

一度目に比べれば、葵の発音はユアンが発した言葉に近くなっていた。しかしやはり、何も起こらない。すると今度はユアンが葵に指示を飛ばした。

「アオイ、次はリ・オだよ」

「リ、オ」

「次は、レ・ヴァント」

「レ、ヴァント」

「ラ・ソル」

「ラ、ソル」

それで一通りを終えたらしいのだが、やはり何も起こらなかった。ユアンとレイチエルはしばらく黙っていたが、やがてレイチエルが口火を切る。

「やはり、アオイには魔法が使えないようです」

レイチエルに断言された葵は少しガツカリしたものの、それほど失望を感じてもいなかった。容易く魔法を使ってしまうことの方が眉唾物である。

「今の、全部この本に書いてあることなの？」

葵が膝の上で開いている本に目を落としながら問うとユアンが頷いて見せた。

「そうだよ。それ、レイが書いた魔法書なんだ」

「へえ」

「その魔法書は入門書です。ユアン様に初步の魔法をお教える際に用いたものなのですが……まさか、このような形で役立つとは思いませんでした」

レイチエルの一言であやふやだった彼らの関係がハッキリしたため、葵は一人で納得した。レイチエルもユアンも鮮やかな金髪をしているが、彼らを歳の離れた姉弟とするにはあまり顔が似ていない。お互いへの接し方からしても姉弟という雰囲気ではなかったので、

師弟と言われた方がすんなりと受け入れられたのだ。

「役立って、どういうことですか？」

葵が首を傾げるとレイチエルはタイトなスカートポケットから何かを取り出した。レイチエルに握ったままの手を差し出された葵は、受け皿とすべく開いた手を差し出す。レイチエルの手から葵に渡ってきたものは、無色透明な石が嵌めこまれた指輪だった。

「アクロアイトの指輪リングです。利き手の中指に嵌めてください」

嵌める指まで指定されることに若干の違和感を抱いたものの、葵は言われた通りにした。指輪は不思議と、葵の指にぴたりと嵌まっている。アクロアイトはダイヤモンドのように光を放ちはしなかったが、葵は氷のような見目の石をすぐに気に入った。

「無色のリングは無属性魔法を佑けるんだ。そのリングにはレイの魔力も込められてるね」

「少々細工をいたしましたですが、わたくしの魔力だとお解かりになりましたか」

「だって、他にあんな魔力を放つのはアルくらいだよ」

レイチエルとユアンが二人だけで分かり合っているので取り残された葵はポツンとその様子を眺めていた。葵が黙り込んでいることに気がついたレイチエルが話を元に戻す。

「そのリングにはわたくしの魔力が込められています。わたくしの魔力を消費するという形にはなりますが、その指輪を嵌めていればアオイにも魔法が使えるようになります」

魔法が使えると言われても実感の湧かなかった葵は中指のリングをしげしげと見つめた。その様子を見たレイチエルが実際に使ってみたらいいと促す。しかし魔法の使い方など知らない葵は首をひねるばかりだった。

「アン・レトウルと唱えてみてください」

ジャケットの胸ポケットから取り出したペンが葵の手に渡ったことを確認してから、レイチエルはそう言った。レイチエルから渡されたペンを握ったまま、葵は言われた通りに言葉を紡ぐ。すると、

葵の手の中にあるペンがにわか光り出した。

「空中に文字が書けます。何か書いてみてください」

「文字？ えーっと……」

唐突に何か書けと言われても、葵の頭には何の言葉も浮かんでいなかった。だがレイチエルとユアンがじっと見つめているため、葵は焦りながらペンを動かす。ペンの先端から放たれる光は葵の手の動きにそって軌跡を描き、空中に文字が生み出された。

「これは、何と書いてあるのですか？」

眉根を寄せながら文字を見つめているレイチエルが尋ねてきたので、葵は渴いた笑みを浮かべた。

（もうちょっとマシな言葉はなかったの？）

自分でもそう思うような言葉を口に出れるはずもなく、葵は音読して欲しいというレイチエルの希望を苦笑いで受け流した。代わりに、再びペンを動かす。今度は漢字で、『宮島葵』という文字が空中に描き出された。

「私の名前です」

「先程の文字とずいぶん形が違うんですね」

『宮島葵』という文字の横に書かれているカタカナと見比べながら、レイチエルが物珍しそうに感想を述べる。葵はさらに『あいうえお』と書き、日本語には三種類の文字があることを説明した。

「一つの言語の中に三つも違う文字があるなんて、すごいね」

「アオイは実に難解な言語を操っているんですね」

ユアンとレイチエルが感嘆の息を漏らす中、葵は『日本語は難しい』という話を思い出していた。日本語は使用する文字が多いうえ表意文字が存在し、動詞や形容詞の活用も複雑なため非常に難しい言語なのである。葵は何が難しいのか具体的には知らなかったが、日本人に生まれて良かったとしみじみ思った。

「これほど難しい言語を操れるのであれば魔法もすぐに覚えられますでしょう」

「えっ？ 覚える？」

「この世界の者は皆、力の強弱はあるものの魔法が使えます。不便ですよ、魔法が使えないと」

レイチエルは何気ないことのように言っただけだが葵は眉根を寄せた。それはつまり、葵が元の世界へ帰れる日が遠いということに他ならないのではないだろうか。だから学校に通わせようとしているのだと察した葵は唇を尖らせた。しかし葵が何を言うより先に、彼女の不満を察したレイチエルが再び口を開く。

「ユアン様、そろそろお暇いたしましょう」

「そうだね」

目配せなどの合図もないまま、ユアンはレイチエルと呼吸を合わせるかのように立ち上がる。葵が制止の声を上げる間もなく、彼らはさっさと歩き出した。

「明朝、お迎えにあがります。このお屋敷にある物は好きにお使いください。それでは、失礼いたします」

「じゃあね、アオイ」

ユアンが手を振っている横で、レイチエルが静かに扉を閉ざす。

二人の姿が扉の向こうに消えてしまっただけから、葵はしばらく呆然としていたのだった。

白衣のネコかぶり校医（1）

まだ太陽の位置がそれほど高くなく、冬月期とうげつの朝、森に挟まれた平坦な街道を寒さに耐えながら歩いてきた少女は目前に迫った光景に怯んで、思わず足を止めた。立ち尽くした彼女の前には鉄製の柵があり、その向こう側には傾斜のきつい坂道が続いている。柵の側には看板が立てられていたが、文字が読めない少女は看板を一瞥したきり手にしている紙片に目を落とした。少女の名は、宮島葵。彼女は夜空に二月が浮かぶこの世界で生を受けた者ではなく、限りなく故意に等しい不慮の事故によって召喚された異世界の住人だった。

葵が手にしている紙片には黒のインクで地図が描かれていた。その地図には文字が入っていないため、道標とするにはやや不便な感がある。しかし風景画のようにリアルなその地図は、葵が歩を進めるたびに刻々とその姿を変えて行くのだ。道を間違えれば紙片に？印が浮かび上がって教えてくれるため、彼女は初めての道を難なく攻略して現在の場所に佇んでいる。カーナビゲーションシステムに匹敵する地図が直進しろと言っていたので葵は改めて、目の前に立ち塞がった小山のような丘を仰ぎ見た。長い坂道の果てには微かに、建物のような影が窺える。

（……これ、上るの？）

坂道を見ただけでうんざりしてしまった葵は現実逃避に走り、周囲に視線を走らせた。だが彼女の周りには助けしてくれそうな人の姿はなく、ただ静かな森が広がっているだけである。雪を被った木々は見るからに寒々しく、葵は体を震わせた。

フロックハートの別邸を追い出された後、葵はパンテノンという街に越してきた。街とは言っても葵が貸し与えられた家は郊外に位置しているので彼女はまだ街並みを見たことはない。しかし何にせよ、葵はこの街で初めての一人暮らしをスタートさせたのである。引越しとは言っても移動するような荷物もなかったため、レイチェ

ルは葵を送り届けるとすぐに帰ってしまった。そして広すぎて落ちて着かない屋敷で一夜を過ごした後、本日が初めての登校日である。だが学校に通わされること自体に納得がいかない葵は難関を前に半ば以上挫折しかけていた。

（何であんな所にあるのよ）

この世界には時計がないので詳しい時間は分からないが、貸し与えられた屋敷から丘の下まで歩いて来るのに三十分くらいはかかっている。さらには小山のような丘を上れというのだ。しかも未だ融けやらぬ雪が白々と残っている、この寒空の下で。

葵のいた世界では梅雨が明ければ夏になるという陽気だったのだが、こちらの世界では冬真っ只中である。風が吹けば雪とも氷ともつかない粒が舞い、体に容赦なく打ち付けてくる。厚手のケープを纏っているとはいえ、その下はワイシャツとスカート姿の葵は一つクシャミをした。

（……やっぱり、帰ろう）

多大な労力を費やしてまで学校になど行きたくない。そう思った葵は小脇に抱えていた厚手の本に紙片を挟み、本を閉じてから踵を返した。

「ミヤジマ？」

それまで人影の見当たらなかった場所で不意に名を呼ばれた葵はギクリとした。慌てて振り向くと、いつの間にか鉄製の柵の所に金髪の青年が佇んでいる。初対面の彼があまりにも整った顔立ちをしていたので、葵は思わず見とれてしまった。歳の頃は二十代前半だろうか。まだあどけなさの残る面立ちをしている。鮮やかな金髪にブルーの瞳が印象的な彼は、何故か白衣を着用していた。

「ミヤジマ、アオイ？」

「は、はい」

青年がこちらへ向かって来ながら問いかけてきたので、葵は身を引きながら頷いて見せる。葵の答えを受けた青年は人の良さそうな笑みを浮かべ、親しげに彼女の手を取った。

「やはり、ミヤジマでしたか。お会いすることが出来て光栄です」
青年は近くで見れば見るほど美しく、物腰の柔らかい彼が見せる微笑みは極上の輝きを放っていた。手を握られているせいでドギマギしていた葵はふと、あることに気がついて眉をひそめる。

(この人、誰かに似てる)

そう思ったのも束の間、葵はすぐにその答えを見つけ出した。艶やかな金髪にブルーの瞳、何より整った目鼻立ちがレイチエルによく似ているのだ。

「あの、レイチエルって人のこと知ってますか？」

「レイチエル」アロースミスは僕の姉です」

「ってことは、レイの弟？」

「はい。僕の名はアルヴァ」アロースミス。アルとお呼びください」
アルヴァと名乗った青年は葵の手を解放すると片手を胸に当て、大袈裟な一礼をして見せた。その仕様自体は芝居がかっていたが、それをやっているのが彼ならば自然とスマートに見える。葵が違和感を覚えなかったのは、アルヴァの容姿が日本人とはかけ離れているせいもあったかもしれない。

「事情はレイチエルから聞いています。さあ、こちらへどうぞ」

声をかけながら再び葵に接近したアルヴァは、そのまま彼女の肩を抱いた。肩に手を回されるなど初めての経験で、葵はハードカバーの本を両手で抱いて縮こまる。葵の体には必要以上の力が入っていたが、アルヴァは気にすることもなく呪文を唱え出した。

「アン・ルヴィヤン」

葵が「初めて聞く呪文スベルだな」と思った頃には、周囲の風景が一変していた。ついさっきまで周囲に広がっていたはずの雪を被った森は姿を消していて、空気も肌を刺すような冷たいものではなくなっている。そこは簡素なベッドが幾つか並ぶ、保健室のような場所だった。

「ま、テキストに座ってよ」

アルコールのようなにおいがすると思って周囲を見回していた葵

はアルヴァから掛けられた言葉に耳を疑った。

「……えっ？」

今しがた耳にした科白を本当にアルヴァが言ったのか確かめたかったので問い返してみたのだが、彼はすでに葵の元を離れ、壁際にあるデスクの方へと歩き出している。少し古ぼけた金属製のデスクの前にはキャスター付きの椅子が置かれていて、それに腰を落ち着けたアルヴァはそれまで正していた服装を自ら乱し始めた。外されたネクタイが無造作に放られ、ワイシャツのボタンが上から順に外されていく。はだけた胸元にドキリとした葵は慌てて目を逸らした。

(何、この人……)

つい先刻まで紳士のような青年が、今やガラの悪い若者に成り果てている。まだ第一印象すら定まっていけない段階での豹変は混乱を生じさせ、葵は困惑してしまった。

「なに突っ立ってんの？ 空いてるベッドにでも座りなよ」

わざわざズボンにしまっていたワイシャツの裾まで引つ張り出したアルヴァは悠然と足を組み、デスクの引き出しから取り出した煙草に火をつけた。葵は煙を避けながら横歩きに移動し、一番端のベッドに腰を下ろす。簡素なベッドはユアンの屋敷にあった物とは違い、スプリングが硬い。その感触は葵に高校の保健室を思い起こさせた。

高校に入学してから一度だけ、葵は保健室のベッドで休ませてもらったことがある。その時、微熱に浮かされた頭の片隅で保健室のベッドは硬いという感想を抱いたものだった。ここは二月の浮かぶ異世界なのに、妙なところで葵のいた世界との類似点がある。そのことを不思議に思いながら、葵は白いシーツに包まれたマットレスに手を置いた。

「いつかこういう事になるんじゃないかと思ってたけど、災難だったね」

アルヴァが話しかけてきたので葵は意識を戻して彼の方へと顔を傾けた。

「こういう事って、どういうことですか？」

「だから、君みたいに別の世界の人間を召喚しちゃうってこと」

アルヴァが話題に上らせているのは、どうやらユアンのことのようにだ。だが彼らの関係を疑問視する前に、アルヴァが口走った科白が聞き捨てならないものだったので葵は不満を露わにする。

「こういうことになるって分かってたんだったら、なる前に止めてください」

「それは言えてるね」

あっさり頷いて見せたアルヴァには、葵の不幸などしよせんは他人事なのだ。しかし葵にとってはいい迷惑であり、生活を一変させられてしまうような出来事を笑い飛ばされたことも不快だった。

「怒った？」

短くなつた煙草を灰皿で揉み消しながら尋ねてきたアルヴァの口元には、笑みが浮かんでいる。怒ったと問われて頷くのもバカらしいと思つた葵は無言を貫いた。アルヴァも閉口したので室内には気まずい沈黙が流れる。この場所にいる意味が見出せなかつた葵は立ち上がったて歩き出した。

保健室によく似た造りのこの部屋の扉は、アルヴァが座っている場所の直線状に位置している。押したり引いたりして開けるタイプのドアではないようだったので、葵は横にスライドさせようとした。しかしいくら力をこめても扉はびくともしない。見た目によらず押し開けるタイプなのかと思つた葵はドアを押してみたが、それでも駄目だった。引いてみても結果は同じ。ならば最後の手段しかないと思い、葵はその場にしゃがみこんだ。

「……何してんの？」

ドアを押し上げようと奮闘する葵の姿を見て、アルヴァが呆れ声で問いかけてくる。葵は冷静を装って立ち上がったが、内心では穴があつたら入りたいたいと思うほど自分の行動を恥ずかしく感じていた。

「どうやって開けるの？」

逃げ出そうにも出口がないため、恥を忍んでアルヴァに問う。葵

の複雑な胸中になど興味がないのか、アルヴァは平然と答えを寄越した。

「その扉は鍵がないと開かないよ」

「だったら、何処から出ればいいのかよ」

「何だ、出たかったのか。でもその前に、少し話を聞いてもらわないと」

悠然と椅子に腰掛けているアルヴァはにこりと微笑み、先程まで葵が座っていたベッドを指す。アルヴァの態度には有無を言わせぬものがあり、葵は脱出を諦めて再びベッドに腰を落ち着けたのだった。

白衣のネコかぶり校医(2)

「まず、一番重要なことを言っておく。自分が異世界から召喚された者だと口外しないように。絶対、誰にも」

葵が大人しく座ったことを確認すると、アルヴァはそう言って話を始めた。うまく意味を汲めなかった葵は眉根を寄せて問い返す。

「絶対、誰にも?」

「そう。絶対、誰にも」

「どうして?」

「理由は、色々ある」

口外しようとしなかつた、自分がこの世界の者でないことに変わりはない。そう思っている葵にはアルヴァの曖昧な返答が不審に思えた。

「色々じゃ分からない。ハッキリ言つてよ」

「ハッキリ言つたところで今のミヤジマには理解出来ないと思うよ? この世界のこと何にも知らないみたいだしね」

「それは、確かにそうかもしれないけど……」

「一つ言えることがあるとすれば、異端者は孤立しやすいってことかな」

「……どういうこと?」

「この意味も分からないようじゃ今は何を説明しても無駄だ」

理解させようという努力もせずは無駄と決め付けられるのは感じが悪い。だがアルヴァの言っていることも一理あると思った葵は早々に追及を諦めた。葵が口をつぐんだのを見て、アルヴァは話を続ける。

「まあ、百聞は一見に如かずだよ。話を聞くより実際に体験した方が色々なことが見えてくる」

先程までの突き放した喋り方とは違い、アルヴァは少し口調を和らげてそう言った。しかし励まされた葵はアルヴァの心遣いよりも、

別のことが気になって上の空だった。

(アルの口からことわざを聞くと変な感じ)

金髪にブルーの瞳をしているアルヴアは、葵の目から見れば外国人そのものである。葵とアルヴアは厳密に言えば、お互いに意思疎通が出来ていても使用している言語が違うのだが、そのことを理解していても違和感は拭えなかった。それは、アルヴアの発する言葉があまりにも流暢だからに他ならない。

「どうした？」

葵が急に黙り込んだためか、アルヴアが不審そうな表情をして問う。説明するのも面倒だったので、葵は何でもないとだけ答えた。

「さて、では授業を始めよう」

話を切り替えたアルヴアが突拍子もないことを口にしたので葵はぼかんと口を開けた。

「えっ？ 授業？」

「そう、授業」

「ここで？」

「そう、ここで」

アルヴアの返答は鸚鵡返しおしひに近いものがあり、質問しても何も解しなかった。改めて周囲を見渡してみても、この部屋は保健室のようである。そして他の生徒は誰もいない。葵は抗議しようと口を開きかけたが、この状況が自身に都合がいいことを察して再び閉口した。

(教室で授業受けるより楽しじゃん)

この部屋にはベッドがあり、疲れた時には休むことも出来る。なにより異世界の子供達と何を話していいのかわからなかった葵は個人授業のありがたみを遅ればせながら感じた。

「いいよ。それで、何するの？」

「やけに聞き分けがいいね。何か企んでない？」

「なんにも？」

「……それなら、いいけど」

納得はしていないようだったが、アルヴアはそこで話を切り上げた。彼は組んでいた脚を解いて表情を改め、それから葵に向き直る。アルヴアはだらしのない格好をしているものの白衣は着ているため、真面目な表情をされると教師に見えないこともなかった。

「まず、一人称は『わたくし』を使うこと」

「……は？」

授業と言う方には魔法だと思い込んでいた葵はアルヴアに間の抜けた返事をした。するとすかさず、アルヴアから叱責が飛ぶ。

「返事は『はい』か『分かりました』」

「いや、そうじゃなくて……」

「いえ、そうではなくて」

「は？ どういうこと？」

「ミヤジマ、君は言葉遣いを直すことから始める必要がある」

言葉遣いが悪いと指摘された葵は不可解に眉根を寄せた。決して美しいとは言えないかもしれないが暴言を吐いたりはいないので、葵の言葉遣いはごく一般的である。葵自身にも自分の言葉遣いが特別悪いという意識はなかったため、彼女は不服に口唇を尖らせた。

「先生にはちゃんと敬語使うよ。別に、直す必要ないじゃん」

「別に、じゃん、などは使用禁止だ。目上の者にだけ媚びていればいいというものじゃない」

「何でアルにそこまで強制されなきゃいけないの？」

「トリニスタン魔法学園に通うからだ」

そこまで言われれば、葵にも理解することが出来た。アルヴアが言っているのは、要はお嬢様のような言葉遣いをしろということである。トリニスタン魔法学園は良家の子息が通う学校なのだと事前に聞いていたものの、そこまで規律にうるさいと思っていなかった葵は面倒さも伴って不満を募らせた。

「私、お嬢じゃないし。大体、何でそこまでして学校に通わなきゃいけないの？」

理不尽な理由で異世界に召喚され、帰れない。加えて次々と理不

尽なことを押し付けられれば不満に感じない方がおかしいのだ。胸の内を言葉にするうちに感情が昂ってきた葵はさらに不平を並べ立てた。

「こんなことしたって元の世界に戻れば関係ないし、ムダだよ」

葵の言い分を黙って聞いていたアルヴァは考えこむように手をあてた。少し間を置いた後、アルヴァは真つ直ぐに葵を見据えてから口を開く。

「じゃあ、ミヤジマを学園に通わせたがる理由を教えよう。都合がいいんだよ。その方が、誰にとつてもね」

アルヴァの発言は理不尽以外の何物でもなく、葵は心底嫌になった。要するにアルヴァやレイチエルに都合のいいことが最優先されるべきで、被害者である葵の気持ちなど二の次ということなのだ。

「……バカらしい」

これ以上アルヴァと話をしたくなかった葵は吐き捨てるように言い、立ち上った。しかしドアまで歩み寄ったところで、その扉が開けられないことを思い出して立ち尽くす。葵が為す術なく動きを止めていると背後からアルヴァの声が聞こえてきた。

「この部屋から一人で出ることも出来ない君に何が出来る？ 僕との会話を避けていても、君にはデメリツトしかないと思うよ」

葵は悔しさに拳を握ったが、アルヴァの言う通りであった。元の世界へ戻る方法が見付かることを待つしかない葵には他にすべきこともない。自由を満喫しようにも先立つものがなく家すらも貸し与えられているだけの、自由とは程遠い環境なのだ。魔法が使えないことを除いたとしても、この世界は葵にとって優しくないことばかりだった。

「ミヤジマ」

ドアの前で突っ立っていることしか出来なかった葵の肩に、歩み寄って来たアルヴァがそつと手をかける。彼の声音は、先程までの厳しいものから一変して柔らかなものだった。

「君が腹を立てる気持ちも分かる。だけど突っ張っていても何もい

「いいことはないよ?」

「……大人しくしてたらどんないいことがあるっていうのよ」

アルヴァの手を払い除ける気力もなかった葵は投げやりな気持ちで話に応じた。アルヴァは強引に葵を振り向かせ、瞳を覗き込みながら答える。

「ミヤジマがやるべきことやってくれれば不自由はさせないよ。元の世界に帰せとかは無理だけど、僕に出来ることなら望みを叶えよう」

「私がやるべきことって何?」

「この世界を学ぶこと。学びなよ、ミヤジマ。そうすれば自由も増える」

アルヴァの瞳から顔を背けた葵は次第に心が流されていくのを感じた。いつ帰れるかも分からない、他にすることもない。そんな状況では何かを強制されてやっているくらいがちょうどいいのではないかと、思い始めてしまったのだ。

「ミヤジマがお望みとあれば、物品面だけじゃなく他のことでも満足させてあげるよ?」

顔を背けている体勢をこれ幸いと、アルヴァは葵の頬に軽いキスを落とした。頬に触れた柔らかな感触に驚いた葵は悲鳴を上げてアルヴァを突き飛ばす。動揺して顔を真っ赤にしている葵とは対照的に、アルヴァは余裕たっぷりの微笑みを浮かべた。

「四六時中バカみたいに丁寧な言葉遣いをしろなんて言わないよ。学園の中にいる時だけ我慢してくればいいんだ」

葵の硬質さが崩れたタイミングを狙いますまして、アルヴァは先程の話をぶり返す。彼が再び近寄ろうとしたため葵は条件反射的に頷いてしまった。

「いい子だ。じゃあ、会話の練習をしようか」

もう迫る必要もないと言わんばかりに、アルヴァはさっさとデスクの方へ戻って行った。扉を背にへたりこんだ葵はそのまま、頭を抱える。

(こ、この嫌なパターンは……)

ユアンに丸め込まれた時も、そうだった。挑発したかと思えば肩透かしを食らわせ、最後は色仕掛けで丸め込むのだ。

「ミヤジマ、始めるよ。いつまでも座り込んでないで立ちなよ」

アルヴァの無情な言葉と共に、葵の受難の日々は幕を上げたのであった。

白衣のネコかぶり校医（3）

大きくとられた窓から差し込む朝日が、薄いカーテン越しに広い室内を照らしていた。室内に侵入してくる光は時間の経過と共に少しずつ伸びていて、部屋の中央に置かれているベッドにまで達しようとしている。豪華なベッドで一人眠っていた葵は、しかし眩しさのせいではなく目を覚ました。覚醒と同時に勢いよく上体を起こし、そのまま前のめりになって肩で荒い息をつく。呼吸を整えてから改めて周囲を見回した葵は、自分がまだベッドの上にいることを知った。

（ゆ、夢……）

胸中で呟くと極度の緊張から解放され、葵は再びベッドに倒れた。窓から差し込む朝日を浴びながら、彼女は大きく息を吐く。アルヴアの個人授業が始まってから十日、葵は彼に様々なことを叩き込まれていた。その内容は本当に様々で、言葉遣いから平素の立ち振る舞い、食事の仕方、この世界の文字など多岐に渡っている。またアルヴアの教え方はスパルタで、肉体的にも精神的にもダメージを受けている葵は授業の夢まで見てしまったのであった。だが今日は、幸いなことに休日である。

この世界の休日は葵がいた世界とは規程が違う。葵が通っていた高校が週休二日制なのに対し、トリニスタン魔法学園の休みは十日に一度である。単純計算をしても圧倒的に休みが少ないが、何よりも連休がないことに葵は参っていた。

（明日からまた学校なんて……）

せつかくの休日にもそんなことを考えてしまい、葵は枕を抱いてベッドの上を転がった。こうして無駄に時間を使っていることはもつたない気もするが、起き出したところでは何もないのである。しかし寝転がっていることにも限界を感じ、葵は起き上がってベッドから下りた。気分を変えるためにも空気を入れ替えよう

と思った葵はスリッパを引きずって窓辺に寄る。何気なくカーテンを開けたところで葵は動きを止めた。

ここは葵がトリニスタン魔法学園に通うにあたって、ユアンから貸し与えられた屋敷である。西洋風の建造物である二階建ての屋敷は一人で住むには無駄なほど広い。どのくらい無駄かと言えば、使わない部屋が十部屋以上あり、屋敷の東西には広大な庭園が広がっていて、屋敷の南には噴水まであるといった始末だ。あまりにも広いため葵一人では管理が行き届かないが、掃除や庭の手入れなどは魔法をかけられている道具達が勝手にやってくれるのだ。

葵が使っている部屋は二階にあつて、窓からテラスに出られるようになっていている。テラスからは屋敷の東に広がる庭園を一望出来るのだが、そのテラスの欄干近くに金髪の男が佇んでいた。彼はこちらに背を向けていたが、そんな場所に佇む人物に一人しか心当たりのなかった葵は何事もなかったかのようにカーテンを閉める。しかし窓には鍵もついていないので、すぐに開け放たれてしまった。

「おはようございます、ミヤジマ」

凍えそうな外気と共に葵の部屋へ侵入してきた青年は、にこりと笑って挨拶を口にする。未だネグリジエ姿の葵は寒さに両腕を抱き、嫌な顔をした。

「今日、休みって言わなかった？」

口にしてしまつてからハツとして、葵は慌てて言い直す。

「本日はお休みなのではありませんこと？」

言葉遣いを正した後、葵は恐る恐るアルヴアの顔色を窺った。葵と目が合うなり、アルヴアは小さく吹き出す。

「ミヤジマ、今は普通に話しても大丈夫ですよ」

「……なんだ。じゃあ、アルも普通に話してよ」

叱責が飛んでくるかと身構えていた葵は力を抜いたが、アルヴアの口調は変わらなかつた。これが平素だとアルヴアが言い切るので、葵は胸中で大嘘つきだとぼやく。葵の不満顔を見たアルヴアは顎に手を当てて一考した。

「では、僕の部屋で話をしましょうか」

そう言うと、アルヴァは葵に着替える時間も与えずに手を取った。アルヴァが短い呪文を唱え終わると同時に体が浮遊感に包まれ、その一瞬後に目に映ったのはいつもの保健室である。ネグリジエ姿のまま外出してしまった葵はソワソワしながら周囲を窺った。

「心配しなくても、誰もいないよ」

葵の不安を見透かしたように言うと、アルヴァはコートを脱いでワイシャツの胸元をはだけさせた。白衣は着ないまま、彼はどっかりと自分の席に腰を下ろす。葵はネコかぶりをやめたアルヴァを不審そうに見た。

「ねえ、ここって保健室なんですよ？ 何でいつも誰も来ないの？」

個人授業の教室はこの保健室である。毎日通っている場所なのだが、葵は一度も生徒が訪れたところを見たことがなかった。葵に問いかけられた内容が意外だったのか、煙草を手にしたアルヴァはキョトンとした表情をしている。

「うん？ 保健室だなんて言ったか？」

「……聞いてない、かも」

「まあ、保健室っぽい使い方もあるけどね」

「どういふこと？」

「細かなことはさておき、今日は休みだからどのみち誰も来ないよ」

「あ、そっか」

今日が休みだということ思い出した葵の頭には、すぐさま別の疑問が浮かんできた。保健室云々の話はひとまず置いておき、葵は本題を口にする。

「それで、何か用？」

「明日から教室に行ってもらってから、今日はその準備。制服はさっき届けてきたから明日からはそれで登校するように」

「ってことは、個人授業は終わり？」

「しばらくは並行してやる。特に文字は、扱えないと不便だからね」

この世界の文字は魔法の源である。しかし葵はまだ、文字の基本

的な配列すら覚えきれいでいなかった。

「じゃあ、お茶を淹れてみようか？」

アルヴアに促された葵は渋々、アクロアイトの指輪リングをはめている右手を胸の高さまで持ち上げる。

「アン・テ」

葵が呪文を唱えると、アルヴアの席の横に置いてあった台から茶器が宙に舞った。この世界の物には制作の段階で職人の魔法が刻まれている、使用者は呪文によって物に刻まれた魔法を発動させるのだ。ちなみに無属性魔法は例外なく、冠詞に『アン』を用いる。自然界の力を使う際には属性に応じて冠詞が異なるのだが、葵には無属性魔法しか使えないので縁遠い話であった。

「いくつ？」

アルヴアが問いを投げかけてきたので、砂糖の話だと思った葵は一つと答えた。しかし砂糖の話ではなかったらしく、アルヴアは呆れ顔をしながら補足する。

「年齢の話だよ。ミヤジマは今、いくつ？」

「なんだ、紛らわしい。十七だけど、それが何？」

「だったら二年生だね。明日、二年A組へ行くといい。教室の場所が分からなければ誰かに聞いてくれ」

「そんな、アバウトな……」

「鐘が鳴ったら始業だから。遅れないように」

一方的に話を切り上げたアルヴアは紅茶の注がれたカップに口をつけた。もう説明をしてくれそんな雰囲気ではなかったため、葵も仕方なく口を閉ざす。室内にはしばらく沈黙が流れていたが、程なくしてアルヴアが席を立った。

「……何？」

傍へやって来たアルヴアに右手をすくい上げられた葵は眉根を寄せて意図を問う。アルヴアは答えず、葵の右手に嵌められているリングを注視しているようだった。リングを見ているのだと分かっているにしても、無言で凝視されれば居心地が悪い。耐えられなくなった

葵は手を引こうとしたのだが、それより先にアルヴァが行動を起こした。

「!!!!!!?」

目前で起きた出来事に衝撃を受けた葵は声にならない悲鳴を上げ、手を奪還した。動揺を隠せないでいる葵とは正反対に、アルヴァはキョトンとしている。

「何を驚いている?」

「だっ、だつて、今っ……」

「リングに僕の魔力をこめた」

この世界の者ではない葵が魔法を使うには、指輪にこめられた誰かの魔力を消費するしかない。魔法を使うごとに指輪の魔力は減っていくので定期的に補充が必要なのだとアルヴァは説明したが、しかし、それにしてもと、葵は思う。

(それが、何で指輪にキスなのよ)

まだ鼓動が早い胸を押さえ、葵は心臓に悪いと独白した。だがアルヴァにとっては何でもないことのように、彼は平然としたまま話を続ける。

「これを渡しておこう」

アルヴァがポケットから取り出したのは鍵であり、葵は目の前に吊り下げられたそれを見て首を傾げた。

「何のカギ?」

「この部屋の鍵だ。ミヤジマは転移魔法が使えないから、その鍵がないとここへ来れない」

「へー」

鍵を受け取った葵は、魔法が存在する世界にしてはずいぶんと普通の鍵だと思った。その鍵は掌にすっぽりと納まってしまう大きさの、先端部分がギザギザになっているタイプのものである。ネグリジェにはポケットがなかったので、葵は鍵を握ったまま話を続けた。「でも指輪の魔力が減ってきたとあって、どうしたら分かるの?」

葵が何気なく発した問いが実は重要だったらしく、アルヴァは深

刻そうに眉根を寄せた。

「そうか、ミヤジマには魔力が見えないんだね」

「ふつう、誰でも見えるものなの？」

「魔力を見る能力っていうのも個人差があるから一概には言えないけど、大抵は労せず見えるもんだね」

「ふうん。どんな風に見えるの？」

「体全体をベールで覆ってる感じ、とでも言えば分かるか？」

「……何となく」

まったく想像出来ないこともなかったので葵は曖昧な返事をした。アルヴァは話をしている間にも考え事をしていたらしく、少し間を置いてから嘆息する。

「仕方ない。魔法が使えなくなったら補充ということにしよう」

「魔法が使えなくなったらここに来ればいいの？」

「そういうことだね。あと、これも渡しておこう」

不意に思い立ったかのようにポケットを探ったアルヴァが取り出したものはカードだった。受け取りながら葵は首を傾げる。

「これは？」

「欲しいものがあればそれで買うといい。この学園に通っている生徒は金持ちばかりだから交際費を出し渋ると舐められる」

「そ、そういうもんなの？」

「まあ、金持ちにもピンからキリまであるから。友達を選んだ方がいいかもね」

ごく一般的な家庭に育った葵には金持ちの金銭感覚など知る由もなく、アルヴァの一言は余計な不安を煽った。

（ともだち、ねえ……）

この世界に長居をするつもりのない葵は複雑な心境で口角を持ち上げる。その笑みをどう解釈したのかは分からないが、アルヴァは何も言わなかった。

白衣のネコかぶり校医（４）

早くに床へついた葵は真夜中、ふと目を覚ました。室内は青い月明かりに照らされていて、人工の明かりがなくとも物の輪郭がはっきり見える。寒さからか体を丸めて眠っていた葵は仰向けに寝転んで手足を伸ばした。そうしていてもキングサイズのベッドにはまだ余裕があり、手や足が落ちる心配はない。上質な柔らかさを体の背面に感じながら、葵はぼんやりと薄光が照らし出している広い天井を眺めた。

（家じゃないんだっけ……）

寝起きの冴えない頭で考えたことは、この世界へ来てから毎朝のように繰り返している眩きだった。ベッドに寝転がって見る天井は広く、同じように広すぎる室内は寒々しい。もう一度寝ようとしたものの目が冴えてしまい、葵は仕方なく体を起こした。周囲を見渡し、探している物が存在しないことに気がつくのと葵の口元に苦笑みがのぼる。無意識に時計を探していたのだが、この世界には時を計るものなど存在しないのだった。

ベッドを抜け出した葵は寒さに身を震わせ、椅子にかけてあった厚手のカーディガンを羽織った。窓辺へ寄ってカーテンを開けてみれば、外は一面の雪景色。夕方頃から降り出した雪はすでにやんでいたが、テラスの先に広がる庭園はすっかり染められて雪原のようになっっていた。雲が切れた天空には薄青い光を放つ月が二つ、浮かんでいる。

常時見えている月は二つだが、この世界には七つの月が存在する。葵がいた世界では大気の状態によって月の色が変わるのだが、この世界では一つの月が浮かんでいる間の色味は変化しないのだ。またこの世界では時間の概念は大雑把だが三十日で月が入れ替わるため、そこで一ヶ月とする区切りは存在していた。葵のいた世界で言う一月は『白銀の月』に相当し、その後、白殺し・秘色・岩黄・橙黄・

伽羅茶・炎の月と続いていくのである。白銀から秘色までが冬月期、岩黄から伽羅茶までが夏月期、そして炎の月で終月を迎え、また白銀に戻って一周するのだ。現在は二十日の休日が終わった夜なので、朝になれば白殺しの月の二十一日である。

葵がこの世界へ来たのが白殺しの月の初頭。何だかんだと忙しい毎日過ぎ去って行き、あつという間に一月が経とうとしている。その間レイチエルやユアンからは何の連絡もなく、葵は焦りを覚え始めていた。

(一ヶ月、かあ……)

何の連絡もなく一ヶ月も姿をくらしなければ、葵のいた世界では当然のことながら警察沙汰になっているだろう。行方不明者としてテレビで顔が公開されてしまっているかもしれない。そんなことを考えた葵はだんだん憂鬱な気分になってきた。

(帰ったら、どうやって説明しよう)

ある日突然別の世界へ召喚されて帰れませんでしたが、などとは言えそうもない。魔法が当たり前に存在するこの世界では話を通じるが、魔法のない世界でそんなことを言っても精神異常を疑われるだけである。しかし他にうまい言い訳も思いつかず、葵は嘆息した。

(それ以前に、帰れるのかな)

そんな風に弱気になってしまうのは、一人きりで過ごす夜が寂しいせいもあった。話し相手もなくテレビもない状況では、何もすることがないのである。

窓に背を向けた葵はその足で室内の隅に備え付けられている机に向かった。机の上にはトリニスタン魔法学園の制服である白いローブが置かれている。真新しいローブを手を取った葵は視線を落とすじつとそれを見つめた。

「友達がいれば、少しは違うかなあ？」

声に出して呟いてみたものの、葵の独白は夜の静寂に消えていく。余計に虚しくなっただけだったので、葵はローブを置いた。

(音楽、聴きたいな。テレビも見たい。マンガも小説も読みたいし、

加藤大輝の話したい)

葵のささやかな願いは全て、この世界では叶わない。お金持ちのお嬢様と話が合うとは思えなかったが孤独に挫けた葵は、せめて周囲に溶け込む努力はしようと思ったのだった。

マジスター（1）

白殺しの月が終わり、冬月期最後の月である秘色ひそくの月に入っても雪は深々と降り続いてた。丘の上に建つトリニスタン魔法学園は周囲よりも高くなっているため、開けた眺めからは雪が降り積もっていく様子が窺える。校舎の二階にある二年A一組の教室から外を眺めていた宮島葵は、頬杖をついたまま小さくため息をついた。雪はまだまだやみそうになく、今日も帰り道が寒そうだ。

「ミヤジマさん」

素に戻っている時に声をかけられた葵は動揺を悟られないように、にこやかに見える笑みを作ってから教室の中の方へ顔を傾けた。葵の机の周りには学園の制服である白いローブを身につけた少女が三人ほど佇んでいる。彼女達は今、葵が馴染もうと努力しているグループの女の子達だった。

「わたくし達、帰りにお茶をしていきますの。ミヤジマさんも一緒にしませんこと？」

誘ってくれたのは常に三人の真ん中に陣取っている、ココという名の少女だった。少し吊り目気味の顔立ちが表しているように気が強い彼女はクラスの女子の中でもリーダー的な存在である。そのためなのか、ココは葵が編入した当初から何かと気遣ってくれていた。しかしお茶は遠慮したかったので、葵はすまなさそうな表情をつくらせて目を伏せる。

「申し訳ございません、本日は先約があるものですから」
葵が断りを告げると白けた空気が流れそうになった。だがそういう雰囲気になる前に、葵は目を上げて言葉を続ける。

「次回は必ずおじゃまいたしますわ。またお声をかけてくださいませ」

「そうですね。それでは、仕方ありませんわね」

「では、ミヤジマさん。ごきげんよう」

誘いを断った件は丸く収まり、ココ達は連れ立って教室を出て行った。その頃には教室内に誰もいなくなっていたので、葵は机に突っ伏して重い息を吐く。

（はあ、疲れる……）

本当は、先約などありはしない。こういった場合に角が立たない断り方を教えてくれたアルヴァに、葵は今更ながらにお礼を言いたい気分になった。

良家の子供達が通うトリニスタン魔法学園には、葵が想像していた以上に独特の世界があった。暗黙のルールも多く、臨機応変を求められる環境は常にプレッシャーがかかる。そんなわけで、学園にいる時の葵は気苦労が絶えないのである。友達が欲しいと思っていたのもどこへやら、出来れば放課後は一人で過ごしたいとまで思うようになっていた。

（つるむの、好きだよね）

ココ達は十日に五、六回は連れ立って街へ出かける。お茶だったり、ショッピングだったりをするのだが、彼女達のやることはとにかく派手なのである。それまで少ない小遣いをやりくりして好きな本を買うという慎ましい生活を送っていた葵には、彼女達の言う『付き合い』についていけそうもなかった。加えて、葵には魔法を使えないという負い目がある。この学園に通う生徒は良家の子供というだけでなく魔法にも長けているのだ。街まで転移などということ常としている彼女達と行動を共にするには、いらぬ気遣いまで発生する。具体例を挙げると、彼女達は魔法陣がある所へ呪文一つで転移することが出来るが、転移魔法が使えない葵は口実をつけて一度彼女達と別れ、保健室へ駆け込んでからアルヴァに送ってもらおうという非常に面倒なことをしなければならぬ。何故そんなややこしいことになっているかと言えば、葵の素性を明かせないことが最大の要因だった。

（私がこの世界の人じゃないってバラせちゃえば簡単な話なのに）
葵はそう思うのだが、アルヴァが絶対に駄目だと言うのである。

理由もよく分からないまま、葵はアルヴアの助言に従っているというのが実情だった。

机から顔を上げた葵は再び窓の外を見た。灰色の空からは大粒の雪が降っていて、まだまだ積雪を増しそうである。こんな日に歩いて帰るのもバカらしいと思った葵は保健室を訪れることにした。アルヴアに頼めば、貸し与えられている屋敷の魔法陣が描かれている部屋まで一瞬で移動出来るのだ。

トリニスタン魔法学園の校舎は五階建てで、全体的には五角形をさらに丸くしたような形になっている。完全な円形ではないが廊下は滑らかなカーブを描いて一周していて、そのせいで初めのうちは果てがないと感じたものだった。ドーナツの空白部分は中庭になっていて、天気がいい日は生徒で賑わっているらしいが雪の日は誰もいない。一階の北辺にある保健室を目指していた葵はふと、白く染まっている中庭に目をとめた。

（雪合戦、したいな）

雪の積もった中庭は、絶好の雪合戦ポイントのように思われた。

ただ、この学園の生徒は雪合戦をするようなタイプではない。仲間がいなければ合戦にならないので、葵は寂しさを感じながら小さく首を振った。

（こんな時、弥也がいればなあ……）

元いた世界での友人である弥也は体育会系の少女で、体を動かすのが大好きという人である。小学生の時から付き合いのある彼女は昔から、雪が降ると率先して集合をかけていた。特にスポーツをやつてはいないが葵も体を動かすことは好きなので、遊びとあらば飛んでいったものだ。そんなさして遠くもない日のことを思い返し、葵はしみじみしてしまった。

（雪だるまくらいなら、つくれるかな）

閃いた葵は周囲に人気がないことを確認し、足音を忍ばせながら中庭へと向かった。この世界には空気調節器が存在しないため校舎内も寒いのだが、外気はまた格別である。大粒の雪はまだ降り続け

ていたが葵は雪の上に魔法書を放り出してしゃがみ込み、まずは掌大の雪玉をつくった。その雪玉を雪の上で転がし、だんだんと大きくしていくのである。大中二つの雪玉をつくった葵は中くらいの雪玉を大きい雪玉の上に乗せ、完成した雪だるまを見て満足した。

（バケツとか手袋とかがあれば良かったけど、まあ、これで十分だよね）

雪に埋もれそうになっていた魔法書を発掘した葵はふと、中庭にできた足跡や軌跡に目を留めた。先程まで新雪に覆われていた中庭も、雪だるま作りを終えた現在では無残な有り様になっている。徐々に新雪に足跡を残す楽しさを実感した葵は子供の頃を思い返して楽しくなってしまった。

（雪合戦、楽しかったなあ。やりたいな）

一人で雪合戦をしても虚しくなるだけだと分かってはいたが、騒ぎ出してしまった血を鎮めることは出来なかった。葵は再び魔法書を放り、掌にすくい上げた雪を丸める。どこにぶつけようかと視線を走らせた葵は、先程つくった雪だるまに目を留めた。

（よし、あれにしよう）

至近距離から当てても面白くないので、雪だるまと距離をとってから雪玉を投げる。しかし狙いは外れ、葵が投げた雪玉は雪だるまの横をすり抜けて中庭に落ちて行った。同じ距離から幾度か試したものの、コントロールが悪いらしく当たらない。ムキになった葵は少しずつ雪だるまとの距離を縮め、がむしゃらに雪玉を投げつけたのだった。

大方の生徒がすでに帰宅の途に就いている放課後、トリニスタン

魔法学園の校舎は静まり返っていた。この学園の生徒が校内にいるのは授業が行われている間だけなので、平素であれば授業が終わってしばらく経っているこの時間帯、校内に人影は見受けられない。しかしこの日は、校舎五階の廊下を他愛のない話をしながら歩いている一団がいた。

「なんだ、あれ？」

ふと、中庭に目を留めた長身の少年が訝しげな声を上げながら窓辺に寄った。自然なブラウンの長髪を無造作に束ねている少年に続き、真っ赤な髪色が印象的な少年も窓辺に寄る。大粒の雪が深々と降りしきる中庭を見下ろして、彼らは一様に眉根を寄せた。

「何？」

茶髪の少年と赤髪の少年が足を止めたため少し先を歩いていた栗色の髪をした少年も引き返してきて、彼らの背後から窓の外を覗きこむ。三人の少年から少し離れた場所で立ち止まった黒髪の少年だけが、窓辺に近寄ろうとはしなかった。

「おい！」

廊下の中程で足を止めている黒髪の少年が怒声を上げたので茶髪の少年が顔を上げ、応えるように中庭を指した。

「変な女がいるんだよ」

「知るか。行くぞ！」

興味がないと一言で切り捨て、黒髪の少年は踵を返した。それを見た栗色の髪の少年も、無言の内に窓辺を離れる。二人にもう立ち止まる気配もなかったので茶髪の少年と真っ赤な髪色をした少年も窓辺を離れ、彼らの後を追ったのだった。

マジスター（2）

中庭で雪だるまを相手にストレス発散をした後、葵は校舎一階の北辺にある保健室を訪れた。いつものように鍵を使って扉を開けると、音に反応したアルヴァが振り返る。この部屋にいる時の彼は相変わらず、白衣の下はだらしない格好をしていた。

「……その姿は、一体？」

ローブの裾やフードから水滴を滴らせている葵を見るなり、アルヴァは眉根を寄せた。雪と格闘している時は気にならなかった寒さが今になって凍みてきて、葵は全身を震わせながら答える。

「ちよ、中庭、遊……」

口唇が意思とは無関係に震えているため、葵の科白はちゃんとした言葉になっっていなかった。アルヴァはため息をつきながら席を立ち、葵の傍へと移動する。

「ソマシオン、ヴァンティラシオン」

アルヴァが呪文を唱えると彼の嵌めている指輪リングが輝き出し、白煙と共に長方形の箱のような物体が室内に出現した。葵の背丈ほどの大きさがあるその物体は正面が網目状になっていて、網目には何故カリボンが結ばれている。用途不明な物体を葵がぼかんと眺めていると、アルヴァは再び呪文を唱え出した。

「アン・セシエ、グラン」

アルヴァの命を受けて、長方形の物体が異音を立て始める。同時に網目から垂れ下がっていたリボンが動き出し、葵の頬を風が過ぎていった。扇風機のようなと思ったのも束の間、そよ風のような送風が一瞬にして突風へと変わる。熱い風が体を押し流そうとしていたので、葵は必死に風に立ち向かった。

しばらくすると、送風は止まった。簡易なベッドを仕切るカーテンも揺らぐのをやめ、室内は無風の状態を取り戻している。先程まで雫が滴っていた葵の体も完全に乾いていたが、突風に煽られた髪

が見るも無残な有り様になっていた。

「い、今の何!？」

乱れた髪を手櫛で整えつつ、葵はアルヴァを振り返る。送風機の後ろにいたため風の影響をまったく受けていないアルヴァは平然と答えを口にした。

「召喚魔法と無属性魔法の連発。受容力キャパシティーさえ満たしていれば、こういうことも出来るようになる」

そこまで説明して一度話を切り、アルヴァは再び呪文を唱えた。すると今度は、白煙と共に送風機が消え去る。アルヴァ曰く、召喚魔法は何処から物を出現させるのかまでは指定出来ないとのことだった。他人に召喚されたくない物には防衛魔法プロテクトをかけるらしいのだが、葵には縁遠い話である。

「それで、何故あんな姿になったって？」

この部屋での指定席であるデスク前の椅子に腰を落ち着けたアルヴァが話を戻したので、葵もベッドに座りながら中庭での出来事を説明した。葵は呆れられるかと思っていのだが、アルヴァは興味深そうな表情になって身を乗り出す。

「ユキダルマとはどういった物なんだ？」

「あ、この世界にはないんだ？ えつとね……」

口で説明するのは難しいと思った葵はローブのポケットからペンを取り出した。レイチエルに教えてもらった通りに呪文を唱え、文字ではなく雪だるまの絵を描く。空中に描かれた絵を見たアルヴァは眉根を寄せ、奇怪な形だと呟いた。

「実物が見たかったら、中庭に行けばまだあるよ」

「そうか。ちょっとここで待っていてくれ」

アルヴァはすつくと席を立ち、その足で去って行った。取り残された葵が言われた通りに待っていると、彼は少し時間を置いてから戻って来た。

「見てきたの？」

「見物したあと破壊してきた。騒ぎになっても困るからね」

「えっ、あんなのも騒ぎになっちゃうの？」

「この世界にはない物だから仕方がない。なるべく、 unnecessary 行動は謹んでもらいたいね」

アルヴァにさりげなく叱責された葵はせつかくのストレス発散も虚しく、新たなストレスを募らせた。あれもダメ、これもダメと抑圧され続けたのではストレスを溜めるなという方が無理である。葵の苛立ちを察したのかどうかは定かではないが、アルヴァは口調を改めて話を変えた。

「ところで、ユキダルマは何のために作るものなんだ？」

「何のためって……ただの遊びだよ」

「意味がないのか。不可解だが興味深い」

呟いたきり考えに沈んだアルヴァを見つめた葵は、何でもかんでも意味を持たせたがる彼の方が不可解だと思った。葵は知らなかったのだが魔法を学ぶということは世界の根幹を追求するということであり、アルヴァの姿勢はこの世界では一般的なのである。しかし葵が疑問を口にしなかったので、彼らの話はそこまで及ばなかった。「少し、ミヤジマの世界の話を聞かせてほしい。ミヤジマのいた場所はどこな世界なんだ？」

「どんなって……」

答えに窮した葵は眉根を寄せて天井を仰いだ。アルヴァはすでに葵がいた世界に魔法がないことを知っている。ならば他に何を話せばいいのか思案した葵は、この世界と大きく異なる点を見つけてアルヴァに視線を戻した。

「この世界は月が二つあるけど、私がいた世界では一つだったよ」

「へえ。単色の月しか浮かばないというわけか」

「タンシヨク？」

「色が、一つ。何色の月？」

「ああ、単色ね。でも白っぽかったり黄色だったり、赤く見えることもあるよ」

「ほう、月は一つなのに色味が変わると？ 何故？」

葵のいた世界で月の色が変わるのは、大気の状態によって瞳に映る色彩が変化するためである。だが彼女にはそこまで説明するだけの知識がなかった。葵が口ごもっているアルヴァが話題を変えたので、話は暦のことへと移っていく。

「この世界では一ヶ月が三十日って決まってるんでしょ？ でも私がいいた世界では三十一日の月もあって、閏年なんてのもあったよ」

一年を三百六十五日とすることや、四年に一度、一年を三百六十六日とする閏年があることを説明するとアルヴァは難しい表情をして空を仰いだ。計算でもしているのかと思った葵は、しばし閉口して待つ。頭の整理がついたのか、アルヴァは再び葵を見た。

「何故、ウルウドシというものが存在するんだ？」

「いや、そこまではちよっと……」

解らないと葵が言うのと、アルヴァはスッキリしないという表情をした。しかし葵にはそれ以上の説明は無理だったので、別の話題を振る。

「そつえば私がいた世界では一週間の区切りもあったけど、この世界ではないみたいだね」

葵が曜日について説明すると、アルヴァは再び考えこんでしまった。しかし今度は、さほど間を置かず口火を切る。

「月と日はないが、あとの火・水・木・金・土は魔法の属性と同じだ。奇妙な合致だね」

アルヴァは釈然としない様子で独白を零していたが、葵はそれほど不自然なことだとは思わなかった。曜日とは七曜が守護する日のことであり、昔は宗教的なものだったのである。火や水などは根源的な要素であり、そういったものが様々な場面で使用されることに葵は違和感を抱かなかったのだ。だがこの世界と葵がいた世界を繋ぐような奇妙な合致だと言われれば、それもまた頷ける。

「ちなみに一日を区切る単位もあったよ。一日が二十四時間で、一時間は六十分、一分は六十秒」

「なんて綿密な世界だ」

理解が追いつかなくなってしまうたのかアルヴアは頭を抱えて唸り出した。葵はどちらの世界も体験しているので理解も早いが一方向の世界しか知らないアルヴアの想像力では言葉が足りない部分を補えないのも仕方のないことである。

「アルもいつか来てみたら？ 別の世界の人を呼べちゃうくらいなんだから、こつちから別の世界に行くことも出来るんじゃないの？」

葵が思いつきで放った一言をきっかけに、アルヴアは真顔に戻った。アルヴアにじっと見つめられた葵は、その視線に何か含みがあるような気がして眉をひそめる。

「何？」

「……いや、何でもない」

「ふうん？ あ、でもさ、私がいた世界にこつちの世界の人が来ると魔法はどうなるんだろう？ あつちの世界で魔法なんか使ったら大騒ぎになるよ」

「ふむ。面白い問題提起だ」

アルヴアは再び探求者の顔つきになり、考えを巡らせているようだった。会話が途切れたので、葵はアルヴアが来たらどうなるかと想像を巡らせてみる。

ポットがひとりでお茶を入れたり、指から火が出るなど、まるでマジックである。だがタネもシカケもないことが分かれば必ず騒ぎになり、毎日のようにテレビで騒がれること請け合いだ。ましてアルヴアは美形なので、『イケメン魔道士来る！』のようなタイトルをつけられてもはやされるかもしれない。そこまで考えたところで葵は堪えきれずに吹き出した。

「……ミヤジマ？」

「な、何でもない」

とは言ってみたものの、葵は笑いを収めることが出来ずに腹を抱えて笑った。ひとしきり笑い転げた後、うつすらと目尻に浮かんだ涙を拭う。アルヴアが不審そうな表情をしたままだったので、葵はこの部屋へ来た本来の目的を切り出すことにした。

「家まで送ってくれない？」

秘色の月は一年で最も雪の多い期間であり、葵がアルヴァに送ってくれと頼み込むのも幾度目かのことである。すでに日常茶飯事となりつつあったがアルヴァは特に嫌な顔をするでもなく頷いたのだ。

マジスター（3）

とある日の早朝、トリニスタン魔法学園の制服である白いローブに身を包んだ葵は校舎二階にある二年A一組の教室からぼんやりと外を眺めていた。窓の外では深々と雪が降り続いていて、その他には目立つた動きもない。同じ光景ばかり見ていることに飽きた葵は小さく息を吐き、教室の前面を占めているブラックボードの方へ顔を傾けた。まだ始業前のため、教室内はガランとしている。

この世界には時計というものが無い。時を計るという概念のない世界でどうやって始業の時刻を定めているのか謎だが、それでも学園には授業開始を告げる鐘が存在していた。何か目安のようなものがあるらしく、生徒達は大抵鐘が鳴る少し前に登校してくる。しかし葵には予測のしようもないため、早すぎるか遅刻するかのどちらかが常であった。今日は早すぎたパターンである。

時間を持て余した葵は机の上に置いてある魔法書をめくってみたが、すぐに閉じた。アルヴァに文字を習っているとはいえ読めない単語が多く、つまらないのである。次に、葵はローブのポケットからペンを取り出した。右手に握ったペンを目前に掲げ、呪文を口にしてみる。

「アン・カルテ」

呪文に反応してペンが光り出すと葵はそれを宙に放った。葵の手を離れたペンは空中を泳ぎ、その軌跡が地図を描き出す。暇つぶしに、葵はまだ見慣れていないこの世界の地図を眺めた。

二月の浮かぶこの世界には東西に大陸が一つずつある。東の大陸の方が大きく、西の大陸は東の大陸の三分の一ほどの大きさしかない。葵が暮らしているアステルダム公国は東の大陸の内陸地帯にあり、トリニスタン魔法学園はアステルダム公国内の東域に位置していた。ちなみに、王立の名門校であるトリニスタン魔法学園は東の大陸では各公国に設けられていて、葵が通っているのはアステルダ

ム分校である。王立校であるが故にトリニスタン魔法学園には良家の子供が多く、また魔法に長けている者も多いのだ。それは魔力と権力に密接な関係があるからなのだが、葵はそこまでの事象は知らなかった。

子供の頃から世界は七大陸だと教えられてきた葵にとって、大陸が二つしかない地図は違和感がある。だが特別地理が好きという趣向も持ち合わせていなかった。知識欲を刺激されることもなく、葵は手元に戻って来たペンをしまった。頬杖を突いてぼんやりしていると廊下の方から足音が近付いて来たので、葵は慌てて姿勢を正す。しばらくの後、葵が見つめる中で二年A一組の扉が開かれた。

「あら、ミヤジマさん。お早いですわね」

教室に姿を現したのがココだったので、葵は努めてにこやかに笑みをつくった。

「おはようございます、ココさん」

「ミヤジマさんもマジスターの方々をお迎えに？」

朝の挨拶もそこそこに、ココは少し興奮しているような調子で話を切り出した。マジスターとはトリニスタン魔法学園が誇るエリート学生の集団であり、良家の子息が多い学園内でも際立った家柄の者達である。そのため潜在的な魔力も他の生徒とは比べ物にならないほど大きく、加えて眉目秀麗な者ばかりで構成されているので、女生徒にとっては憧れの的のだった。

ココ達の話にもよく名前が出てくるので、葵もマジスターの存在自体はすでに知っていた。しかし『お迎え』の意味が分からなかった。葵は首をひねる。

「さあ、参りましょう」

時間に追われているのか、ココは急いでいる様子で強引に葵を促した。よく分からないが従っておいた方がいいと思っただけで、葵は席を立ち、教室の外へと向かうココに続く。その後はココの背中を追いかける形で廊下を足早に歩き、辿り着いた先は一階のエントランスホールだった。ホールの二階部分はすでに女生徒で埋め尽くされてい

て、一階部分も廊下の両側に女生徒ばかりが並んでいる。その光景を見た葵は、アイドルの出待ちのようだと思った。

葵達が到着して間もなく、突如として歓声が上がった。女生徒の黄色い声はエントランスから校舎に入って来た三人組の男子生徒に向けられたもののだが、人波に吞まれている葵からはその姿が見えない。三人組の歩行に従って集まっていた女生徒達が大移動を開始したので、葵には彼らの後ろ姿さえ見ることが出来なかった。

(……すごい人気)

いつの間にかココともはぐれてしまい、エントランスホールに一人取り残された葵は胸中でそう呟いてみた。エントランスホールから遠く離れた廊下にはまだ最後尾らしい女生徒達の姿が残っていたが、やがてはそれも緩やかなカーブに吞まれていく。ちよつと見てみたかったと残念に思うのは目の前に生身の芸能人がいた時と同じような感覚であり、葵は笑ってしまった。

(でも、ちよつと親近感。お嬢様でもカツコイイ男の子がいたら騒ぐんだ)

元の世界にいた頃は葵もよく、イケメン若手俳優である加藤大輝がテレビに映るたびに騒いでいたものだ。葵にはそれと同じくらいの認識しかなかったのだが、トリニスタン魔法学園に通う女生徒達がマジスターに入れ込んでいるのには、もう少し複雑な事情があった。二月の浮かぶこの世界では魔力と家柄に密接な関係がある。身分の高い者ほど大きな魔力を持っていて、それは血によって受け継がれていくのだ。トリニスタン魔法学園に通う女生徒のほとんどは彼女達の家を繁栄させるといふ使命がある。そんな彼女達にとってマジスターというエリート集団はいわば、格好の標的というものであった。

いつまでもエントランスホールにいたら始業の鐘が鳴ってしまったため、葵は急いで教室に戻ろうとした。しかし誰かがエントランスホールに入って来たことに気付いて、足を止めて振り返る。そうして目にした人物に、葵は釘付けになってしまった。

校舎の外からエントランスホールに入ってきたのは長身の少年だった。栗色の髪を全体的に短く刈っているため、整った顔がよく見える。彼はこの学園の制服であるローブではなく私服姿だったが、顔立ちにまだ幼さが残っているので生徒のように思われた。人気のないエントランスホールで立ち止まっていたからか、少年はすれ違いざまに葵を一瞥する。葵は気怠そうな色を宿している淡いブラウンの瞳に引き込まれてしまったが、彼は立ち止まることなく行ってしまった。少年が立ち去った後もしばらく呆けていた葵は、やがて我に返って廊下を走り出す。軽い足取りで教室へと向かう葵の胸中は熱を帯びたときめきに弾んでいた。

（か、カツコイイ。さっきの人、カツコよかった）

彼は一般人だが加藤大輝に次ぐ、芸能人的なヒットである。葵はまだドキドキしている胸を押さえ、にやけそうになる顔を必死で繕いながら教室の扉を開けた。始業の鐘はすでに鳴っていたが、まだ教師が来ていないため生徒達は雑談に花を咲かせている。窓際の自分の席に腰を落ち着けた葵はブラックボードの方へ顔を傾けたが、残念ながらそこに書かれている文字を解読することは出来なかった。「ミヤジマさん、何処へ行ったらしたの？」

教室の中にいたココが歩み寄って来たので、気が緩んでいた葵は表情を作り直して彼女を迎えた。

「はぐれてしまいました。ココさんはどちらにいらしたのですか？」
「わたくしはマジスターの方々と一緒でしたわ」

ココの返事を聞いた葵は、あれを『一緒にいる』と言えるのか疑問に思ったが表情には出さなかった。はぐれた話はさておき、ココはマジスターの話題に言及する。

「お顔、拝見できました？」

「それが、見えなかったのです。でも、その代わり……」

『超カッコイイ人を見かけた』と言おうとして、葵は慌てて口をつぐんだ。

「どうかなさいまして？」

「い、いえ。何でもありませんわ」

ココの追及をにこやかに流した後、葵は胸中でため息をつく。

(ああ、めんどくさい。フツウの言葉で騒げれば楽なのに)

マジスターのことで騒いでいるココ達と、カッコイイ人の話題で盛り上がりたいたい葵の気持ちは同じである。しかしそこに言葉の壁があるが故に葵ははじけることが出来なかった。エントランスホールで出会った少年のことを話題にするとボロが出そうだったので、葵は自ら話を振ることを諦めた。

「マジスターの方々、本日もとてもステキでしたわ。お顔を拝見できなくて残念でしたわね」

ココが再びマジスターの話を蒸し返したので葵も調子を合わせる。「実は、わたくしはまだマジスターの方々を拝見したことがないのです。どのような方達なのですか？」

「まあ、そうでしたの！」

過剰なまでに驚きを露わにしたココはマジスターについて熱く語り出した。彼女の話によれば、トリニスタン魔法学園アステルダム分校のマジスターは男子の四人組で、それぞれキリル＝エクランド、ハル＝ヒューイット、オリヴァー＝バベッジ、ウィル＝ヴィンスという名らしい。

「キリル様は漆黒の髪にブラックの瞳という、世界でも珍しい容姿をなさっています。ハル様は栗色の髪にブラウンの瞳をなさっていて、とても繊細な雰囲気をお持ちのお方ですね。オリヴァー様は長い茶髪を結んでいらして、とても体格がよろしいの。ウィル様は刺激的な真っ赤な髪をなさっていますが意外とお茶目なお方ですわ」

ココが饒舌に語るので葵は内心では呆けながら話を傾けていた。だがマジスターへの関心は高いようで、葵とココの会話を聞きつけたクラスの女子も次第に話に加わってくる。『オリヴァー様のワイルドなセクシーさがステキ』だの『キリル様の視線に射貫かれたい』だのといった発言を受けて、葵はファンクラブの集いみたいだと思った。

(ああ、いいな、この雰囲気)

ここは異世界だが、女の子の関心事は世界が違って同じのようである。お嬢様ばかりの環境に放り込まれた庶民の葵はそれまで疎外感を覚えていたのだが今、初めて彼女達の中に溶け込めたような、そんな気がしていた。

マジスター（４）

「……また？」

保健室に入ってきた葵の顔を見るなり、アルヴァは眉根を寄せながらそんなことを言った。両手を顔の前で合わせた葵は拝むようにしながら、デスクにいるアルヴァに歩み寄る。

マジスターの一件を機に、それまで浮いた存在だった葵もようやくクラスに馴染み始めた。お嬢様ぶることに慣れてきたこともあり、近頃では積極的に会話にも参加している。クラスメートと仲良くなるということは必然的に出かける機会が増えるということであり、お金も指輪リングの魔力も消費が激しくなっていた。

「昨夜試してみたんだけど、空になっちゃったみたいなんだよね」
この世界の生まれではない葵には魔法が使えない。葵が魔法を使うには、アルヴァの魔力をこめたリングが必要なのである。リングには一定量の魔力しか留めておくことが出来ないため、魔法が使えなくなると葵は保健室を訪れるのだ。

葵にお願いされたアルヴァは小さく息を吐き、席を立った。彼は無造作に、葵が差し出した右手をすくい取ってリングに口唇を寄せた。初めの頃は驚いたものだが日常茶飯事になってくると慣れたもので、葵は指にキスを落とされる光景を無感動に眺めていた。

「ありがとう、アル」

アルヴァが顔を上げると魔力の補充は終わりなので、葵はすぐに右手を取り返した。アルヴァは再び椅子に座り、デスクの引き出しから煙草を取り出しつつ葵を見上げる。

「その分だと、カードの請求もえらいことになってそうだね」

「アルが言ってた交際費がかさむって、本当だったんだね」

葵自身は高望みをしないが、彼女の周囲が高級嗜好なので必然的に交際費がかさむのである。しかし実のところ、この世界の金銭感覚が分かっていない葵にはどの程度の出費をしているのか把握する

ことすら出来ていなかった。せいぜい、アルヴアの小言を聞き流しながら何となくお金を使っているのだと思う程度なのだ。

「まあ、不自由させないって約束したんだから好きに使えばいいよ。ミヤジマが楽しそうで何よりだ」

煙を吐いて後のアルヴアの科白は、至って他人行儀なものだった。自身の財産が浪費されていることにも無頓着なアルヴアの物言いはどこか無責任であり、そこから派生した別の不安を抱いた葵は眉根を寄せる。

「アル、私が元の世界に帰る方の話は？」

「レイチエルから連絡がないからまだなんじゃないの？ そっちは僕に責任ないし、知らないな」

「ひどい！ 無責任！！」

「だから、僕に責任ないって言ってるでしょ。文句ならユアンに言いなよ」

「だったらユアンの所へ連れてってよ」

「うーん、それは出来ないね」

文句はユアンに言えと言っておきながら、アルヴアの答えは即答だった。葵はさらなる文句をぶつけようとしたのだが、その前に煙草を揉み消したアルヴアが席を立つ。対峙したアルヴアが真顔のまま見つめてくるので葵は反射的に身構えた。

「な、何？」

「そんなに言うなら忘れさせてあげようか？」

ニヤリと笑った後、アルヴアは強引に葵の腕を引いて抱き寄せた。シャンプーなのかコロソナなのか、えもいわれぬ香りに包まれた葵はあ然とする。しかし次の瞬間にはハツとして、葵は慌ててアルヴアの体を押し返した。

「何すんのよ！！」

顔を真っ赤にした葵が遠ざかりながら声を荒らげても、アルヴアは平然としている。

「子供だね、ミヤジマ。そんな反応されると何もする気が起きない

よ

「う、うるさい！ 何もなくていい！」

「じゃあ、お茶にしようか。空いてるベッドにでも座りなよ」

アルヴァがさっさとお茶の準備を始めたので一人で興奮していることが急にバカらしくなった葵は息を吐いた。葵が大人しくベッドに座ると、紅茶の注がれたカップを手にアルヴァが歩み寄って来る。カップを受け取った後、葵は手を振ってアルヴァを追い払った。

「それで、何で急にお嬢さん達と遊ぶようになったの？」

葵に追いつ返されたアルヴァは再びデスクに座り、新たな煙草を取り出しながら問う。葵は熱い紅茶を一口飲んだ後、質問に答えた。

「マジスターの話で盛り上がりつつあって。皆、すごくカッコイイらしいね」

「……マジスターねえ」

脚を組んだアルヴァは眉根を寄せ、難しい表情のまま空を仰いだ。アルヴァの反応を不可解に思った葵は小さく首を捻る。

「マジスターがどうかした？」

「話が盛り上がるくらいだったらいいんだけど、ミヤジマにはマジスターとお近づきになって欲しくないんだよね」

「お近づきにはなれないと思うけど……何で？」

「理由は、色々」

「……また色々？」

アルヴァがこの言い回しをする時は、話を濁しておきたい場合がある。葵はそれを不満に思っているので嫌な表情を作ったが、アルヴァは軽く苦笑いをした。

「別に隠そうとしてるわけじゃない。聞きたければ教えるよ」

「じゃあ、ハッキリ言っつてよ」

「一つ目の理由は、マジスターがエリート集団だから。特にこの学園のマジスターは優秀だから、大抵のことは労せず出来るんだよ。」

つまり、彼らなら葵がおかしいことに気付いてしまう可能性が高い。「私がおかしいってどうということ？」

けなされたような気がした葵は眉をひそめたが、アルヴアが言いたかったのは彼女がこの世界の者ではないということだった。そもそも、何故この世界の者ではないと明かしてはいけないのか疑問に思っている葵には話を通じていかなかったが、アルヴアはその辺りの説明をしようとはせず話を進める。

「二つ目は、マジスターがアイドルだから」

アルヴアの口から『アイドル』という単語が出ると違和感があるが、その理由には葵もすぐに納得することが出来た。

「マジスターと仲良くしてたらイジメられるってこと？」

「呑み込みが早いね。その通りだよ」

トリニスタン魔法学園に通う女生徒の多くは花婿探しを使命としており、中でも名実共に優良であるマジスターは高嶺の花なのだ。過去には、マジスターが気まぐれで声をかけただけの女生徒が学園を追い出されるといふ事態にまで発展したこともある。そういった激烈な争いに身を投じたくなければマジスターとは関わり合いにならない方が利口なのだ、アルヴアは言った。

「こ、怖っ……」

「女の友情なんて脆いものだよ。今日親しくしていたからといって明日も仲がいいとは限らない」

アルヴアが断定的に言うので女である葵は反発を覚えた。しかしアルヴアの言葉はこの世界の事実なので言い返せない。不満を抱いたまま閉口した葵は改めて、元いた世界の友人達を恋しく思った。

(弥也やならそんなこと考えなくてもいいのに……)

さっぱりとした性格の友人が脳裏をよぎってしまい、葵は無性に彼女に会いたくなってしまった。葵の心情を知ってか知らずか、アルヴアは淡々と言葉を続ける。

「何にせよ、マジスターには関わらない方がいい」

せつかく少し楽しくなってきた日常がアルヴアの一言で暗いものになってしまい、葵は無言で頷いたのだった。

カノン（1）

分厚い魔法書を胸に抱えながらトリニスタン魔法学園の敷地内を歩いてきた宮島葵はふと、弦楽器の音色を聞いたような気がして足を止めた。冬月期の最終月である秘色ひしやくの月にしては珍しく空は晴れ渡っているが、外気は肌を刺すように冷たい。そんな凍てついた空気に溶け込むかのように響いている音色は葵の耳に美しさと儂さを伴って届いた。

（バイオリンかな？ キレイな音色）

弦楽器の音色に誘われた葵はフラフラと、敷地の外れにひっそりと佇む建物群を目指した。

トリニスタン魔法学園の校舎は敷地の中央にあり、校舎の南にはグラウンドが広がっている。正門は校舎の西側にあり、そのためエントランスホールも校舎の西方に設置されていた。一般の生徒は正門付近に描かれている魔法陣を使って登下校しているが、転移魔法が使えない葵は彼らがほとんど近寄ることのない北の裏門を利用している。そして今、葵が歩いているのは校舎の東側に佇む謎の建物群の辺りだった。

校舎から東へ歩いて行くと、まず全面ガラス張りのドームのような建造物がある。ドームの内部には冬の時分でも色とりどりの花が咲き乱れているので温室になっているらしいのだが、葵はその建物の中に人影を見たことはなかった。ドームの脇を素通りした葵が目指しているのは、ドームよりもさらに北の辺鄙な場所に佇む時計塔のような建物である。この世界には時計が存在しないのに何故葵が時計塔だと思ったのかというと、それは塔の上部に円形の空白があり、その部分に時計を嵌めこめば時計塔にしか見えない外観をしているからだった。

葵がいた世界では時計は普遍的なものだった。目覚まし時計から腕時計に至るまで様々な場面で触れてきた時計の存在は思いのほか

大きく、葵はこの時計塔を発見してからというもの、密かに気に入りの場所としていたのである。だがバイオリンのような音色を聞いたのは今日が始めてのことだった。

塔の真下まで歩いて来た葵は快晴の空を仰いだ。バイオリンのような音色は塔の上方にある、円形の空白から流れ出でているようである。誰が弾いているのか興味を覚えた葵は塔の内部に入れないかと周囲を窺ってみた。すると裏手に扉があり、取っ手を回して引くと扉は簡単に開いた。

(そつえば、カギがかかっている所って保健室くらいだな)

保健室に入室するには何故か鍵が必要なのだが、葵はそれ以外の場所で鍵を必要とする場面に出会ったことがなかった。貸し与えられている屋敷には扉はもちろんのこと窓にも鍵がない。葵は防犯意識の高い現代人なので、最初の頃はそういった環境を不安に思ったものだった。

(もう、慣れたけどね)

さすがに一ヶ月も経てば、新しい環境にも馴染んでくる。そのことを若干悲しいと感じながら、葵は塔の内部に足を踏み入れた。

扉を閉めると塔の内部は暗闇に近い状態になった。上の方から微かに光が注いでいるが、青空の下で慣らされた葵の目には焼け石に水である。周囲に何があるかも分からなかったので一步を踏み出すことも出来なかった葵は呪文を口にした。

「アン・リュミエール」

短い詠唱が終わると葵の掌の上に光球が出現する。周囲の状況を把握できるようになって初めて、葵は塔の内部が吹き抜けになっていることを知った。

(こついう時、魔法って便利だよな)

もつとも、光球を生み出しているのは葵自身ではなくアルヴアの手力ではあるのだが。葵はアルヴアに感謝をしつつ、塔の中央部にある螺旋階段を上り始めた。

螺旋階段を上って行くと、上部から差し込んでいた光の正体が分

かった。階段下から見ると天井であつた部分が二階部分の床になつていたらしく、出入り口となる部分から光が漏れていたのだ。二階部分へ出ると、時計が嵌まりそうな丸い空白から外の光が差し込んでいた。風が吹いているところを見ると、空白の部分は窓ではなくただの穴のようだ。

(寒い……)

閉塞された一階部分が暖かかっただけに、二階へ出た葵は身震いをした。すでに弦楽器の音色もやんでいて、室内には誰の姿もない。塔の内部へ侵入した時は確かに聞こえていたので、不思議に思った葵は周囲を窺った。階下へ下りる階段のようなものは葵が上つてきたものの他には見当たらない。だが葵は、途中で誰ともすれ違つていなかった。

(あ、そっか……魔法があるんだっけ)

階段など使わずとも、この世界の者にはいくらでも移動手段があるのだ。自分が転移魔法を使えないためにそのことを失念していた葵はふっと、苦い笑みを浮かべた。

(帰りたくないなあ)

一人になると途端に、その思いは押し寄せてくる。壁に背を預けて座り込んだ葵は魔法書と一緒に膝を抱えた。

元いた世界での最後の記憶は、今にも雨が降り出しそうな曇天と湿気をたっぷり含んだ湿った風のおいである。あれから一ヶ月経つた今頃は梅雨もあけていて、そろそろ夏休みに入っているはずだ。こんなことにならなければ好きな本を読んで、加藤大輝が出演するドラマをチェックして、音楽を聴いて、長い休みを有意義に過ごせていただろう。

(あー、弥也と映画見に行く約束もしてたなあ。空手の試合も応援に行くつて言ったのに)

この世界には映画館もなく、空手という格闘技も存在しない。何より、弥也がいないのだ。腐れ縁だからと気楽に付き合ってきた友人の存在が事のほか大きいものだったことに気がつき、葵は泣きた

くなくなった。

「帰りたいよお」

「どこへ？」

独り言になると覚悟して声を出した葵は反応が返ってきたことに驚いて顔を上げた。しかし視界が霞んでいて、よく見えない。慌てて涙を拭いた後、葵は改めて周囲を見回した。

(あつ……)

声を掛けてきたと思われる人物を発見した時、葵は息が止まりそうになった。少し離れた場所に、いつの間にか私服姿の少年が出現している。長身のその少年は栗色の髪にブラウンの瞳をした、エントランスホールですれ違った芸能人のような男の子だった。

少年が無言のままなので、質問を投げかけられていたことを思い出した葵はハツとした。しかし彼の問いかけに対して、返すべき言葉は見当たらない。葵が口を開けずにいると、少年の方が再び口火を切った。

「帰りたいなら帰れば？」

「……そう、出来ればね」

とつくに帰ってるよと、苦笑いを浮かべた葵は胸中で呟いた。それからあることに気がつき、再びハツとする。

(しまったあ、フツウに喋っちゃったよ)

校内では丁寧な言葉遣いをするとアルヴァに注意されていたのに、ついにボロが出てしまった。しかし葵が恐る恐る顔色を窺っても、少年からのリアクションはない。恐ろしく心情の読めない無表情をしている少年に、葵は遠慮がちに声をかけた。

「あの……制服を着ていらっしやいませんか、学生の方ですか？」

葵の言葉遣いが激変したからなのか、少年は小首を傾げた。もうフォローのしようがないと思った葵は開き直すことにして、短くため息を吐く。

「あの、お願いがあるんだけど」

「何？」

「ここで見たこと、誰にも言わないで？」

「ここで見たこと？」

「えっと、つまり、その……私がネコかぶってるってこと」

自分からこんなことを言い出すのは何だか嫌だと思いつながらも背に腹はかえられなかつたので、葵はすっぱりと言い切った。少年は分かつたのか分かつていないのか、非常に判別のしづらい態度で無言を貫いている。頷いてさえくれなかつたので不安に思った葵が念を押すと、彼は呆れたような表情をした。

「そんなこと言って何になる？」

「……確かに」

葵がネコをかぶっていようがないかろうが、それは初対面に近い他人である彼には無関係な話だ。そう感じた葵が思わず頷いてしまふと少年はおかしそうに笑った。

「あんだ、変な奴だな」

それまで無愛想だつた少年が見せた突然の笑顔に、葵の目は釘付けになってしまった。少年は無表情だと冷たい印象を抱かせるが、笑うと可愛い。ときめいてしまった葵は激しく脈打っている鼓動を正常に戻そうと躍りになった。

(お、落ち着いて。何でもないことなんだから)

彼はただ、笑っただけである。その程度のこと動揺していられないと自分に言い聞かせ、葵は自分から話を振った。

「ここで何してるの？」

「別に、何も。あんだこそ、何でこんな所にいるんだ？」

「私は、音楽が聞こえてきたから……」

そこまで言葉を紡いで、葵はふと音色の主は彼なのではないかと思いついた。この搭は辺鄙な場所に佇んでいて、好んで訪れる者が多いとは思えない。

「ねえ、さっきバイオリン弾いてた？」

葵が急いで口にした問いに少年は答えなかつたが、否定もしなかつた。彼があまりに表情を動かさないので黙している真意は分から

ないが、葵はあることに思い至ってハツとする。もしかしたらこの世界には『バイオリン』という楽器自体が存在しないかもしれないのだ。

「あ、変なこと聞いてごめん。もう行くね」

まずいことを口走ったと思った葵は素早く立ち上がり、一方的に別れを告げて階段へ向かう。少年が葵を追いかけるようなこともなく、彼らはそのまま何事もなく別れたのだった。

カノン(2)

「ミヤジマさん」

窓際の自席からぼんやりと外を眺めていた葵は呼び声で我に返った。ポーツとしているうちに授業は終わっていたらしく、いつの間にか教室内には歓談の音が溢れている。声をかけてきたのはココと、いつも彼女の両脇に控えている少女二人だった。

「どうかなさいまして？」

心配そうな表情を作って尋ねてきた少女の名は、サリーという。

時計塔で再会した少年のことを考えていた葵は小さく首を振り、何でもないことを告げた。

「少し、ぼんやりしてしまっただようです」

「そうですね。お体がお悪いのではなくて安心いたしました」

サリーが微笑んだので葵もつられて笑みを浮かべた。その笑みはわずかに引きつっていたが、サリー達に違和感を覚えさせるほどではなかったらしい。今日はどこへも寄らずに帰ろうと思った葵は開きっぱなしになっていた魔法書を閉じ、小脇に抱えて立ち上がった。しかし葵が別れの言葉を口にするよりも先にココが口火を切る。

「ミヤジマさん、こちらへいらして」

ココは楽しげに葵を促すと、くるりと踵を返した。首を傾げている葵の背を、半ば強引にシルヴィアという名の少女が押す。サリーやシルヴィアと並んで教室を後にした葵は、ココがすでに廊下を歩き出していたので小さく眉根を寄せた。

「何かあったのですか？」

不審がつている葵をよそに、サリーとシルヴィアは楽しそうな含み笑いを浮かべて見せる。

「ココさんがとても良い物を入手なさいましたの」

「是非、ミヤジマさんにも見ていただきたいわ」

二人の発言は謎を募らせただけであり、葵は訳が分からないまま

に先を行くココの背を追った。

二階の片隅にある二年A一組の教室を出た葵達が出た葵達が辿り着いたのは、校舎の四階にある一室だった。トリニスタン魔法学園の生徒は授業が終わればすぐに下校するので、彼女達はその流れに逆らったことになる。四階には一般の教室がないのもともと人気はないのだが、最後に入って来たシルヴィアが過剰なほど慎重に辺りを窺ってから扉を閉ざしたので葵はますます疑念を募らせた。

「あの……このお部屋はどういった……」

葵達がいる部屋には机も椅子もブラックボードもない。ただ床に大きな魔法陣が描かれていて、それが殺風景な眺めを異様なものに変えていた。その独特な雰囲気の不気味さを感じた葵が遠慮がちに問いを口にする、ココ達はいつせいに首を傾げる。

「ミヤジマさんはご存知ないの？ このお部屋に描かれている魔法陣は魔法の発動を佑げるためのものですよ」

知らないことが意外だとも言うようなシルヴィアの口調に、葵は金輪際余計な口出しをするのはやめようと思った。おそらく魔法陣の効用など、この学園の生徒にとっては一般常識なのだ。

葵はまずいことを口走ったかもしれないと警戒を強めたが、ココ達はすぐに葵から視線を外した。彼女達の興味は別のところであり、今は葵の反応など眼中にないようである。言及されなかったことにホッとした後、葵もココの動作に注目した。

「アン・デスクリプション」

無属性魔法を発動させる呪文を口にした後、ココは手にしていたペンを手放した。空中に放り出されたペンは自らの意思で動き、何かを描き始める。略図や文字とは違い、それはとても時間のかかる作業だった。何本もの線はやがて形になっていき、徐々に浮かび上がってきた光景に葵は目を見張る。

（写真……？）

光を放つペンが空中に描き出したものは写真と見間違っただけで完成された図画であった。単色ではなく幾つもの色を使っているので、

デッサンというよりはまさしく写真である。被写体は四人の少年であり、全員が整った顔立ちをしているのでさながらブロマイドのようだった。

「マジスターの方々ですわ」

シルヴィアとサリーが嬌声を上げている横で、ココが自慢げに言った。描かれているのがマジスターだと知った葵はまじまじと絵に目を凝らす。

（これが、マジスター）

女生徒全員を虜にしてしまうのも頷けるほど、マジスターは美形ぞろいだった。芸能人の写真を見ているような感覚を覚えていた葵は、絵の中に知った顔があったのでギョツとする。葵の胸中など知らないココは、未だマジスターを目の当たりにしたことのない葵のために得意げに説明を始めた。

「こちらの、赤い髪をなさっている方がウイル様ですわ」

まず初めに、ココは向かって一番左に描かれている赤い髪をした少年を指した。ウイルは四人の中で一番の女顔であり、体格が華奢なことも手伝って、スカートを履いていたら女の子と間違えられそうな美少年である。彼は顔に似合わず毒舌なところがあり、またお茶目なのがステキだとシルヴィアがうっとりしながら言った。

「こちらの、茶髪のお方がオリヴァー様」

ココは次に、ウイルの右隣にいる長髪の少年を指した。スポーツマンタイプの体格をしているオリヴァーは肩幅が広く、ラフな服装がよく似合う。開襟のシャツから覗く鎖骨がセクシーだと、サリーが興奮気味にわめきたてた。

「そして、こちらのお方がキリル様ですわ」

ココは次に、オリヴァーの右隣にいる黒髪の少年を指した。切れ長の目がクールな印象を与えるキリルはふてぶてしい表情で描かれている。葵はワガママなタイプだと直感したが、ココは熱に浮かされたような声を上げた。どうやら彼が、ココのお気に入りの方である。

「キリル様のお隣にいらつしやる方がハル様。皆様はとても仲がよろしいのよ」

ココの説明に一応耳だけ傾けながら、葵はハルという名の少年に意識を集中した。右端に描かれているハルは栗色の髪をしている少年で、全体的に短い髪型をしているので整った顔立ちが強調されている。他の三人はじゃれあっているのか笑っているが、ハルだけは無表情のまま、彼のブラウンの瞳はどこか遠くを見つめているようだった。

（あの人……マジスターだったんだ）

マジスターは全員制服であるローブを着ておらず、彼らの間ではそれが普通のことなのである。そういえばエントランスホールで見かけた時も私服だったなと納得すると同時に、葵は一抹の不安を抱えた。ハルは、葵がネコをかぶっていることを知っている。黙っていてくれそうな雰囲気ではあったが、確約したわけではないのだ。彼がそのことを誰かに話してしまえば、葵は今の上ままだはいられないことになるだろう。もっとも、そのことがバレるとどうなるのか、葵には想像が及ばなかったのだが。

「ミヤジマさんはハル様がタイプですか？」

葵があまりにもハルばかりを見ていたので、ココから指摘が飛んできた。空中に描かれた絵から視線を外した葵は曖昧に頷いて見せる。すると葵を同士だと思っただけでなく、ココ達は満面の笑みを浮かべた。

「ハル様はバイオリンがお上手なんですよ。優美でステキですね」

「とても繊細なお方なので、おこがましいかもしれませんが守ってさしあげたくりますわ」

「そのお気持ち、分かります」

頬に手を当ててうつとりしているココ達とは裏腹に葵は複雑な思いで再び絵を見つめた。

（バイオリン、この世界にもあるんだ）

話に通じていたのであれば、あのととき彼が答えなかったのは答え
たくなかったからなのだろう。無言であしらわれたことを知ってし
まった時、葵の胸は少しだけ痛んだ。

適当に理由をつけてココ達と別れた後、葵は辺鄙な場所にひっそ
りと佇む時計塔を訪れた。するとちょうどバイオリンの音色が聞こ
えてきたので、密かに内部へ侵入する。暗い頭上から差し込む一陣
の光を見上げた後、葵は魔法で明かりを灯してから螺旋階段を上り
始めた。

(……マジスター、かあ)

芸能人のような美少年でも、葵にとってマジスターは鬼門である。
この階段を上りきればハルがいるはずだが、葵は上りきる直前で足
を止めた。明かりを消した暗がり階段に座り込み、頭上から流れ
てくるバイオリンの音に耳を澄ます。幽玄の調は今日も、儂い美し
さを帯びていた。

(せっかく、飾らない人に出会えたと思ったのに)

不測の事態だったとはいえ、ハルは葵が唯一素の自分を晒して喋
れる相手だった。隠し事をしているためボロが出ないかと心配する
気持ちもあつたが、それ以上にハルが飾らないでいてくれたことが
嬉しかったのだ。

(もう、話しかけるのはやめよう。でも、ここで聞いてくるくらいな
らいいよね?)

バイオリンは葵がいた世界にも存在する。ここは見慣れぬ物ばか
りの異世界だが、バイオリンの奏でる音色は生まれ育った世界と変
わらない。葵は感傷的な気持ちになりながら、ハルの演奏が終わる
まで耳を澄まし続けていた。

カノン(3)

今にも雪が降り出しそうな秘色ひやくの月の空を仰ぎ、葵はため息を白く上空へ上らせた。肌を刺すような冷たい外気に晒されながら彼女が佇んでいる場所は、トリニスタン魔法学園の敷地内の東北端にある塔の真下である。時計を嵌めこんだらピタリと合いそうな空洞からは今日もバイオリンの音色が流れ出していて、塔の内部にハル〃ヒューイットがいることを証明していた。

(ダメだって分かってても、来ちゃうんだよね)

ハルがこの塔でバイオリンを弾いているのは、放課後や早朝よりも授業中のことの方が多い。そのことを知ってしまったからというもの葵はたびたび授業をさぼるようになり、こうして人目を忍んでこの場所へ通うのが日課になりつつあった。しかしハル〃ヒューイットがマジスターの一員であると知って以来、葵は彼に声をかけていない。会話をしたのはたった一度、それもごく短い時間である。それでも葵がこの場所へ通ってしまうのは、元いた世界とこの世界を繋ぐ音色を聞いていたいからだだった。

(だって、他にながりを感ぜられるものってないし)

二月の浮かぶこの世界にもバイオリンという楽器が存在していることは判明したが、未だにハル以外の者が弾いている姿を目にしたことはない。そうして理由をつけてみてもアルヴァの言いつけに背いているという後ろめたい気持ちや完全に拭い去ることが出来ず、どう思えばいいのかすら分からなくなってしまった葵は開き直ってふんぞり返った。

(大体、何で私が肩身の狭い思いをしなくちゃいけないわけ?)

葵はれっきとした被害者である。だがこの世界は被害者に対して冷たすぎる。何故自由が認められないのかと憤った葵はアルヴァに気を遣っている自分をバカらしく感じてしまい、鼻息も荒く塔に向かって歩き出した。

「授業中ですよ」

「うわあー!!」

背後から突然かかった声に驚いた葵は振り向きざまに倒れてしまった。すぐに起き上がるうとしたのだが、新雪に尻がはまって抜け出せない。仕方なく、葵は間の抜けた姿のまま目前にあるスラリと伸びた足の持ち主を見上げた。

「アル……」

この学園で唯一葵の秘密を知っている彼は、葵が今一番会いたくなかった人物だった。いつものように白衣姿のアルヴアは特に表情を変えるでもなく葵を見下ろしている。

「大丈夫ですか、ミヤジマ?」

心配しているかのような科白を吐いておきながら、アルヴアの口調は平静そのものだった。さらには突っ立っているだけで手を差し伸べようとしてもしない彼の態度は実はまったく心配などしていないと体現しているようなものであり、腹が立った葵は八つ当たり気味に声を荒らげる。

「大丈夫じゃない! 起こしてよ!」

「はいはい」

葵が伸ばした腕を掴み、アルヴアは軽々と彼女を引っ張り上げた。立ち上がった葵は新雪まみれになったロープをはためかせ、雪を落とす。葵がそうしている間に、アルヴアは彼女がつくった窪みに目を落とした。

「それにしても、お尻だけが雪にはまるとは余程……」

「重いつて言いたいのか?」

「いえいえ、滅相もない。ただ、器用な転び方をなさると思っただけです」

アルヴアは女好きのする極上の笑みを浮かべ、さらりと毒を吐いた。これが授業をさぼったツケなのかと、真っ向から嫌味を言われた葵は嘆息する。アルヴアに対しては後ろめたい気持ちもあったので、葵は気まずさを感じながら本題を切り出した。

「何でここが分かったの？」

「ミヤジマの嵌めている指輪リングには僕の魔力がこめられていますから、不意にリングが話題に上ったので葵はとっさに右手を持ち上げ、アクロアイトの指輪に視線を注いだ。つまりはこの指輪がリーダー代わりというわけなのだ。」

「監視されてるみたいでやだ。外す！」

「そのリングを外すと魔法が使えなくなるということをお忘れなく」

「あ、そ、そうだった……」

このところクラスメートと出かけることを控えていたので魔力を補充してもらった機会もなく、葵は指輪の効能を失念していた。指輪の力だけでは不十分だが、この世界では何をすることも魔法が必要なのである。そのことをすでに体験として知っている葵は唸ることしか出来なかった。

「それと、ミヤジマ。言葉遣いが乱れていますよ」

「うっ……はい、分かりましたわ」

完膚なきまでに叩きのめされた葵は肩を落としてアルヴァの言いつけに従った。葵がしょげたのを見て、アルヴァはつと彼女の手を取る。

「では、行きましようか」

有無を言わせぬ調子で告げた後、アルヴァは『アン・ルヴィヤン』と呪文を紡いだ。この呪文は帰還を意味するもので、特定の魔法陣が描かれている場所へ戻ることが出来る。アルヴァの場合、それは簡易なベッドが並ぶ保健室風の部屋だった。

いつもの場所へ移動するとすぐ、アルヴァはきつちり締めていたネクタイを緩めた。拘束されていた手が解放されたので葵はアルヴァから離れ、ベッドに腰を下ろす。シャツの裾を中途半端に引っ張り出したアルヴァはどっかりと椅子に腰掛け、長い脚をこれ見よがしに組みながら葵に視線を向けた。

「で、あんな所で何をしていたんだ？」

アルヴァからさっそく本題を投げかけられた葵は答えに窮して視

線を泳がせた。葵に話しかけながら引き出しをあさっていたアルヴァは煙草を一本取り出し、まだ火をつけていないそれを葵に向ける。「ミヤジマ、嘘をつこうとしているね？」

「そんなつもりは……」

「ないなら、何で口実を考える？」

口実を考えていたことまで見透かされているのなら、いくら否定しても説得力がない。そう思った葵は苦い表情をし、素直に本当のことを話すことにした。

「あの塔でハルって男の子がバイオリンを弾いてるの。それを聞きに行つてただけ」

「ハルって、ハル＝ヒューイット？ マジスターじゃないか」

「知らなかったんだから仕方ないじゃん。でも、話をしたのは一度きりだよ」

アルヴァが呆れた顔をしたので葵は必死になつてハルと出会った時の状況を説明した。アルヴァは眉根を寄せ、無言のまま話を聞いている。それは葵が苦しい弁解を終えてからも変わりなかった。

「会わない方がいいと解っているのに通つてしまふなんて、恋してるみたいだね」

「違つ……！ 何でそうなるの!？」

「普通、そうなるだろう？ それにムキになつてるところも怪しい」
火をつけた煙草の代わりに今度は指を突きつけられ、葵は返す言葉を失った。確かに、ムキになっているのは怪しい。自分でもそう感じた葵は深呼吸をし、アルヴァのペースに乗せられないよう慎重に言葉を探した。

「私がハルの所に通つちゃうのは、帰りたいからだよ」

「……何故そうなる？」

「だってバイオリンを弾いてるの、彼くらいしか知らない」

葵がバイオリンという楽器に対する思い入れを語るとアルヴァは再び眉根を寄せた。しばし間があった後、アルヴァは小さく首を振ってみせる。

「なるほどね。ホームシックというやつか」

「フツウ、そうなるよ。何もかもが違う世界にいきなり連れて来られたら」

さっきの仕返しとばかりに葵が嫌味を言うと、アルヴァはさりげなくそっぽを向いた。この様子では、未だレイチエルからの連絡はないのだろう。そう感じた葵が失意のため息をつくとき、アルヴァもまた息を吐いた。

「僕が弾いてあげるよと言いたいところだけど、生憎バイオリンは習ってなかったんだよね」

「いいよ、別に。期待してないから」

「でも、ミヤジマ。マジスターと接点を持つのは本当にやめた方がいい」

「分かってる。私だってイジメになんかあいたくないもん」

「そう思うのなら校舎の東へは行かない方がいいよ。全面ガラス張りの建物を見ただろう？ あの前はマジスターの領域なんだ」

校舎の東にあるドーム周辺でハル以外の人影を目撃したことがないのにはそうした事情があったのかと、葵は一人で納得した。学園内に一般人を排除した空間を所有するなど、まるでVIP扱いである。

「マジスターってすごいんだね」

独白した後、葵は「色んな意味で」と胸中で呟いた。心の呟きまで聞こえてしまったのかアルヴァは苦笑いを浮かべている。

「まあ、マジスターの称号は権力の証だからね。彼らは暇と金と力を持って余してるんだよ」

「なんか、セレブな芸能人って感じ」

葵が発した不必要な一言に、アルヴァが目を輝かせた。しまったと思ってももう遅く、アルヴァは席を立って葵に詰め寄る。

「せれぶ？ ゲイノジン？ 何を意味する言葉なんだ？」

知識欲に駆られたアルヴァは見境なく、葵に質問を投げかけた。こうなってしまうえば彼の気が済むまで質問に答え続けなければなら

ない。今までにも幾度か経験しているだけに、葵は彼の質問に答え続ける苦勞を知っていた。

（あーあ、やっちゃったよ）

すでにげんなりしてしまった葵は人知れずため息をつき、嫌々ながらもアルヴアの質問に一つずつ答えていったのだった。

カノン(4)

まだ太陽が昇ってからそう時間も経っていない冬の朝、葵は校門に片手をつけて肩で荒い呼吸をしていた。凍てつく空気が呼吸を白くさせていたが厚手のケープに隠されている葵の体は薄っすらと汗ばんでさえいる。彼女がこの状態なのはトリニスタン魔法学園に編入してから毎朝のことであり、すでに校門で小休止が朝の日課となっていた。

夜、一人では何もすることのない葵は早々に床へつく。そうすると大抵、夜明け頃に目を覚ますのだ。そして授業に遅刻しないように屋敷を出て、丘の上に建つ学園を徒歩で目指す。この丘が小山と言っていていいほどの代物であり、葵の体力を激しく奪っていくのだ。

(そろそろ慣れてもいい頃なのに)

軽い雪山登山のようなことを毎日繰り返していれば体力がついてもおかしくない。だが葵の体はまだ登校に順応していなかった。運動は苦手じゃないはずなのに、葵は呼吸を整えながら胸中でぼやく。小脇に抱えている分厚い魔法書が今日はまた、一段と重く感じられた。

最後の深呼吸をした後、葵は気合を入れて顔を上げた。この門から一歩でも中に入れば、そこはさながら戦場である。そうした心積もりも出来たので一歩を踏み出した葵は前方に人影を見つけてギョツとした。

葵が現在いる場所はトリニスタン魔法学園の裏門にあたる。一般の生徒は正門にある魔法陣を使って登下校しているので、裏門を使う者など皆無なのだ。そのため今まで誰にも出会ったことがなかったのだが、今日は四つの人影が葵の前を歩いている。彼らがつけたと思われる足跡は裏門から校舎に向かって一直線に伸びていた。しかし葵が驚いたのは、そこではない。前に行く四人の後ろ姿が全員

私服だったからだ。

(マジスターだ……)

教師でさえローブに身を包んでいるトリニスタン魔法学園において堂々と私服を着ているのは彼らくらいなものである。こちらに背を向けているので顔は見えないが、遠目に見える四人の髪形からも葵は間違いないと確信した。後ろ姿だけであっても、マジスターが四人揃うとカラフルである。

(何でこんなところ歩いてるんだろう)

今まで見かけたことがなかっただけに葵は不気味に感じた。しかし考えていても答えは見付からないので早々に思考を切り上げ、彼らの姿が完全に見えなくなつてから校舎の方へと歩き出す。葵はその後も周囲に気を配りながら二階にある二年A一組の教室に向かった。

その日、普段ならばまだ人気のないはずの校内はすでに生徒で溢れかえっていた。おかしいとおかしいと思いつながら自分の教室へ辿り着いた葵は、教室のドアを開けたところで立ち尽くす。二年A一組の教室内も例に漏れず生徒で溢れており、その騒ぎようはお祭りムードと言つてもおかしくないほどのものだった。

「ミヤジマさん」

教室へ入ることも出来ずに動きを止めていた葵を見つけてココが走り寄つて来た。彼女の顔を認識した刹那、葵の中でスイッチが切り替わる。お嬢様ぶつた葵はココに友好的な作り笑いを向けた。

「おはようございます、ココさん」

「聞きまして？」

朝の挨拶もそこそこに、ココは興奮した様子で話を切り出した。突然『聞きまして?』と言われても、葵には何が何だか分からない。その様子から葵が何も知らないと察したらしく、ココは早口で捲くし立てた。

「マジスターの皆様がゲームを主催されましたの。校内はその話題で持ちきりですわ」

「ゲーム、ですか？」

眉をひそめそうになった葵は慌てて無表情を取り繕った。しかし葵の様子など眼中にないようで、ココは話を進める。ココの話によれば、ゲームの勝者にはマジスターから褒賞が与えられることだった。それは何も物に限った話ではなく、彼らが願いを叶えてくれると言っているのである。

「ココさんは何か、マジスターにお願いしたいことがあるのですか？」

「ミヤジマさん、貴方って何も解っていらっしやらないのね。このゲームに勝てばマジスターの方々とお付き合いすることだって可能かもしれませんわ」

熱のこもったココの言葉を聞いた葵は密かに納得した。それは、この学園に通う女生徒にとっては何よりの褒美となるだろう。

「ミヤジマさんも参加なさるの？」

顔は笑っているのだが、ココの目つきが急に鋭くなった。ライバルを減らそうとしているのか、彼女からは威圧するような空気が放出されている。とても着いて行けないと思った葵は迷うことなく首を振った。

「そうですね。では、わたくしが勝者となるよう応援してくださいね」

威圧感を消したココはニッコリと笑ったままそう言った。葵は引きつりそうになる頬を何とか宥め、ココの笑顔に応える。ライバルではないので気を許したのか、ココはゲームの内容についても説明してくれた。

マジスター主催のゲームは、基本的には全校生徒参加型である。勝者は一人であり、男女の優劣が生じないために魔法のみを使って戦う。それも個人戦ではなく学園全体を使ったサバイバルゲームだと聞かされた葵は参加しなくて良かったと心から思った。

「では、頑張ってくださいませ」

ココに儀礼的な言葉を投げた後、葵はそそくさと教室を後にした。

すでに生徒の大多数がこのゲームのことを知っているようで、廊下ではすでに前哨戦が始まっている。校舎全体からぴりぴりとした空気が漂う中、葵は安全な場所を求めて彷徨った。

（今日は授業もないっていうし、どうしよう。帰ろうかな）

それとも、アルヴァの元へ避難するべきか。葵がそこまで考えた時、トリニスタン魔法学園の校内には始業を告げる鐘が鳴り響いた。平素は授業開始の合図だが、今日の鐘は戦闘開始の合図である。校舎を揺さぶるように上がった歓声に、葵はそう悟った。

一階の北辺にある保健室へ向かおうと思っていた葵は、その方角に数人の集団がいることに気がついて足を止めた。葵が目を向けた次の瞬間、生徒達は一斉に魔法を発動させる。校舎内だというのに火柱が上がり、竜巻が発生し、降り積もった雪が窓を割って雪崩れこんできた。直感的に死ぬと思った葵は急いで踵を返し、校舎の外に向かって走り出す。

（あ、有り得ない）

驚きで思考が停止してしまった葵は同じ言葉を何度も繰り返しながらひたすら足を動かした。何処をどう走ったのかも覚えていないほど夢中だったのだが、気がつけば静寂の中に身を置いている。前方には時計塔がひっそりと佇んでいた。

（あそこなら……）

この辺りはマジスターの領域であり、一般の生徒は近寄らない。いくらマジスター主催のゲームとはいえ被害がここまで及ぶとは考えにくかったので、葵は塔の内部に身を潜めることにした。塔の周辺は今日も人気がない。静寂を保っていたのは塔の内部も同じであった。

暗がりでも塔の上方を見上げた葵は少し迷った末、バイオリンの音が聞こえないので上の部屋へ行くことにした。指輪の力を借りて小さな明かりを生じさせ、螺旋階段を上る。そうして二階部分へ辿り着いた葵は周囲を窺ってギョツとした。

「またあんた？」

壁に背を預けて足を投げ出している少年が、葵を見て言う。空洞から差し込む光に照らされた栗色の髪、無気力なブラウンの瞳……そこにいたのは紛れもなくハル。ヒューイットだった。

「ここはゲームの舞台じゃないよ」

ハルの姿を見つけて硬直していた葵は彼の素っ気ない一言で我に返った。返事を待っているのか、ハルはじつと葵を見上げている。

いつもの癖で丁寧な言葉遣いをした葵はこの相手にはそんな必要もないことを思い出し、素の口調で言い直した。

「参加してないから」

「ふうん。何で？」

「あんなゲーム、バカみたい。それに私の願いはマジスターにも叶えられないと思う」

「俺たちなら大抵の願い事は叶えられると思うけど？」

「……それでも、たぶん無理だよ」

元の世界へ帰りたいという願いがマジスターに叶えられるものならば、葵が今この場所にいることもないだろう。ハルとこんな話をすることもなく、今頃は夏休みを満喫しているはずなのだ。

「金や権力じゃ叶えられない願い、か。俺と同じだな」

葵から視線を逸らしたハルは皮肉げに口元を歪めながら独白を零す。大抵のことなら叶えられると言っていた者がそのような発言をすることに葵は驚きを隠せなかった。

「ハルにも何か、そういう願い事があるの？」

葵が問いを口にするるとハルは笑みを消し、再び視線を傾けてきた。無表情には違いないのだが彼の端正な顔が少し、歪んでいるような気がする。その表情が何を意味しているのか解らなかった葵は焦りを覚えた。

「名乗った覚え、ないんだけど」

「……この学園の生徒なら誰でも知ってるよ」

不機嫌の原因はそんなことかと思った葵は顔には出さずにホッとした。しかし呼び捨てにしたのはまずかったと思い、ハルに向かっ

て頭を下げる。

「いきなり呼び捨てにしてごめんね。私、もう行くから」

本音ではハルともっと話がしたいと思っていたが葵は踵を返した。例え他人の目がなくとも、マジスターは深入りしてはならない相手である。そういう人は遠目から見ているだけでいいと自分に言い聞かせ、葵は暗い階段を下り始めた。

カノン(5)

窓の外を暖色に染めている日射しが広い室内をゆっくりと暖め始める冬の朝、葵はキングサイズのベッドの中で枕を抱えて寝入っていた。冬の朝には特有の静謐があるのだが、そのことを抜きにしても、葵が貸し与えられているこの屋敷では太陽が上つても動き出す者はいない。そんな耳が痛くなるほどの静寂も届かない世界で、葵は束の間の夢を見ていた。

目前に、サラサラの黒髪をした同年代の少年が佇んでいる。彼は葵の周囲にいる男子とは比べ物にならないほど垢抜けていて、近寄り難い雰囲気をもつ美少年だった。その少年の名は、加藤大輝。中学生の頃から葵がはまり続けている芸能人だ。彼は葵の抱いているイメージを崩すことなく冷然と佇んでいた。

加藤大輝にはまりたての頃、葵は寝ても覚めても彼のことがかり考えていた。彼が出てくる番組や雑誌は全てと言っていいほどチェックしていて、深夜に流れる短いラジオ番組も欠かさず聴くほど好きだったのだ。その当時に比べれば彼を好きな気持ちも落ち着いてきていたが、実物を目の前にすれば興奮を隠し切れない。鼓動が早すぎて苦しくなってしまう胸の前で、葵は手を組んだ。

せつかく本物に会えたんだから何か話さなくちゃ

そうして焦れば焦るほど頭は真っ白になっていく。話をしたいのに、顔を見たいのに、距離が近すぎて顔を上げられない。締め付けられている胸が痛い。

意を決して顔を上げた葵は、ついさっきまで目前にいたはずの加藤大輝が消えていたのであ然とした。今でも一番好きな芸能人に代わって葵の前にいるのは、昨日言葉を交わしたばかりの相手。だが彼も、芸能人であってもおかしくないほどの人物だった。

陽光に照らされて透けるように輝いている栗色の髪。座り込んで片膝を抱えている彼のブラウンの瞳はどこか遠くへ向けられている。その彼が立ち尽くす葵に目を留めて、ゆっくりと口唇を開いた。

『またあんた？』

迷惑そうでありながら、実は彼の言葉にはどのような感情も含まれていない。ただ思ったことを口にした、それだけのような感じである。彼は無表情のまま葵が口を開くのを待っていたが、やがて声を上げて笑った。

『あんた、変な奴だな』

無表情の時は冷たい印象を受けるが、笑顔は極上である。クラクラしてしまった葵は夢の中で頭を抱えた。加藤大輝を目前した時のように、頭に血が上っていく。そこで、葵は目を覚ました。

「……何なの」

外気は凍りつくほどの冷たさだというのに葵は嫌な汗をかいていた。まだ夢の余韻が残っている胸はもやもやしていて、独白も虚しく静寂に消えていく。上体を起こした葵はヘッドボードに背を預け、ぼんやりと天井を見つめた。

（なんて夢、みてんのよ……）

加藤大輝が出てきたまでは、いい。問題はその後である。マジスターであるハル「ヒューイット」をどうして夢にまで登場させなければならぬのか。そう思った時、葵は自分の神経を疑った。

『会わない方がいいと解っているのに通ってしまうなんて、恋してるみたいだね』

不意に、アルヴアの科白が脳裏をよぎる。葵は慌てて頭を振り、

寝起きの朦朧を振り払った。

(恋なんてしてない)

ハルに対して抱いている感情が複雑なのは、郷愁と憧れがない交ぜになっているからだ。そんな自分の考えが言い訳じみていたので葵は体を丸めながら大きなため息をついた。

「せめて、憧れるくらいは許してよ」

人それぞれに好みはあるだろうが、ハルのような少年を前にして何の感情も抱かないでいることは難しい。自分の置かれている立場と相反する感情の間で板ばさみになった葵は現実でも頭を抱えてしまった。

「誰かに憧れているのですか」

「っ、ぎゃあ!!」

誰もいないはずの室内に突如として声が生まれたので、驚いた葵はベッドの上で後ずさった。だが彼女はもともとヘッドボードに背を預けていたため、肘を強打して悶え苦しむ。痺れがある程度ひいて痛みが強くなってきた頃、葵は聞き覚えのある声の主を睨み付けた。

「アル!!」

「おはようございます、ミヤジマ」

許可もなく乙女の寝室に侵入しておきながら、アルヴアはしゃあしゃあと挨拶を口にした。憤慨した葵はベッドを飛び降り、アルヴアに詰め寄る。

「勝手に入ってこないでよ!」

「ミヤジマ、この屋敷の所有者が誰か知っていますか?」

「は? 所有者?」

アルヴアにさらりと怒りを流された葵はぼかんと口を開ける。アルヴアは葵の様子に構うことなく淡々と説明を始めた。

「知らないようなので教えてさしあげましょう。この屋敷は僕の姉であるレイチエル・アロー・スミスがユアン・S・フロックハート様から与えられたものです。そして僕は、姉からこの屋敷を使用する

ことを許されています。僕と貴方がどういう関係になるのか、お解かりになりますね？」

アルヴァが何を言いたいのか察した葵はグツと文句を呑み込んだ。葵が押し黙ったのを見てアルヴァはにこやかに微笑む。

「昨日はどうしていたのですか？ 僕の所へも来なかったので心配していたのですよ」

アルヴァの『心配』が口先だけであることを知っている葵は唇を尖らせながら答えた。

「どうもこうも、何なのよアレは」

「マジスターは金と権力と魔力を持って余しているので、ああして思いつきの行動を起こすのですよ。ああいったゲームは怪我人が増えるので僕としては迷惑なのですが」

昨日は保健室が大繁盛だったのだと、アルヴァは無表情のまま語った。店じゃないんだからと胸中で呟いた葵は呆れ顔をアルヴァに向ける。

「そういえば、優勝者にはマジスターが願いを叶えてくれるんですよ？ 誰が勝ったの？」

「ああ、昨日のゲームでは決着などつきませんでしたよ。いたずらに怪我人を増やしただけでしたね」

サバイバルゲームを行うのであればもっと綿密なルールと勝者を定める規定が必要なのだとアルヴァは言う。葵にはよく解らなかったが、あのゲームがいかに馬鹿げていたのかは察することが出来た。「マジスターにとっては勝者などどうでもいいのですよ。彼らはただ、普段と違う何かを欲しているだけなのです」

「……サイテー」

「そうでしょう？ だからマジスターとは関わり合いにならない方がいいのです」

結局はそういう話になるのかと、アルヴァの言葉を聞いた葵はうんざりした。しかし葵が口をつぐんでも、アルヴァの話は続く。

「それで、ミヤジマはあの無法地帯のような校舎にいたのですか？」

「いるわけないじゃん。さっさと逃げ出したよ」

「賢明な判断ですね。では、何処にいたのですか？」

「時計塔。あそこならフツウの生徒は来ないと思って」

何気なく答えてしまってから、葵はハツとした。アルヴァが葵から聞き出したかったのもまさにそこだったらしく、彼は眉根を寄せている。また小言を言われると思った葵は身構えたが、アルヴァは予想外のことを口にした。

「トケイトウとはどういう意味ですか？」

「なんだ、そつちね」

「そつち、とは？」

アルヴァに突っ込まれた葵は追及を避けるために『時計』というものについて説明をした。アルヴァは単に『時計塔』が何を意味するのか解らなかつたらしく納得したように頷いた後、葵に冷ややかな目を向ける。

「つまり、また彼に会いに行つたということですか」

「違うよ。そんなつもりじゃ……」

「では、ハル＝ヒューイットには会わなかつたのですね？」

「……会つた」

嘘をつくわけにもいかなかったので正直に答えるとアルヴァはわざとらしくため息をついた。偶然とはいえハルに会つたという既成事実があるため、葵は何も言えずに黙り込む。アルヴァはもう一度大きなため息をついた後、葵に真剣そのものの表情を向けた。

「ミヤジマ、僕が言っていることの意味は理解しているのですよね？」

「……うん」

「それなら、もう塔へは行かないで下さい」

アルヴァの口調は厳しいわけでもなく、どちらかと言えば諭すような響きを伴っていた。彼がギリギリのところまで譲歩してくれていることを察した葵は頷こうとしたのだが、どういうわけか体が言うことを利かない。そんな葵を見限つたのか、アルヴァはそれ以上

何を言うでもなく立ち去ってしまった。

(だって、どうしようもないんだもん)

その思いがどんな感情からきているものなのか自身にも解らない
まま、取り残された葵は成す術なく俯いた。

カノン（6）

大粒の雪が降り続いていた秘色ひやくの月にしては珍しく、その日は小雪がちらついていた。湿気を含んだ重たい雪とは違い、粉雪は踊るように降ってくる。フードを目深に被ってトリニスタン魔法学園の敷地内を歩いてきた葵は足を止め、灰色の空を見上げた。彼女の視線の先にはひっそりとした佇まいの塔があり、時計が嵌まりそうな空洞からは弦楽器の音色が流れ出している。葵は塔の足下に立ち止まったまま、ぼんやりとアルヴァに言われたことを思い返していた。

（もう、会わないよ。ここで聴いてるだけだから）

雪空にあふれ出す音色は美しく、心を縛って放さない。この音色に酔いしれた後は決まって切なくなるが、それでも葵は郷愁を掻き立てる旋律を聴いていたかった。しかし密かな聴衆がいることなど知らない奏者は気まぐれである。曲の途中と思われる箇所ですつりと、バイオリンの音色は途絶えてしまった。

（もう、やめちゃったのかな）

しばらく待つてもバイオリンの音が聞こえてくることはなかった。塔の外にいる葵には内部にまだ人がいるのかどうか知る術もない。小さく息を吐き、葵は踵を返す。その直後、再びバイオリンの音色が聞こえてきた。

（この曲……）

今流れているのは、先程とは違う曲である。新たな曲のメロディに覚えがあった葵は愕然とした。居ても立ってもいられなくなってしまう葵は雪の中を走り出し、塔へ向かう。葵が派手な音を立てて螺旋階段を上るうちに、上階から聞こえてきていたバイオリンは止んでしまっていた。しかしそれでも、葵はひたすら上を目指す。

（お願い、まだいて！）

息を急ぎ切らしながら葵は塔の上階へ辿り着いた。塔の上階は円形の空洞が窓のようになっていて、そこから取り込まれた明かりが

室内を照らし出している。雪の降りしきる日の色彩に包まれた葵は、そこに見知った少年の姿を見つけた。バイオリンを手にしながらこちらを見ているのは、ハル「ヒューイット」である。

「い、今……」

ハルに会うなり話を切り出そうとしたものの、葵の息は切れていて思いは言葉にならなかつた。ハルは肩にかけていたバイオリンを下ろし、訝しげな表情で葵を見ている。

「何？」

「今の曲、もう一度聞かせて！」

そこでようやく会話が成立したものの、ハルの反応は冷たいものだった。

「何で？」

「えっ、何でって……」

「あんたに聞かせるために弾いてたわけじゃない」

素っ気なく切り捨てられてしまった時、それまで期待に踊っていた胸が一気に重苦しくなった。不機嫌そうなハルの顔を見ていることが出来ず、葵は目を伏せる。そうしてしまってから、もう笑って誤魔化すことも出来なくなったことを察した。

（そう、だよな）

葵は幾度となくハルのバイオリンを耳にしているが、それは全て盗み聞きだったのである。加えて彼らの間柄はせいぜい知己であり、友人ですらない。そのような人物が唐突に望みを伝えるなど、ハルにしてみれば迷惑だろう。

「……ごめん、何でもない」

自身の行動を反省した葵はすぐごと引き下がろうとしたのだが、さすがに意味不明な行動が三度目ともなればハルも疑問を口にした。「何でそんなに興奮してたの？」

先程までのつつけんどんな態度は何処へやら、ハルの口調は至って平静だった。恐る恐る目を上げた葵はハルが無表情に戻っているのを見て安堵しながら言葉を紡ぐ。

「さつき貴方が弾いてた曲が知ってる曲に似てたの。それで、ちょっと興奮しちゃって……」

異なる二つの世界で同じ楽器が存在するだけでなく、同じ曲まで存在しているとくれば奇妙な合致である。葵にとってハルが弾いていた曲を確かめることは大きな意味を持っていたが、そんなことは知らないハルは訝しそうに眉根を寄せた。

「珍しい曲じゃないし、聴いたことがあっても不思議じゃない」

「そうじゃ、なくて……」

説明をして心情を解ってもらおうにも、葵の抱える秘密が邪魔をする。葵は言葉を切って口をつぐんだものの、よっぽど本当のことを喋ってしまったおうかと思っていた。そんな葵の姿を見て何を感じたのかは分からないが、ハルはバイオリンを構えなおす。

「あんたが言ってる曲って、これのこと？」

ハルが触りだけ弾いたメロディーに過剰な反応を示した葵は何度も頷いた。ハルは葵を一瞥した後、すぐに視線を逸らす。そのままバイオリンに意識を集中し、彼は本格的に演奏を始めた。二人きりの静かな空間に反響する澄んだ音色。バイオリンを奏でているハルの姿が現実離れしていたので葵はしばらく見入っていたが、やがて別の感情が溢れ出してきた。

（この曲……やっぱり、カノンだ）

パツヘルベルの、カノン。それは葵にとって友人との思い出であり、恋焦がれてやまない加藤大輝との出会いの思い出でもあった。

中学二年生の時、葵はクラスメイトだった弥也と映画を見に行った。その作中で使われていたのがパツヘルベルのカノンであり、加藤大輝はその映画でヒロインの相手役を演じていたのである。その時の思い出を皮切りに、葵の脳裏には中学時代の記憶が次々と蘇った。

（違う世界のはずなのに、同じ音楽があるなんて不思議）

もしかするとパツヘルベルもこの魔法が存在する世界に来たことがあって、ハルが弾いている曲に感銘を受けてカノンが生まれたの

かもしれない。もしくはこの世界の住人が葵のいた世界へやって来て、パツヘルベルのカノンを聴いてこの世界に広めたのかもしれない。そんな想像をしてしまうほど二つの楽曲はよく似ており、葵に淡い期待を抱かせた。何の接点もないように思われる二つの世界も、案外どこかで繋がっているのかもしれない。そう考えれば、元の世界へ戻れるかもしれないという希望が湧いてくるというものだ。

始まりと同じく静かに、ハルの演奏は終わった。心が満たされた葵は自然と、弓を下ろしたハルに笑みを向ける。

「ありがとう」

カノンを、聞かせてくれて。彼の演奏に出会えただけでも、葵は今ここにすることが出来て良かったと思えた。

「バイオリン弾いてありがとうなんて言われたの、初めてだ」

葵が心から感謝をしていることが伝わったのか、ハルは少し照れくさそうに言う。灰色の光だけでは表情の細微な変化までは見えないうが、葵にはその言葉だけで十分だった。意識し始めると直視していることが難しくなり、葵は思わずハルから目を逸らす。早くなった鼓動はなかなか正常に戻ってはくれなかった。

「あんだ、やっぱり変な奴だな」

ハルが柔らかな微笑みを浮かべながら口にした一言に、駄目押しをされた気分になった葵は薄闇の中で密かに頬を朱に染めた。

そして闘いの幕が開く(1)

小雪が舞うある冬の朝、丘の上に建つトリニスタン魔法学園へと続く急な坂道を重い足取りで上っている者の姿があつた。その人物は厚手のケーブに身を包み、小脇に重そうな本を抱えている少女である。舗装された通路の雪は退けられているものの学園までの道のりは過酷であり、彼女はハアハアと苦しげに息をしながら無心に足を動かしていた。苦勞の末トリニスタン魔法学園の校門へと辿り着いた少女は、そこで手にしていた本を雪の上に放り出し、脱力するようにしゃがみ込む。目深に被っていたフードをとり、校門に背を預けて足を投げ出した人物の名は宮島葵といつた。

(あー、疲れた)

毎朝のこととはいえ登下校は重労働である。どのくらい険しい道のりなのかと言えば、雪が降りしきるような寒さの中でも丘を上りきった頃には汗ばんでいるほどだ。転移魔法を使えば辺鄙な場所に佇む学園への登校も容易なもののだが、あいにくこの世界の生まれではない葵にはそのような手段はなかつた。ので、葵は毎日この試練を乗り越えて学園に来ているのである。

乱れた呼吸を整えながら、葵は小雪の舞い落ちる灰色の空を見上げた。冬月期^{とうげつ}最後の月である秘色^{ひしき}の月も終わりを迎えようとしており、間もなく夏月期^{かげつ}に入ろうとしている。葵が異世界へ召喚されてから二月もの歳月が経過したことになるが、未だにレイチエルやユアンからは何の連絡もなかつた。

(いつになったら帰れるんだろう)

元いた世界で迎えようとした夏が、この世界にも巡って来る。まだ雪が降るような寒さなので実感はないが、直面している現実が元いた世界で体感した記憶に追いついてしまうと、どうしても焦りを覚えずにはいられなかった。しかし気ばかり焦ってもどうしようもないことを、葵はすでに知っている。あれこれと考えを巡らせてい

ても気が重くなるだけなので、葵は投げやりに体を投げ出した。

葵が纏っているケープには防水の魔法がかけられており、雪の上で寝転がっても濡れることはない。だが汗がひいて寒さが凍みてきたので葵は立ち上がるうと思っただ。しかし葵が行動を起こす前に、事件は起きてしまったのである。肢体を投げ出して寝転んでいた葵の上に、突如として人影が出現した。その人物は葵の足の上に着地し、バランスを崩して見事にひっくり返る。足に人間一人分の体重を乗せられた葵も痛さに悲鳴を上げた。

「っ、てえ……」

新雪まみれになりながら起き上がったのは、私服の少年であった。顔を歪めながら痛みに耐えていた葵は涙目になりながら少年の方へ顔を傾ける。そうして目にした人物に、葵は痛みも忘れるほど驚愕した。艶やかな漆黒の髪に、黒い瞳。端正な顔の中でも切れ長の目が印象的な少年は、視線だけで人を惹きつける。彼の顔を、葵は写真のような図画で見たことがあった。

(この人……)

マジスターだと察した刹那、葵は一瞬にして青褪めた。キリル「エクランドという名の少年はしきりに頭を振っていたが、やがて果然と座り込んでいる葵に目を留める。無表情で近付いて来た彼は、何の躊躇もなく葵を殴り飛ばした。

「あ、おい！ キル！」

拳で顔を殴られた衝撃で雪の上に倒れこんだ葵は起き上がることも出来ずにその声を聞いた。どうやらキリル「エクランド以外にも近くに人がいたようだったが、彼らの気配は次第に遠ざかっていく。手加減なく殴られたショックが思考を奪うと同時に涙腺を壊してしまったようで、葵は蹲ったまま泣いた。

ひとしきり泣くと次第に冷静さが戻って来て、葵は目元を拭ってから体を起こした。ズキズキと痛む頬に手をあて、なんとか座る体勢まで持ち直す。そこでふと、視界に誰かの足が映っていることに気がついた。恐る恐る目を上げた葵はそこに信じられない人物がい

るのを見て瞠目する。

(何で……)

この瞬間に居合わせたのが、よりもよって彼だったのか。葵は自分の運の悪さを呪いながら俯き、垂れ下がる髪で顔を隠した。

「平気？」

ハル「ヒューイットの声は素っ気なく、口調も儀礼的なものだった。口を開いたらまた泣き出してしまいそうだったので葵は無言で頷く。ハルが声をかけてくれた嬉しさと、ひどい顔を見られたくないという思いと、殴られたショックと痛みとがごちゃ混ぜになって、葵はもうどうしたらいいのか分からなくなっていた。

涙が零れそうになるたびに唇を噛むことを繰り返し、どれだけの時間が経ったのか。ようやく落ち着きを取り戻した葵は、しかし顔を上げることが出来ないままだった。ハルは一言発したきり、その後は何も言っていない。もしかしたらすでに立ち去っているのかもしれないが、まだいたらと思うと顔を上げられなかったのだ。しかしそんなことをしていても寒さにやられてしまうだけなので、葵は意を決して顔を上げる。ハルは、まだそこにいた。

ハルは常の無表情を崩すことなく、座り込んでいる葵をただ眺めていた。注視されることに気まずさを感じた葵は伏し目がちになりながら声を出してみる。

「あの……」

それは耳慣れた自分の声ではなく、明らかな鼻声だった。まずまずの気まずさを感じた葵は言葉を続けることが出来なくて閉口してしまっただが、ハルからは何も反応が返っていない。

(えっと、どうしよう)

ハルが何故そこに佇んだままにいるのか分からないが、葵としてはもう立ち去ってくれても構わなかった。醜態を晒した後なので顔を合わせづらいし、何より殴られた後の顔など見られたくない。だが泣き止むまで待っていてくれたのだとしたら、追い払うのも気が引ける。ここは自分から立ち去った方がいいと思った葵は気力を振

り絞って立ち上がるうとした。しかし手加減なしで殴られた衝撃が予想以上のダメージとして残っていたようで、葵は再び膝を折る。

「立てないの？」

ハルの問いかけに頷くわけにもいかず、へたり込んでしまった葵は笑って誤魔化そうとした。しかし腫れてきている頬が邪魔をして、うまく笑えない。殴られたのとは別の意味で泣きそうになりながら、葵は深く俯いた。

「そのうち動けるようになると思うから」

「そのうちなんて言ったら凍える」

顔を見られたくないという葵の意に反してハルは近付いてきた。

彼は葵の腕をとり、無理に立ち上がらせる。そして両足を片手ですくいとり、葵の体をいとも簡単に抱き上げたのだった。

（えっ！？ 何！？）

突然の出来事に葵はパニックに陥った。葵を抱えたハルは平然としたまま校舎に向かって歩き出す。ハルの顔があまりにも近くにあったので、見ていられなかった葵は両手で顔を覆った。

「顔、見せたくないんだったら腕回せば？」

自分の首を抱いてしがみつけと、ハルはとんでもないことをサラツと口にする。胸中で悲鳴を上げた葵には、ハルの腕の中でさらに縮こまることしか出来なかった。

（そんなの、かつこ良すぎるよ）

泣いている間は何も言わず傍にいてくれて、なおかつ葵が何を気にしているのか察してくれた上で適切な助け舟を出してくれる。そんな男の子が実在することが夢のようだった。だけど距離が近すぎて、まともに顔を見ることも出来ない。今はただ早鐘のように脈打っている鼓動を隠そうと、葵は必死で息を押し殺した。

顔を隠している葵には周囲の状況が分からなかったが、しばらくすると校舎の中に入ったようだった。凍てつく空気が和らいだ代わりに、様々な感情を含んだざわめきが耳につく。『何あの女』という誰かの科白が聞こえてきた時、葵は血の気が引く気分を味わった。

後が怖いと思いつながらもどうすることも出来ず、葵は顔を隠したままハルの腕の中で揺られていた。そのうちに強い羨望を含んだざわめきも聞こえなくなったので、葵は恐る恐る腕を退けてみる。やはりもう校舎の中にいて、葵を抱えたハルは緩いカーブが続いている廊下を歩いていく。葵が顔を晒しても話しかけてくるような雰囲気はなく、ハルの視線は真っ直ぐに前を向いている。目線を落とすてくれることもなさそうだったので、葵はハルの顔を盗み見た。

(近くで見れば見るほど整った顔してるなあ)

ハルはなかなか無表情を崩そうとしないので、動きを止めたら精巧な人形のようなのである。女生徒に絶大な人気を誇っているマジスタの一人である彼は現実味の薄い存在だが、冷ややかな温もりは確かに人間的だった。太腿に触れている手に、今更ながらにドキドキしてしまつた葵は赤くなつた顔を見られないようそっぽを向く。

「ドア、開けて」

ハルが口を開いたので葵は我に返つて顔を戻した。ハルもちょうど葵を見ていたので視線が絡み合う。焦つた葵は慌ててハルから目を外し、そのままプレートのかかつているドアを流し見た。プレートにはこの世界の文字で『保健室』と書かれている。この世界の文字は象形文字と英語の筆記体が組み合わさつたような作りになっていて葵には馴染みがないが、それも編入前にアルヴァから受けた個別授業のおかげで覚えている単語ならば読めるようになっていた。まして校舎一階の北辺にあるこの場所は、一時期毎日のように通つていた所なのである。

ハルに抱えられた格好のまま、葵はドアを開けようと手を伸ばした。取っ手を掴んでスライドさせると、保健室の扉は葵達の前に道を開く。葵はドアを開けてしまつてから、この扉を開くには鍵が必要だったことを思い出したのだが、ハルは特に気にする様子もなく保健室の中へと歩を進めたのだった。

そして闘いの幕が開く(2)

保健室の内部には簡易なベッドが幾つか並んでいて、それぞれがカーテンで仕切られている。中庭に面した窓際にはデスクが置いてあり、それ以外は薬棚があるだけのシンプルな構造である。保健室の中にアルヴアの姿はなく、代わりに白いウサギがデスクの上に陣取っていた。椅子ではなくデスクの上に座っているウサギはずんぐりむっくりな体型をしていて、短い後ろ足で体を支えながら立っている。今まで幾度となく通っている場所で初めて見る生物に遭遇した葵は呆気にとられていたが、ハルは何を言うでもなくウサギの顔を素通りする。葵をベッドに腰かけさせてから改めて、ハルは奇妙なウサギを振り返ったのだった。

「じゃあ、後よろしく」

「かしこまりましたあゝ」

窮屈そうに頭を下げたウサギは去って行くハルの背に向かって短い前足を振り回している。何が何だか分からない葵はとりあえず、ウサギが喋ったことに驚いていた。

「はい、今日はどうされましたかあ？」

ハルの姿が消えるとすぐ、ウサギの金色の目が葵に向けられた。ウサギに話しかけられるなど人生で初の出来事であり、状況に対応しきれない葵はビクツと体を震わせる。しかし葵の反応など意に介した風もなく、ウサギは一人で喋り続けた。

「まずはお名前とお、クラスを教えてくださいね」

未知の生物に怯えた葵は小さな声でクラスと名前を告げた。葵の名前を言いにくそうに繰り返したウサギは、そこで何故か宙を仰ぐ何かと交信でもしているかのようにウサギは時々頷いたりしていたが、幾度かそのような動作をした後、改めて葵を見やった。

「ミヤジマ＝アオイさん」

「は、はい」

「大いなるエクスペリメンターからのお言葉を伝えます」

ウサギは決して早口ではなかったが、発された単語が長すぎて葵には覚えきることが出来なかった。しかしウサギに問い返す勇氣もなく、葵は黙ったまま次の言葉を待つ。初めから葵の様子など眼中にないウサギは滑らかに続きを口にした。

「一度この部屋を出て、鍵を使うように。以上、エクスペリメンターからのお言葉でした」

大いなる人からの伝言を終えたウサギは窮屈そうにお辞儀をした後、先程ハルにしていたように短い前足を振り回した。その仕種はまるで『バイバイ』をしているようである。伝言からも出て行けと言われていることは分かっていたので、葵は言われた通りにした。

(カギ、つて……)

保健室を出て扉を閉めた葵はロープのポケットを探り、アルヴアからもらった鍵を取り出した。いつもそうしているように鍵穴に差し込み、鍵を回す。そして再びドアをスライドさせると、デスクに座っているアルヴアの姿が目飛び込んできた。今度はウサギの姿がない。

「ようこそ、僕の部屋へ」

アルヴアに迎えられるながら室内へ侵入した葵は『保健室』に入った時に感じた違和感の正体を見つけた。『保健室』には窓があったが、この部屋には窓がないのである。しかしそれ以外はまったく同じ造りであり、混乱した葵は頭を抱えなくなった。

「ま、テキトーに座ってよ」

煙草の煙を吐き出しながら、アルヴアは気怠そうに言う。葵はケープを脱ぎ捨ててベッドに座ったが、頬が痛むことを思い出してそのまま寝転がることにした。アルヴアに背を向けてベッドに潜り込んだ葵は頭まですっぽりと上掛けで覆う。脈絡のない葵の行動に呆れ顔をしたアルヴアは重い腰を上げながら口火を切った。

「ミヤジマ、僕はまだベッドの使用許可を与えてないんだけど」

「ここ、保健室でしょ。けが人には優しくしてよ」

「どれどれ」

上掛けを引つpegされたので、葵は力づくで奪い返して再び頭まで被る。だがアルヴァも強引に、再び上掛けを引きずり下ろした。

「見ないでよ！」

葵は悲鳴を上げて体を丸めたが、アルヴァは顔を隠すことを許さうとしなかった。肩を掴まれて上体だけ仰向けにされたため、葵も観念して体勢を整える。ベッドの上で仰向けに転がっている葵を見下ろしたアルヴァは顎に手を当てながら口を開いた。

「これはまた、女の子の顔とは思えない有り様だね」

殴られた頬が腫れているだろうということは葵自身にも分かっていた。だがアルヴァにそういう反応をされると改めて、苦々しい気持ちがこみ上げてくる。そんなことを言われてしまいうくらい酷い顔を、ハルに見られてしまったのだ。

(恥ずかしい。何でこんなことに……)

胸中で泣きたいと呟いて顔を歪めた葵の頬に、アルヴァが手を伸ばす。不意に触れられた葵は過剰なまでに体を震わせてしまったから、慌てて取り繕った。

「あ、あの、何でもない。何でもないから」

真顔のままにいるアルヴァから逃げるように上体を起こした葵は捲くし立てながら顔を背けた。不自然極まりない葵の反応に小さく息を吐いたアルヴァは一呼吸置いてから言葉を紡ぐ。

「ミヤジマを運んできたの、ハル”ヒューイット”だったね」

アルヴァの一言で自分の立場を思い出した葵は、今度は別の意味で体を強張らせた。アルヴァは特に責めている風でもなく、淡々と言葉を次ぐ。

「その頬は誰にやられた？ 正直に話してくれ」

アルヴァに諭された葵は仕方なく、素直に事情を説明した。終始無言で聞いていたアルヴァは葵の話が終わると同時に嘆息する。

「今は雪で見えないかもしれないけど、裏門付近には魔法陣があるんだよ。マジスター専用のやつがね」

アルヴァから明かされた内容に葵は納得して頷いた。マジスターが登下校をする特別な場所だから、裏門付近には常に人気がないのだ。だがそれを知った葵は不服に唇を尖らせた。

「だったら、前もって教えてくれればよかったのに」

裏門がマジスターの出現ポイントだと知っていれば、道を変えて正門から登校するという手段だってあったはずなのだ。葵がそのことを口にするにアルヴァは小さく首を振った。

「迂回って、徒歩で？」

トリニスタン魔法学園の敷地は、とにかく広い。加えて敷地内と外部は高い壁で区切られており、出入り口は校門しかないのである。正門まで回りこんで登校するとなると、下手をすれば今の倍以上は時間がかかるかもしれない。その場合の労力を考えると葵は苦笑いを浮かべるしかなかった。

「まあ、迂回は無理にしても教えておいた方が良かったのは確かだね。ごめん、忘れてたんだ」

「あ、そう……」

あまりにもサッパリと言い切られてしまったので葵には呆れる以外なかった。だが元々、葵が足を投げ出して地面に座ってなどいなければ防げた事態である。この痛みも半分は自業自得なのかと思っただ葵は切ない気分になった。

「しかし、不慮の事故とはいえやっちゃったね」

マジスターには近付くなど事前に重々念を押しておきながら、アルヴァの口調はひどく軽いものであった。校内に入った途端に広がったざわめきが蘇って、葵はゾツとする。だがしよせんは他人事なのか、葵が青ざめてもアルヴァの調子は変わらなかった。

「ミヤジマはハルヒューイトに執心だったから仕方ないね。ま、頑張っつてよ」

アルヴァに突き放されてしまっても葵には追いつることが出来なかった。再三に亘る彼の忠告を聞き流し、ハルに会いに行っていた葵には助けを請う資格はないのである。そのことが解っているだ

けに、葵は孤独を感じた。

(でも、どうせいつかは帰るんだから)

永遠にこの世界にいるわけではないのだから、この先にどんなことがあるかと少しのあいだ我慢をすればいいだけのことである。自分にそう言い聞かせてみたものの、やはり不安を拭いきることは出来ず、葵は鬱々とした気持ちのまま閉口したのだった。

そして闘いの幕が開く(3)

腫れた頬にガーゼを貼り付けるだけの手当てを終えた後、保健室を出た葵は魔法書がないことに気がついてエントランスホールに向かった。ホールから外へ出ると幸いなことに雪はやんでおり、この分では魔法書が埋もれてしまっていることもないだろう。果たして裏門に辿り着くと雪の上に魔法書が転がっていた。魔法書を拾い上げて雪を払った葵はそのまま、表紙に描かれている五芒星ペンタグラムを見つめる。その文様を目にしていると、この魔法書を執筆したというレイチエルと、この魔法書を使っていたというユアンの顔がそれぞれに脳裏をよぎっていった。

魔法は、この世界に生を受けた者に受け継がれる血の力と大自然のエネルギーが結びつくことによって発動する。両者を結ぶものが文字であり、魔法陣であり、呪文スペルなのだ。魔法書は用途に応じた魔法陣や呪文が書き記された書物であり、トリニスタン魔法学園に通う生徒は常に自身の魔法書を小脇に抱えて行動する。それは高位魔法を使うためには魔法書が必要不可欠だからなのだが、この世界の者ではない葵にとっては無縁の話だった。

(必要な呪文は覚えちゃったし、ただ重いだけなんだよね)

自身の魔力を消費して魔法を使うのではない葵の場合は指輪に蓄えておける容量の問題があるので、魔法を使う場合も魔力の消費が少ない無属性魔法に限られる。そのため重たい思いをしてまで魔法書を持ち歩く必要はないのだが、形だけでもそれらしくしておくとアルヴァに言い含められているので従っているのだった。

裏門に佇んでいる葵の耳に、校舎の方で鳴り響いている鐘の音が届いた。一度だけ鳴らされる鐘は昼休憩の合図である。今ならば教室にも入りやすいと思っただ葵は魔法書を小脇に抱えなおし、急いで校舎へと向かった。

エントランスホールに足を踏み入れた途端、葵は異様な空気を感じ

じ取った。校舎のあちこちで談笑している生徒の目が、こちらに向けられているような気がしたのである。しかし周囲を見回しても、誰とも目が合うことはなかった。気のせいかと思つた葵は階段を上り、二階にある二年A一組の教室を目指した。

この学園の生徒は大半の者が何でも揃う食堂で昼食をとるが、まだ休憩が始まつて間もない時間帯だったため教室内には生徒達がいなかった。しかし談笑の声は、葵が姿を見せた途端にピタリとやむ。教室中の視線を一手に引き受けた葵は嫌な予感が現実になったことを覺つた。

「ミヤジマさん」

教室のドアを開けたところで立ち尽くしていた葵に声をかけてきたのは、ココだった。彼女の表情にはにこやかさなど一切なく、それはココの両脇に控えているシルヴィアとサリーも同じである。

「少し、よろしいかしら」

ココはそう言つて、葵が返事をしないうちから歩き出した。彼女達はまるで、葵がついてくるのが当然と言わんばかりに、振り返りもせずに廊下を歩いて行く。葵は彼女達に従いながらも躊躇していたが、話に応じなければそれはそれで恐ろしいことになると感じたので無言で歩を進めた。

教室を出た後、ココ達は階段を上つて四階へと向かった。そうして辿り着いたのは、いつかも訪れたことのある魔法陣が描かれた一室。以前に訪れた時はマジスターの話で盛り上がったものだが、今日はマジスターのせいで険悪なムードが漂っている。何を言われるのかなど察しがついていたので、葵は小さく息を吐いて話が切り出されるのを待った。

「その類はどうなされたのです？」

ココはまず、葵の怪我の話題から話に入った。もう隠す必要もなさそうだったので、葵は男に殴られたのだと正直に打ち明けてみる。しかし自分から話を振つたにもかかわらず、ココは慰めや励ましなどは一切口にしなかった。例えば心配などしていなくても大丈夫かと

問うのが常であり、その点からも彼女達との関係が破綻寸前であることが窺える。

「ミヤジマさんは確か、ハル様がお好きなのでしたわね」

ココが本題を切り出した刹那、葵は『きた』と思っただ。彼女はどのような感情を抱いているのか読み取らせない無表情で、淡々と言葉を次ぐ。

「マジスターの方々は特定の生徒と親しくされるようなことはありません。ハル様のそのようなお姿を見たのも初めてでしたわ。あの方の気まぐれには違いないでしょうが、良かったですわね」

憧れのハル様に抱かれてと、ココは言う。シルヴィアとサリーも冷やかに葵を見据えたまま言葉を紡いだ。

「ハル様に憧れている女生徒は大勢います。ハル様の一時の気まぐれであったのだとしても、皆様の前でああいったことは良くありませんわ」

「まるで見せ付けているようでしたものね」

胸中で違つと反発したものの、葵はそれを口には出さなかった。

ココ達の態度は冷め切っていて、葵が何を言い出そうが聞く耳持たないだろう。そしてそれは、おそらく全校女生徒が同じなのだ。

「ミヤジマさん、不用意な行動が反感を買ってしまったわね。」

ミヤジマさんはお友達ですので助けてあげたいのですが、わたくし達も学園のルールには逆らえません」

だからせめて『気をつける』と忠告したかったのだと言い残し、

ココは踵を返した。シルヴィアとサリーも無言でココに従う。平静を装っていた葵は彼女達の姿が見えなくなると途端に顔を歪めた。

「なにが『オトモダチ』よ。初めから上辺だけの付き合いだったくせに」

そう毒づいたものの一時は、彼女達に親近感を抱いたこともある。ココ達と出かけたことが少しも楽しくなかったとも、言えない。だが薄氷の上を歩くような関係であったことには違いなく、葵は憤ることで胸の痛みを無視しようとした。

（お嬢様ごっこもこれで終わりだね。ああ、スッキリした）

もう取り繕った笑みを浮かべる必要もないので葵は不機嫌な顔のまま廊下へ出た。四階には人気がなかったが、階段を下ると休憩中の生徒達のざわめきが耳につく。しかしそれは、葵が現れるや否やピタリと止まった。

「ブース」

人間が大勢いるにもかかわらず静寂の中を歩いてきた葵は明らかに侮辱を耳にして足を止めた。彼女の背後では嫌な嘲笑が聞こえていたが、それも葵が振り向いた途端に聞こえなくなる。廊下には生徒が溢れているので誰が口にした言葉だったのか知りようがなく、葵は悔しい思いをしながら歩き出した。すると再び、わざと聞かせるように言っていると思われる陰口と嘲笑が飛んできた。

「今の顔、ご覧になりました？」

「不細工でしたわねえ。身の程知らずもいいところですよ」

「あのような凡人がマジスターの方々とつりあうはずがございませんに」

「きつと憧れが過ぎて妄想に取り憑かれてしまったのですわ。可哀想に」

言いたい放題の罵りは、どれも程度が低い。しかし不快に感じることには変わりがなく、葵は足早にその場を後にした。

全校女子を敵に回してから三日もすると、葵は無視と陰口にげんなりしていた。教室にも廊下にも居場所がないので、最近ではしょ

つちゆう保健室を訪れている。そして今も、葵は簡易なベッドに倒れ伏していた。

「あー、いやんなる。お嬢様が聞いて呆れるよ」

言葉遣いが少し丁寧なだけで、女生徒達の陰口は普通のイジメと変わらない。またその丁寧な言葉遣いが小馬鹿にされている感を助長させるのだ。葵がベッドに突っ伏したまま誰に聞かせるでもなくぐちぐちと文句を連ねていると、この部屋の主もうんざりした調子で口を挟んできた。

「ミヤジマ、独り言なら人のいない所で言ってくれ」

「だって、どこ行っても人がいるんだもん。ここが一番人いないよ」呼び声に反応して体を起こした葵はそのままベッドに腰掛けた。

この部屋の主であるアルヴァは椅子の背を抱き、前のめりによりかかりながらため息を吐く。

「いつそハル」ヒューイットの所へ行けばいいじゃないか。塔の辺りなら一般の生徒は近寄らないだろう？」

今まで散々マジスターには近寄るなど言っていたアルヴァが、今度はマジスターに会いに行けと言う。その変化を不審に思った葵は眉をひそめながら尋ねた。

「何で急にそんなこと言い出すの？」

「だって、もう手遅れだろう？ こうなってしまったんだったらマジスターと仲良くなればいい。そうすればマジスターが庇ってくれるんじゃない？」

いつものことながら、アルヴァの口調は投げやりである。彼にとつては葵がどうなるかと、しょせん他人事なのだ。

「いつそ玉の輿でも狙ってみれば？ マジスターを落とせれば一生遊んで暮らせるよ」

「あのね……」

適当なことを言つてのけるアルヴァは、もはや葵が異世界の人間であることすら失念していそうである。アルヴァの玉の輿発言に初めこそ呆れていたものの、徐々に不安を募らせた葵はふと真顔に戻

った。

「ねえ、まだレイから何の連絡もないの？」

「ないね。あつたら教えてるよ」

ということとは、まだしばらくは陰険なイジメに耐えなければならぬ。失望を感じると同時にそう思った葵はさらにうんざりした。

「あー、もうやだ。学校来なくてもいい？」

ダメと言われることが分かっているにも、訊かずにはいられない。

葵としてはその程度の発言のつもりだったのだが、アルヴァはアツサリと、いいよと答えた。

「じゃあ、引越しの準備でもするか」

「引越して……どこに？」

「ミヤジマが使ってる屋敷だよ。これからはマンツーマンで一般教養や魔法学を叩き込んであげよう」

「げっ、やだ」

「それと、あの家ハーレムにするから。いい？」

「……学校来ます」

どこまでが本気が分からないアルヴァに不安を募らせた葵はすぐさま自分の発言を撤回した。気怠そうに立ち上がっていたアルヴァは葵の反応を見越していたかのように頷き、椅子に戻って再び腰を落ち着ける。やられたと思いつつも前言を撤回をする勇気のなかった葵は渋々ながら口をつぐんだ。

「そついえば……」

話が一段落したところで、葵は疑問を思い出して独白を零した。ハルに抱えられて校舎に入った時、葵は顔を隠していたにもかかわらず、保健室を出た頃には噂になっていたのだ。そのことを不可解に思った葵が疑問をぶつけると、アルヴァは何でもないことのように答えを口にした。

「それはね、魔力の見えないミヤジマには難しいけど、魔力が見える者にとっては個人の識別なんて簡単なことだからだよ」

通常時、魔力は薄いベールのように持ち主の周囲を漂っている。

魔力には人それぞれ色や形、大きさなどの違いがあり、それによって個人の識別が可能になるのだ。魔法を発動させている時はこの現象が顕著になるが、通常時に漂っている魔力を見る能力には個人差がある。しかしこの学園の生徒であれば、大抵の者は個人の識別が可能なのだった。

「へえ、だからバレちゃったんだ」

「しかし、魔力が識別されると厄介だね。それは僕が何とかしよう。準備をしておくだけ告げ、アルヴァは話を打ち切る。葵には何が何だか分からなかったが、どうせ聞いても解らないだろうと思いい、説明を求めることはしなかった。」

そして闘いの幕が開く(4)

その日も一日、陰湿なイジメと孤独に耐えた葵は一人で裏門へと続く道を歩いていた。雪は降っていないが秘色ひしやくの月の外気は相変わらず冷たく、間もなく夏を迎えようとしているなど信じられない寒さである。積もった雪が未だ融け出さない冬らしく、葵が吐き出した重苦しいため息も白くなって上空へと上って行った。

(あーあ、いつになったら帰れるんだろう)

珍しく晴れ渡っている空には薄っすらと、異世界の象徴である二月が浮かんでいる。夜になると緑がかった青い光を放つ月は異彩で、葵に強い孤独感を与えるのだ。それはこの世界が生まれ育った場所でない以上は仕方のないことだったが、明るいうちから沈みたくないと考えた葵はもう一度ため息をついてから視線を外すことにした。

裏門付近で足を止めていた葵が再び歩き出そうとすると、背後から話し声が近付いて来た。マジスターの通路路であるこの場所には人気がないことが当たり前なので、葵は不可解に思いながら背後を振り向いてみる。そうして目にしてしまった光景に、葵は息を呑んだ。校舎の方から歩み寄って来る二つの人影は一方が燃えるような真っ赤な髪をしている少年で、もう一方の少年は長い茶髪を無造作に束ねているといった容姿をしていたからだ。

(うわっ、まずい!)

マジスターの接近に焦った葵は走り出そうとして転んでしまった。すぐに起き上がったものの校門まではまだ距離があり、近くには身を隠せるような物もない。葵とマジスターの間には障害物が何もない状態であり、やがて葵に気が付いた少年達が声を上げた。

「あれ? あんたは……」

お互いの顔が判別できる程度の距離を保ったまま足を止めた茶髪の少年が、葵を見て眉をひそめる。まずいと思った葵はフードを深くに被ったが、すでに後の祭りだった。

「誰？」

「そっか、ウィルはいなかったんだっけか。ここでキルがこの子の足を踏んづけて、派手にコケたんだよ」

「へえ、キルが。それは見たかったなあ」

赤髪の少年の問いに茶髪の少年が答え、彼らは内輪で盛り上がって笑っている。葵は自分から関心が逸れているうちに逃げようとしたのだが、それを見咎めた茶髪の少年が声を上げた。

「あ、待てよ」

待っていられるかと胸中で反論した葵は振り向かず走り出した。しかし凍っている雪の上は足場が悪く、再び転んでしまう。うつ伏せに倒れた葵の傍に茶髪の少年が寄り、片腕で彼女を助け起こした。

「大丈夫か？」

顔面から倒れてしまった葵は顔を押さえながら頷いた。転んだ拍子に葵が手放してしまった魔法書は、赤髪の少年が拾い上げる。

「円陣で囲まれた五芒星^{ペンタグラム}……どこかで見たような？」

「何だ？ その図形、有名なのか？」

赤髪の少年の独白に興味を惹かれたのか、茶髪の少年も葵の魔法書を覗き込んでいる。理由は分からなかったがまずい事態になりそうだと直感した葵は半ば強引に魔法書を取り返した。それから改めて、少年達に頭を下げる。

「助けてくれてありがとう。じゃあ」

「あ、だから待てて」

背を向けた葵の腕を茶髪の少年が掴み、再び制止させる。マジスターと一緒にいる所を誰にも見られなくなかった葵は予想外のしつこさに苛立った。

「何？ 用があるなら早くして」

ついぶつきらばうに言ってしまった直後、葵はハツとした。少年達は驚いたように瞠目し、葵を見据えたまま呆然と立ち尽くしている。おそらくマジスターである彼らにとって、こんな無礼な態度をとられたのは初めてのことだったのだらう。葵は怒られるかもしれ

ないと身構えたが、茶髪の少年が愉快そうに笑い声を上げた。

「ウイル、この子をシエル・ガーデンに招待していいか？」

「別にいいんじゃない？ キルが何て言うか知らないけど」

「もともとはキルが迷惑かけたんだ、お茶の一杯くらいいいだろ」

二人の間で話が進んでいる間、状況の見えない葵は眉根を寄せていた。彼らの話はすぐに済んだようで、茶髪の少年が葵を振り返る。

「じゃ、行くぞ」

葵に一声かけた後、茶髪の少年は唐突に『シエル・ガーデン大空の庭へ』と呟いた。すると、目前にあったはずの少年の姿が掻き消えるように消失する。赤髪の少年も茶髪の少年と同様に姿を消し、寒空の下に一人取り残された葵は呆然と立ち尽くした。

(……えっ？ 何？)

声をかけられたところを見ると『着いて来い』ということなのだろうが、葵には彼らが何処へ行ったのかすら分からない。そもそもマジスターと仲良くなる気もなかったので、バカらしいと思った葵は踵を返した。しかしその直後、再び茶髪の少年の声がある。

「悪い悪い。いつも仲間内でしか行動しないから忘れてた」

茶髪の少年はそう言った後、同意も得ずに葵の腕を引いた。後ろ向きに引つ張られた葵は倒れそうになったが、体格のいい少年の胸に支えられる。手荒な真似に対する反応を示している暇もなく、葵が瞬きをした次の瞬間、目に映る光景は一変していた。

「わぁ……」

現実離れた美しい光景に、葵は思わず感嘆の声を発した。その庭園では春のように咲き誇っている色とりどりの花が香っていて、建物の全面に張られたガラスは珍しい冬の青空を映している。その眺めはまさに『大空の庭』と呼ぶに相応しいものだった。

(ここ……たぶん、あのドームの中だね)

トリニスタン魔法学園の敷地内には全面ガラス張りのドームのような建造物がある。外側からドームを眺めたことのある葵は内側から改めて周囲を見回してみても、半ば確信的にそう思った。何故なら

葵が思い浮かべているドームはマジスターの領域にあるもので、彼女の横に並び立っている者もマジスターと呼ばれる少年だからである。

花と水路に囲まれたシエル・ガーデンの中心部には開けた場所があつて、そこには白いテーブルと椅子が置かれていた。おそらくは花を愛でるために設けられたであろうその場所に、先客の姿が窺える。

「お茶が入ってるよ」

茶髪の少年に促されてテーブルに寄つた葵を見上げてきたのは、ティーカップを手にした赤髪の少年だった。その隣に座っている人物に目を留めた葵は、思わず息を呑む。

「おう。サンキュー」

赤髪の少年に応えた茶髪の少年は無抵抗の葵を誘導して椅子に座らせた。葵の目は対面する形で座っている栗色の髪をした少年に釘付けになつていたが、視線を注がれている方の少年は特に関心を示すこともなくそこにいる。ぼんやりとどこかを見つめている栗色の髪をした少年から視線を外すと、葵はようやく自分を取り巻く環境の異様さに気がついた。何故、マジスターとお茶をするような羽目になつたのか。しかし葵の困惑など知らない少年達は陽気に自己紹介を始めた。

「俺はオリヴァー」バベッジ。オリヴァーでいいぜ」

まずは茶髪の少年が口火を切る。次に、赤い髪をした少年が口を開いた。

「僕はウィル」ヴィンス。ウィルでいいよ」

学園の有名人であるマジスターに自己紹介をされても、葵には胸中で『知ってる』と呟くことしか出来なかった。シエル・ガーデンにはもう一人、マジスターのメンバーがいるのだが、彼は沈黙を保つたままである。栗毛の少年を一瞥した後、赤髪の少年が彼に代わつて再び口を開いた。

「彼はハル」ヒューイット。あと、今はいないけどキリル」エクラ

ンドの四人がいつものメンバー」

ウィルに相槌を打った後、葵は口を開く気配もないハルを気にした。彼に会うのは、保健室に運んでもらった時以来である。葵はあれから、一度も塔へは足を運んでいなかった。会わないようにしようと思う時にこそ会ってしまう巡り合わせの悪さに葵は小さく息を吐く。

「あんたの名前は？」

ハルに気をとられていた葵はオリヴァーの一言で我に返った。葵が慌てて名乗ると三人が三人とも眉根を寄せる。葵はそうした反応をされることにもう慣れていたので気にしなかったが、ウィルが深刻そうな表情のまま問いを口にした。

「珍しい名前だね。アオイってファミリーネームは聞いたことがないけど、ミヤジマは何処の出身？」

ウィルの質問には答えられなかったので、葵はさりげなく話を逸らしてみた。

「葵っていうのがファーストネームなんだ」

「へえ。じゃあ、ミヤジマって方がファミリーネームか。ますます珍しいな」

話題を逸らすことに失敗したらしく、オリヴァーまでもが興味深げなまなざしを向けてくる。返答に窮した葵は助けを求めてハルを仰いだが、彼は葵に目を向けることもなく無言でティーカップに手を伸ばした。助けが期待出来ない以上は自分で何とかするしかない。そう思った葵は苦肉の策として、何も答えずただ笑っていた。

「気になるじゃん。教えてくれよ」

オリヴァーはアルヴァと同じく不可解なものは究明しないと気が済まない性格のようだ。葵がいよいよ追いつめられていると、助け舟を出してくれたのはハルではなくウィルだった。

「オリヴァー、無理に語らせるのは良くないよ」

「ウィルは気にならないのか？」

オリヴァーは尚も食い下がったが、ウィルがなんとか宥めてくれ

た。彼らはこの時アイコンタクトで無言の意思疎通を図っていたのだが、そんなこととは知らない葵は助けにくれたウィルの優しさにとただただ感動していたのだった。

そして鬨の幕が開く(5)

「ところで、キリルってどんな人なの？」

黙っていれば質問をされ、質問をされると危険だと察した葵は自分から話題を振った。彼女はただ、この場にはいない者の方が話題にしやすいと思っただけなのだが、オリヴァーとウイルが無言で目を瞬かせる。彼らが呆気に取られているようだったので、葵はまた失敗したことを早々に悟った。

「アオイって変わってるな。自分を殴った奴のこと知りたがるなんて」

テーブルに頬杖をついたオリヴァーが呆れ顔で言う。理由も告げず一方的に殴られたことを思い出した葵は腹立たしさを思い返し、憤慨した。

「そうよ、そうだった！ あつたまくる！」

ネコをかぶっていた時には露わに出来なかった怒りを、葵はここぞとばかりに発散させた。マジスターの面々は拳を握って立ち上がった葵をぼかんと見上げていたが、やがてどこからともなく笑いが零れる。一番初めに笑い出したのはハルであり、葵は彼が声を上げて笑っている姿にぼかんとした。

「あなた、ほんとに変な奴だな」

笑いすぎて目尻に浮かんだ涙を拭いながら、ハルが言う。その一言をハルに言われると複雑な気分になると思った葵は顔を赤らめながらストンと腰を下ろした。葵とハルが初対面ではないことを知らないウイルとオリヴァーは不可解そうに二人を見ている。

「ハル、もしかしてアオイと知り合いだった？」

「前に言わなかった？ 変な女がいるって」

ウイルに答えたハルの言葉でピンときたのか、オリヴァーが不意に手を打った。

「ああ、言ってた言ってた。あれってアオイのことだったのか」

オリヴァーとウィルはスッキリした表情で頷いていたが、知らないところで話題にされていた葵は何とも言い難い気持ちになった。しかし想像よりもマジスター達が気安かったので、まあいいかと思う。同級生と話をしているような気分になれたのは、この学園へ来て初めてのことだった。

「キルはね、気性の激しい子供なんだ。悪い奴じゃないんだけど好き嫌いが激しくてね」

ひとしきり談笑した後、ウィルが話を戻した。彼らは幼少の頃からの付き合いらしく、オリヴァーが付け加える。

「あいつはなあ、自分が認めてる奴以外見えてないんだよな。俺達を除けば、キルが名前と顔を覚えたのってステラくらいじゃないか？」

オリヴァーの話からも、キリル「エクランドという人物が選り好みをする者だということが伝わってくる。葵が手加減なしで殴られたのも、要するにアウト・オブ・眼中だったからというわけだ。（いくら眼中にないからって、気に食わないから殴るってというのはどうなのよ）」

実際に痛い思いをしている葵はキリルという人物に対して元々良いイメージを持ってはいなかったのだが、話を聞くほどに悪い心象が増していく。さらに、ウィルが追い討ちをかけるようなことを言い出した。

「今ここにキルが来ても、きつとアオイのこと覚えてないと思うよ。キルに殴られた奴なんて星の数ほどいるからね」

「……サイフテー」

葵が思ったことをそのまま口にすると再び笑いが起きた。そこを笑い飛ばす三人の態度もどうかと思ったが、思い返すだけでも腹が立ってくるので、葵はさっさと話題を変える。

「ステラって、女の子？」

先程オリヴァーが口にした名前を葵が拾うとウィルが頷いてみせた。

「今はいないけど、彼女もマジスターの一員なんだよ」

「そういえば、そろそろ夏月期かげつに入るよな？ ステラ、帰って来るんじゃないか？」

オリヴァーがふと思いついたかのように言い、それを受けてウィルはハルを振り向いた。

「ハル、何か聞いてる？」

「何も。いつ帰って来てもいいように練習はしてるけど」

「ああ、それでバイオリンを弾いてたんだ？ ハルのバイオリンを聴くのも久々だったから嬉しかったよ」

ハルとウィルの会話が何を意味するのか、葵にはよく呑み込めなかった。しかし何か、もやもやしたものが胸に広がっていく。誰もこちらを見ていなかったたので葵は密かに眉根を寄せた。

(何だろう、この気持ち)

つと考え出してみたものの、オリヴァーの陽気な一言が葵の思考を遮った。

「俺も聞きたい。ハル、一曲弾いてくれよ」

「別に、いいけど」

オリヴァーの求めにあっさりと応じたハルはカップを置いて席を立つ。一度拒否された経験があるだけに葵は少し切ない気分になったが、ハルのバイオリンを聴ける嬉しさの方が勝った。

立ち上がったハルは何もない空間に向かって腕を伸ばした。するとある一点に差し掛かったところからハルの指先が消えて行く。彼の手が何も無い場所で忽然と消えてしまったので葵は目を見張った。

「何？ どうなってるの？」

「ああ、ハルの手は今五次元空間にあるんだよ。四次元だとちょっと不安が残るからね」

ウィルが説明を加えてくれたものの、葵にはさっぱり解らなかった。だが問い返すのも墓穴を掘りそうだったので葵は悶々としたまま黙り込む。

「今の説明で解ったの？」

ウィルは、葵が聞き返してこないことに驚いているようだった。まるで試されているように感じた葵は眉間の皺を深くする。

「ぜんぜん？」

「……何だ。だったら素直に訊いてくれればいいのに」

何かに失望した様子でため息をついた後、ウィルは改めて次元についての説明を始めた。一次元空間は点と線の世界であり、二次元空間は点と線を組み合わせた平面の世界である。平面を組み合わせた立体が三次元空間であり、これが葵達の存在している世界である。四次元空間は三次元空間に時間を加えたもので、五次元空間に至っては存在が認識されているだけでどのような世界なのかイメージすることは難しい。だが利用できるのだから確かに存在するのだと、ウィルは語った。

「え、つと……」

ウィルの言っていることを半分も理解出来ていない葵は曖昧な返事をして視線を泳がせた。葵の隣でオリヴァーも、何故か頭を抱えている。二人の様子を見たウィルは説明を続けることはせず、ハルが何をしているのかだけを簡単に教えた。

「要するに、ハルの手の先は別次元にあるってこと。僕たちはそこに魔法書やなんかを置いていて、必要な時にあやつって取り出すんだ」

そついう風に説明されれば解りやすく、葵とオリヴァーは同時に手を打った。

「なるほど。便利なんだね」

「そんな仕掛けになってたなんて知らなかったな」

「アオイはともかく、オリヴァーはいつも使っているだろう？ 理屈も知らずに出来てしまうのが怖いね」

ウィルの一言は皮肉だったようで、オリヴァーが文句を言い出した。可愛い顔に似合わず毒舌だというウィルの評判を思い出した葵は渴いた笑みを浮かべる。そうこうしているうちに準備が整ったらしく、ハルはバイオリンを手にしたままオリヴァーとウィルの口論

を眺めていた。しょうもないケンカだと感じた葵は傍観者を決め込んでいるハルを呆れながら仰ぐ。

「止めないの？」

「いつものことだから」

ハルは素っ気なく答え、バイオリンを構えた。弓が弦に添えられて、演奏が静かな出だしで始まる。バイオリンが鳴きだすとウイールとオリヴァーもピタリと口論をやめ、口を閉ざした。静かになった温室にはハルが奏でる旋律だけが流れている。

（寒い日に温室で、花に囲まれながらハルのバイオリンを聴くなんてゼイタクな感じ）

とても日常とは思えない空間に身を置いている葵はバイオリンの音色に酔いしれていたが、曲のテンポが速まるにつれて忙しない気持ちになった。自らが奏でている音と一体化しているように、ハルはバイオリンに感情をこめて弾いている。その姿は音楽に詳しくない葵が見てもバイオリンが愛されていると思うほどだった。音色と同じように、ハルを取り巻く空気そのものが澄んでいる。葵には魔力を見る能力などないが、彼の周囲を柔らかな光が包んでいるような気がして、目が離せなかった。

この世界には時計がないので正確なところは分からないが、時間になると五分ほどだっただろうか。出だしと同じく静かに演奏を終えたハルが、ゆっくりと弓を下ろす。しばらく余韻に浸っていた聴衆は、ほぼ同じタイミングで奏者に拍手を送った。

「やっぱ、ハルのバイオリンは最高だな」

「耳が肥えて困っちゃうね。早くステラとの演奏を聴きたいよ」

オリヴァーとウイールが口々に賞賛してもハルは無表情のままバイオリンをしまってしまった。ウイールの口から再び聞くことになったステラという名に、葵は少し複雑な気分になる。

（ステラって子とハルが一番仲いいのかな）

そんなことを考えてしまった葵はとっさに首を振った。これ以上マジスターといると余計なことを考えてしまいそうだったので、葵

はそつと席を立つ。

「私、そろそろ帰るね。お茶、ごちそうさま」

「裏門まで送つていこうか？」

オリヴァーが申し出てくれたものの、帰宅する姿を見られると都合が悪かったので葵は丁重に断つた。しかしハルも帰ると言い出したので、結局は全員でシエル・ガーデンを後にする。

「じゃあ、また明日」

「じゃあね」

裏門へ着くとすぐ、オリヴァーとウィルは短く別れを告げて去って行った。彼らは『アン・ルヴィヤン』と口にしただけで帰宅を果たせるので、別れは本当に一瞬である。帰ろうと思つた葵は一步を踏み出したが、あることを思い出してハツとした。

「そうだ、ハル……」

葵が振り向いたのとハルが消えたのが、運の悪いことに同時だった。一瞬ハルと目が合ったような気もしたが、もう確かめようがない。葵は息を吐き、再び踵を返した。

「何？」

「うわあー!!」

帰つたと思つたハルが不意に出現したため、驚いた葵は雪の上に倒れこんでしまった。雪まみれになった葵を、ハルは平然と見下ろしている。

(うっ、何でこんなんばっかり)

どうしてこの人の前では平静でいられないのかと嘆いた葵は自力で起き上がってから雪を払った。そうしているうちに、ハルが再び口を開く。

「呼ばなかった？」

「あ、うん、呼んだ」

呼び止めた理由を思い出した葵は改めて、ハルに頭を下げた。しかしハルには何のことか分からないようで、彼は小首を傾げている。まさか忘れたのではと危惧した葵は真意を言葉にしてみた。

「あの、保健室まで運んでくれて……」

「ああ、そのことか」

ハルが頷いたので、葵はひとまずホツとした。もう一度お礼を言うってから、葵は今度こそ踵を返す。

「呼び止めてごめんね。じゃあ」

ハルに別れを告げた葵は雪の上を歩き出し、そのまま裏門をくぐる。葵が帰途についてからもその場に佇んでいたハルは、不思議そうな表情をして彼女が歩き去るのを見つめていた。

そして闘いの幕が開く(6)

呼吸が凍りつきそうな秘色ひそくの月のある朝、トリニスタン魔法学園の裏門に登校した葵は肩で荒い息をしながら校門に片手をついていた。すでに習慣となつている呼吸を整えるための時間を置いてから、顔を上げる。直線上には校舎があり、それを睨み見た葵は頬を叩いて気合を入れなおした。

(よし、行くぞ)

無視されようと陰口を叩かれようと気にするもんか。そう誓った葵は一歩ずつ着実に、校舎に近付いて行った。だが気合を入れたわりには、正門から続く生徒の流れがない。どうやら今日の登校は早すぎたか遅すぎたかのどちらかのようなのである。エントランスホールを抜けても人氣がなかったので葵は拍子抜けした。

(まあ、平和でいいけどね)

ホッと一息ついた葵は肩の力を抜き、足早に階段を上る。二階にも生徒の姿はなく、校内は早朝の静謐を保っていた。気の抜けたまま二年A一組のドアを開けた葵は、室内に女生徒の姿を見つけて真顔に戻る。窓辺の席で顔を寄せ合っていたのは、ココ達だった。

イジメが始まって以来、葵はココ達と口をきいていない。彼女達から葵に声をかけることもなく、陰口こそなかったものの彼女達の態度は冷ややかなものだった。そのような関係になつてしまった以上あいさつをする必要性もなく、葵は無言のまま席に着いた。だが他に人影がないからなのか、ココ達は葵の傍に寄つて来る。

「おはようございます、ミヤジマさん」

ココがにこやかに挨拶をしてきたので不審に思った葵は眉根を寄せた。葵の反応を見たシルヴィアとサリーが、すかさず声を上げる。「そのようなお顔をなさらないでくださいませ。わたくし達も心苦しかったのです」

「そうですね。幾度ミヤジマさんに話しかけようかと思ったことか」

学園のルールには逆らえないと葵を無視し続けていた彼女達が、今日は掌を返したように微笑んでいる。気味が悪いと感じた葵が無言に徹していると、ココが再び口火を切った。

「ところで、ミヤジマさん。わたくし達、見たのです」

「……何を、ですか？」

癖が出て丁寧に関き返してしまった葵は自分の反射神経に嫌気が差した。もう、彼女達のご機嫌を伺う必要などないのである。毅然とした態度で立ち向かおうと思った葵は伏せてしまった目を上げたが、彼女が何を言う前にココが言葉を次いだ。

「昨日、裏門の所でマジスターの方々で談笑していらつしやいましたわね。それはそれは、仲がおよろしそうな光景でしたわ」

昨日の出来事の一部始終をココ達に見られていたと知って、葵はギョツとした。ハルだけでなく他のマジスターとも親しくしていたと知れた日には何をされるか分からない。そんな葵の胸中を見透かしたように、ココは優しく微笑む。

「ご安心くださいませ。わたくし達の他には誰もおりませんでしたわ」

ココの科白に安堵したのも束の間、葵は何故彼女達がそんな話を持ち出したのか不審に思った。葵が向けた疑惑のまなざしを正しく理解した上で、ココは話を続ける。

「もちろん、他の方に話したりなどいたしませんわ。その代わりに、わたくし達もこっそりお仲間に加えてくださいませ」

マジスターとの仲を取り持てと言われているのだと、葵はすぐに理解した。だがココ達の行為は陰湿な陰口と同じくらい卑劣であり、憤りがこみ上げてくる。

（そんなの、脅しじゃない）

ここで領けば、少なくとも彼女達を敵に回すことはないだろう。カッコイイ男の子の話題で盛り上がっていた頃に戻れるかもしれない。だがそんな友情はいらないと、葵は胸中で呟いた。

「お断りいたしますわ。マジスターの方々とは仲良くなりたいのでし

たら、ご自分からお声をおかけになっではいかがです？」

ニコリと微笑んだ葵はきっぱりと、彼女達の申し出を拒絶した。葵がそのような反応に出るとは予想していなかったのだらう、ココ達は目を白黒させている。やがて真顔に戻った彼女達は、今度は怒りを露わにした。

「そう。わたくし達が仲良くしてさしあげようと言っているのに、それが貴方の答えなのですね」

ココは肩を震わせていたが葵はそっぽを向いた。しかし何かされるかもしれないと危惧して、気は張っている。葵は殴られるかもしれないと身構えていたのだが、彼女達はそういった行動には出なかった。代わりに、勝ち誇ったような笑みを浮かべている。

「あなた、確かハル様にご執心でしたわね」

ココがハルの名前を持ち出したので葵は眉根を寄せながら顔を戻した。葵の興味を引いたことで、ココはさらなるしたり顔になる。

「でも、残念でしたわね。ハル様にはすでにお相手がいらっしやるのよ。ご存知かしら？」

瞠目してしまっってから、葵はしまったと思っって顔を背けた。しかし時すでに遅く、ココ達は葵の神経を逆撫でする。

「そういえばステラ様、そろそろお帰りになるのではなくて？」

「ハル様とステラ様、お揃いになると絵になりますわよね。何と言つてもお二人とも、才知溢れるマジスターですもの。どこかの誰かさんとは大違いですわ」

「あら、どこかの誰かさんと比べるなんてステラ様に失礼ですわよ」
聞こえよがしな会話をしながら、ココ達は楽しげに去って行く。

彼女達の言葉は廊下に出た後、さらにあからさまなものになった。

「あの顔、見まして？」
「いい気味ですわ。きつと、ご自分がハル様に釣り合うなどという妄想を抱いていたのでしょうか」

「まあ。妄想もそこまでいくと悪意ですわね」

散々な悪口を聞きながら、葵は机に肘をついてぼんやりと窓の外

を見た。丘の上に建つ学園からは、晴れていれば街を一望すること
が出来る。しかし生憎、今日は曇り空で霧がかかっていた。

(やっぱり、そうだったんだ)

ステラという少女の名前を耳にした時から、葵は何となくそう
なのではないかと思っていた。ハルほどの男の子に彼女がいはいは
がなかったのである。そのことも当然だと思いつつも、葵の心は晴
れない。いつかアルヴァに言われた科白がグルグルと脳裏を巡っ
ていた。

「……恋なんかしてないよ。好きになったってどうしようもないじ
ゃん」

葵が元の世界に帰りたいと願う以上、いつかは別れがくる。そん
な相手を好きになったところで不毛なだけだ。そう思った葵はぐっ
たりと前のめりになり、机を抱いてため息をついた。

鈍る心(1)

冬月期とうげつの終わり頃に決まって降る粉雪が、今日も舞っていた。丘の上に建つトリニスタン魔法学園は最後の雪に包まれて白く染まっている。グラウンドも校舎もまだ高く積もっている雪に覆われているが、この雪は夏月期かげつに入るとすぐ跡形もなく消え去っていくのだ。そんな儂い雪が降りしきる静寂の中、学園の校舎内では力任せに扉を開ける者の姿があった。

「……やあ」

室内にいた金髪の青年が、乱暴にドアを開けて侵入して来た生徒に声を投げた。白衣姿の彼はトリニスタン魔法学園アステルダム分校の校医を勤めるアルヴァ「アロースミスである。そして保健室のベッドにどっかりと腰を下ろしたローブ姿の少女の名は、宮島葵と聞いた。

「今日はまた、一段と派手だね」

葵の姿を見て、アルヴァは苦笑いを浮かべる。それもそのはずであり、葵のローブや髪は所々焼け焦げていた。尚且つ、彼女はこの凍てつく季節に全身から水を滴らせているのである。

葵が不機嫌な表情で無言を貫いていたのでアルヴァは呪文を唱え始めた。いつかの巨大送風機が彼らの間に出現し、葵と彼女が濡らしたベッドを物凄い勢いで乾かしていく。焼け焦げたうえに風で乱れた髪を、葵はもう直すことすらしなかった。

ハル「ヒューイットだけでなく他のマジスターとも仲良くしているという噂が広まって以来、葵は直接的な嫌がらせを受けるようになっていた。初めのうちの陰口など可愛いもので、今では魔法で狙い撃ちされる始末である。本日は炎の魔法と水の魔法をセットで食らい、葵は命からがら保健室に逃げ込んだのであった。

「とにかく、手当てをするから。ローブを脱いでこれに着替えて」
アルヴァが差し出したのは裾の長そうなシャツであった。しかし

葵は受け取らず、アルヴァを見上げることもなく一点を見据えている。髪も顔も痛みも、今の彼女にはどうでもいいことだった。

「私、この学校やめる」

ぼつりと呟かれた葵の言葉にはどんな感情も込められていなかった。葵のこの科白は今まで幾度となく繰り返されてきたものだったが、アルヴァは眉根を寄せて空を仰ぐ。

「それは、僕のハーレムに参加してもいいということ？」

アルヴァはわざと、葵が嫌がる言葉を選んで口にした。現在まではこの手段で事なきを得てきた彼だったが、アルヴァの予想に反して葵はあっさり頷いて見せる。

「ハーレムでも何でもつくれば？」

何もかもがどうでもいいという気分だった葵は乱れた髪に櫛を入れることもなく一つに括った。そしてそのまま、傷の手当てもせず保健室を立ち去っていく。アルヴァに愚痴を零してみても、腹立たしさが少しも和らがなかったからだ。

保健室を出た後、葵は大股でエントランスホールに向かった。走って逃げることも癪だったので、廊下にたむろして笑っている生徒達に睨みを利かせながら歩く。そうしているうちに、生徒達の視線が別のところへ移っていくのを肌で感じた。主に女生徒の視線が中庭に集中していたので、葵もそちらに目を移す。雪の降り積もった中庭では、私服姿の二人組が何かをしていた。

この学園内において私服を着ている生徒はマジスターしかいない。中庭にいるのがウィルとオリヴァーだけだと見て取った葵は、ささやかな復讐を思いついた。近寄りたくても近寄れず窓に群がっている女生徒達を尻目に、葵は堂々と中庭へと歩を踏み出す。侵入者に気付いた中庭の二人は一様に葵を見た。

「ぶつ。アオイ、その格好どうしたんだよ」

ボロボロの葵を見てオリヴァーが声を上げて笑った。ウィルは呆れたような表情で葵を見ている。

「ひつつめ頭してるから誰かと思った。別人みたいだね」

縮れた前髪ごと結び上げている葵は胸中で、気にするところはそこかと突っ込みを入れた。しかし顔はにこやかに、二人に話しかける。

「何してんの？」

問いかけながら二人の足下に目をやった葵はギョツとした。今まで死角になっていて見えなかったが、彼らの足下には丸い雪の塊がある。それも大きさの違うものが、二つ。

「それ……どうする気？」

「これか？ これは、こうやって」

恐る恐る尋ねた葵に答えたのはオリヴァーで、彼は小さい方の塊を大きい方の塊の上に乗せた。見事、雪だるまの完成である。

「それで、これをぶつけるんだ」

雪だるまから少し距離を取ったウィルが、掌大の雪玉を投げつけた。危うく雪玉に当たりそうになった葵とオリヴァーは揃って抗議の声を上げる。二人の元へ戻りながら、ウィルは誠意の見えない謝罪を口にした。

「雪だるまに当てるの、間違ってるから。本当はこうやって遊ぶんだよ！」

足下にある雪をすくい上げた葵は掌でそれを丸め、手近にいたオリヴァーめがけて投げつけた。距離が近かったこともあり、雪玉が命中したオリヴァーはよろめく。それを見たウィルが葵の真似をし、中庭では雪合戦が始まった。

ささやかな復讐を誓って中庭に出た葵自身はいつの間にかすっかり忘れていたのだが、楽しみにマジスターと遊ぶ姿は女生徒達の確かな怒りを買っていた。そんなこととは知らず、葵は久しぶりの雪合戦に全力投球で臨んだ。ひとしきり雪玉を投げ合つと、燃え尽きた葵は雪の上に寝転がる。それを真似てオリヴァーとウィルも雪の上に倒れた。

「何これ。すっげー楽しい」

雪合戦がよほど楽しかったのか、オリヴァーはまだ笑っている。

同志を得た葵は嬉しくなつて、オリヴァーの方へ体を傾けた。

「でしょ？ 雪合戦つて燃えるんだよねー」

「へえ。この遊び、ユキガッセンっていうんだ？」

ウィルが話に入ってきたので、葵は寝転がったまま彼の方に体を傾ける。

「雪玉を使った闘いなんだよ。真剣勝負じゃなきゃ面白くないよね」といふか、あの時の変な女はアオイだったんだ？」

転がったまま顔だけ傾けてきたウィルが真顔だったので、葵はまずいことを口走ったと気がついた。彼女は追及されないうちに逃げようと体を起こしたのだが、オリヴァーの笑い声がウィルとの会話を途切れさせる。

「『変な女』つて大抵アオイのことだな。ハルが言つてた変な女もアオイのことだったし」

「うん、アオイつて変だよな」

追及は免れたものの、ウィルの一言で葵は複雑な気分になった。しかし悲しく思う暇もなく、絡みつくような視線を感じた葵は周囲を見回してみる。すると校舎の窓という窓に女生徒の姿があり、じつとりとした視線が中庭に集中していた。

(うわっ、怖い)

当初の目的をすっかり忘れていた葵は寒さにはなく体を震わせる。いくら今日で学園を辞めるとはいえ、帰り道に襲われでもしたら事だ。アルヴァに送ってもらおうと思つた葵は雪を払つて立ち上がった。

「あれ？ もう行くの？」

葵が立ち上がったのを見てウィルも上体を起こす。オリヴァーも体を起こし、お茶でも飲まないかと葵を誘つた。温暖なシエル・ガーデンへの招待はありがたいことだったが、あの場所へ行くとハルがいるかもしれない。今はとても顔を合わせられる状態ではなかったので、葵は無言で首を振つた。

葵が立ち去ろうとすると急に、校内から歓声が上がつた。それも

女子ばかりの甲高い悲鳴であり、何事かと思つた葵は周囲に視線を走らせる。すると二階の窓が開いていて、そこから二人の少年が中庭に向かつて顔を出していた。

「うるせえ。黙れ」

黒髪の少年が一声上げると、それまで騒ぎ立っていた生徒達は示し合わせたかのように一斉に口をつぐんだ。だが女生徒達の熱い視線は私服姿の少年達に集中している。静寂の中、窓から身を乗り出している黒髪の少年が中庭の二人に向かつて声を投げた。

「お前ら、何やってんだよ」

「キル」

ウィルが黒髪の少年の名を呟き、中庭から手を振つた。二階の校舎からそれに応えたのは黒髪の少年ではなく、その隣にいる栗毛の少年である。二階を見上げていた葵はハルと目が合ったような気がして、慌てて校舎内に引き返した。

（嫌だ、また……）

ハルには何故か、いつもみっともない姿ばかりを目撃される。ひつつめ頭を解いた葵は縮れてしまった髪で顔を隠し、俯いたまま保健室へと向かった。

鈍る心(2)

オリヴァーとウィルと中庭で雪合戦をした翌日から葵は学校に行かなくなった。一日目は何事もなく過ぎ去ったのだが二日目になるとアルヴァが屋敷の方へ現れたので、葵はベッドの中から恨めしい視線を送る。葵の視線を受け流すように、アルヴァは苦笑して見せた。

「そのような顔をなさらないでください。こういう、約束でしたよね？」

キングサイズのベッドの上で枕を抱いて縮こまっていた葵は観念して息を吐く。

「分かった。どんな人達が来るの？」

「……どういう意味ですか？」

アルヴァが不可解そうに眉根を寄せたので、葵も首をひねった。「だって、この家でハーレムつくるんでしょ？」

葵はいたって真剣だったのだが、その言葉を聞いたアルヴァは顔を背けて笑い出した。アルヴァの反応から、ようやくからかわれたことに気がついた葵はむっつりとして閉口する。ひとしきり笑った後、アルヴァは少し寂しそうな表情を浮かべた。

「それほどまでに学園へ通うのが嫌ですか」

「嫌に決まってるじゃない。見てよ、このチリチリの髪」

炎の直撃はかるうじて免れたものの、葵の毛先は見事なまでにチリチリになっていた。伸ばしていた髪も、こうなってしまえば切るしかない。長い髪に思い入れがあったわけではないが、これはそういう問題を遥かに超えていた。

「あの学校、おかしいよ。ちょっとマジスターと仲良くしたくらいで、何でもここまでされないといけないわけ？」

溜まりに溜まっていた鬱憤が、理性では抑えられないほど溢れ出てきた。だが泣いてしまえばイジメに屈したようで、葵は歯を食い

しばって堪える。葵が懸命に激情を押し込めようとしているのを見たアルヴァは小さく息を吐いて天井を仰いだ。

「ちよっと、ではありませんよ。僕が知る限り、マジスターがあのように一般の生徒を気にかけたのはミヤジマが初めてです」

マジスターが一般の生徒に声をかけることは、今までにも幾度かあった。しかし大抵、翌日には会話を交わした者がいたことすら忘れていたのだ。マジスターと会話を交わしたばかりに尊大になり、いざという時には助けも得られず学園を去って行った女生徒が何人いたことか。マジスターにとって一般の生徒とは、その程度の存在なのである。そんな取るに足らない集団の一員でありながら、葵に対する態度だけが違う。マジスターのような男と子供をつくるために幼い頃から努力を続けてきた少女達にしてみれば、それが許せないのだとアルヴァは語った。

「一人だけならまだしも、ミヤジマの場合はキリル」エクランドを除く全員と楽しげに会話をしている姿を見られていますからね。彼女達が憤るのも無理もないことなのです」

「だからって、あんなことが許されるの？ そりゃ、アルの言い方に従わなかった私も悪いかもしれないけど、あんな風に魔法を使われたら死んじゃうよ」

「確かに、そうですね。ミヤジマは自然属性の魔法が使えませんから。今まで大怪我をしなかっただけでも奇跡的です」

そう思っていないながら、彼は静観していたのだ。葵が危機に晒されていることを承知していながら、助け舟も出さずに。今までは反発しながらもアルヴァに縋りたい気持ちがあっただが、葵はもう彼を信じる事が出来なくなっただと感じていた。

「やっぱり、アルにとっては私がどうなるかと他人事なんだね。私がどうなっただってどうでもいいんでしょ？」

「ミヤジマ、早合点して怒るのはやめてください。貴方は僕に頼らなければ何も出来ないのですから」

アルヴァの言葉は、正論である。だが正論はもううんざりだと思

った葵はベッドを下り、右手に嵌めている指輪を引き抜く。大理石の床に落ちた指輪が、カツンと小さな音を立てた。指輪は落下の衝撃で床の上を転がっていく。それが動きを止めるまで目で追っていたアルヴァは、顔を上げて葵を見据えた。

アルヴァは無表情のままであり、レイチエル似の端正な顔にはどのような感情も表れていない。葵もまた、感情を面に出すこともなく視線を外す。再びベッドに戻った葵はアルヴァに背を向けて寝転がり、頭まで上掛けで覆い隠した。

「そうやって拗ねていて、何か得がありますか？」

室内にはしばらく沈黙が流れていたが、やがてアルヴァが口火を切った。葵は答えず、ベッドの中で体を丸める。いつそのこと怒りに任せて飛び出してしまったかかったが、その後のことを考えるとアルヴァから逃げ出す勇気もなかった。惨めな思いが、胸の中で膨らんでいく。

(いやだ)

何も言い返せず、耳を塞いで丸くなっていることしか出来ない自分が。悔しさのあまり涙が滲んできてしまったので、葵は手の甲で顔を拭った。

「ハル〓ヒューイットに会えなくなっても、いいのですか？」

アルヴァが不意に持ち出した名に、葵は皮肉な気持ちになった。

彼はまだ、ハル〓ヒューイットという存在が葵を繋ぎとめるものだと思っっているらしい。そうしたアルヴァの真意を汲み取ってしまった葵は縮こまっているのが馬鹿らしくなり、体を起こした。

「私がハルのこと好きだって、まだ思ってたの？」

葵が自嘲気味な笑いを浮かべてもアルヴァの表情は動かない。彼はただ、淡々と問いかけてきた。

「では、嫌いなのですか？」

「嫌いじゃないよ。でも、アルが思ってるような『好き』じゃない」
身ばかりか心まで飾り立てる学園において、マジスターは等身大の態度で接してくれた。他の生徒達とは違うそういった部分に、葵

は惹かれただけである。そして、何よりも……。

「ハルには彼女がいるんでしょ？　好きになつたつて意味ないじゃん」

葵の言葉を聞いたアルヴアは怪訝そうに眉根を寄せた。彼は天井を仰いで何事かを考えている様子だったが、しばらくすると葵に視線を戻して口火を切る。

「誰に何を聞かされたのか知りませんが、ハル〓ヒューイットを含め、マジスターには恋人などいませんよ」

予想外の科白を聞かされる羽目になつた葵は目を瞬かせた。ただ、と前置きし、アルヴアは言葉を次ぐ。

「ハル〓ヒューイットに思い人がいることは広く知られています」

「ハルの片思い、なの？」

ハルに相手がいると聞かされた時、葵は直感的に恋人の存在を悟つた。それは実際にハルの態度を見ていて思ったことだつたのだが、実情が片思いとは思ひもよらない事態である。葵があ然としていると、アルヴアは無感動のまま問いの答えを口にした。

「あくまで噂ですから、実際に彼らがどういった関係なのかまでは僕も知りません。興味もないですからね」

「あ、そう」

「ミヤジマ、ハル〓ヒューイットに恋人がいると思つたから自棄になつていたのですか？」

アルヴアが呆れたように言うので葵は慌てて否定した。だが自棄になつていたわけじゃないと力説したところでアルヴアはまったく信じていないようである。どれだけ取り繕つてみても空々しさが拭えなかつたので葵はアルヴアの説得を諦めた。代わりに、ある考えが頭をよぎつたので眉をひそめる。

「ハルに好きな人がいるの知つてて、何で玉の輿狙えとか言えちゃうわけ？」

やはりアルヴアは不誠実だと感じた葵は嫌な顔をしたが、アルヴアは平然と切り返した。

「確かに玉の輿を狙ってみたかどうかとも提案しましたが、その際の相手が誰とは言っていませんよ？ ミヤジマ、いい加減に認めたらどうですか？」

アルヴアの不誠実さをなじるつもりが、悪あがきは醜いとまで言われてしまった。頭の片隅ではアルヴアの言うことも一理あると思いつつも、いながらも手中に嵌められたことに対する憤りが勝り、葵はつんと顔を背けた。

「余計なお世話だよ。それに、ハルのこともどうだっていいよ」

口ではそう言いつつも、葵の脳裏にはハルの姿が蘇っていた。彼のバイオリンを聞きたくて時計塔に通ったこと、キリルに殴られて動けなかった時に助けてくれたこと、シエル・ガーデンでウィルやオリヴァーとも一緒にお茶を飲んだこと、そうした思い出が目まぐるしくフラッシュバックしていく。

学園を去るということは、マジスターとの接点もなくなるということである。両者を天秤にかけたとき迷いが生じないと言えは嘘になるが、もう学校へ行きたくないという気持ちも強かったので葵には黙り込むことしか出来なかった。

「ミヤジマが嫌だと言っのなら、仕方ありませんね」

しばらくの沈黙の後、ついにアルヴアが折れた。葵はホツとしたような寂しいような、複雑な思いでアルヴアを見上げる。葵の視線を受けたアルヴアはふと、薄いカーテンが引かれている窓に目をやった。

「そつえば、今日で冬月期も終わりですね」

アルヴアの独白は、それまでの話題をぶった切るようなものであった。唐突に無関係な話を始めたアルヴアを訝った葵は眉根を寄せた。

「それが、何？」

「冬月期の終わり……つまり、秘色の月三十日の夜には学園で夏月期を迎える儀式が行われるのです。せつかくですし、最後に見ておきませんか？」

脈絡のない話題に関する真意はすぐに明かされたものの、夏を迎える儀式というものが想像出来なかった葵は首を傾げた。

「儀式って何するの？」

「マジスターが大掛かりな魔法を使うのですよ。各地にあるトリニスタン魔法学園で一斉に行われる風習で、とても大規模なものです」
アルヴァに補足してもらってもイメージの湧かなかった葵は曖昧に頷いた。だがマジスターが話題に上ったことで、微かな期待が葵の胸を弾ませる。

(……最後なら、いいか)

学園へ行くのは気が進まなかったが最後に一目、彼を見ることが出来るのなら。そう思った葵はアルヴァに了承を伝え、ベッドから抜け出して鏡の前に向かった。

鈍る心(3)

秘色ひそくの月三十日の夜に行われる夏月期かげつを迎える儀式は、トリニスタン魔法学園の広大なグラウンドにて執り行われる。そのため、生徒達は夜の寒さに耐えながらグラウンドを囲うように集合するのである。今宵の天気は雲一つない星空。冬の澄んだ夜空に浮かぶ青い二月は間もなく中天に上ろうとしていた。

月の光が明るい冬月期最後の夜、葵はアルヴァと共に校舎の五階からグラウンドを見下ろしていた。生徒達は皆グラウンドに集合しているので校舎内に人気はない。グラウンドでは雪の上に五芒星が描かれていて、それぞれの頂点には五人の人物が佇んでいた。いくらが月が明るくても葵達からグラウンドまでは距離がありすぎるので、星の頂点に佇んでいる人物の顔までは窺うことが出来ない。しかも特別な役割を担っているであろう彼らはトリニスタン魔法学園の制服である白いローブを着込み、フードを目深に被っていた。

「……ねえ、アル」

五芒星の頂に佇んでいるのは、おそらくマジスターなのだろう。平素は私服姿で校内をうろついている彼らが制服を着ているだけでも驚きだが、葵は別のことが気になって仕方なかった。

「何ですか、ミヤジマ？」

グラウンドに目線を注いだまま、アルヴァは応える。葵もまた同様に、グラウンドの周囲にいる生徒達を指差して疑問を口にした。

「何で、皆カサさしてんの？」

五芒星を囲うように展開している生徒達は、雲一つない夜空だというのにカサをさしている。それも思い思いの彩色をしているので、上から見下ろすと傘の花畑のような眺めだった。

「というか、この世界にカサがあったことも驚きだけど」

「アンブレラはミヤジマのいた世界にもあったのですね。生活必需品では、やはり何処の世界も似通うものなのでしょうか」

「そういう考察はどうでもいいから。それで、全員力サさしてる理由は？」

「今に分かりますよ。ほら、始まったようですよ」

葵もグラウンドを注視しながら会話をしていたので、アルヴァに言われずとも動きがあったことは見て取れた。五芒星の頂点にいる者達が魔法書を開き、呪文の詠唱を始めたようである。窓を開けていないので声までは届かないが、呪文に合わせるかのように五芒星が光を放ち始めた。

(……あれ?)

不意に、視覚に違和感を覚えた葵は瞬きを繰り返した。何がどうとは言葉にならなかつたが、リアルタイムで見つめている光景が少しずつ変化しているような気がする。それは、目が錯覚を起こし続けているような奇妙な感覚だった。

(うん?)

知らぬ間に首を傾げていた葵は一つ瞬きをした後、ふと違和感の正体に気がついた。雪の上に描かれていた五芒星はそのままに、雪がごっそりなくなっているのである。雪のない学園の姿を見たのは初めてで、葵はあ然とした。

「うそ、何で？」

葵が思わず零した呟きは、突如天から降り注いだ轟音にかき消された。トリニスタン魔法学園の校舎を、土が露わになったグラウンドを、グラウンドに集まっている生徒達がさしている傘を、大量の水滴が打つ。その光景はまさしく、空でバケツをひっくり返したかのような天気雨だった。

雨は一瞬で上がったものの、葵はぼかんと口を開けたままでいた。グラウンドの花畑が消えた頃、アルヴァが感慨深げに独白を零す。

「ようやく夏ですね。明日からは暑くなりますよ」

彼の言葉から察するに、この世界には春という季節はないようである。高校の制服の上に厚手のケープを着用している葵には、明日から急に暑くなるなど信じられなかった。

「ところでミヤジマ、ハル」ヒューイットは見えましたか？」

グラウンドから視線を転じたアルヴァが急に話題を変えたので葵も真顔に戻って首を振った。

「この距離で見えるわけないでしょ。しかもフード被ってたし」

葵の一言で何かを思い出したように、アルヴァは白衣のポケットを探り始めた。そうして取り出された物を見て、葵は首を捻る。アルヴァはばつが悪そうな表情になりながら葵に指輪を差し出した。

「渡すのを忘れていました。改良型の新しい指輪です」

それはレイチエルからもらったアクロアイトとは違い、楕円形の石が嵌め込まれた指輪だった。アクロアイトの指輪は外したままだったので、葵はとりあえず改良型の指輪を右手の中指に嵌めてみる。それから、説明を求めてアルヴァを仰いだ。

「カルサイトのリングです。それを嵌めている者の魔力が一定に見えないよう細工をしておきました。それと、そのリングを嵌めている時は魔力が見えるようにしておいたのですが……」

魔力が見えるようになるということは、この距離からでもグラウンドにいる生徒一人一人が識別できるようになるということである。おそらくアルヴァは魔力でハルを識別させるつもりで、この見物場所を選んだのだろう。そうしたアルヴァの意図を汲み取った葵は苦笑いを浮かべた。

「いいよ、気にしなくて。ありがと、アル」

結果的には役立たずに終わってしまったが、葵はアルヴァが示してくれた気遣いを嬉しく思った。いつもこうならいいのにも思っただが、その科白は胸中に留めておく。

アルヴァとの会話が途切れたところで葵は再びグラウンドに視線を移した。グラウンドの中央に描かれていた五芒星もすでに消えていて、傘を持った生徒達の列が正門へと続いている。どうやら儀式も終わってしまったようで、水溜りをつくったグラウンドが静かに二月の姿を映していた。

「ねえ、アル」

「はい。何ですか？」

「行きたい所があるんだけど、ちょっとだけ待っててくれない？」
本来ならば先に帰っていていいと言うところだが、葵は転移魔法が使えない。月明かりがあるとはいえ人気のない夜道を一人で帰る勇氣はなかったので、待っていてくれと言っしかなかつたのだ。葵が一人になりたい気分だったのを見透かしたのか、アルヴァは部屋で待っていると言って去って行った。

アルヴァが立ち去ってしばらくしてから、葵はエントランスホールに向かった。無人の校舎を後にした彼女はしかしすぐ、異変を察して足を止める。儀式が行われる前まではケープが必要な寒さだったのに、夜の空気はガラスと変わっていた。

(暑い)

厚着に耐えられる空気ではなかったので、葵は急いでケープを剥ぎ取った。ワイシャツにチエックのスカートという出で立ちになった葵はさらに、シャツの袖を捲り上げる。夜空は晴れ渡っているが空気は湿気を含んでいて、まるで梅雨時のような体感だった。

懐かしいにおいがすると思った葵は足を進めながら周囲を窺う。雪の消えた地面にはあちこちに水溜りができていて、土のおいが立ち上っていた。つい先刻まで冬だったのが信じられないほど、季節は夏に近付いている。季節の一変は憂鬱さまでどこかへ飛ばしてくれたようで、葵は軽やかな足取りで校舎の東へと向かった。

目的地へと向かう途中、月下に咲き乱れる花を目にした葵は^{シエル}大空の庭と呼ばれるドームでマジスターとお茶をした時のことを思い返した。あれからまだ一月も経っていないが、すでに遠い日の出来事のようにある。マジスターと関わったせいで散々な目にもあったが、この学園で楽しい時間を共有したのもマジスターだけだったと思い、葵はしみじみとした気持ちになった。

(雪合戦も楽しかったしね)

ルールも何もない雪合戦。ウィルとオリヴァーと、メチャクチャに雪球をぶつけ合って笑った。思い返すだけで楽しくなってきた、

葵は口元をほころばせながら歩を進める。

（キリルって人に殴られたのはムカついたけど、今ではいい思い出
……にならないよ、やっぱ）

思い切り体重を乗せられて足を踏まれたり、手加減もなく殴られたのはあれが初めてである。傷跡はもう消えているが、あの時のシ
ヨックと痛みと怒りは忘れられそうもなかった。

（そして……）

目的地へ辿り着いた葵は足を止め、夜にひっそりと佇む月を浴び
た塔を見上げた。・タワー

鈍る心(4)

初めて会ったのは、エントランスホールだった。マジスターが揃って登校するというので女生徒達が駆けつけていたのだが、ハルは彼女達が姿を消した頃合を見計らっていたかのように人気のなくなったホールに現れたのだ。明るい栗色の短髪に、ブラウンの瞳。背は高いが、端正な顔にはどこともなく幼さが残っていた。しかし親しみやすいかと言えばそうでもなく、常に無表情の彼には独特の近寄り難さがある。だがその無表情が崩れた時、彼はあどけない顔で笑うのだ。その全てが好きだったと、塔の上階へと続く螺旋階段を上りきった葵は胸中で呟いた。

塔の上階には円形の穴が空いていて、そこから差し込む月明かりが室内を優しく照らしている。夜の幻想的な光に輪郭が浮かび上がる室内に、しかしハルの姿はない。この時間なら当然かと、葵は落胆することもなく壁際に寄った。手にしていたケーブを下敷きにして、月光が当たる場所を避けて座り込む。ゆっくりと目を閉じると静謐の中にバイオリンの音色が聞こえるような気がした。

(好き、だったのかな)

元いた世界を感じられるバイオリンの音を聞きたくて、ハルが練習をしているこの場所へ密かに通った。顔を合わせなくても、会話をすることがなくても、彼のバイオリンが聞けるだけで良かったのだ。近付いては駄目だと分かっているながらも足を運んでしまったのは、アルヴァの言うように恋をしていたからなのかもしれない。

ハルに初めて会った時に感じたときめきは、手の届かない芸能人に恋するような感覚に近かった。だが実際に会うことの出来ない加藤大輝とは違い、彼は現実の男の子なのである。マジスターという特別な存在で高嶺の花であることには変わらないが、憧れで終わらせるには距離が近すぎた。

(別に、好きだったって認めるくらいいいよね。どうなるわけでも

ないんだし)

ハルにはすでに思い人がいる。そして葵は、この学園から逃げ出すのだ。ハルとはもう二度と、会うこともないだろう。

「……それでも、やっぱり最後までいは会いたかったけどね」

抱えた膝に顔を埋めた葵は誰にともなく呟いた。しかしその独白に、反応が返ってきてしまったのである。

「また独り言？」

「うわあ!!!」

誰もいないと安心しきっていた時に声をかけられたので、驚いた葵は変な動きをして壁に体をぶつけてしまった。そのまま壁に張り付いた葵は、いつの間にか目前に出現していた人物に釘付けになる。鼓動が激しく、息切れを起こしそうだった。

「は、ハル……何でいるの？」

「あんだこそ、こんな所で何してんの？」

即座に問い返されてしまった葵は言葉に詰まった。返答がないことを気にする風でもなく、ハルは葵の隣に腰を下ろす。彼があまりにも近くに座ったため、葵はギョツとした。

「いい月夜だったから、一曲弾いてから帰ろうと思って寄ったらあんたがいた」

「あ、そ、そうなんだ……」

肩が触れそうな距離にハルがいるため、葵は振り向くことも出来ずに応じた。短く切りそろえたばかりの髪が急に気になって、手櫛で整えてみる。その動作が目を引きいたのか、ハルが再び口火を切った。

「髪、短くなってる」

「そ、そうなんだ。ちょうど夏になるから短くしてみようかと思って。変、かな？」

葵の問いかけに答える前に、ハルは室内に明かりを発生させた。

葵とハルの間に発生した小さな明かりは彼らの姿をより鮮明に映し出す。そうして見るとハルがあまりにも近かったので葵は髪に手を

置いたまま硬直してしまった。

「変じゃないよ。よく似合ってる」

葵の顔をまじまじと眺めた後、ハルは先程の問いかけに対する返答を口にした。あどけない微笑みと飾らない言葉のせいで頭がクラクラした葵は反射的に顔を背ける。動悸のせいで息苦しく、汗が噴き出しそうだった。

「あんたの髪、こんなに黒かったっけ？」

ハルが何気なく疑問を零したことで頭に血が上っていた葵は一瞬にして我に返った。

この世界へ連れて来られた当初、葵の髪はナチュラルなブラウンだった。だが二ヶ月も経過すればカラーリングも落ちてきて、根元の方から黒くなってきていたのだ。そしてそれは、髪を短くしたことでより顕著になったのだった。

この世界にも美容室というものはあるのだが、カラーリングをするという習慣はない。アルヴァと同じ話をした時、彼はたいそう興味深げにしていたものだ。アルヴァの反応を考えるとハルに正直なところを話してしまうのは非常にまずい。だがうまい口実も思いつかなかったので葵は素直に頷いた。

「もともと黒かったよ。太陽に当たると茶色く見えたんじゃないかな？」

そう言ってしまうってから、葵は現在の状況が変わっていることに気がついてハツとした。先程までは月明かりだけだったが今は、室内に光が照っている。太陽の光で色味が変わるのであれば今も茶色く見えていなければおかしいのだ。

(まずった……)

葵は突っ込まれるのではないかとハラハラしていたが、ハルは疑った様子もなく頷く。彼が簡単に納得してくれたので葵はいささか拍子抜けした。突っ込まれたくないという空気を察して見ない振りをしてくれたのか、それとも突っ込むほど興味がなかったのかは、分からない。だが今夜のハルはいつになく饒舌であり、不思議に思

つた葵は首を傾げた。

「何か、いいことでもあった？」

「何で？」

「機嫌、良さそうだから」

「あんたと話していると楽しい」

サラッと投げかけられた言葉に、葵の心臓は再びパンク寸前の状態に陥った。そうした科白が口を突いて出ることが、そもそもおかしいのだ。だが他意はまったくなく、まるでハルは平素のままである。葵は動揺を隠すためにグラウンドで行われた『儀式』の話を持ち出した。

「ああ、見てたんだ？」

「顔までは見えなかったけど、ハル達が制服着てるの初めて見たよ。でも、もう着替えてるんだね」

塔に現れた時からハルはいつもの私服姿である。ローブ姿も見てみたかった葵としては少し残念だったが、服装以上にハルと話ってきたことが嬉しかった。

（こんな時間が過ごせるなんて……）

この安らかな一時がずっと続けばいいのにと、葵は密かに願った。だがハルがマジスターである以上、彼と仲良くすることは危険と隣り合わせなのだ。それでも、最後の最後で話が出来たことが葵の決心を鈍らせていく。

（ハルには好きな人がいるんだから。どうしようもない）

自分に言い聞かせるように呟いて、葵は腰を上げた。ハルが壁に背を預けたまま見上げてくるので葵は微笑みを返す。

「私、もう行くね。最後にハルと話せて嬉しかった」

「最後？」

「うん。学校、やめるの」

「えっ、何で？」

「何でって言われても……」

マジスターのせいだとも言えず、葵は苦笑いをした。ハル自身は

そのことに気付いていなかったようで驚いた表情をしている。おそらくウィルやオリヴァーにも、自身と関わった女の子がイジメられるという自覚などないのだろう。そうして密やかに、マジスターと関わった女生徒は消されていくのだ。葵は改めてトリニスタン魔法学園にはびこる悪しき風習に嫌気がさした。

「辞めるんだ。寂しくなるな」

「……あのねえ、」

呆れと照れが混じった複雑な心境で葵はため息をついた。彼の身にどんな良いことがあったのかは分からないが今更饒舌になられても困惑するだけである。

「ほんとに、そう思ってるの？」

「思ってるけど？ あんたみたいに変な女、他にいないし」

そういう意味で言ったのかと、葵は脱力した。

（他に、どんな意味があるっていうのよ）

どこかで引き止められることを期待していたのだと知って、葵は自分を嘲笑う。明かりに照らし出された室内では葵の表情までもがはつきりと映し出されてしまっていた。葵の嘲笑をどう受け止めたのかは分からないが、ハルは思い立った様子で口を開く。

「あんたが聞きたがってた、あの曲」

「えっ？」

「あの曲は三つの声部が同じ旋律を追唱するんだ。十日のパーティーで演奏する予定だったんだけど、その頃にはもういないんだろう？」

「……う、ん……」

「俺のパートだけで良ければ、今弾くよ」

饒別のつもりなのか、ハルは立ち上がってバイオリンを取り出した。これ以上惨めな思いをする前に立ち去ろうと思っていた葵も、これには足を止めてしまう。そうして、月明かりとハルが作り出した小さな明かりの混じる独特な空間で、カノンの演奏は始まった。

（……ずるいよ。何でそんなにカッコイイの）

愛器に魂を吹き込む演奏が、音楽に注ぐひたむきな愛情が、バイオリンを奏でているハルの姿が、特別に思えた。十七年間の人生で出会った誰よりも 加藤大輝よりも 彼が輝いて見える。パーティーで演奏されるといふ完成されたカノンを聴きたいと思ってしまった葵は重症だと独白し、静かに目を閉じてハルの演奏に身を委ねたのだった。

本当の友達（1）

冬月期最後の月である秘色ひそくの月も終わりを迎え、世界は夏月期かげつに入った。冬月期の間に降り積もった雪も、夏月期最初の月である岩黄わきの月一日には跡形もない。気温もまた、前日までの寒さが信じられないほどの上昇ぶりを見せている。そんな夏の初め、丘の上に建つトリニスタン魔法学園の保健室に酷似したある人物の部屋で、開襟の胸元をはためかせている少女がいた。

「あつーい」

あまりの暑さにとろけそうになりながら、宮島葵は誰に対するものでもない不満を口にした。やって来るなり冷風を吐き出している送風機の前に陣取った葵を見て、この部屋の主であるアルヴァ「アロースミスは小さく息をつく。」

「ミヤジマ、そんな所に陣取るな。僕のところには風が来ないじゃないか」

誰が魔力を消費しているかと思っっているのだと、アルヴァは不満そうにぼやく。葵は長方形の送風機を抱いたまま、体を仰け反らせてアルヴァを見た。

「暑いなら白衣脱げばいいじゃん」

トリニスタン魔法学園の校医であるアルヴァは、おおよそ生徒が訪れそうもない密室にこもっていながらも白衣だけはきちんと着用している。白衣の下では腹が見えそうなほどシャツのボタンを外しているというのに、何故か白衣だけは脱がないのだ。また、トリニスタン魔法学園の生徒達も冬と同じく長袖のローブを常用している。それが規則なのかは知らないが、そんな暑苦しい格好をしてわざわざ汗だくになるなど馬鹿げていると、元いた世界で常用していた制服を着崩した格好をしている葵は思っていた。

「……脱いでいいのか？」

少し間があった後、アルヴァは真顔のまま返答を寄越した。ただ

白衣を脱ぐだけで裸になるわけではないのだが、アルヴァの口調が不穏だったので葵は慌てて体勢を立て直す。そして、力一杯首を横に振った。

「やっぱ、ダメ。なんかアルが言うところがやらしい」

「ミヤジマも利口になったものだな」

何をするつもりでいたのかは分からないが、アルヴァは陰湿な笑みを浮かべて見せる。ゾツとした葵は送風機の前から離れ、大人しくベッドに腰を下ろした。

「しかし、ミヤジマが心変わりしてくれて良かったよ。転校となると住居も移さないといけないし、色々と面倒だったんだよね」

デスクの引き出しから取り出した煙草に火をつけたアルヴァは脚を組み、いかにも面倒そうな口調でそんなことを言つてのけた。転校など初耳であり、葵は目を見張る。

「あの『仕方ない』って、そういう意味だったの？」

「どういう意味だと思つていたんだ？」

アルヴァに問い返された葵はため息をついてから口をつぐんだ。

どうやらアルヴァには初めから、葵を自由にさせる気などなかったようである。束縛されていることには嫌気がさすが、それは学校を変えたところで変わらない。それならばこの学園に残る決心をしてまだ良かったのだと、葵は自分を慰めた。

「それで、今日はどうだった？」

現在はずでに授業が終了した放課後である。この部屋を訪れた本来の目的を思い出した葵は一日の様子をアルヴァに語った。

全校女生徒による葵いびりは、魔法を行使しての強硬手段にまで至っている。自然属性の魔法が使えない葵には対抗する手段がないのだが、これまでは何処へ逃げてみても必ず発見されて嫌がらせをされたものだ。だが今日は、一度身を隠してしまえば見付かるようなこともなかった。それも偏に新しい指輪のおかげである。

「上々の仕上がりみたいだね。でも今度のリングは常に魔力を消費してる状態だから、今までより頻繁に補充しないといけないんだ」

「どのくらいのペースで？」

「三日に一度、というところかな。他の魔法を使った場合はもうちょよっと早くなるね」

「わかった、気をつける」

指輪の効果が切れたせいで、また髪の毛や制服を焼かれてはたまらない。そう思った葵は真剣な表情で頷いた。

「ところでミヤジマ、制服は？」

アルヴァの言っている『制服』はトリニスタン魔法学園の制服である白いローブを指している。以前のローブがボロボロになってしまったのでアルヴァが新しい物を用意してくれたのだが、葵はあえて着て来なかった。わざわざ異色な高校の制服を着ているのは『もう屈しない』という覚悟の表れである。それと、もう一つ理由があった。

「あんなの暑くて着てらんないよ」

「……なるほど。確かにその格好は涼しそうだね」

アルヴァが呆れたように言うのでムツとした葵はベッドから立ち上がった。アルヴァの目前まで歩み寄った葵は青いチェック柄のスカートの裾を掴み、気に入りのシルエツトを見せるために彼の前に一周する。

「可愛いでしょ、この制服。この制服が着たくて今の高校選んだんだよ」

「それ、ハイスクール高等学校の制服だったのか。いいね、スカートが短くて」

「どこ見てんのよ!!」

裾を広げて見せていた葵は慌てて手を離れた。アルヴァはしたり顔のまま、制服姿の葵を舐めまわすように視線を這わせる。

「若々しさが強調されていて青い果実って感じだね。でも僕は熟れて甘すぎる果実の方が好きなんだ」

「何の話してんのよ、この変態!!」

アルヴァのいやらしい視線に耐えられなくなった葵は捨て台詞を吐いた後、慌てて部屋を後にした。自分を偽らなくてもよくなった

せいか、あんなことを言われても不快感は残っていない。むしろ変わらない日常が清々しくさえ感じられた。だが、晴れ晴れした気分は長く続かなかつた。進行方向にたむろしている女生徒の姿が目に入り、葵は笑みを消す。

(いやな所にいるなあ)

一階の北辺にある保健室を出た後、葵は校舎の西側を通過してエントランスホールに向かっていった。女生徒達の集団は間もなくエントランスホールが見えてくる辺りでたむろしている。見付かったら何をされるか分からないので、葵は彼女達をやり過ぎすために踵を返した。少し戻った所にある階段を三階まで上り、校舎南の廊下を東に向かって進む。二階下はちょうどエントランスホールになっていて、葵はホールの反対側へ出てから再び階段を下ろうとした。

「あら、ミヤジマさんではございませんこと？」

背後から唐突に声をかけられたので、葵は足を止めて振り返った。名を呼ばれたことで察しはついていたが、そこにいたのはココ・シルヴィア・サリーの三人組だった。ココ達はクラスメートであり、一時は友人を演じていたこともあるが、葵がきっぱりと訣別の意志を告げて以来、彼女達も他の女生徒と同じく露骨に嫌がらせをするようになつていた。だが尻尾を巻いて逃げるのも癪なので、葵はゆつくりと歩み寄つて来る彼女達を佇んだまま迎えた。

「それにしても驚きましたわね。シルヴィアさん、サリーさん？」

三人の中央に陣取っているココが、わざとらしく驚いて見せながらシルヴィアとサリーに話を振る。シルヴィアとサリーはココの調子に合わせて大袈裟に頷いて見せた。

「わたくしも驚きましたわ。このところお姿を見かけなかったものですから、もうお辞めになったのかと思っていましたもの」

「これから退学届けを出しに行かれるのですか？」

表現は遠まわしなもの、彼女達は葵にも理解出来るように『この学園から出て行け』と言っている。そこまで率直に嫌味を言われると傷つく暇もなく、葵は呆れてしまった。

「辞めないよ。何であんた達に言われて辞めなきゃいけないの」

葵の反応が予想外のものだったのか、ココ達は瞠目した。作らない口調で言葉を交わすことが初めてだったので、そのことに驚いたのかもしれない。しかし彼女達はすぐ、驚きを治めて冷徹な顔を前面に押し出した。

「ミヤジマさん、貴方は本当に良家の子女ですか？ とてもそうは見えませんわ」

「アオイなどというファミリーネームは聞いたこともありませんし、きっと身分を偽って入学なさったのですわよ」

とても小声とはいえ言い難い声音でココに耳打ちの仕種をしたシルヴィアの発言に、葵は様々な意味合いを含んだ失笑を零した。その苦笑いが癢に障ったのか、シルヴィアが顔を赤らめる。

「何ですの、その笑い方。まるでわたくしをバカにしているようで失礼ですわ」

「バカになんてしてないよ」

軽蔑はしてるけどと、葵は胸中で付け加える。心の囁きが聞こえてしまったかのようにシルヴィアはさらに顔を赤くした。

「あなたのような落ち零れにバカにされる覚えはありませんわ！今すぐ謝ってください！！」

トリニスタン魔法学園に編入して以来、葵は授業でさえ自然属性の魔法を使って見せたことがない。使えないのだから仕方のないことだが、彼女達の目にはそれが『落ち零れ』として映っていたようだ。今まで口に出さなかったのは、胸焼けがするような彼女達なりの『友情』だったのだろう。上辺だけの付き合いであることなど初めから分かっていたことであり、葵は小さくため息をついた。

「やだ。あやまる理由がないもん」

「この！！」

逆上したシルヴィアはココやサリーの制止を振り切り、葵めがけて突進して来た。魔法を使われるかもしれないとは思っていたものの突進は予想外であり、葵は迫り来るシルヴィアの姿に目を見張る。

突き飛ばされた体が階段の上へ躍り出てしまったから、葵はまだ
呆然としたままだった。

本当の友達（2）

「ソマシオン、グランクッション！」

第三者の声が静かな校内に響き渡った直後、葵は何か柔らかいものの上に落下した。しかし柔らかいものごと階段を下る羽目になり、踊り場でぐったりと体を横たえる。何が起きたのか分からずに、天井を見つめていた葵は目を瞬かせた。

「しばらく留守にしている間にアステルダム分校も品位が落ちたものね」

「す、ステラ様！？」

頭上でそんな会話が聞こえた後、複数の足音が遠ざかって行った。葵は下敷きになっている柔らかいものの上で体を起こし、まだぼんやりしている頭を軽く振る。静けさを取り戻した校内では階段を下る一つの足音だけが耳についた。反射的に階上を仰いだ葵は、ゆっくりとした足取りでこちらへ来る人物に目を留めて嘆息する。平凡な家庭に生まれたことを初めて嘆きたくなるほど、その少女は別世界の者の空気を纏っていた。

「あなた、大丈夫？ どこか打たなかった？」

手を差し伸べてもらったものの、少女に見入っていた葵は反応を示すことが出来なかった。長いブロンドの髪が目を引き少女はトリニスタン魔法学園の制服である白いローブを纏っているが、明らかに他の生徒達とは違う。ぼんやりとヘーゼル色をした瞳を見つめていた葵はやがて、彼女の唇が動いていることに気がついてハッとした。

「えっ？ 何？」

とつさに口をついて出た言葉は、到底初対面の者に向ける科白ではなかった。葵は自分の過ちを察して慌てて口をつぐんだが、少女は気にした風もなく柔らかく微笑む。

「その様子なら大丈夫そうね。間に合って良かったわ」

そう言った後、少女は葵を指差して『イル・ルヴィヤン』と呟いた。その直後、葵の下敷きになっていた巨大なクッションが音もなく消え失せる。素足が冷たい床に触れて初めて、葵はあのクッションが少女の魔法によって出現したことに思いを及ばせたのだった。「ありがとう」

助けてくれた少女に、葵は改めてお礼を言った。葵に合わせてしやがみ込んでいた少女は裾を払って立ち上がり、まだへたりこんでいる葵に手を差し伸べる。少女に手を引いてもらって立ち上がった後、葵もスカートを払った。

「私、ステラ」カーティス。貴方のお名前は？」

「あ、宮島葵です」

問いに答える形で名乗った後、葵は引つかかるものを感じて首を傾げた。しかしすぐ、ステラという名がマジスターと結びついて、葵は驚きながら少女に視線を戻す。

(この子が、ステラ……)

葵はまじまじと、人形のようなバランス美を思わせるステラを観察した。華奢な体にふんわりとした長い髪が柔らかな印象を抱かせるが、彼女の面にはそうした雰囲気に反する意思の強さが表れている。きつい感じではないが、その強さが彼女を『特別』にしているようである。半ば見惚れながら葵がそんなことを考えていると、ステラが難しい表情をしながら口を開いた。

「ミヤジマ」アオイ……不思議な響きがあるお名前ね」

この世界では日本人の名前に馴染みがないようで、ステラも例によって眉をひそめている。その反応の後にどんな質問が来るか承知している葵は思わず身構えたが、ステラは葵の考えとはまったく別のことを口にした。

「制服を着ていないけれど、ミヤジマはこの学園の生徒？」

「……一応、そうかな」

素直に認めるにはまだ抵抗があったので、葵は『一応』という単語を付け足してしまった。葵の返答が煮え切らないものだったた

めか、ステラは目を瞬かせている。その件について深く突っ込まれないうちに話題を変えようと思った葵は、今度は自ら問いを投げかけた。

「ステラってマジスターでしょ？ 他の人達は私服なのに、何でステラだけ制服なの？」

「何故学園に制服が存在するか、ミヤジマは知っている？」

答えの代わりに問いを返されたので葵は首をひねった。小さく微笑んで見せた後、ステラは説明を始める。

「魔法を学ぶことは自然を理解しようとすることと同じ。自然を学ぶためには人間の心も自然に近い方がいいの。ゆったりしたローブは自然の限り無い包容力を表しているとされているわ。白は潔白だけど、何色にでも染まる事が出来る。若い心と似ているのよ。つまり、学生にぴったりの色彩ということね」

「え、えつと……」

何気ない問いかけが小難しい話に発展してしまい、よく分からなかった葵は困惑した。ステラは理解を求めようとはせず、葵に合わせるでゆっくりとした調子で言葉を次ぐ。

「私は魔法を学ぶ身としてトリニスタン魔法学園の理念に賛同しているの。だから制服を着ているというわけ」

それはつまり、ステラは校則をちゃんと知っていて、なおかつその校則に賛成しているということだ。そう察した葵は深く納得し、同時に、ステラのことをカッコイイなと思った。

（校則なんて髪染めるなどか理不尽なものだと思ってたけど、違うんだなあ）

久しぶりに生活指導の教諭の顔を思い出した葵は懐かしくなりながら口元を緩めた。葵は控えめなブラウンだったので嫌味を言われる程度だったが、金髪や明るい茶色に染めていた生徒はよく校則違反だと叱られていたものだ。だが規則には、規則を定めるに至った理由がある。ステラにそう教えられた葵はこの世界へ来た時になくしてしまった鞆に入っていたはずの、一度もまともに読んだことが

ない校則が書かれた生徒手帳のことを思い出していた。

（向こうに戻ったら読んでみようかな）

そう思ったのも束の間、自分の性格を省みた葵は明日には忘れていそうだと胸中で呟いた。

「ミヤジマは何故、制服を着ないの？」

ステラに問いかけられ、葵はギクツとした。葵の些細な変化を見逃さなかったようで、ステラはさかさずフォローを入れる。

「咎めているのではないから、誤解しないでね」

「あ、うん……」

「さっきの質問は単なる私の興味だから。答えたくなかったら答えなくてもいいわ」

「いや、あの、暑いから……なんだけど」

他の理由がないこともなかったが、葵が高校の制服を着用している一番の理由はここにある。そんな答えが返ってくるとは思っていなかったようで、ステラは瞠目した。その後、彼女は声を上げて笑い出す。

「すごく合理的！ だけど面白いわ、ミヤジマ」

笑いすぎて涙が滲んでしまったのか、ステラは目尻を指で拭いている。そんなステラを見つめていた葵は、この人好きだなと強く思った。

（飾らない……ありのままだ）

初対面であってもそう感じられるほど、ステラには堅苦しさがない。言葉の端々から真面目な性格なのだということが見て取れるが、彼女には押し付けがましさが微塵も感じられなかった。包容力とはこういうことを言うのかと、そう思った葵は密かに嘆息する。

（ハルが好きになるの、分かるよ）

分かってしまっただけは敵前逃亡も同じだが、葵には敗北感すらなかった。単純にステラのことを好きになってしまった葵は作らない笑みを浮かべる。

「ミヤジマっていうの、ファミリーネームなんだ。アオイの方で呼

んでくれると嬉しいな」

「そうなの？ ファミリーネームが先にくるなんて、ますます不思議」

「その辺は詳しく説明出来ないんだけど、いつか教えられそうだったら教えるよ」

「残念。でもアオイがそう言うのなら無理には聞けないわね」

「私もステラって呼んでもいい？ っていうか、もう呼んでるけど」
「もちろん！ お友達になりましょう、アオイ」

ステラから差し出された手を見て、葵は編入当初のことを思い出していた。お嬢様ぶって自分を偽っていた葵に、ココ達もそう言っ
て手を差し伸べてきたのだ。あの時は『お友達』という響きがひどく
空々しかったが、今は嬉しい気持ちしかない。

「こちらこそ、よろしく」

葵は笑顔で、ステラの細い手をしっかりと握り返した。

本当の友達（3）

トリニスタン魔法学園の校舎は敷地内のほぼ中央に位置している。校舎の南には広大なグラウンドがあり、西には一般の生徒が登下校するための魔法陣が描かれた正門が、北には葵とマジスターくらいしか使用していない裏門があった。そして校舎の東には、学園のエリアット集団であるマジスターが溜まり場として使用しているドームがある。全面ガラス張りのこのドームは温室になっていて、季節に關係なく様々な花が咲き乱れているのだ。そのためこのドームは、一般的に『シエル・ガーデン大空の庭』という名で呼ばれていた。

シエル・ガーデン内は出入口となる扉さえ設けられていない密閉された空間だが、いつも柔らかな風が吹いていた。半円形のドームは使用面積が広大なうえ全面が外の風景を映すガラス張りになっているので、風まで吹いているとなると室内にすることが嘘のように感じられる。甘い花の香りに包まれながらガーデン内を歩いている葵は、相変わらず現実離れした場所だと思いつながら歩を進めていた。シエル・ガーデンの中期には水路に囲まれた場所があり、周囲より数段高くなっているその場所には白いテーブルとイスが置かれていた。そこは人間が花を愛するための場所になっていて、葵はここでキリル^{II}エクランドを除くマジスターとお茶をしたことがある。だが今は、葵とステラの他には誰もいなかった。

「どうぞ、座って」

プライベートな空間に客人を招き入れた時のように、ステラは気軽に葵を促した。ステラが先に腰掛けたので、葵は彼女と向かい合う形で白いイスに腰を落ち着ける。

「アン・テ、アフタヌーンティー」

ステラがイスに座ったまま指示を出すと、テーブルに置かれていたシルバーの茶器がひとりでお茶の準備を始めた。魔法を使ってお茶を淹れること自体は珍しいことではないが、茶葉がブレンドさ

れるのを見るのは葵にとって初めてのことである。些細なことだが彼女のこだわりを感じた葵は、優雅なことを自然にやっつてのけるステラに感心してしまった。

「どうしたの、アオイ？」

「あ、うん。アフタヌーンティーってブレンドするもんなんだと思っつて」

「午後に愉しむお茶を『アフタヌーンティー』と言うから、ブレンドティーにするかどうかは好き好きね。アオイはあまり、紅茶は飲まない？」

「そんなこともない、と思うけど……どうなんだろう」

この世界で『お茶』と言えば紅茶が一般的なようだが、葵にはこの世界に来るまで、それほど紅茶というものに馴染みがなかった。スーパーやコンビニで売っている紅茶はたまに買うこともあったが、大好きというほどでもない。だがこの世界へ来てからは、どこへ行っても紅茶を出されるため、あまり他の飲み物を口にした記憶はない。そういった事情があるため、葵の答えはやや曖昧なものになってしまったのだった。

「私はいつも、アフタヌーンティーにはブレンドの紅茶をいただくの。けれど好みは人それぞれですね、お口に合わなければ淹れなおすわ」

ステラがそんなことを言い出したので、葵は慌ててカップに手を伸ばした。ソーサーから持ち上げられたティーカップはまだ十分な熱さを保っていて、湯気と共に濃密な香りが漂ってくる。琥珀色の液体をゆっくりと一口含んで、葵はカップをソーサーに戻した。

「おいしい」

「よかった！ この紅茶のブレンド、私のオリジナルなの。アオイが気に入ってくれて嬉しいわ」

「オリジナル？」

「そう。オリジナルの呪文スベルよ」

葵はステラが『オリジナルブレンドの紅茶を生み出した』ことに

目を瞬かせたのだが、ステラから返ってきたのは葵の驚きから少しズレた言葉だった。ステラの発言にさらに驚かされた葵は再びまばたきを繰り返す。

「えっ？ 魔法って自分でつくれるものなの？」

教えてもらうことしか知らなかった葵にとつて、それは目から鱗が落ちるような発見だった。オリジナルブレンドの紅茶を一口含んだ後、ステラはカップをソーサーに戻してから葵の疑問に答える。

「私たちが何気なく使っている魔法も先人達が試行錯誤の末に生み出したものよ。そう考えれば私やアオイが新しい魔法を生み出したとしても不思議はないでしょう？」

葵は頷き返しながらも、ステラの凄さを改めて感じていた。彼女は簡単なことのように言うが、新たなものを生みだすためには閃きのセンスと知識が必要なのだ。オリジナルの魔法を作り出せる者は魔法の根幹を熟知している、ということなのだ。魔法の根幹、それは自然と人間を結ぶ呪文を構成する文字である。

(すごいなあ……)

ステラは同列のように扱ってくれたが自身が魔法を使うことの出来ない葵が新たな魔法を考案するなど夢のまた夢である。だがステラの『学び』に対する姿勢をカッコイイと思った葵は密かに、今までおざなりにしてきたことをやってみようかという気になっていた。テレビもゲームもないこの世界では、幸か不幸か時間は有り余っているのだ。

シエル・ガーデンで他愛のない話をしながらゆっくりとした時間を楽しんでいると、不意にステラが花園の方へ顔を傾けた。つられた葵も、何事かと視線を移す。するとそこにはいつの間にも出現したのか、私服姿の四人の少年の姿があった。彼らがこちらに向かって来ていたので葵は慌てて席を立つ。

「どうしたの、アオイ？」

ステラがキョトンとした表情で尋ねてくるので反射的に逃げようとしていた葵は苦笑いをした。もう、マジスターから逃げてもどう

にもならないのだ。

マジスターの一員らしく、ステラは笑顔で少年達を迎えた。知り合いには違いないが、どう声をかけていいのか分からなかった葵は沈黙を保っている。誰よりも先に口火を切ったのは黒髪の少年キリル。エクランド　で、彼は葵を指差しながらステラに問いかけた。

「この女、何？」

「彼女はミヤジマ。アオイ。さっきお友達になったの」

キリルとステラが話をしている横で赤髪の少年　ウイル。ヴィンス　が葵に視線を送りながら小さく肩を竦めて見せた。ウイルに同調するように、茶髪の少年　オリヴァー。バベツジ　も苦笑いを浮かべている。ウイルとオリヴァーは互いに顔を見合わせた後、再び葵に視線を注いだ。

「やっぱり覚えてなかったね」

声をかけてきたのはウイルである。キリルに見事なまでに忘れ去られている葵は覚えていられても困ると思ひ、ウイルに苦笑を返した。

「何の話だよ」

自身が話題に上っていることを察したようで、キリルが不機嫌そうにウイルを睨む。ウイルが素知らぬ顔で目を逸らすと、キリルの怒りは葵に向けられた。真っ向から鋭いまなざしを向けられた葵は反射的に体を震わせる。自身でも無自覚だったのだが、殴られた恐怖と痛みが密やかに尾を引いていたようだった。

「こんな所まで入り込みやがって、図々しいんだよ。部外者は出てけ」

キリルの語気は険しく、それまで和やかだったシエル・ガーデンに張り詰めた空気が漂った。突然敵意を向けられた葵はあ然としていたが、やがて沸々と怒りがこみ上げてきた。

(何でそこまで言われなきゃいけないのよ)

このドームは確かに、マジスターの領域であるのかもしれない。

だがキリル一人のための場所ではなく、葵はマジスターであるステラに誘われてここへ来たのだ。そう言い返そうかとも思ったのだがキリルの目は冷たく、葵は反撃に出る前に怯んでしまった。

「キル、言いすぎ」

険悪な沈黙を破ったのはどこか間延びしたハルの声だった。諫められたことが癪だったのか、キリルは葵から視線を転じてハルを見る。

「何だよ、ハル。お前、この女を庇うのか？」

「庇うも何も、今はキルが悪いでしょ」

ハルが応えるより先にウイルが口を挟んだので、キリルは再び彼を睨んだ。オリヴァーまでもがハルの意見に同意したことで、その場に不穏な空気が流れる。喧嘩になりそうだと察したのか、それまで静観していたステラが彼らの間に割って入った。

「私があオイを誘ったの。ここは皆の場所ですもの、先に訊いておけばよかったわね。ごめんなさい、キル」

ステラに正面から謝られたキリルは突然、毒気を抜かれたような表情になった。彼はステラから視線を外し、どうしたらいいのかわからないといった風に頭を掻いている。そんなキリルに笑みを向けた後、ステラは葵を振り返った。

「ごめんなさい、あオイ。キルは口が悪いけど、悪気はないの」

「えっ？ あ、うん」

反射的に頷いてしまったものの、葵は後味の悪さを感じていた。

それはキリルも同じらしく、彼は嫌そうな表情をしてステラを見る。

「何だよ、その言い方。まるでオレが悪いみたいじゃないか」

「悪いのは、私。キルもあオイも悪くないわ」

ステラがあっさりと自らの非を認めてしまったため、キリルは言い返すことも出来ずに口をつぐんだ。何とも言えない気分になった葵は密かに渋面をつくる。

（ステラって、やっぱり特別なんだなあ）

葵がステラと同じことをした場合、キリルは問答無用で殴りかか

つてくるだろう。今もステラがいなかったら、こちらの言い分など聞く耳もなく殴られていたかもしれない。そんな傍若無人な子供を、^{キリル}ステラは簡単にあしらうことが出来るのだ。

ふとハルに目を留めて、葵はドキツとした。ハルの視線はキリルと会話しているステラに向けられているのだが、その表情は見たこともないくらいに柔らかい。噂が単なる噂ではないと直感した葵はいたたまれない気持ちになって目を伏せた。

「……ステラ」

葵が呼ぶとステラはキリルとの話を中断させて振り向いた。初めて教室へ行く前に幾度も練習させられた笑みを顔にはりつけ、葵は言葉を次ぐ。

「私、そろそろ帰るね」

「もう帰ってしまうの？」

「うん、ちよつと用事があるから」

「そうだったの。引き止めてごめんなさい」

「ううん、平気。じゃあね」

ステラに軽く手を振って見せた後、葵はテーブルの上に置いていた魔法書を手にしてその場を離れた。蜜が香る花々に囲まれた歩道を直進し、移動のために描かれている魔法陣も素通りして徒歩で外を目指す。しかしどこまで進んでも出口らしきものはなく、葵は仕方なく踵を返すことにした。

気まづくなつて立ち去つた場に、再び戻るのは気が重い。しかし転移魔法を使えない葵は一人でドームを出ることすら出来ないのだ。頭ではそう理解していてもやはりマジスター達の所へ戻る気にはなれず、葵は魔法陣の上で歩みを止めてしまった。戻ることも進むことも出来ず、小脇に抱えている役に立たない魔法書が無意味に重い。使えないと分かっているにもかかわらずにはいられず、葵は『アン・ルヴィヤン』と呪文を唱えてみた。

（あれ……？）

急に眩しくなつて瞑つた目を開けた刹那、視界に映る風景は一変

していた。どこまでも続いていそうだった庭園の代わりに、今は見知った屋敷が瞳に映っている。足元に目を落とすとそこには魔法陣が描かれていて、葵は眉根を寄せながら顔を上げた。

（なんだ、使えるんじゃない）

今まで『転移魔法は使えない』と思い込んでいた葵は、その呪文を口にしてみることにさえなかった。しかし実際は、こうしてドームから家への帰還に成功してしまっている。アルヴァにこのことを話そうと考えたのも束の間、どっと汗が噴き出してきた葵は急に息苦しさを覚えた。

（……あつい……）

どういった仕組みになっているのかは分からないが、シエル・ガーデンの内部は陽光が注いでいても快適だった。だが外の空気は蒸されていて風もなく、じめじめと暑苦しい。日焼け止めが欲しいと切に思った葵は分厚い魔法書を盾にして、小走りで屋敷のエントランスへと向かったのだった。

本当の友達（４）

シエル・ガーデンでステラとお茶をした翌日、授業が終わってから保健室を訪れた葵は脇目も振らず空いているベッドに直行した。やって来るなりベッドに倒れ、そのままぐったりと横たわっている葵を見たアルヴァは席を立ち、ゆっくりと彼女の傍へ歩み寄る。葵は仰向けに寝転んだまま、アルヴァに疲れた笑みを向けた。

「ステラ」カーティスを味方につけるなんて、やるじゃないか」

アルヴァはすでに葵が疲弊している理由を知っていたようで、そんな言葉を投げかけてきた。起き上がった葵は浮かない顔をしてベッドの端に座りなおし、深くため息をつく。

「そんなつもりじゃなかったんだけど……」

ステラと友達になったのは、単に彼女が好きだったからである。だがステラと仲良くなったおかげで全校女生徒の態度が急変したことも確かであり、葵は言葉を濁すしかなかった。

トリニスタン魔法学園の生徒にとってマジスターは絶対的な存在である。それは彼らの容姿や財力もさることながら、魔力の違いによる影響が大きい。普通に考えれば玉の輿を狙う女生徒達にとってステラは邪魔な存在だが、葵のように力づくでどうこう出来る相手ではないのだ。また他のマジスターとも仲が良かったため、彼らの印象を悪くしないためにはステラに媚びるしかない。よって、彼女達はステラに従う他ないのだった。ただ強制的な上下関係に思えても圧制感はありません、どちらかというとステラは、トリニスタン魔法学園に通う女生徒にとって憧れの存在のようだった。

ステラと友達になるということは全校女生徒を牽制することになるだけでなく、全校男子を味方につけたことにもなる。そのおかげで今まで葵に無関心だった男子生徒達まで媚びてくるようになったのだ。そんな風に学園が一変してしまったため、葵はいらぬ疲労をすることになったのだ。

「何もされないのは助かるけど、色んな人が話しかけてくるからうざい。私の機嫌とってマジスターに近付きたいっていうのがミエミエなんだよね」

昨日、葵を階段の上から突き落としたりシルヴィアでさえ、引きつった笑みを顔に張り付けながら話しかけてきたのだ。これでは生徒達の変わり身の早さに呆れるなど言う方が無理だろう。

「それだけマジスターの影響力が大きいということだよ」

アルヴァがアイスティーをくれたので、葵はありがたく受け取って一息に干した。空いたグラスを枕もとの台に置いてから、葵は改めてアルヴァを見る。

「ねえ、アル」

「何だ？」

「また文字、教えてくれない？」

葵の申し出に驚いたのか、デスクに戻ってイスに座ろうとしていたアルヴァは一瞬動きを止めた。椅子の位置をわざわざ振り返って確かめた後、アルヴァはしっかりと腰を落ち着けてから葵を見据える。

「また、急だね。何か心境の変化でもあった？」

「まあ……ちよつとね」

「ミヤジマが自分から学ぶ気になってくれて嬉しいよ。何なら、家まで行って教えてあげようか？」

「……それはいい。授業が終わったら来るから、ここで教えて」

「了解。それで、どうして急に学ぼうという気になったんだ？」

一度は流した話題を蒸し返され、葵は苦笑いを浮かべた。出来れば流したままで終わらせたかったのだが、葵は仕方なくアルヴァの問いに答える。

「ステラがカツコイイと思ったから」

「ステラ⇨カーティス？」

「うん。何かに一生懸命な姿って、いいなって思ってた」

「ああ……ステラ⇨カーティスは探求の徒だからね」

ステラの人となりをそれなりに知っているらしく、アルヴァは得心したように頷いた。『探求の徒』の意味が分からなかった葵は微かに眉根を寄せる。葵の細微な変化を見逃さなかったアルヴァは饒舌気味に説明を加えた。

「模範的な生徒、ということだよ。彼女の場合は魔法開発もしているから、すでに生徒の域を超えているけどね」

「あ、そうそう。魔法って自分でつくれるものなんだったね」

「ミヤジマにも出来るよ。使える使えないは別にしても、文字を学べばオリジナルの呪文スベルを生みだすことは出来るから」

「そうなんだ？ 使えないのに新しい魔法がくれるって、なんか不思議だね」

もともとパズルなどの細かな作業が好きな葵は言葉の組み合わせ次第で魔法を生みだすことが出来ると聞いてワクワクしてきた。これは、魔法を使えなくても文字を学ぶ意味がありそうである。そこで昨日の出来事を思い出した葵はアルヴァにその話をしてみることにした。

「そういえば、私にも転移魔法って使えるんだね。今まで使えないとばかり思ってたから、ビックリしちゃった」

「使ったのか？ 転移魔法を」

「うん、昨日ね。でも今朝、学校に来る時に使おうと思ったら出来なくなってたけど」

「それは、そうだろうね」

アルヴァが『当然だ』と言わんばかりの表情をしているので不可解に思った葵は首をひねった。言葉にしなくとも疑問は伝わったよ
うで、アルヴァは一つ息をついてから言葉を次ぐ。

「指輪リングの魔力が空になっているから、今はどんな魔法も使えないはずだよ」

「あ、そうなんだ？ でも昨日、補充したばかりだったよな？」

「昨日の今日で何故、リングの魔力が激減したのだと思う？」

「……もしかして、転移魔法を使ったから？」

「要は、そういうことだ。ミヤジマは転移魔法を使えないわけじゃないが、使つて欲しくないんだよ」

転移魔法は魔力の消費が激しく、指輪に蓄えている微々たる魔力では使えたとしても一回が限度である。まして葵の指輪は常に魔力を消費しているような代物なので、転移魔法を使うタイミングがもう少し遅ければ魔法は発動さえしなかつただろう。そこまで説明したところでアルヴァは席を立ち、再び葵の元へ歩み寄つて来た。彼が何をしに来たのか承知している葵は、無言で右手を差し出す。葵の差し出した手を受け取つたアルヴァは中指の指輪に口づけ、その後は何事もなかつたかのように指定席へと戻つて行つた。

「せっかくだから少し、無属性魔法についての話をしようか」

「あ、聞きたい」

魔法への興味が高まっていたこともあり、葵はアルヴァの提案を喜んで受け入れた。手短に終わる話ではないようで、アルヴァはデスクの引き出しから煙草を取り出して火をつける。吸い込んだ煙をゆっくりと吐き出してから、彼は講義を開始した。

「例えば紅茶を淹れる時、僕達は呪文を唱える。ミヤジマ、アイステイーを淹れてみようか」

アルヴァの求めに従つて、葵は『アン・テ、フロワ』と呪文を唱えた。するとアルヴァのデスクに置かれていた茶器が葵の呪文に反応し、ひとりでにアイステイーを淹れ始める。グラスに注がれたアイステイーを片手に、アルヴァは説明を続けた。

「この茶器やグラスは市販のものだ。そして市販の物には大抵、用途に合わせた呪文が刻まれている。物に刻まれている呪文が魔法を使った者の呪文に反応してひとりでに動く、これが無属性魔法の大原則だ」

「へ〜、そうだったんだ」

「モノに刻まれている呪文は見せない決まりになっているからね。ミヤジマは気がつかなくなつたんだろう」

「何で見せないことになつてるの？」

「技術保守つてやつだよ。長くなるから、この話はまたの機会にしよう。物に働く作用は、これで理解出来たか？」

「うん。大体分かったと思う」

「じゃあ次に、転移魔法だ。これも無属性魔法の一種だけど、これは相手が物じゃない。僕達が唱えた呪文は何に作用するのだと思う？」

「えっ……何だろう？」

それまで説明を受ける側だったのが不意に答えを求められ、何も思い浮かばなかった葵は考えこんでしまった。しばらく待ってみても回答がなかったためか、アルヴァがヒントを口にする。『転移魔法を使った時の状況を思い出してみるといい』との助言を受け、葵は昨日の出来事を思い返してみた。

「あ、わかった。魔法陣だ」

「正解。転移魔法の場合、呪文は魔法陣に働く。魔法陣は魔法の発動を佑けると共に目印の役割も担っているんだ」

例えば登校をする際には、トリニスタン魔法学園の生徒は自宅にある魔法陣から学園にある魔法陣へと魔法を使って転移する。このように、転移魔法は基本的に魔法陣を介するものなのだ。しかし例外的なものもあり、その一つが『アン・ルヴィヤン』という呪文である。これは『帰還』を意味する呪文であり、この呪文を唱えた者は予め指定されている魔法陣へと召喚される。『アン・ルヴィヤン』の呪文には移動するべき場所が一つしかないので、魔法を使う者が魔法陣の上に立っている必要はないとのことだった。

「へええ〜。色々、キマリがあるんだね」

原則から外れた例外が存在するなどややこしいことには違いないが、理解出来れば面白そうな話である。そう思った葵は今聞いた内容を整理しようと頭を働かせていたのだが、ふと、アルヴァから注視されていることに気がついて眉根を寄せた。

「何？」

「今のミヤジマ、探求者のような顔をしているよ。すごく魅力的だ」

「えっ、あの、ありがとう」

アルヴァに褒められたのなど初めてのことであり、どう反応すればいいのか分からなかった葵はとりあえずお礼を言った。アルヴァは急に師匠のような顔つきになって、穏やかに笑う。

「何を学ぶにしても情熱は必要だからね。いいことだよ」

そこでいったん話を終わらせ、アルヴァは唐突に話題を変えた。

「だけどミヤジマ、ステラ^{II}カーティスとはあまり仲良くしない方がいいんじゃないの？」

「……どうして？」

「どうして、って……彼女はハル^{II}ヒューイツトの想い人じゃないか」

「ああ……」

そのことかと、葵は胸中で呟いた。だが返す言葉はなく、葵は沈黙を守る。葵が何も言わないのでアルヴァは不可解そうな表情をした。た。

「恋敵ライバルと親しくなっていてどうしようっていうんだ？ それとも、そういう作戦なのか？」

「作戦って」

ライバルだの作戦だの、考えてもみなかった単語が次々に飛び出したので葵は笑ってしまった。

「そんなことを考えてないよ。ただ、ステラが好きだと思ったから友達になっただけ」

「呑気なことを言っていると負けるよ？ ただでさえミヤジマは色々劣ってるんだから」

「……さりげなく失礼なこと言わないでよ」

そう切り替えたものの、アルヴァの言っていることが本当のことだったので、葵には腹を立てる気さえ起らなかった。ステラは、トリニスタン魔法学園にあふれている自称『良家の子女』とは格が違うのである。そんな人物と張り合おうと思うほど、葵は自分に自信を持つてはいなかった。しかしアルヴァはまだ納得していないよ

うで、話を続ける。

「分からないな。確かに相手は格上だけど、ミヤジマは張り合う前から諦めているように見える」

「じゃあ聞くけど、アルは私がステラに勝てるって思う？」

「今のままじゃ無理だろうね」

「そう思うならほっといてよ」

早くにこの話題を終わらせたかった葵はふてくされた表情を作ってそっぽを向いた。アルヴアは呆れた顔をした後、顔を背けている葵に哀れみのまなざしを向ける。

「そこまで自分を卑下しなくてもいいじゃないか。ミヤジマだって磨けば光るかもしれない」

そこでアルヴアは、何なら自分が手助けをしてもいいとまで言い出した。彼の発言はまるでステラと張り合えと言っているようなものであり、訝しく思った葵は眉をひそめながら背けていた顔を戻す。「アルさあ、何でそこまでステラと張り合わせたがるの？　なんかアヤシイんだけど」

「失礼な。僕はただミヤジマの幸せを願っているだけだ」

「その一言が一番アヤシイ。何か隠してるでしょ？」

「ミヤジマがそこまで言うのなら、本当のことを言っよ」

アルヴアから返ってきたのは意外にも素直な反応だった。いつもは何でも隠したがる彼が率直な態度に出ることは珍しく、かえって気味が悪くなってしまうた葵は顔を強張らせる。しかし葵が身構えたことなど眼中にないようで、アルヴアは真顔のまま言葉を次いだ。「僕がミヤジマの恋愛に口を出すのはね」

「な、何？」

「ミヤジマを愛しているんだ。だから気になるんだよ」

「うそっ！？」

「もちろん嘘だよ」

一瞬にしてパニックに陥った葵は、そのまた一瞬後にはがっくりと脱力した。葵のバカ正直な反応を見てアルヴアは笑っている。い

いようにならかわれた葵は自分の単純さを呪いたくなった。

「不可解なんだよね。傍目からでもハル〃ヒューイットが好きだって分かってるのに自分ではなかなか認めようとしないし、今度は恋敵とまで仲良くなってしまうている。一体ミヤジマは何をしたいんだ？」

ひとしきり笑った後、アルヴアは真顔に戻って真意を口にした。その一言から導き出されるアルヴアの思惑は、単に自分が抱いている疑問に答えを得たいということだけである。そんな理由でうるさく言われては堪らないと思った葵は少し憤った。

「そんなの、アルに関係ないじゃん」

「確かにそうんだけどね。性格上、疑問はそのままにしておけないんだ」

アルヴアはステラのことを『探求の徒』と表現したが、彼自身もよほど熱心な探求者だ。しかしそれは、アルヴアの身勝手である。

答える義理がないと思った葵は側に置いてあつた魔法書をひったくり、ベッドから飛び降りた。

「帰る」

「ミヤジマ、勉強は？」

「今日はもういい！」

鼻息も荒くアルヴアを拒絶した葵は保健室を出て、後ろ手にピシヤリと扉を閉めた。葵はしばらくその場にいたが、アルヴアが追つて来るような気配はない。保健室のドアに背を預けた葵は高い天井を仰ぎ、重いため息をついた。

（何でいつも、こうなるかなあ）

今日はアルヴアと少しだけ分かり合えたような気になっていたのだが、結局はいつもの結末である。葵も怒りたくて怒っているわけではないのだが、アルヴアがふざけるからいけないのだ。

（たった一人の味方のはずなのに、相性悪いなんてサイアク）

しかしそれは、今に始まったことではない。気分を切り替えるように頭を振って、目を開けた葵は目前に佇む人物がいることにギョ

ツ
と
し
た。
。

本当の友達（5）

「ステラ」

葵が驚いた声を上げると、ステラは『やっ」と気付いてもらえた』
というような息をついた。たまたま廊下を通っていたのか、それともこの辺りに用事があったのかは定かではないが、彼女は葵が保健室から出てくるのを見て歩みを止めたような雰囲気である。とつさに、この場所から早く離れようと考えた葵はすぐさまステラを促そうとした。だが、それよりも早く葵の背後に目をやったステラが不思議そうな表情をしながら口火を切る。

「ウサギ先生と話をしていたの？」

ステラが、彼女の発言としては似つかわしくない素っ頓狂なことを言つてのけたので、葵はぽかんと口を開けた。

「ウサギ、の先生？」

「えっ？ 違うの？」

葵から驚きが返ってくるとは思っても寄らなかつた様子で、ステラは困惑顔になる。ステラが何を言っているのか理解出来なかつた葵も困惑したが、やがてあることに思い至って眉根を寄せた。

（そついえば……）

以前に一度、アルヴァのいない『保健室』で葵は白いウサギを目撃している。おそらくステラの言う『ウサギ先生』とは、人語を自在に操る、あの奇妙なウサギのことなのだろう。そしてステラがサラッと『ウサギ』に『先生』という呼称を用いている以上、この学園ではあのウサギが一般的な存在だと思われる。あまり深い話に入り込まない方が良さそうだと直感した葵は、さりげなく話題を変えることにした。

「ステラも保健室に用事があったの？」

「ううん。私はアオイに話があつて、探していたの」

「私？」

「アオイは魔力が見えにくいから、探そうと思うと大変なのね。ここで会えて良かったわ」

ステラが魔力の話を持ち出したので、葵は改めてアルヴァからもらった指輪の力を実感した。アルヴァが指輪に刻んだ呪文は、マジスターであるステラすら惑わすのだ。それは即ち、アルヴァの魔力がマジスターよりも強大だということにはならないか。

(アルつて、案外すごいんだ)

感心したのも束の間、ある事実を察してしまった葵は不服に唇を尖らせた。トリニスタン魔法学園の教師であるアルヴァが、生徒のエリート集団であるマジスター以上の力を持つていても不思議はない。だがそれだけの力を有しているのならば、葵が孤立していた時に助けてくれても良さそうなものである。それでもあくまで傍観者を決め込んでいたアルヴァを、葵は改めて薄情者だと思ったのだ。

「昨日はごめんね。まさかキルがあんなに怒るなんて思わなかったの」

歓談もそこそこにステラが本題らしき話題を口にしたので、考え事をしていた葵は我に返って首を振った。

「いいよ、気にしてないから。それを言うために、わざわざ探してくれてたの？」

「それと、アオイにお願いがあつて探していたの」

「お願い？」

「アオイの持つている魔法書、見せて欲しいの」

「これ？」

ステラの真意を量りかねた葵は首を傾げながら、レイチェルからもらった魔法書を掲げて見せた。葵が手にしている魔法書の表紙に目を留めたステラは興味津々といった風に瞳を輝かせて頷く。

「その表紙の魔法陣、レイチェル「アロースミスのものよね？ 彼女の著書はほとんど持つているのだけれど、アオイの持つている魔法書は見たことがなくて」

ステラの口ぶりがレイチエルを尊敬していると言っているように聞こえたので葵は内心で驚いていた。そのために返事が遅れてしまい、ステラが表情を曇らせる。

「魔法書を他人に見せるのは手の内を明かしてしまうようなものだね。不躰なお願いをしまして、ごめんなさい」

魔法書がそのような意味を持つことなど知らなかった葵にとってステラの憂慮は見当違いなものだった。誤解を解こうと思い、葵は慌てて口を開く。

「違うの、ちょっと考え事をしてただけ。ここじゃ何だから、どこかに移動しない？」

「見せてくれるの？」

「うん、いいよ。どうせ私には……」

決められた魔法しか使えないのだから意味がないと言おうとして葵は口元を手で押さえる。ステラが不思議そうな顔をしていたが葵は笑って誤魔化した。

「どこに行こうか？ 魔法書を見るなら机がある所がいいよね」

「それなら、私の家へ行きましょう」

「……え？」

突然の申し出に、葵はぽかんと口を開けた。その反応が嫌がっているように見えたのかステラは気遣わしげな表情になる。

「嫌？」

「えっ、ううん。ちょっとビックリしただけで、全然イヤじゃないよ」

「良かった。それなら、行きましょう」

ステラはにこりと笑うとすぐ、葵の手を取った。そしてそのまま彼女は『アン・ルヴィヤン』と呪文を唱える。視界が光に閉ざされて体が浮遊感に襲われた後、葵は見知らぬ屋敷の玄関先に佇んでいた。まだ屋敷のエントランスホールにも達していなかったが魔法陣の傍には使用人風の男性が佇んでいて、彼はステラに向かって浅く頭を垂れる。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

「ただいま戻りました。今日は友人と食事をとりますので、部屋の方へ運んでください」

「かしこまりました」

ステラとの会話を終えたロマンズグレーの執事は葵にも一礼した後、ゆっくりとした足取りで屋敷の方へと去って行った。執事の登場によってステラが本物の『お嬢様』なのだと思感した葵は改めて感嘆の息を吐く。しかしこれが『普通』であるステラには何の感慨もないようで、彼女はさっさと屋敷の方へ歩き出した。

カーティス家の邸宅はいかにも富豪らしい広大な面積を使用しているもので、エントランスホールの造りもトリニスタン魔法学園並みに豪華だった。元いた世界で同じ光景に遭遇すれば必ず嘆息していただろうが、葵はすでに豪華な建造物を見慣れはじめている。そんな自分に幾分かの不安を覚えつつ、葵はステラの後に続いて大理石の廊下を進んだ。

「ここが私の部屋なの」

一階にある、とある部屋の前で足を止めたステラは葵を振り返って扉を指し示した。二枚造りになっている扉はやはり豪華な代物で、その内側に広がっているであろう広い空間を想像させる。だがステラが扉を開いた時、葵の目に飛び込んできたのは開放感に溢れる光景ではなかった。室内で圧倒的な存在感を放っている本棚が、むしろ圧迫感を持って迫ってくるのだ。想像と現実とのあまりのギャップに、葵はあ然とした。

「もしかしてこれ、全部魔法書？」

この世界に小説や実用書があるという話は聞いたことがなかった。葵は呆けたままステラを振り返った。ステラは軽く頷き、葵を室内へと誘いながら言葉を紡ぐ。

「隣の部屋を書庫にしている、そこにはもつと沢山の本があるの」

六畳ほどだった葵の部屋も文庫やハードカバーで埋め尽くされていたものだが、ここは桁が違う。葵も本好きだが、ステラの熱意に

はとても対抗出来そうになかった。

「そんなに勉強してどうするの？」

勧められたソファに腰を下ろしながら、葵は素朴な疑問を口にしてみた。するとテーブルを挟んで向かいに座ったステラが口元に手を当てて考えに沈みこむ。葵は何か気に障ることを言ったかと不安に思ったが、ステラはすぐに目を上げた。

「世界の理を知りたいの」

ステラが口にしたことは魔法を学ぶ者にとって究極の目的である。だが魔法というものの本質が見えていない葵には、そのようなことは分からない。ただステラが、何か決意のようなものを胸に秘めていることは肌で感じられた。

「それがステラの目標なんだ？」

「私は、本当は家の繁栄を考えなければならぬ。それがカーティス家を継ぐ者の使命。だから、今の話はナイショにしてね」

例えマジスターであろうと、良家の子女にとつての使命はトリニスタン魔法学園に通う女生徒達もステラも、変わらないようである。少し感傷的な笑みを浮かべているステラを見て、葵は物悲しい気持ちになった。

（やりたいことがあるのに出来ないんだ。家に縛られるって大変なんだね）

格式や由緒といったものが一般的ではない現代日本に生きていた葵にとつて、ステラの悩みは物語の中で語られるような遠い世界のものである。今まで意識したこともなかったが葵は初めて、ある程度は自由にさせてくれていた両親に感謝したい気分になった。

（お父さん、お母さん、元気かな……）

ありがとうと言いたくても会えない両親に思いを馳せ、葵は小さくため息をつく。空気がしんみりしてしまったため、それを拭うようにステラが明るい声を発した。

「アオイ、紅茶でも飲まない？」

「あ、うん。いただきます」

葵が頷くとステラはすぐティーポットに指示を出した。テーブルの上に置いてあったシルバーの茶器が宙に舞い、カップに紅茶が注がれていく。葵は魔法の邪魔にならないよう、テーブルの隅に魔法書を広げて見せた。よほど興味があったのか、ステラは紅茶にも口をつけずに魔法書を覗き込む。パラパラとページをめくった後、ステラは怪訝そうな顔をして葵を見た。

「この魔法書、どこで手に入れたの？」

「それね、もらいものなんだ。もともとは別の人が使ってたものなの」

「別の人というのは、子供？」

「何で分かるの？」

何も話さないうちから言い当てられたので葵は驚いたのだが、ステラは納得したように頷いた。

「この本に収められているのは初歩的な魔法ばかりだから、子供の教材みたいだと思ったの。レイチエル「アロースミスは失われた魔法に関する著書が多いから、こういった本はレアね」

「ああ……：そういえば、レイがそんなこと言ってたかも」

葵が持っている魔法書は、もともとはユアンのために書かれた本である。そのことを思い出した葵は何気なく独白を零したのだが、ステラが不意に目を剥いた。

「レイ？ レイチエル「アロースミスのこと？ アオイは彼女に会ったことがあるの？」

「えっ、うん。その本、レイにもらったんだよ」

「信じられない！ アオイ、あなたって凄いわ！」

ステラが急に感嘆の叫びを上げたので葵は目を瞬かせた。葵が何も知らないと見て取ったのか、ステラは興奮気味にレイチエル「アロースミスのことを語りだす。

レイチエル「アロースミスは名家ではなく庶民の出だが、類まれな才能を持っていた。その実力が評価され、彼女は王家に認められた者しか名乗ることを許されない『魔法士』になったのである。魔

法士の称号を持たない者は全て『魔法使い』と呼ばれ、それはトリニスタン魔法学園のエリートであるマジスターとて例外ではない。ステラにとってレイチェルは憧れの存在のようで、彼女の言葉の端々からは尊敬の念が滲み出していた。

「私も彼女のように生きたい」

私欲の混じらない純粹な熱意は人を輝かせる。ステラがあまりに眩しくて、複雑な気持ちになった葵は思わず目を伏せてしまったのだった。

本当の友達（6）

雲ひとつない夏の夜空に黄色い二月が浮かんでいる。青い光とは違って馴染み深い色彩の月を仰ぎ見ながら、葵は人気のない石畳の街道を歩いていて。こうして何気なく夜道を歩いてみると、近所のコンビニへ所用を済ませに行く時のような感じを覚える。だが夜に煌々と光を放つ四角い建物はどこを探しても見当たらず、ヘッドライトが眩い車の姿もない。ここは天空に二月が浮かぶ世界で、ふとした拍子に元の世界の暮らしに思いを馳せてしまふ葵がいるべき場所ではないのだ。

ステラの家で夕食をご馳走になった後、葵はあれこれと理由をつけて徒歩でカーティス家を後にした。しかし帰り道も、ステラの家がどの辺りにあるのかも分からなかったため、直感的な方角へ、とりあえず歩を進めている。このまま歩いていても家に帰れる保証はなかったが、葵は特に焦りを感じてもいなかった。

「屋敷へ戻るのには反対方向ですよ、ミヤジマ」
不意に聞き覚えのある声が聞こえてきたので、葵は月を仰いでいた視線を少し下げてみた。人工の明かりがいらぬ月夜の街角に、端正な面立ちをした金髪の青年がひっそりと佇んでいる。この事態を予想していた葵は驚くこともなく、ゆっくりと彼の傍へ歩み寄りた。

「ステラ」カーティスの家はどうでした？」

白衣を脱いだアルヴァが人気のない街角に佇んでいたのは、やはり偶然ではないようだ。常日頃から監視の目に晒されていることを改めて実感した葵は小さく嘆息してから口を開く。

「アルさあ、何で私がステラの家に行ったこと知ってるの？」

「僕の部屋の前で堂々と話をしていましたでしょう？ あのような場所で話をしていれば筒抜けですよ」

「それ、盗み聞きって言うんじゃないの？」

「聞く気がなくても聞こえてくるのだから盗み聞きとは言いません」
「あ、そ」

また口論になるのも馬鹿らしいと思った葵は呆れながら話を打ち切った。代わりに、先程の問いに対する答えを口にしてみる。

「ステラの部屋、本だらけだった。ビックリしたよ」

「そうですか」

「ステラ、レイに憧れてるんだって。レイみたいな生き方がしたいって、目を輝かせながら言ってたよ」

「そうでしたか」

「一生懸命で、カワイイんだ。レイの話してる時のステラ、まぶしかった」

何も考えずただ生きてきた自分とは、大違い。その科白を、葵はアルヴァに伝えることはしなかった。だが胸中で呟いた言葉は胸の奥底へと沈んでいく。何が心を鬱いでいたのかはつきりと自覚した葵は苦笑いを零した。

（置いていかれたような気になるなんてバカみたい。住む世界が違う人なのに）

ステラは学園側が生徒を選ぶ名門校、トリニスタン魔法学園のエリートなのである。魔法を使えない葵はいわゆる『落ち零れ』だが、そもそも生まれついた世界が違うのだから比較する方がおかしいのだ。ステラが同等のように扱ってくれるので、葵はそんな分かりきったことすら失念していた。しかし葵のいた世界でも、ステラのような人物はやはり『特別』だろう。魔法など関係なく、何かに一生懸命な人は輝いて見えるものなのだ。

「羨ましいと思う前に努力しろって話だよ」

一人で話を完結させた葵はため息混じりに呟いた。葵の思考がどういった過程を経たのかなど知らないアルヴァは微かに眉根を寄せた。だが彼のその表情は葵の思考を理解出来ないという不可解さからくるものではなかった。

「ミヤジマはステラカーティスが好きなのです」

「そつだね。弥也に少し似てるからかな」

「誰ですか、それは」

「向こうの世界にいる友達。子供の頃から格闘技やってて、強いんだよ。性格もさっぱりしてて好きだったなあ」

「……なるほど」

妙に実感のこもった相槌を打った後、アルヴァは口を閉ざした。だが何かを切り出そうとしている空気を察した葵は首を傾げながらアルヴァを見る。

「何か言いたそつだね」

「わかりますか？」

「だって、待つてたんでしょ？」

保健室前での会話を聞いていたからといって、葵にはアルヴァがわざわざ家まで送ってくれるために姿を現したのだとは思えなかった。ならば何か、話があるはずなのである。葵がそうした見解を告げるとアルヴァは小さく息を吐いた。

「レイチエルや僕のことをステラカーティスに話しましたか？」

「アルのことは言ってないけど、レイのことは少し話した。でも、何で？」

「話してもらいたくなかったのですよ。レイチエルのことも、僕のことも」

そんな話は初耳であり、葵は今更だと思った。それはアルヴァも承知しているようで、彼は苦笑いを浮かべる。

「ミヤジマが自分のことを語るとも思えなかったので、今まで問題にもしていませんでした」

「……まあ、そつだね」

トリニスタン魔法学園に編入してからの『友達づきあい』は、とても自分のことを語れるようなものではなかった。その点は葵も同感だったが、自身やレイチエルのことを喋るなというアルヴァの真意は不透明である。今までなあなあにしてきたことを尋ねてみるいい機会だと思つた葵は率直に思いを言葉にした。

「ねえ、本当のことをちゃんと話してよ。そうすれば私だって言うていいことと悪いことの区別くらいつくようになるから」

「……そうですね。ミヤジマもここでの生活に慣れてきていますし、そろそろ話しておいた方がいいかもしれませんね」

アルヴアの返事を聞いた後、葵は自ら口を開くことをせずに次の言葉を待った。あまり語りたくない事柄なのか、アルヴアは冴えない表情で天を仰ぐ。そして再び葵を見ることなく、彼は話を始めたのだった。

「レイチエル」アロースミスという人は『特別』なのですよ。彼女は王室にその実力を認められた、特別な魔法使いですから」

「それが、魔法士？」

「ステラ」カーティスから聞いたのですね。その通りです」

肉親の榮譽を語っているというのに、アルヴアの口調は至って他人行儀なものだった。違和感を覚えた葵が突っ込んで尋ねてみよいか迷っていると、アルヴアは彼女に口を開く暇を与えないかのように話を続ける。

「ミヤジマは便宜上、アロースミス家の遠縁ということになっています。トリニスタン魔法学園は紹介状がないと入学することが出来ない名門校なので、どうしてもレイチエルの名前を使わないといけなかったのですよ。ですがこのことは、学園を運営する一部の者にしか知らされていません。一般の生徒に知れると大変なことになってしまいますからね」

アロースミス家に連なる者は一族の出世頭であるレイチエルの顔に泥を塗らないよう生きることが定めである。もし葵が初めからレイチエルの遠縁の者として学園に編入していたら、今よりももっと厳しい制約が課されていたのだ。レイチエルとの繋がりを隠すことである程度の自由が認められていたと言い換えても良い。だが葵は、すでに殻を破ってしまった。今になってレイチエルとの繋がりが明らかになってしまうのは非常にまずいのである。ここまで話を聞いても、葵にはいまいちピンとこなかった。

「えーっと、つまり、私のせいでレイの株が下がるってこと？」

「ミヤジマとの繋がり明らかになれば恥をかくだけでは済まないでしょうね。何らかの処分が下されてもおかしくはないのです」

「……私、そんなに問題児？」

「レイチエルの良識が疑われますね」

あまりにきつぱりと言い切られたので葵は少し傷ついた。優等生とは言えないかもしれないが、良識が疑われると言われるまで素行が悪いとは思ってもみなかったのである。だがアルヴァは容赦なく、レイチエルがいるのはそういう世界なのだと言った。

「加えてミヤジマの場合、本人の品位よりもっと問題なことがあるのです」

今度は葵にも、アルヴァが何を言おうとしているのか解った。葵が理解したことをアルヴァも承知したようで、彼はその考えを肯定させるように頷く。やはり最大の問題は、葵が異世界の間人ということのようだ。

「この件には他にも様々な事情が絡んでいて複雑なのです。ミヤジマが全てを理解したいと言うのなら時間をかけてじっくりと話してさしあげますが、聞きたいですか？」

「……もういいや」

秘められていたことの一部を明かされても頭がこんがらがっただけだったが、葵はもううんざりしていた。アルヴァも説明を続けるのは面倒だと思っていたようで、あっさりと引き下がる。だが釘を刺すことだけは忘れなかった。

「今以上に不自由な思いをしなくては僕らの指示に従ってください。そうしなければならぬ理由は、お解かりいただけましたね？」

「りょーかい。アルのこともレイのことも誰にも喋らないよ」

葵が投げやりな態度で頷くとアルヴァは真顔のまま『賢明です』
と言つてのける。難解な事情を聞かされた葵は改めて早く元の世界に帰りたいと思い、岩黄色の二月を見上げた。

シャドウダンス（1）

夏月期最初の月である岩黄いわわきの月の七日、丘の上に建つトリニスタ魔法学園の校舎には夏の日差しが燦々と降り注いでいた。外気は湿気を含んでいないのでカラツとした暑さだが夏の日差しは容赦なく肌を焦がし、汗を誘う。窓際の席で暑さに耐えていた宮島葵は、終業の鐘が鳴ると同時に魔法書を閉じた。教室内は教師が冷風を発生させているので蒸し風呂のような状態ではないが、それでも日光に晒される窓際は暑い。閉じた魔法書を小脇に抱えた葵は教室を出ようと思いい、早々と席を立った。

「ミヤジマさん、ごきげんよう」

葵が教室を出て行くことを察した近くの席の女生徒が、にこやかに別れの挨拶を寄越してくる。第一声を発した者に続けとばかりに教室中から葵を送り出す声が上がった。葵は誰にも返事をせず、無言で教室を出る。廊下にもすでに人だかりができていて、葵は観衆に見守られながらひたすら足を動かした。

（ちよつと前まで陰口たたいてたくせに）

一度敵意を向けた者が掌を返しても仲良くなるうという気は起らない。早く校舎を出たかった葵は早足で階段を下り、一階のエントランスホールへ向かった。しかしエントランスホールにも人だかりがあり、先へ進むことが出来ない。ホールに集っている生徒達は葵に背を向けているので、何か別のものが注目を集めているらしかった。

（ジヤマだなあ）

人だかりから少し離れた所で立ち止まった葵はどうしようかと考えを巡らせた。エントランスホールを通らなければ校舎の外へ出ることが出来ないが、人を掻き分けて進むのも面倒である。

「アオイ」

頭上から声が降ってきたので、葵は反射的に顔を上げた。同時に、

葵に背を向けていた女生徒達が一斉に振り返る。複雑な感情が入り乱れた群集の視線に晒された葵は居心地の悪さを覚えながら、ホルの二階部分から身軽に飛び下りて来た人物を迎えた。

「今日は約束があるとか言ってたけど、ステラは一緒じゃないのか？」

葵に気さくに話しかけてきた茶髪の少年の名はオリヴァー。バベツジといい、彼はトリニスタン魔法学園のエリートであるマジスターの一員である。周囲の視線が気になった葵はオリヴァーがつくった花道を歩き出しながら問いに答えた。

「今から待ち合わせ場所に行くところ」

「待ち合わせ場所？」

校舎から抜け出すと針の筵から解放されたため、葵は一つ息をついてから改めてオリヴァーを見上げた。隣を歩く彼は夏らしく日に焼けていて、初めて会った頃よりも逞しい雰囲気になっている。他のマジスターのメンバーとは毛色が違うオリヴァーを、葵は健康的な美男子だと思った。

「シエル・ガーデンの北にある塔だよ」

シエル・ガーデン

大空の庭はマジスターが集う花園である。その北には用途不明の塔があり、ステラとの待ち合わせ場所であるその塔を、葵は密かに『時計塔』という名前で呼んでいた。葵は一時期、ある目的をもって時計塔に通い詰めていたことがある。思い入れの強い場所だけに実は何となく複雑な気持ちになりながら、葵は待ち合わせ場所に向かっているのだった。

「そっか、今頃音合わせ中か。そういえば俺も呼ばれてたんだっ」
オリヴァーが妙なことを言い出したので葵は眉根を寄せた。葵の視線に気がついたオリヴァーは特に急ぐでもなく、のんびりと歩きながら説明を加える。

「俺たち、創立祭で演奏することになってるんだよ。その練習をあの塔でやってるわけ」

「……そういえば、ハルがそんなこと言ってたかも。俺たちって、

オリヴァーも楽器弾けるの？」

「俺とハルとステラはバイオリン。ウィルがピアノ。キルは楽器出
来ないから聞き役」

「あ、そ」

オリヴァーが最後に口にした人物にあまりいい感情を持っていな
い葵は嫌な顔をしながら素っ気なく相槌を打った。葵の態度には明
らかに棘が含まれていたのでオリヴァーが苦笑いを零す。

「そう嫌うなって。キルにもいいところあるんだから」

「別に、どうでもいいよ」

「まだ根に持つてる？ 殴られたこと」

「当たり前じゃん？」

葵はマジスターの一員であるキルル「エクランドに一方的に殴ら
れ、まだ謝罪も受けていないのである。謝ったって許さないけどと
葵がぼやくと、オリヴァーは声を上げて笑った。そこは笑うところ
ではないと思つた葵は不服に唇を尖らせる。しかしそれでも、オリ
ヴァーの楽しいげな表情は変わらなかった。

「やっぱり面白いな、アオイ。今まで見たことないタイプだよ」

「……それ、ほめてんの？」

「誉めてるよ。あのハルに変な女って言わせるくらいだからな」

オリヴァーは上機嫌に笑い続けているがハルの名前を出された葵
は複雑な気持ちになった。印象に残る存在なのは嬉しいが、変な女
というレッテルを貼られるのは悲しいものがある。

「マジスターって仲いいみたいだけど、みんな昔からの付き合いな
の？」

「ステラは学園に入学してからの付き合いだけど、それでも五年く
らいになるか。他の連中はもっとガキの頃からの付き合いだよ」

「ふうん」

オリヴァーに気のない返事をした葵は、五年は長いと胸中で呟い
た。それほどまでに長い付き合いなら、オリヴァーはハルのことを
よく知っているだろう。彼がいつからステラを好きなのかも、知っ

ているかもしれない。聞こうかとも思ったが結局は口を開かず、葵は苦笑いを浮かべた。

(そんなこと聞いて、どうするつもりなのよ)

ただでさえ、ハルとステラを見ていると複雑な気分になるのだ。わざわざ自分から胸の毛もやもやを広げることもないだろう。

「……なあ、アオイ」

塔の足下へ辿り着いた時、オリヴァーが不意に雑談の口調を改めた。オリヴァーが足を止めたことに気付かなかった葵は数歩先まで進んでしまい、塔を背にしてオリヴァーを振り返る。しかし彼はすぐに話を切り出すとはせず、不可解に思った葵は首を傾げた。

「何？」

「ダメだ、やっぱり黙ってるのは性に合わない」

唐突に独白を零した後、オリヴァーは真顔のまま歩み寄って来た。距離が縮まりすぎてもオリヴァーが足を止めなかったため、葵は反射的に後ずさる。

(ちょ、何……)

後退を続けるうちに塔の外壁に背中がぶつかってしまい、葵は困惑しながらオリヴァーを仰いだ。葵を逃げ場のない場所まで押しやったオリヴァーはさらに、彼女の体を挟み込む形で両手を外壁に突く。

「聞きたいことがあるんだ」

真顔のまま話を切り出したオリヴァーの口調には平素の気軽さを感じられなかった。彼が向けてくるまなざしも真剣味を帯びたもので、ゾクツとした葵は思わず魔法書を胸に抱く。

「な、何？」

「アオイの魔力が変化してるのはどうしてだ？ こうしてる間にも次々と変わってる。前はそうじゃなかったよな？」

早くこの体勢から抜け出すためには質問に答えるより他なかったが、葵は口をつぐんでしまった。オリヴァーの疑問に答えるためにはアルヴァの名前を出す必要があるからである。

「もしかしてそれ、アオイが生み出した魔法？　どんな呪文スベルなのかってっそり教えてくれよ」

その発言から察するに、おそらくは密談のため、オリヴァーは葵に顔を寄せた。オリヴァーに迫っているという意識がなくとも距離が近すぎて、葵は問いに答えるどころか硬直する。すると次の瞬間、空から何かが降ってきた。

上空からオリヴァーの背後に落下してきたのは、人間だった。真っ赤な髪が印象的な細身の少年は、オリヴァーの頭をハリセンではたいてから華麗な着地を決める。叩かれた弾みでオリヴァーが前のめりになったため体が触れてしまい、限界を超えた葵はのしかかってくる男の体を突き飛ばした。

「このアホ」

葵に突き飛ばされたことで仰向けに倒れたオリヴァーを見下し、赤髪の少年が冷ややかな一言を放った。マジスターの一員である赤髪の少年　ウィル・ヴィンス　はその後、緊張から解放されてへたりこんでしまった葵に手を差し伸べる。

「大丈夫？　災難だったね、アオイ」

「あ、ありがと……」

何が何だか分からないまま、ウィルに助け起こされた葵は塔の外壁に手を突いてふらつく体を支えた。葵が一人で立つたのを確認した後、ウィルは塔の先端を仰ぐように顔を上げる。そうして彼は、夏空から舞い降りてきたブロンドの少女を迎えたのだった。

「もう平気だよ」

ウィルが声をかけた少女を見て、本当の意味で緊張から解放された葵はホツとした。トリニスタン魔法学園の制服である白いローブを纏った少女はゆるやかに地に足を着くとすぐ、葵の元へ走り寄ってくる。安堵はしたものの、どういふ表情をしていいのか分からないかった葵は半笑いで少女を迎えた。

「アオイ、大丈夫？」

「う、うん……」

「もう、オリヴァーったら。アオイを怯えさせて」

倒れているオリヴァーを軽くねめつけたブロンドの少女は、マジスターであるステラ・カーティス。ステラにつられて葵も視線を移すと、そこには彼女達と同じくマジスターの一員であるハル・ヒュイットの姿があった。大の字に倒れて気絶しているオリヴァーの傍らにしゃがみこんでいたハルは、オリヴァーの胸の上に落ちている魔法書を無造作に拾い上げてから立ち上がる。それは、オリヴァーを突き飛ばした拍子に葵が手放してしまった魔法書だった。

「はい」

ハルが魔法書を差し出してきたので葵は小声でお礼を言いながら受け取った。手元に戻って来た魔法書を胸に抱き、葵は複雑な思いで目を伏せる。ここにいるということはハルも先程の光景を見ていたはずであり、変な誤解をされたら嫌だなと思ったのだ。しかしハルは、その話題には一切触れなかった。

（興味ない、か……）

ハルはウィルと一緒にあって、未だ起き上がってこないオリヴァーをつついている。その光景がどこか和やかだったので、葵は笑うことで沈んだ気持ちを押し殺した。

シャドウダンス(2)

「そういえば、今日は何するの?」

葵はステラと約束があつたので塔を訪れたのだが、その内容についてはまだ知らされていなかった。葵の問いに対し、ステラは極上の笑みで応える。

「パーティーに着ていくドレス、アオイはもう決めた?」

「……ドレス?」

「そういえば、アオイは編入生だったわね。岩黄いわぎの月の十日の夜にはね、トリニスタン魔法学園の創立祭があるの。パーティーと言っても学園内でやるのだけれど、ダンスもあるから生徒達も正装するのよ」

葵が眉をひそめた意味を誤解したステラが、パーティーについて詳しい説明を加えてくれた。何のパーティーなのか知らなかった葵はありがたく説明を聞いていたが、そのおかげで不安も募ってしまった。ドレスなど着たことがなく、もちろん持ってもいないからである。

「私は……行かないから」

正装してのパーティーなど場違いだと思つた葵は、とっさにそう答えていた。葵の返事に瞠目したステラが口を開くより先に、彼女の背後から声上がる。

「来ないの?」

声を発したのは、ハルだった。オリヴァーの傍らにしゃがみこんでいるハルはじつと、葵を見上げている。不意に注視されたことに困惑した葵が答えられずにいると、彼女の返事を待たずにハルが言葉を次いだ。

「そう。せっかく、あの曲やるのに」

「あ、そっか。忘れてた」

ハルの一言でカノンのことを思い出した葵は思わず声を上げてい

た。十日のパーティーで演奏されるのは独奏ではない、完全版の『カノン』である。もともと華やかな場所に気が引けていただけの葵の心は、ハルが何気なく発した言葉の前に激しく揺れ動いた。

「あの曲って何？ 二人だけで分かり合っていないで教えなよ」

そこでウィルが口を挟んだので、ハルはそちらに顔を傾けながら答える。

「ヴァリア・ヴェーテ」

「アオイはヴァリア・ヴェーテが好きなの？」

ハルが口にした単語は曲名だったようで、それを聞いたステラが問いかけてきた。『カノン』という名前に馴染みすぎている葵にとっては曲名が違つと別物のように感じられるが、話を繋げるためにもとりあえず頷いておく。ステラも音楽が好きなので、彼女は嬉しそうな顔をしながら『カノン』の話を続けた。

「ヴァリア・ヴェーテはパーティーで演奏するのよ。是非アオイにも聞いてもらいたいわ」

「でも私、ドレスなんて持ってないから」

「だったら買いに行きましょうよ。私もちょうど新調しようと思つていたところなの」

それで葵を街に誘おうと思つていたのだと、ステラは言う。アルヴァに現金代わりのカードを与えられているので金銭的な問題は無いのだが、それでも葵は躊躇していた。だが困惑気味の葵を置き去りに、話は進んでいく。

「僕たちも一緒に行こうよ、ハル。どこかのバカのせいで音合わせも出来ないことだし、暇だろう？」

「それなら皆で行きましょうよ。ね、ハル？」

「いいけど」

ウィルとステラに誘われたハルは乗り気ではなさそうだったが、拒むことはしなかった。ハルの返事を得たところでウィルが立ち上がり、未だのびているオリヴァーに視線を落とす。

「このバカはほつとこう。起きるとうるさい」

「キルは？」

「キルも放っておこう。アオイと相性が悪いからね」

ウイルはハルと話しているのだが、傍で耳を傾けている葵に対する配慮というものは特になかった。話題に上っているにもかかわらずウイルにもハルにも視線を向けられなかったが、葵は一人で苦笑する。

「行きましよう、アオイ」

ステラが声をかけてきたので葵は真顔に戻った。ステラは先程から地面に何かを描いていたのだが、彼女の足下にはすでに小さな魔法陣が完成している。準備万端整えて誘われては断ることも出来ず、葵は大人しく魔法陣の上に立った。ステラが描いた魔法陣はちょうど四人が入れるサイズになっていて、全員が魔法陣に入ったところでステラが呪文を唱え始める。詠唱が終わると魔法陣は光を放ち、四人を一瞬にして丘の下まで運んだのだった。

「僕はサードアベニューにいるから。そっちの用が済んだらお茶しよう」

市街へ着くなりウイルはそう言い、雑踏に紛れていった。一緒に行こうと言い出した人物が早々に単独行動を شدしたことに葵は当然としたが、ハルとステラは慣れているのか眉一つ動かしていない。「私達も行きましよう」

ステラが先頭に立って歩き出したので、葵は隣に並んだハルに疑問をぶつけた。

「サードアベニューって何？」

「三番目の大通り」

「ふうん。アベニューって大通りのことなんだ」

葵が得心して頷くとハルが微かに眉根を寄せた。ハルの視線に気付いた葵は首を傾げながら問う。

「何？」

「あんた、変だな」

「……改まって言わないでよ」

ハルに『変』呼ばわりされるのはいつものことであり、葵は大して気にしてもいなかった。だが今回の『変』は勝手が違うらしく、ハルが珍しく言葉を次ぐ。

「いや、そうじゃなくて……」

「ハル？　アオイ？」

ステラの呼び声がしたので、何かを言いかけていたハルは言葉を途切れさせて顔を上げた。そのまま話が流れてしまったので葵は首を傾げたままハルとステラの後を追う。先にステラに追いついたハルが何かを話したらしく、彼女は葵を振り返った。

「この街のサードアベニューはね、別名図書通りと言うの。トリニスタン魔法学園が隣接する街では珍しくないのだけれど、ここは王都に次ぐくらいの品揃えなのよ」

「へえ。じゃあ、ウイルは本を見に行つたつてこと？」

「ウイルは古書の発掘が趣味だから。私も後で寄りたいわ」

雑談しながら歩いていくうちに目的地に到着したらしく、ステラはそこで話を打ち切った。ステラが足を止めた店は洋服店のようで、店の前面に設置されているディスプレイにはドレスやタキシードが飾られている。それだけでも量販店でないことは明らかで、店構えを目の当たりにした葵は気後れしてしまった。ステラはトリニスタン魔法学園の制服である白いローブ、ハルはラフな私服を着ているが、彼らは馴染みの店のように店内に進入して行く。彼らが『セレブ』であることを改めて認識した葵は居心地の悪さを覚えながら洋服店の入口をくぐった。

「これは、カーティス様にヒューイット様。いらつしやいませ」

来客の対応に出てきたタキシードの青年がすぐさま、ステラとハルに頭を下げる。葵には彼らがどの程度の『お金持ち』なのか見当もつかなかったが、こういった店に日常的に出入りしているようであればかなりのものなのだろう。シンプルながらも豪華な雰囲気が漂う店内に馴染めず、葵はステラ達から少し離れた所で成り行きを見守った。

「演奏用のシンプルなドレスを一着。カラーはブラックがいいわ」

「かしこまりました。ヒューイット様も新調なさいますか？」

「俺はいい」

「左様で御座いますか。そちらの方は……」

最初はステラ、次はハルト、それぞれの意向を窺った従業員は最後に、所在無く突っ立っている葵に視線を向けてきた。葵が何を言えればいいのか戸惑っていると、ステラがさかさずフォローを入れる。「こちらはアオイ」ミヤジマ。彼女にはどのようなドレスが似合うと思います？」

「そうですね……ミヤジマ様も奏者でございますか？」

「いえ、彼女は来賓よ」

「それでしたら、こちらのドレスなどがででしょうか？」

従業員の青年はそう言い置いて、葵達を店内の奥へと誘導した。ワンフロアーの開放的な店内にはすでに完成されている洋服が並んでいる一角があり、青年はそこから一着のドレスを引き抜く。彼が選んだのはパステルミントのキャミソールドレスだった。

「ホワイトレースを重ねておりますので女性らしい、可憐なデザインとなっております。いかがでしょうか？」

青年からドレスを渡された葵は困りながらステラを振り向いた。

葵の視線を受け止めたステラは柔らかに微笑んで見せる。

「アオイはきれいな黒髪だから明るい色彩のドレスが似合うと思うわ。着てみない？」

ステラだけでなく従業員にも勧められたので、葵はドレスを持って店内の奥へと移動した。男性従業員とハルは店内に残り、ステラだけが葵に付き添う。この店の試着室は量販店で見かけるような狭いボックスではなく、十畳ほどの一部屋を丸々使用しているのだからの広さがあった。ドアがある以外の三面が鏡になっている室内で、葵は所在無く辺りを見回す。しかしすぐ、ステラが着替えてみせてと促したので、葵は仕方なく制服を脱ぎ始めた。柔らかい布地のドレスを頭から被り、それから肩紐に腕を通す。ステラはよく似

合つと言ってくれたが、鏡に映った自分の姿を見た葵は不満に思った。

(髪、長かったらなあ……)

ショートヘアとアップスタイルは正面から見れば同じようにも見えるが、微妙に印象が違ってくる。髪が長ければ着こなしようがあったかもしれないが、焼け焦げた髪をスタイルもなく切り落としただけの今の姿ではドレスが似合わない。今更ではあったが葵は、遠慮もなく火球を投げつけてきた名前も知らない女生徒を恨めしく思った。

「髪、気になる？」

少し顔をしかめただけで何を気にしているのかまで読み取られてしまい、葵はステラに苦い笑みを返した。

「うん。やっぱり、似合わないよ」

「そんなことないわ。短い髪だつてセットすれば変わるもの。その辺りは私に任せて」

当日はばっちり決めてあげると言うステラに押し切られ、このあと葵は結局、試着したドレスを購入する羽目になったのだった。

シャドウダンス(3)

試着室に姿を消していた葵とステラが店内に戻るとハルは一人、隅に置いてある椅子に座って目を閉ざしていた。頭を壁に預けている彼の体からは力が抜けていて、どうやら待たされているうちに寝入ってしまったようだ。無防備なハルの寝顔があまりにも可愛く、不覚にもときめいてしまった葵は慌てて目を泳がせる。ステラはハルの寝顔まで見慣れているのか、短く嘆息しただけだった。

「ハル、起きて」

声をかけながら手を伸ばし、ステラはハルの頬を両手で優しく包み込んだ。その体勢はまるで、そのままキスを落とすことが自然なように思える。思いがけない光景を不意に見せ付けられ、葵は自分でも驚くほど狼狽してしまった。

当然のことながらと言えるかどうかは微妙だが、ステラは葵が考えたような行動には出なかった。彼女は片手でハルの顔を支え、空いた手で軽くハルの頬を叩く。寝ぼけ眼にステラの姿を映したハルは、半ば寝言を言うように唇を開いた。

「……ステラ？」

「お待たせ。用事は済んだから、行きましょう」

「ああ……」

いまいち状況が掴みきれしていないようだったが、ハルはステラに促された通りに立ち上がった。見送りに出てきた店員に別れを告げ、葵達は洋服店を後にする。先程のシヨックを引きずっている葵と寝ぼけているハルが口を開かずにいると、二人を振り返ったステラが率先して口火を切った。

「何処でお茶にしようか？ アオイは行きたいお店がある？」

ステラに話しかけられたことで我に返った葵は小さく首を振った。一時期はクラスメート達とお茶を飲んでから帰るということをしていたが、葵はこの街に詳しいわけではないのである。ハルにも希望

はないようだったので、結局はステラが店を決めることになった。
「フォーニアベニューカフェにしましょう。アオイ、ハル。それじゃあ、また後で」

ひらひらと手を振るとステラは雑踏に呑み込まれていった。唐突に別れを告げられた葵はぽかんと口を開けていたが、やがて正気に戻ってハルを仰ぐ。

「ねえ、ステラはどこ行っちゃったの？」

「たぶん、サードアベニュー。ウィルを探すついでに自分も古書をあさるんじゃない？」

ステラが単独行動に出るのもいつものことなのか、ハルの口調はずいぶんとあつさりしていた。どうやら個人主義なのはウィルだけでなく、マジスター全員に言えることのようにだ。葵と同じく取り残された形のハルもまた、突然の空き時間を持って余す様子もなく歩き出す。どうしたらいいのか分からなかった葵は、ひとまずハルの後を追った。

「ハルはどこ行くの？」

「そうだな……どこ行きたい？」

ハルが意見を求めてきたので、葵は意外な面持ちで彼の横顔を見た。しかし視線には気付かなかったようで、ハルは真っ直ぐに前を見て歩を進めている。

（わかんないなあ、何考えてるのか）

ハルの顔色を窺うことがバカらしく思えてきた葵は、あれこれといらぬ考えを巡らせるのをやめた。せつかく二人きりであるのだ、今はこの時を楽しみたい。そう腹を決めた葵は口調を明るくしてハルに声をかけた。

「ハルは？　どっか行きたいところがあるんじゃないの？」

「俺？　別に、ないけど」

「……じゃあ、何処に向かって歩いてるの？」

「適当」

ハルの行動が本人の言葉通りのものだったので、葵は開いた口が

塞がらなくなつてしまった。葵に指摘されたことで自分の行動を考え直したのか、ハルは不意に足を止める。ハルが立ち止まったので葵も足を止めようとしたのだが、余所見をしていたため通行人に激突してしまった。

「鈍くさいな」

通行人に頭を下げる葵を見ていたハルは、ため息まじりにそう言つて彼女の手をとる。突然手を引かれた葵は呆氣にとられた。

(手、手が……)

異国情緒漂うヨーロッパ風の街並みを、ハルと二人、手をつないで歩いている。そのシチュエーションはさながらデートのようであり、意識しすぎてしまった葵は顔を上げていられなくなつてしまつた。

(どうしよう)

顔が熱い。心臓も鼓動が聞こえてしまいそうなくらい、どくどくと脈打っている。自然体でいるハルの手は何の感情も表していない温度だったが、葵の手は緊張のために汗ばんできていた。それが嫌だったのか、ハルが不意に手を離す。

「あ、ご、ごめん」

解放された手を引つ込めた葵が反射的に謝るとハルは不思議そうに首を傾げた。

「何で謝つてるの？」

「それは、えっと……」

あなたと手を繋いだので緊張して汗ばんでしまいました。とは言えず、葵は曖昧に笑つて誤魔化す。ハルは説明がないことを不可解に思っているような顔をしていたが、彼は不意にポンと手を打つた。「あなたの顔見てたら思い出した。ちよつと、こつち」

ハルは再び葵の手を引き、今度は目的地がある確かな足取りで歩き出した。ドレスを買った洋服店など華やかな店が並ぶ大通りを外れ、ハルは迷路のように入り組んでいる脇道を躊躇いもなく進んでいく。そうして辿り着いたのは不思議な通りだった。大通りとは違

つてショーウィンドウのある店はないが、通りの両側には看板が連なっている。どうやら商店街のようだったが、そこは葵の知る生活感が溢れる商店街とはまったく別のものだった。

「なに、ここ？」

その通りでは持ち主のいない靴が石畳の上でダンスを披露していたり、ぬいぐるみや人形が店番をしていたり、蛇のような光が足元を駆け抜けていったりと、目新しい光景に溢れていた。葵がぼかんと口を開けていると、ハルは『フィフスストリート』であることだけを告げて歩き出す。もう手は離れていたため、葵は呆然と周囲を見回しながらハルの後を追った。

(うわあ……何だろう、この空気)

魔法が刻まれた物がひとりで動く場面は何度も見ているが、葵が今までに目にしてきたモノはどれも機械的だった。だがこの通りでは、魔法が息衝いている。決められたルールもなく自在に動き回る物や光を見ていると、葵の心は初めての高揚に満たされた。

「面白い？」

ハルが尋ねてきたので葵は瞳を輝かせながら頷いた。葵は体全体から『楽しい』という空気を発しており、それを見たハルが微かに眉根を寄せる。

「さつきも思っただけど、あんたって本当に大袈裟だよな。無属性魔法なんて珍しいものじゃないのに驚いたり、喜んだり」

「だってこの通り、ステキだもん」

『ファンタジーの世界みたいで』という言葉は呑み込み、葵はハルに苦笑を向けた。葵が何故苦笑したのか解らなかつたらしく、ハルは小さく首を傾げる。あまり深入りされると余計なことを喋ってしまいそうだったので、葵はさつきと話題を変えた。

「そういえば、何か用事があつたんじゃないの？」

「ああ、そうだった」

葵に言われて思い出したようで、ハルは再び通りを歩き出した。その彼が一軒の店に入ってしまったので葵も後を追う。先程の洋服店

に比べると随分と手狭な店内には所狭しとアクセサリーが並べられていた。指輪やネックレスなどを見ると心躍るのが女の子の性分であり、葵も例に漏れず目を輝かせる。

「うわあ、かわいい」

歡喜の声を上げた葵は店内にある様々なアクセサリーを見て回った。指輪やネックレスの他にイヤリングやブレスレットなどもあったが、それら全てに鉱石が嵌めこまれている。シルバーやゴールドだけのデザインはなく、ちょっとした違和感を覚えた葵は首をひねった。

（あれ？ これって、もしかして……）

指輪を見ていた葵はふと、右手を持ち上げて中指に視線を落とす。そこにはアルヴァから渡されたカルサイトの指輪があり、冷たい輝きを放っている。店内にある指輪はどれもデザインがよく似ており、葵はここがただのアクセサリー店ではないことを認識した。

（魔法道具マジックアイテムかあ。それでハル、このお店に入ったんだ）

よくよく考えてみればハルはアクセサリーの類を身につけていない。魔法道具である指輪すらしていない彼がただのアクセサリーを見に来るなどおかしな話なのだ。そのことに気付いた葵はハルが一緒だったことを思い出し、店内を見回した。

（あ、あれ？）

狭い店内は見通しも良いが、ハルの姿はない。焦った葵が慌てて店を出ると、ハルは店の壁に背を預けて路上に座り込んでいた。

「……何してんの？」

葵が問うと、ハルは待つていたのだと言う。声くらいかけてくれればいいのと思いつながら、葵はハルが立ち上がる様子を眺めていた。立ち上がって汚れを払ったハルはポケットに手を突っ込み、そこから取り出したものを葵の目前に掲げて見せる。その動作が何を意味するのか解らなかつた葵は目を瞬かせた。

「何？」

「あげる」

「えっ、何で？」

「あんたに何かあげるのに理由がいるの？」

ハルは平然と、答えになっっていない答えを口にした。あ然としてしまった葵は真っ白になった頭を振り、ハルの方へ手を差し出す。葵の掌に落ちてきたものは細かな鉾石が散りばめられたブレスレットだった。

ハルの態度から察するに、このプレゼントはただの気まぐれだ。さっきの科白も葵が特別だと言っているわけではない。そのことを承知していながら、それでも、眩暈がするほど嬉しかった。泣きそうになった葵は慌ててブレスレットから顔を上げる。

「ありがとう。大事にする」

「……あんたって、ほんと大袈裟だな」

魔法道具一つで葵がこれほど喜ぶとは思っていなかったのだろう、ハルは呆れたような表情をした。だがその直後には笑みを見せてくれる。ハルの笑顔に引き込まれそうになった葵は胸中で重症だと咳き、さりげなく彼から目を逸らした。

シャドウダンス(4)

丘の上に建つトリニスタン魔法学園には今日も夏の日差しが燦々と降り注いでいた。冬月期には雪ばかりで殺風景だった学園の敷地内にも緑が増え、あちこちで陽光を浴びてきらめいている。そんな夏の午後、登校はしたものの授業を受ける気にならなかった葵は校舎から離れた木陰で足を投げ出していた。日本にいれば蝉の声が煩いほどの季節だが、この世界には蝉がいないのか鳴き声などは聞かえてこない。そのような静寂の中で葵が何をしているのかと言えば、彼女はただぼんやりと腕を眺めていた。彼女の左手首にはシルバーを基調とするブレスレットがはめられている。

(意味なんか、ないんだろうけど……)

ブレスレットをくれた人物を思い浮かべ、葵は一人で赤面した。意味などなくともアクセサリをプレゼントされれば嬉しいものである。それが好意を抱いている人物からもらった物ならば、尚のことだ。

(でも、期待なんかしない)

ハルがステラを想っていることは周知の事実である。葵自身、間近で二人を見ていて改めてそう感じていた。だからハルが何をしようとか妙な期待は抱かない方がいい。そう思いながらも葵の胸は未だに高鳴っていた。

(期待はしないけど、意識しないのはむずかしいなあ)

普段は何事に関しても無関心な態度でいるくせに、ハルは不意に葵の心を鷲掴みにするような言動をする。彼にとってみればそれもまた無意識の産物であり、抱いた膝に額を寄せた葵はそこが狡いと小声で呟いた。

「ミヤジマ」

それまで誰もいなかったはずなのに間近で声がしたので葵は慌てて顔を上げた。アルヴァの姿を認めた葵はとっさに腕を背に回す。

腕を隠したことが不自然にならないよう、葵は後ろに突いた両腕に体重を乗せて横柄な格好でアルヴァを見上げた。

「何、どうしたの？」

「具合でも悪いのですか？」

「へ？」

アルヴァの科白は予想外のものであり、葵はぼかんと口を開けた。アルヴァは無表情のまま葵の正面にしゃがみこみ、そのまま葵の顔を凝視する。葵は反射的に身を引こうとしたのだが、すぐに背が幹にぶつかってしまった。

「あ、あの……アル？」

アルヴァがあまりに凝視してくるので居心地の悪い思いをしている葵は上擦った声を上げた。アルヴァは葵の額に軽く手を当てた後、何事もなかったように立ち上がる。葵は呆けたまま、ひんやりとしたアルヴァの手の感触が残る額に自分の手を置いた。

「顔色も悪くはないですし、熱もなさそうですね。具合が悪いのではないのなら、さぼりですか？」

アルヴァの冷やかな声を聞いた葵は今が授業中であることを思い出し、口元を引きつらせた。葵は小言を言われると身構えたのだが、アルヴァはなかなか言葉が次がない。不審に思った葵が伏せていた目を上げると、アルヴァはじっと葵を見ていた。しかしその表情に非難の色はない。

「話があります。付き合ってくださいね？」

アルヴァにそう言われてしまえば葵の返事は一つしかない。葵が頷いて立ち上がるとすぐ、アルヴァは彼女の手を取った。

「アン・ルヴィヤン」

アルヴァが口にしたのは帰還を意味する呪文スベルである。術者がこの呪文を唱えると、予め決めておいた任意の魔法陣へ転移することが出来る。アルヴァの場合、帰還場所は『部屋』である。簡易ベッドが幾つも並ぶアルヴァの『部屋』は保健室に酷似しているので、葵はこの場所のことを保健室だと思っていた。だが実際のところ、ト

リニスタン魔法学園の保健室とアルヴアの『部屋』はまったくの別物である。

「まったく、あんな所で膝を抱えていたら病人にしか見えない。紛らわしい真似をしないでくれ」

部屋へ戻るなり着衣を乱したアルヴアはさつそく、素の口調で不満を口にした。その態度や口調はいつものアルヴアのだが、今日の彼は何かが違う。そう感じた葵は簡易ベッドに腰を下ろしながら首を傾げた。

「さぼつてたこと、怒らないんだね」

「怒って欲しいのか？」

「……いや、いいです」

葵が苦笑いを浮かべるとアルヴアはため息を零しながら椅子に腰を落ち着けた。脚を組んで煙草を口に行っている彼の呼気が、今日は何やら重苦しい。やっぱり変だと思った葵は眉根を寄せたのだが、アルヴアは気にせず本題を口にした。

「ミyajima、パーティーに着ていくドレスはどんなものがいい？」

「ああ、ドレスなら……」

もう買ったと葵が答えるとアルヴアは意外そうな顔をした。アルヴアの反応が不可解だったので葵は再び眉根を寄せる。

「なに、その反応？」

「学園に来ることさえ嫌がっているからパーティーなんて行かないと言いつつかと思っていた。そのMiyajimaがもうドレスを用意していたとは、意外だ」

「……生徒は強制参加なんですよ？」

「マジスターに聞いたのか。嫌そうな表情をしているが、行く気はあるようだね」

そこで言葉を切り、アルヴアはため息をつきながら片手で髪をかき乱した。彼が服装を乱すのはいつものことだが、不機嫌そうに髪を乱すのはこれが初めてである。アルヴアの様子がいつもと違うことを不安に思った葵は、その理由をストレートに尋ねてみることに

した。

「アル、何かあったの？」

「別に、何も。パーティーの途中で少し抜けてもらうことになるだろうから、そのことだけは心得ていてくれ」

「抜けるって……何で？」

「それは当日になれば解る」

そう言ったきり口を噤んでしまったアルヴアは明らかに何かを嫌がっている。葵はパーティーに出席することかとも思ったのだが、どうもそれだけではないような雰囲気である。自分にも関わりがあることだけに、葵は嫌な予感を覚えた。

「何を考えているのか知らないが、ミヤジマがそんな顔をする必要はない。安心しなよ」

葵が考えに沈んでいると、その思考を読み取ったアルヴアがあつさりとなつて言った。何もかもがあやふやな状態では安心も何もないと葵は思ったが、言葉にはせずに唇を尖らせる。あまり長引かせたくない話題なのか葵の不満顔を見たアルヴアはさつさと話を終わらせた。

「ステラ」カーティスあたりと約束しているんだろう？ 頃合を見計らって迎えに行くから、それまではパーティーを楽しんでいるといい」

気怠く煙草の煙を吐き出したアルヴアは腕を持ち上げ、指輪を嵌めている利き手を葵に向けた。そして彼はそのまま、呪文を紡ぎ出す。

「アン・コンプルシオン・メタスタス、ポルトウ・アリエール・ドウ・エゴ」

葵にはアルヴアが何を言ったのかまったく解らなかったが、彼が口にした呪文を直訳すると『学園の裏門へ強制転移』である。アルヴアに魔法をかけられた葵は瞬きをする間に場所を移動しており、裏門に描かれている魔法陣の上に出現した。落下の衝撃などはなかったものの、足下がいやに柔らかい。だが呆けている葵がそのこと

に気付く前に、彼女の足下から怒声が上がった。

「何しやがる！！」

男の怒鳴り声を聞いたのと同時にバランスを崩した葵は勢いよく地面に倒れこんだ。だが痛みとショックで茫然自失となった葵の胸倉を掴み上げる者がおり、知った顔が視界に入ったので葵は反射的に顔を歪める。相手も葵の顔を見て、狐につままれたような顔をした。

「……手、放してよ」

嫌な奴に会ってしまったと思いながら、葵は目前にいる黒髪の少年に声をかけた。しかしその態度が気に食わなかったらしく、キリル「エクランドは葵の胸倉を掴んでいる手に力をこめる。」

「このオレを足蹴にしといて、ただで済むと思ってるのか？」

キリルの漆黒の瞳は怒りにギラついていた。その輝きがあまりに凶暴だったので、彼に殴られた時の痛みを思い出した葵はゾツとして硬直する。葵が無反応でいることが怒りを助長させてしまったらしく、キリルはもう言葉を次ぐことをしなかった。責める言葉の代わりに飛んできたのは手加減のない痛みであり、葵は反射的に叩かれた頬を押さえる。持ち上げられていた力から解放されて地面にへたりこんだ葵にキリルは端正な顔を寄せた。

「ステラに目をかけてもらってるみたいだけどな、あんまり調子に乗るんじゃないぞ。お前みたいなのがウロウロしていると目障りなんだよ」

脅すような口ぶりで吐き捨てたかと思ったら、キリルはさっさと立ち上がって姿を消した。取り残された葵はしばらくその場を動くことが出来なかったが、次第に増していく痛みが感情を呼び戻したので立ち上がって砂を払う。

（何であんなこと言われなきゃいけないの？ 私が何したつていうのよ）

怒りとショックと痛みがないまぜになった感情が涙腺を破壊してしまい、葵は悔し涙を拭いながら家路を辿ったのだった。

シャドウダンス（5）

岩黄いわわぎの月の十日は魔法を学ぶ者にとって特別な場所であるトリニスタン魔法学園の本校が王都に設立された、記念すべき日である。

そのためこの日は王都にある本校を初め、各地に散在する全ての分校で創立祭が執り行われる。創立祭の内容は生徒代表であるマジスターが決めるため学園によってやや趣が異なるのだが、パンテノンという街にあるアステルダム分校では夜会形式の盛大なパーティーが開催されていた。その会場である夜の学園は魔法の光によってライトアップされており、月下に幻想的な佇まいを誇っている。メイソン会場はこの日のためにマジスターが解放したシエル・ガーデンなのだが、葵は一人、明かりも人気もない校舎の廊下をひたひたと歩いていた。

寂しい校舎内を一人きりで移動していた葵は目的地である一階の北辺に辿り着くと、あるドアの前で歩みを止めた。扉から明かりが漏れている様子もないが、いつもの流れで閉ざされた扉を開けてみる。すると『部屋』には明かりが灯っており、窓のない壁際には見知った人物の姿があった。

「……その頬、どうした？」

侵入者の気配に振り向いたアルヴァは葵の顔を見るなり眉をひそめた。彼がそう問いかけるのも当然のことであり、葵は頬にガーゼを当てている。加えて彼女は華やかな夜にもかかわらず、いつもと同じく高校の制服姿であった。

「また殴られたの」

むっつりとした調子で答えた葵は簡易ベッドにどっかりと腰を下ろした。短い髪を気にする以前に頬が腫れているのはドレスアップしようという気も起こらない。そのためステラとの約束も放り出し、葵は人目を避けながら直接アルヴァの元へ来たのだった。

「また、ということはキリル」エクランドか。えらく気に入られた

ものだね」

平然とした口調で応えながらアルヴァは席を立つ。白衣を脱ぎ始めた彼を葵は恨めしい思いで睨み付けた。

「もとはといえばアルが悪い。アルが勝手に転移させるからこんなことになったんだよ。おかげでせっかく買ったドレスも着られないし、ステラとの約束も破っちゃったんだから」

「いいじゃないか。ミヤジマはもともと、パーティーには行きたくなかったんだらう？」

「それは、そうだけど……」

確かに、パーティーには乗り気ではなかった。ステラとの約束を破ったのも、ひどい顔を見られたくないという葵のワガママである。だが痛い思いをしたのは間違いなくアルヴァのせいなのだ。やはり泣き寝入りをするのはおかしいと思った葵はアルヴァに文句を言うとしたのだが、彼女はそこで初めてある異変に気がついた。

「……何してんの、アル？」

「何って、着替えだよ。ストリップでもしているように見えるか？」

「ストリップって……」

アルヴァが真顔で冗談を言うので葵は呆れ返って言葉を詰まらせた。アルヴァはというと、葵の反応など意に介さず着替えを続けている。白衣から黒の上着に着替えたアルヴァはシャツの裾をきちんとしまい、白のネクタイを締めて髪まで整え出した。普段は無造作に流されているアルヴァの前髪が後ろへ撫で付けられていく様を見ていた葵は次第に落ち着かない気分になっていった。

(う、うわ、別人みたい)

いつも目にしていないだらしない姿が嘘のように着飾ったアルヴァは気品に溢れている。平素は髪で隠れている耳が見えるだけでも随分と印象が変わるものだ。思わず見惚れてしまった葵は初めてアルヴァを見た時の気持ちを思い出してドギマギしてしまった。

「ミヤジマ……」

葵を呼びながら振り向いたアルヴァは言葉を続けようとしていた

雰囲気があったものの、閉口した。葵を捉えているアルヴァの視線が上へ下へと忙しく動く。何を見られているのか分からなかった葵は体を隠すようにしながら身を引いた。

「な、何？」

「みすばらしい格好だけど、まあ、仕方がない。ミヤジマが好んでそういう格好をしているのだと、ちゃんと説明しておいてくれよ」

服装が少し変わったくらいで中身までが変わるわけではない。改めてそう実感した葵の鼓動は正直に静まった。興奮めした葵が不服を露わにしてもアルヴァは構うことなく歩き出す。だが彼はドアを背に葵を振り返った。

「ミヤジマ、いつまでそんな所にいるつもりだ」

アルヴァに「行くぞ」と言われたものの、葵は腹立たしい気分だったのでふいっと顔を背けた。

「シエル・ガーデンに行くなら一人でどーぞ」

「今夜はワガママに付き合っている暇はない。どうしても嫌だと言うのなら、会場のと真ん中に強制転移させるぞ」

さぞや目立つだろうかと、アルヴァは言う。その光景を想像してみた葵は青褪めて立ち上がった。

「行くよ。行けばいいんでしょ！」

「そう、僕の後に着いて来ればいい」

今夜のアルヴァはいつになく傲慢である。遅れると本当に転移させられそうだと思った葵は慌てて部屋を出た。アルヴァはすでに暗い廊下を歩き出しており、後ろ手に扉を閉めた葵は小走りで後を追う。隣に並ぶのは嫌だったので葵はアルヴァの数歩後ろに陣取った。(でも、アルが人の多いところに行くなんて珍しい)

夜の校舎を一緒に歩いたことならあるが、生徒のいる昼間の校内でアルヴァの姿を見かけたことはない。彼は自称校医だが妙なウサギに代役をさせるほど人前に姿を現すことを嫌っているように思える。それは何故だろうと、アルヴァの後ろ姿を見つめながら葵は思った。

「ミヤジマ」

「えっ、何？」

ちょうどアルヴアについて考えていた時に呼ばれたので葵は上擦った声を出した。しかしアルヴアは振り向きもせず、淡々とした調子で言葉を次ぐ。

「ここから先は話しかけないでください。話しかけていただいても応えられませんので」

一方的にそう告げたきりアルヴアは閉口してしまった。彼の背を見ている葵にはアルヴアがどんな顔をしてそんなことを言っていたのか解らなかったが、どことなく緊張のような空気が漂っていたので大人しく口を噤む。そのまま一言も交わすことなく、葵とアルヴアは校舎を後にした。

校舎を出た葵とアルヴアが向かった先はパーティーのメイン会場であるドームだった。マジスターの領域であるシエル・ガーデンは普段は立入禁止になっているが、創立記念パーティーはマジスターによって主催されているので、今日は一般の生徒にも解放されている。花々の咲き乱れている室内庭園には着飾った生徒や教師の姿があり、彼らは存分に宴を楽しんでいるようだった。だが葵とアルヴアはその中に混ざることなく、ドームの上部に巡らされた回廊を歩いている。この回廊は床以外がガラス張りになっていて、空中散歩をしているような開放感を味わうことが出来るのだ。ドレスアップした人々の目に触れないぶん楽ではあったのだが、葵は奇妙な思いを抱きながら華やかな会場を見下ろしていた。

（こんな場所、あったんだ）

以前、マジスターに招待されてシエル・ガーデンを訪れた時、葵は物珍しさも手伝ってドーム内を一通り観察した。しかしその時はこんな回廊など目に映らなかった。シエル・ガーデンが全面ガラス張りの構造でなければただの通路だと思っても出来るのだが、外の風景を透かして見せているこのドームにおいては回廊が見えなかったこと自体が不自然極まりない。だがその疑問について、葵はア

ルヴァに答えを求めようとは思っていなかった。そういう魔法なのだということ自分で解決できるくらいには、葵はこの世界に馴染んできているのである。

(でも何でここ、誰もいないんだろう)

パーティー会場である庭園には人が溢れているものの、葵達の後にも先にも人影はない。まるで貴賓用の隠し通路だと感じた葵は疑惑を含んだまなざしでアルヴァの背を見つめた。

(ここ、マジスターの場所のはずなのに。何でアルが詳しいんだろう)

校舎を後にしてからずっと無言でいるアルヴァは目的地がある確かな足取りで進んでいる。それは一般生徒はおろか教師でさえ立入を制限されているはずのシエル・ガーデンの構造を熟知しているということであり、葵は奇妙さを覚えずにはいられなかった。しかし話しかけるなど言われているので、葵は唇を結んだまま歩いている。先に行くアルヴァの背中からはピリピリとした緊張感が発せられていて、とても話しかけられる雰囲気ではなかったのだ。

螺旋状にドームを上っているような回廊を進んでいると、やがてアルヴァが足を止めた。彼の視線の先に扉があることに葵も気付いており、アルヴァがドアを開ける動作を黙って見守る。中へ入れと促されたので葵は大人しく従った。

「ここで少し待っていてください」

自身は室内に入らなかつたアルヴァはそう言い残すと、静かに扉を閉ざした。室内に一人取り残された葵は急に不安になり、キョロキョロと周囲を見回す。そこはやはり貴賓用の部屋らしく、ソファなどの調度品が揃っていた。しかし葵の他には誰の姿もない。

(あ、下が見える)

室内の壁のうち一面だけガラス張りになっていたので葵はその傍へ寄った。ドームの内側に面しているガラスからは庭園を見渡すことが出来、着飾った生徒達が談笑している姿が窺える。だが何よりも葵の目を引いたのは、花々に囲まれた特設ホールで練り広げられ

ているダンスだった。ただのダンスでは、ない。持ち主のいない影が大理石の床で踊っているのだ。

（何あれ？ あれも魔法？）

よくよく監察してみると列席者には影がないことが窺える。持ち主の分身である影達は踏みつけられることも形を変えることもなく、自由にダンスを楽しんでいた。壁の花にもなれない葵は一人、影絵のようなダンスを眺めながら深々と息を吐く。

（楽しそう。行けば良かったかな）

頬が腫れてさえいなければ今頃はステラにメイクをしてもらって、可愛いドレスを着て、あの華やかな空気に混ざっていたはずなのだ。決して乗り気ではなかったのだが、こんな夜に一人でいるのは寂しい。

（……帰りたい）

この世界は息がつまる。自然に呼吸が出来る元の世界に帰りたいと、葵は切実に思った。

「だーれだ？」

葵の感傷を打ち砕いたのは唐突に発生した、場違いに軽い声だった。誰かの声がすると同時に視界が閉ざされていて、葵は慌てて目を覆っている手を払い除ける。苛立たしい気持ちで振り返った葵は、しかし予想外の人物を目にして呆気にとられてしまった。

「ダメだよ、アオイ。振り向く前に答えてくれなくちゃ」

さらさらの金髪に紫色の瞳をした少年が不服そうに唇を尖らせている。ガラスに背中がぶつかるまで後退した葵は見知った少年を指差しながら声を張り上げた。

「ユアン！？」

「久しぶり。元気だった？」

全ての元凶であるユアン「S」フロックハートは子供らしい無邪気な笑みを浮かべて、葵に向かってひらひらと手を振って見せたのだった。

シャドウダンス(6)

「髪、切ったんだね。短いのもカワイイけど、アオイの髪ってブラウンじゃなかったっけ？　どんな魔法を使ったの？」

再会の挨拶もそこそこに、ユアンは矢継ぎ早に問いを重ねた。まだ予期せぬ再会を引きずっている葵は返事をする事も出来ず、ユアンを指差したまま動きを止めている。葵から反応が返ってこないのもユアンは小さくため息をついた。

「久しぶりに会ったっていうのに再会のキスもしてくれないの？」

「キ……っ、誰がするか!!」

「じゃあ、いいよ。僕がするから」

葵と視線を合わせるために中空を漂っていたユアンは言うが早いか、葵の頬に軽くキスを落とした。それは口唇が触れるだけの挨拶だったのだが日常的にキスなどしない葵は悲鳴を上げてユアンを押し退ける。空中では踏ん張りが利かないのでユアンは流されるように後退したが、彼は悠々と空中で回転して体勢を立て直した。

「ひどいなあ。そんなに思いつきり嫌がらなくてもいいじゃないか」

「何しに来たのよ!!」

わめき散らす葵とは対照的にユアンは平然としたまま床に足を着く。そして彼は葵の問いに答える代わりに何も無い空中に向かって手を差し伸べたのだった。

「アン・エス・ペース・クペ」

ユアンが呪文を唱えると、彼の手は徐々に何も無い空間に吸い込まれるかのように消えて行った。だが以前にハルが同じことをしているを目撃しているので葵に驚きはない。ただ、ユアンが何故急にそんなことを始めたのか疑問は残った。

「何してるの？」

「これはね、五次元に置いてある物を……」

「それは知ってる。そうじゃなくて、何を出そうとしてるのって訊

「いるの」

「知ってる？ 何で？」

右手首から先を消したまま、ユアンは目を瞬かせて葵を振り向いた。葵は簡略に、同じ魔法を目にしたことがあることをユアンに告げる。しかし簡単な説明ではユアンは納得せず、誰がその魔法を使っていたのかと問いかけてきた。ユアンもアルヴァと同じく『探求の徒』であるようで、葵は少々うんざりしながら答える。

「この学校のマジスターだよ」

「へええ。マジスターと仲良くなれたんだ？ すごいね」

「仲良くってほどでもないし、すごくもないよ」

マジスターと関わったせいで散々な目に遭っている葵はそれ以上話を続けようという気になれず、閉口した。そこでちょうど探し物が見付かったらしく、ユアンの手が少しずつ異次元から現れ始める。その手が完全に元に戻った時、葵は驚きに目を見張った。

「それ……！」

「やっぱりアオイのものだった？ 僕らが初めて会った雪原で見つけたんだよ」

「私の鞆……！」

狂喜した葵はユアンの手から鞆をひったくり、急いで中身を確認する。教科書やノートは持ち歩かなくなったため物はあまり入っていないが、携帯電話や財布、ポーチなどの見慣れた私物を目にして葵は嬉しくなった。

（そうだ、ケータイ）

一縷の望みに縋り、葵は携帯電話の電源をオンにした。ディスプレイに加藤大輝の待ち受け画像が現れ、徐々に彼の顔を見ることが出来た葵は再び狂喜する。だが喜んでばかりもいられないので葵はさっそくりダイヤルを押して、向こうの友人である弥也に電話をかけてみた。しかし無情にも、コール音さえ聞こえてこない。解っていたことではあるが、葵は肩を落とした。

「何してるの、アオイ？」

この世界には電話というものが無いので、首を傾げているユアンには携帯電話の用途が解らないのだろう。また質問攻めにされては堪らないと思った葵は笑って誤魔化しながら、散らかした私物を再び鞆にしまった。

「どこにあったの、これ？」

葵が問うとユアンは雪の中から見つけてきたのだと言った。雪の中に埋もれていて携帯電話が無事だったのは奇跡的である。通話はダメだったが、これで加藤大輝の顔を見ることは出来るのだから、葵はそれだけでも良しと思った。

「さっきの男、アオイの恋人？」

「さっきの男？ って、この人のこと？」

ユアンが妙なことを言い出したので鞆から携帯電話を取り出した葵はディスプレイを掲げて見せた。携帯電話の画面を覗き込んだユアンが頷いたので、葵は思わず吹き出す。

「まつさかあ。この人はね、私なんかの手が届く人じゃないの」

自分の発言をキツカケに、葵の脳裏には何故かハル「ヒューイツ」の姿が蘇っていた。途端に浮かれた気分が萎えてしまい、葵は携帯電話を畳んで鞆にしまう。それから改めて、眉根を寄せているユアンを振り返った。

「私が帰れる方法、見付かった？」

「ごめん、それはまだなんだ。今日はそれをアオイに届けてあげようと思っただけだから」

「……そっか」

それでは、動いている加藤大輝に会えるのはまだ先の話になりそうである。しかし期待はしていなかっただけに葵は失望を感じてはいなかった。葵の態度があっさりしていたためかユアンが怪訝そうな表情になる。

「また怒られるかと思って、実はちょっと怖かったんだ」

「怒らないよ。怒っても、どうしようもないし」

「アオイ、少し変わったね」

アルヴァに散々どやされた後では変わらざるを得なかったと言っ
のが正しい。そんな風に考えるようになった自分がちょっと悲しい
と、葵は苦い笑みを零した。

「ところで、アルは？」

「アルは今、レイと話をしていると思うよ」

「あ、レイも来てるんだ？」

「うん。レイは僕の家庭教師だからね」

家庭教師だからと言って常に行動を共にする必要性はないのでは
ないかと葵は思ったが、この世界では『家庭教師』のニユアンスが
違うのかもしれないと思い、追及するのはやめておいた。床に座り
込んでいた葵は鞆を手にして立ち上がる。同じく立ち上がったユア
ンは、座るとき下敷きにしていたマントを払いながら葵に声をかけ
た。

「レイの所へ行くの？」

「レイにもアイサツくらいしておかないと。どこにいるの？」

「アオイはアルのこと、どう思う？」

「は？」

葵の問いに、ユアンは答えとはまったく別の言葉を返してきた。
質問の意図が解らなくて呆気にとられている葵にユアンはイタズラ
っぽい笑みを見せる。

「アルってカワイイ人なんだよ。アオイもそう思わない？」

「……思わない」

「何で？」

「思わないもんは思わないの。むしろユアンが何でアルのことをそ
う思うのか訊きたいくらいだよ」

だいぶ年上であろうアルヴァに向かって、十歳そこそこのユアン
が『可愛い』呼ばわりするのは違和感がある。葵はそう感じたのだ
が、ユアンはまったく気にしていないようで喜々として話を続けた。
「アオイはまだアルのことよく知らないんだね。じゃあ、行こうか」

ユアンの発言は今までの話の流れを受けてのものなのだろうが、

葵には理解不能だった。しかしユアンがさっさと歩き出してしまったので葵は仕方なく後を追う。回廊を並んで歩き出しながらユアンは楽しそうな声で葵に声をかけた。

「レイという時のアルを見ればちよっとは解るよ」

「……ふうん。よく解らないけど、レイという時のアルは違うんだ？」

「アルはレイにコンプレックスを持ってゐるからね」

「コンプレックスう？」

自信満々な態度が当たり前なのがアルヴァであり、コンプレックスという単語があまりにも似合わなかったので葵は胡散臭げにユアンの科白を繰り返した。葵の反応を見てユアンはくすくすと笑う。

「本当のアルを知ったら、きつとアオイも好きになっちゃうよ。アオイがアルを好きになってくれるといいな」

ユアンの思惑が色々な意味で無謀だったので葵はあ然として言葉を失った。しかしすぐ、以前にも似たようなことを言われたなと思ひ、考えに沈む。

（ああ、そうだ。アルに同じようなこと言われたんだっけ）

ユアンがアルヴァを好きになれと言うようにアルヴァもまた、葵にマジスターを落とせとぬかしたのである。ユアンの発言はアルヴァのそれとは少し意味合いが違うのかもしれないが、葵はこの話題にはうんざりしていた。

（なんでそう、誰かとくつつけたがるかな。この世界の人と付き合いつつたつて意味ないのに）

この世界の住人ではない葵は、いつか別の世界へ帰るのである。そう思いつつも葵の脳裏には栗色の髪をした少年の姿が浮かんでいた。あまり感情を表さないブラウンの瞳が、あどけない笑顔が、さりげない優しさが、苦しいほどに胸を焦がそうとしている。

（……どうしようもないのにね）

左手首に嵌めているブレスレットを一瞥し、葵は深々とため息を吐いて腕を下ろした。

シャドウダンス(7)

貴賓用と思われる部屋を後にした葵とユアンはひたすら回廊を進み、やがてドームの西側に造られたバルコニーへと達した。それは回廊の途中に設けられていたもので、バルコニーの先は再び回廊になっている。それまで室内にいたので夜風が新鮮なほど気持ち良く葵はユアンを誘って欄干に寄った。シエル・ガーデン内では華やかな宴が続いているが回廊は切り取られた別空間のように静まっており、談笑の声も聞こえてこない。しかしドームの外に人影があり、その人物達の話し声は夜風に乗ってバルコニーへと上ってきた。虫の声も聞こえてこない夏の夜、その言葉を聞いてしまったのは何の因果だったのだろうか。

「好きだ」

黄色い二月に照らされて、夜に佇む少年が静かに想いを口にした。栗色の短髪を礼服に合わせて整えている少年は、そのブラウンの瞳でドレス姿の少女を見据えている。少年はトリニスタン魔法学園アステルダム分校に通う者なら誰もが知る、マジスターのハル「ヒュイット」である。そして彼が想いを告げた相手は、同じくマジスターであるステラ「カーティス」だった。

シツクな黒いドレスを纏っているステラは月下で柔らかな笑みを浮かべた。夜に舞い降りた天使のような微笑みはハルだけに向けられたものであり、二人の間には穏やかな空気が流れている。ステラは心を乱された様子もなく、それが自然であるかのようにハルの想いを受け入れた。

「ありがとう。ハルがそんなこと言ってくれるなんて、嬉しいわ」
ハルの想いに気がついていたので、それとも自負があったのか、ステラはあまりにも平然としている。彼女の微笑みはポーカーフェイスの一種であり、ハルは納得がいかない様子で言葉を次いだ。

「仲間だから好きだって言ってるわけじゃない。俺はずっと、ステ

ラのことを一人の女として見てた」

「そう」

ハルが何を言ってもステラの冷静さが崩れることはなく、彼女が微笑みの下にどんな感情を秘めているのかは窺い様がない。だがステラには拒むような雰囲気もなかった。言葉に詰まって俯いてしまったハルの頬に、ステラがそつと手を伸ばす。

「ねえ、ハルは私のどんなところを好きになつてくれたの？」

ステラの細い指が癖のないハルの髪に達し、優しく梳く。身動きもせずステラを見つめていたハルは、やがてぼつりぼつりと本音を口にした。ステラの魅力はその美しさよりも、分け隔てのない誠実さと前向きな姿勢にある。ハルはそんなステラの生き方に憧れているのだと、小さな声で呟いた。それを聞いたステラはポーカーフェイスを崩し、ヘーゼル色の瞳に感情の火を灯した微笑みを浮かべる。

「ハルは私を、認めてくれるのね」

「……好きだ」

ステラの後頭部に手を回したハルが、そのまま彼女を引き寄せる。長いこと見つめ合っていた彼らは黄色い二月に見守られながら、自然と口づけを交わしたのだった。

「……ハル、もう演奏が始まるわ」

口唇を離れた後、ステラは甘いキスの余韻に浸る雰囲気もなくハルの腕から抜け出した。彼女がシエル・ガーデンの方へと歩き出したので、しばらくその場に佇んでいたハルもやがて立ち去っていく。夜は再び静寂を取り戻し、岩黄色の二月の下には葵とユアンだけが残されていた。

「あの子がステラカーティスかあ。ウワサ通りの美人だね。恋人がいなければ口説きたかったところだけど、残念」

ませた口ぶりでそんなことを言っていたユアンは、半ば本気のようにだった。だがステラもハルもすでに姿を消しているので、ユアンはすぐに調子を改めて葵を振り返る。

「ねえ、アオイは……」

何かを言いかけたユアンは不意に言葉を途切れさせた。葵の顔を見るなりギョツとした表情になった彼は子供らしく、狼狽を露わにしている。ユアンは慌てた様子で一点を見据えたまま動かない葵の腕を引いた。

「アオイ、どうしたの？」

「……えっ？」

「何で泣いてるの？ どこか痛いなの？」

「泣いてる……？」

瞬きをした刹那、大粒の涙が零れ落ちて頬を濡らした。葵は自分が泣いていることが信じられない思いで呆然と立ち尽くす。だが次第に息苦しさがかみ上げてきて、その場にしゃがみこんだ。

（痛い……）

ハルが、ステラを好きだと言った。彼の思いなど解りきっていたことなのに、そのたった一言の重みが胸を軋ませている。うまく息が出来ないのも涙が出るのも、胸が痛いせいだ。今までにも決して届くことのない想いを抱いたことは、ある。だが恋をしたのは、これが初めてだったのかも知れない。誰かを好きになることがこんなに苦しいなんて、今まで知らなかったのだから。

（ハル……）

ブレスレットをもらった時の弾んだ気持ちだが、動けない時に抱き上げて保健室まで連れて行ってくれた優しさが、バイオリンの音色に癒されたことが、あどけない笑顔に感じたときめきが、胸に突き刺さる。ブレスレットをつけている左腕を胸に抱き、葵は声を押し殺して泣いた。

「アオイ……」

突然の出来事に困惑しきったユアンの呟きが耳を突き、それでようやく冷静さを取り戻した葵は涙を拭って顔を上げた。しかしユアンの顔を見ることは出来ず、葵は目を逸らしながら口元を歪める。

「何でもない。気にしないで」

笑ったつもりでも葵の頬は引きつっていた。そのことが自分でも

解ったので、葵は取り繕うことを諦めて表情を消す。沈黙の中にと音楽が流れてきたので、葵は庭園の方へ顔を傾けた。

(この曲は……)

痛みを覚えた心に沁みてくる、バイオリンの音色。誘われるように歩を進めた葵はガラス張りの回廊から演奏者達の姿を目にした。庭園の中央に特設された舞台上、見知った者達がそれぞれに楽器を手にしている。バイオリンを弾いているのはハルとステラとオリヴァーの三人で、ウィルはピアノの前に座っていた。マジスターの生み出す旋律は夏の夜空に吸い込まれるように切なく、甘く、響き渡る。

今夜はつきりと自覚してしまった恋が思い出に変わるまで、どれだけの時間がかかるだろう。自分の思いであっても、それは計り知れない。だが今だけは、何もかも忘れてカノンの旋律に酔いしれていた。そう思った葵はガラスに額を預け、虚ろな瞳で華やかな宴を見下ろしていた。

さよなら(1)

昨日がどんな日であろうと、夜を見送った世界は必ず朝を迎える。真夏の太陽は今日も東から姿を現そうとしており、無防備な素肌をさっそく焦がそうとしていた。朝焼けを背負いながら人気のない街道を歩いている少女の名は、宮島葵。彼女は無慈悲な暑さに喘ぎながら丘の上に建つトリニスタン魔法学園を目指していた。

夜明け前に家を出た葵が学園に辿り着くのは、太陽がその姿を露わにしてからである。全身から汗を滴らせながら学園の裏門に到着した葵は慎重に周囲を窺い、誰の姿もないことを確認してから小走りで校舎に向かった。葵の所属する二年A一組の教室は二階にあるのだが、葵は階段を上ることもなく緩いカーブを描いている廊下を突き進む。そうして校舎一階の北辺に辿り着いた葵はスカートのポケットから鍵を取り出し、保健室の扉を開けた。

ドアが開くなり、その部屋の主である金髪の青年が背後を振り返った。椅子ごと体を回転させた白衣の青年は一瞥するに留め、葵は口を開くこともなく冷風を吐き出している装置の前に陣取る。しばらく冷風を独り占めした後、葵は汗が引いてから簡易ベッドに向かった。横一列に並んでいるベッドの一つに腰を下ろし、すかさず隣との間仕切りであるカーテンを引く。この部屋の主であるアルヴァ「アロースミス」を無視しきった葵はそのまま、ベッドに寝転がった。「……あいさつもなし、ですか」

薄いカーテンの向こう側で佇んでいる人影が声をかけてきた。しかし答える気力もなかった葵は頭まで上掛けをかぶり、体を丸めて目を閉ざす。借り物の屋敷で使用している上質な肌触りではなく、簡易ベッドの硬さが不思議と心を落ち着かせた。

臉を下ろして間もなく、葵は深い眠りに陥ってしまった。この世界には時計がなく、『アルヴァの部屋』には窓もないので、どのくらい眠っていたのかは分からない。だが葵がカーテンを開けてみて

も、アルヴァはまだ壁際の指定席に腰を下ろしていた。

「……アル」

葵が寝ぼけた声を出すとアルヴァは椅子を回転させて振り向いた。しかし彼は自ら口を開こうとはせず、ただ葵を見上げている。睡眠をとりすぎたせいか体が怠くて仕方がなかった葵はアルヴァのデスクに片手を突き、もう片方の手で額を押さえた。

「今、何時？」

「ナンジとは、以前にミヤジマが言っていた一日を区切るという単位のことですか？」

「……あー、そっか」

アルヴァの返答を得て、葵はようやく自分の置かれている状況を感じ出し始めた。ここには時計などなく、今の葵には時間にもあまり意味がないのだ。

「アン・シエーズ、エ、アン・ダブル、イシイ。アン・テ、ペパー
ミント」

ボーツとしている葵を見ていたアルヴァは不意に、次々と呪文を唱えた。アルヴァの意思に従って、彼の傍らには部屋の隅に置かれていた椅子とテーブルが移動してくる。そしてテーブルの上に置かれていた茶器がひとりで紅茶を注ぎ、室内には途端にハーブの香りが漂った。

「どうぞ」

アルヴァに促された葵は彼の傍らにある椅子に座り、ペパーミントの香りがする紅茶を口に運んだ。澱んでいた思考がハーブの清々しさに刺激され、少しずつ正気を取り戻していく。怠かった体も心なしか軽くなったものの、瞼の腫れぼったさだけはどうにもならなかった。

「目を擦るものではありませんよ、ミヤジマ」

アルヴァに注意されて初めて、葵は自分が無意識の内に何をしていたのか思い知った。彼の言うことがもつともだったので葵は大人しく腕を下ろす。そこでふと、彼女は目前にいる人物の異変に気が

ついた。

「ここ、学校の保健室だよな？」

「保健室ではありません。ここは僕の部屋です」

アルヴアは違うと言ったものの、葵にとつて簡易ベッドが並ぶこの部屋は保健室と同義だった。保健室と『部屋』の違いには言及せず、いつもの場所にいることを確認した葵は改めて眉根を寄せる。

「アル、どうしたの？」

「何が、ですか？」

「その言葉遣い。それに、服装もちゃんとしてる」

「ああ……そういえば、もういいんだつたな」

葵には解らない独白を零した後、アルヴアは言われるがままに服装を乱し始めた。わざわざシャツの裾を引っ張り出しているアルヴアを怪訝に思いながら、葵は言葉を次ぐ。

「アル、何か変だよ？」

「ミヤジマこそ、その泣きはらしたような目はどうした？」

あまり触れられたくないことを問われたため葵は閉口した。あからさまに答えるのを嫌がったアルヴアも葵から答えを聞き出そうとすることなく口を噤む。話題を逸らしたのは、言及するなということだったのだろう。そう解釈した葵は無言でカップを口に運んだ。

「ユアンが……」

「えっ!?!? 何!?!?」

沈黙の末にアルヴアが口にした名に、葵は過剰な反応をしてしまった。ガチャンという派手な音を立ててソーサーに戻されたカップから温くなった紅茶が零れ落ちる。いつもの調子を取り戻したらしいアルヴアは汚れたテーブルを見て呆れた表情をした。

「……ごめん。今、拭く」

立ち上がった葵は反射的に雑巾を探して周囲に視線を走らせた。だが彼女がそうしている間にアルヴアは呪文を唱え、指一本動かすことなくテーブルの上を片付ける。湯気の立ち上る新しいカップが目の前に置かれ、葵は複雑な気分になった。

「昨夜、マジスターの演奏が終わると同時に帰ったらしいね。ユアンが心配していたから、一応それを伝えておこうと思ったただけだ」
悠然と脚を組んでいるアルヴアはカップを口に運びながら平然と言つてのける。その発言に不公平さを感じた葵は椅子に座り直しながら唇を尖らせた。

（そんなの、何で泣いたのか知ってるようなもんじゃない）

もともと、マジスターを落とせと葵をたきつけたのはアルヴアなのである。ユアンの言っていたことはやはり理解出来そうにないと思つた葵はむつつりと黙り込んだままカップに口をつけた。

「今日、ステラ」カーティスが保健室に来たよ」

「……えっ？」

アルヴアは葵がカップを置いたところで口火を切つたので、葵は前傾姿勢のまま動きを止めた。恐る恐るアルヴアの顔色を窺つた葵は発言の真意が読めない無表情に出逢つて言葉に詰まる。葵が返事をしないしているとアルヴアは淡々と話を続けた。

「彼女はミヤジマを探していた」

「……そう。それで、アルは私がここにいるって言つちやつた？」

「僕は会っていない。彼女が訪れたのは『保健室』だからね」

アルヴアの言っていることが理解出来なかつた葵は不可解に眉根を寄せた。トリニスタン魔法学園の『保健室』は、簡易ベッドが並ぶここではないのか。葵がそう尋ねるとアルヴアは、ウサギがいるのが保健室であり、ここは自分の部屋なのだと答えた。アルヴアの説明が混乱を招くだけの代物だったので葵は頭を抱える。

「よく分からないけど、アルはステラに会ってないのね？」

「さつき、そう言つただらう」

「なら、いいや」

保健室とアルヴアの部屋の違いについて考えることを放棄した葵は、ひとまずステラに居所が知られていないならそれでいいと思つた。何も告げずにパーティーへ行く約束を反故にしたことは心苦しいが、今はまだ平気な表情を作れるだけの余裕がない。もう少し時

間が欲しいと、葵は切実な気持ちで思った。

「……帰るわ」

学園内にいれば、それだけ顔を合わせ辛い人物と遭遇する確率が高くなる。そう思った葵は重い頭と気持ちを抱えながら踵を返した。しかしすぐ、アルヴァに呼び止められたので振り返る。葵の傍まで来ると、アルヴァは彼女の右手にキスを落とした。

「……いきなり何？」

魔力を補充されたリングを右手ごと胸に引き寄せ、葵は訝しい目をアルヴァに向けた。アルヴァは無表情を保ったまま淡々と真意を明かす。

「これからしばらく、鍵を使っても僕の部屋には入れなくなる。その間は魔力の補充も出来ないから、なるべく魔法は控えてもらいたい」

「ふうん。どこかへ行くの？」

「まあ、そのようなものだ。僕がいなくても、ちゃんと登校するよ」

しっかりと釘を刺した後、アルヴァは「送るよ」と言って呪文を唱え出した。いつかの強制転移と同じく、葵が瞬きをする間に風景が一変する。ユアンから貸し与えられた屋敷の庭に描かれた魔法陣に出現した葵はアルヴァの様子に微かに眉根を寄せながらも振り返ることはせずに歩き出した。

さよなら（2）

岩黄いわぎの月の十五日、汗だくになりながら学園へと続く坂道を上りきった葵は裏門の影に隠れながら密かに進行方向の様子を窺った。ひとまず、前方に人影は確認出来ない。だがこの世界ではいつ、どこから人が現れるか分からないので、葵はフードを目深に被ってから校舎の方へと歩を進めた。

葵が普段愛用している高等学校の夏服とは違い、トリニスタン魔法学園の制服であるローブは極度に露出が少ないので暑い。だがいつもの服装では一目で居所が知れてしまうため、葵は自ら汗だくになることを選んだのだった。その理由はマジスターに発見されたくないということと、もう一つ、アルヴァの不在があった。葵にとってアルヴァがいないということは、校舎の中で何が起きてても逃げ込む場所がないということである。ステラと知り合ってから生徒達の態度は一変していたが、それでも油断はならないと、葵は創立祭の後からローブで登校しているのだった。

運良く登校する生徒に紛れることが出来た葵は魔法書を胸に抱き、俯いたまま校舎に向かった。校舎の西にある正門から続く白いローブの群れは葵に気付くことなく、人波の移動は滞らずに行われている。葵は自身の意思には関係なく一般の生徒達にとってはマジスターへの橋渡しなので、ここで正体が露見すれば騒ぎになってしまうことは必至だ。そうならないためにも、葵はいつそう項垂れながら歩を進めていた。

正門から続く人の流れはエントランスホールを抜けると散り散りになる。生徒達がそれぞれの教室へ向かう中、葵は階段を上り、二階にある二年A一組の教室を目指した。二階の廊下を歩く頃になるとさすがに隠れていられなくなつて、様々な生徒が声をかけてくる。葵はその全てをきれいに無視して教室に入ったのだが、自席に着くと同時にクラスメートが群がってきた。

「おはようございます、ミヤジマさん」

「今日はマジスターの方々と一緒にではありませんでしたの？」

クラスメートも、その他の生徒も、口を開けば『マジスター』の連呼である。これが嫌で葵はアルヴアの所へ逃げ込んでいたのだが、しばらくその方法は使えない。魔法書を開こうにも、こつも人が集まっていたのでは覗き見られてしまうので、葵は仕方なく何もない机の上を見つめていた。だがそうしていても、複数の手が視界に侵入してくる。

「ミヤジマさん、お加減がよろしくないのでは？」

「大変だ、すぐ保健室へ行つた方がいい」

ついには強引に顔を上向かせられ、葵のイライラは頂点に達しようとしていた。そのことを知ってか知らずか、クラスメート達は教室に入つて来た教師にまで葵の不調を訴えて騒ぎ立てている。耐え切れなくなつた葵は勢いよく席を立つた。だがその瞬間、葵の行動を無にするほどの嬌声が廊下から聞こえてきた。

「キリル様!!!」

「きゃー！ キリル様よ!!!」

教室外から聞こえてきた少女達の嬌声に反応したクラスメート達は先を争うように走り出す。そして葵の周囲には男子だけが残された。怒声を発しようとした間に起こつた騒動に毒気を抜かれた葵は脱力して座り込む。すでに教師は教壇に立つていたが、とても授業が始まるような雰囲気ではなくなっていた。

「アオイさんつてさ、あのキリル様とも仲いいの？」

クラスメートの男子に話しかけられ、気が抜けていた葵は無表情を作り直してから声の主を仰いだ。

(そんなに仲いいわけじゃないんだけど……)

ステラ以外のマジスターとは友人ですらない。だが真実を明かす義理もなかったので、葵は黙つたままでいた。初めから答えは期待していなかったのか、男子生徒たちは好き好きに話を続けている。

「すげえよな、あのマジスターの方々と仲良くなれるなんて」

「ステラ様も他の方達に比べれば社交的だけど、それでもアオイさんほど仲良くしてる人って初めて見たもんな」

「……そうなんだ」

無言で耳を傾けていた葵は知らずのうちに独白を零してしまっていた。あのパーティーの夜以来、葵はステラを避けている。だが彼女は、わざわざ教室にまで足を運んで葵を探してくれているのだ。運良くと言うべきか不運にもと言うべきか、ステラが教室に来た際、葵は寂しげに立ち去る彼女の後ろ姿を目にってしまった。軋むように心は痛んでいるものの、葵はまだ自ら行動に移せないでいる。

(シエル・ガーデンに行けば会えるんだろうけど……)

そこまで考えたところで、葵はふと目を上げた。葵の周囲に集まっているクラスメートの男子達が、何故か一樣に葵を注視している。あまり多くの視線に晒されることに慣れていない葵は不快に眉根を寄せながら口を開いた。

「何？」

「やっと喋ってくれた」

クラスメートの男子から初めて好意的な笑みを向けられたせいで葵は呆気にとられてしまった。葵が話に応じたせいで調子に乗ったのか、男子達は口々に喋り出す。

「どうしたらあのステラ様と仲良くなれるんだ？」

「コツを教えてくれよ、コツを」

「ステラ様みたいな女性を嫁にもらうのが理想だけどさあ、それを抜きにしてもお近づきになりたいよなあ」

「知ってるか？ ステラ様、王都の本校でも編入を勧められるくらい優秀だったんだぜ」

「バーカ、当たり前だろ。あのステラ様だぜ？」

初めこそステラに媚を売ろうとする男子に呆れていたものだが、彼らの雑談を聞いているうちに葵は心境の変化を覚えずにはいられなかった。やましい下心がないとは言い切れないが、彼らは誰もがステラを尊敬しているのだ。その感情は、葵がステラに抱いている

思いと似通うものがあつた。

(……なんだ、良家の子息とか言っても皆わりとフツウなんじゃない)

女子には気を許すことが出来ないが、クラスメートの男子にならもう少し楽に接してみてもいいのかもしれない。葵がそう思い始めた頃、二年A一組の前の廊下で一際大きな嬌声が上がった。それは教室の中にも侵入してきて、やがて青褪めた顔をしたクラスメイト達が葵の周囲から遠ざかって行く。人垣が取り払われたことで、葵は騒ぎの主がこちらへ向かって来ていることを初めて知った。

こちらへ歩み寄つて来ている人物は学園の中だけでなく世界でも珍しいのだという黒髪にブラックの瞳という容貌をしている少年である。マジスターの証とも言える私服姿を目に映した時、葵はおもむろに眉根を寄せた。マジスターの一人であるキリル「エクランドは葵の座っている席の横で足を止めると、その切れ長の目に怒りをぎらつかせながら葵を見下ろす。その直後、彼は予告もなく葵をぶつ飛ばした。

「きゃあああ!!」

「キリル様、何をなさるのですか!？」

椅子から転げ落ちた葵は誰かに佑け起こされ、耳元で女の悲鳴を聞かされた。しかし頭がグラグラしていて、言葉は耳を突くもの理解が追いつかない。端整な顔に怒りを滲ませているキリルは葵を佑け起こした者に向かって怒鳴り声を上げた。

「散れ!!」

トリニスタン魔法学園に通う者にとってマジスターの発言は絶対の命令と同じである。教師であつてもキリルの言葉には逆らえず、葵を佑け起こした者のみならず全ての者が教室を出て行った。その頃には葵の意識もはつきりしていたが、それでもまだ状況をうまく呑みこむことが出来ずにいる。痛みは恐怖に変わり、怯えた葵はキリルから遠ざかるうと座り込んだまま後退した。だがキリルがそれを許さず、彼は葵の胸倉を掴み上げる。

「いい気になつてんじゃねえぞ。どういつつもりだ、てめえ」

怒気を孕んだ端整なキリルの顔が、葵にはひどく恐ろしいものに見えた。しかし逃げ出そうにも体が震えていて、手足にうまく力が入らない。葵が答えなかつたのでキリルは彼女の胸倉を掴み上げている手にさらなる力をこめた。

「ステラにあんな顔させやがつて！！ ただじゃおかねえ！！」

キリルが拳をかざしたのを視界に捉えた葵はとつさに目をつむつた。しかし二度目の衝撃が訪れる前に教室の扉が開かれ、叫び声と共に新たな人物が乱入してくる。

「うわあ！ キル、待てつて！！」

がっちりとした体躯の少年が間一髪のところまでキリルの拳を留まらせる。茶髪を一つに束ねている彼はそのまま、キリルの体を抱えるようにしながら葵から引きはがした。

「放せ、オリヴァー！！ 殴つてやらなきゃ気がすまねえ！！」

「もう殴つてるじゃないか」

マジスターの一人であるオリヴァーはバベッジと共に二年A一組の教室に入って来た赤髪の少年が、壁に背を預けてへたりこんでいる葵を見下ろして言う。おそろしく女顔をしている彼は一つ息を吐き、オリヴァーにキリルをしっかりと拘束しておくよう言い置いてから呪文を唱え出した。

「アン・セリユール・スユル、キリルはエクランド。アン・コンプレシオン・メタスタス、ケルクパール・ロワン」

「てめつ、ウィル！！」

キリルが抗議の声を上げる頃には、オリヴァーの腕の中にいる彼の体だけが光を帯びだした。その一瞬後、キリルの姿だけが跡形もなく消え去る。キリルがいなくなったことで彼を押さえつけていたオリヴァーはホツとしたような息を吐き、それから改めてへたり込んでいる葵に向かった。

「アオイ、大丈夫か？」

オリヴァーに声をかけられても葵には答えることが出来なかつた。

殴られた頬を手で隠しながら俯くと涙が零れてしまい、葵は慌てて顔を手で覆う。

「どう見ても大丈夫じゃないでしょ」

怯えきつている葵に目をやった赤髪の少年　マジスターの一人であるウィル・ヴィンス　は嘆息した後、まごついているオリヴァーの方へと顔を傾けた。

「キルが戻って来たらうるさいから、とりあえず行こうか」

先程ウィルが放った魔法は転移魔法の一種であり、呪文を直訳すると『キリル』エクランドをロツクオン。どこか遠くへ強制転移』となる。強制的にどこかへ飛ばされてしまったとしてもトリニスター魔法学園のエリートであるキリルがこの場所へ戻って来るのは時間の問題であり、あまり悠長なことをしてはられないのだ。葵が泣き出してしまったことに戸惑っていたオリヴァーもそのことに気がついたようで、彼は問答無用で縮こまっている葵を抱き上げる。それを見たウィルは床に落ちていた葵の魔法書を拾い上げ、自分の魔法書を開いてから再び呪文を唱え出したのだった。

さよなら(3)

ウィルの転移魔法によって葵が連れて行かれたのは保健室でもなく、まったく見覚えのないどこかの部屋だった。室内にはキングサイズのベッドが一つ置かれていて調度品も整えられていることから、誰かが私室として使用している部屋だと思われる。青系の色彩で統一された部屋にはどことなく安息感が漂っていて、ベッドに下ろされた葵は人心地ついたような気になった。

「ごめんね。ありがと、オリヴァー」

オリヴァーに礼を言った後、葵は自分の醜態を思い返して苦笑いを浮かべたくなった。だがキリルに殴られた頬がさっそく腫れ始めていて、唇を引くことさえ痛みを感じたので無表情に戻る。葵の代わりに苦笑したオリヴァーはそのままウィルに視線を移した。

「で、何で俺の部屋なわけ？」

「魔法書を開いたら目に入ったから」

転移の魔法は通常、特定の魔法陣間で行われる。例えばトリニスタン魔法学園から家に帰りたい時は、学園の正門に描かれた魔法陣の上に立ち、生徒それぞれの家に描かれた魔法陣へと飛ぶのだ。移動先は個々の魔法陣を知っていることが大前提であり、普通は各々が所持している魔法書に転移の呪文と共に様々な魔法陣が記されている。マジスターほどの実力者ともなると転移を行う際の魔法陣は必要としないことが多いが、この辺りもケースバイケースである。だがそんな事情を知らない葵はオリヴァーとウィルの会話についていけず、むしろ別のことが気になっていた。

「ここ、オリヴァーの部屋なんだ？」

「そう。くつろいでいいよ」

葵に応えたのは部屋の主ではなく、ウィルだった。葵は笑おうとしたのだが、再び頬の痛みが邪魔されて真顔に戻る。それを見たオリヴァーがある行動を起こした。

「拳大の氷。と、アン・タオル、イシイ」

オリヴァーが発したのは呪文スベルと話し言葉が一緒になったものだったが、魔法は両方とも彼の命令を遵守した。掌の上に発生させた氷をクローゼットから飛んで来たタオルで包み、オリヴァーはそれを葵に差し出す。

「頬、冷やしとけよ。何もしないよりはマシだと思うぜ」

「あ、うん。ありがとう」

オリヴァーから渡された氷嚢を、葵はさっそく頬に当ててみた。

しかし熱が引いていく心地良さよりも痛みの方が勝り、葵はおもむろに顔をしかめる。葵が悶えている間にオリヴァーはお茶の準備を始め、ウィルは手にしていた魔法書を開いた。

「じゃあ、僕は行くから」

「はいよ」

唐突に別れを告げたウィルを引き止めるでもなく、オリヴァーはあっさりと手を振って見せた。再び転移の魔法を発動させたウィルは光に包まれ、一瞬後には姿を消す。静かになった室内で紅茶を勧められた葵は眉根を寄せながらオリヴァーを仰いだ。葵の問いたいことなどお見通しの様子で、オリヴァーはゆっくりと口を開く。

「どうせすぐ戻って来るから、ウィルのことは気にするな」

「あ、うん」

「ウィルが戻って来る前に、少しだけ俺の話聞いてくれないか？」

「別に、いいけど……」

改まって話と言われると警戒せずにはいらなかったが、ここまですぐで良くしてもらっておいて拒否するわけにもいかない。そう思った葵はティーカップから手を引いて話を聞く態勢を整えた。オリヴァーはベッドの脇に立ったままカップを口に運び、それをソーサーに戻してから本題を口にする。

「女の子殴るなんてサイテーだけどさ、キルがアオイに腹を立てたのには理由があるんだよ」

「……ステラのことでしょ？」

「なんだ、知ってたのか」

「あいつが喚いてたから」

「そっか」

ふうと嘆息し、オリヴァーは少し距離を置いて葵の隣に腰かける。ベッドのスプリングと共に自分の心も軋んだような気がした葵は体を硬くしながらオリヴァーの次の言葉を待った。しかしオリヴァーには特に咎めようとしていない様子もなく、彼は淡々と言葉を重ねる。「キルにとってさ、ステラは特別なんだ。他の誰がどんなに苦しんでようが無関心でも、ステラのこととなると見てらんないんだろっかな」

「……それって、ステラが好きだったこと？」

「恋愛対象としての『好き』じゃないけどな。キルにとって俺たちは特別なんだよ。まあ、俺たちにとっても特別に違いないけど」

キルもオリヴァーも『仲間』としてステラを愛している。それはおそらく、ウィルも同じなのだろう。ハルだけが仲間という枠組みを超え、一人の女性としてステラを愛してしまった。現状に至るまでにはそれなりの出来事があったのだろうが、それは葵の知らない過去の話である。

「やっぱり、ステラのこと避けてたのか？」

率直に問われると答えにくく、葵は口を噤んだままオリヴァーの顔を窺った。葵の不安を感じ取ったらしいオリヴァーは顔の前で軽く手を振って見せる。

「言っとくけど、俺は責めようとか思っていないから。ステラが可哀想だとは思ってるけど」

責める気はなくともオリヴァーの科白は十分な皮肉であり、葵は小さく息をついた。

「ステラ、そんなに落ち込んだ？」

「まあ、それなりに」

「そっだよねえ」

理由も分からず約束をすっぱかされ、その後もとことん避けられ

ていれば誰でも傷つくだろう。改めて自分の行動を思い返した時、葵は罪悪感にうちひしがれた。

「何でステラのこと避けてるのか知らないけどさ、会ってやれよ。もう、しばらく会えなくなるんだから」

「……え？」

自分の思考に沈んでいた葵はオリヴァーの一言を受けて顔を上げた。だが葵が問いを口にする前に室内が光で満たされる。一瞬の発光が収まると、室内の片隅にはウィルとステラが出現していた。

「アオイ……！」

姿を見せるなり、ステラは一目散に葵の前へと寄って来た。夕オを頬に当てている葵の顔を見てステラは青褪めながら頭を垂れる。「ごめんなさい、アオイ。私のせいで……」

「ステラは悪くないよ」

焦った葵はタオルを取り落とし、慌ててステラの肩を掴んだ。葵に促され、ステラはゆっくりと面を上げる。久しぶりにステラの顔を見た時、葵は改めてすまないことをしたと思った。

「約束、すっぱかしてごめん」

一緒にパーティーへ行くという約束をすっぱかしたために顔を合わせづらくなったのだということ、葵はステラを避けていた理由として説明した。嘘をつく心苦しきはあるものの、ステラがハルと恋人同士になったのであれば本当の理由を言うわけにはいかない。

葵自身は苦しい言い訳だと思ったが、ステラは小さく首を振って見せた。

「そのことだったら、もういいの。アオイに会えて良かった」

「ステラ……」

ステラの寛大さに葵は複雑な気持ちになった。しかしステラが「会えて良かった」と言ったのは、どうも和解だけが要因ではなさそうだった。

「私ね、王都の本校へ行くことにしたの。橙黄オレンジの月の一日には向こうへ行くわ」

ステラは決意を秘めた静かな声音で語ったが、それが何を意味するのか葵には分からなかった。ただ先程オリヴァーが『しばらく会えなくなる』と言っていたので、転校するのかなと思っただ程度である。しかし事は、そんなに単純なものではないようだった。

「アオイって案外淡泊なんだね」

「キルは駄々っ子みたいに反対だって騒いでたし、ハルは安心してたのにな」

携帯電話という便利なものが普及している世界に生きていた葵にとって、距離が離れるということは別れを意味するものではなかった。ましてやこの世界には転移の魔法という、携帯電話を超える便利なものまで存在するのだ。葵自身は魔法を使えないがステラにこっちへ来てもらうことは出来るし、アルヴァに頼めば王都へ連れて行ってもらうことも出来るだろう。だがウィルとオリヴァーの会話は、葵のそうした考えを否定するものだった。

「えっ、だって……会おうと思えば会えるんじゃないの？」

「もしかしてアオイ、本校がどういう所なのか全然知らないの？」

葵が頷くと、問いを投げかけたウィルは信じられないといった表情をした。ウィルと同様に、オリヴァーやステラまでもが驚いているようである。まずいことを口走ったと察した葵は口を噤んだのだが、結局はウィルが『本校の特殊性』についての説明を始めたのだった。

さよなら(4)

白色の色味が強い鮮やかな黄色の二月が浮かぶ夜、トリニスタン魔法学園の制服である白いローブを月色に染め上げた葵は人気のない校舎を外から見上げていた。しかしそれも束の間、小さく息を吐いた葵は校舎の東側に向かって歩き出す。校舎に限らずグラウンドも、マジスターが拠点としているシエル・ガーデンも無人であり、丘の上に建つトリニスタン魔法学園は夜の静謐に包み込まれていた。

オリヴァーの部屋で本校の特殊性についての説明をウィルから聞いた後、葵はステラと二人で彼女の家へと移動した。そこで改めて二人だけで話をして、ステラに送ってもらってトリニスタン魔法学園の正門に出現したのである。マジスター以外の誰かと話をして、葵は保健室を訪れてみた。しかしアルヴァどころかウサギにすら出会えず、仕方なく校舎を後にしてきたのだ。だがそのまま帰る気にもなれなくて、葵の足は自然と『時計塔』に向かっていた。

葵の通っているトリニスタン魔法学園アステルダム分校は、東の大陸の中程に位置するアステルダム公国内に存在している。東の大陸を統治しているのはスレイバルという王国であり、この大陸内の国は全てスレイバル王家から公の称号を与えられた君主が統治する公国である。各公国に設置されているトリニスタン魔法学園の分校は全て王立だが、王都の本校だけは全ての面に置いて分校とは一線を画していた。

本校と分校でまず違うのが、生徒の質である。トリニスタン魔法学園自体が良家の子息しか通うことの出来ないエリート学園だが、王都の本校はさらに各分校のマジスタークラスでないと入学することすら出来ない。本校は特別な魔法使いである魔法士を目指す者にとって聖域であり、世界の魔法が集う場所なのだ。それゆえ本校に入学した者は卒業要件を満たすまで学園の敷地内から出ることも許されず、学園の敷地内にある寮と校舎を往復するだけの日々を送る

ことになる。そして卒業までに何年かかるかは、個々の力量次第なのだ。

ウィルやステラから本校と分校の違いについて説明されても、この世界の者ではない葵にはよく解らなかった。ただ一つ解ったことといえば、ステラが本校へ行つてしまえば何年も会えなくなるということだけである。しかしそれが解れば、葵を沈ませるには十分だった。何年もこの世界に留まる気のない葵にとって、ステラの旅立ちが別れになるかもしれないからだ。

(でも、ステラらしいよね)

世界の理を知りたいという目標に向かって、ステラは走り出した。それはいかにも、レイチエルのようになりたいと瞳を輝かせていた彼女らしい決断だった。

この世界へ来て初めてできた友達であるステラは葵にとって特別な存在だった。寂しさは募るものの辛い別れではないだけに、ステラのことは応援したいという気になる。しかしステラにも明かせない思いを秘めている葵はどうしても割り切つて考えることが出来ずに、夜にひっそりと佇む時計塔を訪れてしまっていた。

(……ハル……)

彼のことに ついて、ステラは何も言わなかった。告白を覗き見てしまったことを明かすことが出来なかったため、葵からも尋ねていない。ハルは、ステラに着いて行くのだろうか。もしそうだとすればステラだけでなく、ハルとも二度と会えなくなるだろう。そう思うと葵の胸は痛んだ。

(もう終わってるのに……)

今になってどれだけハルに焦がれても、もうどうしようもない。そう思いながらもブレスレットを捨てられなかったように、葵は時計塔の階段を上り始めた。

暗闇の中、手元に出現させた小さな明かりを頼りに階段を上りきつた葵は、そこに求めていた姿を発見してしまって足を止めた。大きく開いた空洞から差し込む月明かりに照らされて、片膝を抱いて

座り込んでいたハルがこちらを振り向く。葵の姿を認めると、ハルはつまらなさそうに視線を外した。

「またあんたか」

そう呟いたハルの口調は素っ気ないものであり、彼は体全体から迷惑そうな空気を醸し出していた。あからさまな拒絶に怯んでしまったものの、葵は結局ハルの元へと歩み寄る。

「バイオリン、弾いてたの？」

この場所にいる時、ハルはよくバイオリンを手にしていた。その音色を聞くために時計塔へ通っていた葵にとって、この場所とハルとバイオリンは切っても切れない間柄である。しかしハルはニヒルな笑みを浮かべただけで答えようとはしなかった。その微笑みが自嘲的に思えて、葵は眉根を寄せる。

「頬」

「えっ？」

「その顔、どうしたの？」

無表情に戻ったハルが指を差してきたので、葵は反射的に頬に張られたガーゼを手で覆い隠した。

「これは……」

事情を説明しようとしてまずいことに気がつき、葵は言葉を濁して閉口する。キリルに殴られたのだと教えてしまえば、おそらくハルはその理由を尋ねてくるだろう。そうなればステラを避けていたことに言及しななければならず、非常に触れられたくない話題に話が及ぶ可能性が高いのだ。

「そういえば、さ。パーティーでの演奏、ステキだったよ」

言葉に窮した葵は話題を変えることで逃れようと思ったのだが、その話題も結局は自分の首を絞めるものでしかなかった。

「来てたんだ？」

ハルに何気なく問われた時、葵は自分の発言が何を意味するのか悟って再び閉口した。彼はおそらく、葵が断りもなくステラとの約束をすっばかしたことを知っているだろう。にもかかわらず、葵は

しつかりパーティー会場にいて、マジスターの演奏を聴いていたのだ。アルヴァやユアンのことを他言するわけにはいかないので、葵には言い逃れの道がなくなってしまうことになる。ハルは特に説明を求める発言などはしなかったが、自分が空回りばかりしていることに気がついた葵は嘆息してから口調を改めた。

「あのさ、聞いてもいい？」

「何？」

「ハルも王都に行くの？」

葵が核心に触れるとハルは一瞬だけ傷ついたような表情を見せた。弱々しいその表情に、葵の胸はドキリと疼く。

「……行かないんだ」

ハルは答えなかったが、それは肯定の意だろう。そう思った葵は複雑な想いを胸にしまっておけず、顔を歪めた。双方が納得しているのであれば、ハルが傷ついた顔をすることもないだろう。彼はステラと一緒にいたいのに、いられないのだ。しかしその理由が解らなかつただけに、葵には納得がいかなかった。

「何で？ ステラのこと好きなら一緒に行けばいいじゃない」

「あんたには関係ないだろ」

突き放すように言われた時、葵は思わずストレートな感情を叫びそうになった。ぐっと堪えて拳を握り、葵は平静を努めて言葉を重ねる。

「ステラだつてきつと、ハルに来て欲しいと思ってるよ」

「お前に何が分かるんだよ！！」

俯き加減に喋っていた葵はハルの発した怒声に驚き、ビクリと体を震わせた。不機嫌そうな顔で葵を睨んでいたハルは言葉を次ぐことなく立ち上がり、大きく開いた空洞へ向かって歩き出す。ハルが行ってしまうと思った葵はとっさに走り出し、彼の腕を引いて声を荒らげた。

「分かるよ！！」

ステラの家で二人だけで話をした時、彼女は葵に王都へ行く決意

を固めた経緯を明かした。彼女はハルのことについて直接的には触れなかったが、葵はあのパーティーの夜に聞いたハルの素直な気持ち、迷っていたステラの背を押したのだと察していた。

「ハルがステラの生き方に憧れてるって言ったから、そういうところが好きなんだって言ったから、ステラは夢に向かっただけでいいって決めたんだよ！ 認めてくれて嬉しいって、パーティーの時ステラが言っただけじゃない！」

「何で知って……」

「見ちゃったのよ！ 見たくなかったけど！」

瞠目しながら振り向いたハルの顔を見たら涙が零れてしまい、葵は手を離して顔を伏せた。

「……何で、あんたが泣くの？」

先程までの刺々しさが消え、ハルの口調には呆れが滲んでいる。

葵が答えられないでいるとハルは小さくため息をついた。

「ステラにとっては自分の夢が一番なんだ。あいつは、俺が王都に行くことなんか望んでない」

「何で、そんなことが分かるのよ。ステラに着いて来るなって言われたってどういうの？」

「逆。何も言われてないから、あいつは俺を置いて行くつもりなんだろ」

「違う。ハル、全然分かってない。ハルの人生はハルのものだから、ステラは一緒に来てって言えなかったんだよ」

ステラもおそらく、ハルのことを愛している。あのパーティーの夜、ハルの告白を聞いたステラがちゃんとした返事をしなかったからこそ、葵はそう感じていた。カーティス家の繁栄を考えるのが自分の使命だと寂しそうに言っていたステラは、本当はずっと前から夢のために生きたかったのだから。だが夢に生きるためには全てを捨てなければならなかったため、迷っていたのだ。ハルを巻き添えにしてはならない、と。

「私より付き合い長いんだから、ハルの方がステラの性格知ってる

はずでしょ？ ちゃんと話もしないで一方的に決め付けるんじゃない！

それだけ叫び切ると葵は涙を拭いながら踵を返した。言い逃げになっってしまうが、葵にはもうどうすることも出来ない。ここから先は余人である葵には立ち入ることが出来ない、二人だけの問題なのだ。

さよなら(5)

手元に浮かばせた明かりを頼りに時計塔の階段を下りながら、葵は空いている片手でしきりに顔を拭っていた。頬に当てていたガーゼが涙に濡れて気持ちが悪く、葵は思い切ってそれをひっぺがす。ゴミとなってしまうたガーゼを暗闇に放り投げ、葵はもう一度涙を拭ってから塔の出入り口へと向かった。

(バカみたい、私……)

ハルにここにいて欲しいという思いと、ステラを悲しませたくないという思いとがごっちゃになって、もう自分が何のために泣いているのかすら分からなかった。それでも不思議と、惨めな気持ちはカケラもない。それはきつとハルに傷ついた表情をされるくらいならステラと幸せになってももらいたいと思っっているからだと思い、葵は自分が悲しくなった。

(何なのよお、もう。早く元の世界に帰りたい)

この世界には失恋した時、慰めてくれる友達もいない。ハルの好きな人がステラでなければ彼女に相談出来たかもしれないが、今回は無理である。いくら呼んでも届かない友人の名を胸中で連呼しながら、葵はドアノブに手をかけた。しかしいくら押しても、扉はびくともしない。

(あ、あれ？ 引くんだっけ?)

試しに引いてみたものの、扉は動かなかった。もう一度押してみても、やはり開かない。パニックに陥った葵は頭を抱え、その場にしゃがみこんだ。

(えっと、これは、つまり……)

この扉が開かないということは、転移の魔法が使えない葵にとっては一大事である。二階部分に空いている空洞の他は、塔の出入り口はここしかないからだ。

(ウソ、ほんとに?)

焦った葵は扉に取り縋り、何とか開けようと試みた。しかし最後の手段で体当たりをしても、扉は動かない。血の気が引いた葵は先程まで話をしてきた者の顔を思い浮かべ、急いで階段を逆戻りした。
(お願い、まだいて!)

転移魔法を使えるハルは、もう姿を消してしまっているかもしれない。しかしハルがいなければ、葵に残された道は二択である。二階部分に大きく開いている穴から飛び降りるか、それとも助けが来るのを延々と待つか。どっちも嫌だと思った葵は息を弾ませながら全速力で階段を駆け上った。

言葉も発せなくなるほど息を切らせた葵が二階に辿り着いた時、ハルの姿はまだそこにあつた。彼は大きく開いた空洞の前に佇み、そこから差し込む月明かりを浴びている。ホツとした途端に気持ち が緩んでしまい、葵はその場でへたりこんだ。

「……あんたもか」
その場で振り向いたハルは葵の呼吸が整うのを待ってから口火を切った。だが彼から発されたのは不可解な言葉であり、葵は眉根を寄せる。

「私もつて……何が？」
「出られない」

葵に答えると、ハルは何もない空中に向かって腕を差し伸べた。だがハルの手は、まるで壁に突くような形で静止する。慌ててハルの傍へ寄つた葵は自分でも腕を伸ばしてみたが、それはハルと同じく何もない空間で止められてしまった。

「何、これ」
「障壁で覆われてる。こんな魔法見たことないけど」
「これ、魔法なの？」

驚いた葵はハルを振り向いたが、彼はまだ穴の向こう側を見つめていた。顎に手を当てて目を細めたハルは、そのままの姿勢で言葉を紡ぐ。

「目を凝らすと魔力の波動が見える。でも誰の魔力なのかまでは分

からない」

「えーっ……下のドアも開かなかったよ」

「それなら、塔全体を覆ってるんだな」

そこで不意に眉間の皺を解いたハルは壁際に向かって歩き出した。特に焦っているような様子もなく、彼はそのまま壁に背を預けて座り込む。腰を落ち着けてしまったハルを見て不安を煽られた葵は急いで彼の傍に寄った。

「転移魔法で出られないの？」

「試してみたけどダメだった。誰がやってるんだか知らないけど、こんな大掛かりな魔法はいつまでも持たないから、朝になれば出られるよ」

ハルは何でもないことのように言っただけだが葵は絶句した。しかし呆けている葵に構うことなく、ハルは何かの呪文を唱え出す。葵が我に返ったのは、ハルが五次元からバイオリンを取り出して後のことだった。

「召喚は出来るんだ？　だとしたら本当に、閉じ込めただけなんだな」

手元のバイオリンに視線を落としながら独白した後、ハルはバイオリンを構え直した。弓が弦に添えられて、ハルの指先からメロディが零れ落ちる。そうして始まった曲は、カノンだった。

ハルの傍らに立ち尽くしていた葵は脱力するように膝を折り、その場に腰を下ろした。独奏のカノンは追いかけてきてくれる音色を待つように悲しく、寂しく響き渡る。彼がこの場所でカノンを奏でていたのはステラを待っていたからなのではないかと、葵はふと思っただ。

「……この場所さ、」

演奏を終えたハルはバイオリンを下ろすと静かに言葉を紡いだ。

ハルに見とれていた葵は我に返り、彼と並んで壁に背を預けながら話に耳を傾ける。葵の呼吸に合わせるように、ハルはゆっくりと続きを口にした。

「あんたがどういうつもりでここに来てたのかわからないけど、ここは俺たちの練習場なんだ。穴開いてるけど広さもあるし、ちゃんと反響するし」

「……そうだったんだ」

「ここでよく、皆で音合わせやってたんだよ。ステラが本校に短期留学するまでは」

片膝を抱いたハルは遠い目をしながら、葵の知らない昔のことを語り出した。葵がトリニスタン魔法学園に編入した時、ステラがいなかったのは彼女が留学中だったからである。彼女が短期とはいえ本校に行くことと決めた時からこうなることは決まっていたのかもしれないと、ハルは寂しげに零した。

「でも俺、ステラのそういうところが好きなんだ。だったら、仕方ないよな」

その『仕方ない』が何を意味するのか、葵にはもう尋ねることが出来なかった。返す言葉も見当たらず、葵は両膝を腕で抱く。膝に顔を埋めているとハルの声が頭上から降ってきた。

「眠い？ 寝る？」

「えっ」

ハルの発言に耳を疑った葵は焦って顔を上げた。すると先程よりハルの顔が近くにあり、葵は硬直する。ハルは何かに気がついたような素振りを見せ、葵の頬に手を伸ばした。

「腫れてるな」

思いがけない奇襲に遭い、葵は息をするのも忘れるほど真っ白になってしまった。それまで意識していなかった頬の熱が、沸騰するように温度を上げていく。ハルの手を払い除けることも出来なかった葵は、体ごと側方に倒れこんだ。

「何、急に。大丈夫？」

淡泊な反応を見せるハルに「あんたのせいだ」と胸中で呻きながら、葵はほふく前進に近い形で体を引きずりながら遠ざかった。ハルは葵の奇妙な行動に首を傾げながら立ち上がる。手にしていたバ

イオリンを五次元にしまった彼は、今度は五次元からベッドを引きずり出した。ベッドが落ちてきた衝撃と一瞬の突風に何事かと立ち上がった葵は、突如として室内に出現したベッドを目にして呆然と立ち尽くす。

「あの……これは、一体？」

ベッドを指差しながら、葵は恐る恐るハルの顔色を窺った。対するハルは眉一つ動かさず、至って平静に答える。

「眠いんでしょ？ 寝ようよ」

俺も眠くなってきたと言いながら、ハルはさっさとベッドに歩み寄った。絶句した葵がいつまでも動けないでいると、豪華なベッドに腰掛けたハルが顔を傾けてくる。

「早く来なよ」

「っ、無理むりー!!」

「キングサイズだから落ちたりしないよ」

我に返って慌てて声を張り上げた葵をよそに、ハルはあくびをしながらベッドの中へもぐっていった。そういう問題じゃないと胸中で呟いた葵は肩を落としながらベッドから遠ざかる。無駄に広い空間の隅っこで壁に寄り添った葵は「ここがいい」とハルに告げ、膝を抱えて涙に暮れながら夜を明かしたのだった。

さよなら（6）

時計塔を覆っていた謎の障壁はハルの言った通り、朝になると消えていた。転移魔法で家に帰るといふハルと別れ、一階の扉から外に出た葵は寝不足で重い体と、それ以上に重い頭と闘いながら西進する。爽やかな夏の夜明けは恨めしいほど眩い光を放ちながら葵の背を押していた。

とても丘陵を下って家に帰るだけの体力は残っていないと感じた葵は人気のない校舎に進入し、エントランスホールを抜けて一階の北辺にある保健室を目指した。明け方に少しうとうとただけでほとんど寝ていない葵は思考が停止状態にあり、常に携帯している鍵を無意識のうちに鍵穴に差す。そうして保健室の扉を開けた葵はこちらに背を向けて座っている白衣姿の青年を目にして、少しのあいだ考えこんだ。

「おはよう、ミヤジマ」

椅子ごと体を回転させたアルヴァは手にしている煙草から白煙を立ち上らせながら朝の挨拶を口にした。何か引つかかったものの眠気が限界に近付いてきたので、葵はベッドに直行する。

「寝かせて」

アルヴァにそれだけを言い残し、葵は間仕切りであるカーテンを閉めて固いベッドに横たわった。精神的な疲労もピークに達していたため、瞼を下ろすとすぐに眠りに誘われる。そうして眠りに落ちた葵は誰に起こされることもなく寝続け、やがて自然に目が覚めたのであった。

この世界には時計というものがなく、またアルヴァの部屋には窓がないので今が昼なのか夜なのかさえ分からない。自分がどのくらい眠っていたのかも分からなかった葵はただただ重い体を動かし、間仕切りであるカーテンを開けた。壁際のデスクには相変わらず白衣姿の青年が座っている。彼は葵の気配に気がつくや椅子ごと体を

傾けてきた。

「おはよう。よく眠っていたね」

葵に一声かけると、アルヴアは呪文の詠唱を始めた。アルヴアの唇から零れたスペルは茶器を動かす、湯気を立ち上らせてティーカップに紅茶が注がれていく。勧められるままアルヴアの傍の丸椅子に腰を落ち着けた葵はハーブの香りがする紅茶をゆつくりと口に運び、カップをソーサーに戻してから頭を振った。

「だる……」

「昨夜はそんなに激しかったのか？」

アルヴアの問いかけに答えようとした葵は彼の方に視線を傾けたのだが、その質問が持つ意味が理解出来ずに眉根を寄せる。

「激しかったって、何が？」

「ハル」ヒューイットとの甘い一夜に決まっているだろう？」

「はあ？」

大袈裟に呆れ顔をつくった葵はそこではたとアルヴアが言っていることの意味に思い至り、憤りながら席を立った。

「あれ、アルの仕業だったのね！！ 何であんなことするのよ！？」
「だらしなく開襟しているアルヴアの胸元を掴み上げた葵は勢いに任せて怒鳴り散らした。しかし葵に激しく揺さぶられても、アルヴアには動じた様子がない。

「ステラ」カーティスがいなくなる今、ミヤジマにとってはハル」ヒューイットをものにする千載一遇のチャンスだ。だから協力してあげただけ？」

「そんな協力いらさないよ！ おかげで床で寝る羽目になったし、夜は寒かったんだから！！」

「ハル」ヒューイットに暖めてもらえばよかったじゃないか。ついでに汗ばむくらい運動……」

アルヴアが下品なことを言いかけたので胸倉を掴んでいた手を離れた葵はそのまま彼を突き飛ばした。勢いがついたアルヴアは椅子ごと後ろに滑り出し、壁にぶつかった衝撃で椅子から転げ落ちる。

その姿を見ても怒りが治まらなかった葵は平然と起き上がってきたアルヴァを睨み付けた。

「信じらんない！ アル、サイテーだよ！！」

「そうは言うけどね、ミヤジマ。据え膳食わぬは男の恥なんだよ」

「何にもなかつたよ！ アルと一緒にしないで！」

「触れてさえもらえなかつたのか。可哀想に」

アルヴァから哀れみの目を向けられたことに絶句して、葵は指を差した格好のまま動きを止めた。引き連れてきた椅子に再び腰を下ろしたアルヴァは嘆息し、わざとらしくデスクに頬杖をつく。

「ミヤジマはもう少し女を磨くべきだよ。今のままじゃハル」ヒュ
ーイットはおろか、誰にも相手にされない」

アルヴァは至極真面目な話であるような顔で言っただけだが、葵にとつてそれは侮辱以外の何物でもなかつた。言い含められるような口調でけなされたことに腹が立つてきた葵はむっつりと閉口し、アルヴァに背を向ける。彼女はそのまま『アルヴァの部屋』を後にし、苛立ちに任せて荒々しく扉を閉ざした。しかしドアに八つ当たりをしたくらいで葵の怒りが和らぐことはない。むしろ大股で廊下を歩き出してからのの方が不満は募っていった。

（何でアルにあんなこと言われなきゃいけないのよ！）

あまりに腹立たしかったので反論もせずに出て来てしまったことが、今さらながらに悔やまれる。怒りを直接ぶつけておけば、少しは気が晴れたかもしれないのだ。しかしアルヴァが相手では文句を言ったところで効果はないだろうと思ひ直し、葵は深々とため息をついた。

「アオイ」

不意に耳慣れた声が聞こえてきたので、葵は表情を改めてから背後を振り返った。そこにはトリニスタン魔法学園の制服である白いローブを纏ったステラの姿があり、葵は体ごと振り向くと同時に彼女の元へ歩き出す。話をするのにちょうどいい距離でお互いに立ち止まると、ステラの方から再び口火を切った。

「今、保健室へ行こうと思っていたところだったの。会えてよかったわ」

ステラの科白が何となく引っかかりを覚えるものだったので葵は小首を傾げた。

「何で保健室？」

「え？ だって、アオイはよく保健室にいるみたいだから」

校内で人を探そうと思う時、この学園の生徒は魔力を利用する。だが魔力を利用すると言っても魔法を使うというのではなく、十人十色の魔力を感知して識別することで目的となる人物を洗い出すのだ。葵にはもともとの魔力というものはないが魔法道具である指輪マジックアイテムリングを身につけているため、この世界に暮らす一般的な者と同じように魔力を放出しているよう見せかけている。しかし現在ではアルヴァの魔法により、葵の魔力は極めて識別しづらいものとなっていた。魔力を頼りに探すということが出来ないので葵を探す時は彼女が入り浸っている『保健室』から訪れてみるのだと、ステラは言う。それを聞いた葵は確かにしょっちゅうアルヴァの元を訪れているなどと苦笑した。

「どうしたの、アオイ？」

「何でもない。それより、ステラこそどうしたの？ 私を探してたみたいだったけど」

「アオイに伝えておきたいことがあったの」

そこで一度、ステラは言葉を切った。口調に微妙な変化を感じた葵は不思議に思いながらステラの横顔を窺う。するとステラも葵を見ており、物悲しい輝きを宿しているヘーゼルの瞳と出会った。

「出立の日が早まったの。二十三日には、ここを立つわ」

「……そっか」

「見送りに、来てくれる？」

「もちろん」

「ありがとう。私、アオイに会えて良かった」

ステラは心の底からそう思っているようで、混じり気のない笑み

を向けてきた。その笑顔があまりにも眩しくて、胸が詰まった葵は思わず顔を背ける。生まれ育った世界の初春がそうであるように、別れの物悲しさと旅立つ者が身に纏う淡い明るさに、葵は泣きそうになってしまった。

（私も、ステラに会えて良かったよ）

ステラと過ごしたのは短い時間だったが、葵も心の底からそう思った。だが別れを言うにはまだ早いので、その科白は胸中に留めておく。笑って送り出してあげようと思い、葵は笑みをつくってからステラを振り向いた。

「家の方は大丈夫？ お父さんとお母さん、説得できた？」

「それがね、意外なほどあっさりと認めてくれたの。本校に入学することは榮譽あることだから、きつとカーティスの名前に箔が付くと思っっているのね」

「へえ……なんだか大変だね」

「私の本当の気持ちを言ったら、たぶん怒られちゃうわね。だから今はまだ、ナイショ」

本校を卒業したら両親と闘うのだと、ステラは言う。彼女の科白には不穏な響きがあったものの、ステラの表情は明るい。他愛のない会話を楽しみながらもどこかでハルのことが気にかかっていたが結局は訊けないまま、葵はステラと過ごす残り少ない時間を満喫した。

さよなら（7）

岩黄いわわぎの月の二十三日、薄雲すらかかっている澄んだ夜空には金色の二月が浮かんでいた。丘の上に建つトリニスタン魔法学園アステルダム分校は煌々と輝く月に染め上げられて美しく色彩を変えている。夜の学園は人気がなく、校舎はひっそりと静まり返っていたが、敷地内の北端にある裏門には金色の月光に照らされている四つの人影があった。

月下に佇んでいる四人の元へ、やがて敷地の外から駆け込んで来た一つの影が加わった。長い丘陵を走って登ってきたために、校門に手を突いて息を切らせているのは葵である。その姿を認めて第一声を上げたのは、オリヴァーだった。

「来た来た。遅いって、アオイ」

「う、ごめん……」

何とか呼吸を整えてからオリヴァーに返事をした葵は顔を上げると、改めて周囲を見回した。オリヴァーの他にこの場にいるのは、彼と同じくマジスターであるウィル、キリル、そしてステラである。学園の制服である白いローブを纏っているのはステラだけであり、その他の者は私服姿だった。いつも通りの光景に物足りなさを感じた葵はハツとして、もう一度周囲を見回す。

「ハルは？」

「それが、来てないんだよ」

葵は参加しなかったのだが昼間、学園主催でステラの送別会が行われた。しかしその席にも、ハルは姿を現さなかったのだという。オリヴァーからそうした話を聞いた葵は少しだけ顔を歪めた。

「何でこいつがここにいるんだよ」

唐突に不機嫌そうな声を発したのはキリルだった。反射的に顔を傾けた葵はキリルの強すぎる視線に出会い、逃げるようにオリヴァーの影へ移動する。その動作が気に障ったようでキリルはムツとし

た顔をしたが、彼が何かを言い出す前にウィルが口を挟んだ。

「キルもハルも、いつまでも子供みたいなこと言っていないでくれる？」

「なんだと、ウィル!!」

「本当のことを指摘されて怒るのはキルが子供だからだよ」

「もういつペン言ってみる!!」

「あーあ。こんな時にやめろよ、二人とも」

キリルとウィルが言い合いを始めてしまったので、オリヴァーが仕方なさそうに介入していく。葵はぽかんとしたまま事の成り行きを見守っていたが、やがてステラが吹き出したことにより騒ぎは簡単におさまった。

「相変わらずね。皆の笑い合う姿が見られなくなるかと思うと、やっぱり少し寂しいわ」

ステラが放った一言により、その場には別れを惜しむ空気が漂った。つい先程まで目くじらを立てていたキリルも、寂しそうな表情をステラに向ける。

「やっぱり、行くのか？」

「うん。元気でね、キル」

ステラからキリルの頬に軽く口づけた後、彼らは別れの抱擁を交わした。ステラはその後、オリヴァーやウィルとも同様に別れを交わす。最後にステラから目を向けられた葵は、ぐっと唇を噛んだ。

「体は大丈夫？」

一気に気候が変わったせいなのか体調を崩した葵は、つい先日まで寝込んでいた。そのせいで昼間の送別会にも参加出来なかったのだ。最後の最後にステラに気を遣わせてしまったことに、葵は乾いた笑みを浮かべた。

「もう平気。ごめんね、送別会に行けなくて」

「ううん。こうして見送りに来てくれたんだもの。十分だよ」

ステラはそう言った後、葵の頬にも親愛を示すキスを落とす。

軽く腕を回してきた彼女の存在をいつまでも覚えておきたいと、葵

の方からしつかりとステラの体を抱き返す。だが長引かせることはせず、彼女達はお互いにすぐ手を離れた。

葵から離れた後、ステラはすでに地に描かれている魔法陣の中心へと向かった。それは出立を意味していて、オリヴァーが焦ったように声を上げる。

「ハルを待たないのか？」

「……うん。元気でねって、ハルにも伝えておいて」

魔法陣の中心で振り返ったステラは笑みを浮かべていたが、その笑顔を見た葵は胸が張り裂けそうになった。

(ステラ……)

ハルはステラと一緒に来て欲しいと言ってくれるのを待っていたが、ステラもまたハルがそう言うてくれるのを待っていたのだ。彼女の悲しそうな笑みを見た時、葵はそう確信した。想いは同じはずなのに、彼らはすれ違ったまま別れていく。だが解ってしまったところで、それは葵にはどうにも出来ないことだった。

「行つてきます」

魔法陣の中心で魔法書を開いたステラはそう告げて、呪文の詠唱を開始した。地に描かれた魔法陣が彼女の呪文スベルに反応して、少しずつ眠りから目覚め出す。さほど長くもない呪文が終わると、ステラの姿は光と共に消え去った。

「行つちまったな」

「世界の理を知りたいなんてステラらしいよね」

ステラが去つてしばらくの後、しんみりした空気を拭うようにオリヴァーとウィルが会話を始めた。すでに発光も治まっている魔法陣をいつまでも眺めていた葵は小さく息をつき、目を逸らす。何となく視線を向けた先でまたしてもキリルと目が合ってしまったので、葵は慌てて口火を切った。

「じゃ、私帰るから」

「俺達も帰ろうぜ」

「ハル、けっきょく来なかったね」

葵の一言を皮切りにその場には解散の雰囲気は漂ったのだが、異変は唐突に訪れた。葵を除く三人が一斉に顔を傾けたので、何事かと思つた葵も魔法陣の方へ目を向ける。その一瞬後、先程ステラが使用した魔法陣の中心にハル「ヒューイット」が出現した。

「ステラ、もう行つちやつた？」

遅ればせながら登場したハルは、特に心を乱した様子もなく淡々と言葉を紡ぐ。しかし平静なハルとは対照的に、先程からこの場にいた者達は一様に言葉を失っていた。誰からも反応がなかったためか、ハルが微かに眉根を寄せる。

「何？」

「ハル、何で制服着てるの？」

「ああ……」

ウィルの言葉を受けて改めて自分の出で立ちを眺めているハルは、平素とは違つて白いローブを纏っている。彼は顔を上げた後、淡白に真意を明かした。

「俺、王都に行くよ」

マジスター達から驚きの声上がる中、葵は呆然とハルの決意を聞いていた。ハルが王都へ行くということが何を意味しているのかマジスター達も承知しているようで、オリヴァーやウィルが冷やかに混じりの発言をしている。しかしキリルだけは、むつつりと口をつぐんだままで経つてもハルの決断を受け入れようとしなかった。それを見たオリヴァーとウィルは示し合わせたように肩を竦め、ハルは顔を背けたままのキリルへ向かう。

「ごめん、キル」

「勝手にしろ！」

自分の思い通りにならなくて拗ねている子供のように、キリルはすげなく言つと体ごとそっぽを向いた。しかしそれで解決のようで、ハルは苦笑いを浮かべただけだった。仲睦まじいマジスターから疎外されて立ち尽くしていた葵は、ハルが近付いて来たので我に返つて身を引く。本音を言えばそのまま逃げ出したかったものの、葵は

何とかその場に踏みとどまった。

「ありがと」

短く告げて月下で微笑んだハルの姿は、初めて彼にときめきを覚えた時よりも際立っていた。胸の中で様々な感情が揺れた葵は拳を握りながら俯く。何か言わなければと思えば思うほど、言葉は形にならなかった。

（でも、笑って見送らなきゃ）

彼らの明るい未来を思えば決して、辛い別れではないはずなのだから。自分にそう言い聞かせた葵は無理矢理に笑みを作って顔を上げた。

「元気でね」

笑ったままそう言い切った時、葵は自分で自分を褒めてやりたくなった。しかし作り笑顔も虚しく、葵の顔を見たハルは眉根を寄せ

「もしかして具合悪い？」

「えっ？ 何で？」

「妙な顔してるから」

「妙な、って……。昨日まで風邪で寝込んでたから、きっとそのせいでよ」

「そうか」

何故か少し顔を歪めたハルは、唐突に腕を伸ばして葵の頬に触れた。ハルの行動は予期せぬものであり、葵は凍りつく。その直後、口唇に初めての感触が伝ったので葵は目を見開いた。

「!!!!!!?」

「風邪、もらってく。今度からちゃんとベッドで寝なよ」

あ然としている葵の耳元で囁いたハルは彼女の頭を軽く撫で、何事もなかったかのように魔法陣へと向かった。葵と同じく呆然としたまま口を開けないでいるマジスター達にも淡白に別れを告げ、ハルは呪文を唱え出す。夜空に光を放った魔法陣はハルの姿を消し去り、トリニスタン魔法学園アステルダム分校には再び夜の静寂が訪

れた。

ステラの時と同じようにしばらく無人の魔法陣を見つめていた葵は、頬に伝った暖かさで我に返った。知らずのうちに流れ出ていた涙が頬を濡らし、視界を歪めていく。加えて突然のキスの衝撃が理性というものを奪ってしまい、葵は声を上げて泣いた。

（何で、何で、あんなことするのよ）

それも、よりにもよって、最後の別れの前に。嬉しさと悔しさと悲しみが次々に涙を溢れさせて、葵は静かな夜に「ハルのバカ」という声を響かせながら帰路を疾走したのだった。

さよなら(8)

「……アオイ、泣き叫びながら走り去って行ったな」

「ほんと、アオイって変わってるよね。あのハルに変な女って言わせるだけのことはあるよ」

葵が走り去って行った方角に顔を据えたまま淡々と会話をしていたオリヴァーとウィルは、同じタイミングで吹き出した。エコーのように響いていた葵の声もすでに聞こえなくなっていたので、夜の学園には彼らの笑い声だけが響き渡る。ひとしきり笑った後、オリヴァーとウィルは笑みを残したまま話を続けた。

「しかし、ハルまで王都に行っちゃうとはなあ。これから寂しくなるな」

「ステラが王都へ行くシヨックで姿を見せないんだと思ってたけど、まさか本校に編入する準備をしたなんてね。恐れ入ったよ」

「それだけステラのこと好きだった、ってことだろ」

「まあ、ハルは一途だからね」

そこで会話を終わらせて、ウィルとオリヴァーは未だ無言のままにいるキリルを振り返った。

「キル、まだ怒ってるの？」

ウィルが話しかけてみてもキリルは反応を返さなかった。しかし月光に映し出されている彼の表情は怒っている時のものではなく、何事かを考えている時の真顔である。キリルが真顔でいることを不思議に思ったウィルは小首を傾げながら言葉を続けた。

「キル？ 何考えてるの？」

「ハルは何で、あんな女にキスなんかしたんだ？」

キリルの口をついて出た言葉は意外なものであり、ウィルとオリヴァーは顔を見合わせた。キリルが葵の去った後を見据えたまま動こうとしなかったため、オリヴァーが首を捻りながら憶測を述べる。「餞別じゃないのか？ アオイ、ハルのこと好きだったみたいだか

らな」

「そうなのか？」

キリルが眉根を寄せながら振り向いたので、オリヴァーは同意を求めてウィルへ視線を流す。オリヴァーの視線を受け止めたウィルは呆れ顔になって頷いた。

「気付いてなかったのはキルくらいだよ。ステラもハルも、たぶん知ってたんじゃない？」

「オレだけ仲間はずれにしゃがって」

「キルが勝手に仲間はずれになったんじゃない。疎外されるのが嫌なら、もうちよつと他人に興味持ちなよ」

「興味ねえよ。他人のことなんてどうでもいい」

「とか言いながら、今アオイのこと気にしてるじゃない」

「あ？ 気にしてねーよ」

「あ、怒った。怒るのは凶星だからだよ、キル」

ニヤリと笑ったウィルは魔法陣の方へ向かって歩き出し、キリルが怒りを噴出する前に早々と姿を消した。今にも憤怒を爆発させそうなキリルと二人きりで取り残されたオリヴァーは、恐る恐るキリルの顔色を窺う。

「俺達も帰ろうぜ。いつまでもここいても仕方ないし」

そう誘ってみたものの、キリルはその場を動こうとしなかった。

こうなってしまうとは触らぬ神に祟りなしと、オリヴァーは一人で歩き出す。だがキリルに呼び止められ、彼は再び足を止めることになった。

「ハルはあの女のこと、好きだったのか？」

キリルの口から飛び出したのはまたしても葵のことであり、意外に思ったオリヴァーは目を見開いた。しかし迂闊な私見を口にしようものなら秘めたる怒りを刺激してしまうかと思ひ、オリヴァーは答えだけを口にする。

「好きか嫌いかで言うなら、わりと好きだったんじゃないの？ いくら餞別とはいえ嫌いな相手にキスしないだろ」

「ステラもあの女こと、好きだったよな？」

「ああ……ステラはすごく好きだったっばいよな」

「お前は？」

「は？ 俺？」

予想外の問いかけにオリヴァーはぽかんと口を開けた。オリヴァーが即答出来なかったことに苛立ったのか、キリルは鋭いまなざしを向けてくる。睨まれることには慣れていても真意が見えないことには不慣れであり、オリヴァーは困惑してしまった。

「どうしたんだよ、キル」

「いいから答えるよ。お前はあの女こと、どう思ってたんだよ？」

「いや、アオイのことは好きだけどさ。あんな風が変わった女、他に見たことないし」

「ウィルは？」

「ウィルもわりと気に入ってるんじゃないか？ あいつも嫌いなヤツとは口きかないし」

「そうか」

そこでようやくキリルが口をつぐんだので、得体の知れない重圧にさらされていたオリヴァーはホツと胸を撫で下ろした。それから改めて、オリヴァーは眉をひそめる。

キリルが関心を持つのは仲間内だけのことであり、彼は他人のことにはまったく興味を示さない性質なのだ。それがこうも質問を重ねてくるとは、どういった心境の変化なのだろう。しかしそれを問えばキリルが機嫌を悪くすることは解りきっていたので、嫌な不可解さは胸に残るものの、オリヴァーは追及を諦めることにした。

「俺達も帰ろうぜ、キル」

オリヴァーの呼びかけに対して素直に頷いたキリルは、しかしまだ何事を考えている真顔のままだった。

メイドがやって来た(1)

薄雲一つない天空に、その夜はオレンジがかつた黄色い二月が浮かんでいた。季節は間もなく夏月期かげつの中頃にさしかかろうとしていて、そのために月の色合いが橙色を増しているのである。そんな岩黄わきの月の二十七日、外が夜だろつが昼だろつが無関係な窓のない部屋に、その青年は一人きりでいた。簡易なベッドが並ぶ保健室に酷似した部屋で壁に向かって据え置かれているデスクを前に腰を下ろしている金髪の青年は、名をアルヴァ「アロースミスという。

アルヴァが愛用しているデスクの上には所狭しと書類が広げられている。普段は着用していない眼鏡をかけているアルヴァは、その書類の隅々にまでくまなく目を通していた。しかしそこに書かれている内容は彼が好ましく思うものではなく、椅子の背もたれに体を預けたアルヴァは小休止のために引き出してから煙草を取り出す。ため息と共に煙を吐き出したアルヴァは眼鏡を外そうとして、ふと、その指を止めた。誰かが魔法を使った気配を感じ取ったアルヴァは椅子ごと体を回転させ、背後を振り返る。その直後、転移魔法に伴う光が室内に立ち上った。

一瞬の発光が収まった後、それまでアルヴァしかいなかった室内には端整な顔立ちをした青年が姿を現していた。明るいブラウンの髪に鮮やかなミッドナイトブルーの瞳を持つ彼は夜の時分らしく燕尾服を纏っていて、それを華麗に着こなしている。深夜の来訪者は知己であったものの、久しぶりに見る顔にアルヴァは微かに眉根を寄せた。

「そうしているとレイチエルに生き写しだな」

唐突な来訪を訝るアルヴァとは裏腹に、青年は彼の顔を見るなり楽しげな笑みを口元に上らせた。指摘されて初めて眼鏡をかけたままにしていることに気がついたアルヴァはデスクの上にある灰皿で煙草を揉み消した後、さりげなく眼鏡を引き抜く。眼鏡を裸のままデスク

クの上に置いてから、アルヴァは改めて来訪者に視線を移した。

「ご多忙のはずの貴方が、一体何の用があつてお戻りになつたのです。理事長？」

夜の正装である燕尾服に身を包んでいる青年は名をロバート・エーメリーという。彼はアステルダム公国を治めるエーメリー公爵の子息であり、トリニスタン魔法学園アステルダム分校の若き理事長でもある。しかし理事長とは名ばかりで、ロバートはある理由から学園を不在にしていることがほとんどだった。学園の運営を一任された身でありながら下手をすると一年中留守にしなければなしの彼は、しかしアルヴァの皮肉にも余裕の笑みを浮かべてみせる。

「なに、興味深い話を耳にしたものでな。居ても立つてもいられず夜会を抜け出してきたというわけだ」

「夜会を抜け出してきた？ あなたが？」

夜会こそ最高の狩場だと言つて憚らないロバートがこの時分、据え膳を食わずにアルヴァの元を訪れたと言つのである。これは、只事ではない。そう直感したアルヴァは警戒を強めたのだが、ロバートはすぐさま彼が一番触れて欲しくないと思つていた話題に言及した。

「アロースミスの名を使つて我がアステルダム分校に生徒を一人、編入させたらしいな」

ミッドナイトブルーのロバートの瞳が、興味を湛えながら真っ直ぐにアルヴァを射抜く。取り繕う言葉すら返せないでいるアルヴァに向かつて、ロバートは爵位を持つ身らしい上質の笑みを浮かべて見せた。

「アル、その少女は何者だ」

アロースミスの名を使つて学園に編入させた者が少女であることまで知られてしまつている今、アルヴァにはもう隠し事をする必要性が感じられなくなつていた。椅子の背もたれに体重を預け、アルヴァは仕方なく髪を掻きあげる。

「知りたければデスクの上の書類を勝手に読んでくれ」

アルヴアが投げやりな態度に出ても、ロバートの楽しそうな表情は変わることがなかった。ロバートは彼のような者が使用するにはスプリングの硬すぎる簡易なベッドに腰を落ち着け、アルヴアの方を指差して呪文を唱え出す。『アン・ヴォレ、ドウ・リュイ・コンテニユ』という呪文がロバートの口から零れ落ちてすぐ、アルヴアの背後にあつた書類から盗まれた文字がふわりと宙を舞った。紙面を離れ、空中を漂った文字はロバートの目前で整列し、ある文章を形作る。

「これは……っ！」

しばらく文面に集中していたロバートが、不意に声を震わせた。驚愕混じりに歓喜の表情を浮かべているロバートを見て、アルヴアは小さくため息をつく。

「盗んだものはちゃんと元通りにしておいてくださいよ」

「悠長なことを言っている場合か。これは一大事だぞ」

「解ってるよ。だから君にも報せなかったんじゃないか」

「問題はそこだ！」

声を荒らげたロバートに人差し指を突きつけられたので、アルヴアはとりあえず閉口した。真っ直ぐにアルヴアを見つめているロバートは、腹の虫がおさまらないといった表情で発言を続ける。

「これほど重要かつ、非常に興味をそそられる大問題に首を突っ込んでおきながら、それを何故私に報せてくれなかったのだ」

「……好きで首を突っ込んだわけじゃないんだけどね」

だから報せたくなかったのだと、アルヴアは胸中で小さくぼやいた。すっかり好奇心に駆られているロバートは年甲斐もなく瞳を輝かせていて、まるで少年のような顔つきになっている。悪いクセが顔を覗かせ始めたと思ったアルヴアは嘆息したが、こうなつてはもう誰にもロバートを止めることは出来ない。そのことを知っているアルヴアが沈黙していると、ロバートは興味津々といった様子で問いを重ねてきた。

「それで、その不幸な少女はどのよう^{マルシャンス・フイーユ}な人物なのだ？」

「てんで子供だよ。あまりにも青すぎて、まだまだ収穫には向かないね」

「収穫前でなければ味がない。熟れすぎた果実は胸焼けをおこすからな」

「いいかげん大人になりなよ、ロバート」

「君こそ、だ。甘すぎる果汁ばかり口にしていないで清冽な青さを知るべきだよ」

「意見が合わないね」

「ああ。昔から好みは合わなかったな」

だからこそ友人でいられるのだと、彼らが考えたかどうかは定かではない。しかし彼らはトリニスタン魔法学園に学生として通っていた頃からの付き合いであり、お互いに親しげな笑みを浮かべた。

「私が何を考えているのかなどお見通しなのだろうか？ 邪魔をするなよ、アル？」

「アステルダム分校は貴方の私財だ、お好きになさればいいのです。それに、貴方が企てようとしている計画は僕にとってもメリットがある」

「ほう。どんなメリットだ？」

「それは貴方には無関係なこと。その問いに答える代わりに一つ、貴方が最も喜ぶ情報をお教えしましょう」

そこで一度言葉を切り、アルヴァは真顔に戻った。ロバートも真面目な表情で話を聞こうとしているので、それを見たアルヴァは不敵な笑みを浮かべる。

「不幸な少女は処女バージンですよ、まず間違いなく」

アルヴァからとっておきの情報を得たロバートはこれ以上ないというくらい嬉しそうな顔をして、あからさまに拳を握り締めたのだ。

メイドがやって来た(2)

夏月期中盤の月である岩黄いわぎの月の最終日、休日であるその日もいっつもと変わらず穏やかに夏の夜が明けた。斜光は豪華な飾り窓から差し込んできているため、大理石でできた床には複雑な図形が浮かび上がっている。太陽が上るにつれて少しずつ形を変えていく図形はまるで影絵のようだが、ベッドに横たわっているその部屋の主は寝入っているため、朝焼けが見せる幻想的な光景に目を留める者はいなかった。薄手の上掛けを寝苦しそうに跳ね除け、キングサイズのベッドの上で苦悶の表情を浮かべながら眠っている少女の名は、宮島葵。眉間に深いシワを刻んでいた彼女は不意に悲鳴を上げ、それと同時にベッドの上で跳ね起きた。

(ゆ、夢……)

覚めてしまったことで、それまで見ていたリアルな光景が夢だったことを知った葵は脱力してベッドに逆戻りした。上質なベッドのスプリングがわずかに軋み、柔らかな手触りのシーツがむき出しの肌に触れる。絹のような滑らかさから左手を離れた葵は、それを自身の胸の上に乗せてみた。心臓がドクドクと脈打っていて、激しい鼓動はまだ治まっていない。

(……なんて夢、見てんのよ)

夢の内容に居た堪れなさが募った葵は枕を抱き、横向きに転がって体を丸めた。

遡ること七日前、葵は友人だったステラ⇨カーティスと、初恋の相手だったハル⇨ヒューイトとの別れを経験した。それは悲しい別れではなかったものの葵にとっては複雑な意味合いを持っていて、七日も経った今でもまだ、その時のことを夢に見てしまうのである。それが現実に起こった出来事だけを忠実に再現してくれるなら、まない。だが無意識の産物である夢は、時に自身では制御の出来ない、とんでもない脚色を加えてくれるのだ。

『アオイ……好きだ』

夢の中で聞いたハルの科白がリアルな感觸を伴って蘇り、人知れず真つ赤になつた葵は枕を抱く腕に力を込めた。夢から醒めたことで少し落ち着いてきていた鼓動が、再び激しさを増していく。しかしすぐに虚しさが募り、葵は重いため息を吐いて体を起こした。

(そんなこと、ありえない)

葵が知り合う以前から、ハルはステラを想っていた。そして彼はステラと一緒にいるために、この地を去つたのだ。そんなことは百も承知だったが、それでも葵が願望を含んだ夢を見てしまうのは、ハルの別れ際の行動に問題があつたからだった。

(何で、別れ際にキスなんかするのよ)

色々な意味で衝撃的だったハルからのキスも、彼にすれば饒別くらの軽い気持ちでしかなかつたのだろう。だが彼氏いない歴十七年の葵にとって、あれが間違いなくファースト・キスだったのだ。

(ハルのバカ……)

もう会うこともないだろう少年を思い浮かべ、ベッドの上で膝を抱いた葵は何度目か分からない眩きを胸中で繰り返した。しかし感傷に浸っていたのはわずかな時間で、異変に気がついた葵は物思いを失念して顔を上げる。廊下の方で物音がしたような気がした次の瞬間、葵の部屋への入口である豪華な二枚扉が中央から静かに開かれた。

「お嬢様、どうなさいました？」

そんな問いかけと共に姿を現したのは、葵には見覚えのない少女だった。葵と同年代だと思われる彼女は赤味の強いブラウンの髪をこざつぱりとまとめ、何故かメイド服を身につけている。だが葵の目を釘付けにしたのはメイド服姿のニューフェイスではなく、彼女の肩にずしりと体を預けたまま微動だにしないワニのような生物だった。

「それ……何？」

葵が呆けたまま指差すと、メイド服姿の少女は自身の肩に目線を落とした。それから改めて葵を見据え、少女は問いに対する答えを口にする。

「わたくしのパートナーで、名をマトと申します」

少女の返答は簡略なパートナーの紹介であり、その生物の存在自体に疑問を抱いている葵の意図に副うものではなかった。葵はさらに問いを重ねようとしたのだが、マトと呼ばれた生物から少女に視線を移したことでふと我に返る。

「あの……あなた、誰ですか？」

本来ならば第一声として発さなければならなかった問いを、葵は今さらながらに少女に投げかけた。本日が初対面である少女はロング丈のスカートの裾を軽く持ち上げ、葵に向かって改まった一礼をして見せる。

「申し遅れました。わたくし、本日からこのお屋敷で働くこととなりました、クレア＝ブルームフィールドと申します。以後、お見知りおきください」

「あ、どうも。私は宮島葵です」

クレアにつられて頭を下げながら名乗った後、葵は眉根を寄せながら目を上げた。しかし葵が何を問うよりも早く、クレアが再び口火を切る。

「先程、お嬢様の寝室から悲鳴が聞こえたのですが。何かございましたでしょうか？」

「悲鳴？」

「ええ。賊が侵入したのではないかと馳せ参じたのですが……そのような痕跡は見られないようです」

賊というクレアの物言いが場違いに仰々しかったので、そのような事態に直面したことはない葵は思わず苦笑いを零してしまった。

しかしすぐ、あることに思い当たった葵は笑みを収めて真顔に戻る。
(そういえば……)

今朝はとんでもない夢をみて、何かを叫びながら目を覚ましたよ
うな気がしないでもない。実際にクレアが耳にしたと言っているの
で、おそらくは悲鳴を上げながら夢から醒めたのだらう。しかし夢
見が悪かったのだと話せば、夢の内容について何かを訊かれるかも
しれない。そう危惧した葵はさっさと話題を変えることにした。

「ところで、クレアさんは何しに来たんですか？」

魔法という便利なものが存在するこの世界では掃除や洗濯、料理
までもが人の手を必要としない。それは即ち、どれだけ大きな屋敷
に住んでいようと使用人が必要ないということなのだ。だが疑問を
ストリートに口にしてしまっただけから、葵はしまったと思った。

（きつい言い方、しちゃったかな）

不安に思った葵は恐る恐るクレアの顔色を窺ったのだが、彼女は
傷つく表情をしていどころか眉一つ動かしていなかった。あくま
でも淡泊に、クレアは返答を口にする。

「お嬢様、使用人に敬称は unnecessary です。わたくしのことはクレアと
お呼び下さい。そして先程の問いに対する答えですが、わたくしは
お嬢様のお世話をするために参りました」

その『お世話』の内容が分からないのだと、葵は胸中で小さく反
論を返す。その疑問を口に出せなかったのは、クレアという人物が
まとう独特の雰囲気の原因があった。初対面の挨拶を交わした時で
すらクレアはニコリともせず、鉄面皮のような彼女の無表情はまっ
たく動く気配を見せない。おそらく彼女は冷静沈着な人物なのだろ
うが、その態度はともすれば冷淡にも思えてしまうのだ。

「朝食は食堂で召し上がりますか？ それとも、お部屋の方へお運
びいたしましょうか？」

クレアが再び口を開いたので、彼女のことを「苦手だなあ」など
と思っていた葵は表情を改めてから答えを口にした。

「あ、後で食堂の方に行きます」

「お嬢様、わたしに敬語を使う必要はございません。平素の通り
にお話してください」

「……分かった」

クレアの言う通りに言葉遣いを直してみたものの、庶民である葵にとっては主人と使用人という関係自体がひどく違和感を覚えるものだった。言い知れぬ窮屈さを感じてしまった葵はさりげなく視線を逸らし、クレアに気付かれないよう小さく嘆息する。

「では、お召し替えをいたしましょう」

そう言い置いて、クレアはベッドに腰かけている葵の傍へ歩み寄って来た。彼女自身よりもクレアの肩にいる生物に怯えた葵は無意識のうちに上半身を引く。葵の不自然な動作に目を留めたクレアは肩にいるマトに視線を移した。クレアの動作はアイコンタクトだったらしく、彼女の体を伝って床に下りたマトは短い手足を動かして扉の方へと去って行く。腹這いにのっそりと移動するマトをやはりワニのようだと思いつめながら見つめていた葵は、クレアの手が突然視界に入ってきたことに驚いて声を上げた。

「な、何？」

「お召し替えを」

「い、いいよ！ 自分でやるから！」

ネグリジエを剥ぎ取られそうになった葵は慌てて立ち上がり、ベッドの傍から離れてクレアと距離をとった。思いきり拒絶された形のクレアは傷ついた表情をするでもなく、キョトンとして葵を見ている。この世界の慣習に不慣れな葵にはクレアがそういった表情をしている理由も分からず、ただ『まずいことを言ったかもしれない』とだけ思った。

葵は二月が浮かぶこの世界の住人ではなく、異世界から召喚された者である。今現在、身近にいる人たちの中で唯一事情を知っているアルヴァ・アロースミスという名の青年に、葵は自分が異世界から召喚された者であることを誰にも言うなときつく口止めされていた。だからこそ分からないながらも周囲に溶け込もうと努力しているのだが、こうしてふとした瞬間にボロが出てしまうのである。しかしそれは、ある程度は仕方のないことだった。生まれ育った場所

ではないため、葵にはこの世界に関する予備知識がほとんどないのだから。

(あ、だから一人暮らしじゃなきゃダメだったのかな?)

葵がこの屋敷で一人暮らしをするようになったのは、全ての元凶であるユアン＝S＝フロックハートという名の少年と、彼の家庭教師であるレイチエル＝アロースミスによって半ば強引にそう取り決められたからである。一人暮らしをしてもらうことになると言っていたユアンの言葉通り、この屋敷にはクレアが姿を見せるまで葵の他には使用人の一人もいなかった。二月が浮かぶこの世界には魔法という便利なものがあるため一人暮らしでも不便さはなかったのだが、どうも葵を一人きりで置いておいたのには別の理由が存在しそのうである。ユアンとレイチエルの思惑を今さらながらに理解した葵は納得すると同時にクレアに対する不審を募らせた。

(クレアって、誰に言われて来たんだろう)

彼女の口ぶりから察するに、クレアはもともとこの屋敷で働いていた者ではない。新しいメイドが勝手にやって来るとは考えにくいので、彼女がここへ来たのには第三者の意思が働いているはずなのだ。それはユアンかレイチエルか、あるいは他の誰かなのか。本人に直接尋ねようと思った葵は口を開きかけたのだが、あることに思い至って声を出さないうちに閉口した。葵がアルヴァに言い含められていることは自分が異世界から来た者だと口外しないということだけではない。アルヴァ自身や、彼の姉であるレイチエルのことも、誰にも言うなというのである。

(……アルに聞いた方がいいか)

クレアがどこまで事情を知っているのか分からない以上、迂闊なことは口に出来ない。そう結論を出した葵は何か言葉をかけられるのを待っているらしいクレアを見やり、口火を切った。

「後で行くから、先に行つてて」

「かしこまりました」

腰を低くして一礼した後、クレアは大理石の床にへばりついてい

るマトを回収してから部屋を後にした。クレアの姿が視界から消えてからも足音に耳を澄ましていた葵は、その音が聞こえなくなつたのを機に大きく息を吐く。どうして家の中でまで気を張らなければならぬのかと嘆きながら、葵はのろのろと着替えを始めた。

メイドがやって来た(3)

寝室として使用している二階の一室を後にした葵は、その足で一階の片隅にある食堂へと向かった。すでに夜は明けていて、廊下の飾り窓からは暖かな陽光が差し込んできている。朝の冷涼な空気のために今はまだ爽やかな趣を呈しているが、この光は太陽の位置が高くなるにつれて殺人的に強さを増していくのだ。今日も暑くなりそうだと直感した葵はため息をつきながら窓から目を離れた。

(そろそろ、学校に行かなくちゃかな)

ステラやハルと別れを交わした日以来、葵はトリニスタン魔法学園に登校していなかった。今のところアルヴァからのお咎めはないのだが、さすがにそろそろ姿を現しそうなものである。なによりも葵自身、いいかげんシヨック状態から立ち直りたいと考えていた。

生まれ育った異世界で常用していた高等学校の制服に着替えた葵はスカートのポケットに手を突っ込み、そこから携帯電話を取り出した。二つ折りタイプの携帯電話を開き、暗い画面を見据えながら電源ボタンを長押しする。通話やメールは不可能でも収容されているデータを見ることは出来るので、葵はディスプレイに映し出された待ち受け画面に見入った。電源を入れると同時にディスプレイに姿を現したのは眉目秀麗な黒髪の少年。彼は葵がもつとも愛する芸能人であり、名を加藤大輝という。

(よし、頑張ろう)

大好きな人との対面も束の間、携帯電話の電源をオフにした葵は、それを再びポケットにしまった。充電器は持っているものの、この世界にはコンセントがないため、一度充電が切れてしまえばそれで終わりなのである。なるべく長く使用するために、葵は常に携帯電話の電源を落とすことにしているのだった。

歩きながら携帯電話をいじっていた葵は、いつの間にか目的地に到着していた。貸し与えられただけの無駄に広い屋敷も、二ヶ月以

上住んでいれば我が家同然となるようだ。すっかりこの世界での生活に馴染んでしまっている自分に若干の悲しさを感じながら、葵は食堂の扉を開けた。

「お待ちしておりました、お嬢様。こちらへどうぞ」

室内の中央に置かれた縦に長いテーブルにはすでに数々の料理が並んでいて、葵はあまりの豪華さに目を疑った。バスケットいっぱいのパンやら深皿に盛られたフルーツやは、とても一人分の朝食とは思えない量である。

「こんなに食べられないよ」

葵が呆れながら料理から目を上げると、クレアは問題ないと言うように無表情を保ったままでいた。

「好きなようにお食べくだされば良いのです。お嬢様がお残しになったとしても、決して無駄にはいたしません」

クレアの言葉に反応したように、彼女の肩に居座っているマトが葵の方へと口先を向けた。マトの動きにビクツとした葵は深く突っ込まないでおこうと思ひ、クレアが示している席へ着く。葵が座り心地を調節している間に彼女の傍を離れたクレアは、魔法ではなく自身の手で紅茶を淹れ始めた。

「魔法、使わないんだ？」

葵が驚いた声を上げると、クレアは人の手で出来ることはなるべく人間がやった方がいいのだという答えを寄せた。意味を捉え損なった葵が首を傾げるとクレアはまず食事をするように勧め、それから説明を開始する。

「無属性魔法は物に魔法文字を刻み、使用者が呪文スベルを唱えることで魔法を発動させます。しかしこれでは予め定められた行動以外は起こすことが出来ません」

例えば紅茶の場合、魔法文字を刻まれた茶器は『アン・テ』という呪文に反応する。紅茶を淹れなさいという命令で動く茶器は実は茶葉の量から湯の温度まで定められていて、いつ淹れても同じ味にしかならない。同じ味が続くと人間の舌は飽きを感じてしまうため、

常に美味しいと感じる紅茶を淹れるためには湯の温度や茶葉の量を気候や体調に合わせて微妙に変える必要があるのだ。そういった細かな調節が出来ないことが無属性魔法の限界なのだと、クレアは淡々と語った。

「あゝ、なるほどねえ」

思い当たる節のあった葵はクレアの解説にしみじみと頷いてしまった。

一人暮らしを始めるにあたって、葵はアルヴァから料理の呪文を教わった。しかしレパートリーが少ないうえ、同じ味が延々と続くので、いつしか食事に楽しみを見出せなくなっていたのである。サニーサイドアップを口に運んだ葵は、これはクレアの手作りなのだろうと改めて思った。

「食事って、こんなに美味しいものだったんだ」

「メイドを初めて雇われた方は皆、お嬢様と同じことを仰るそうです」

魔法が存在する世界においてどうして使用人が必要なのかを理解した葵は口の中に広がる幸せを噛みしめながら感慨深く頷いた。

「ときに、お嬢様。本日はどのようなように過ごされるご予定ですか？」

「学校に行こうかと思ってるけど……何で？」

「本日は休日でございます」

「えっ？ 今日って何日だったけ？」

「岩黄の月の三十日です」

「と、いうことは……」

「明日から橙黄とうおうの月に入ります。盛夏になりますので、お体にはお気をつけください」

クレアはおそらく、葵の思考に合わせて言葉を選んだのだろう。

しかし言いよんだ葵が考えていたのは、クレアが話題に上らせた事柄とは微妙にズレたものだった。葵がまず初めに考えていたことは、彼女の通うトリニスタン魔法学園の休日のあり方である。この世界へ来る以前に葵が通っていた高等学校は完全週休二日制だった

のだが、トリニスタン魔法学園の休みは十日に一度。しかしこのところ学校を無断欠席していた葵は日にちの感覚が麻痺していて、その感覚を取り戻すために考えこんでいたのだった。次に、この世界の暦は月が入れ替わる三十日を一ヶ月としている。橙黄の月は葵が元いた世界での十月に相当するのだが、この世界には春と秋が存在しないため、夏月期かげつの中盤である橙黄の月が夏真っ盛りなのだった。「そっか……休み、なんだ」

学園へ行こうと思って制服に着替えたこともあって、葵は拍子抜けしてしまった。トリニスタン魔法学園へ行かないのであれば、本日の予定は皆無である。どうしようかと思つた葵はそのことをクレアに話し、何か暇を潰せる妙案はないかと尋ねてみた。

「ご予定がないのでしたら、パンテノン市街へ行かれるのがよろしいかと。月の終わりには市が開催されますので」

「へえ。何が売ってるの？」

「魔法道具マジックアイテムから食料品まで、何でもございます」

「そっなんだ？ 行ってみようかな」

どうせ家にいても、することは何もない。何もしないでいると余計なことばかり考えてしまうので、こういう時は気晴らしに外出した方がいいのかもしれない。そう思つた葵はチラリと、窓の外を窺つた。転移魔法を使えない葵がトリニスタン魔法学園よりも遠い市街へ行くには、大変長い距離を徒歩で往復しなければならぬ。そのため天候が気になったのだが、どうやら今日も真夏日和なようだ。「市へ行かれるのでしたらお送りいたします。お帰りの際はこちらのベルを鳴らして下さい」

葵が何を気にしているのかを的確に読み取つたクレアは、スカートのポケットから取り出した小さな呼び鈴ベルを食卓に置いた。手元に置かれた銀細工のベルから視線を上げた葵はクレアの無表情と出会うまで微かに眉根を寄せる。

(どこまで知ってるんだろっ……)

葵が尋ねないからなのか、クレアは自らの素性について詳しく語

らないままでいる。しかしこちらから尋ねることも出来なかったの
で、不安を抱いた葵はやはり外出しようと思った。

「お食事は、もうよろしいのですか？」

食後の紅茶に手を伸ばした葵を見てクレアが問いかけてきた。葵
が頷くと、クレアの肩に腹這いになっていたマトがゆっくりと移動
を開始する。マトが床に下りてから改めて、クレアは葵の元へ歩み
寄って来た。

「では、お召し替えを」

「えっ？」

すでに着替えを済ませている葵はキョトンとしながらクレアを仰
ぐ。しかしクレアは無言を言わせぬ態度で葵の腕をとり、半ば強引
に食堂を後にしたのだった。

メイドがやって来た(4)

岩黄いわわうの月の三十日は休息日であると同時に月末の市が開かれる日であり、中世ヨーロッパ風の佇まいが印象的なパンテノン市街は人でごったがえしていた。この街には大通りが七つほどあるのだが、この日はそれら全てが露店商の仕事場となる。売りに出されているものは多種多様で、掘り出し物を探す者にとっては宝の山のような場所なのだが、あまりの人出に酔ってしまった葵は早々と雑踏を抜け出していた。フォーニアベニューカフェで腰を落ち着けた葵はこの店自慢のハーブティーをアイスで注文し、フリルがあしらわれた胸元を軽くはためかせながらストローに口をつけている。足元に柄の短い日傘を置いてくつろいでいる彼女はメイドに無理矢理着替えさせられたため、淡い水色のドレス姿だった。

(お腹、苦しい)

ドレスはウエストを絞ったデザインのため、ただ着ているだけで圧迫感がある。普段はラフな服装ばかり好んでしている葵にとって、これは拷問に近いものがあつた。

(しかも暑いし)

下着が透けないようにデザインされているドレスは布地からして厚く、とても夏に着るような代物ではなかったが、それでも不思議と汗だくにはならない程度の快適さを保っていた。だがそれは極力動かないようにしている場合の話であり、ドレスで人混みを歩き回ればやはり暑さを感じる。葵は普段、丈の短いスカートに薄手のワイシャツといった出で立ちで動き回っているため、そもそも動きにくいドレス自体を不便に感じてしまうのだ。加えて日除けにと渡された傘が、人混みではジャマで仕方なかった。

(これならまだローブの方がマシだよ)

トリニスタン魔法学園の制服である白いローブも露出が少ないので暑いことは暑いのだが、動きやすい分、あちらの方がまだ機能的

だ。愚痴を言い合う相手もいないので胸中で一人ぼやいていた葵はストローを口から離し、大きくため息をついた。

(……なんか、つまんない)

人混みの中に紛れていても、屋敷に一人でいても、考えることは同じだった。このフォーニアアベニューカフェには友人との楽しい思い出があるだけに、余計に孤独を感じてしまうのかもしれない。

ステラに出会うまで、葵はあまり孤独を実感したことがなかった。感傷に浸っている暇がなかったと言ってしまうえばそれまでだが、それでも、今ほど一人がつまらなく感じることはなかったように思う。孤独が辛くなってしまったのは一時でも楽しい時間を過ごしてしまっただけからだ。

(ステラ……弥也……)

ステラは二月が浮かぶこの世界でできた初めての友人であり、弥也は葵が元いた世界で親しくしていた友人である。この場に彼女達のどちらかがいてくれればいいのにと考えてしまった葵は感傷を振り切るために小さく頭を振った。いつまでも沈んでいては彼女達と過ごしたかけがえのない日々さえ色褪せてしまうような、そんな気がしたからだ。

(アルの所にもで行こうかな……)

そんなことを考えてみたものの、葵はすぐに自分の発案を実現不可能だと察した。この格好でアルヴァと会う気にはなれないため、そうなるや一度、屋敷へ戻らなければならない。わざわざ着替えをしてから休日の学園へ出掛けるとなれば当然、クレアが怪しむだろう。百歩譲ってドレス姿のまま会いに行こうにも、この格好で長距離を歩くのは考えるまでもなく無理だ。

(……もうちょっと見物してから帰ろうかな)

最終的にそういつた結論に達した葵はカードで支払いを済ませ、重い足取りでカフェを後にした。だが高級感漂うカフェを一步でも出ると途端に快適さは失われ、すぐにフォーニアアベニューの雑踏に呑み込まれることになる。人々の熱気が堪らず、葵は小道へと避難

することにした。

中世ヨーロッパ風の建造物が立ち並ぶパンテノンの街は思いのほか入り組んでいて、大通りから外れる際は気をつけていないと迷子になりやすい。しかしそんなことに気を回す余裕もなく、葵はひたすら人気のない場所を求めて歩を進めてしまった。おかしいと思つて足を止めた時には、もう遅い。すっかり道に迷つてしまった葵は途方に暮れながら辺りを見回した。望み通り人気のない場所へと辿り着いたものの、あまり日当たりが良くない裏通りには人っ子一人見当たらない。下手に動けば深みにはまりそうだと思つた葵は、しばしその場で考えを巡らせることにした。

葵の頭にまず浮かんだのはカーナビゲーションにも匹敵する最強の道しるべ、地図だった。しかし小声で呪文を唱えてみたものの、右手の中指に嵌めているカルサイトの指輪は反応を示さない。腕を持ち上げて指輪を覗き込んだ葵はあることに気がついて、さらに途方に暮れた。

この世界の生まれではない葵が魔法を使うには誰かの魔力を借りる必要がある。常時指に嵌めているカルサイトの指輪にはアルヴアの魔力がこめられているのだが、この指輪は常に魔力を消費している代物で、定期的な補充を受けなければならぬのだ。三日に一度という魔力の補充を、葵はすでに一週間ほど怠っている。魔法が使えないということはつまり、指輪に蓄えられていた魔力が空になつてしまったという表れだった。

(……どうしよう)

困ってしまった葵はとりあえず魔法に頼ることを諦め、次なる手段を考えてみることにした。その結果、葵は手にしていた日傘を地面と垂直に立ててみる。柄に置いた手を離すと、日傘はバランスを崩して地面に倒れこんだ。

(よし、あっちに行こう)

一か八かのカケに出た葵は日傘を拾い上げ、再び歩き出す。すると角を曲がってすぐ、何かが足元を通過していったので驚いて後ず

さってしまった。

(あつ……！)

見覚えのある低空飛行の光を目撃した葵は、急いでその後を追った。蛇のようにクネクネと角を曲がっていく光を夢中で追いかけているうちに見覚えのある場所に辿り着いた葵は、そこでホツと息を吐く。持ち主のいない靴が石畳でダンスを披露していたり、又イグルミや人形が店番をしているその通りは、以前ハルと一緒に訪れたことのある『フィフスストリート』だった。

(よかつたあ。ここからなら帰り道が分かるよ)

見知った場所に出たことで気が緩んだ葵は、少しフィフスストリートを見て回つてから帰ることにした。ストリートには大通りのような華やかさはないものの、独特の賑わいがある。葵は洗練されたアベニューよりも魔法が息衝いていると感じられるストリートの方が好きだった。

(そういえばここ、ハルと一緒に歩いたんだっけ……)

まだステラやハルが学園にいた頃、葵は彼女達と共にパンテノン市街へ出向いたことがある。そのとき、ウィルやステラが個人行動に出てしまったため、取り残された葵とハルはなりゆきで二人きりになったのだ。あの頃は、楽しかった。そんなことを考えてしまった葵はまた思い出に浸りきっていることに気付き、小さく頭を振った。「うちの店に何かご用ですか？」

不意に声をかけられたので、驚いた葵は慌てて背後を振り返る。

そこにはストリートでよく見かける定型的な服装をした少年が佇んでいた。ここでいう定型的な服装というのは地味な色合いをしたズボンとジャケット、ベストにベレー帽といった出で立ちのことである。特に法律などで定められているわけではないのだが金銭的に余裕のない庶民は同じ服を着古すため、こういった格好をしていることが庶民であることの表れとなっているのだ。ちなみにトリニスタン魔法学園内でも私服でうろついているマジスター達はそれぞれに色彩の鮮やかな、奇抜なデザインの洋服を着こなしている。それと

比べてしまえば、葵の前にいる少年はいかにも貧相な形をしていた。紙袋を抱えたまま足を止めている少年が真つ直ぐにこちらを見ているので、葵は再び背後を振り返ってみた。そうして改めて状況を確認してみれば、葵が突つ立っている場所はある家の扉の目の前である。さらには扉の上方に何やら文字が書かれた看板のようなものが掲げられていたので、葵はようやく少年の質問を理解した。

「あゝ、ごめん。何でもないの」

少年の見た目が同年代くらいだったため、葵はクラスメイトにでも話しかけるような気軽さで応えた。葵が口を開いた途端に眉根を寄せた少年は何か言いたそうな素振りを見せながら佇んでいる。少年が何故そんな表情をするのか分からなかった葵は首を傾げた。

「何？」

「いえ……何でもありません」

「ふうん？　ねえ、ここって何を売ってるお店なの？」

看板らしきものが下がっているので店だということは分かるのだが、少年の店にはアベニューで見かけるようなショーウィンドウがない。店構えも普通の民家と変わらないものだったので、それが逆に葵の興味を引いたのだ。少年はハツとしたような表情をしてから無表情に戻り、それから問いの答えを口にした。

「よろしければ中をご覧になりますか？」

「うん。見たい見たい」

「では、こちらへどうぞ」

そう言うと、少年は葵を追い越して扉の方へと近付いた。だが彼は両手に荷物を抱えているため、非常に不安定な仕種で扉に手を伸ばす。それを見た葵は反射的に行動を起こし、少年の前に道を開けた。それは葵にとってはごく自然な行動だったのだが、手を貸された側の少年は驚いたように目を瞪る。

「ありがとうございます。貴族の方のお手を煩わせてしまって、申し訳ありません」

「キゾク？　……あゝ、そういうことね」

自分の服装を改めて見下ろした葵は、少年の不自然な態度に納得がいて一人で頷いた。おそらく葵が身につけているドレスを着るような女性は、この世界では『貴族』と呼ばれる存在なのだ。だが葵は貴族などではなく、根っからの庶民である。堅苦しいのも苦手な方だったので、葵は明るく少年に笑いかけた。

「年、いくつ？」

「十七歳ですが……それが、何か？」

「なんだ、タメじゃん。敬語なんかいらなからフツウに喋ってよため？」

「いいからいいから。さ、行こう？」

困惑しきっている少年の背中を押し、葵は彼に続いて店内へと進入する。木製の扉を静かに閉ざしてから改めて店内の様子を目の当たりにした葵は、思わず感嘆の息を吐いた。

メイドがやって来た(5)

扉を開けてまず目についたのは、室内のいたる所に飾られている工芸品だった。壁際に置かれた棚やテーブルの上には様々な形の工芸品が置かれていて、その全てが色とりどりのガラス細工なのだ。ガラスの冷やかな輝きに魅入られた葵は小声で「きれい」と呟きを零した。

「これ、全部あなたが作ったの？」

ひとしきり室内を堪能した後、葵は少年を振り返りながら尋ねた。部屋の片隅に置かれている、工芸品の飾られていない質素なテーブルに荷物を下した少年は葵の視線を受け止めて頷いて見せる。

「はい。この工房は僕と妹とで切り盛りしていますので」

同い年なのだから敬語など不要だと言っておいたにもかかわらず、少年の言葉遣いには改まるような気配がない。誰かと気楽に喋りたかった葵は少年の態度に物足りなさを感じ、渋面をつくった。

「フツウに喋っていいってば」

「そう仰られましても、貴族の方をお相手に不遜な言葉遣いは出来ません」

「……よく分からないけど、私がいいって言うてんだからいいんじゃないかな？」

不遜の意味が分からなかった葵は微かに眉根を寄せつつ持論を展開した。葵の強引な物言いに、少年も眉をひそめる。彼はしばらく黙っていたが、やがて根負けした様子で表情を崩した。

「変わったお嬢様だね。君みたいな貴族は見たことないよ」

苦笑のような表情を浮かべた少年からは先程までの頑なさが消えていて、その口調も葵が思い描く『フツウ』に副ったものに変わっていた。本物のお嬢様じゃないからねと胸中で呟いた葵は、少年に好意的な笑みを向ける。

「私、アオイ。あなたの名前は？」

「ザック」

「ザックってすごいね。こんなキレイなもの作れちゃうんだ？」

葵が再び工芸品に目をやりながら言うと、ザックは葵の反応こそが分からないというように首を傾げた。

「おかしな人だね、アオイって。アフタヌンドレスを着てるくらいだから名家のお嬢様なんだろう？」

貴族の屋敷に飾られるインテリアは大概、名匠と呼ばれる者達作品である。ザックにとっては、そういった鑑賞品を見慣れているはずのお嬢様が自分の作品を褒めること自体が意外で仕方なかったのだが、本当のお嬢様ではない葵にはそうした事情が分からない。そのため、見当違いも甚だしい返答をしてしまった。

「これ、アフタヌンドレスっていうんだ？」

「えっ、そんなことも知らずに着てたの？」

自ら好んで動き辛いドレスを着ているわけではない。葵はそう思ったのだが、また問題発言になってしまったので、本心は心の中だけに留めておいた。ザックはしばらく目を白黒させていたが、やがておかしそうに笑い出す。

「アオイって本当に変わってるね。貴族の中にもアオイみたいな人がいるなんて知らなかったよ」

変人だと連呼され、葵は複雑な気分になってしまった。これ以上服装や貴族の話はしたくないと思い、葵は早々に話題を変える。

「ところでこれ、どうやって作ってるの？」

葵が話題に上らせたのは室内に溢れているガラスの工芸品だった。葵の指先を辿ったザックはふと真顔に戻り、それから葵に視線を移す。

「興味あるの？」

「え？ うん。作っていると見たいなあ」

「いいよ。すごく熱いけど、それでも良ければ」

「ほんと？」

何気なく零した希望が簡単に受け入れられ、葵は興味津々に瞳を

輝かせた。ちよつと待つてと言い置いたザックは葵をその場に残し、一人で奥の部屋へと姿を消す。その彼が再び姿を現した時、奥の部屋へと続く扉は葵にも解放された。

葵が初めに通された工芸品が並ぶ部屋を抜けると、その奥は廊下になつていて、東西に道が続いていた。廊下に出るなり左手に折れたザックは、そのまま西へと歩を進めて行く。さして長くもない廊下を抜けると、その先は土がむき出しの広々とした空間になつていた。

「あれ、何？」

赤いレンガが積み重ねられている窯のような物に目を留めた葵は対象物を指差してザックに問いかけた。葵の指先を追ったザックは彼女が関心を注いでいるものに目を留め、すぐさま説明を加えてくれる。

「溶鉱炉だよ。あれでガラスを溶かして、熱いうちに形を整えるんだ」

炉ではすでに火が燃えていて、室内の空気はカラカラに乾いていた。ザックが前もって言うていたように作業場の中はひどく熱く、厚着をしている葵は胸元をはためかせようと無意識のうちに手を伸ばす。手で自分に風を送っている葵を見て、ザックはタオルを放った。

「だから言つただらう？ 熱いつて」

ありがたくタオルを受け取った葵は恨めしげな視線をザックに向けた。すでに着替えを済ませているザックは露出度の高い作業着を身に纏つていて、バンドナで髪まで上げてしまっている。涼しそうではないなあとザックを羨んだ葵は、わざわざドレスを選んで着替えをさせてくれたクレアを恨みたい気分になつた。

「どうする？ やめる？」

ザックが体調を気遣つてくれたことは理解したものの、興味の方が先立つた葵は大袈裟に首を振った。葵の態度が意固地なものだったのでザックは呆れたような顔をする。だが彼は見物人のために、

わざわざイスを用意してくれた。

「ハンカチでも敷いて使いなよ」

ザツクの用意してくれたイスは、頑丈そうではあるものの箱でしかなかった。ハンカチを持ってきた覚えはなかったので、葵はホコリっぽい箱にドレス姿のまま直に腰を下ろす。さらにザツクから借りたタオルを首にぶら下げたことで、彼をさらなる呆れ顔にさせてしまった。

「なんて格好してるんだ」

「いいから、早く作つてるとこ見せてよ」

ザツクの一言を軽く受け流し、葵は彼に作業を要求した。小さく肩を竦めることで了承を伝えたザツクは葵に背を向け、炎を抱いている溶鉱炉へと向かう。熱源から少し離れた場所で、葵はザツクの様子を見守った。

「ル・フレイム、ブリュール」

溶鉱炉を前にしたザツクが呪文を唱えると、炉の中で燃えていた炎は一息に勢いを増した。炉から溢れ出んばかりの炎がザツクの髪やむき出しの二の腕を掠めていくが、彼は微動だにしない。迫力のある光景を目の当たりにした葵は驚きに目を見開いた。

(すごい……)

煮えたぎった炎はまるで生き物のように溶鉱炉からあふれ出し、ザツクを取り囲むように踊り狂っている。軍手すら嵌めていないザツクは素手のまま炎と向き合い、何やら作業を始めている。しばらく炉に向かっていたザツクは、やがて葵を振り返った。

「始めるよ」

ぼかんとして眺めている葵に一声かけると、ザツクは空中に浮いている赤く熱された球体を素手で加工し始めた。かなりの高温を有しているであろう球体は、ザツクの指の動きによって少しずつその形を変えていく。まるで粘土でもいじっているかのように、彼はものの数分で水差しと思われるものを完成させた。

「リィイスイクル、グラン」

両手を作品から遠ざけると同時に、ザックは新たな呪文を唱えた。すると大地から迫り上がってきた氷柱が、空中に浮いている赤い水差しをあつという間に呑み込む。急速に冷やされた水差しは氷柱の中で少しずつ色合いを変えていき、やがてそれは美しいオーシヤンブルーとなった。それと同時に溶解した氷が弾け飛び、ザックの周囲で踊っている炎が氷柱の残骸を一瞬にして蒸発させる。完成された作品がザックの手の中に落ちると炎も溶鉱炉へと還っていき、夢のような一時は幕を下ろした。

「……いがんでる」

自分の作品を手にしたザックは様々な角度からそれを眺めていたのだが、やがて不満そうな表情で独白を零した。その呟きで我に返った葵は、大きく感嘆の息を吐く。

「はああああ。すごいね」

「まだまだだよ」

せっかく作った作品も気に入らないものだったらしく、ザックは無造作に水差しを放った。地面に叩きつけられた水差しは粉々に砕け、青い破片が辺りに散らばる。しかしそれらはすぐ、まるで長い間風雨に晒され続けたもののように、灰となって地面に還っていった。

「すごい汗だね」

水差しの行く末を見守っていた葵は、ザックの声に反応して顔を上げた。刹那、葵の顔から滴った汗が胸元に落ちて染みをつくる。

首から下げているタオルで慌てて顔を拭いたものの、葵はすでに全身が汗だく状態だった。

「だから熱いって言ったのに。よく最後まで見てたね」

「見てる時は気にならなかった。ほんと、魔法ってすごいねえ」

魔法の凄まじさを改めて実感した葵が半ば独り言のように零すと、ザックはおかしそうな笑い声を上げたのだった。

メイドがやって来た(6)

ザツクの家で冷たい紅茶をご馳走になった後、葵は彼の工房を後にした。フィフスストリートに出た頃にはもう日が暮れかかっていて、通りには荷物を抱えて家路を急いでいる者達の姿が目立つ。帰ろうと思った葵は貸し与えられている屋敷がある方角へ向かって歩き出したのだが、視線を感じてすぐに足を止めた。

(何だろう?)

やたらと通行人と目が合ったかと思えば、誰もがそそくさと葵から目を逸らしていく。中にはあからさまに笑い合いながら通り過ぎる者達もいて、不審に思った葵は改めて自分の出で立ちを確認してみた。

(……うわっ)

工房の中にいたからなのか、葵のドレスは夕闇の中でも目立ってしまうほど薄汚れていた。さらに汗をかいたせいで化粧が崩れ、髪も好き放題に乱れている。これじゃ笑われても仕方がないと思った葵はそそくさと、フィフスストリートからさらに一本奥の路地へと身を潜ませた。

(どうしよう)

この姿で人目に晒されるのは嫌だ。そう思った葵は腕を組み、何か妙案はないかと考えこんだ。

(そつえば……)

出掛ける前にクレアが言っていたことを思い出した葵はドレスのポケットを探ってみた。そこから出てきたのはシルバー製の小さな呼び鈴^{ベル}。帰る時にはこれを鳴らせとクレアが言っていたので、葵は試しにベルを軽く振ってみた。しかし何の音も、聞こえない。首を傾げた葵は先程よりも少し強くベルを揺さぶってみたのだが、それでもやはり何の音も聞こえてはこなかった。

「壊れてんの?」

いくら振っても音がしないベルに失望した葵は思わず文句を漏らしてしまった。するとその直後、眼前に光があふれ出す。突然の発光に目を焼かれてしまった葵は固く目を瞑り、その後はしきりに瞬きを繰り返した。

「その呼び鈴は人間の耳には聞こえない音を発します。軽く振っただけでお嬢様がお呼びになっているのは分かりますので、あまり強く振らないでやって下さい」

姿を目に留めるよりも先に声で、葵はその場にクレアがいることを察した。しかし突然の発光に晒された目はまだ霞がかつた状態だったので、葵は視界を正そうと固く目を瞑る。少し待ってから目を開けると視界はだいたい正常に近付いていて、今度は目前にいる人物の姿がはっきりと映った。メイド服姿のクレアがそこにいるということは、先程の発光は転移魔法に伴う光だったようだ。

「お帰りですか、お嬢様」

「あ、うん」

葵の意向を受けたクレアはエプロンのポケットから何かを取り出し、それをおもむろに地面に叩き付けた。砕け散った『何か』は光を纏いながら路地を這い、やがて地面に魔法陣を描き出す。そうして出現した魔法陣に葵を誘ってから、クレアは呪文を唱えた。

「アン・ルヴィヤン」

クレアが口にした呪文は『帰還』を意味するもので、ある特定の魔法陣へと移動することが出来る魔法である。貸し与えられている屋敷の前庭にある噴水付近に描かれた魔法陣に出現した葵はクレアを振り返り、改めてお礼を言った。使用人に礼など不要だと定型句を述べた後、クレアは葵の姿に目を留めて微かに眉根を寄せる。

「そのお姿は、どうなさったのですか」

「あゝ、これは……」

自分がひどい有り様になっていることを思い出した葵はパンテノン市街での出来事を語ろうとしたのだが、あることに思い至って唇を結んだ。

(言わない方がいいかな)

クレアとは今朝方知り合ったばかりで、葵はまだ彼女のことを何も知らない。どうという人物なのかも分からずに話をするのは、危険である。今までの経験からそのことを理解している葵は本当のことを胸に留め、適当な作り話で誤魔化すことにした。

「ちよつと、ハデに転んじやつて。それに今日も暑かったから汗だからだよ」

「では、お食事の前にバスをご使用下さい」

葵にそう言い置いた後、クレアはさつさと屋敷の方へ歩き出す。

首を傾げながらクレアの後を追った葵はバス「風呂」という答えに行き着いて人知れず手を打った。

豪華な造りの二枚扉を開けて屋敷の中へ入ると、エントランスホールではマトが出迎えに来ていた。留守番をしていたらしいマトは一直線にクレアの元へ這い寄り、彼女の肩口へと上って行く。どうやらそこが、マトの定位置らしい。

(重くないのかな?)

足を止めた葵が何とはなしに眺めていると、クレアが肩口のマトに顔を寄せた。クレアの動作に呼応するように、マトも顔を持ち上げる。そうしてパートナーだというマトと触れ合った後、クレアは改めて葵を振り返った。

「では、参りましょう」

クレアに促されたので葵は再び屋敷の中を歩き出した。この屋敷のバスルームは奥まった所にあるので、エントランスホールを抜けて奥へ奥へと歩を進めて行く。バスルームの手前には十畳ほどの脱衣所があり、そこへ辿り着いた途端、少し前を歩いていたクレアがくるりと体の向きを変えた。

「失礼いたします」

事務的に一礼した後、クレアは葵に向かって手を伸ばした。彼女がドレスを脱がそうとしていることを察した葵は慌てて体を引き、無意識のうちに胸元を腕で庇う。

「自分でできるから。着替えの用意だけお願いします」

「……かしこまりました」

しつこくすることはせずに引き下がったクレアは、葵の意を受けて早々に脱衣所から姿を消す。一人になってようやく心地ついた葵は汚れたドレスをゆっくりと脱ぎ始めた。

（着替えもそうだけど、何でもかんでもやってもらうのが貴族ってやつなのかな）

家事全般をやってくれる人がいるというのは、非常に助かる。だが使用人を雇うことが一般的ではない世界に生きてきた葵にとって、着替えや入浴の世話まで焼かれてしまうのはどうにも性に合わなかった。

（お風呂はやっぱり、のんびり入りたいよね）

そんなことを思いながら、葵は脱衣所からバスルームへと移動した。この屋敷のバスルームは銭湯並みの広さがあり、清潔感のある白を基調とした室内には水槽のような湯船が置かれている。湯船にはすでに湯が張られていて、その表面には摘みたての花が浮かべられていた。一人暮らしの時はそこまですることはなかったため、葵は改めて一流ホテルのスイートルームのような眺めに呆れてしまった。

（お金持ちって、こういう感覚なんだ）

自分で何もしないのは楽でいいが、この生活に慣れてしまうと元の世界に帰った時に大変な思いをするだろう。そう思った葵は脱衣所から体を洗うかと尋ねてきたクレアに丁寧な断りを入れ、あまり長湯をすることなく湯船を後にした。それでも時間に見れば、おそらく十五分から二十分は入浴していただろう。それだけの時間が経っているのに、脱衣所を出てすぐの場所でクレアが直立不動のまま佇んでいた。

「な、何してるの？」

クレアの行動にギョツとした葵はわずかに身を引きながら問いかけた。葵が狼狽しているのに対し、クレアは眉一つ動かすことなく

淡々と答えを口にする。

「見張りです」

「見張りって……何で？」

「主をお守りするのがメイドの勤めですから」

クレアから答えになっていない答えを寄越された葵には首を傾げることしか出来なかった。彼女はノゾキでも出るかのような物言いをするが、そもそもバスルームにも脱衣所にも窓がないのである。覗きようもないと思ったが言及することはせず、葵はその話題をそこで終わらせた。

バスルームを後にした葵はクレアに促され、そのまま一階の片隅にある食堂へと向かった。そこではすでに夕食の準備が整っていて豪華だった朝食と同じくらいの料理が並んでいる。朝と同じく『一人分の量じゃない』という感想を抱いた葵は呆れながらクレアを仰いだ。

「やっぱり作りすぎじゃない？」

「これでも朝よりは量を減らしたのですが」

「もうちよつと品数少なくしていいよ」

料理が残っても決して無駄にはしないとクレアは断言していたが、それでも食べ残す側である葵にとっては抵抗感が拭えなかった。どうしても、もつたないと思ってしまうのだ。

「そうだ、クレアも一緒に食べない？」

どうせ一人では食べきれないのだし、食事は誰かと共にした方が楽しい。葵はそう思ったのだが、クレアは考えることもなく首を横に振った。

「使用人が主人と同じテーブルに着くことはありません」

「……そっか」

頑なな態度を崩そうとしないクレアを軟化させることは、天地を創造するくらい難しそうである。絶対に無理だと察した葵は早々に諦め、一人で黙々と料理を口に運んだ。

無属性魔法が作り上げるパターン化された料理とは違い、クレア

の用意してくれた食事には味わいというものが存在していた。しかし量が量だけに大皿一つを平らげること出来ないうまま、葵はそつとナイフとフォークを置く。葵がナプキンで口元を拭くと、クレアがすかさず紅茶を淹れた。食後の紅茶をゆっくりと干した頃には眠気が押し寄せてきて、クレアに部屋へ戻ることを告げた葵は静かに席を立った。食堂の片付けは後でするらしく、クレアは歩き出した葵の後ろにつき従う。まだ月が昇りきる前の暗い廊下へ出るとクレアがさつそく光を発生させ、葵の行く先を照らし出した。彼女の手際があまりにも良かったため、葵は妙な居心地の悪さを感じて眉根を寄せる。

（なんか、落ち着かないなあ）

今までは明かりをつけるにしても、どこかへ行くにしても、自分だけで出来ることは一人でやってきた。それを、こつも急に他人がやってくれるようになる、かえって落ち着きを失くしてしまう。だがクレアにやめるとも言えなかったので、葵はいつもより少しだけ足早に寢室へと向かった。

「おやすみなさいませ、お嬢様」

葵がベッドに潜るまで付いて来たクレアは、そう言い置くと明かりを消してから踵を返した。キングサイズのベッドに仰向けに転がった葵は一つ息をついてから目を閉じる。

（今日は疲れたなあ……）

振り返れば新たな出会いがあったり、迷子になったりと、忙しい一日だった。だが家でも外でも一人ではなかったため、久しぶりに友人達との別れを失念していられたことは幸いだ。この調子で初恋も思い出にしていきたいと思った葵は寝返りを打って枕を抱いた。

（明日は学校、行こう）

クレアがシーツを洗ってくれたのか、ベッドからは真夏の太陽の匂いがした。安心する香りが睡魔を呼び寄せ、葵は深い眠りへと落ちていく。そのまますぐに寝入ってしまったため、彼女が鞆の中でバイブレーションを繰り返している携帯電話の動きに気付くことは

な
か
っ
た。

新任教師（1）

夏月期かげつの中盤である橙黄とうきゆうの月の一日、その日も夏の夜は穏やかに明け、飾り窓から差し込んでくる斜光が大理石の床に複雑な図形を浮かび上がらせていた。太陽の位置が高くなるにつれて少しずつ影を伸ばす図形は、有人の室内で人知れずシャドウダンスを披露している。それに目を留めたのはこの部屋の主ではなく、豪華な二枚扉をそつと開けて進入してきたメイド服姿の少女と、彼女の肩にどつしりと腹這いになっているワニに似た生物だった。

「お嬢様、朝です。起きてください」

未だキングサイズのベッドに潜ったままにいる主人に声をかけながら、メイド服姿の少女は薄手のカーテンが引かれている窓を開けた。カーテンが退けられた窓からはまだあまり強くない夏の日差しが射しこみ、爽やかな朝の空気と共に室内を洗浄していく。ベッドの中の人物は朝日を避けるように上掛けを頭までかぶり、くぐもつた声で「あと五分」と呟いた。しかしメイド服姿の少女は容赦なく、シーツの塊でしかない主人に腕を伸ばす。

「お嬢様、起きて下さい」

メイド服姿の少女が上掛けを剥ぎ取ったため、ネグリジエ姿のまま丸まっているこの部屋の主の姿が露わになった。寝ぼけた様子で体を起こしたネグリジエ姿の少女の名は、宮島葵。まだベッドの上でポーツとしている主人を横目に窓辺で紅茶を淹れ始めたメイド服姿の少女はクレア・ブルームフィールドという。そしてクレアの肩口にいる彼女のパートナーは、名をマトといった。

「どうぞ」

クレアに差し出されたティーカップをソーサーごと受け取った葵は赤褐色の液体に寝ぼけた自分の顔を映した。ティーカップからはアーリーモーニングティーの芳しい香りが立ち上っていて、冴えない頭を少しづつはつきりさせていく。葵が紅茶を一口含んだのを確

認してから、クレアは言葉を重ねた。

「朝食の用意が整っております。何かございましたら、ベルでお呼び下さい」

クレアが顔を傾けた先には初めから室内に備え付けられていたデスクがあり、その上にはいつの間にかシルバーの呼び鈴ベルが置かれていた。葵がそちらに気を取られているうちに、クレアはさっさと室内から姿を消す。ベッドの上でゆっくりと紅茶を干した後、葵はようやく動き出した。

（誰かに起こされるなんて、変な感じ）

この屋敷を貸し与えられてから葵はずっと、独りで生活してきた。だがこの世界へ連れて来られるまでは、朝の光景に家族の姿があることが普通だったのである。いつの間にかこの世界での暮らしが日常になっていたことに気がつき、葵は複雑な思いで顔を歪めた。

（お父さんとお母さん、どうしてるかな）

せめて無事を知らせる電話の一本でも入れたいところだが、あいにく異世界では携帯電話も役に立たない。魔法が使えない葵には自力で元の世界へ帰る術もなく、ただその手段が見付かるのを待つことしか出来ないのだ。

（人任せって辛いなあ）

考えても仕方がないと諦めてはいるものの改めてそう感じずにはいられず、葵は深いため息をつきながら身支度を開始した。

（あれ？）

いつものように制服に着替えようとしたところで、葵はいつもの場所に着替えないことに気がついた。普段はめつたに覗かないクローゼットの中を探してみても、やはり見当たらない。室内を右往左往しながら記憶の糸を辿っていた葵は、あることに思い至ってクレアを呼びつけることにした。

「どうなさいました、お嬢様」

室内で軽くベルを振るとすぐ、クレアが姿を現した。クレアの姿を認めた葵は彼女の傍へ寄り、急いで問いを口にする。

「私の制服、知らない？」

昨日、葵はクレアの手によって半ば強制的にドレスへと着替えさせられた。その時に制服を脱いだのが最後の記憶なのである。葵が脱ぎ捨てた制服はクレアが片付けたはずなのだが、彼女は不思議そうにしながらベッドを指し示した。

「あちらに置いてあります」

クレアが示した先には、確かにきちんと畳まれた制服が置いてあった。しかしそれはトリニスタン魔法学園の制服である白いローブのことで、葵が探している『制服』ではない。どう説明しようかと頭を悩ませた葵は、考えをまとめながら口火を切った。

「あれじゃなくて、私が昨日ドレスに着替える前に着てた服のこと」「チェックのスカートに白いワイシャツのことですか？」

「そうそう。どこにあるの？」

葵の問いに答える前に口をつぐんだクレアは、少し顔を歪めて視線を泳がせた。その仕様に嫌な予感を覚えた葵は焦りを募らせながら言葉を次ぐ。

「まさか……捨てたとか言わないよね？」

「まだ捨ててはおりませんが、」

「ダメ!!!」

クレアの発言を遮って声を荒らげた葵はハツとして口元を抑えた。葵が突然怒鳴ったので、クレアは驚いたように目を瞬かせている。心なしか彼女の肩口にいるマトの目が冷たいような気がしたので、葵は一步後退してから取り繕った。

「あの、大切なものなの。だから、返して？」

「……かしこまりました。ご用意いたしますので、お嬢様は朝食をお召し上がり下さい」

そう言い置くと、クレアはすぐさま葵の寝室から姿を消した。彼女の言いつけに従った葵はネグリジェ姿のまま屋敷の中を移動し、一階の片隅にある食堂へと赴く。そこではすでに朝食の準備が整っていたので、葵は一人で食事を始めた。

着任早々の昨日、クレアの用意してくれた食事はどれも一人分の胃袋の容量をはるかに超えるものだった。食事を残すことにもったいなさを感じた葵はそのことについて、彼女に苦情を言ったのである。そのためか、今朝の食事は一人分の適量だった。全てを美味しくいただいた後、葵は胸の前で軽く手を合わせる。食堂にクレアの姿はなかったが朝食を作ってくれた彼女に向けて、葵は小さく『ごちそうさま』と呟いた。

「お嬢様、予鈴が鳴りました。お部屋に着替えをご用意しておきましたので、お支度をお急ぎ下さい」

「えっ？ あ、うん」

食堂に入って来たクレアが何やら急ぎ模様で言うので、葵は彼女の言っていることが理解出来ないままに席を立った。予鈴って何だろうと考えながら寝室に戻った葵は、ベッドに置いてあった高等学校の制服に手早く袖を通す。等身大の鏡の前に移動した葵は、鏡に映し出されたいつも通りの自分に満足した。

『ミヤジマは何故、制服を着ないの？』

出会った時に交わした友人の言葉が、不意に蘇った。絵に描いたような優等生だったステラ「カーティスという名の少女は、葵がトリニスタン魔法学園の制服である白いローブを着ていなかったことを疑問に思い、そう問いかけてきたのだ。鏡の中でふっと口元をほころばせた葵は『暑いからだよ』と答え、踵を返して歩き出す。デスクの上に置いてあった魔法書をひったくった葵はその足で寝室を後にし、屋敷の正面玄関へと向かった。

「お送りいたします」

正面玄関の脇で待ち構えていたクレアがそんなことを言い出したので、葵は素直に甘えることにした。揃って屋敷を後にした葵とクレアは正面玄関の直線上にある魔法陣の手前で歩みを止める。クレアに促された葵はその後、一人で魔法陣の中心に立った。

「お帰りの際はベルを鳴らして下さい。お迎えにあがりますので」

「あ、うん。ありがとう」

「では、参ります」

「あ、ちよつと待って」

葵が制止の言葉を投げかけたので、呪文を唱えかけていたクレアは不可解そうな表情になって唇を結んだ。そんなクレアに微笑みかけ、葵は言葉の続きを口にする。

「朝ごはん、美味しかった。ごちそうさまでした」

葵が軽くお辞儀をすると、クレアは呆気にとられたような、妙な表情になった。しかしそのことについては触れぬまま、無表情に戻った彼女は転移の呪文を口にする。光を放った魔法陣が葵の姿をかき消した後も玄関先に佇んだままでいたクレアはやがて『いつてらっしゃいませ』と呟き、それから踵を返したのだった。

新任教師（2）

クレアの転移魔法によってトリニスタン魔法学園アステルダム分校に登校した葵は、しばらく経つてから校舎へ向けて歩き出した。正門から校舎へと続く生徒の波が途絶えるまで身を潜めていただけあって、周囲にはすでに人気がない。無人のエントランスホールを抜けた葵は自身の教室がある二階へは向かわず、そのまま一階の北辺にある保健室を目指した。

（とりあえず、クレアのことを訊かないと）

この学園の『保健室』には、葵が異世界の住人であることを知っているアルヴァ・アロースミスという青年がいる。彼に訊けば、ある朝突然現れたメイドがどのような人物なのかはつきりするだろう。「そこにいる、私服の少女」

静まり返った廊下を歩いていると不意に男の声が聞こえてきたので、葵は反射的に背後を振り返った。どこかの部屋から出て来たところなのか、先程まで誰もいなかったはずの廊下に青年が佇んでいる。その双眸が真っ直ぐこちらに向けられていたので、葵は彼の言う『私服の少女』が自分であることを認識した。

（私服じゃないんだけどなあ）

胸中でそんな呟きを零しながら、葵は歩み寄ってくる青年を迎えた。明るいブラウンの髪にミッドナイトブルーの瞳をしている青年は、校内では見かけない顔である。しかし彼が非常に端整な面立ちをしていたため、葵は返事をするのも忘れて見入ってしまった。

（うわー、芸能人みたい）

葵が最も愛する加藤大輝は、あどけなさや鋭利さを兼ね備えた少年らしい魅力を持つ『芸能人』だ。しかし目の前の青年はそれとはタイプが違い、酸いも甘いも噛み分けた大人向けの恋愛ドラマに登場するような『芸能人』である。好みとは少し違うのだが、彼にはそれでも「カッコイイ」と思わせるだけの大人の色香があり、葵は呆

けたように青年の顔を凝視した。しかし見られることには慣れているのか、青年は動じるような様子もなく淡々と言葉を次ぐ。

「君はうちの生徒なのか？」

生徒という一言でハツと我に返った葵は、それまでとは違った視線で改めて青年を眺めた。年齢的に見てまず間違いなく、彼は生徒ではない。だが教師なのかと言えば、それもまた少し違うような気がした。

トリニスタン魔法学園においては生徒だけでなく、教師も『制服』としてローブを纏っている。生徒のローブが白で統一されているのに対して教師のローブには何種類があるのだが、それでも同じような格好をしていることに変わりはない。だが葵の前にいる青年は、一部の例外と同じく私服姿なのだ。その出で立ちがスーツに似ていたため、葵は自然とアルヴアの姿を思い浮かべた。

（そういえばアルもローブじゃないけど、あれはまた別なのかな）

校医であるはずのアルヴアは本来の仕事を代理に任せていて、自分是人前に姿を現さないのだ。言わばアルヴアは例外中の例外であり、参考にならないと思った葵は彼の姿を頭から消し、青年に視線を戻した。

「一応、そうです」

「そうか。所属は？」

「クラスのことだったら一応、二年A一組ですけど……」

「なんだ、私のクラスの生徒か」

「へ？」

葵が所属している二年A一組の担任教師は老齡の男性であり、端正な顔をしている青年とは似ても似つかない。聞き間違えかと思つた葵が自分の耳を疑っていると、それを察したらしい青年は説明を加え始めた。

「私の名はロバート・エーメリー。君達の担任であるアームストロング先生が腰を痛められたので、しばらくのあいだ二年A一組を受け持つことになった」

「あ、そうなんですか……」

「君の名は？」

「宮島葵、です」

「ミヤジマ・アオイ、もう授業が始まる。私より先に教室へ入ったのならば、遅刻とはみなさないであげよう」

「あ、はい」

条件反射的に頷いた葵は慌てて踵を返し、校舎二階にある二年A一組の教室へ向かって走り出した。

(……私、何で走ってるんだろう)

元いた世界へ帰ることを願っている葵にとって、トリニスタン魔法学園で優等生でいることにあまり意味はない。それでも高等学校に通っていた頃のように遅刻を気にして教室へ急いでいるのが、ひどく奇妙なことのように思われた。同時に、久しぶりの感覚がなんだか楽しくなってきた。葵は一人で浮かれながら廊下を疾走する。しかししやいでいたのも束の間、教室のドアを開けた瞬間に浮かれていた気分は彼方へと吹き飛んで行った。真顔に戻った葵が唇を引き結んだのは、教室中の視線が一斉にこちらへ向けられたからだ。

つい先日まで、葵は渦中の人だった。それというのも葵が、トリニスタン魔法学園のエリート集団であるマジスターと親しくしていたからだ。一般の生徒にとってマジスターは高嶺の花であり、彼らと親しくなりたいがために生徒達は葵に話しかけてきていたのである。それが今は、誰もが葵から目を逸らしていく。その理由に思い至った葵は苦い気持ちになりながら窓際の自分の席へと向かった。(ステラがいなくなったから、私に話しかける必要もないってことね)

この学園での生徒同士の繋がりなど、そんなものである。初めからそう思っていただけに、失望などは感じなかった。むしろ知らない人にまで声をかけられる煩わしさから解放されたので非常に気楽である。だが肩の力を抜く前に、葵はクラス的女子を牛耳っている

ココという少女に視線を傾けた。

ココと、彼女と仲の良いシルヴィアとサリーは葵にとって天敵にも等しい。一時は仲良くしていたこともあるだけに、彼女達は他の生徒にも増して葵を目の敵にしているのだ。ステラのおかげで嫌がらせがなくなっていたのは自明の理であり、彼女がいなくなつた今、ココ達が再び嫌がらせを始めないと限らないのだ。葵はそう考えていたのだが、何かの話で盛り上がっているココ達がこちらに視線を寄越すようなことはなかった。

（大丈夫そう、かな）

教室内が落ち着いた雰囲気に戻りつつあるのなら、あとは葵がマジスターと関わりを持たなければ女生徒達の標的にされることもないだろう。衝突は避けて地味に日々を送ろうと思つた葵はそこでようやく肩の力を抜き、机の上で魔法書を広げてみた。

（ちよつと、真剣に勉強してみようかな。そうすれば自分でなんとか出来るかもしれないし）

葵がこの世界へ連れて来られたのは魔法が原因である。それならば元の世界へ帰るのにも魔法が必要となるはずなのだ。この世界の生まれではない葵には自分で魔法を使うということは出来ないのだが、それでも文字を学べばオリジナルの呪文スベルを生み出すことは出来る。元の世界へ帰れるような魔法を自分で生み出しさえすれば、あとは魔法が使えるアルヴァあたりにも呪文を唱えてもらえばいいだけだ。

（よし、頑張ってみよう）

目標を定めた葵はとりあえず、高名な魔法使いであるレイチエル「アロースミスから渡された魔法書に目を落とした。子供に初歩の魔法を教えるために書かれたこの魔法書こそ、勉強の第一歩である。だが集中しようと思つたのも束の間、教室内の空気が一変したので葵は早々と魔法書から顔を上げた。

（あつ……）

室内が不意にざわついた原因は、教壇に立つた一人の青年だった。

そこは本来であれば老齡の教師が立つべき場所であり、二年A一組の生徒達は見知らぬ大人の登場に戸惑いと興味を覚えている。ましてやロバートは人目を引く容姿をしているので、主に女生徒達の間で華やかな囁きが飛び交っていた。

「私の名はロバート。君達の担任であるアームストロング先生が腰を痛められたので、しばらくのあいだ二年A一組を受け持つことになった」

さきほど葵に語ったのと同じ内容を繰り返したロバートは生徒全員に向けて簡単に着任の挨拶を済ませた。彼はそのまますぐ授業を始めようとしたのだが、若い教師に興味津々な女生徒達から質問の聲が上がる。

「ロバート先生、ファミリネームは何と仰るのですか？」

「秘密だ。私のファミリネームを言い当てた者には、何か褒美を考えておこう」

ロバートがはつきりと答えを口にしながらため、二年A一組の教室では様々な憶測が飛び交った。生徒達が次々と名前を挙げていくが、ロバートは笑いながら「はずれだ」と躲していく。そんな和やかな空気の中、葵は一人で首を傾げていた。

(さつき、言っただけ？)

ロバートに自己紹介をされた時、彼ははつきりとファミリネームも名乗っていた。それが何故、教室の中では『秘密』になるのかよく分からないと思った葵が眉根を寄せていると、教室の話題は名前のことからロバートの服装へと移って行った。

「ロバート先生は何故ローブを着ていらっしやらないのですか？」

「私は、型を破ることがそれほど悪いことだとは思っていない。しかし他人と違うことをするということは、他の人がしなくても済む苦勞を背負い込むということでもある。君達はまだ若い。だから私の真似はしないように」

説教じみたことを口にしながらも表情には茶目っ気を覗かせるロバートに、二年A一組の生徒達は瞬く間に魅了されてしまった。賑

やかな笑い声に包まれている教室は穏やかな空気を有していて、先日までのギスギスした雰囲気は嘘のようだ。着任早々癖の強い生徒達を手懐けてしまったロバートを、葵は「すごいなあ」と思いながら見つめていた。

新任教師（3）

着任早々に生徒の心を掴んだロバートはその日の授業が全て終了してもまだ、教室で生徒達に取り囲まれていた。放課後に部活動を行うという習慣のないトリニスタン魔法学園では生徒は授業が終わるとすぐに下校するため、この光景は非常に稀である。そんな珍しい光景を横目に帰り支度を済ませた葵は静かに席を立ち、学園へ来た本来の目的を果たすために早々と教室を後にした。向かう先は一階の北辺にある保健室である。

（……あれ？）

保健室の扉に手持ちの鍵を差し込んだところで、異変に直面した葵は首を傾げた。いつもならば簡単に倒れる鍵が、どういうわけかピクリとも動かない。どんなに力を込めて鍵穴を回そうとしてみても、それは変わることがなかった。

（何で開かないんだろう）

不審に思った葵はとりあえず鍵を引き抜き、そのまま扉を開けてみることにした。『保健室』の扉が開かれるとすぐ、窓際のデスクの上に陣取っている白い物体が目につく。この部屋の主と思われるでっぷりとしたウサギは葵の顔を見るなりデスクから飛び下り、体格に似つかわしくない軽快な跳躍で彼女の傍へとやって来た。

「はい、今日はどうされましたかあ？」

奇怪なウサギが急に近付いて来たので、葵は思わず数歩後退した。しかしウサギの方は葵が気味悪がっていることには構わず、舌足らずな調子で話を続ける。

「まずはお名前とお、クラスを教えてくださいなね」

このウサギにはいつか同じことを言われたなと思いつながら、葵はとりあえず身分を明らかにした。話をしている間も忙しなく飛び跳ねていたウサギは葵の名前を聞いた途端、ピタリと動きを止める。「ミヤジマ・アオイさん、大いなるエクスペリメンターから貴方宛

てのご伝言を預かっています」

ウサギの言う『大いなるエクスペリメンター』とはアルヴァのことである。ウサギとアルヴァの関係は未だに謎だが、そのことだけは前もって知っていたので、葵は無言のまま後に続く言葉を待った。ウサギは短いヒゲをひくひくさせながら宙を仰ぎ、何かと交信でもしているかのような様子で先を続ける。

「大いなるエクスペリメンターはご不在です。以上！」

伝言の内容があんまりなものだったので葵は開いた口がふさがらなくなってしまうた。

(以上、つて……)

どこへ出掛けているのか、いつ戻って来るのか。そうした情報が何かないのかと思つた葵はウサギを問い詰めてみたのだが、返ってくる答えは知らぬ存ぜぬの一点張りだった。ウサギの舌足らずな喋り方も手伝つて次第にイライラしてきた葵は話を切り上げて保健室を後にする。だが廊下へ出た途端に女子の話し声が聞こえてきたので、葵は慌てて保健室へと引き返した。

「ロバート先生、ステキですわね。大人の魅力にうっとりしてしまいますわ」

「アームストロング先生に感謝しないといけませんわね。先生が腰を痛められたおかげで、わたくし達はロバート先生に巡り合えたのですもの」

「わたくし、ロバート先生にアタックいたしますわ。トリニスタン魔法学園の教師ですもの、きっとそうとうなお家柄ですわよ」

「あら。では、オリヴァー様はお諦めになるの？」

「わたくし、そのようなことは言っていないせんわ。オリヴァー様もステキですもの」

保健室の扉を隔てているので姿は見えないが、ロバートの話をしているところを見ると声の主は同じクラスの少女達だろう。扉の前で息を殺していた葵は少女達の声が遠ざかるなり大きく嘆息した。

(なんだかなあ……)

自分がミィハーである自覚があるだけに、葵にもステキな異性のことで騒ぐ少女達の気持ちは理解することが出来る。だがトリニスタン魔法学園に通う女生徒が異性のことで騒ぐのは、それとはまた少し次元の違う話なのだ。表面や内面よりもとにかく家柄にこだわる少女達の感覚は、葵には理解出来ない代物である。そういった話を聞いたたびに、葵はなんとも複雑な気分になるのだった。

「先生、かわいそう」

「私のことを言っているのなら、そうでもないと教えておこう」

独り言のつもりで零した呟きに返事が返ってきてしまい、驚いた葵は背後を振り返ってから後ずさった。保健室の扉に強か背中をぶつけた葵を平然と見つめているのはミッドナイトブルーの瞳。噂の主がいつの間にか、そこに出現していた。

「せ、先生……いつからそこに？」

「つい今しがただよ。それで、その『可哀想』はやはり私に向けられたものなのか？」

「えっと……それは、その……」

どう説明をしているのか困り果てた葵は言葉を濁しながら視線を泳がせた。しかしロバートは、葵の反応を意に介する風もなく淡々と言葉を続ける。

「ミヤジマ＝アオイ。君が何故そう感じたのか、私に教えてくれな
いか？」

「いや、そう言われましても……」

「君の言葉でいい。私に、君の思いを聞かせてくれ」

なんだか迫られているようだと思いつながら、葵は仕方なく『可哀想』と発言するに至った経緯を説明することにした。

「さっきの、廊下で女の子達が話してたこと聞いてたんですよね？」

「ああ。聞いていた」

「あれって、先生のことが好きだからって意味じゃないじゃないですか。だから、そんな家柄とかだけで好きとか言われても、言われる側にしたらたまらないだろうなって思っ……」

「彼女達の気持ちは愛ではないと、そう言いたいのか？」

「まあ、平たく言えば……」

そういうことになるのではないかと、葵はごによごによとした調子で答えた。ロバートはそこで一度言葉を切ったが、しばらくの沈黙の後、柔らかな笑みを葵に向ける。

「ミヤジマ＝アオイ、君は純粋なのだね」

ストレートな科白を投げかけられることに慣れていない葵はロバートの一言に赤面してしまった。自分でも何を照れているのか分からぬまま、葵は恥ずかしさのあまり目を伏せる。それでも思いはあふれ出してきて、葵は俯き加減のまま言葉を続けた。

「ひとを好きになる気持ちって、家柄がどうか、そんなんじゃないと思うんです」

葵も初めは外見に惹かれて、ハル＝ヒューイットという少年を好きになった。だが彼への気持ちが恋心に変わる頃には芸能人のような外見よりも何気ない優しさや、ステラを想う一途な気持ちといった内面に強く惹かれていた。その想いには相手の家柄や将来の裕福な暮らしなど、そういった邪念は一切含まれていなかったように思う。そうした混じり気のない気持ちこそが恋愛なのだという意識があるだけに、ことさらトリニスタン魔法学園の生徒達とは仲良くないのかもしれないと、葵は今さらながらにそんなことを思った。(っっていうか、初対面に近い人に何話してるの)

暴走気味に本音を吐露してしまった自分につきこみを入れつつも、葵は今までに感じたことのない爽快感を覚えていた。思えばこの世界へ連れて来られてから、誰かとまともに恋愛の話をしたのはこれが初めてである。その話し相手が何故、彼だったのか。視線を上げてロバートの顔を見た葵は何となくその理由が分かったような気がした。にこやかに他人の話に耳を傾けてくれるロバートが、きつと聞き上手なのだ。

「すいません、急に変な話して」

「聞かせてくれと言ったのは私だ。構わないよ」

「ところで先生、保健室に何か用事があつたんじゃないんですか？」

「ああ、この場所には用事はない。私は君を探しに来たのだ」

「えっ、何ですか？」

「先日、二年A一組を受け持つにあたって生徒の成績に目を通した。学年的に見れば平均的なクラスだが、その中に一人だけ抜きん出て成績の悪い生徒がいてな」

「……私、ですね」

「その通りだ。ミヤジマアオイ、私は君に補習を受けることをお勧めする」

「補習、ですか……」

補習も何も基礎が出来ていないのだからどうしようもない。そう思った葵は苦笑いを浮かべた。しかしすぐ、それもいいかもしれないと思ひ直して表情を改める。

「先生が教えてくれるんですか？」

「ああ。私が君を導こう」

「それなら、やります。あ、でも……それじゃ特別扱いになっちゃいますね」

ロバートはすでに二年A一組の女子の心を鷲掴みにしている。そんな中で一人だけ特別扱いを受ければ、マジスターの時の二の舞になることは火を見るより明らかだ。またあの陰湿な嫌がらせが再開されるのかと思つた途端、意欲に燃えていた葵は意気消沈した。着任したばかりのロバートは先の出来事を知るはずもないのだが、彼は葵の憂慮を察したように力強く頷いて見せる。

「補習は放課後、四階の特別教室で行う。隠匿の魔法を併用すれば誰かに見咎められることはまずない」

ロバートの口調がまるで『安心していい』と言っているようだったので葵は不思議に感じて首を傾げた。

「どうして、そんなに良くしてくれるんですか？」

「持てる知識を生徒に教授するのが教師の使命だからだ」

ロバートの一言は力強く、今まで頼る者のいなかった葵の胸に重

く響いた。少し感動してしまった葵は頭を下げ、ロバートに了承を伝える。そして翌日から補習を開始することで話がまとまった後、葵はロバートに別れを告げて帰宅の途についたのだった。

新任教師（４）

大方の生徒がすでに帰宅の途に就いている放課後、トリニスタン魔法学園アステルダム分校の校舎は静まり返っていた。この学園の生徒が校内にいるのは授業が行われている間だけなので、平素であれば授業が終わってしばらく経っているこの時間帯、校内に人影は見受けられない。しかしこの日は、校舎最上階にある広々としたサニールームに二人の少年の姿があった。

サニールームにいる少年のうち一人はがっしりとした体軀をしていて、ブラウンの茶髪を無造作に束ねている。もう一人の少年は華奢な体つきをしていて、真っ赤な髪色が印象的である。タイプは違えど、どちらの少年も非常に整った面立ちをしていて、彼らがその場にいるだけで華がある。そんな彼らは女生徒から絶大な人気を誇る、トリニスタン魔法学園アステルダム分校のエリート集団、マジスターの一員だった。

「暇だな」

豪華なりクライニングチェアで長い脚を存分に伸ばしながら気怠そうな声を発した茶髪の少年は、名をオリヴァー・バベツジという。同じくリクライニングチェアでくつろぎながら魔法書を開いていた赤髪の少年は、オリヴァーの独白に目を上げないまま反応を示した。「ハルもステラもいなくなったからね」

赤髪の少年の名は、ウィル・ヴィンス。今この場にはいないが、彼らにキリル・エクランドという少年を加えた三人がアステルダム分校のマジスターである。先月までマジスターの一員だったハル・ヒューイットとステラ・カーティスが王都の本校に編入したため、五名制のマジスターに二名の欠員が出ていたが、今のところ補填の動きは見られなかった。

「そんなに暇ならキルのところにも行けばいいじゃないか」

僕はもう少しここで読書をしていくからと、ウィルの反応は素っ

気ない。だがウィルの言い出したことが妙案とは思われなかったの
で、オリヴァーは顔をしかめただけで立ち上がるうとはしなかった。
「最近、おかしいんだよな」

「オリヴァーの頭が？ 暑さにもやられたの？」

「そうじゃねえだろ！」

「冗談だよ」

真顔のままさらりと毒のあるジョークを飛ばしたウィルは、そこ
でようやく魔法書から目を上げた。

「キルがどうかしたの？」

「ハルとステラが王都に行っちゃってから、おかしいんだよ」

「寂しくて駄々こねてるだけじゃないの？ 放っておきなよ」

「そういう感じじゃなくてだな……」

オリヴァーが考えこみながら言葉を途切れさせたので、異変を察
したウィルも真剣に話を聞くために魔法書を閉ざす。ハードカバ
ーの分厚い魔法書を手元から消し去った後、ウィルは改めてオリヴァ
ーに説明を求めた。オリヴァーの話によると、キリルがおかしくな
ったのは岩黄いわぎの月の二十三日……ちょうど、ステラとハルが王都へ
と出立した日からのことなのだという。

「ウィルが帰った後、キルに根掘り葉掘り聞かれたんだよ。ハルは
アオイのことどう思ってたんだとか、ステラとアオイのこととか。

拳句の果てには俺やウィルがアオイのこと好きかどうかまで訊かれ
てさ、参ったぜ」

「へえ……あのキルが」

たったそれだけの事柄でもウィルが真剣に聞き入ってしまうほど、
キリルという少年は普段、他人に興味を示さないのである。例えば
誰かを殴ったとして、翌日には殴った者の顔はおるか誰かを殴った
ことさえも頭から消し去ってしまう、それがキリル。エクランドと
いう人物なのだ。その彼がマジスターの仲間でもない宮島葵を気に
かけること自体、おかしい。通常時であればウィルもそう応えただ
ろうが、この時の彼は納得したように頷いて見せたのだった。

「きつかけはどうあれ、キルにもようやくアオイの異常さが解ってきたのかな」

ウィルの穏やかならざる発言に思い当たる節があったので、オリヴァーは返す言葉もなく閉口した。ちょうどその時、校舎の影から出現した人物が裏門の方へと向かって行くのが見えたので、オリヴァーとウィルはリクライニングチェアから同時に起き上がる。全面ガラス張りのサンルームからは、トリニスタン魔法学園の生徒でありながら制服を着ていない少女が帰宅の途にっこうとしている様子が具に観察出来た。

「噂をすれば、だね」

チエツクのスカートにワイシャツといった、夏にぴったりの涼しげな格好をしている黒髪の少女の名は宮島葵。彼女はいつも一般の生徒が登下校に使用している正門からではなく、主にマジスターが使用している裏門から登下校しているのだ。それもおそらくは、転移魔法を使わずに。

「……魔力が見えない」

ガラス越しに葵の後ろ姿を凝視していたオリヴァーが、ぽつりと独白を零した。ウィルも同じことを気にしていただけに、微かに口元を歪める。魔力は普通、様々な色形で所有者の周囲を漂っている。それは固有のもののだが葵の場合、少し前までは放出される魔力が一定に見えないよう特殊な魔法をかけていた。それだけでも大したことなのに、今度はその魔力を完全に消し去ってしまったのである。そんなことはトリニスタン魔法学園のエリートであるマジスターはおろか、王家に認められた特別な魔法使いである魔法士にも出来るかどうか定かではない。

オリヴァーとウィルに見つめられている中で、葵は裏門付近に描かれている魔法陣の上で立ち止まった。こちらに背を向けているので何をしているのかは見て取れないが、彼女が何かをしたことによつてメイド服姿の部外者が魔法陣の上に出現する。すぐにメイドの少女が魔法を発動させたため、彼女達の姿は光に吞まれて掻き消え

た。ウィルとオリヴァーは無言で成り行きを見守っていたのでサンルームには静寂が流れていたのだが、やがて室内に抑えた笑い声が響き渡る。

「ウィル？」

唐突に笑い出したウィルに、オリヴァーが気味悪そうな顔を傾ける。ウィルは口元に笑みを残したまま、楽しそうに答えを口にした。「調べただけだし、ミヤジマなんてファミリーは貴族の中にはないんだよ。アステルダム公国だけじゃなく、大陸のどこにもね」

「一般人だって言うのか？ だったら何で、トリニスタン魔法学園に通えてるんだよ？」

トリニスタン魔法学園は学園側が厳しく生徒を選抜する王立の名門校である。実質、爵位を持つくらいの家柄でなければ入学することすらままならない。そして葵が呼び出したメイド。使用人のエキスパートであるメイドや執事は三位以上の貴族でなければ雇うことが難しい。それらの点だけでも、葵が一般人だという結論は到底下せるものではなかった。だがウィルもその程度のことは承知の上のようであり、彼は涼しい微笑みを浮かべている。

「本当に魅力的だよ、アオイは」

ウィルがこういった物言いをする時、その発言の裏には必ず策略が潜んでいる。嫌な予感を覚えたオリヴァーは顔をしかめたままウィルを見たのだが、彼は楽しそうな表情を隠そうともしていなかった。

「ステラもいなくなったことだし、そろそろ正体を明かしてもらおうか」

以前にオリヴァーが葵にストレートな疑問をぶつけた時、ウィルは彼の言動を抑制した。おそらくはその時から葵の謎を解き明かす計画を練る腹積もりだったのだろう。今になってようやくウィルの真意を察したオリヴァーは呆れると同時に謎解きにワクワクしてきてしまい、彼の計画に加担することを約束してしまったのだった。

新任教師（5）

「こんにちは……」

木製の質素な扉を少しだけ開けた後、隙間から首だけを通り込んで奥へ向かって声をかけながら内部の様子を窺った。室内には見知らぬ少女が一人いるだけで、目当ての人物の姿はない。扉が開いた瞬間に少女もこちらを向いたので視線が絡み合い、気まずく思った葵はその気持ちを表情に表しながら扉を開けきった。

「どちら様ですか？」

葵が後ろ手に扉を閉めると、そのタイミングを見計らっていたかのように少女が口火を切った。初対面の相手から投げかけられた当然の疑問にどう答えるべきか少し迷った末、葵はとりあえず自己紹介を試みる。

「私、葵といいます。ザック、いますか？」

ここはパンテノン市街のフィフスストリートの一角にあるガラス工房だ。昨日、葵はここでザックという名の少年と知り合いになった。しかし彼を訪ねて来たのは用事があったからではなく、単に暇だったからである。葵がそうした事情を明かすと、少女はにこやかな笑みを浮かべた。

「あ、あ、妹のリズっていいいます」

「あ、どうも」

「お兄ちゃんなら作業場にいますけど、呼んできましょうか？」

「そっか、仕事中なんだ……」

独白を零した葵はリズから視線を外し、思案に沈んだ。ザックには会いたいが、仕事の邪魔をするのは悪い。瞬時にそう考えた葵は目を改めることにして、リズに軽く手を振って見せた。

「いいです。ジャマしたら悪いから、今日は帰ります」

「あ、だったらここで待ってて下さい。今日はそんなに時間のかかるものじゃないから」

すでに引き返す体勢に入っていた葵はリズの一声で彼女に向き直り、改めて考えを巡らせた。今から屋敷に帰っても、テレビもマンガもないこの世界では時間が有り余ってしまう。暇な時間を一人で過ごすよりは少しくらい待ってもザックと話をしたいと思い直した葵はリズに了承を伝えた。

「どうぞ、掛けて下さい。今、お茶を淹れますね」

葵にイスを勧めた後、リズはガラス製の容器に入った水出し紅茶を涼しげなティーカップに注いだ。透明なガラスを通して見る紅茶は赤褐色が美しく、ティーカップを渡された葵は様々な角度からカップを観察する。

「このカップ、いいなあ」

「ほんとに！？ それ、あたしが作ったの」

「そうなんだ？ すごいね」

そこで、すっかりいつも通りの言葉で会話していることに気がつき、葵はハツとした。リズも同じことを思ったのか、彼女もまた口元を手で押さえている。顔を見合わせた葵とリズはお互いに苦笑を浮かべ、敬語での会話はそこで終了となった。

「お兄ちゃんにね、いつも口が悪いつて怒られるの。でもやっぱりダメだね」

「フツウに喋ってくれた方が話しやすくもいいよ。私もこっちの方がいいし」

「嬉しい。ねえねえ、アオイっていくつなの？」

「十七だよ」

「じゃあ、お兄ちゃんと同じだね。あたしはお兄ちゃんの二つ下で、十五歳」

「そうなんだ？」

十五歳だというリズは天真爛漫としていて、葵はすぐに好感を抱いた。良家の子女ばかりが通うトリニスタン魔法学園では、この気楽さが皆無なのである。久しぶりに安らいだ気持ちになった葵はその後、リズと二人で他愛のない歓談に熱中したのだった。

「お客さんか？」

リズと他愛のない話で盛り上がっていると聞き覚えのある声が聞こえてきたので、葵はその声に反応して部屋の奥の方へ顔を傾けた。玄関とは反対側にある奥へと通じる扉は最初から開け放たれていて、そこからザックが顔を覗かせている。真つ白なタオルを首から下げている彼はバンダナで髪の毛を上げていて、いかにも仕事帰りといった様子で汗を滴らせていた。

「ザック」

リズと楽しい会話をしていたままのノリで葵は手を振ったのだが、ザックからの反応は返ってこない。彼は不審そうに眉根を寄せながら葵を見つめていて、それを見たリズが呆れた声を上げた。

「お兄ちゃん、アオイが呼んでるでしょ」

「えっ？」

妹の発言に驚いたような顔をしたザックは足早にこちらへと歩み寄って来る。そして葵の目前で足を止め、まじまじと葵の顔を観察した後、彼は改めて驚きの声を発したのだった。

「アオイじゃないか。昨日会った時とぜんぜん雰囲気が違うから分からなかった」

ザックと初めて会った時、葵は貴族の装束であるアフタヌーンドレスを身にまとっていた。しかし今日は、白いワイシャツにチエックのスカートという簡略な格好である。しかもザックと顔を合わせたのは本日が二度目なのだ。葵は無理もないと苦笑したが、リズは呆れきった顔をした。

「お兄ちゃん、いくらなんでもそれはないわ」

メイクや服装でガラリと印象が変わるのが女の子というものである。しかしいくら髪型や服装を変えても顔の作りは同じなのだから分らないはずがない。それがリズの言い分だったが、ザックは不服そうな表情を妹に向けた。

「だってお前、昨日会った時はアフタヌーンドレスだったんだぞ？」

「えっ、アオイって貴族なの！？ 見えな〜い！」

「リズ！ 口が悪い！」

ザックが慌ててリズの口を塞ごうとすると、リズはひらりと身を翻して兄の手から逃れた。ザックから遠ざかったリズが『お兄ちゃん汚いんだから触らないでよ』などと言っているのを聞き、葵は思わず吹き出してしまった。

(弥也やのところもこんな感じだったなあ……)

葵自身は一人っこののだが、元いた世界で友達だった弥也には歳の近い兄がいた。兄妹仲がいいことで有名だった弥也の家に遊びに行くと、ザックとリズのような仲睦まじい光景を目の当たりにしたものだ。そんな昔のことを思い返しながら、葵は微笑ましい思いでザックとリズのやりとりを眺めていた。

「笑ってないで、アオイからも何とか言っただけでやってくれよ」

妹にいいように弄ばれて弱りきったザックが救いを求めてきたので、葵は兄妹に笑みを向けたまま口を開いた。

「そのままでもいいよ。私も堅苦しいのは苦手だし」

「さっすがアオイ、話せるね！」

本日が初対面ながら、葵とリズはすっかり意気投合してしまっていた。少女達が楽しそうに話をしているので割り込めないと感じたのか、ザックは滴る汗を拭いながら奥へと姿を消す。リズが水を浴びに行っただろうと言うので、葵はザックが戻って来るまで彼女と喋り続けることにした。

「ねえ、アオイって本当に貴族なの？」

リズが「とても信じられない」といった表情を隠さずに尋ねてくるので、返答に困った葵は苦笑いを浮かべた。

「それが、私にもよく分からないんだよねえ」

「なにそれ？ 貴族は生まれた時から貴族でしょ？」

この世界の生まれではない葵には、生まれた時から何も無い。だがそのことは口にしてはならないので、葵は適当な作り話で誤魔化すことにした。

葵は両親を亡くしてから孤児院で生活していた。そのうちに誰か

に引き取られることになり、アステルダム公国にある屋敷に引越してきたのである。だが葵は、自分を引き取ったという人物と未だに顔を合わせたことがない。だから自分の身分が分からないのだという、昔呼んだ本からヒントを得た作り話を聞かせると、リズは妙な表情で閉口した。もつともらしい話をでっちあげた葵は、まったく別のことが気になつて眉根を寄せたまま空を仰ぐ。

（あの本のタイトル、なんだっけかな……）

子供の頃に好んで読んでいたものなので、今は押入れの奥深くに埋没していることだろう。元の世界に帰ったら探してみようと思ひ、そこで思考を断ち切った葵はリズに視線を戻した。するとリズが思ひのほかしんみりした空気を身にまとうていたので、葵は再び眉をひそめる。

「リズ？」

「……アオイもお父さんとお母さん、いないんだね」

そう言つて、リズは寂しそうな笑みを葵に向けた。彼女の発言から察するに、リズとザックには両親がいないのだろう。本当は両親共に健在な葵は心ない嘘をついたことにひどい胸苦しさを覚えた。葵が顔をしかめたからなのか、リズは慌てて言葉を次ぐ。

「あ、でもね、あたしにはお兄ちゃんがいるから平気。組合の人たちもみんな優しいし」

「……組合？」

「この街の職人組合。みんな家族みたいなもんだ」

「へえ……」

組合の話をしているうちにリズが元気を取り戻してきたので、葵は内心でホツとしながら話に耳を傾けていた。リズにとっては兄のザックと組合員がとても大切な存在のようで、彼らの話をする時は本当に嬉しそうにしている。両親はいなくても、そうした確かな繋がりがある人物が傍にいるリズに、葵は淡い羨望を抱いてしまった。もともと、この世界の者ではない葵には当然のことながら血縁者はいない。今は友人すらも身近におらず、気を抜ける相手といえば

全ての事情を知っているアルヴァくらいなものだ。だがアルヴァの態度はとても友好的とはいえず、友人と呼ぶには気心が知れない。加えて彼は、葵に何の前置きもなく失踪してしまったのである。

(どこで何やってんだろう)

アルヴァの身勝手さにはいつも腹が立つのだが、葵は結局、彼に頼らなければ何も出来ない。そのことはもう嫌というほど思い知っていたので、葵は深々とため息を零した。

「ねえ、アオイ」

「えっ？ 何？」

「今日、あたしが夕食当番なの。今夜はうちで食べていかない？」

リズからの突然の誘いに葵は目を瞬かせた。葵がなかなか反応を返せないでいると、リズは誰かに同意を求めるかのように部屋の奥へと視線を移す。

「ね、いいでしょ？」

「うちの食事なんて口に合わないんじゃないか？」

リズに応えたのは着替えを済ませて戻って来たザックだった。背後のザックを振り向いた後、葵は思いきり首を振る。

「そんなことはないよ」

「そう？ それなら、ゆっくりしていきなよ。食事は大勢の方が楽しいし」

「じゃあ、決まりね。あたしは買物に行ってくるから、アオイはお兄ちゃんとゲームでもして待ってよ」

そう言い置くと、リズは素早く立ち上がって玄関の方へと歩き出した。明確な返事をしたつもりはなかった葵は少し迷ったが、まあいいかと思い、ザックに向き直る。

「リズが言ってたゲームって？」

「やる？ 今、ボードを出すよ」

ゲームに必要なものはこの室内にあるらしく、ザックは部屋の隅へと向かった。もともとゲームが好きな葵はザックが用意をしてくれている間もワクワクしながら待っていたのだが、実際にそのゲー

△を始めてしまうともの見事にはまってしまったのだった。

新任教師（6）

オレンジの色彩が強い二月がパンテノン市街を煌々と照らししている夜、ファイフストリートから抜け出した葵は周囲に人気がないことを確認し、スカートのポケットからシルバー製の小さな呼び鈴ベルを取り出した。人間には聞こえない音を発するのだというそのベルは、軽く左右に振ってみても何の音も立てない。だがしばらくすると夜の闇を切り裂く閃光が走り、街角に佇む葵の前にクレアが姿を現した。

「お帰りですか、お嬢様」

屋敷にいる時と同じくメイド服姿のクレアは葵と向き合うなり淡々とした調子で言葉を発した。屋敷の中では常に彼女の肩口にはパトナーの姿があるのだが、今はワニに似た生物の姿はない。学園に迎えに来てもらった時も連れていなかったため、マトはクレアが屋敷を離れる際には留守番をしているのかもしれない。

葵が頷くと、クレアはエプロンのポケットから取り出した何かを地面に叩き付けた。昨日と同じく、砕け散った何かが少し時間をかけて地面に魔法陣を描き出していく。魔法陣が完成するとクレアがその上に立ったので、すでに手順を心得ている葵も彼女の後に従った。葵が魔法陣に入るのを確認してから、クレアは『帰還』を意味する呪文を唱える。そうして郊外にある屋敷に戻ってから、葵は改めてクレアを振り返った。

「さつきはごめんね。大した用がないのに呼びつけて」

ザックの家で夕食をごちそうになると決まった時、葵は屋敷で夕食の支度をしてきているであろうクレアのことを思い出した。元いた世界ならば電話を一本入れれば済むだけの話なのだが、この世界には電話というものが存在しない。なので仕方がなく、葵は『今日は夕食いらぬ』と告げるためだけに一度クレアを呼び出したのだった。

「お嬢様が気に病まれる必要はございません。メイドが主人の都合に合わせるのは当然のことですから」

葵が何を謝っているのか正しく理解したうえで、それでもクレアは愛想笑いの一つも浮かべようとしない。やっぱり少し付き合いつらいと感じた葵はクレアに分からないよう小さくため息をついた。

屋敷の玄関がクレアの手によって開かれると、エントランスホールにマトの姿があるのが目についた。大理石の床に腹をつけてじっとしていたマトは、葵の後に続いて来たクレアの姿を捉えるなり彼女の方へ這いずって行く。マトを抱き上げたクレアはパートナーを肩口に寄せ、それから自然なことのように彼に顔を寄せた。

(そういえば、昨日もそうやってたっけ)

マトは人語を話したりはしないが、もしかしたらクレアはそうすることで意思の疎通が出来るのかもしれない。マトから顔を離れたクレアが微かに眉根を寄せていたので、葵はそんなことを思った。

「何かあった？」

「いえ。お嬢様が留守にされている間、特別変わったことはございませんでした。わたくしがお屋敷を離れていた間も同様のようです。すでに眉間のシワを解いているクレアがそう言うので、葵は深く突っ込まないことにした。代わりに、まったく別の話題を振ってみる。

「クレア、コンバーツってゲーム知ってる？」

「存じております。一般的なボードゲームのルールは一通り学びましたので」

「じゃあ、出来るんだ？ それならば、ちょっと相手してくれない？」

コンバーツとは絵柄が描かれた駒を使った、戦争型のボードゲームである。ルールをまったく知らない初心者葵はザックにもリズにも大敗を喫しており、悔しさが募っていたのだ。そして今まで楽しい娯楽を知らなかっただけに、大いにはまってしまったのだ。しかし葵からの申し出に、クレアは即答することをしなかつ

た。彼女はまず開きっぱなしになっている玄関から空を仰ぎ、それから改めて葵に向き直る。

「お嬢様、明日は学園へ行かれますか？」

「学校？ 休みじゃないよね？」

「休日ではございません。通常通り、登校されますか？」

質問の意図は分からなかったが、葵はクレアに頷くことで問いの答えとした。アルヴァと話をするという目的の他に、明日からは補習が始まるのだ。休むわけにはいかない。

「では、本日はもうお休み下さい」

「え……」

明日に響くから寝ろと言っているクレアの気遣いは理解していたものの、すでに心がゲームに傾いていた葵は不満たつぷりの声を漏らした。その残念がり方が大袈裟だったのか、クレアは仕方がなさそうな表情を浮かべる。彼女の無表情が初めて崩れたことに葵は驚いてしまったのだが、クレアは淡々と言葉を続けた。

「お嬢様がお手隙の時にはいくらでもお相手いたします。ですが本日は、もうお休み下さい」

「あ、うん。分かった」

駄々をこねたい気持ちよりも驚きの方が勝つてしまい、葵は素直に頷くと二階にある寝室へ向かって歩き出した。

(クレアって、あんな表情もするんだ)

まだ付き合いが浅いため、葵はクレアのことをほとんど何も知らない。今のところ融通の利かない堅物という一面ばかりが目につくので葵は彼女に苦手意識を持っていたのだが、本当の彼女はもっと別の性格をしているのかもしれないのだ。使用人として以外の表情をもっと見せて欲しいと思った葵は、避けずに話しかけてみようと思つてクレアを振り返った。

「ありがと。もう、ここでいいよ」

屋敷の中に入ってすぐ魔法で明かりを発生させたクレアは、葵が寝室に着くまで道を照らしてくれていた。そのことに対して礼を言

つた葵は二階の片隅にある寝室へ入ろうとしたのだが、クレアに立ち去る気配がないことに気がついて首を傾げる。葵を追い越して扉を開くと、クレアはそのまま葵の寝室へと歩を進めた。

「お休み前のハーブティーをお淹れいたします。コンバーツに熱中されたのなら、お疲れでしょう？ あのゲームは頭を使いますから」
そう言い置き、クレアは窓際に置かれているテーブルで紅茶の準備を始めた。クレアに促された葵は室内にある別室へと行き、ネグリジエに着替えてからベッドのある部屋へと戻る。その頃には紅茶が入っていて、室内にほのかなハーブの香りが漂っていた。

「ありがと」

ベッドでティーカップを受け取った葵はラベンダーの香りがする紅茶をさっそく口に運んだ。手際良く茶器を片付けたクレアはそれをカートに移し、退室の準備を整えてから葵に向き直る。

「ティーカップはテーブルの上に置いておいて下さい。明朝、片付けますので。それではお嬢様、おやすみなさいませ」

使用人としての務めを果たしたクレアはカートを押して歩き出し、退室の前にも一礼してから葵の寝室を出て行った。葵はゆっくりとハーブティーを味わった後、空になったティーカップをテーブルに置いてから再びベッドへと戻る。紅茶の効果も手伝ってか、目を閉じるとすぐにでも眠りに落ちそうな気配がした。

（明日から補習、かぁ）

トリニスタン魔法学園で授業が行われている間、葵はただ窓辺の席に座っているだけの存在である。授業中に指されたこともなければ、自ら授業に参加したこともない。板書の文字さえも理解出来ない葵にとって、それは仕方のないことだった。しかし明日からは、学園に通う意義自体が変わるはずである。

（これで、魔法が理解出来るようになるといいんだけど）

広いベッドの中で一人寂しくため息をついた葵は、そこで考えを打ち切ることにした。しかし余計なことを考えたせいでせつかくの紅茶が効果を成さなくなってしまうため、気分を変えるためにベ

ツドを抜け出す。デスクに置いてある私物の鞆から携帯電話を取り出した葵は、それを持っていそいそとベッドに戻った。

（加藤大輝の顔見てから寝よう）

そう思った葵は折りたたみ式の携帯電話を開き、ハツとした。充電を出来るだけ長引かせるためにいつもは電源をオフにしているのだが、何故か電源が入っている。いつ切り忘れたのかも分からなかったため、葵は自分の軽率さを呪いたい思いで最愛の芸能人を見つめた。

（……あれ？）

携帯電話のディスプレイに着信ありの表示がされているのを見て、葵は小首を傾げた。履歴を呼び出してみると、電話をかけてきた相手は元の世界の友人である弥也だった。日付は六月三十日、時刻は午後十時となっていたが、元いた世界での日にち感覚が麻痺してしまっている葵には、それがいつかかってきた電話なのかすら分からない。

携帯電話を操作していると電池の残量が三本から二本に減ってしまったので、葵は慌てて電源をオフにした。不在着信に気を取られたせいで待ち受けにしている加藤大輝の顔をちゃんと見ることが出来なかったが、今はもうそんなことを言っている場合ではない。せめて夢の中で会えたらいいなと、葵は電源の入っていない携帯電話を枕の下に敷いて目を閉じた。

新任教師（7）

簡易なベッドが並ぶ保健室に酷似した窓のない部屋で、その部屋の主である金髪の青年は壁際のデスクに腰かけて頬杖をついていた。デスクに横を向く形で長い脚を悠然と組んでいるその青年は、煙草の煙をくゆらせながら周囲に浮かんでいる書面に目を通していている。しばらくそうしていた彼はやがて来訪者の気配に気がつき、その人物が室内に出現する前にさりげなく眼鏡を引き抜いた。

「邪魔をしたか？」

転移魔法によって室内に出現した青年は、その部屋の主である金髪の青年 アルヴァ・アロースミスに目を向けるなり無表情のまま問いを投げかけてきた。しかし往訪相手を気遣うような言葉とは裏腹に、彼はすぐさまスプリングの固いベッドに腰を落ち着ける。明らかに長居をする様子を見せながら邪魔も何もないだろうと思っただアルヴァは小さく息を吐きながら宙を舞っている書類を片付け始めた。

「何をしていた？」

トリニスタン魔法学園アステルダム分校の若き理事長であるロバート・エーメリーは、そのミッドナイトブルーの瞳をアルヴァの手に固定している。内容を見せた方が早いと思っただアルヴァは無造作に、手にしていた書類をロバートの方へ放った。

「例の不幸な少女から聞いた内容をまとめていただけですよ」

アルヴァが手にしていた書類には不幸な少女こと宮島葵から聞き出した異世界の情報が記されており、ロバートは興味深そうに文字を目で追った。彼が一通り書面に目を通す時間を考慮して、アルヴァは少し間を置いてから言葉を次ぐ。

「どうですか、ミヤジマ・アオイは？」

「実にいい。地味なローブに満足せず、自ら若々しさを強調した格好をしているところが特にいいね。好みのタイプだよ」

ロバートの言い草では、若くて肌を露出している少女は全てが好みということになってしまう。それならばいっそ、彼が色気のカケラもないと嘆くトリニスタン魔法学園の制服をミニスカートに替えてしまえばいいのだ。呆れ果てたアルヴアは胸中でそう毒づいたものの、ロバートに伝えてしまえば本当に実行しそうだったため、口に出すことはしなかった。代わりに、アルヴアはまったく別のことを話題に上らせる。

「しかし、貴方がこんな所で教鞭を振るうとはね。驚きですよ」

「こんな所はなかるう。一応、この学園は私のものなのだ」

「失言でしたね。でもレベルが違いすぎるでしょう？」

自身が所有するアステルダム分校で教壇に立ったのは初めてだが、実はロバートが教鞭を振るうこと自体は珍しいことではない。彼はトリニスタン魔法学園の本校を卒業していて、本校の卒業生には後輩の指導をする義務があるからだ。そのためロバートは普段、王都の本校で教壇に立っている身なのである。本校と分校では生徒の質が違いすぎるので、レベルが違うというアルヴアの一言にロバートは苦笑いを浮かべた。

「本校の生徒は何事に対しても貪欲だ。ハングリーいくら分校とはいえ、アステルダムの生徒には向上心がなさすぎるな」

「アステルダム分校は貴方の私財でしょう？」

「これは失言だったな」

ロバートが朗らかに笑い飛ばしたのでアルヴアも苦笑いを浮かべた。理事長がこれでは生徒の気風も自ずと緩やかなものになるだろう。教育的には若干の問題があるが、アルヴアは教育論には興味が強かった。なかつたので苦言を呈することはしなかった。

「それにしても嘆かわしい。低年齢化の流れは止まらぬようだ」

苦笑から一変して苦渋の表情になったロバートが唐突な科白を零したので、意味を汲み取れなかったアルヴアは軽く眉根を寄せた。

「何の話ですか」

「少女達の性育だよ。ざっと見たところ、どの学年の女子生徒も大

半は初体験を済ませているようだ」

「…… たった一日でそこまでチェックしたのですか」

「近頃は夜会でも手馴れた婦女子が多い。処女を探すだけでも一苦労だ」

純潔を守っている乙女こそ最高の獲物だと言って憚らないロバートは深々と嘆きの息を吐いているが、アルヴアは逆に青い果実には興味がない。ロバートが力説していることがどうでもいい話題だったので、アルヴアは少し面倒になりながら適当な言葉を返した。

「さすがに余裕がありますね。不幸な少女がメーソディッシュなら、他の女生徒はサイドディッシュというわけですか」

「いや、自らが理事長を勤める学園で狩りをするのはさすがにまずい」

「真面目に受け取らないで下さい。ただのジョークです」

「解っているぞ」

口ではそう言いつつも、ロバートが本当に解っているかどうかは定かではない。現に彼は、自らがアステルダム分校の理事長だということを生徒に明かしていないのである。身分を隠し、ただの教師としての振る舞いをしているのは、実は隙あらば狩りをしようと思っっているからではないのか。そう疑っているアルヴアにはロバートの返答自体が胡散臭くて仕方がなかった。

「そういえば、アル。レイチエルとは会っているのか？」

ロバートが不意に姉の名を持ち出してきたため、それまで適当に話を合わせていたアルヴアは真顔に戻って閉口した。アルヴアが即答しなかったため、ロバートはじっと彼を見つめている。だから昔の知り合いには会いたくないのだと、アルヴアは小さくため息を吐いてから返答を口にした。

「この間、会いましたよ」

「そうか。今度会ったら、たまには本校にも顔を出せと伝えておいてくれ。君の姉君は教授達にも生徒にも大人気だ」

「……覚えていたらな」

口調を崩したアルヴアは気怠く髪を掻き上げ、デスクの引き出しから取り出した新たな煙草に火をつけた。口では覚えていたらと返事をしたものの、アルヴアには最初から『覚えておく気』などない。それはロバートにもすぐ伝わったようで、彼は仕方がなさそうに苦笑いを浮かべている。早くレイチエルの話から離れたかったアルヴアは自分から新たな話題を振ることにした。

「一つ言っておくが、ミヤジマIIアオイは他人の魔力を借りなければ魔法が使えない。そんな状態でどうやって補習なんかするつもりだ？」

「何だ、見ていたのか」

「ウサギの前で堂々と話をしていて、何だも何もないだろう」

「ああ、そういえばあのウサギは君の代理なのだったな」

「僕に聞かせたくない話は保健室以外の場所でもらいたいものだね。君があまりにもっともらしいことを言っていたから、思わず笑いそうになってしまったよ」

「持てる知識を生徒に教授するのが教師の使命、か？ 間違っではないだろう」

「そうだね。でも君が口になるとひどく滑稽だよ、ロバート」

アルヴアの口調が急に刺々しいものに変わったため、ロバートは弱ったような笑みを浮かべた。ロバートの笑みを見たアルヴアは熱すぎたことを察し、口調や態度から皮肉を拭う。

「まあ、好きにするといいいよ。彼女の成長は僕も望むところだから焦らずにやるさ。なにしろ相手は異世界からやって来た稀有な少女だ。長く手元に置いておきたいからな」

そこで話を切り上げたロバートは腰を上げるとすぐに転移の呪文を唱えた。新たな煙草に火をつけようとしたところで動きを止めていたアルヴアは指の間から煙草が滑り落ちたことに気付き、ハツとしてそれを受け止める。取り落とさなかったことにホッとした後、アルヴアは改めて眉根を寄せた。

（単に処女の血を求めていたわけではなかったのか）

ロバートが邪魔をするなど言った時、アルヴァはまた悪い癖が出たのだと思った。彼の悪い癖とは、一夜限りの関係を求めて様々な女性を渡り歩くことである。彼は基本的に、一度寝所を共にした女性とは二度と男女の仲にはならない。その彼が未永く傍に置いておきたいなどと言い出したのは、アルヴァが知る限りでは今回が初めてのことだった。

(……まあ、いいか)

ロバートが葵をもらってくれると言うのであれば、それはそれで都合がいい。そうした結論に達したアルヴァは思考することを放棄し、火をつけた煙草の煙をゆっくりと吸い込んだのだった。

白昼の悪夢（1）

夏^{かげつ}月期中盤の月である橙^{とうきゆう}黄の月の二日、丘の上に建つトリニスタ魔法学園アステルダム分校ではその朝も通常通りの登校風景が繰り返されていた。二月が浮かぶこの世界には時を計るものが存在しないのだが、生徒達は学園から届けられる鐘の音によって始業を知ることが出来る。だが実際に、学園の敷地内のどこかで鐘が鳴らされているのかと言えば、それは定かではない。アステルダム分校には鐘塔がなく、始業や終業を報せる鐘の音がどこから届けられているのかは誰も知らないことだからだ。

予鈴と共に学園へと集まってくる白いローブ姿の生徒達は正門付近に描かれている魔法陣に出現し、そこから東にある校舎を目指す。校舎に入った生徒達はエントランスホールで分かれて、それぞれの教室へと向かっていくのだ。そして始業の鐘と共に教師がやって来るのを待つわけなのだが、この日、校舎二階にある二年A一組の教室では朝からちよつとした騒動があった。

開きつぱなしになっていた教室の扉から私服姿の少年が顔を覗かせると、教室内で思い思いに歓談していた二年A一組の生徒達は総立ちになった。女子生徒からは黄色い声上がり、男子生徒からは貴人を迎えるような緊張した雰囲気伝わってくる。しかし過剰な歓迎を受けた茶髪の少年は彼らの様子を気にすることもなく、つまらなさそうに背後を振り返った。

「いない。アオイ、まだ来てないみたいだな」

茶髪の少年が話しかけたのは二年A一組の生徒ではなく、連れ立ってこの場所へとやって来た赤髪の少年だった。茶髪で長身の少年は名をオリヴァー・バベツジといい、彼の後ろにいる赤髪で華奢な体軀をしている少年はウィル・ヴィンスという。彼らはトリニスタ魔法学園が誇るエリート集団マジスターの一員であり、この学園に通う女生徒にとっては高嶺の花だった。

「もうすぐ授業が始まるんでしょ？」

生徒の枠組みに囚われないマジスターには一般の生徒の日常が分からない。ウィルが手近にいた男子生徒に声をかけると、問われた男子生徒は可哀想なほど緊張した面持ちで「はい」とだけ答えた。もう用は済んだとばかりに男子生徒から視線を外したウィルは「ありがとう」の一言もなく、隣にいるオリヴァーを仰ぐ。

「今日は来ないのかもね」

「どうする？ 出直すか？」

「それも面倒だから招待状を置いていこう」

オリヴァーに応えた後、ウィルは二年A一組の教室に進入して行った。オリヴァーも後に続いたため、二年A一組の教室には自然と花道が作られる。教室の中央まで来たところでウィルが不意に足を止めたため、彼の後に従っていただけのオリヴァーも同時に足を止めた。

「アオイの席はどこ？」

ウィルが不特定の生徒に向けて問いかけると、二年A一組の女生徒達は先を争うように窓際の席を指し示した。問いの答えを得たウィルはやはり礼の一言もなく、取り巻きを完全に無視しきって目的の場所へと向かう。ウィルよりワントンポ遅れて目的地に辿り着いたオリヴァーは、彼がペンを取り出したのを見て小首を傾げた。

「何するんだ？」

「こうして書いておけば、嫌でも目につくでしょ」

呪文を唱えることなく簡易な魔法を発動させたウィルは光を放つペン先を葵の机に押し付け、直に文字を書き込んでいった。アルファベットの筆記体に似て非なるこの世界の文字が書き連ねられ、葵の机にはメッセージが刻まれていく。大して長くもないメッセージを書き終えたところでペンをしまったウィルは、机から顔を上げてオリヴァーを振り返った。

「行こうか」

「これじゃ果たし状だろ。せめて名前くらい付け足しておこうぜ」

葵の机に目を落として呆れた顔をしたオリヴァーは短く呪文を唱え、何かの魔法を発動させる。するとオリヴァーの指先が光を纏い始めた。彼はその人差し指で、ウィルが書いたメッセージの下方に自らの名を刻んでいく。そうして『署名』が終わったところで、今度こそ二人は踵を返した。

二年A一組の女生徒達はマジスターの後を追って廊下へと姿を消したが、教室に残った男子生徒達は興味を覗かせながら葵の机に集まっていった。彼らが目にしたメッセージは『放課後、シエル・ガーデン大空の庭にて待つ』というものである。マジスターから葵宛てのメッセージを一読した二年A一組の男子生徒達は、一様に不可解そうな表情をしながらお互いに顔を見合わせた。

学園の敷地内にはマジスター専用の場所が幾つかあり、シエルガーデンも一般の生徒の入場が制限されている場所の一つである。ここはパーティーなどが開催される時は特別に解放されることもあるのだが、何も無い平日に一般の生徒が招待されるなどということはまずない。ウィルやオリヴァーがわざわざ出向いてきたことも、葵がマジスターに特別視されていることを如実に物語っている。二年A一組の男子生徒達は、そうしたマジスターの行動に驚いているのだった。

「アオイさんって何者？」

誰もが感じていた疑問を一人の男子生徒が口にしたが、その答えはどこからも返ってこなかった。

その日、メイドのクレア・ブルームフィールドにトリニスタン魔法学園の裏門付近に描かれている魔法陣へと送ってもらった宮島葵

は正門から校舎へと向かう生徒の流れが一段落してからエントランスホールに向かった。人気のなくなったエントランスホールを抜けた後、彼女がまず足を向けたのが一階の北辺にある保健室である。その目的はこの学園の校医であるアルヴァ・アロースミスに会うことだったのだが、この朝も保健室の扉にかけられている鍵は開くことがなかった。

（まだ戻って来てないんだ）

開かない扉の前で失望のため息をついた葵は校内に本鈴が鳴り響いたのを機に、二階にある自分の教室へと急ぐことにした。すでに廊下には人がなく、もう授業が始まっているクラスもあるようだ。葵の所属する二年A組も彼女が到着した時にはすでに授業が始まっていて、担任教師であるロバート・エーメリーが教壇に立っていた。

「遅刻だな、ミヤジマ・アオイ」

「すみません」

遅刻したことで教室中の注目を集めてしまったため、葵はロバートに謝るとそそくさと窓際の自席へ向かった。イスを引いて腰を落ち着けたところである変化に気がついて、葵は机の上を注視する。そこには、昨日までなかったはずの文字が描かれていた。

（何だろ、これ）

机の中央に何やら文字が描かれているのだが、如何せん、葵はこの世界の文字に不慣れである。そのため内容を読み取ることは出来なかったのだが、それが何かの魔法であることはすぐに察することが出来た。机の表面に浮いている文字が、淡い光を放っていたからである。

知らぬ間に記されていた魔法文字に、葵は気味の悪さを感じた。しかしそれをどうこうするより先に、視線を感じたような気がした葵は机から目を上げてみる。すると何故か教室中の視線がこちらに向いており、クラスメイト達が葵の動向を窺っていた。

「どうした？」

前方の席に座っている生徒までもが振り向いて葵を見ていたので、教壇に立っていたロバートが近寄って来た。彼は葵の席の脇で立ち止まると、机の中央に描かれている魔法文字に目を落とす。文面を流し読んだらしいロバートはすぐに目を上げ、今度は葵の顔に視線を据えた。

「学園の備品に魔法をかけるのは感心しないな」

葵ではなく、この文字を描いた誰かを咎めるような独白を零した後、ロバートは机の上を手で払った。魔法文字は机に彫られているような代物ではないので、ロバートの一動で窓の外へと飛んで行く。葵には特にお咎めもなく、ロバートは何事もなかったかのように教壇へ戻って行った。

（結局、何だったんだろう）

生徒達の関心もすでに葵から離れていて、クラスメート達は一樣にブラックボードを注視している。何が書いてあったのか気になるところだが誰かに尋ねるわけにもいかず、葵は気持ちの悪さを残したまま魔法書を開いた。

けてもクラスメート達は追いかけてきた。

(……まだ付いてくる)

横目で後方の安全を確認した葵はさらなる不安を募らせ、魔法陣で足を止めることなく裏門をくぐった。本当は裏門の辺りでクレアに迎えに来てもらおうと思っていたのだが、こつも監視されていては呼び出し辛い。クラスメート達は裏門で足を止め、それ以上追ってくるようなことはなかったのだが、徒歩で帰ることに決めた葵は少し歩調を緩めながらも歩き続けた。

(はあ、気持ち悪かった)

今回のことは別格にしても、近頃は気持ちの悪い出来事が多いようだがする。そんなことを思った葵はすぐにその理由を察し、眉根を寄せて空を仰いだ。解消されない疑問ばかりが積み重なっていきの偏にアルヴアが不在のせいである。葵がこの世界に召喚されてからすでに三ヶ月ほどの月日が経過しているが、未だにこの世界のことをあまり理解していないため、アルヴアに聞かなければほとんど何も分からない状態だからだ。

(いつ帰ってくるんだろう、アル)

顔を合わせれば衝突ばかりだが、アルヴアがいなければ身が持たない。全ての事情を把握している彼がものすごく貴重な存在なのだと、今さらながらに実感した葵は重いため息をつきつつ真夏の帰り道を辿った。

炎天の下、三十分ほどかけて帰路を辿った葵は屋敷に着いた頃には汗だくになっていた。すぐにでも風呂に入りたいと思った葵は急ぎ足でエントランスを抜け、一階の片隅にあるバスルームへと歩を進める。しかしバスルームへ辿り着く前に窓の外にクレアの姿を認めたため、葵は慌てて踵を返した。クレアには迎えに来てもらうことになっていたので、もう帰宅したということ告げた方がいいと、彼女は思ったのだ。

バスルームへと続く廊下には外へ出られるような扉は設けられていないため、一度エントランスホールに戻った葵は玄関から外へ出

た。そして先程クレアが歩いていて、屋敷の西北へと向かう。だが建物の陰から出ようとしたところで何かが目前を通過していったため、驚いた葵は数歩後ずさった。

「お嬢様」

険しい表情をして建物の陰から現れたクレアは葵の姿を認めると目を見開いた。葵もまた、クレアのただらなぬ様相に目を丸くする。「ど、どうしたの？」

クレアの手には陽光を反射して煌く、薙刀のような柄の長い武器が握られていた。それを突きつけられていたことよりもクレアがそのような武器を手にしていることに驚いた葵は、思わず問いを投げかけたのである。クレアはばつが悪そうな表情になりながら切っ先を下方へ向け、そのまま葵に頭を下げた。

「申し訳ございませんでした」

「当たってないから大丈夫。それより、何かあったの？」

葵が頭を上げるよう促すと、クレアは渋い表情のまま問いの答えを口にした。

「お嬢様が徒歩でお帰りになられるとは思わなかったので、侵入者と勘違いしてしまいました」

「侵入者って……」

クレアの物言いが大袈裟だったので葵は呆れてしまった。玄関や窓に鍵をかける習慣のない世界で、侵入者も何もないだろう。バスルームの見張りにしてもそうだが、どうもクレアは防犯意識が過剰なようだ。

「そんなに警戒しなくても大丈夫だよ」

盗られるような物もないし、という一言は胸中で留め、葵はクレアを優しく諭した。葵の反応にクレアは微かに眉根を寄せたが、特に反論はないようである。クレアが口を開かなかったので、葵は言葉を重ねた。

「お風呂に入りたいんだけど、お願い出来る？」

「……かしこまりました。すぐにバスの用意をいたします」

平素の無表情に戻って一礼したクレアは、葵にそう言い置くと薙刀のような武器を両手で持ち上げた。彼女が「ルベール」という呪文を唱えると、クレアの手を離れて宙に浮いた武器が光を帯び始める。それは少しずつ形を変え、最終的にはワニに似た生物の姿となつてクレアの両腕に抱えられた。クレアのパートナーであるマトが指定席である彼女の肩口に収まるのを見届けてから、葵は驚きの声を発した。

「それ、マトだったんだ？」

「魔法生物には変態^{メタモルフォーゼ}という能力が備わっていますから」

「へへ、マトって魔法生物だったんだ？」

葵はあたかも『魔法生物』というものを知っているかのような物言いをしたが、実際には「普通の生物と少し違う」ということくらいしか理解していない。それもどこがどう違うのかを知識として理解しているのではなく、何となく感覚的に違うのだからと思うている程度である。葵がそんな風に何となく魔法生物というものを受け入れたのはファンタジー小説や漫画の中で、そういった普通とは少し違う生物が描かれているのを見てきたからだだった。

魔法が当たり前前に存在するこの世界の生まれではない葵の感覚は、仕方のないことながらこの世界の一般常識からズレている。そのためクレアは葵の反応を奇妙と受け取ったらしく、またわずかに眉をひそめている。しかし何かを言うことはせずに、クレアは葵を促して歩き出した。

エントランスホールでクレアと別れた葵は一度、二階の片隅にある寢室へと戻ることにした。しばらくするとクレアが呼びに来たので、寢室を後にした葵はバスルームへと向かう。着替えは動きやすい格好でとクレアに釘を刺してから、葵は一人で入浴を愉しんだ。

温めのお湯で汗を流した後、脱衣所へ戻るとドレスではない着替えが置かれていた。用意されていたのはゆつたりとしたシルエットのワンピースである。デザインが可愛かったため、ワンピースに袖を通した葵は普段は覗かない脱衣所の鏡に自分の姿を映してみるこ

とにした。

(髪、伸びたな)

一時期は不本意ながらも短くしていたのだが、現在はショートボブくらいまでに伸びている。生まれ育った世界で施したカラーリングは跡形もなく消え失せていて、葵に時の流れを実感させた。

(三ヶ月、か)

長いような短いような期間の間には色々なことがあった。そして葵が元の世界へ帰ることの出来る方法は、未だに見付かっていない。アルヴアに会ったらそちらも急かしてもらおうと思ひ、葵は鏡の前から離れた。

「もう上がられたのですか」

脱衣所を出た所の廊下で待ち構えていたクレアが驚いた表情で迎えてくれたので、葵は曖昧な笑みを浮かべながら彼女の横を通り過ぎた。葵がそのまま寝室へと向かうと、クレアも少し距離を保ちながら同行する。けつきよく寝室まで着いて来たクレアは葵をイスへ座らせると、洗い髪をセットすると言ひ出したのだった。

二月の浮かぶこの世界にも、ドライヤーというものは存在する。ただ葵が元いた世界で使っていた物のように電気で動く代物ではないので、この世界のドライヤーはコードを必要としない。そのためクレアは自在にドライヤーを操っており、鏡越しにその様子を見ていた葵は美容室みたいだと思った。

「本日はお出掛けになられますか?」

作業を続けながらクレアが話しかけてきたので、葵は少し考えを巡らせた。気がかりなことといえば初日からすっぱかしてしまつた補習が思い浮かぶが、さすがにロボトも待つていないだろう。明日謝ろうと思つた葵は、もう今日は外出しない旨をクレアに伝えた。「では本日は、わたくしがゲームのお相手をさせていただいてもよろしいでしょうか?」

「あ、そうだった! やろうやろう!」

ゲームと聞いて浮かれた葵は振り向こうとしてクレアに制された。

早く遊びたい衝動に駆られながらも居住まいを直した葵は大人しく髪が乾くのを待つ。だが心はずでに浮き足立っていて、喋らずにいられなくなった葵は自分からクレアに話を振った。

「今度、お菓子の作り方教えてくれない？」

「お嬢様が料理をされるのですか？」

「この前、夕食をご馳走になったから。何かお返ししたいなと思って」

「そういうことでしたら、わたくしがギフト品を見繕って参りますが」

「そんな大袈裟にしないでいいの。こういうのは気持ちだから」

「……かしこまりました」

まだ訝しそうな調子を残しつつも、クレアはそこで話を終わらせただ。じつとしていられなくなった葵はどうせ今日は外出しないのだからと、セットが完了する前にクレアの手から抜け出す。もういいという葵の意思を受けて、クレアもドライヤーを手放した。

「お嬢様」

ゲームに使うボードを用意するために一度部屋を出て行くつもりでいたクレアがふと、何かを思い出したかのように葵を振り返った。不意に視線を向けられた葵は首を傾げながら応える。

「何？」

「これに見覚えがございますか？」

クレアがエプロンのポケットから取り出したのは折りたたみ式の携帯電話だった。この世界には電話自体が存在しないので、彼女が手にしている物はまず間違いなく葵の私物である。驚いた葵はイスから立ち上がり、クレアの傍へ寄って携帯電話を受け取った。

「どこにあったの？」

「ベッドシーツを交換した際に拾いました」

思い当たる節があったので、葵は苦笑しながらクレアにお礼を言った。加藤大輝の夢を見たいと枕の下に忍ばせておきながら、そんな夢は見る事が出来なかったのですっかり忘れていたのだ。葵に

一礼した後、クレアは今度こそ部屋を出て行く。手元に視線を落とした葵はこれを失くしたらシャレにならないと思い、デスクの脇に置いてある私物の鞆にしっかりと携帯電話をしまいこんだ。

白昼の悪夢（3）

夏月期中盤の月である橙黄の月の三日、丘の上に建つトリニスタン魔法学園アステルダム分校ではその朝も通常通りの登校風景が繰り返されていた。予鈴と共に学園へと集まってくる白いローブ姿の生徒達は正門付近に描かれている魔法陣に次々と出現し、そこから東にある校舎を目指す。校舎に入った生徒達はエントランスホールで分かれて、それぞれの教室へと向かっていくのだ。そして始業の鐘と共に教師がやって来るのを待つわけのだが、この日、校舎二階にある二年A一組の教室ではまたしてもちよつとした騒動があった。

「アオイ、いるか？」

開かれていた扉からひよいと顔を覗かせたのはオリヴァーである。彼に続いてウイルまでもが姿を現したため、二年A一組の教室は昨日に引き続いて騒然となった。しかし、彼らが訪ねてきた人物の席は空白。教室内に声をかけながら姿を現したオリヴァーは困ったような顔をウイルに向けた。

「今日もないみたいだな」

「見れば分かるよ」

オリヴァーにすぎなく返事をしたウイルは顎に手を当て、唇を結んだ。その姿は何事かを考えているようである。だが彼らから会話が途絶えて間もなく、一人の女生徒が二人に声をかけてきた。

「ミヤジマアアオイさんでしたら昨日、オリヴァー様とウイル様が記されたメッセージをお読みになっていましたわ。けれどもあの方、昨日はすぐにお帰りになったようです」

トリニスタン魔法学園に通う者にとって、マジスターの言葉は命令に近い。しかし葵は彼らの誘いを意図的に無視したのだ。オリヴァーとウイルにそう進言することで葵を貶めようとしたのは、二年A一組の女子を仕切っているココという少女だった。ココの差し出

口を聞き、オリヴァーが微かに眉根を寄せる。ウィルは無表情のままココを一瞥し、それからオリヴァーを見上げた。

「それなら、今度は直接誘おうか」

「アオイが来るまでここで待っていつのか？」

「呼んできてもらえばいいよ」

オリヴァーに含み笑いを見せたウィルは、そのままの表情を二年A一組の生徒達に向けた。

「僕達はここで待つてるから、アオイを連れて来てくれる？　彼女を連れて来てくれた人には何か、サービスするよ」

ウィルが発したこの一言には絶大な効力があり、二年A一組の生徒達は先を争うようにして教室を出て行った。嵐が去った後には人っ子一人残っておらず、二年A一組の教室内にはウィルの抑えた笑い声だけが聞こえている。

「単純な連中だね」

可愛い顔をしてサラリと毒を吐くのがウィル。ヴィンスという人物である。付き合いの長いオリヴァーは呆れた顔をしたが彼もまた好奇心に駆られている者の一人であり、葵の身を案ずるような科白は特に口にしなかった。

その日もメイドのクレアにトリニスタン魔法学園の裏門付近に描かれている魔法陣へ送ってもらった葵は、正門から校舎へと向かう生徒の流れが一段落してからエントランスホールに向かった。人気がなくなつたエントランスホールを抜けた後、彼女がまず足向けたのが一階の北辺にある保健室である。その目的はこの学園の校医であるアルヴァに会うことだったのだが、この朝も保健室の扉にか

けられている鍵は開くことがなかった。

(……まだ、かあ)

開かない扉の前で失望のため息をついた葵はこの場は諦めることにして、校舎二階にある二年A一組の教室を目指そうとした。刹那、どこからともなく怒号が聞こえてきたので葵はビクリとして足を止める。唐突に沸き起こった騒ぎは、どうもエントランスホールの方から聞こえてきているようだった。

(何だろう……)

不審に思った葵は、しかしエントランスホールの方に足を向けることはしなかった。触らぬ神に祟りなし、である。

「見つけましたわ!」

校舎の北側にある階段を上ろうとしていた葵は、階上に突如として出現した人物に指を指されてギクリとした。息を切らせながら立ちほだかったのはココで、彼女は獲物を狙うような瞳を葵に向けている。瞬時に「まずい」と直感した葵は急いで踵を返そうとしたのだが、二階部分から飛び降りてきたサリーとシルヴィアにがっちりと両腕を掴まれてしまった。

「ちょ……何すんのよ!」

自由を奪われた葵は抗議の声を上げたのだが、サリーもシルヴィアも聞いていない。

「やっぱりここでしたわね」

「エントランスホールに向かわなくて正解でしたわ」

「さ、参りますわよ」

しまいには階上から降りてきたココまで加わり、葵は訳が分からないまま歩かされることになった。階段を上って二年A一組の前まで辿り着くと、ココ達はピタリと足を止める。連行された形の葵にはびつちりと閉まっている教室の扉が地獄の入口に思えて仕方なかった。

「さあ、他の連中が来る前に参りましょう」

良家の子女という肩書きをすっかり捨て去ったかのようなココの

口ぶりに、しかしシルヴィアとサリーは応じなかった。両腕に別々の思惑を含んだ力が込められて、体を裂かれそうになった葵は悲鳴を上げる。

「痛い痛い!!」

「何してるんですの!？」

シルヴィアとサリーの争いに割って入って来たココは、彼女達を止めるどころか自身も争いに加わった。両腕と胸元を三者三様の力で引っ張られ、痛みと怒りに耐えられなくなった葵は無我夢中で暴れ出す。すると一時は加えられている力が緩んだのだが、その隙をついたシルヴィアが葵の手を引き、二年A一組の扉を開けた。

「連れて参りましたわ!」

はしゃいだ声を上げたシルヴィアに突き飛ばされる形で前に押し出された葵はバランスを崩して机の列に突っ込んだ。とっさに顔は庇ったもののあちこちをぶつけてしまい、葵は痛み悶えながら座り込む。すると頭上から、同情的な男の声が降ってきた。

「大丈夫か、アオイ?」

「大丈夫なわけではないでしょ!!」

憤った葵は勢い良く顔を上げ、そうして目にした人物に対して妙な表情を浮かべた。その理由は、トリニスタン魔法学園に通う者にとって特別な存在であるマジスターが雁首を揃えていたからである。「君が一番だったね。何でもいいから望みを言ってみなよ」

並べた机の上で悠然とくつろいでいるウィルが、葵の背後に佇んでいるシルヴィアに声をかける。状況が呑みこめないまま背後を振り向いた葵はシルヴィアの熱を帯びた表情に出会って絶句した。

「わ、わたくし、ウィル様とデートがしたいですわ!」

「いいよ。僕が空いてる時に連絡するから、用意して待ってなよ」

「は、はい!」

「じゃあ、僕達はアオイに話があるから。出て行ってくれろ?」

大袈裟に何度も頷いたシルヴィアは天にも上る浮かれようで教室の出口へと向かった。その場所ではココとサリーが、廊下に佇んだ

まま恨めしげな表情でシルヴィアを睨みつけている。まるで華を背負っているようなシルヴィアの背中を見送った葵は複雑な思いで眉根を寄せた。

（こんなんでいいの？）

シルヴィアはマジスターの中でも特にウィルを気に入っていた。憧れの彼とのデートが叶ったとはいえ、ウィルにとっては完全に『何かのついで』扱いである。いくらマジスターが高嶺の花とはいえそれはないのではないかと、葵は思ってしまったのだった。

（……別に、どうでもいいか）

シルヴィアには階段から突き落とされたりと、散々な目に遭わせられている。同情する義理もないと思つた葵は怒りの表情を、そのままマジスター達に向けた。

「何なのよ、これ」

「まあ、そう怒るなつて」

「怒るわよ！」

オリヴァーが宥めるのを怒声で一蹴した葵は立ち上がつてスカート裾を払った。どうやら傲慢なのはキリル「エクランド」だけでなく、ウィルやオリヴァーも同じなようだ。そういつた上から押さえつける力に嫌気が差している葵は彼らと話をしたくないと思ひ、踵を返そうとした。だがその気配を察したのか、ウィルがすかさず口を挟んでくる。

「元はと言えばアオイが僕達の誘いを無視したから悪いんだよ」

「何のこと？」

誘われた覚えのなかった葵は眉根を寄せながらウィルに視線を移した。誘われるも何も、彼らとはステラの出立の日以来、顔を合わせてすらいなかったのである。

「昨日、机に書いてあつただろ？ 放課後、シエル・ガーデンにて待つ、つて」

オリヴァーが解説を加えてくれたので、葵にもそこでようやく話が通じた。実際には内容を読み取ることは出来なかったのだが、葵

がマジスターからのメッセージに気が付いていたのは周知の事実であり、彼らは二年A一組の生徒からそのことを聞いたらしい。これでは誘いを無視したと思われても仕方がなかった。

(しょうがないじゃん、読めないんだから)

胸中で反論した内容を口に出すことは出来ないのに、葵は不本意ながらオリヴァーとウィルに謝ることにした。葵が下手に出たことにより、ウィルとオリヴァーも表情を緩める。そして改めて、彼らは葵をシエル・ガーデンへと誘ったのだった。

「今日はちよつと……」

言葉を濁した葵の本音は「マジスターとは関わりたくない」だった。そう思う最大の要因は猫をかぶっていないくともマジスターと関わりさえしなければ、周囲が放っておいてくれるからである。ならばステラもいない今、彼らと親しくすることもない。葵はそう考えて暗に誘いを断つたのだが、葵の迷惑など顧みないマジスター達は気にせず次なる提案を持ちかけた。

「明日は？」

「明日もちよつと……」

「明後日は？」

「明後日も用事があるから」

「それなら今にしようか」

オリヴァーと葵のやりとりに痺れを切らせたのか、ウィルが口を挟むのと同時に葵の手を取った。そして問答無用で、転移の魔法を唱え出す。予め定めておいた特定の魔法陣に転移する「アン・ルヴィヤン」の呪文はひどく短く、葵達の姿は瞬きをする間に教室内から失われた。

二年A一組の教室が無人になって間もなく、廊下に女生徒の嬌声が沸き起こった。初めは遠くの方で聞こえていた甲高い声は音量を増しながら二年A一組の教室へと近付いて来る。やがて、大歓声と共に二年A一組の扉が荒々しく開かれた。廊下から大股で進入してきたのは黒髪に黒い瞳という容貌をした私服の少年で、彼は空の教

室を目の当たりにすると忌々しそつに舌打ちをする。

「いねえじゃねーか」

さも不機嫌な顔で独白を零した少年の名は、キリル「エクランド。彼もウィルやオリヴァーと同じく、トリニスタン魔法学園アステルダム分校のマジスターである。誰かを探していたらしいキリルは苛立たしげに半開きの扉を足蹴にし、すぐに二年A一組の教室から立ち去ったのだつた。

白昼の悪夢（4）

全面がガラス張りのドームでは夏の日差しが燦々と降り注いでいて、一面に咲き誇る色とりどりの花が目にも美しかった。季節を問わず様々な花が咲いているこの庭には名前がついていて、その名を『シエル・ガーデン大空の庭』という。マジスターの領域であるこの庭に無理矢理連れて来られた葵は美しい花々に囲まれながら重苦しいため息をついた。「で、何か用？」

一刻も早くこの場を去りたかった葵はさっそく本題を切り出した。しかしオリヴァーとウィルはのりくらりとしたまま、葵をテーブルへとつかせる。ゆっくりと花を愛でるための場所で茶器に紅茶を淹れさせてから、ようやくウィルが葵の問いに対する答えを口にした。

「ステラとハルが王都に行ってから、ろくに顔も見えていなかったからね。たまにはアオイと、ゆっくり話をしようかと思って」「話って……何の？」

葵は一時、キリル「エクランドを除いたマジスター達と頻繁に行動を共にしていた。しかし改めて話と言われると、まったく話題が浮かんでこない。そもそも彼らが、唐突に話がしたいなどと言い出すこと自体が不穏である。言い知れぬ不可解さを抱いた葵がしかめっ面をしていると、ウィルが紅茶を一口含んでから言葉を続けた。「ステラやハルがいなくなっただけから、どうも退屈だね。何か面白いことない？」

身構えた後だけに真意はそんなことかと、拍子抜けした葵はがっくりと肩を落とした。

「知らないよ、そんなの」

それしきの用事のために、いちいち騒ぎを起こされたのでは身が持たない。そう思った葵はこの機会にしっかりと釘を刺してみたのだが、ウィルは納得していない様子で言葉を次いだ。

「それはアオイが僕らの知らない魔法を使っているからだよ」

魔力を完全に隠されてしまっただけでも骨が折れると、ウィルは言う。彼の言っている内容にまったく身に覚えがなかった葵は首を傾げたが、やがてある事実思い至って一人で納得した。

（そっか、指輪の魔力が切れてるからだ）

魔力は通常、十人十色の色彩と形状でもって所有者の周囲を漂っているもののだが、この世界の生まれではない葵にはそもそも魔力というものがない。以前は指輪の力を使って魔力を有しているように装っていたのだが、現在は指輪に蓄えられていた魔力が空になっってしまったために魔法が発動していないのだ。その状態がウィル達の目には『魔力を隠す魔法を使っている』という風に映るらしい。

（魔法が使えないなんて思ってもないんだろうなあ）

貴族ではないザックやリズでさえ軽々と魔法を使っているのだから、トリニスタン魔法学園のエリートであるマジスターにはそのような発想自体がないのだろう。魔力の件について突っ込まれると厄介なので、葵は『面白いこと』について話を膨らませることにした。

「コンバーツってゲーム、知ってる？」

「そりゃ知ってるだろ」

オリヴァーが『何を今さら』という表情で答えたので、おそらくコンバーツはポピュラーなゲームの一つなのだろう。コンバーツについて説明しなくとも話が通じることが分かったので、葵は今そのゲームにはまっていることだけを打ち明けた。

「対戦する？」

話の流れでウィルがそんなことを言い出したので、葵は慌てて首を振る。

「いいよ。まだ始めたばかりで強くないから」

「ふっん、最近やり始めたんだ？」

「そう。だからまだ全然勝てないの」

「他のボードゲームは？　ダイスとか、アブストラクトゲームとかはやらないのか？」

オリヴァーの口から未知なるゲーム名が飛び出したので葵は身を乗り出しかけたが、なんとか行動に出る前に自制した。ダイスやアブストラクトゲームがどのようなものなのか知りたい気持ちはあるのだが、それがポピュラーなゲームなのであれば彼らに質問するのはまずい。

(……クレアにでも聞こう)

疼き出したゲームへの熱意が顔を覗かせてしまう前に閉口した葵は、そうして自分の中で話を終わらせた。しかしオリヴァーとウィルは、なおもゲームの話が続ける。

「そういえば、冬^{とっ}月期にアオイとやった遊びは面白かったよな」

「ああ……確か、ユキガッセン、だったっけ？」

ウィルが同意を求めるように視線を傾けてきたので、一瞬ドキリとした葵は平静を装いながら頷いた。葵にしてみればあまり触れられたくない話題だったのだが、ウィルとオリヴァーは雪合戦の話で盛り上がっている。

「あれは雪のある冬月期じゃないと出来ない遊びだろ？　だったら、夏月期じゃないと出来ない遊びもあるんじゃないか？」

「アオイ、夏期限定の遊びは何？」

「な、何で私に聞くの？」

それまで聞き役に徹していた葵はウィルから不意に話題を振られたので吃ってしまった。しかし問いかけてきたウィルに大意はなかったらしい。ウィルやオリヴァーは雪合戦という遊びを葵から教えられたので、他にも自分達が知らない遊びを葵が知っているのではないかと思っただけのようだ。

「夏といえば海じゃない？」

プールという考えも浮かんでいたのだが、この世界にそれが存在するかどうか分からなかったので、葵はとりあえず無難な答えを口にした。だがそれでも、葵の返答を聞いたウィルとオリヴァーは顔

を見合わせる。

「海に行つて何するんだ？」

「何つて……泳いだりとか、スイカ割つたりとか」

「すいか？」

オリヴァーが問い返してきたので、葵は瞬間的にまずいことを口走つたのだと察した。焦つた葵はスイカというものが食べ物だということだけ簡単に説明し、そそくさと席を立つ。

「そろそろ教室に戻らないと。じゃ」

席を立つ気配のないウィルとオリヴァーに軽く手を振り、葵は花々の間に作られた通路を歩き出した。シエル・ガーデンには扉のような入り口はなく、ドームの片隅に転移用の魔法陣が描かれているのみである。マジスター達はこの魔法陣を使ってシエル・ガーデンに出入りしているのだが、今の葵には転移魔法が使えないため、そこから外へ出ることは出来ない。しかし葵はこのドームに施された秘密を知っているため、途方に暮れることはなかった。花園の中に佇んで周囲を見回した時、全面ガラス張りの建造物であるシエル・ガーデンではどこを向いても青空が見える。そこに通路のようなものを窺うことは出来ないのだが、実はシエル・ガーデンには隠された回廊が存在するのだ。創立祭の夜にその回廊の存在を知つた葵は、そこからの脱出を試みた。

(……暑いなあ)

全面がガラス張りではあっても、シエル・ガーデンの中は適温に保たれている。それがガラスを一枚隔てただけで快適さは失われ、途端に陽炎が立ち上るような暑さに晒されるのだ。日差しの強さに怯んだ葵はいつものように日陰をつくろうとして、魔法書が手元ないことに気がついた。

(あ、あれ?)

とりあえず周囲を窺つた後、葵はどこで魔法書を落としたのかと記憶の糸を辿ることにした。登校して、保健室を訪れた時までは持っていたような気がするので、落としたとすればココ達に連行され

た頃だろう。

（保健室の辺りかな）

あの魔法書をなくしたとなれば、アルヴァに何を言われるか分からない。そう思った葵は炎天の下を歩き出し、早足で校舎の方へと向かった。

白昼の悪夢（5）

「で、今の会話から何か分かったのか？」

葵が立ち去って間もなく、シエル・ガーデンに取り残されたオリヴァーはイスの背もたれに体重を預けながらウィルを見た。ウィルはまだ葵が去って行った方向を眺めていたが、やがてオリヴァーに視線を戻してから問いの答えを口にする。

「とりあえず、アオイが歩いていった方角が気になるかな」

「方角？」

「魔法陣があるの、あっちだろう？」

ウィルが指差した方角は葵が歩き去って行った方角とは正反対だった。転移魔法は通常魔法陣を介して行われるので、教室へ戻ると言っていた葵の発言と行動は矛盾しているのだ。さらに言えば、このシエル・ガーデンから徒歩で外へ出るという選択肢は存在しない。一般の生徒が簡単に立ち入ることが出来ないよう造られたこのドームには、扉のような出入り口は存在しないからである。

「少し散歩してから帰ろうと思った、とか？」

「教室へ戻ると言って慌しくいなくなっただのに？」

「……そんな悠長なことしない、か」

「前に、ハルが言ってたよね。アオイは転移魔法を使わないで、徒歩で登下校してるみたいだって」

「そういえば、そんなこと言ってたっけか」

「そもそも僕達は、アオイが転移魔法を使っているところを見たことがないよね」

ウィルが何を言いたいのか察したオリヴァーはおもむろに瞠目した。しかし次の瞬間には困惑顔になり、オリヴァーは眉根を寄せながらウィルに真意を問う。

「転移魔法が使えない、なんてアリか？」

「でもそう仮定すれば、アオイの不可思議な行動にも説明がつくん

「じゃない？」

「……確かに」

トリニスタン魔法学園は魔法を学ぶ者にとって聖域とも言える名門校である。アステルダムがいくら分校とはいえ、転移魔法も使えない者が入学できたとは考えにくい。葵は中途編入者だが、それでも入学するにあたって試験は行われたはずなのだから。

「ま、使えないんじゃないって使わないっていう考え方もあるけどね」
ウィルの言う通り、時たまではあるのだが、転移魔法を使えるにも関わらずあえて使わないという者も存在する。その理由は歩くことをやめると足腰が弱くなるからという、非常に健康的な発想からきているのだ。だが葵がそうした健康思想の持ち主とは思えず、オリヴァーは渋い顔をした。

「そういうタイプか？」

「どうだろうね。もしかしたら、彼女の持っている魔法書に秘密があるのかもしれないけど」

「魔法書？」

「円陣で囲まれた五芒星ペンタグラムが表紙の、あの魔法書だよ。どこかで見た図形だと思ってただけ、あれ、レイチエルアロースミスの著書だね」

「レイチエルアロースミスって、あのフロックハート家お抱えの魔法士か」

レイチエルアロースミスは、魔法を学ぶ身であれば大抵の者が知っている高名な魔法士である。彼女は爵位を持つ身ではなく、さらには貴族の家柄でもなかったが、トリニスタン魔法学園の本校を卒業するほどの実力を有していた。卒業後は古の魔法に関する研究の第一人者となり、その功績から、王家から認められた魔法使いの称号である『魔法士』を名乗ることを許されたのである。そして近年は、その実力を買われて王家に最も近いフロックハート家に招かれ、彼の家の客員魔法士として名を馳せている。

「ステラがレイチエルアロースミスに心酔してただろう？ それ

で思い出したんだ」

「レイチエル」アロースミスの著書って、簡単には手に入らない代物だよな？」

「執筆数自体が少ないからね。僕はステラに貸してもらって読んだけど、複製出来ないようにコピーガードがかけられていた。あれを外すには不眠不休でやっても五年はかかりそうだよ」

「噂通りの実力者、ってわけか」

執筆数が少なく、かつ複製不可能では、葵の持っている魔法書はそうとうなレア・アイテムである。何が記されているのか興味を持ったオリヴァーは目を輝かせながらウィルに話しかけた。

「中身、見たいな」

「同意感。でも急かすのは良くないよ」

がっついて行動を起こすと、いつかのように失敗する。ウィルがそう言うので、ハリセンで思いきり叩かれた痛みを思い出したオリヴァーは無意識のうちに後頭部をさすった。

「あの手のタイプはその気にさせて、本人が気付かないよう情報を引き出すのが得策だよ」

葵が去ってから淹れなおした紅茶を口に運びながら、ウィルが涼しい表情で言う。なるほどと頷いたオリヴァーも紅茶を口に運んだので、シエル・ガーデンには一時の沈黙が訪れた。

しばらく淹れたての紅茶を愉しんでいたオリヴァーとウィルは、誰かが魔法を使った気配を感じて同時に顔を傾けた。ドームの片隅にある魔法陣に転移してきた者の姿はまだ見えないが、遠方に立ち上っている陽炎のような魔力から誰が侵入してきたのか窺い知ることが出来る。付き合いが長いと魔力からその日の気分まで分かってしまうようになり、怒りのオーラを感じ取ったウィルとオリヴァーは仕方がないといった様子で顔を見合わせた。

「今日も何かに怒ってるみたいだな」

「いつものことじゃない。どうせくだらない理由だよ」

二人がそんな会話をしていると、背中に燃え盛る炎のような魔力

を纏いながら黒髪の少年が姿を現した。世界でも珍しい漆黒の瞳は怒りにギラついていて、鋭い眼差しには他を圧する迫力がある。しかしオリヴァーやウィルにとっては気心の知れた仲間であり、彼らは何ら気にすることなくキリルを迎え入れた。

「どこ行きやがった、あの女」

キリルが大きすぎる独り言を吐き捨てながらどつかりとイスに腰を落ち着けたので、ウィルとオリヴァーは再び顔を見合わせた。独白の内容から察するに、本日の怒りの原因は女性問題のようである。「ステラならもうここにはいないよ」

「誰がステラのことだつて言ったんだよ」

「だつて昔は、ステラも『あの女』呼ばわりだったじゃない」

昔のことを掘り返されるのを嫌ったのか、キリルは乱暴にテーブルを叩いた。ウィルの発言はキリルのそうした性格を踏まえたいものである。からかっただけのウィルはくすくすと笑っている。テーブルが叩かれた拍子に零れてしまった紅茶の片付けは、オリヴァーが仕方なさそうに行つた。

「で、誰を探してるんだ？」

オリヴァーが新しい紅茶を淹れ直しながら問いかけると、キリルはむっつりとしたまま答えを口にした。

「私服でうるちよろしてる、あの女だよ」

「私服の女つて……もしかして、アオイのこと？」

「キル、アオイを探してたのか？」

名前は覚えてねーよと、キリルはぶっきらぼうに言い放つ。しかしそれが葵であることはまず間違いなく、ウィルとオリヴァーはまたしても顔を見合わせた。

「アオイなら、ついさっきまでここにいたけど？」

「……何だつて？」

さらなる不機嫌顔になつたキリルは静かな怒りを漲らせながらオリヴァーを睨みつけた。嫌な予感を覚えたオリヴァーが身を引くより先に、立ち上がったキリルが彼の胸倉を掴み上げる。どうして引

き止めておかなかつたんだと理不尽なことを言われたオリヴァーは
為す術なくキリルに揺さぶられた。

「教室に戻るって言ってたから、今行けば会えるんじゃない？」

オリヴァーが揺さぶられるのを冷静に眺めていたウィルがぼつり
と助言を零すと、キリルはすぐに手を離して魔法陣へ向かって歩き
出した。息苦しさから解放されたオリヴァーが咳き込んでいるのを
横目に、ウィルは涼しい表情で紅茶を口に運ぶ。

「何なんだよ」

嵐のように過ぎ去ったキリルに振り回された形のオリヴァーはイ
スに座りなおしながら悪態をついた。我関せずの態度を貫き通した
ウィルも、オリヴァーが会話出来る状態になつたのを見て口を開く。

「キルが女の尻を追いかけるなんて、ステラ以来だね」

「まさかまた、殴りに行つたんじゃないだろうな」

「もしそうなら明日、アオイを慰めてあげればいいよ」

そのついでに情報を引き出そうと、ウィルは言う。今日はいつに
なく人でなしの発言を連発するとオリヴァーは思ったが、彼も異論
は唱えずに紅茶を口に運んだのだった。

白昼の悪夢（6）

シエル・ガーデンを徒歩で出た後、葵は夏の日差しにうんざりしながら校舎へと戻った。まだどの教室でも授業が行われているようで、エントランスホールには人っ子一人見当たらない。授業が終わって生徒があふれ出す前にさっさと帰ろうと思った葵は、そのまま早足で一階の北辺にある保健室へと向かった。

この世界で言う『魔法』とは、二月が浮かぶ世界に生を受けた者に受け継がれる潜在的な血の力である。故に魔力の強弱はあるものの、この世界の者は誰でも魔法を使うことが出来る。しかし魔法は、超能力で言うところのサイコキネシスのように念じただけでは発動させることが出来ない。どのような魔法であれ、魔法を発動させるには魔法書や魔法陣といった魔法道具マジックアイテムが必要なのである。普通に生活している者はせいぜい指輪リングやネックレスなどを身につけているくらいだが、トリニスタン魔法学園の生徒ともなれば分厚い魔法書を常に持ち歩いている姿が当たり前だ。だから形だけではあっても魔法書を肌身離さず持っている、葵はアルヴァに言い含められているのだった。

（……ない）

保健室前の廊下で足を止めた葵は、見渡す限りチリ一つ落ちていない光景に失望を感じた。魔法書を落としたとすればシルヴィアとサリーに突然両腕を拘束された、この場所くらいしか考えられない。だが落とした場所にないとなれば、校舎を常に美しく保っている魔法道具が掃除してしまったのかもしれない。

（落し物ってどこに取りに行けばいいんだろう）

困ってしまった葵はとりあえず、保健室の中を覗いてみることにした。アルヴァは不在でも、保健室の主であるウサギが何か知っているかもしれないという淡い期待を抱いたからだ。

鍵を使わずに保健室の扉を開くと、そこにはアルヴァの言う『僕

の部屋』と似て非なる光景が広がっている。簡易ベッドが並ぶ保健室風の『アルヴァの部屋』には窓がないのだが、本物の保健室には教室と同じように窓があるのだ。夏の斜光が燦々と差し込む中、白い毛並みをしたウサギは窓際のデスクの上にあった。だが平素とは異なり、葵を迎えたのはウサギだけではなかった。

「ロバート先生」

「授業中に油を売っているのは感心しないな、ミヤジマ」アオイ」
開口一番に教師らしい科白を放った青年は、葵達のクラスの担任であるロバート「エーメリー」である。顔を合わせるなり怒られてしまったため、葵は少し怯みながら後ろ手に扉を閉ざす。しかし葵が謝ろうとすると、ロバートは人好きのする爽やかな笑みを浮かべた。「とはいえ、私もこうして授業中に油を売っているのだから他人のことは言えないな」

ロバートの笑みに癒された葵は安堵の息を吐き、それから改めて頭を下げた。

「すみませんでした。あの、昨日補習をさぼっちゃったことも」

「ああ、気にしなくていい。大体の事情は分かっているから」

マジスターにも困ったものだと思っただけのロバートは、どうやら葵の置かれている状況を理解してくれているようである。今まで理解者らしい理解者もなく、独りで肩身の狭い思いをしていた葵は嬉しさのあまり泣きたくなった。

（いい人だなあ、ロバート先生）

黙って勝手にいなくなる誰かとは大違いである。デスクの上で大人しくしているウサギに目を移しながら葵がそんなことを考えていると、ロバートが言葉を重ねた。

「補習は、君の都合が良い時に行おう。補習を受けられる日は四階の特別教室に来てくれればいい。都合が悪い日は無理をしなくていいから、そのことは心に留めておいてくれ」

「先生……。でも、それじゃ先生がかなり待つことになりませんか？」

「教師は受け持っている生徒が校内にいるかどうかくらい、簡単に知ることが出来る。問題はないさ」

「そうなんですか……」

便利だなあと胸中で呟いた葵は、アルヴアにも似たような手口で監視されていたことを思い出して一人で納得した。便利すぎるのも善し悪しがあると苦笑いをしながら、葵はロバートに視線を移す。

「そういえば先生、この辺りで魔法書を見ませんでしたか？」

「あれのことか？」

ロバートが窓際のデスクの方へ顔を傾けたので、葵もつられてそちらを振り返った。デスクの上ではウサギが、短い両手で抱えるようにして魔法書を持っている。どうやら掲げて見せているらしい魔法書の表紙には円陣で囲まれた五芒星ペンタグラムが描かれていて、葵はホッと胸を撫で下ろした。

「保健室前の廊下に落ちていたのだが、探し物はそれのようだな」

そう声をかけた後、ロバートは葵に魔法書を手放さないよう注意を促した。というのも、魔法書を他人に見られるということとは全ての手の内を明かしてしまうことと同義だからだ。以前、ステラにも同じようなことを言われたなと思い返した葵はロバートの注意を素直に受け止めた。

「ああ、それと、今日の授業が中止になったことを伝えておく」

「えっ、何ですか？」

「私が教室へ行った時、誰もいなかったからだ」

「あ、そ、そうなんですか……」

教室が空だったのはまず間違いなく、マジスターと葵のせいである。不本意ながら騒動に関わっているだけに、葵はロバートに申し訳なさを感じた。そんな葵の胸中を読み取ったかのように、ロバートはその端整な顔に柔らかな笑みを浮かべる。

「困ったことがあれば、いつでも相談に乗ろう」

すれ違いざまに葵の頭にぼんと手を置くと、ロバートはそのまま保健室を出て行った。優しくされることに慣れていない葵は嬉しい

ような困ったような複雑な気分で、とりあえずウサギから魔法書を受け取る。そしてウサギからアルヴァがまだ不在であることを聞き出した後、葵も保健室を後にした。

（ロバート先生、ステキだなあ）

アルヴァは特殊な例として、今まで出会ったトリニスタン魔法学園の教師は葵と関わることを自体を避けていた。そのため何をしても注意を受けることなく、授業中に指されたことすらないのだ。つまり葵は、教師にとって特殊な生徒というわけである。そうした生徒を平等に扱ってくれるロバートは、それだけ教育熱心なのだろう。

マジスターに振り回された後だけに、葵は余計に常識人であるロバートに好意を募らせた。彼の下で、学びたい。そう思った葵は補習に備えて少し家で勉強しようなどと考えながらエントランスホールに足を向ける。しかし緩いカーブが続いている廊下を歩いているうちにあまり顔を合わせたくない人物と遭遇してしまったため、歩みを止めた。

（うわっ、イヤなヤツと目が合っちゃった）

葵がおもむろに顔をしかめた相手は、黒髪に黒い瞳といった容貌をしている私服姿の少年である。マジスターの一人である彼と、葵は相性が悪い。これまでも幾度か謂われの無い暴力を受けている葵は彼に関わりたくなかったため、くるりと踵を返した。その直後、背後で怒声上がる。

「待ちやがれ！！」

静かな廊下に響き渡った大声に驚いた葵は、背後を振り返ってさらに驚いた。キリルが、何故かこちらに向かって走って来るのだ。周囲を見回しても他に誰もいなかったため、葵はとりあえず逃げ出すことにした。

「てめっ、待ってて言っただろ！！」

背中が届く怒声から察するに、やはりキリルが追いかけているのは自分らしい。そう理解した葵はますます止まるわけにはいかなくなり、全速力で廊下を疾走した。

(何で追ってくるの!?)

理由は分からないがキリルは怒っている。彼が怒っているとくれば殴られるという図式が頭の中で出来上がっていたので、葵は恐怖と闘いながら足を動かし続けた。しかし背中から迫り来る怒鳴り声は、少しずつ間近なものへと変わってきている。最終的には肩口を掴まれて力任せに引き倒され、廊下にへたりこんだ葵は魔法書を抱いて縮こまった。

「ムダなことしてんじゃねーよ、うぜえな」

荒い呼吸の合間に葵への文句を吐き出したキリルは走ったせいで滴った汗を無造作に拭っている。彼の口調も表情も不機嫌そのものであり、絶対に殴られると直感した葵は知らずのうちに歯を食いしばった。魔法書を抱いているため胸倉を掴み上げられなかったからなのか、代わりにキリルは葵の髪を乱暴に掴み上げる。恐怖のあまり固く目をつむった葵は次の瞬間、口唇に何かが押し付けられた驚きで可能な限り目を見開いた。

恐怖と驚愕で何が何だか分からなくなってしまった葵は、キリルが離れて行った後もあ然としていることしか出来なかった。開いた口が塞がらない状態の葵をキリルはしばらく眺めていたが、やがて不可解そうに眉根を寄せながら空を仰ぐ。

「……わからねーな」

難しい表情で独白を零したキリルは腕組みをし、呆けている葵を捨て置いてエントランスホールの方へと歩き出した。一人取り残されてからも動くことが出来ずにいた葵は、やがて正気を取り戻して口元を手で覆う。口唇にはまだ、あまりにも突然で不可解すぎるキスの感触がはつきりと残っていた。

(い、意味が分からない……)

どうして自分がこんな目に遭わなければならぬのかと、葵はそればかりを胸中でくり返ししながら立ち上がり、フラフラと廊下を歩き出した。

Love is Game (1)

夏の盛りである橙黄とうりやうの月の四日。その日も夏の夜は穏やかに明け、豪華な飾り窓から差し込む光が大理石の床に複雑な影絵を映し出していた。朝露を浴びた緑に包まれた屋敷は清々しい空気に浸されており、少しだけ開いた窓から吹き込む微風が薄手のカーテンを揺らしている。そんな爽やかな朝、一人用にしては大きすぎるキングサイズのベッドの中で、宮島葵はカツと目を見開いた。

(全然寝られなかった……)

昨夜は別段寝苦しい夜でもなかったのだが幾度となく寝返りを打っているうちに夜が明けてしまい、ついには一睡も出来なかったのだ。目の下に隈をつくった葵は寝不足で朦朧とする頭を押さえ、仕方なく体を起こす。フラフラしているのは頭だけでなく、靴を履いた足までもが前後不覚に陥っていた。体が重いのも頭が働かないのも、全ては一人の少年のせいである。未だ鮮明に焼きついている端正な顔を何とかして打ち消そうと、葵は大きく頭を振った。

(訳わかんない)

何故、好きでもない相手とキスをしなければならなかったのか。しかもセカンドキスの相手は、葵のことを目の敵にしているような奴だったのである。殴られることはあってもキスをされることになるとは、思いもよらなかったのだ。

(……ダメだ、頭痛い)

寝不足も手伝って頭痛がしてきた葵は考えることを放棄し、再びベッドで横になろうと思った。しかしベッドに辿り着く前に朝の挨拶と共にメイドのクレア「ブルームフィールドが姿を現したので、葵はその場で足を止める。

「どうされました、お嬢様？」

葵と目が合うなり顔色が悪いと言い、クレアは微かに眉根を寄せた。葵は濁いた笑みを浮かべながら小さく手を振って見せる。

「寝不足なだけだから。気にしないで」

「左様でございますか。では朝食をお持ちいたしますので、本日はお部屋でお召し上がり下さい」

手際よくモーニングティーを淹れるとテーブルの上にあった昨夜のティーカップを片付け、クレアは部屋を出て行った。普段ならモーニングティーを含みながら身支度をするところなのだが、どうにも体が重かった葵はベッドに腰を落ち着けながら紅茶を口に運ぶ。

(だるい……眠い……)

薫り高い紅茶は体と頭に心地好く、葵を眠りへと誘った。だがウトウトしているうちに熱い紅茶を零しそうになり、一気に目が覚めた葵は慌てて体勢を立て直す。そこへ朝食の乗ったワゴンを押してクレアが姿を現したので、葵はベッドから立ち上がってテーブルにティーカップを置いた。

「お嬢様、本日は学園へ行かれるのですか？」

葵の醜態をしつかり目撃していたクレアは、むしろ『行くな』と言わんばかりの調子で問いかけてきた。もともと学校へ行くことに乗り気ではない葵は、少し考えた末に小さく首を振ってみせる。

「今日はいいや」

「では、本日はゆっくりとお休みください」

窓際のテーブルに朝食の準備を整えると、クレアは「また後で参ります」と言い置いて姿を消した。ネグリジェ姿のまま一人で食卓についた葵はサラダやパンを口に運び、適量な朝食を食べ終えてからナイフとフォークを置く。席を立った葵は私物の鞆から携帯電話を取り出し、ベッドに戻りがてら電源をオンにした。

(……やっぱり好きだなあ、加藤大輝)

携帯電話のディスプレイに表示された黒髪の少年の姿を見るなり、葵は口元をやつかせた。葵が携帯電話の待ち受けにしている少年は名を加藤大輝といい、彼は葵の最も愛する芸能人である。

(今なら寝れるかも)

最愛の人の顔を見たおかげで気分が変わったので、葵は二つ折り

の携帯電話を閉じながらベッドに背中を預けてみた。キングサイズのベッドは極上の柔らかさでもって、横たわる人を眠りへと誘おうとする。しかし瞼をおろした闇の中に突如としてキリル「エクラン」の顔が浮かんできてしまい、葵はカッと開眼した。

(……ダメじゃん。なんか今寝ると、またろくでもない夢みそう) 何か気が紛れるようなことがしたいと思った葵は体を起こしながら考えを巡らせた。寝不足で鈍っている思考はなかなか妙案を生み出してくれなかったが、やがてあることを思いついた葵はベッドを下りる。学園には行かないがいつもの制服に着替え、葵は身支度を整えてから寝室を後にした。

(そういえばクレアって、どこの部屋使ってるんだろう)

住み込みで働いている以上はどこかの空き部屋を私室としているはずだが、葵は彼女のことについてほとんど何も知らなかった。呼び鈴を鳴らせばクレアの方からすぐに来てくれるのだが、いつもそれでは申し訳ない。そう思った葵はだっ広い屋敷の中を、クレアを探してウロウロと歩き回った。

「お嬢様？」

背後から声がかかったので振り向くと、そこには掃除用具を手にしたクレアの姿があった。掃除まで魔法に頼らずやっているのかと驚きながら、葵は元来た廊下を引き返してクレアの傍へ寄る。

「掃除まで魔法使わずにやってるの？」

「魔法では細かな隅にまでは対応出来ませんので、そうした所だけを手作業でやっております。それより、どうされたのですか？」

「あ、そうそう。忙しいところ悪いんだけど、お菓子の作り方教えてくれない？」

以前にも夕食をご馳走になったお返しをしたいという話はしてあったので、葵が料理をしたいと言い出してもクレアは別段驚いたような変化は見せなかった。しかし、彼女は微かに眉根を寄せる。

「それは構いませんが、お休みにならなくてよろしいのですか？」

「ちょっと気晴らししたいなあと思って。それに、今から寝ると夜

に寝られなくなりそうだし」

葵の返事を聞いたクレアは、そういうことならばと頷いた。掃除道具を片付けてくると言うクレアといったん別れて、葵は先に一階の片隅にある調理場へと向かう。調理場は食堂の脇にあるのだが足を踏み入れるのは初めてのことであり、葵は広々とした眺めに驚いてしまった。

(うちのキッチンとすごい違い)

特別裕福でも貧しくもない日本の一般的な家庭に育った葵の家のキッチンは、目を引くほど広くも狭くもなかった。調理道具や茶碗などが所狭しと置かれている葵の家のキッチンが『台所』ならば、ここは厨房さながらの造りである。元いた世界で通っていた学校の家庭科室が一番近い眺めだが、銀細工のナイフやフォークなどが並ぶこの屋敷の厨房はそれよりももう少し気品があった。

「お嬢様、お待たせいたしました」

厨房を見学しているうちにクレアが現れて、葵はまずフリルつきの可愛いエプロンを手渡された。高等学校の制服の上にエプロンを着用した葵はますます調理実習のようだと思い、懐かしさを覚えながら照れ笑いをする。

「よくお似合いですよ」

「あ、ありがと。これ、クレアのエプロン？」

「新品をご用意する暇がなかったものですから。わたくしが普段使っているものですが、シミなどについてはおりませんのでご安心下さい」

そんなの気にしなくていいのにと、葵は苦笑いを零した。葵が微笑んだ理由が分からなかったようでクレアは首を傾げたが、その話題には言及せずに彼女はさっそく本題を口にする。

「何を作りますか？」

「うーん、ケーキがいいかな」

「かしこまりました」

作るものが決まるとクレアは厨房の中を歩き回り、材料や器具な

どを取り出してきた。その様子が勝手知ったる場所という感じだったので、葵は尊敬の念を込めながらてきぱきと動き回るクレアを目で追う。

（そういえばお母さんも、何がどこにあるのかよく知ってたなあ）
台所で探し物をしていると、葵の母親は彼女が見つけれなかったものをすぐに取り出してくるのだ。そんな些細な日常風景を思い返してしまった葵は少し感傷的になりながら調理を開始する。しかし郷愁の気持ちは手作業で作る料理の楽しさの前に薄れていき、葵はいつしかケーキ作りに没頭してしまったのだった。

「こんにちは」

郊外にある屋敷からパンテノン市街へと移動した葵はフィフストリートにある、とある工房の扉を開けながら中に向かって声をかけた。扉を開いてすぐの部屋にはガラス細工の工芸品が並んでいて、販売店のような民家のような微妙な雰囲気を感じ出している。扉を開くなりこちらを向いた少年と目が合ったので、葵は笑みを浮かべながら彼の傍へと寄った。

「いらつしやい」

葵の笑みに笑顔で応えてくれた少年の名はザック。葵と同じ年の彼はこの工房の主である。

「リズは？」

部屋の中にはザックの姿しかなかったため、葵は周囲を見回しながら彼の妹の所在を尋ねた。初めて会った時と同じように地味な色合いのズボンとベストといった出で立ちをしているザックは読んでいた冊子を閉ざしながら答えを口にする。

「学校」

「へ、リズって学校に行ってるんだ？」

学校といえばトリニスタン魔法学園のイメージしかなかった葵は、もしかと同じ学園に通っているのではという期待を抱いた。リズが同じ学園に通っているとすれば、毎日が楽しいものになりそうである。

「リズの通ってる学校ってどこにあるの？」

「市街の外れ。ジャンクストリートの辺りだよ」

「ふうん？」

パンテノン市街に詳しくない葵にはジャンクストリートというのが何なのかさえ分からなかったが、どうやらリズの通っている『学校』はトリニスタン魔法学園とは別物のようである。がっかりした

葵は、ザツクの向かいの席に勝手に腰を落ち着けながら残念さを口にした。

「トリニスタン魔法学園じゃないんだね」

「あそこは爵位を持つ貴族じゃないと入学すら出来ない名門校だよ？ 僕らみたいな庶民が通えるわけじゃないじゃないか」

「あ、そうなんだ」

「アオイはトリニスタン魔法学園に通っているの？」

「えっ、うん。まあ、一応……」

通っているというよりは通わされているといった方が正しいのだが、葵の煮え切らない返事にもザツクは驚いた顔をした。

「貴族なのは知ってたけど、アオイって爵位を持つ家の令嬢なんだ？」

「……そんなんじゃないよ」

貴族という言葉も令嬢も、葵の現実からはかけ離れたものである。自分ですら把握していない肩書きが一人歩きしていくことに疲れを覚えた葵は笑って誤魔化そうとしたのだが、ザツクが不信そうな目をしていたので真顔に戻ってから言葉を重ねた。

「ザツク、私の言ったこと信じてないでしょ？」

「え？ 何のこと？」

「私は貴族じゃないし、シャクイなんてのも関係ないの」

だから普通に接して欲しいのだと、葵は切に訴えた。ザツクはしきりに瞬きをくり返し、それから首を傾げて眉根を寄せる。

「よく分からないけど、何か事情がありそうだね」

「うん、事情があるの。私にもよく分かんないんだけど」

葵が真顔のまま肯定すると、ザツクは何故か吹き出した。おかしそうに笑っている彼はくり返し葵のことを『妙なお嬢様だ』と言っていたが、笑い飛ばしてくれるなら気楽でいいと思い、葵も笑っておいた。

「ザツクは？ 学校行ってないの？」

「経済的に余裕がないんだ。リズをハイスクールへ行かせるだけで

精一杯だよ。それに僕は学校へ行くより、職人としての仕事をした
いからね」

「そっか……」

思いがけず身の上話を聞いた葵はザツクのことを偉いなと思った。
同じ年にもかかわらず彼はちゃんと自立していて、しっかりと妹を
養っているのだ。

「ところで、それは何？」

話が途切れたのを機にザツクが話題を変えたので、葵は目前に置
いた白い小箱に視線を落とす。それから含みを持たせた視線をザ
ツクに向け、葵はニヤリと笑う。

「知りたい？」

「えっ？ なに、その含み笑いは」

「大したものじゃないんだけど、はい」

笑いをおさめた葵はテーブルの上に置かれている箱をザツクの方
へ押し出した。箱を受け取ったザツクは葵が意地悪をしたこともあ
つて、なかなか中身を見ようとしない。そんなに警戒しなくてもと
呆れながら、葵は箱を開けるようザツクを促した。恐る恐る箱を開
けたザツクは、その中身を見るなり目を瞬かせる。葵はサプライズ
をしようと思っていたわけではないので、今度はさっさと贈物の意
図を明かした。

「この前、夕食をごちそうになったじゃない？ そのお礼」

「これ、もしかしてアオイが作ったの？」

「そっだよ。一人で作ったわけじゃなくて、手伝ってもらっちゃっ
たけど」

だから味の方は絶対に大丈夫だと、毎日クレアの手料理を食べて
いる葵は自信を持って言い切った。

「ありがと。すごく、嬉しいよ」

箱の中に納まっているホールケーキから顔を上げたザツクは、本
当に嬉しそうな微笑みを葵に向けた。他人が心の底から笑っている
姿を見るのが久しぶりのような気がした葵は、作って良かったと思

いながら感慨に浸る。

(やっぱり好きだなあ。この雰囲気)

トリニスタン魔法学園には欺瞞や傲慢が溢れているが、ここにはギスギスした空気が微塵もない。ザックやリズから受けるのは人の温かさや飾り気のない素朴さであり、そういった庶民的な雰囲気が疲れた葵の心を優しく癒していくのだ。

「リズが帰ってきたら三人で食べよう。まだしばらくは帰って来ないから、ゲームでもしようか？」

「コンバーツやりたい！」

「今、ボードを用意するよ」

ザックがいそいそとゲームの準備を始めたので、葵もそれを手伝おうと立ち上がる。そうして彼らはリズを待つ間、ゲームをして過ごすことにしたのだった。

「アオイ、起きて！」

誰かの声が降ってくるると同時に体を揺り動かされて、葵はハッと目を覚ました。テーブルに突っ伏して眠っていた葵は上体を起こすと共に反射的に周囲を見回す。しかし求めていた物は発見出来ず、そのうちにそもそも時計自体がこの世界にないことを思い出した葵は苦い気持ちになりながら頭を掻いた。

「もう、アオイってばいつまで寝てるの」

腰に手を当てて仁王立ちになりながら葵を見下ろしていたのは、ザックの妹であるリズだった。まだ頭が現実に戻りきれていなかったため、混乱した葵は眉根を寄せながらリズを見上げる。

「何でリズがいるの？」

「何で、じゃないでしょ。うちの店先で熟睡してたのはアオイじゃない」

「店……」

リズから視線を外してよくよく周囲を見回した葵は、ようやく自分の置かれている状況を思い出した。ここは私室ではなく、ザツクの工房である。

「そつだ、ザツクは？」

「お兄ちゃんなら買物に行つたわよ。今夜はお兄ちゃんが夕食当番だから」

リズの言うように、周囲に目を配ってみても室内にザツクの姿はない。テーブルの上に置かれたやりかけのゲームに目を留めた葵は自己嫌悪に襲われた。昨夜は一睡もしていないのに頭を使ったため、どうやらコンバーツをやっている最中に眠りこけてしまったらしい。「ザツク、怒つてた？」

「ううん。すつごい機嫌良かった」

恐る恐る目を上げた葵はリズの笑顔に出会い、その意味が分からなくて首を傾げた。リズはしたり顔になって葵の正面に腰かけ、両腕で頬杖をつきながら説明を加える。

「アオイ、ケーキ焼いてきてくれたんでしょ？ お兄ちゃん、すつごい喜んでたよ」

「えっ、ああ……そうなの？」

「うん。貴族のお嬢様が手作りのお返しをくれるなんて誰も思わないからね。きつとすごく大変な思いして作つて、それで疲れて寝ちゃつたんだろつて」

ザツクの想像が現実とかけ離れていたのも、まったく別件で眠れなかっただけの葵はリズに苦笑いを返すことしか出来なかった。リズもザツクの想像が正しいとは思っていなかったようだが、彼女は笑みを残したまま話を続ける。

「お兄ちゃんね、今まではあんまり貴族の人にいいイメージ持っていなかったみたいなの。でもアオイは別ね。そう言つてた」

「そうなんだ？ でも、そうだと嬉しいな」

「ほんと!？」

葵は『貴族として見られないのが嬉しい』と言っただけだったのだが、リズは大袈裟なほどに喜んで身を乗り出してきた。彼女の迫力に気圧された葵はイスの上で身を引く。その拍子に肩口に引っかかっていた布がずり落ち、葵は慌ててそれをすくい上げた。

(あれ？ これ……)

手にした布はあまり上等な代物ではなかったものの、薄手の夏掛けだった。リズは一人で『あたしも嬉しい』などと喋っているので、おそらくこれを掛けてくれたのはザックなのだろう。そうしたさりげない優しさが徐々に沁みてきて、葵も一人で感動してしまった。

(優しいなあ、ザック。ほんと、トリニスタン魔法学園の人たちとは大違い)

トリニスタン魔法学園ではそもそも家柄によって優劣が決しているため、生徒同士が対等な人間関係は望めない。そのためザックのように、何の思惑もなく他人に優しくすることなど有り得ないのだ。それでも今は、理解ある担任教師がいるおかげで学園生活が少しはマシなものになった。それにザックとリズという、気を許せる相手もできたのだ。一人で悶々としていた頃に比べればだいぶ環境は良くなったのだと、改めてそう感じた葵は小さな幸せを噛みしめながらリズとの話を続けた。

Love is Game (3)

夏^{かけ}月期中盤の月である橙^{とうきゅう}黄の月の五日、一日自主休暇を挟んで心身ともにリフレッシュした葵は朝からトリニスタン魔法学園に登校した。校舎に入るとすぐ、彼女は橙黄の月に入ってから日課となつてしまった所用を済ませるために一階の北辺にある保健室へと向かう。しかしこの日も目当ての人物には会うことが出来ず、葵はため息をつきながら二階にある自分の教室へと足を向けた。

(一体いつになったら帰つて来るんだろう)

登校後と下校前には必ず保健室を覗くようにしているものの、いつの間にか行方をくらませてしまったアルヴァが戻つて来ている様子はない。アルヴァと何らかの繋がりがあると思われるウサギに尋ねてみても、見当違いな答えが返ってくるだけで詳しい情報は何も得られないのだ。初めはクリアの素性を尋ねることばかり考えてアルヴァを探していたのだが、不在が長引くと別な思いも浮かんでくる。

(私、実はアルのこと何も知らないんだ)

アルヴァニアロスミスという人物はトリニスタン魔法学園アステルダム分校の校医を名乗っているが、それが真実なのかどうかは分からない。それはアルヴァが保健室に酷似した部屋に閉じこもったきりで、生徒の前に姿を見せることがないからである。そのためアステルダム分校の生徒はウサギの方を保健の先生だと思っている様子で、誰もアルヴァのことを知らないのだ。

(先生に聞けば分かるのかな?)

職員的事情は職員に訊いた方が早いのもかもしれない。そう思い始めた葵は誰か質問の出来る人物はいないかと考え、新任の担任教師を脳裏に浮かべた。ロバートはまだこの学園へ来て日が浅いため、もしかしたら何も知らないかもしれない。それでも他に頼れる者のいなかっただ葵は聞くだけ聞いてみようという結論に達し、そこで思

考を切り替えて教室の扉を開けた。

まだ授業が始まる前の教室は生徒達の歓談の声に溢れていたのだが、それは葵が姿を見せるや否や、ピタリとやんだ。マジスターのせいで再び注目を集める羽目になった葵は心底辟易しながら無言で自席へと歩を進める。誰とも目を合わさず窓際の席に着いた後は魔法書を机の上に置き、窓の外に視線を固定した。

「おはようございます、ミヤジマさん」

視界の外から少女の呼び声が聞こえてきたので、葵は眉根を寄せながら教室の方へ顔を傾けた。するといつの間にか吊り目の少女と内巻きカールの少女が間近に佇んでおり、彼女達の姿を認めた葵は感情を抑えようと努力しつつも少し眉根を寄せる。だが少女達は葵の変化など歯牙にもかけず、勝手に会話を開始した。

「先日はマジスターの皆様と何をお話しになっていたのです？」

あからさまな棘を口調に含ませながら本題を口にしたのは、葵の所属するクラスのリダー的存在であるココだった。吊り目の彼女は微笑んでいても顔つきが鋭く、何よりも印象的な目が笑っていない。迂闊なことを答えるわけにはいかなかったため葵は無言を貫いた。しかしそれでも、彼女達の一方的な非難は続く。

「ステラ様だけでなく、ミヤジマさんはマジスターの皆様と仲がよろしいのですわね。おモテになって羨ましい限りですわ」

沈黙している葵に対してではなく、女生徒の嫉妬心を掻きたてるように内巻きカールのサリーが言う。ココもその話題に乗ったため、葵はクラス中の女生徒からあからさまな敵意を向けられる羽目になった。

（かんべんしてよ）

葵は以前、アステルダム分校のマジスターの一人だったハルヒユーストという少年に関わったことで全校女子生徒の反感を買ってしまったことがある。その時は多少は自分のせいもあつたのだが、今回のことは完全なるとばっちりだ。そして今は保健室にアルヴァが不在のため、学園内で揉め事が起こった時に逃げ込める場所がな

い。これ以上騒ぎを大きくしないで欲しいと心から願った葵はココ達は何を言われても反論せず、嵐が過ぎ去るのを静かに待った。

やがて始業の鐘が鳴り、ロバートが教室に入ってきたのでココとサリーは自分の席へと戻って行った。同時にクラスメート達からの集中砲火からも解放されたため、ホッと息をついた葵は教壇のロバートに密やかな感謝の念を送った。

（あゝ、もう。めんどくさい）

トリニスタン魔法学園ではどこを向いても、厄介事しか見当たらない。そんなことを考えてしまった葵は昨日会ったばかりだということに、ザックとリズが恋しくなってしまうた。

（リズと同じ学校が良かったな）

彼女の天真爛漫さから察するに、リズが通っている学校では面倒な習わしなどはないのだろう。葵にトリニスタン魔法学園へ通うよう勧めたユアン「S」フロックハートという少年は良家の子供ばかりだから安心して通えと言っていたが、それこそが厄介事の元凶そのものである。そう思った葵は脳裏に姿を浮かばせた少年を恨みたい気分になった。

（そういえばユアンやレイ、どうしてるかな）

ユアンは葵に面倒な学園へ通うよう勧めただけでなく、彼女を二月が浮かぶ異世界へと招いた諸悪の根源だ。そして葵が『レイ』と呼ぶ女性は正式名をレイチエル「ア」ロースミスといい、彼女はユアンの家庭教師である。自分達の非を認めている彼らは葵が元の世界へ帰れる方法を探してくれているはずなのだが、三ヶ月経っても未だに、いい報告は成されていなかった。

「では、シルヴィア「エンゼル。まだ魔法士という称号が生まれる前にサンタリア王家がその才能を見出し、特に夏場に重宝したと言われているアイス・アートの名匠の名は？ また彼が契約を交わした水の英霊は誰だったか答えなさい」

授業を行っているロバートが一人の少女を指名した声が聞こえたため、物思いにふけっていた葵は何となく視線を傾けてみた。シル

ヴィアというクラスメートの名前に反応してしまったのは、彼女とマジスターの一人であるウィル・ヴィンスがデートをするということが気になっていたらかもしれない。そうして何気なく目にしたシルヴィアの姿に、葵は眉根を寄せた。

(シルヴィアってあんなに太めだったっけ?)

トリニスタン魔法学園の生徒は一樣にゆったりとしたローブを身にまとっているので体型の善し悪しなどあまり個人差はないのだが、シルヴィアは明らかに他の生徒達よりも膨れている。もともと目を引くような体型をしていなかった彼女が何故そこまで着ぶくれているのか、葵は疑問に思ったのだった。

「シルヴィア!! エンゼル。聞いているのか」

指されたシルヴィアがなかなか答えようとしなかったので、ロバートは焦れた様子で彼女の席へと歩み寄った。ロバートが近付いてきたことで、背中を丸めて座っていたシルヴィアがようやく顔を上げる。

「も、申し訳ございません」

シルヴィアの答えは「話を聞いていなかった」というものだった。ロバートが呆れた顔をしながら注意を促すと、教室内には失笑が沸き起こる。それは主に女生徒から向けられた軽蔑で、その空気を作っている中心人物はココとサリーだった。

(……嫌な感じ)

つい先日までココ達と同じく他人を嘲笑う立場だったシルヴィアが、今は嘲笑のターゲットにされている。その理由は彼女が、トリニスタン魔法学園に通う女生徒にとって高嶺の花であるマジスターに手をつけたからだ。騒動の渦中にはいないはずなのに、そうした経緯を知ってしまったっている葵は不愉快さを隠しきれずに顔を歪めた。そしてすぐさま、澱みきっている教室内の空気に浸っているのが嫌で窓の外へと顔を傾ける。

「きゃあ!」

不意に悲鳴が上がったので、顔を背けていた葵は何事かと視線を

戻した。見ると、教室の中ほどで一人の生徒が机を薙ぎ倒して倒れこんでいる。魔法書を閉ざしたロバートがすぐに倒れた生徒に近寄ったので、葵は仰向けにされた少女の顔を見て再び眉をひそめた。

「誰か、保健室のウサギを呼んできなさい」

ロバートの声に反応したのは廊下側の席にいた一人の男子生徒だった。誰かが教室を出て行く気配を察したロバートは顔を上げずに倒れているシルヴィアのローブを胸元から裂いていく。シルヴィアがひどい汗をかいていたためにそうしたのだろうが、ローブの下から出てきたものは彼女の素肌ではなかった。

「…… 舞踏会にでも行くつもりか」

シルヴィアのローブの下に隠されていたのはスカートの裾をふわりさせたアフタヌンドレスで、ロバートが呆れながら言うとき再び失笑が沸き起こった。今度は完全に授業が中断してしまっているため、女生徒達はあからさまな悪口を言い出す。

「パーティーでもないのに学園へドレスを着ていらっしやるなんて、何を考えているのかしら」

「冷却の魔法が不十分な安っぽいドレスのせいで倒れてしまわれるなんて、お可哀想でなんとも言えませんわ」

方々から嘲りの声が聞こえてくる中、彼女が何故そんな格好をしていたのか察してしまった葵は何とも言えぬ複雑な気分になった。おそらくはウィルが自分の空いている時に連絡をするなどと言ったから、シルヴィアはいつ呼ばれてもいいように朝からめかしこんできたのだ。だが学園へ行くには制服を纏う必要があるので、彼女はドレスの上に通気性の悪いローブまで着用した。いくら教室が魔法で適温にされているとはいえ真夏にこの格好では倒れても仕方がない。それでも、彼女はウィルに少しでも可愛い自分を見せたかったのだ。

シルヴィアの気持ちはウィルのことを好きというのとは少し違ってもかもしれない。だが相手に少しでも好印象を持って欲しいという想いは純粹なものである。その気持ちは少しは分かるだけに尚更いた

たまれない気持ちになった葵は、次第に様々なことに腹が立ってき
た。

（何で私がこんな気持ちにならなくちゃいけないのよ）

考えれば考えるほどに苛立ちが増していきそうな気がした葵はそ
こで考えることを放棄し、騒がしくなった教室から思考を隔絶して
窓の外へと視線を固定したのだった。

Love is Game (4)

昼休憩の鐘が学園内に鳴り響くと葵はすぐさま教室を抜け出し、人気のない場所を求めてエントランスホールに足を向けた。昼休みの校内はどこへ行っても生徒がいるので、炎天の下に出た葵は分厚い魔法書で日陰を作りながら大股で歩を進める。向かう先は一般の生徒が近寄らない、マジスター専用の特別区域だ。

重ね着のせいで授業中に倒れてしまったシルヴィアはウサギの手によって保健室へと運ばれ、彼女はしばらくそこで休養することになった。本当はそのまま帰宅させる話運びになっていたらしいのだが目を覚ました彼女が帰らないと言い張ったため、その後、シルヴィアはけっきょく授業に復帰したのである。授業を中断させてしまったシルヴィアに注がれる視線は前にも増して冷たいものになった。それでも彼女が帰らなかったのはまず間違はなく、ウィルから声をかけられるのを待っているからだ。そのことが解ってしまうだけに教室になどいられず、葵は怒りを撒き散らしながら校舎を後にしてきたのだった。

(もうたくさんだよ)

嫉妬や裏切りに満ちた上辺だけの付き合いも、決して好きではない相手の胸中を察して痛ましい気持ちになってしまうのも、エリート達の傲慢も。名門と言われるトリニスタン魔法学園にはびこっている悪しき風習に腹を立てながら、怒れる葵は徒歩で大空の庭へと足を踏み入れた。しかし花園へ降り立った刹那、流れてきた管楽器の音色にビクリとして足を止める。

(バイオリンの音……)

花園の中で聞くバイオリンの音色はとある人物を彷彿とさせる。だがその人物は、もうこの場所にはいないのだ。そのことを理解していながらも葵の足は勝手に音源を探し始めた。

「なんだ、オリヴァーか」

花園の中央に作られた花を愛でるための場所で、茶髪の少年がバイオリンを弾いている姿を見つけた葵はがっくりと肩を落とした。がっちりとしたスポーツマンタイプの体躯をしている少年はオリヴァー・バベッジといい、彼はアステルダム分校のマジスターの一員である。葵の独白は演奏に紛れて聞こえなかったようだったが、葵の姿を目に留めたオリヴァーはビクリとして数歩後ずさった。

「なんだ、アオイか」

「そんなに驚いて、どうしたの？」

「そりゃ驚くって」

驚愕の理由を語りだしたオリヴァーの話によると、魔法が使える者の間では使用者の発している魔力で様々なことを識別しているらしい。例えば誰かが背後から迫って来ていたとしても、ある程度の距離まで近付かれれば背後に誰かがいることが魔力の気配で分かるのである。さらにそれが親しい相手なら、振り返る前に相手を持定することも出来る。だが今の葵にはまったく魔力がないため接近されていることが分からず、オリヴァーはそのことに驚いたのだった。「なんか、魔力を察知する前に顔を見るって妙な感じだ」

幽霊でも見るような目つきで葵を一瞥した後、オリヴァーは苦笑しながらバイオリンを異次元にしまった。手の先だけがすっぽりと消えてしまふ光景を見るのも久しぶりで、葵は妙な感じを覚えながらオリヴァーの手元を注視する。バイオリンを消し去ったオリヴァーがお茶でも飲んでいけばと言うので、葵はシミ一つない真っ白なイスに腰かけることにした。

「ウイイルは？」

シエル・ガーデンにはオリヴァーの姿しかなかったもので、葵はこの場所を訪れた目的を思い出して尋ねてみた。紅茶を淹れる魔法を茶器にかけながら、オリヴァーは首を傾げる。

「さあ？ 何で？」

「ちよつとね、話があったの」

「何？ 伝えておこうか？」

「……やっぱいい」

冷静になつて考えてみれば、自分の口から『シルヴィアと早くデートをしる』と言うのもおかしい話である。そう思った葵はウィルの話題を離れ、もう一つの気がかりを尋ねてみることにした。

「ねえ、キリルってどういう奴なの？」

「キル？ 何で？」

ウィルの所在を尋ねた時よりもオリヴァーが不可解そうな表情をしたので、自分でもそう思った葵は苦笑いを浮かべた。殴られた経験が一度や二度ではないだけに、葵はキリル「エクランドという少年が嫌いである。そしてキリルもまた葵のことを嫌っているはずであり、彼らは犬猿の間柄なのだ。オリヴァーもそのことを知っているだけに、葵の口からキリルの話題が出るとは思わなかったのだろう。

「だってアイツ、わけ分かんないんだもん」

「またキルに殴られたのか？」

「殴られるよりタチ悪いよ」

「今度は何されたんだよ」

オリヴァーが心配そうな表情で問い詰めてきたので葵は簡単に答えようとしたのだが、意思とは裏腹に閉口してしまった。いざ口にするとなると、それが何とも思っていない相手でも『キスされた』と言うのは恥ずかしい。

「何だよ、はつきり言ってくれよ」

即答することを躊躇してしまったことが不安を煽ってしまったらしく、オリヴァーは恐ろしいものでも見る目つきで葵を見ている。そういつた反応をされるとますます言い辛くなってしまう、葵はさつさと口にしてしまえばよかったと後悔した。

「……された」

「え？ 何をされたって？」

「だから、キスされたって言ったの！」

葵の返答を聞くなり、オリヴァーは口を開けたまま動かなくなっ

た。妙な照れくささを感じた葵は矢継ぎ早にキリルへの文句を口にする。しかし葵が何を言っても、オリヴァーはポカンと口を開けたままだった。

「……オリヴァー？」

オリヴァーの驚きが尋常でないほど長引いていたので、異変を察知した葵はオリヴァーの顔の前で手を上下させた。それでようやく我に返ったらしく、オリヴァーは焦点を定めて葵を見る。だがその表情は、意外なほどに真剣そのものだった。

「今の話、本当なのか？」

「こんなウソついて何の得があるのよ」

むしろデメリットしかないと言った葵が断言すると、オリヴァーはしみじみと頷いた。それでもまだ信じられない様子で、オリヴァーは独白を零し出す。

「あのキルが女の子にキスした、ねえ……」

オリヴァーの反応からすると、葵がキリルにされたことは相当に珍しい出来事だったようだ。その相手が何故よりもよって自分だったのかと思うと謎は深まるばかりである。ただ一つだけ分かっていることは、キリルが葵を好きだからという理由でキスしたのではないということだけだ。

(ほんと、冗談じゃないよ)

追い回された挙句に好きでもない相手からキスされたのでは、葵ではなくともそう思うだろう。ウィルの一件もあつたため、もうマジスターに振り回されるのはたくさんだと思つた葵は紅茶を一口だけ飲んでから席を立った。

「もうあんなことしないでって、あいつに言っておいてよ。じゃ」

あまりアテにはならなさそうだったがオリヴァーに伝言を頼み、葵は元来た道を引き返した。ドームの外へ出るとどつと暑さが押し寄せて来て、教室に戻る気も失せてしまった葵はスカートのポケットから呼び鈴ベルを取り出す。音の鳴らないベルを振ってクレアに迎えに来てもらい、葵はそのまま帰宅の途に着いた。

オレンジの色味が強い二月が虚空に浮かぶ夜、転移魔法で他人の屋敷の玄関口に出現したオリヴァーは豪華な作りの二枚扉を荒々しく開いた。ここはエクランド家が所有する別邸の一つで、広大な屋敷自体がキリルの寢所である。防犯上の理由から使用人も数名雇われているのだが、彼らはオリヴァーが主人の友人であることを知っているため、オリヴァーは特に咎められることもなく屋敷の中を闊歩した。

シエル・ガーデンで葵と別れた後、オリヴァーはキリルの所在を突き止めようと奔走した。だが運の悪いことにキリルは学園に来ておらず、そのため彼が立ち寄りそうな場所をしらみつぶしに当たる羽目になったのだ。何事にも飽きっぽいキリルは普段からあまり一つの所に留まることがないため、これがなかなか骨の折れる作業だった。しかし消費した魔力も虚しく、結局は夜になるまでキリルの居場所を突き止めることが出来なかったのである。夜になればキリルは大抵この邸宅に帰るので、オリヴァーは最後の望みとして彼の寢所を訪れたのだった。

内部の情報を外に漏らさないようにするため屋敷には防^{プロテクト}御魔法がかけられているのだが、一度内部に入ってしまったえば目的の人物を探し出すのは容易い。キリルが垂れ流しにしている紅蓮の炎に似た魔力を頼りに廊下を歩いていたオリヴァーは、やがて彼がいる一室に辿り着いて歩みを止めた。そのまま休むことなく、オリヴァーはすぐに扉を開く。

「キル！ やつと見つけた」

オリヴァーが室内に入ると、そこにはキリルの他にウィルの姿もあつた。彼らもすでにオリヴァーが来ることは承知していたため、別段驚いた様子もなく彼を迎える。

「オリヴァーも一杯やりにきたのか？」

耳の早い連中だと、キリルは上機嫌な笑みを見せた。彼の手にはグラスが握られていて、その中には何やら濃赤色の液体が注がれている。どうやらキリルとウイルはもぎたての果実から作った飲み物で渴いた喉を潤していたらしい。しかしそれどころではないオリヴァーは、問いには答えずにキリルに詰め寄った。

「キル、聞きたいことがあるんだ」

「何かあったの？」

オリヴァーに応えたのはキリルではなく、静かにグラスを置いたウイルだった。ウイルから投げかけられた質問の答えはキリルから聞き出した答えと同じになるはずなので、オリヴァーは構わずにキリルとの話を続ける。

「アオイにキスしたって本当なのか？」

「それがどうした」

問い詰められるのが煩わしかったのか、キリルはムツとした表情になりながら答えた。キリルがあまりにも簡単に認めたので、オリヴァーは改めて驚きを露わにする。

「本当のこと、だったのか」

「へえ。キル、何でアオイにキスしたの？」

ウイルが口を挟むと、二人から質問攻めにされたキリルはむっつりとしたまま閉口した。キリルに答える様子がなかったので、ウイルがさらに言葉を重ねる。

「ああいう女は嫌いだって言ってたじゃない」

「嫌いに決まってるんだろ。図々しいし、やかましいし、うぜえ」

「じゃあ、何でキスしたの？」

「それは、ハルが……」

後半はここによごによと囁かれたので、ウイルにもオリヴァーにもキリルの言葉を聞き取ることは出来なかった。オリヴァーは首を傾げたが、ウイルはキリルの思考を推察し始める。

「もしかして、ハルがアオイにキスしたから？」

「ああ、そうだよ！ 何なんだよ、お前ら。うぜえなあ」

ウィルにあっさりと言意を言い当てられてしまったキリルはヘソを曲げてそっぽを向いた。バツが悪そうな態度でグラスを傾けているキリルの姿に、ウィルとオリヴァーは顔を見合わせてから呆れた息をつく。

「なんだ、そういうことか」

その理由を知りたくて奔走していたオリヴァーは意外と単純だった答えに拍子抜けしてしまい、ソファーに腰を下ろしながらグラスを引き寄せた。ウィルもまた、ボトルに新たな液体を注がせながら小さく笑いを漏らす。

基本的にキリルは他人を徹底的に排除する性質だが、その反動のように、仲間と認めた者のことは具に知りたがる。彼はハルが、葵のような女にキスをしたことがどうしても理解出来なかったのだ。だが理解の出来ないままに終わらせることは出来なくて、ハルと同じことをすれば彼の気持ち理解出来るのではないかと考え、自分の思いつきを実行した。オリヴァーの口を塞がらなくさせた出来事の真相は、どうもそういうことのようにである。

「最近やたらとアオイを気にしてたのも、それか」

一つの疑問が紐解けると、それまで不可解に感じていたことが一気に解決してしまい、オリヴァーは色々なことに一人で納得しながらグラスを口元へと運んだ。まだ閉口したままでいるキリルの表情は不機嫌そのもので、これ以上この話題を続けると苛立ちが爆発してしまいそうである。不穏な空気を感じ取ったオリヴァーはそこで葵の話が終わらせようとしたのだが、ウィルはまだ彼女の話の続けたがった。

「ダメだよ、キル。それじゃ分かるはずもない」

ウィルが暗に「提案がある」と言っていたため、キリルとオリヴァーは眉をひそめながら彼の方に視線を傾けた。その場の視線を一手に集めたウィルはキリルを見据え、諭すように優しく語りかける。「だって、アオイはハルのことが好きだったんだから。同じキスでも状況が違いすぎるだろう？」

「……どういうことだ？」

「つまり、アオイがキルを好きにならなくちゃ同じ状況は生まれな
いってこと。もしアオイがキルのこと好きになれば、ステラの気持
ちも分かるかもね」

「そういえばアオイ、ステラのことも好きだったよな。だからハル
に自分の気持ちを伝えなかったのかもしれないな」

「伝えていたとしても、うまくはいかなかったらどううけどね」

「まあ、ハルは昔からステラ一筋だったからなあ」

オリヴァーとウィルが思い出話に華を咲かせても、キリルは話に
乗ってこなかった。一人で難しい表情をしているキリルは空を仰い
でいて、どこか一点をじっと見つめている。そんなキリルの様子に
目を留めたオリヴァーは首を傾げながら彼に話しかけた。

「キル？ どうした？」

「どうしたらあの女はオレを好きになるんだ？」

キリルがポロリと零した一言にオリヴァーとウィルは絶句して、
それから同じタイミングで吹き出した。

「は、腹いてえ」

「キル、それ本気？」

ウィルが茶化した口調で尋ねると、我慢の限界を超えた様子のキ
リルはすつくと立ち上がった。そのまま前触れもなく、キリルは早
口で呪文を唱え出す。彼の唇が動いた瞬間に身の危険を察知したウ
イルとオリヴァーは瞬時にして笑いを収め、これから起こるであろ
う事態に備えた。

「灰になりやがれ！！」

キリルが怒りの咆哮を放つと同時に彼らがいた部屋は炎に包まれ、
扉や窓が破裂音と共に吹き飛んでいった。室外へと噴き出した炎は
すぐに大気に溶けていったものの、室内にはまだ紅蓮の炎が燃え盛
っている。しかしそんな惨状の中に身を置いていても、オリヴァー
とウィルは無事だった。

「また派手にやったね」

炎の中でウイルが平然とそんなことを言っていていられるのは、彼らの周囲を水の膜が覆っているからである。それを作り出すために魔力を消費しているオリヴァーもまた、この事態がいつものことと言わんばかりに小さく首を振った。

「お前がたきつけたんだから何とかしろよな」

「オリヴァーだって笑ってたじゃない」

「だって、お前、あんなこと言われて笑わずにいられるかよ」

「僕もまさかね、キルがあんなこと言い出すとは思わなかったけど」
熱風が吹き荒ぶ室内でも余裕の表情で会話をしていたオリヴァーとウイルは、炎の柱と化している背の高い植物の影から現れた姿に目を留めて一様に口をつぐんだ。周囲よりも純度の高い炎をその身に纏わせているキリルは怒りにぎらついた瞳をオリヴァーとウイルに据えながら、ゆっくりと歩み寄って来る。キリルが迸らせているのは具現化した魔力であり、彼が本気で怒るところということになってしまふのだった。

「悪かったよ、キル。謝るから、その物騒な魔力をちゃんと体に収めてよ」

怒髪天を衝くといった様相のキリルに、ウイルは至って平静に声をかける。だが謝り方が悪かったため、キリルは聞く耳を持たなかった。彼が再び魔法を使うような素振りを見せたので、オリヴァーは慌てて周囲に巡らせている水膜を強化しようとした。しかしそんな切迫した状況下でも、ウイルは平然と言葉を重ねる。

「どうすればアオイがキルのことを好きになるか、って言ってたね。許してくれるならいいことを教えてあげるよ」

一度暴走を始めてしまったキリルは説得が通じるような相手ではない。ましてやそんな胡散臭い誘いでキリルの怒りが治まるわけがないとオリヴァーは思ったのだが、眉一つ動かさずにキリルを見据えているウイルは、どうやら本気でキリルと駆け引きをするつもりのようなようだ。動きを止めているキリルもまた、ウイルをじっと見据えている。しばらくするとキリルの体から迸っていた炎が目に見えて

その威力を減退させていったので、傍から様子を見守っていたオリヴァーは「そんなバカな」と呟かずにはいられなかった。

「……そこまで言うなら許してやる」

意外にもあっさりと怒りを治めたキリルは室内に渦巻く炎を気にするでもなく、炎上しているソファーに悠然と腰を落ち着けた。キリル以外の者がそんなことをすればたちまち火だるまとなるが、彼は大丈夫なのである。しかしオリヴァーやウィルにとっては、この炎が支配する空間は危険地帯のままだ。そこでオリヴァーは、キリルの怒りが鎮まったのを機に消火活動を開始した。だが対峙したままのキリルとウィルは、オリヴァーの動きなどそっこのけで話を進める。

「で、その『いいこと』ってというのは何だ」

「女の子の口説き方」

「口説く？ オレが？」

それじゃ立場が逆だろうと、キリルは不服そうに唇を尖らせる。

しかしウィルは、キリルの異議をあっさりと棄却した。

「そんなのどっちでもいいんだよ。要はその気にさせればいいんだから」

「ふうん。お前、そういうの詳しくあったのか」

「……何でもいいから、とりあえず部屋を移そうぜ」

瓦礫の山と化した室内の惨状など目もくれず、さっそく話に華を咲かせているキリルとウィルに、一人で労力を消費したオリヴァーは疲れたため息を零しながらそう提案したのだった。

近づく距離、遠ざかる心（1）

夏月期中盤の月である橙黄とうこうの月の六日、丘の上にあるトリニスタン魔法学園アステルダム分校に登校した宮島葵は一階の北辺にある保健室へと足を向けた。教室へ行くよりも先にその場所へ向かったのは、この学園の校医であるアルヴァ「アロースミス」という青年が不在かどうか確かめるためだ。葵はアルヴァがいることを期待して保健室を訪れたのだが今朝もまた、扉の鍵は回らない。アルヴァの不在を知った葵は重いため息をつきつつ踵を返した。

（ほんと、いつになつたら帰って来るんだらう）

橙黄の月に入ってから行方をくらませてしまったアルヴァとは、もう二週間ほど顔を合わせていない。彼には尋ねたいことがあるのだが、そのことを別にしても、こうも理由の分からない不在が長引くと心配になってくるのが人情というものだ。校舎二階にある二年A一組の教室へと辿り着いた葵は、そろそろ本気でアルヴァを探さなければならぬかもしれないと思いつつ窓際の自席に着いた。

（やっぱり、ロバート先生に聞いてみよう）

前任の担任教師が腰を痛めたことで葵達のクラスにやって来たロバート「エーメリー」は、なかなか話の分かる教師だ。生徒から人のある彼に往来で質問をすることは躊躇われるのだが、幸いなことに葵にはロバートと二人きりになれる機会というものがあつた。それが補習というのが少し悲しくはあつたが、他人にあまり聞かれたくない話をするには絶好のチャンスである。

（昨日もけつきよく帰っちゃったし、いいかげん補習に出ないと）

優しいロバートは都合のいい時でいいと言ってくれたが、そうそう甘えてばかりもいられない。何よりも魔法を学ぶということは元の世界へ帰るための第一歩なのだ。今日こそは補習をしてみらおうと思つた葵は、教室の扉を開けて入って来たロバートが教壇に立つ姿を目で追つた。

「それでは、授業を始める」

ロバートの一言を合図に、生徒が各々の魔法書を開く。授業にはついていけないものの、葵もいちおう自分の魔法書を机の上に広げた。

葵が元いた世界では生徒全員が同じ内容が記されている本を目で追うことで授業が進められていたが、トリニスタン魔法学園の授業はそれとは様式が異なる。生徒達が手にしている魔法書はそれぞれが使いやすいよう独自に編纂したもので、言わばオリジナルの一品である。その自分専用の魔法書に授業で得た知識を書き足していく、それがトリニスタン魔法学園で言うところの『授業』だった。葵が今までしてきた『勉強』がテストという形式に対応するためのものならば、トリニスタン魔法学園での『勉強』は幅広い知識に触れるためのものである。それは必ずしも教師が板書した内容を書き写すこともないといった自由さで、現在進行形で葵を困らせていた。魔法に関する基礎知識がないため、そうして自由に授業をされてもさっぱり分らないのだ。

ロバートが使って見せる小規模な魔法や読めない文字の羅列を何となく眺めていた葵は、不意に沸き起こった歓声にビクリと体を震わせた。その声はどうやら校内から聞こえてきたもののように、二年A一組の生徒達は何事かと廊下に顔を傾けている。授業が中断してしまったため、ロバートも苦い顔をしながら廊下の方へと視線を向けた。

「やかましいな」

ロバートが発した独白は次第に近付いてくる嬌声に呑みこまれて消えていった。次の瞬間、二年A一組の教室の扉が勢い良く開かれる。そこに現れた人物を目にするなり女子生徒は総立ちになり、男子生徒は目を丸くした。女子が群がっていた教室のドアのところ嫌な顔を見つけてしまった葵は、窓際の自席に座ったまま小さく眉根を寄せる。

(何であいつがこんな所に……)

他クラスの女子を背後に引き連れて二年A一組に姿を現したのは、マジスターの一人であるキリル。エクランドだった。ギャラリーを完全に無視しきっている彼はざっと教室内を見渡し、窓際の席にいる葵のところで目を留めると再び歩き出す。まるで自分が目当ての人物のようにキリルが歩み寄って来るので、不穏な空気を察した葵は閉ざした魔法書を胸に抱いて身を引いた。

「どけ！ ジャマだ！」

群がってくる女生徒達を問答無用で跳ね除けながら二年A一組の教室に進入してきたキリルは葵の目前でピタリと歩みを止めた。その図が生まれたことにより、それまで騒然としていた教室内が水を打ったように静まり返る。注目が集まる中、私服のポケットから小箱を取り出したキリルはそれを葵に向かって突き出した。

「……何？」

言動の意味が分からなかった葵は気味の悪さを感じながら恐る恐るキリルを仰ぐ。だがキリルは唇を結んだまま、催促するかのよう
に小箱を葵に近づけただけだった。

（何？ 何なの？）

困惑した葵が小箱を受け取ることも出来ずにいると、キリルはイラつき始めたようだった。半ば放るよう
に葵に小箱を押し付けた後、キリルは無言で踵を返して足早に教室を出て行く。呆気にとられたのは葵だけでなく、二年A一組の教室はキリルの姿がなくなっ
てからもしばらく静まり返ったままだった。

「今の、何ですの！？」

やがて誰かが驚きの声を発したことにより、室内は騒然となった。我に返るより先にクラスメイト達が押し寄せて来たので、葵はビクツとして椅子の上で身を引く。生徒達の関心を引いているのはやはり、葵が手にしている小箱のようだった。

「それ、何が入っているんですの！？」

「開けてみなよ」

女生徒だけでなく男子生徒までもが開封を迫ってくるので、困

り果てた葵は救いを求めて教壇の方を仰いだ。刹那、突然の閃光が教室内に迸る。集まって来ていた生徒達が一樣に口を閉ざして背後を振り返ったため、天井を仰いでいた葵もつられてブラックボードの方へ顔を傾けた。

「授業を再開する。受ける気のない者は直ちに教室を出なさい」

魔法書を片手にしているロバートは空いている方の手に電気を纏わせていて、それを目にした生徒達は無言で自分の席へと戻って行く。騒ぎが収束したことを見て取ったロバートは次に、ポカンとしている葵に視線を移した。

「ミヤジマ＝アオイ」

「は、はい」

「早くその箱をしまいなさい」

「あ、はい」

葵が慌てて小箱を机の中に戻すと、ロバートはその後、何事もなかったかのように授業を再開させた。

近づく距離、遠ざかる心(2)

終業の鐘が鳴ると同時に勢いよく席を立った葵は脇目も振らず、教室の出口である扉を目指した。その行動に何人かの生徒が反応を示したものの、彼らの不意を突いた葵はクラスメートの制止を振り切って廊下を走り出す。そのうちにちらほらと帰宅の途につく生徒が廊下へと出て来たが、葵は彼らの間隙を縫って校内を疾走した。葵がトリニスタン魔法学園に通う全ての生徒から逃げなければならぬ原因は、彼女が抱えている小箱にある。可愛らしくピンク色のリボンが巻かれているそれはマジスターであるキリル「エクランド」から手渡された物だ。どういう意図があるのかは分からないが、キリルがそれを公衆の面前で葵に渡したため、今やその箱の中身に全校生徒が注目しているのだった。

(まったく、冗談じゃないよ)

葵は箱の中身を確認したらずぐキリルに返そうと思っていたのだが、教室ではリボンを解くことすら出来なかった。休み時間になるたびに生徒達が群がってきて、彼らが固唾を呑んで葵の手元を注視していたからだ。人気のない場所に移動しようにも葵の行動は常に監視されていて、自席を立つ素振りを見せようものなら教室中が反応を示すといった有り様である。中に何が入っていてももうどうでもよく、注目を集めることにうんざりした葵はすぐにでも箱を返却しようとする。シエル・ガーデン

校舎を出て東にひた走ると、次第に広大な庭園の一角が見えてくる。色とりどりの花が咲き乱れている花園は一見すると室外のようだが、実はシエル・ガーデンと呼ばれる場所は全面ガラス張りの建造物の内にある。ドーム状の建物には扉などの目立つた出入口は存在しないのだが、魔法を使わずに内部へ入れる方法を知っている葵は難なくシエル・ガーデンへの侵入を果たした。

内側からも外側からも隔絶された隠し通路を使って花園に降り立

った葵は迷うことなく、ある場所を目指した。花園の中央には人間が花を愛でるための場所が設けられていて、マジスター達はよくここでお茶をしているのだ。しかしこの日は運悪く、白いテーブルには誰の姿もなかった。目当ての人物がいないことを確認すると、葵は息つく暇もなく踵を返す。元来た道を辿ってドームの外へと出た葵は滴る汗を拭いながら、今度はドームの北部を目指した。シエル・ガーデンの北には用途不明の塔がひっそりと佇んでいる。葵が密かに『時計塔』と呼んでいるその場所は貴族らしく楽器を嗜んでいるマジスター達が練習を行う場所なのだ。シエル・ガーデン以外ではその場所しか思い当たらなかったのだが、残念ながら塔にもマジスター達の姿はなかった。

(いない、か……)

歩き回ったことで少し頭が冷えた葵は唐突に疲れを感じ、壁に背を預けて座り込んだ。時計塔の内部は二階建てになっていて、闇に閉ざされている一階部分には何も無い。そこから螺旋階段を上って行くと二階部分へ辿り着くのだが、二階には何故か大きな穴がぼつかりと空いていた。丸みを帯びたその空洞はちょうど時計が納まりそうな形をしていて、葵はそこからこの塔を『時計塔』と呼ぶようになったのである。

夏の日差しが斜に差し込む室内で目を閉じると、どこからかバイオリンの音色が聞こえてきそうな気がした。寂しさを孕んだその音色は儂く、美しく、葵の耳の中でこだましている。記憶の中で繰り返されているメロディはパップフェルベルのカノン。この世界ではヴァリア・ヴェーテと呼ばれているその曲も、この場所でその曲を奏でていた人物も、葵にとっては特別な存在だった。

(そういえばこれの中身、何だったんだろう)

幻聴に癒されて人心地ついた葵は急に小箱の中身が気になり出し、とりあえず開けてみることにした。リボンをほどいて箱のふたを持ち上げてみるとすぐ、アクセサリーらしきものが顔を覗かせる。箱から出して手に取ってみると、それは大小様々なルビーが散りばめ

られたネックレスだった。

(……高そう)

装飾品としての美しさよりも、葵がまず抱いたのは値段に関する感想だった。葵には装飾品の善し悪しなど分からないので、これが実際にはどの程度の価値があるものなのかも不明だが、もしもこのネックレスが魔法道具マジックアイテムの類であれば、その価値を見極めるのはさらに困難になる。しかし一つだけ、宝石に疎い葵にも分かることがあった。これがただの装飾品にしる、マジック・アイテムにしる、貰うわけにはいかないということだ。

(とにかく、さっさと返そう)

安価なものでも高価なものでも、キリルからプレゼントを貰う謂れがない。改めてそう感じた葵はネックレスを小箱にしまおうとしたのだが、彼女が行動を起こす前に異変が起きた。

「あら、ミヤジマさん」

何の前触れもなく室内に出現したのはサイドテールの少女だった。彼女は葵の姿を認めるなり、親しげに声をかけてきたのだ。だが彼女に気安く話しかけられる覚えもなかった葵はあ然として言葉を失う。それはサイドテールの少女が、クラスメートの中でも特に葵を敵視していたシルヴィア^{シルヴィア}エンゼルだったからだ。

「その手にしているもの、キリル様からのプレゼントですの？ 鳩ツヨの血が美しいですね」

葵の反応を気にするでもなく、シルヴィアは親しげに体を寄せてきた。手元を覗き込まれた葵は嫌な感じがして、小箱にネックレスをしまいこむ。ちなみに鳩の血と呼ばれるルビーは濃赤色の最高級品であり、宝石としての価値は相当なものである。葵が手にしているネックレスには、その最高級品が惜しみなく使われているのだ。しかしそんなことよりも、葵はシルヴィアの態度の方が気になつて仕方がなかった。

(何で話しかけてくるんだらう)

トリニスタン魔法学園に編入したての頃、お嬢様を演じていた葵

はシルヴィア達と親しい関係にあった。しかしそれは上辺だけのものであり、些細なことから葵が全校女生徒を敵に回すと、彼女達も例外なく離れて行った。それだけならまだしも、シルヴィアは葵を階段から突き落としした過去まであるのだ。そのような人物に突然好意的な笑みを向けられても、それは気持ちの悪いものでしかなかった。

「わたくし、ウィル様を捜していますの。お見かけになりませんでした?」

シルヴィアの口からウィル＝ヴィンスの名前を聞かされた時、葵は重い胸苦しさを感じた。その理由は、今日も着膨れているシルヴィアがまだウィルとのデートを果たしていないからである。胸に広がった嫌な感情の正体が分からないまま、葵は小さく首を振った。葵が初めて反応を見せたことに気を良くしたのか、シルヴィアはさらに好意的な笑みを向けてくる。

「今まで感情の行き違いがありました。わたくし、ようやくミヤジマさんの気持ち分かるようになりました。これからは仲良くいたしましょう?」

シルヴィアにそう言われた時、葵は自分が抱えている嫌な気持ちの一端が理解出来たような気がした。要するに彼女は味方を作りたくて、同じような境遇の葵に目をつけたのだ。きちんと謝罪することもなく過去を水に流そうなどは、ずいぶんと虫のいい話である。(上辺だけの付き合いだって、最初から分かっていたけど)

シルヴィアにとって「友だち」とは、あくまで利害関係を共にするだけの存在なのだ。彼女はそれでいいかもしれないが、葵にはそんな「友だち」は必要ない。だが葵が口を開く前に、シルヴィアは一方的な友情宣言をさとさつさと姿を消す。立ち上がるタイミンを逸してしまった葵は再び壁に背を預け、憂鬱な思いを抱きながら空を仰いだ。

(ステラ……)

この学園でただ一人、友達と呼べる存在だった少女を思い浮かべ

た葵は小さくため息を零した。もう二度と、この学園で彼女と過ごしたような時間を送ることは出来ないだろう。そう思った葵は生まれ育った世界で友人だった弥也やという少女の顔を思い浮かべ、ため息を引きずりながら立ち上がった。

（早く帰りたい）

欺瞞や傲慢はもうたくさんだ。そう思った葵は無人のシエル・ガ―デンに戻り、キリルから押し付けられた小箱をテーブルの上に置き去りにしてからその場を立ち去った。

近づく距離、遠ざかる心(3)

トリニスタン魔法学園の校舎は敷地内のほぼ中央に位置している。校舎を中心として見ると南には広大なグラウンドがあり、西には一般の生徒が登下校に使用している正門がある。校舎の北には藝とマジスターくらいしか使用していない裏門があり、そして校舎の東には、学園のエリート集団であるマジスターが溜まり場としているドーム状の建造物があった。全面ガラス張りのこのドームは温室になっでいて、季節に関係なく様々な花が咲き乱れている。そのためこのドームは一般的に『シエル・ガーデン大空の庭』という名で呼ばれていた。シエル・ガーデンの中程には水路に囲まれた場所があり、周囲より数段高くなっているその場所には白いテーブルとイスが置かれている。先程まで無人だったその場所に、今は三人の少年の姿があった。

「これ、キルがアオイにあげたやつじゃないのか？」

長い茶髪を無造作に束ねている少年は名をオリヴァー・バベッジといい、彼はテーブルの上に置かれている小箱を指差しながら隣に佇む少年に目をやった。オリヴァーの視線の先には艶やかな黒髪に同色の瞳といった容貌をしている、鋭利な雰囲気を持つ美少年である。キリル・エクランドという名の彼は話を振ってきたオリヴァーを一瞥し、それから不機嫌極まりない表情で小箱に視線を落とした。

「何でここにあんだよ」

「いらなから返す、ってことじゃないの？」

キリルの疑問を事も無げに一刀両断したのは、おそろしく女顔をした赤髪の少年である。彼は名をウィル・ヴィンスといい、この場集っている三人がアステルダム分校における現在のマジスターだった。

「なんだよ、うまくいかねーじゃねえか」

キリルがウィルに不満をぶつけたのは、彼が『女は物で釣れ』と

いう助言を与えたからだ。キリルはウィルの言う通りに行動したのだが、その結果がこの有り様だったのである。

「プレゼントの中身が悪かったんじゃない？」

作戦が失敗したことは棚に上げ、ウィルはさらっと責任をキリルに押し付ける。キリルが激昂してウィルに突つかかっていたので、オリヴァーはその隙に小箱の蓋を開けて中身を取り出してみた。

「へへ、鳩の血ドブ・ブルジョアじゃん。女の子へのプレゼントとしては悪くないと思うぜ？」

オリヴァーが褒めたので、キリルは『ほら見る』と言わんばかりにふんぞりかえった。最高級品のルビーがあしらわれたアクセサリには上質な品があり、それを見たウィルもあっさりと意見を変える。

「じゃあ、アオイは物じゃ釣れない女っていうことだね。変わり者だから仕方ないか」

「っていつか、唐突すぎだったんじゃないのか？ キル、どういう風にプレゼント渡したんだ？」

オリヴァーの問いかけに対し、キリルはプレゼントを渡した時の状況を短い言葉で説明した。キリルの発言によってオリヴァーとウィルが得た情報は『衆人監視の中、それがプレゼントであることも告げずに押し付けた』というものだった。デリカシーも何もないキリルの言動にウィルは小さく吹き出し、オリヴァーは頭を掻きながらため息を吐く。

「ツッコミどころが多すぎてどうしようもないな」

「なら、キルにも分かるように指摘してあげたら？」

そう言っていると、ウィルは椅子に腰かけて紅茶を淹れる呪文を唱えた。話を聞く気はあるようで、キリルも無言でその場に腰を落ち着ける。丸いテーブルを囲んで三人で座した後、紅茶を口に運んだオリヴァーはティーカップをソーサーに戻してから口火を切った。

「まず、渡す場所が悪い」

「ばしょお？」

キリルは胡散臭そうな表情をしたが、オリヴァーは至極真面目に頷いて見せた。

「そうというのは二人っきりの時に渡した方が効果的なんだ。人目がない方が相手も受け取りやすいだろうし、なにより二人だけしか知らないちよつとした秘密になるだろ？ 女の子は秘密とか好きだからな」

「そう？ 衆人監視の中で渡した方が目立っていいじゃない。それも僕らからのプレゼントともなれば普段は味わえないような優越感が持てるよ？」

「あのなあ、アオイの性格考えろよ。目立つこととして喜ぶタイプじゃないだろ？」

ウィルが横槍を入れてきたのでオリヴァーは呆れながら彼の意見に疑問を呈した。オリヴァーに言われて葵の性格を考えてみたのか、ウィルにもそれ以上の異論はないようである。ウィルが黙ったことを確認したオリヴァーはキリルを振り向き、話を続ける。

「それに、プレゼントだってこともはつきり言わないとダメだ」

「言わなくても分かるだろ、それくらい」

「それだとキルがあげるつもりで渡したのは分かっても、アオイ的にはもらう理由が分からないだろ？」

「もらう側に理由もクソもあるかよ」

渡されたら受け取ればいいのだと明言するキリルは、自身の言動に何の違和感も覚えていないようだ。オリヴァーは「分かっているなあ」と独白を零し、小さく首を振った。

「必要なんだよ、もらう側にも理由が。受け取る理由がないところやって、返されるわけだ」

オリヴァーがテーブルの中央に置かれている小箱を指差したことでキリルも黙り込んだ。反論する者がいなくなったのでオリヴァーは一人で先を続ける。

「特にキルの場合はアオイと親しいわけでもないだろ？ キルだって……例えば、アオイがいきなりプレゼント渡そうとしてきたらど

「うるす？」

「シカトだな」

「だろ？ 要は、そういうことだ」

「でもよ、オレがあの子にプレゼントする理由って何だ？」

「そんなのテキトーに作ればいいんだよ。君に似合うと思ったからプレゼントするんだとか」

「へえ。オリヴァーはそうやって女の子を口説くんのだ」

それまで黙して話を聞いていたウイルが茶々を入れてきたので不意を突かれたオリヴァーは思わず閉口してしまった。そのことが逆にオリヴァーの話に真実味を持たせ、キリルとウイルは物珍しげな視線を彼に向ける。

「意外だね。オリヴァーって、僕達の知らないところでちゃんと恋愛とかしてたんだ？」

「俺の話はどうでもいいだろ」

「よくねえ。聞かせろよ」

ウイルだけでなくキリルまでもが食いついてきたので、オリヴァーは饒舌になりすぎたことを少し後悔した。キリルは基本的には他人に関心を示さない性質^{タチ}だが、仲間と認められた者のことは具に知りたがる傾向にある。このままでは根掘り葉掘り訊かれた挙句にプライベートが全て暴かれてしまうと危ぶんだオリヴァーは強引に話を元に戻した。

「とにかく、プレゼントを受け取ってもらいたいならキルはまずアオイと話をする必要がある。まともに話したこと、ないだろ？」

「興味ねーからな、あんな女」

しれっとそんなことを言っただけのキリルの発言には身も蓋もない。せつかくのアドバイスが無下に扱われたことでオリヴァーは口をつぐみ、しかし胸中では『だったら関わらなきゃいいだろ』と密かに愚痴を零した。

「それだけ手間暇かけても必ず手に入るわけじゃないなんて、ナンセンスだよ」

オリヴァーの作戦をまだるっこしいと言い切ったのはウイルである。キリルもウイルと同意見らしく、二人は深々と意味ありげなため息をついている。キリルとウイルの頭の中にある言葉はおそらく『恋愛なんて興味ない』であり、そのことを容易に察してしまったオリヴァーは彼らとは質の違うため息を零した。

「でも、キルはアオイを落としたいんだろ？」

「違う。オレがあの子をおとしたいんじゃないんで、あいつがオレを好きになればいいんだ」

「同じだって」

「ぜんぜん違うだろ。一緒にするなよ」

キリルが苛立ちを見せ始めたのでオリヴァーは説得を諦めて口を閉ざした。だがキリルがこの調子では、初めから彼に悪印象を抱いている葵を懐柔することはまず無理だろう。しかし面倒くさいと言いながらも、キリルには計画を放り出すつもりもないらしい。晴れ渡った夏空をガラス越しに仰いだオリヴァーは密やかなる同情を葵に寄せたのだった。

近づく距離、遠ざかる心（4）

無人のシエル・ガーデンを出た後、葵はすぐに使用人のクレア「ブルームフィールドを呼んでトリニスタン魔法学園を後にした。だが家に戻っても気分が晴れなかったため、何か気晴らしがしたいと思った葵はクレアに魔法で送ってもらい、一人でパンテノン市街を訪れていた。

「こんにちは」

すでに通いなれた場所になりつつある工房の扉を開け、葵は内部へ向かって声をかけながら扉の隙間から顔を覗かせた。ここはフィフストリートにある、ザックの工房である。小さな看板が下がっている扉を開けるとすぐ販売所になっていて、平素はザックか彼の妹であるリズが店番をしているのだが、この日はあいにくどちらの姿も見当たらなかった。

（留守かな？）

この世界には鍵をかけるという習慣がないので、扉が開くからといって住人がいるとは限らない。だが心境的に、どうしてもザックかリズに会いたかった葵は留守ならば帰ってくるのを待とうと思い、扉を閉ざしてから改めて室内を振り返った。店になっている室内にはガラスで作られた工芸品が並んでいて、奥には住居部分へ通じる扉がある。住人のいない他人の家を歩き回るのは気が引けたが一応確かめておこうと思い、葵は溶鉱炉がある作業場へと向かうことにした。

店舗になっている一室から奥へ通じる扉を開けると、正面はいきなり行き止まりになっている。そこから左右に廊下が伸びていて右手へ折れると住居部分へ、左手へ曲がれば作業場へと行き着くのだ。すでに勝手は分かっているので、葵は迷わず左へ曲がって作業場を目指した。

（ザック、いるかな？）

淡い期待を抱きながら歩を進めていた葵は作業場へ近付くにつれて体感温度が上がっていることに気がつき、それでザックがいることを察した。工芸品を作るには高温でガラスを溶かす必要があり、彼が作業をしている時は周辺までもがひどく熱くなるのだ。

(熱っ……)

夏の外気よりも熱い廊下は汗を誘い、葵は開襟の胸元をはためかせながら作業場へと足を踏み入れた。そこで目にした光景に魅入られてしまった葵は手を動かすことを忘れ、呆けたように立ち尽くす。ザックが仕事をしている時、作業場は火の海である。溶鉱炉からあふれ出した炎が作業場に佇むザックの周囲を這い回っているからだ。まるで生き物のように蠢いている大火はザックの意思に従ってガラスを熱している。ザックはそれを素手で加工したのち水の魔法で一気に冷却するのだが、葵はその瞬間を見るのが好きだった。

(きれい……)

氷結された真っ赤なガラスはまだ熱を持っていて、自分を閉じ込めた氷を粉々に砕く。微細な粒はすぐ周囲の炎によって蒸発させられてしまうのだが、その一瞬のきらめきが印象的なのだ。そうして出来上がった工芸品は、ザックの手にすんと落ちる。同時に炉を這い出していた炎も引いていき、葵はそこで初めて滴る汗を拭いた。

「アオイ」

難しい表情をして自分の作品を眺めていたザックは葵に気がつくと驚いた顔をした。再び胸元をはためかせた葵はザックの傍へ寄り、お邪魔してまずと事後報告をする。そんな葵に苦笑を返した後、ザックは手にしていたグラスを床に放った。

「あ、もつたいない。きれいだったのに」
「出来損ないだよ」

首から下げていたタオルで汗を拭いたザックは素っ気なく言い置き、溶鉱炉に蓋をした。それから改めて、ザックはどうしようもなく汗を滴らせている葵に視線を移す。

「すごい汗だね。着替えないと風邪ひくよ」

「え。まだ来たばかりだよ」

暗に帰れと言われているのだと思った葵は露骨に不満を露わにした。ザックは顔の前で軽く手を振り、そういう意味じゃないと弁明する。だが確実に、葵にもザックにも着替えは必要そうだった。

「僕は裏で水を浴びてくるけど、アオイはそういうわけにもいかないだろう?」

「裏? お風呂は?」

「大衆浴場があるけど、嫌だろう?」

「へ、銭湯なんだ? 別に嫌じゃないよ」

普段は利用することもなかったが修学旅行などで大浴場を使った経験もあり、葵は特に銭湯を嫌だとも感じていなかった。しかしザックにしてみれば葵が嫌がらないことの方が驚きだったようで、彼はしきりに目を瞬かせている。

「本当に嫌じゃない?」

「うん、別に平気」

「じゃあ、リズと行ってくる?」

「リズ? いるの?」

「店番していただろう? 会わなかった?」

「いやあ? いなかったよ?」

「……あいつ、また……」

どうやらリズは店番を放り出したらしく、ザックは顔をしかめて大きなため息をついた。

「とりあえず、着替えを用意するから」

「あれ? 銭湯は?」

「一人じゃ行かせられないよ」

そこで話を切り、ザックは歩き出した。一人で行ってはいけない理由は分からなかったものの、ザックが気を遣ってくれたことを察した葵も無言で彼の後に従う。その後、ザックがリズの服を着替えとして用意してくれたため、葵はとりあえず汗にまみれた制服を脱ぎ捨てることにした。

リズの部屋を借りて着替えを済ませた葵がリビングへ出ると、そこではすでに洗い髪から水滴を滴らせたザックが座していた。シャツ一枚だけでベストを着ていない彼はもう、店番に出る気はないようである。

「サイズ、大丈夫だった？」

「うん、ちよつと胸が余るけど。リズつてスタイルいいんだね」

葵が何気なく零した科白に、ザックは何故か顔を赤くした。そうした反応をされたことによって自分の発言を振り返った葵も、ハツとして頬に手を当てる。

「あの、そういう発言はちよつと……」

「あ、う、うん。ごめん……」

これが家族や女の子同士であれば何の問題もないが、ザックは男の子なのである。いきなり胸の話などされても、困るだろう。

（絶対アルのせいだ）

いつの間にか羞恥心が薄れてしまったのは絶対にアルヴアのせいだと思った葵は胸中で彼に対する文句をたれた。しかし実際には口に出さなかつたため、室内には気まずい沈黙が流れている。何とかこの空気を払拭しなければと考えているうちにリズが姿を見せたので、葵はあからさまにホツとした。

「二人してなに真つ赤になつてるの？」

室内の異様な光景を目にした時、リズは遠慮もためらいもなく率直な疑問を口にした。お互いに返す言葉のなかつた葵とザックは顔を見合わせ、同時に苦笑いを浮かべる。それを見たリズが怪しいと言い出したので、ザックが早々に話題を変えた。

「そんなことよりお前、店番はどうしたんだよ」

「してたよ？」

リズがあまりにも堂々と嘘をつくので葵は吹き出してしまった。

嘘がばれていると悟つたらしいリズは、恨めしげな目で葵を見やる。葵が慌てて口元を押さえると、ザックが盛大にため息を吐いた。

「どうせまた、アレックスの所に行つてたんだらう？」

「アレックスって誰？」

「あたしのボーイフレンド」

「えっ！？ リズ、彼氏いたんだ？」

「カレシ？」

「あ、えつと、恋人ってこと」

葵が横から口を出したことにより、ザックのお説教は聞き流されてしまった。しかしリズにとっては都合が良かったようで、彼女はこれ幸いとばかりに恋の話を盛り上げる。女二人で話に花を咲かせてしまったため、ザックは仕方なさそうな表情をして立ち上がった。「あれ？ ザック、どこ行くの？」

「後片付け」

葵の問いに背を向けたまま答え、ザックはリビングを出て行った。兄の姿がなくなつた途端に笑みを消したリズは、葵に顔を寄せて声の調子を落とす。

「ねえ、あたしがいない間に何かあった？」

「えっ？ 別に、何もないけど？」

「じゃあ何で、アオイがあたしの服着てるの？」

リズの考えを読み取つた葵はそういうことかと苦笑いを浮かべた。作業場にいたせいで汗をかいたから着替えを貸してもらつただけだということの説明すると、リズはあからさまにガツカリした表情になる。

「なあんだ、つまんない」

そう言つてイスにもたれかかったリズは、しかしすぐ、気を取り直したように葵に笑みを向けた。

「ね、アオイってお兄ちゃんのことどう思ってる？」

「どう、って……」

「お兄ちゃん、絶対アオイのこと好きだよ」

ずいぶんと進展の早い話を聞かされてしまい、葵には苦笑いを浮かべることしか出来なかった。しかしリズは本気でそう思っているようで、喜々として兄の胸中を推し量る。リズには気の済むまで喋

らせておこうと思ひ、葵は適当な相槌だけを打ちながら話半分に彼女の言葉を聞いていた。

P l a c t i s e (1)

夏の盛りである橙黄とうおうの月の七日、丘の上に建つトリニスタン魔法学園アステルダム分校に登校した宮島葵は教室へ行く前に一階の北辺にある保健室を訪れた。しかし今日も、鍵を使って開ける保健室の扉は開かない。それで訪ねてきた相手が不在であることを知った葵は、一日の始まりに恒例となつてしまった重いため息をついた。
(アル……どこ行っちゃったんだろう)

この学園の校医であるアルヴァ「アロースミスは、葵が元の世界へ帰れる方法を探してくれているはずの人達との唯一の接点である。アルヴァを通して間接的にしか情報を得られない葵は、彼の不在が長引くにつれて心配と不安を募らせていた。

(今日、ロバート先生に聞こう)

昨日もけつきよく補習を受けずに帰ってしまったため、葵は二人きりの時を待つて質問をしようと思うことをやめることにした。担任であるロバート「エーメリーがいくら人気者でも、一人でいることがないわけではないだろう。ふとした瞬間に隙は必ずあるはずであり、今日はそうした瞬間を見つげるためにロバートをストーカーしようと思つた葵は勢い込んで歩き出した。

「ミヤジマさん、おはようございます」

保健室に背を向けた直後、まず滅多にされない朝の挨拶を投げかけられた葵は眉をひそめながら声のした方を振り返つた。すると廊下にはクラスメートであるシルヴィア「エンゼルの姿があり、彼女の姿を認めた葵は眉間のシワをさらに深いものにする。葵は応えずに歩き出したのだが、シルヴィアは気にすることなく隣に並んだ。
「キリル様からいただいたピジョン・ブラッドはお付けになつていないの？」

シルヴィアは好意的な笑みを浮かべながら話しかけてきたが、葵は口を開くことをしなかつた。代わりに胸中で「あんな目立つもの

つけていられないよ」と反論をする。そもそもあのアクセサリーは、もう葵の手元にはないのだ。

(……そっか、そのこともあるんだっけ)

気分転換に成功したせいですっかり失念していたのだが、葵はキリルからプレゼントをもらったことになっているのだ。それを突き返したことは葵とマジスターしか知らないことであり、今日もまたプレゼントの中身が何だったのかと質問を浴びせられることは必至である。考えただけでも面倒だと思った葵は重々しいため息をつきながら階段を上った。

葵とシルヴィアが教室に入ったのはまだ予鈴の鐘が鳴る前だったので、室内には誰もいなかった。葵はそのまま真っ直ぐに窓際の自席へと向かおうとしたのだが、シルヴィアが制してきたので嫌々振り返る。葵の腕を引いたシルヴィアは小声で、昨日ウィルとデートをしたのだと明かした。

(それで今日は着膨れてないんだ)

改めてシルヴィアの出で立ちを見た葵は、そう思った他は特に何も思わなかった。他に誰もいない教室で密談のように明かされてもその内容は「だから何？」的なものである。しかし葵が冷めた態度をとっていても、シルヴィアは熱っぽくウィルとのデートの様子を語った。

「あのウィル様がわたくしのために甘い言葉を囁いてくださったのですよ？　もう、夢のようでしたわ」

その一言にひっかかりを覚えた葵はマシンガントークを続けているシルヴィアをよそに、眉根を寄せながら空を仰いだ。

(ウィルってそういうタイプだったっけ?)

葵が抱くウィル・ヴィンスのイメージは冷静沈着、そして冷淡である。とても恋愛に関心があると思えないタイプの彼は、シルヴィアとデートをすることさえ何かのついでのような扱いをしていたのだ。そのような人物が甘い言葉を囁くなど、想像もつかなかった葵は肩を竦めて小さく首を振った。

（私には関係ないじゃない）

ウィルが甘い言葉を囁こうと、シルヴィアがどんなに幸せだろうと、それは葵には無関係な話である。そう思った葵はシルヴィアから視線を外し、それを窓の外へと固定した。間もなく予鈴が鳴って生徒達が登校してきたので、シルヴィアも自分の席へと戻って行く。本鈴が鳴ってロバートが姿を見せるまでクラスメート達に取り囲まれていた葵は誰の問いにも答えることなく、ただただ無言を貫き通したのだった。

トリニスタン魔法学園では朝の点呼を終えると、クラスを受け持っている教師は授業の準備をするために一度教室を後にする。だがロバートは生徒から人気があるため、話が途切れることなく授業へと移項することもざらだった。そんな彼が珍しく廊下へ出たため、葵は群がってくるクラスメート達を掻き分けるようにして移動を開始する。しかしクラスメート達が着いて来てしまったため、葵はロバートに話しかけることが出来なかった。

（せっかくロバート先生が一人にいるのに）

もどかしい思いに駆られた葵はクラスメート達を心底うっとおしおしおしと思つた。さらには騒ぎを聞きつけた他のクラスの女子までもが加わってきたため、心ならずも輪の中心にいる葵は身動きが取れなくなっていく。しかしそんな状態は長くは続かず、やがて女子生徒の群れは嬌声を上げながら大移動を開始した。

（げっ、）

人垣がなくなったことで自由になった葵は別の人だかりの隙間に嫌な顔を発見してしまい、おもむろに顔を歪めた。廊下に女生徒の花道を作らせながらこちらへ歩み寄って来ているのは、漆黒の髪に同色の瞳といった容貌をしている私服の少年である。彼と関わるとろくなことがないことを経験として知っている葵は廊下にたむろする白い集団に身を潜ませながら立ち去ろうとした。しかし一人だけ違う出で立ちをしている葵は目を引く存在であり、少年もすぐに葵を見つけてしまったようだった。

「おい、お前」

横柄な態度で白い集団に人差し指を突きつけた少年の名は、キリルⅡエクランド。彼が自分を指名したような気がしなくてもなかつたものの、葵は無視に徹して踵を返した。するとちよつどロバートが一人で歩いている姿を目にしたため、葵は慌てて歩き出す。だが人混みの中ではうまいこと先に進めず、もたもたしているうちに誰かに腕を引かれてしまった。

「お前だつて言つてんだろ！ シカトしてんじゃねえ！」

強引に振り向かせられた葵はキリルに怒声を浴びせられてビクリと体を震わせた。だがそんなことよりも、今はロバートの方が重要である。顔だけ後方へ傾けた葵は視界の片隅にロバートが小さくなつていく姿を捉え、慌ててキリルの手を振り解いた。

「ごめん、急いでるから！」

手を払われたことにあ然としているキリルを捨て置き、葵は今度こそ踵を返して走り出した。廊下に点在している白い障害物はキリルの方に意識がいつているため、葵はその合間を縫いながらロバートの背中を追う。だが階段を下つたところで葵はロバートを見失つてしまった。

（あ、あれ？）

一階へと降りていくところまでは確かに目で追っていた。しかし右を見ても左を見ても、周囲には誰の姿もない。トリニスタン魔法学園の校舎はドーナツ型になっているので廊下の先は見通しが悪く、葵は右往左往した。その結果、ロバートの姿を発見出来たので声を上げながら走り寄る。

「どうかしたのか？」

葵が探していたことなど知らないロバートは少し驚いた様子で尋ねてきた。走つたせいで乱れた息を整えた後、葵は周囲に人気がないか確認してから改めて口火を切る。

「先生、アルヴァⅡアロースミスって人のこと知ってますか？」

「アロースミスというと、レイチェルⅡアロースミスの親族か？」

思いがけずレイチエルの名前が飛び出したので、葵は答えに詰まって黙り込んでしまった。その理由はレイチエルの弟であるアルヴァに、自分達のことを口外するなときつく言い含められているからである。どう答えようかと少し考えた末、葵は小さく首を振った。

「何でもないです」

「そうか。そろそろ授業を始めるから、教室に戻りなさい」

「はい」

頷いた葵は教室に戻ろうと踵を返したのだが、ロバートに呼び止められてすぐに足を止めた。少し離れてしまった距離を再び縮めてから、ロバートは言葉の続きを口にする。

「補習の件だが、今日は大丈夫そうか？」

「あ、はい。今日は大丈夫です」

「そうか。申し訳ないのだが、今日は私の都合が悪いのだ。明日は実習をする予定なので、その準備があつてな」

何だと思つたのも束の間、肩透かしをくらつたことよりも別のことが気になつた葵は微かに眉根を寄せた。

「実習？」

「君は編入生だから、実習は初めてか。実習はグラウンドへ出て、そこで実際に魔法を使う。様々な魔法を目にするいい機会だ、しっかり見ておきなさい」

「あ、はい」

思わずそう返事をしてしまったものの、ロバートと別れて一人になつてから葵は自分の発言を後悔した。グラウンドへ出て実習をするというからには、おそらく大掛かりな魔法を使うのだろう。そういった魔法から身を守る術を持たない葵は以前にも髪の毛を焼かれたりと散々な目に遭っているので、不安に思つたのだった。

（アルもないのに、大丈夫かなあ）

今度は何があつても逃げ込める場所がない。だがこの場にアルヴァがいたとしても、やはり庇ってはくれないだろう。一度としてアルヴァに庇ってもらつた覚えがないことを思い出した葵は苦笑いを

浮かべて首を振った。

（アルよりロバート先生の方がよっぽど頼りになるよ）

ロバートがいれば大丈夫だろうという結論に達した葵はそこで考えることをやめ、校舎二階にある二年A一組の教室へと急ぐことにした。

Practise (2)

葵がキリルの手を振り払って走り去った後、二年A一組前の廊下はしばし異様な静寂に包まれていた。しかしやがて小さな囁きが生まれ、それはあつという間に大きなざわめきへと変わっていく。

「キリル様、大丈夫ですか？」

「キリル様がお声をかけてくださったというのに、あの女は何様のつもりですの」

「マジスターにあのような態度をとるなんて、制裁に値しますわ」

あ然としているキリルを案じる声から始まったざわめきは、次第に制裁という言葉に支配されるようになった。彼を取り巻いている女子生徒達は口々に葵への罰を要求しているが、当のキリルは未だ呆けたまま葵が去った後を見つめている。だがキリルも次第に我を取り戻し、こめかみに青筋を浮き上がらせた。

「うるせえ!!!」

キリルが一喝すると廊下に渦巻いていた興奮は一瞬のうちに終息した。不機嫌を露わにしたキリルは周囲の人々に構うことなく呪文を唱え、転移魔法でもってその場を後にする。マジスターがたまり場としている大空の庭シエル・ガーデンに出現したキリルは美しく咲き誇っている花々を怒りに任せて蹴散らしながら仲間の元へと向かった。

シエル・ガーデンの中央部には周囲より一段高くなっている場所があり、花を愛でるためのその場所には白いテーブルと椅子が置かれている。そこには先客の姿があり、赤髪の恐ろしく女顔の美少年と、長い茶髪を無造作に束ねたスポーツマンタイプの少年が向かい合ってお茶を飲んでいた。赤髪の少年は名をウィル・ヴィンスといい、茶髪の少年の名はオリヴァー・バベッジという。彼らはトリニスタン魔法学園アステルダム分校のマジスターであり、怒り狂った紅の魔力を垂れ流しながらやって来たキリルを呆れた顔をして迎えたのだった。

「どうしたの、キル？ またそんなに怒って」

「イライラするのはよくないぜ。ほら、茶」

ティーカップをソーサーに戻しながら声をかけたウィルに続き、オリヴァーが荒々しく腰を下ろしたキリルの前に紅茶を置く。だが何もかもが気に入らない状態のキリルは紅茶に手を伸ばそうとはせず、それぞれどこかテーブルを下から蹴り上げた。オリヴァーとウィルは自分のカップを即座に避難させたため、キリルの前に置かれていたティーカップとテーブルだけが花園の中に転がっていく。調和のとれた美しい眺めが一瞬にして破壊されてしまったわけだが、それでもウィルとオリヴァーは怯まなかった。

「まったく、ワガママもいいかげんにしなよ」

テーブルがなくなってもソーサーを片手にしながら、ウィルは悠然と紅茶を口に運ぶ。癩癩を起こしているキリルが鋭いまなざしをウィルに向けたので、オリヴァーはため息をついてから口を挟んだ。「アオイを口説きに行つて失敗したとか？」

凶星を突かれたキリルはウィルに向けていた視線を外し、今度はオリヴァーを睨みつけた。しかしキリルに怒りをぶつけられることに慣れきっているオリヴァーは眉一つ動かさず、復元を意味する『アン・ルコンストウリユクシオン』の呪文を唱え出す。すると花園の中に消えて行ったテーブルは傷一つない形で彼らの前に戻り、折れ曲がった花々も再び美しい姿を取り戻した。だがキリルの怒りは治まらず、彼は目前に戻つて来たテーブルに激しく拳を打ち付ける。

「あの女、このオレに恥かかせやがって」

「アオイに何かされたのか？」

「公衆の面前でシカトしやがった！」

オリヴァーの質問に激昂しながら答えたキリルの言葉は、あの時の状況を正確に表してはいない。一応葵は『急いでいる』と断つたわけなのだが、それは彼にとっては無視も同然なのである。だが現場を見ている者がキリルしかいないため、マジスターの間では葵の

態度が「感じが悪いもの」と決め付けられてしまった。

「ふうん、よっぽどキルのこと嫌いなんだね」

さらにはウイルが、キリルを煽るような科白をポロリと零す。またオリヴァーも、ウイルの意見に同意を示した。

「まあ、あれだけ何度も殴られてりゃなあ。普通の女の子だったら逃げ出すだろ」

「殴った？ オレが？」

キリルがキョトンした顔をして問い返したので、オリヴァーとウイルは顔を見合わせた。堂々と聞き返すキリルの態度はまったく身に覚えがないと言っているようなものである。

「もしかして、まったく覚えてないのか？」

「覚えてないも何も、殴ってねーよ」

「いや、殴ったよ。ステラの時のことくらい覚えてないの？」

ウイルが記憶の糸を辿るヒントを与えても、キリルは思い出すような素振りさえせずに彼の意見を否定した。

「だから、殴ってねーって。あんなどーでもいい女のこと殴る理由もねえよ」

キリルがあくまでも『殴っていない』と主張するのでウイルとオリヴァーは同時にため息をついた。

「キル……そこまでどうでもいい存在ならアオイのことは放っておいてやれよ」

ウイルよりも多く葵が殴られた現場を目撃しているオリヴァーが同情的な提案をしてみてもキリルは頷こうとしない。どうやら一度芽生えてしまった興味はなかなか熱を失わないようだ。キリルの意固地とも思える反応を見ていたウイルがふと、クスツと小さな笑いを零した。

「そんなにハルとステラの気持ちを知りたいの？ キルってカワイイね」

「かわいいとか言ってるじゃねーよ。クロスぞ」

「はいはい。でもさ、キル。それならアオイに好かれるように頑張

らないと」

「嫌だ、何であんな女のためにオレが頑張るんだよ」

キリルが子供のようにワガママを重ねるため、話はなかなか先に進まない。だがキリルの扱い方を熟知しているウィルが言葉巧みに説得を続けたため、キリルも渋々ながらウィルの提案に頷いて見せた。キリルが納得したところで、ウィルはさらなる提案を重ねる。

「でも、そこまで嫌われてるなら何か劇的な変化が必要だね」

「例えば？」

「アオイが困ってる時に救いの手を差し伸べてあげるとか」

「そんなことくらいで心象って変わるものか？ 第一、そんな都合よく困らないだろ」

「僕達の都合に合わせて、アオイに困ってもらえばいい」

ウィルがニヤリと笑んだので、彼の提案に疑問を投げかけていたオリヴァーもそこで口をつぐんだ。何事かを企んでいるらしいウィルは楽しそうな表情をキリルに向け、微笑んだまま言葉を重ねる。

「明日、アオイのクラスは実習をやるらしいよ。その時に、アオイには困ってもらおう」

ウィルの意図を把握出来ないキリルは同意も否定もせず、無言のまま眉根を寄せている。それはオリヴァーも同じことであり、二人の困惑顔を見たウィルは得意げな口調で計画の詳細を明かしたのだった。

Practise (3)

橙黄とうきゆうの月の八日。丘の上に建つトリニスタン魔法学園アステルダム分校に登校した葵は朝の日課を済ませるため、校舎一階の北辺にある保健室を訪れた。そこでアルヴァの不在を確認した後、葵はため息をつきながら踵を返す。この後、いつもなら校舎二階にある教室へと向かうところなのだが、葵の足は通過してきたばかりのエントランスホールへと向いていた。その理由は本日、二年A一組がグラウンドで実習を行うからである。

葵が外へ出ると、広大なグラウンドにはすでに白いローブを纏った生徒が集っていた。いつもの高等学校の制服ではなく、トリニスタン魔法学園の制服である白いローブを着用して登校した葵は、目立たないよう努めながら集団の中に紛れ込む。グラウンドに集まっている二年A一組の生徒達は思い思いに歓談しているため、葵が潜り込んだことには気付かなかったようだった。

(同じ格好してるだけで気付かれないもんなんだなあ)

炎天の下に集っている生徒達は一様にフードをかぶっているので、気付かれなかったのはそのせいもあるのかもしれない。葵がそんなことを考えていると、誰かがさっそく声をかけてきた。やつぱりそううまくは隠れられないかと、嘆息した葵は嫌々ながら顔を傾ける。すると視線の先にいたのは、クラスメートのシルヴィアだった。

「おはようございます、ミヤジマさん。あら、本日はいつものお洋服ではないのね」

不躰に葵を見回したシルヴィアは後に「お似合いになっていますわよ」と付け加えた。その一言がお世辞にも聞こえなかった葵は無言のまま顔をしかめる。

葵がいつもは着用しないローブを身につけて登校したのは、昨日の夕食時に実習の話をした時、メイドのクレア「ブルームフィールドにそうした方がいいと勧められたからである。クレア曰く、トリ

ニスタン魔法学園の制服には魔法から身を守るための呪文が刻まれているというのだ。自身が魔法を使えないために魔法への耐性が無い葵は、そういうことならばと暑さを我慢してローブを着用したのだった。しかしさっそく槍玉に挙げられてしまったため、葵はローブで登校したことを少し後悔していた。

(うつつとうしいなあ、もう)

自らが孤立したことによって葵への仲間意識を芽生えさせたシルヴィアは、近頃やたらと話しかけてくるようになった。そして大抵シルヴィアが葵に話しかけてくると、クラスメート達が好奇の目を向けてくるのだ。それは今現在にも言えることで、先程まで思い思いに盛り上がっていた二年A一組の生徒達は一様に口を閉ざしてこちらに視線を傾けている。針の筵に晒されている状態から早く脱したいと思った葵はロバートの姿が見えないかと視線を泳がせたのだが、そこでまずい人物と目が合ってしまった。

「お二人とも、ずいぶんと楽しそうですね」

慌てて目を逸らしたものの時すでに遅く、吊り目の少女が葵達に声をかけてきた。彼女の名はココといい、ココと一緒にいるツインテールの少女は名をサリーという。ココは二年A一組の女子のボスの存在で、サリーは彼女の腰巾着だ。つい先日まではシルヴィアもサリーと同じ立場にいたのだが、マジスターの一人であるウィルとのデートを勝ち得た今は違う。優越感に浸っているシルヴィアは気まずさをまったく見せず、彼女は余裕たっぷりの笑みでもってココを迎えた。

「あら、ココさん。おはようございます」

「おはようございます、シルヴィアさん。お二人で何のお話をなさっていたの？」

「アオイさんが制服を着ていらっしやるので、そのことについてお話ししていただけですわ」

「そういえば本日は珍しく、制服を着ていらっしやるのね」

シルヴィアの話に乗って葵に視線を傾けてきたココは、口元は笑

みを形づくっているものの目が笑っていない。表面上は平穩を装っていてもココもシルヴィアも口調が刺々しく、ギスギスした空気に嫌気が差した葵は「勘弁してよ」と胸中で呟きを零した。

（巻き込まないで欲しい）

そんな葵の願いも虚しく、ココとの話を中断させたシルヴィアが話を振ってきた。彼女がまたしてもピジョン・ブラッドのことに触れたため、その話題に食いついたココが問いを投げかける。するとシルヴィアはいとも簡単に、ピジョン・ブラッドがキリルからのプレゼントであったことを明かしてしまった。ココはマジスターの中でも特にキリルに傾倒しているため、鋭いまなざしが葵の方へ向く。ココに睨まれた葵は憤りを露わにしながらシルヴィアに視線を移した。

（絶対わざとだ）

以前は仲が良かったため、シルヴィアもココがキリルを気に入っていることを知っている。だからこそ彼女は、ココに嫌がらせをするためにピジョン・ブラッドを話題に上らせたのだ。利用された形の葵は怒りを隠しきれなかったが、葵の視線を受け止めたシルヴィアは何事もなかったかのように微笑んでいる。もうたくさんだと思つた葵が口火を切ろうとすると、それより先にココが口を開いた。「そういえばわたくし達、まだミヤジマさんに魔法を見せていたことがないですわね」

ココが不意に話題を変えたので、葵はシルヴィアへの怒りも忘れるほどギョツとした。何故ならその話題は、葵が一番触れて欲しくないと思っていることだからだ。そんな葵の胸中を察しているかのように、不敵な笑みを浮かべたココはこちらに注目しているクラスメート達を振り返る。

「皆さんも興味が有りますわよね？ ミヤジマさんがどのような魔法を使われるのか」

ココの呼びかけに、女子生徒は漏れなく全員が賛同を示した。男子生徒達は顔を見合わせているものの、興味は抱いている様子であ

る。そうしてクラスメートを煽って逃げられないよう周囲を固めてしまつてから、ココは改めて葵を振り返った。

「楽しみにしていますわ」

勝ち誇った笑みを浮かべているココは、それだけを言い置くと葵から離れて行く。その後、間もなくロバートがグラウンドに姿を現したため、葵が呆然としているうちに実習は始まつてしまつたのだつた。

その日、トリニスタン魔法学園アステルダム分校のグラウンドでは生徒が実際に大掛かりな魔法を使う実習が行われていた。実習は各クラスごとに行われるもので、今日グラウンドに集まつているのは二年A一組の生徒である。実習を行っていない生徒は通常どおり教室で授業を受けているのだが、この日、アステルダム分校の屋上には二年A一組が実習を行っている様子を傍観している者の姿があった。炎天の下、屋上で風に吹かれているのは私服の少年が二人。この学園のエリート集団、マジスターの一員である彼らはグラウンドに描かれた巨大な魔法陣の内部にいる白いローブの集団を見据えている。やがて不安定に揺らぐ火柱が立ち上つたのを機に、オリヴァーがグラウンドから目を上げた。

「なあ、本当にやるのか？」

オリヴァーに話しかけられたウィルは口を開くことをせず、ただ横目で隣に佇んでいる彼を見た。しかしすぐに視線を外し、ウィルは再びグラウンドの魔法陣を注視する。いつになく真剣な表情で彼が何を見ているのか、理解しているオリヴァーはため息をつきつつその話題に言及した。

「あの魔法陣を崩すのは大変だろ？」

実習を行う際には、そのクラスの担任教師が大掛かりな魔法陣を敷く決まりになっている。その目的は主に二つ。一つは、未熟な生徒が魔法を暴発させた場合に被害を最小限に留めるためである。そしてもう一つの目的は、外部からの干渉を避けることにある。大掛かりな魔法を使うには長い呪文の詠唱が必要となるため、術者が外部からの影響を受けないよう配慮が施されているのだ。

内側にも外側にも魔的作用を及ぼす魔法陣の内部は、その魔法陣を敷いた教師の領域と言える状態になっている。真剣なまなざしで魔法陣の構造を調べているウィルはある計画のため、今からその魔法陣を崩そうとしているのである。だが二年A一組の教師が敷いた魔法陣は案外に頑丈な代物で、マジスターといえどもそう簡単には崩せそうもない。それに……と、オリヴァーは再びグラウンドの白い集団を見やった。

「アオイ、いないみたいだぜ」

本日の計画は、二年A一組の実習にミヤジマアオイという生徒が参加していないと何も始まらない。葵はいつもトリニスタン魔法学園の制服である白いローブではなくワイシャツにチェックのスカートという目立つ出で立ちをしているのだが、グラウンドの集団の中にはそれらしき生徒の姿は見当たらなかった。仮に実習に参加しているのだとしても、周囲と同じ服装をしては見つけるのが困難である。だがグラウンドの魔法陣から目を上げたウィルは、そのようなことにはお構いなしに淡々と口火を切った。

「アン・ムーヴマン、シエルシュ・1953。これで問題ないよ」

呪文の詠唱が終わると同時にウィルがグラウンドを指したので、オリヴァーもそちらに顔を傾ける。するとグラウンドにいる一人の生徒から、目印となるような魔法の光が発せられていた。探察の光を目にしたオリヴァーは訝しげな表情でウィルに視線を移す。オリヴァーの視線を受け止めたウィルは意味ありげな表情で笑って見せた。「魔法陣の綻びも見つけたし、あとはキルだけだね。オリヴァー、

呼んで来てよ」

「……そんなことしなくても、来たみたいだぜ」

視界の片隅で転移魔法に伴う光を捉えたオリヴァーはウィルの言い草に呆れながら顔を傾けた。ウィルももう察知していたようで、背後を振り返った二人はアクビをしながら歩み寄って来るキリルを迎える。

「あちい。ねみー」

「じゃあ、始めようか」

顔を合わせるなり不平不満を並べ立てたキリルの言葉をきれいに無視したウィルは、そう宣言すると共に巨大な魔法陣が描かれているグラウンドへと視線を傾けた。

Practise (4)

グラウンドでの実習は、ロバートが大掛かりな魔法陣を敷くことから始まった。すでにグラウンドは魔法陣に呑みこまれていて、魔法陣が放つほのかな光が足下から立ち上っている。魔法陣の中心部ではロバートに指名された生徒が大掛かりな魔法を披露していて、隅の方でひっそりと佇んでいる葵は見学もそこに忙しくロブの胸元をためかせていた。

(あつ……)

魔法陣の中心部では火柱が立ち上っていて、不安定な炎はうねりながら晴れ渡った夏空へ上っている。火柱が蛇行するたびに火の粉が舞ううえ外気は夏の盛りのものである、距離をとっていてもかなり熱い。しかし同じ服装をしてはいても葵の他は、一様に涼しい表情で他人が魔法を使う様子を見学していた。

(何かの魔法を使ってるのかな)

前に着膨れたせいでシルヴィアが倒れた時、生徒達は嘲りを込めながら冷却の魔法がどの話をしていた。そのことから察するに、一年中同じ格好をしている生徒達は各々で温度調節をしているのだ。そうでなければ葵のように、汗だくになっていなければおかしい。

(それにしても、あつついなあ……)

授業が始まる前に一悶着あっただけに、授業が始まってすぐの頃は余計な緊張を強いられていた。しかしあまりの熱さの前に、今はそれだけしか考えることが出来ない。ついには気分が悪くなってしまったので、葵はその場にしゃがみこんで額に手を当てた。刹那、滴るほどだった汗が一瞬にして引いていく。何かと顔を上げた葵が見たものは、地中から突き出ている巨大な氷柱の群れだった。

(うわぁ、ぜつたいカゼひく)

つい先程まで息をすることさえ苦しいような熱風が吹き寄せてき

ていたのに、今は真冬の寒さに逆戻りである。氷柱はすぐに姿を消したものの、また真夏の暑さが戻って来たため、眩暈を覚えた葵は小さく頭を振りながら立ち上がった。

「では、次は……」

そこで言葉を切ったロバートが、反射的な様子で葵の方を振り返った。ロバートの視線につられてなのか、授業に集中していた生徒達も一様に中心部から少し離れた場所にいる葵を振り返る。きつかけが分からないまま突如として針の筵に晒された葵は瞬きを繰り返した後、困惑して顔を歪めた。

「ミヤジマ！アオイ」

それまで魔法陣の中心部にいたロバートが、声をかけながら歩み寄って来る。彼の端正な顔はわずかにしかめられていて、何か良くないことが起こったのだと示唆していた。しかしロバートが本題を口にする前に、横から誰かが口を挟んでくる。

「ロバート先生、次はアオイさんがよろしいのではございませんか？」

横槍を入れてきた声には聞き覚えがあったので、葵はさらに渋い表情になりながらクラスメート達の方を見た。案の定、クラスを代表するように意見を述べているのはココである。ココが周囲にいるクラスメート達に同意を求めたため、二年A一組の生徒からは「葵の魔法が見たい」という声が続々と上がった。しかし葵と向き合っていたロバートは、至って冷静に教え子達を振り返る。

「今日、私が指名している生徒は成績優秀者だ。指されなかった者は技術・知識共に劣っているので、そのつもりでいるように」

ロバートの一言には絶大な効力があり、それまでどこか間延びしていた生徒達は一斉に顔色を変えた。魔力や魔法が全ての基準であるトリニスタン魔法学園では落ち零れは容赦のない侮蔑に晒される。クラス内だけの格付けとはいえ、それは今後の立場を微妙に左右する代物なのだ。そのためロバートに進言したココを初め、まだ指名されていない生徒達は一様に緊張感を漲らせている。もう誰からも

魔法を使えとは言われない雰囲気だったので、葵はホツとしてロボットを仰いだ。

（ありがとうございます）

衆人環視の中では声に出すことは出来ないが、せめてもと思った葵は胸中でロボットにお礼を言った。葵的にはそれで全てが解決したように思われたのだが、葵に視線を戻したロボットは未だに難しい表情をしている。ロボットがまだ渋い表情をしていることを不思議に思った葵は首を傾げたのだが、その直後に異変は起きた。

向かい合って佇んでいる葵とロボットの間に突如として発生したつむじ風は、その凄まじい勢いでもって二人を弾き飛ばした。何が起きたか分からないまま地面に倒れこんだ葵は、反射的に上体を起こした拍子に信じられない光景を目にして瞠目する。土を巻き込みながら渦を巻いている黒い風が、すぐ目の前にあつたのだ。逃げ出す時間も恐怖を感じている余裕もなかった葵は本能的に体を丸めて縮こまる。何がどうなったのかは分からなかったが、凄まじい嵐はやがて通り過ぎて行った。

体を感じていた凄まじい強風が過ぎ去ってから、葵は呆けたまま顔を上げた。その拍子に何か生暖かいものが頬に落ちてきたので反射的に手を当てた葵は指先に付着したものを見てギョツとする。我に返って再び顔を上げると、目の前には誰かの姿があつた。

「……大丈夫か？」

太陽の光を遮るようにして微笑んでいるのは、担任教師のロボットだった。彼の端整な顔は血にまみれていて、よくよく見れば体中が切り裂かれている。傷だらけのロボットが力なく倒れこんできたので、葵は悲鳴に近い声を上げながら彼の体を抱きとめた。

「先生！ ロボット先生！！」

「ああ……大丈夫だ。汚れてしまうから、離れていなさい」

「そんなこと言ってる場合ですか！ 早く、保健室に！」

ロボットの気遣いを一蹴した葵は膝をついている彼を無理矢理促して立ち上がらせた。歩き出したロボットの足元は意外にしっかり

としていたが、葵はロバートの体を支えた状態のまま一緒に歩を進める。向かう先には何故かあ然としているキリル。エクランドがあったが、ロバートの怪我で頭がいっぱいの葵はその存在の異様さを気にすることもなく保健室へと向かった。

屋上から事の成り行きを見守っていたオリヴァーとウィルは、葵と二年A一組の担任教師が校舎の影に姿を消した後もしばらく無言のままだった。実習を行っていたグラウンドでは教師が姿を消してしまっただけで、そこに集まっている生徒達は誰もが目撃したように立ち尽くしている。実習の途中で乱入して行ったキリルも、まだこちらへ戻って来てはいない。おそらくはあの狐につままれたような雰囲気の中に包まれている場所で、まだ呆然としているのだろう。

ウィルが立てた今回の計画は、葵のピンチにキリルが駆けつけることで彼女の意識を変えようというものだった。そのピンチを作り出したのはウィルであり、彼は外部からの干渉が出来ないようにしている魔法陣の一部を壊してまで強行に及んだのだ。そうしてウィルがつむじ風を起こした後は、キリルが「助けに来た」という顔をしてタイミング良く葵の前に現れればいい。ただそれだけの話だったのだが、キリルが演じるはずだったヒーローの役どころは二年A一組の担任教師に持っていかれてしまった。

「……無駄な労力使ったな」

キリルがタイミング良く魔法陣の中へ入れるよう手助けをしただけのオリヴァーは、自身とは比べ物にならないほど魔力を消費したウィルに呆れながら声をかけた。しかし無駄な魔力を使ったはずのウィルは平然とした様子で「そうでもないよ」と言っただけのける。そ

の直後に風が吹いて、天から降ってきた何かがウイルの手元にストンと収まった。円陣で囲まれた五芒星^{ペンタグラム}が表紙に描かれている魔法書がウイルの手の中にあるのを見て、オリヴァーは眉根を寄せる。

「もしかして、最初からそっちが狙いだったのか？」

「どっちも成功させるつもりだったよ、僕はね。さて、と。キルが戻って来たらうるさいから移動しようか」

「……………」

「これの中身、興味ない？」

「……………行くか」

ウイルのやり方に呆れを募らせつつも謎の魔法書が持つ魅力には勝てず、オリヴァーもまた未だ呆れているであろうキルを捨て置いてウイルと共に姿を消した。

Practise (5)

「いらつしゃいませ」

保健室の扉を開くなり、この部屋の主である白いウサギの間延びした声が聞こえてきた。その口調の軽さと、ふざけているように聞こえる調子に苛立ちを募らせた葵はデスクの上に陣取っているウサギからすぐに視線を外す。しかしウサギの方は葵とロバートの姿を認めるなりデスクから飛び下り、そのまま高速で走り寄って来た。

「血がー！ 血がー！！」

そんな叫び声を上げたかと思うと、ウサギは慌てふためいて右往左往しだす。足下でうるちよると動き回られては移動も出来ないため、葵はなおのことイライラした。しかし葵が声を張り上げる前に、ロバートが静かに口火を切る。

「私のクラスの生徒がグラウンドにいる。彼らに、今日はもう帰宅していいということ伝えてきてもらえないだろうか」

ロバートが丁寧に頼みごとをすると、それまで忙しなく動き回っていたウサギはピタリと動きを止めた。その後、ウサギは例によって何かと交信でもしているかのように何も無い宙を仰ぐ。そして何かに頷いて見せた後、ロバートの頼みごとを了承したウサギは四足歩行で保健室を出て行ったのだった。

「ありがとう、もう大丈夫だ」

葵にそう言い置くとロバートは自力で歩を進め、簡易なベッドの上に腰を落ち着けた。後ろ手に保健室の扉を閉ざした後、葵は救急箱がないかと室内を物色する。しかしそれらしき物は見当たらず、棚に包帯を発見した葵はとりあえずそれだけを手に取った。

「先生、包帯……」

ロバートに声をかけながらベッドの方を振り返った葵は、そこで目にした光景にギョツとして言葉を途切れさせてしまった。ロバートが、いつの間にか上半身裸という姿になっていたからである。だ

がドキツとしたのも束の間、彼の体に刻まれている傷を見た葵は顔をしかめながらロバートの傍へ寄った。

「先生……」

「怪我はなかったか？」

「あ、はい。私は大丈夫です」

「そうか。それは良かった」

葵に微笑みを向けると、包帯を受け取ったロバートは自身で傷の手当てを始めた。しかし腕にも傷を負っているため、片手では作業がしにくそうである。見兼ねた葵はロバートの腕を取り、そのまま包帯を巻くという作業を引き受けた。

（私のせい、だよ。やつぱり……）

ロバートがこんな怪我をする羽目になったのは偏に葵が魔法を使えないことに原因がある。同じ状況下にあってもトリニスタン魔法学園に通う一般的な生徒なら、おそらく自分の身は自分で守ることが出来ただろう。しかし葵が魔法を使えないのは、仕方のないことである。そのため謝っていいものなのか判断がつかず、葵は重苦しい感情を抱えながら黙々と作業を続けた。

「ミyajima「アオイ」

「はい」

「私は謝られるよりも礼を言われる方が好きだ」

「……はい？」

言葉の意味を捉えそこなった葵が訝しい思いで目を上げると、ロバートは穏やかに微笑んでいた。優しさを内包させたロバートの笑みに、知らずのうちが強張らせていた体から力が抜けていく。少し気が楽になった葵は遅ればせながらロバートが言っていることの意味に気がつき、小さく吹き出してしまった。

「助けてくれてありがとうございます」

「君を護ることが出来て私も嬉しいよ」

「先生、それじゃ口説き文句ですよ」

葵が気軽に笑い飛ばしたのに対し、ロバートは少し寂しそうな笑

みを浮かべた。予想外の反応が返ってきてしまったため、違和感を覚えた葵は徐々に笑いを治める。

（あ、あれ？ 何、この雰囲気）

いつの間にか、ロバートが教師ではなくなっている。葵がそう感じたのは、彼のミッドナイトブルーの瞳が何らかの感情を示していたからだ。しかしそれが何か解らなかつたため、葵は困惑してしまつたのだつた。

「ミヤジマ「アオイ」

「うっ、は、はい」

急にロバートのことを異性として意識してしまつたため、葵は及び腰になって呼びかけに応えた。すると葵が逃げるのを阻止するかのように、ロバートが腕を伸ばしてくる。男の手にがっちり腕を掴まれた時、こういつたことに免疫のない葵は悲鳴を上げそうになつてしまつた。

「このブレスレットは捨てた方がいい」

「へ……？ ブレス、レット？」

至つて平靜なロバートの態度に虚を衝かれた葵は、呆けたまま自分の手元に視線を移した。ロバートに掴まれている方の手には、確かにブレスレットが嵌められている。それは葵がこの世界に来てから手に入れたもので、ある時を境に常用品となつていた代物だつた。「私が処分しておこう」

そう言い置くと、ロバートは空いている方の手を葵のブレスレットへと伸ばした。とっさに「ダメ」と叫んだ葵はロバートの手から自身の腕を奪い返す。ブレスレットを守るように胸の前で手を組んだ葵は、そこで自分のとつた行動の意味に気がつき、瞠目してしまつた。

（私……）

まだ、忘れられていない。改めてそう気付かされた葵は、皮肉な思いを苦笑で誤魔化してロバートに視線を戻した。

「すみません。大切な、ものなんです」

「……そうか。だがそれは、君には好ましくない魔法道具だ。もう捨てるとは言わないが、外して家に置いておいた方がいい」

「……はい」

何がどう好ましくないのかは分からなかったが、葵の意識はロバートに質問を投げかけるといふ方へは向かわなかった。好ましくないものをプレゼントされた理由よりも自分の心の動きが衝撃的で、動揺を収めきれない。そんな葵の胸中を察したのかどうかは定かではないが、ロバートは伏目がちに立ち尽くす葵に早々の帰宅を勧めたのだった。

「アル」

葵が立ち去って人気のなくなった保健室で、ロバートは空を仰ぎながら呼びかける声を発した。刹那、その呼びかけに応えるかのように、室内の空気がざわざわと蠢き始める。初めは感覚として捉えた変化はやがて具現となり、保健室全体が淡い光を放つ障壁に覆われていった。この障壁は魔力そのものによって形作られたもので、魔法陣よりもさらに強力な隠匿・隔絶の効力を有する。部屋全体がこの障壁に覆われたということは、この部屋が外部から完全に隔離されたことを意味していた。

「君は馬鹿だ」

保健室全体を魔力の障壁で覆うという荒業をやつてのけた術者は、ロバートにそんな言葉を投げかけながら姿を現した。さらさらの金髪にブルーの瞳といった容貌が目を引き彼の名は、アルヴァニアロースミス。校内らしく白衣を着用しているアルヴァをミッドナイトブルーの瞳に映したロバートは、友人に向けるような気安い笑みを

浮かべて彼を迎えた。

「その口ぶりからすると、見ていたようだな」

「見せるよう仕向けておいてよく言うよ。何故、退けなかった？

あれくらいの魔法、君ならどうとでも出来たはずだ」

「傷を負った方が護ってもらったという思いが増すだろう？ 予想

以上に愛らしい反応をされたので、危うく手をつけそうになってしまった」

「呆れた策士だな」

利口とは言えないねと付け足したアルヴァは白衣のポケットから何かを取り出し、それをロバートの方に放った。投げ渡された小瓶をしつかりと受け取ったロバートは、さっそくその液体を傷口へと塗り始める。手当てには手を貸さず、アルヴァはデスクの椅子に腰かけて不機嫌そうに脚を組んだ。

「その薬、試作品だからもうないよ。またこんなことがあっても助けないから、そのことは心得ていてくれ」

「傷を負うと痛いからな、もうやらないさ。それよりアル、ミヤジマニアオイの着けているブレスレットは誰からのプレゼントだ？」

「知らないよ。興味もないからね」

「監督不行届きだな。彼女のことはレイチエルから一任されているのだろう？」

「……誰にももらったのかは知らないが、心当たりならある」

ことごとくレイチエルの名前を持ち出してくるロバートに心底辟易しながら、アルヴァは渋々推測を口にした。

「大切なものだと言っていたから、おそらくはステラニアカーティスかハルニヒューイットにももらったものだろう」

「我がアステルダム分校から本校へ移籍したマジスターか。ミヤジマニアオイは彼女達と親しかったのか？」

「ステラニアカーティスとは友だちだったみたいだよ。ハルニヒューイットは初恋の相手、ってところかな」

「そうか。それなりに恋愛経験はあるようだな。それで、ハルニヒ

ユーイットとはどこまでの関係だったのだ？」

「そんなこと知らないよ。自分で聞き出せばいいだろう？」

本格的に嫌気が差してきたアルヴァは話を切り上げて席を立った。自分で聞き出せばいいという言葉に納得したのか、ロバートもそれ以上は質問を重ねてこない。ただ、何事かを考えているらしい彼は顎に手を当てたまま、

「昔の男か……面白い」

などという独白を零していた。

豪華な飾り窓から差し込む夜の光が大理石の床にもう一つの窓を映し出す夜、斜光から外れた場所にある天蓋つきのベッドは主を迎えることなくきちんと整えられていた。一人が使用するには無駄に広い室内に人影はなく、ただテラスに面した窓にかかっている薄手のカーテンだけが夜の微風に揺れている。平素であればキングサイズのベッドで丸くなっている時分、その部屋の主である葵はテラスでオレンジ色の月光を浴びながら物思いにふけていた。

ハルにもらって以来、葵は何となくブレスレットを嵌めたままでいた。初めの頃は純粹にプレゼントされたのが嬉しかったから身につけていたのだが、外すことをしないうちにいつの間にか、身に着けていることが当たり前になっていったのだ。近頃はその存在すら、ほぼ失念していた。だがそれを捨てると言われた時、葵の心は激しい拒絶を示してみせた。

(私、ほんとにハルのこと好きだったんだなあ……)

自分の気持ちではあっても、それを改めて確かめてしまったことは驚きだった。一体いつまで、この気持ちは熱を失わないのか。そう思った葵は自分の性格を考えてみて、苦い笑みを浮かべた。

(一度はまっちゃんとなかなか冷めないんだよねえ)

その典型的な例が葵の愛する芸能人、加藤大輝である。彼との出会いは今から三年前に遡るが、未だ彼を愛する気持ちは衰退を見せない。そのことを考えれば、初恋を忘れるまでに最低でも三年はかかってしまうのかもしれない。どうしようもない想いを三年も引きずってはいたくないと思った葵は苦々しくため息をついた。

(ハルはステラと幸せになったんだから。もう、いいじゃない)

自分にそう言い聞かせることで思考を断ち切った葵は室内へ戻って、外したブレスレットを私物の鞆にしまった。捨てられはしないけれど、目に触れなければそのうちに忘れていくだろう。そしてい

つか、ハルに恋した気持ちを懐かしんで、また身につけられたらいい。気持ちが思い出に変わるまでの時間はさておき、自分の中で一応のけじめをつけた葵は鞆をデスクの脇に置いて立ち上がった。

（クレアにお茶でも淹れてもらおう）

体が微妙に変調を訴えていたこともあり、葵は気分を変えてからベッドに入ることにした。この屋敷の使用人であるクレアは小さな呼び鈴を鳴らすだけですぐに駆けつけて来てくれるが、いつも呼びつけてばかりでは申し訳がないと思った葵は彼女を探すために室外へと向かう。夜の屋敷にはオレンジ色の月明かりが差し込んでいて、昼間とはまた違った幻想的な雰囲気醸し出していた。

（なんか、これくらいの間帯に歩き回るのって久しぶりかも）

橙黄オレンジの月の初めにクレアがやって来てから、葵は規則正しい生活を送っていた。夜の廊下を歩く時もクレアが魔法で足下を照らしてくれるため、こうして月明かりを浴びながら屋敷内を歩くのが久しぶりのような気がするのだ。実際、クレアがやって来てからもう一週間以上経っていることに気づき、葵は改めてアルヴァの不在に思いを及ばせた。

（結局、クレアが誰に言われて来たのかまだ分からないだよな）

クレアに世話を焼いてもらう生活に何となく馴染んできてしまっているものの、根本的な問題は何も解決していないのだ。にもかかわらず葵があまりそのことを気にしないでいられるのは、クレアが何も尋ねてこないからである。

（それもあれかな、使用人としてやってやつののかな）

クレアはよく『メイドとはかくあるべき』のようなことを口にす。まるで漫画や小説の登場人物のようだと思った葵は密かに苦笑しつつ足を止めた。

（クレア、どこの部屋使ってるんだろう）

住み込みで働いている以上はどこかの空き部屋を私室としているはずだが、葵はクレアがどのような生活をしているのかまったく知らなかった。だが寝室において人の気配や物音を感じたことはない

め、おそらく二階ではないだろう。まだ起きているかもしれないと思つた葵は、とりあえず厨房に向かつてみることにした。

葵が一度足を止めた踊り場から階段を下ると、そこは広々としたエントランスホールである。エントランスホールには四つの扉があつて、その奥にはそれぞれ廊下が続いている。玄関脇の扉を開けた葵は厨房や食堂がある方向へと歩を進めたのだが、行き着いた先はひっそりと静まり返つていた。明かりも灯っていないので、おそらくここにはいないだろう。そう察した葵は元来た廊下を引き返し、今度は玄関脇にある反対側の扉を開けた。

夜の静謐に包まれている廊下を歩いてみると明かりが漏れている部屋があつたので、葵はすぐそちらに寄つた。しかし扉をノックしようとする前に異変に気が付き、葵は伸ばしかけた腕を止める。

「はい、お怪我はなさっていないようです」

扉の向こう側から微かに漏れ聞こえてきたのはクレアの声だった。その調子が誰かと話をしているような感じだったので、葵は首をひねる。

（お客さん？ こんな夜に？）

この世界には時計というものが存在しないので現在が何時に当たるのかは分からないのだが、すでに月は中天に昇つている時分である。来客にしては遅すぎるのではないかと思つた葵は不審を感じて眉根を寄せた。しかも明らかに会話をしているにもかかわらず、室内からはクレアの声しか聞こえてこない。電話中かとも思つたのだが、葵はすぐに自分の考えを否定した。

（電話なんて見たことないよ）

よく分からなかったがこのままでは盗み聞きになつてしまうため、葵は意を決して扉をノックした。その後には扉の外から呼びかけると、それまで誰かと話をしていたクレアの声がピタリと止む。少し間があつてから、驚いたような表情をしたクレアが室内から顔を覗かせた。

「お嬢様。どうされました？」

「寝付けないから紅茶を淹れて欲しいなあと思って」

「それで、わざわざいらしたのですか？ ベルでお呼びくださればよろしかったのに」

わずかな隙間に体を滑らせたクレアは、廊下へ出るとすぐ扉を閉ざした。その行動が何かを隠しているように思えて、葵は微かに眉根を寄せる。ちょうど月明かりの届かない場所だったため葵の変化を察したかどうかは定かでないが、クレアは何事もなかったかのようには言葉を重ねた。

「準備してお持ちいたしますので、お嬢様はお部屋にお戻り下さい」
「あ、うん……」

疑問を口に出ることが出来ないまま、クレアに促された葵は一人で寝室へと戻ることになった。二階の片隅にある寝室へ戻ってしばらくすると、軽いノックの音と共にクレアが姿を見せる。ワゴンを押して室内へ入って来たクレアは魔法で明かりを発生させ、窓辺の席で紅茶の準備を始めた。

「……ねえ、クレア」

「はい」

「さつき、誰か来てたの？」

葵が尋ねると、クレアはいつのことを言っているのかと質問を返してきた。はぐらかされているように感じた葵は、ついさつき声をかけに行った時のことだと明答する。するとクレアは、誰も来てないという答えを寄越してきた。

「でも、誰かと喋ってなかった？」

「マトに話しかけておりましたので、わたくしの声が聞こえたのであれば、きっとその時のものでしょう」

そう答えたクレアの態度は非常に堂々としたものだったが、葵にはそれが嘘であることが分かってしまった。あまりにも平然と嘘をつかれたため、胸苦しさを覚えた葵は顔をしかめる。だがクレアが紅茶を持って傍へ来たので、葵はすぐ無表情へと戻った。

「失礼いたします」

葵の傍へ来たことで何かに気付いた様子のクレアは、そう言い置くと彼女の額に手を当てた。クレアの突然の行動に驚いた葵はティーカップを受け取った体勢のまま硬直する。

「少し、熱があるようですね」

「熱？」

「夜が更けると上がってしまうかもしれません。枕元にベルを置いておきますので、お体の調子が思わしくないようでしたらお呼び下さい」

そう言い置くとクレアはいったん葵の元を離れ、デスクの上に置いてあったベルを手にベッドの方へと戻って来た。ベッドに横たわったままでも手が届く位置にベルを置いたクレアは今度は衣装棚へ向かい、少し厚手のカーディガンを引っ張り出してくる。冬場に着用していたカーディガンをベッドの傍へ運んできたテーブルにかけると、クレアは改めて葵を振り返った。

「それではお嬢様、おやすみなさいませ」

律儀に一礼して見せると、クレアはワゴンを押して去って行く。

その背中に「おやすみ」と返しつつも葵の心は晴れないままだった。

(……寝よう)

体の調子が悪い時は思考も正常ではいられない。疑念を胸の底に押し込めて自分にそう言い聞かせた葵は、少し温めの紅茶を干すとキングサイズのベッドに転がったのだった。

つながる世界(1)

夏月期中盤の月である橙黄とうきゆうの月の十日。その日の朝、いつものように使用人に起こされた宮島葵は食堂でゆつくりと朝食をとっていた。その屋敷の食堂は貴族の邸宅らしく広々としていて、葵が食事をしているテーブルも多数の来客を迎えられるよう細長い作りになっている。真っ白なテーブルクロスをかけられた卓上には一定の間隔で生花が飾られていたりと雅な雰囲気醸し出しているが、その上に並んでいる料理はテーブルの豪華さに反して慎まじやかなものだった。

「ごちそうさま」

一人分の食事をきつちりと平らげた葵はナイフとフォークを置き、傍に佇んでいるメイド服姿の少女に向かって軽く手を合わせた。葵と同年代だと思われる彼女の名は、クレア・ブルームフィールドという。料理を作ってくれた人に対する感謝を述べるのは貴族らしからぬ行為であり、クレアは当初こそ戸惑うような様子を見せていたものの今ではすっかり葵の習慣に馴染み、特に気にするでもなく空になった皿を片付け始めた。腹がふくれた葵はイスの背もたれにゆつたりと体重を預け、食後の紅茶が出てくるのを待つ。テーブルの上を手早く片付けたクレアはすぐにティーポットへと手を伸ばし、手作業で淹れた紅茶を葵の前へ置いた。

「だいぶ、お体の方はよろしいようですね」

クレアがそんな科白を投げかけてきたのは昨日、葵が熱を出して寝込んだからである。風邪をひきそうだと思っていて、まんまとひいてしまった自分に苦笑しながら葵はクレアに頷いて見せた。

「うん、もう大丈夫。看病してくれてありがとね、クレア」

葵が改まってお礼を言うと、クレアは「それが仕事だから」という旨の答えを寄越してきた。そうだった反応を返されることは分かっていたものの、若干の寂しさを感じた葵は気付かれないよう小さ

く肩を竦める。やはりクレアには、使用人という立場以上に葵と親しくなる気はないようである。

（私だつてクレアに隠し事してるんだから、お互い様だよな）

秘密を抱えながら共同生活をしている以上は、踏み込んでほしくない一線というものが存在するのは仕方がない。そう割り切つて考えることにした葵は一昨日の晩の出来事をなかつたことにしたのだつた。

「お嬢様、本日はいかがなさいますか？」

トリニスタン魔法学園へ行くつもりだつた葵はクレアから不意に投げかけられた問いに首を傾げた。

「学校に行くつもりだけど……何で？」

「本日は休日です」

「あ、十日かあ。そっか……じゃあ、どうしようかな」

休日をすっかり失念していた葵はティーカップをソーサーに戻し、考え事をするために空を仰いだ。これが元いた世界で投げかけられた問いならば、答えは考えるまでもなかつただろう。しかし異世界から召喚された人間である葵にはまだ、この世界での基盤が出来上がっていないのだ。だから自由に答えられる質問をされてしまうと、逆に答えに詰まってしまう。

「……ゲームでもしようかな。クレア、付き合つてくれる？」

この世界での娯楽がよく分かつていない葵にとつて、今はコンバーツというボードゲームが唯一の遊びだった。コンバーツは対戦型のゲームであるため、相手がいないければ遊ぶことが出来ない。ゲームに付き合うことも仕事の一環だと思つている節があるクレアは、嫌な顔一つせずに葵の申し出を受け入れた。

「かしこまりました。わたくしは所用を片付けてから参りますので、お嬢様は先にお部屋へお戻り下さい」

「うん。分かつた」

食堂の後片付けを済ませてから来るのだろうと思つた葵は、クレアの言葉に従つて席を立つた。その足でエントランスホールを抜け、

二階の隅にある寢室を目指す。葵が寢室へ戻って程なくすると、クレアがゲーム道具一式を持って姿を現した。

「お待たせいたしました」

葵に決まり文句を告げると、クレアはすぐ窓際に置かれているテーブルへと向かった。クレアが手際よくセッティングをしているのを眺めながら、葵は彼女の向かいに腰を落ち着ける。薄手のカーテンが適度に夏の日差しを遮ってくれる窓辺で、葵とクレアは対戦を開始した。

コンバーツとはお互いに五種類の駒を使って相手を攻め立てる、チェスに似たゲームである。チェスで言うところのキングに相当するのが太陽と月を表した駒で、どちらかがこれを落とされればゲームは終了となる。キング（太陽か月）の盾となりながら敵への攻撃を行うのが火・水・木・土を象った駒であり、これらの駒にはそれぞれに特性がある。しかしコンバーツを始めて日が浅い葵はまだ駒の働きをよく理解しておらず、知らずのうちにルールを無視してしまうことがしばしばあった。

「お嬢様、その駒は火の駒を飛び越えることは出来ません」

「えっ、そうだっけ？」

「火を鎮めることが出来るのは土だけです。水は相殺、木は灰になり、風は火の勢いを増します」

水の駒は火の駒を倒すことは出来ず、木の駒は逆に火の駒に倒されてしまい、風の駒が近くにいる時には火の駒の動きが変則的になる。クレアが言っているのは、要はそういうことである。理解を追いつかせようと必死な葵は真剣そのものの形相で盤面を凝視し、長い時間を使った後であることに気がついてしまった。

「もしかして、手詰まり？」

「残念ですが、その通りです」

次の一手で葵がどう駒を動かそうと、クレアは葵の太陽を倒すことが出来る。すでに勝負が決まっていたことに今さらながらに気がついた葵はイスに体をもたれかけ、がっくりと脱力した。

「勝てない……」

「お嬢様はまだコンバーツのルールを把握されていないようです。ですがそれは、そのうち解消されるでしょう。もう一勝負いたしま
すか？」

「うーん、今日はもういいや」

連戦連敗している葵は頭を使うゲームに嫌気がさしてしまい、苦笑を浮かべながらクレアの申し出を断った。それでもクレアは嫌な顔一つせず、葵の意に従って後片付けを開始する。窓際の席からベツドへと移動した葵は片付けをしているクレアの姿を目で追いながら彼女に話しかけた。

「ねえ、クレアってどこから来たの？」

地理感がないのでどうせ分らないだろうなとは思いながらも、葵は会話を繋げるためにクレアの出身地を尋ねてみた。すると、てきぱきと片付けをしていたクレアの手がとどまる。しかし彼女が動揺を見せたのは一瞬のことで、すぐに片付けを再開させたクレアは葵を振り返ることなく問いの答えを口にした。

「わたくしは坩堝島るつぼの出身です」

「るつぼ島？ どこにあるの、それ？」

「ご存知ない、のですか？」

手を動かしながら話に応じていたクレアが、そこで初めて葵を振り返った。微かに眉根を寄せている彼女の反応から突っ込まれるかもしれないと思った葵は身構えたのだが、クレアはしばらく沈黙した後、問われたことの答えのみを返してくる。

「アン・カルテ」

短く呪文を唱えた後、クレアはエプロンのポケットから取り出したペンを宙に放った。クレアの手を離れたペンは空中で光を帯び、ひとりで地図を描き出していく。光の線で描かれた世界地図が空中で完成してから、クレアはある場所を指し示した。

「ここが坩堝島です」

葵が生まれ育った世界の地図は七大陸だったが、二月が浮かぶこ

の世界の地図では大きさの異なる大陸が東西に存在する。クレアが指差したのは、両大陸のちょうど中間地点の海に浮かぶ小さな島だった。

「へえ、小さいんだね」

「面積はファスト大陸の十分の一しかございませんが、人口は同大陸のフローズ国と同程度です」

この世界の地理に疎い葵にはクレアが何を説明してくれているのか、さっぱり分からなかった。葵から反応が返ってこないことの意味を正しく汲み取ったらしいクレアは、特に訝しげな表情を見せるでもなくさらなる説明を加える。

「ファストは西の大陸の名称です。フローズ国は、ここです」

クレアが指し示したのは西の大陸の北部にある、地図上でもそれなりの大きさを有している国だった。フローズ国と坩堝島を見比べてみれば、その大きさはおよそ三倍くらいであり、葵は地図に視線を注ぎながらしきりに目を瞬かせる。

「このことと同じくらいの人が、あの小さな島にいるの？」

「はい。坩堝島では人々がひしめきあうようにして暮らしています」

「それは……きゆうくつそうだね」

日本の都会もそうだったが、もしかしたら坩堝島はそれ以上に狭苦しいのかもしれない。その光景を想像した葵は行きたくないなあと苦笑いを浮かべた。

「王都っていうのは？ どこにあるの？」

「スレイバル王国の首都をお尋ねですか？」

「えーっと、こっちの、大きい方の大陸の、かな？」

「それでしたら、こちらになります」

クレアが東の大陸の中西部を指し示したところでふと、彼女の肩口で腹這いになっていたワニに似た魔法生物が大きく顔を持ち上げた。彼は名をマトといい、マトが動き出したことでクレアもあらぬ方向へと顔を傾ける。空中に描かれた地図越しに彼女達の様子を見て取った葵は不思議に思って首を傾げた。

「どうしたの？」

「いえ。所用を思い出しましたので、わたくしはこれで失礼いたします」

葵に向かって一礼すると、クレアは足早に室外へと向かう。広い部屋に一人取り残された葵は何とはなしに、久しぶりに目にしたこの世界の地図に見入った。

つながる世界(2)

(あの辺が王都、かぁ……)

クレアに教えてもらった王都の場所は、東の大陸の中西部である。地図上ではそこがどのような場所なのかまで窺い知ることが出来ないが、王都と言うからはきっと華やかな都なのだろう。だが葵の心は王都の風景よりも、そこへ行ってしまった人たちのことに囚われていた。

(ステラとハル、元気かな)

トリニスタン魔法学園アステルダム分校のマジスターだったステラ、カーティスとハル、ヒューイットは葵にとって特別な存在である。その思いは傍にいた時から、彼らが遠くへ行ってしまった今に至るまで変わらずに胸の中にある。だが例え葵が王都へ赴いたとしても、彼らに会うことは出来ないのだ。おそらくもう二度と、彼らと顔を合わせることはないだろう。

(……やめよう)

一人きりの部屋で彼らのことを思い返していると切なくなってしまう。そう思った葵は地図の傍へ寄り、手で空中を払うことで光の線図を消し去った。その後ベッドへと戻った葵は間際に靴を脱ぎ、極上のスプリングを軋ませながらうつ伏せで倒れこむ。

(これからどうしよう……)

用事があると言っていたので、クレアはもう相手をしてくれないだろう。まだ日は高く、昼食後の予定は未定のままである。何もすることがないのは辛いので、葵は出掛けることに決めて勢いよく起き上がった。

(ザックの所にも行くこ)

ザックか、彼の妹であるリスと一緒にいると時間が経つのが早い。ただ、ザックの所へ行くためにはクレアにパンテノン市街まで送ってもらわなければならないのだ。

(いいかげん、悪いよね……)

そう思った葵は出掛けるのを我慢しようかとも考えたのだが、あることを思い出してすぐに考えを改めた。

(そうだ、リズの服。借りっぱなしだった)

以前にザツクの所へ遊びに行った時、葵は彼が仕事をしている様子を見るのに夢中で汗だくになってしまった。着替えが必要なほど汗をかいてしまった葵は、その時にリズの服を無断で借りたのである。その洋服はクレアに洗っておいてと頼んだため、どのみちクレアを呼びつけないことには何も始まらなかった。

悪いなあとは思いつつも、葵はデスクの上に置いてある呼び鈴ベルを手にとった。音の鳴らないそれを軽く左右に揺さぶれば、すぐにクレアが駆けつけて来てくれるのである。しかしこの時は、いくら待ってもクレアは姿を現さなかった。

(……あれ?)

もう一度ベルを振ってみても反応がなかったため、葵はクレアを探すために寝室を後にした。廊下へ出た直後、足元にあった何かを踏みそうになった葵は慌てて体をのけ反らせる。間一髪の所で回避した後、葵は改めて足元にある物体を見やった。

「マト?」

大理石の廊下にべったりと腹這いになっているのは、クレアのパートナーである魔法生物だった。ワニに似た姿をしているマトは、葵の独白に応えるかのように細長い口を持ち上げる。もともとこの生物を苦手に思っている葵は、マトの動作にビクツとして数歩後ずさった。

(こ、怖……)

同じ不可思議な生き物でも、マトは保健室のウサギのように人語を喋ったりしない。クレアが会話をしていたので意思があるらしいことは分かっているのだが、疎通が出来ないだけにマトには得体の知れない恐ろしさがあるのだ。

葵がどうしようかと悩んでいると、それまで無言で葵を見上げて

いたマトが不意に首を傾けた。つられて顔を傾けた葵は廊下の先からクレアがやって来るのを目にして、ホッと胸を撫で下ろす。早足で葵の元へやって来たクレアは床に張り付いているマトを抱き上げ、それから葵に向かって頭を下げた。

「お待たせしてしまい、申し訳ございませんでした」

「それはいいんだけど……何かあった？」

クレアを呼んで、マトだけがやって来るというパターンは今までに経験したことがない。そのため葵は、何かよっぽどのがあったのではないかと勘ぐってしまった。頭を上げたクレアは少しだけ苦い表情になつて葵の問いに応じる。

「お客様がいらしていたので、わたくしはその対応に出ておりました。その際、マトを一人で部屋に置いておいたものですから、お嬢様がお呼びになつているのに反応してしまつたのです」

クレアの話によると、例の人間には聞こえない音を発するのだというベルは、マトがその音を聞きつけることで呼び鈴の働きをしているものらしい。通常はマトが反応を示したことで葵が呼んでいることを察したクレアが彼女の元に赴くのだが、今回は間が悪かった。葵がベルを鳴らした時にマトがたまたま一人でいたため、彼は呼び鈴に引き寄せられるままに葵の寝室を訪れたのである。そうとは知らず思いきり怖がつてしまった葵は、マトに対して申し訳ない思いを抱いた。

「そうだつたんだ……。呼んだから来てくれたのに、怖がつてごめんね」

ガラス玉のように光を反射しているマトの目を覗き込んで謝罪した葵は、次に来訪者についての疑問を解消することにした。

「で、お客さんつて？」

「お嬢様の担任の先生です」

「えっ？ ロバート先生……が、いるの？」

「いえ、もうお帰りになられました。本日はお嬢様にこれをお届けするために立ち寄つただけだと仰られて」

クレアが手にしていた物を掲げて見せたので、葵も改めて彼女の手元を注視した。そこに円陣で囲まれた五芒星^{ペンタグラム}が表紙に描かれている魔法書があるのを目にして、葵は眉根を寄せる。

(そういえば……)

実習でハプニングがあつた後、魔法書を手にしていた記憶がない。屋敷にも手ぶらで帰つたような気がするので、おそらくつむじ風に弾き飛ばされた時に紛失してしまったのだろう。それをロバートが届けに来たということは、きっと落し物として発見されたからに違いない。今まできれいに忘れ去っていたものの、運が良かったから魔法書が戻つて来たのだと察した葵はさつと顔色を変えた。

(あ、危ない。これ失くしたら、アルに何言われるか分からないよ) 今さらながらに肝を冷やした葵は休日にもかかわらず届けに来てくれたロバートに心底感謝した。やはり彼は信頼に足る人物である。改めてそう実感した葵は胸中でロバートに感謝の言葉を捧げながらクレアから魔法書を受け取つた。

「ところで、お嬢様。わたくしをお呼びでしたでしょうか」

「あ、そうそう。前に洗つてつて渡した服、もう出来てる？」

「はい。お持ちいたしますか？」

「うん。パンテノン市街に行きたいから、送つてくれる？」

「かしこまりました。では、お嬢様の準備が整いましたら屋敷前の魔法陣にお越し下さい」

話がまとまると、クレアは葵に一礼してから廊下を引き返して行った。葵も一度寝室へ引き返し、魔法書をデスクの上に置いてから踵を返す。屋敷の玄関と前庭の噴水の間にある魔法陣へ赴くとすでにクレアがいたため、彼女から紙袋を受け取つた葵はそのままパンテノン市街へと出掛けたのだつた。

つながる世界(3)

クレアに転移魔法で送ってもらった葵はパンテノン市街に出現するとすぐ、徒歩でフィフスストリートを目指した。まるでファンタジーの世界観のように魔法が息衝いているこの通りは、葵のお気に入りである。ただ歩いているだけで楽しい気分になれる通りの一角で歩みを止めた葵は小さな看板が出ている扉を軽くノックし、返事を待たずに戸を開けた。扉の奥は店になっていて、室内にはガラスの工芸品が並べられている。店先ではリズが退屈そうな顔をして座っていたが、彼女は葵の顔を見るなり瞳を輝かせた。

「アオイ」

いらっしやいと、リズは大袈裟なまでの笑顔で迎えてくれる。彼女のように作為のない笑みを向けてくれる存在はとても貴重であり、葵も自然と頬を緩ませた。

「これ、ありがとう」

葵が手にしていた紙袋を差し出すとリズは不思議そうに首を傾げた。

「なあに？ またケーキでも焼いてきてくれたの？」

「違うつて。この前、リズの服借りたじゃん？」

「ああ、あれね。お兄ちゃんつてば、あたしの一番いい服アオイに貸すんだもん。デートの時に着てく服がなくて大変だったんだよ？」

「あ、そうだったんだ。ごめん」

「ま、いいけどねえ」

大変だったというわりには大して気にした様子もなく、リズは衣服の入った紙袋を受け取る。それを無造作に机の上に置くと、リズは改めて葵を見上げてきた。

「お兄ちゃん、今寄り合いに行ってるの。もうすぐ帰って来ると思うから座って待っててよ」

葵を促しながら茶器に手を伸ばしたリズはさっさと二人分の水出

し紅茶を用意した。リズの態度は有無を言わせぬ調子ではあつたが不快な強引さではないので、彼女の言葉に甘えることにした葵も空席に腰を落ち着ける。ガラスのティーカップに注がれた冷たい紅茶が夏の日差しに晒されながら歩いてきた体に心地好く、すっかりリラックスした葵は椅子の背もたれに体重を預けた。葵がまつたりしている、喋り好きのリズがさかさず話しかけてくる。

「アオイっていつも同じ服着てるよね。オシャレしないの？」

「ああ……これは制服だから」

オシャレしないのというリズの言葉に少し傷ついた葵は苦笑を浮かべながら答えを口にした。葵にそんなことを言ってくるリズは会うたびに違う服装をしていることから身だしなみには人一倍気を遣っていることが見て取れる。だがこの家の経済事情を考えるに、あまり贅沢なことは出来ないはずなのだ。不思議に思つた葵はリズにそのことを尋ねてみた。

「そりゃあねえ、うちに服買つてるよーなんてないよ。でもオシャレはしたいじゃん？ だから友だちの間で貸し借りしてるの」

そう明かしたリズの本日の服装も、上から下まで自分の持ち物ではないらしい。元の世界にいた時は葵も少ない小遣いでやりくりしていたため、リズの意見に深々と頷いて見せた。

「私もよく本とか貸し借りしてたよ」

「今は貴族でも、アオイも苦労してきたんだもんねえ」

リズは葵の作り話を信じているため、葵が孤児院で育つたと思ひ込んでいる。素顔で接してくれている彼女に嘘をついている心苦しさを覚えた葵には弱々しい笑みを浮かべることしか出来なかった。しかしリズは葵の変化には気付かなかつたようで、彼女は不意にしたり顔になる。

「お兄ちゃんもきつと、アオイのそういうところが好きなんだと思うなあ」

「ただいま」

リズの科白にかぶって第三者の声が介入したため、葵とリズは慌

てて側方を振り向いた。声の主はザックであり、扉を背に佇んでいる彼は不意に集中した視線に驚いている。

「何？」

「あ、ううん、何でもないの」

葵が笑って誤魔化すと、ザックは不思議そうにしながらも言及することはしなかった。それから改めて、ザックは葵に目を留める。

「あれ、アオイ。いらっしやい」

「お兄ちゃん、気付くの遅っ」

「うるさいなあ」

妹に苦い表情を向けると、ザックは『仕事があるから』と言って奥へ引っ込んでしまった。心なしかザックの顔色が冴えないものだったので、葵は眉根を寄せながらリズに向き直る。

「ザック、なんか元気なかった？」

「そうだねえ……また親方に怒られちゃったのかな」

「怒られるって、何で？」

「貴族って獨創性を求めるから。親方が言うには、お兄ちゃんはただ発想力が貧弱なんだって。だから半人前なんだって、よく怒られるの」

「へえ……」

リズに曖昧な返事をしながら奥へ続く扉に顔を傾けた葵の脳裏には、作業場で見たザックの姿が蘇っていた。作品に向かう時の彼は真剣で、夏場でも汗だくになりながら頑張っている。しかし葵は、彼が納得のいく顔をしているところをまだ一度も見ることがなかった。

「私、ちょっとザックの様子見てくるね」

何が良くて何が悪いのか、素人の葵には工芸品のことはよく分からない。ただ表情に影を落としながら作業場へと向かったザックを励ましてあげたいという思いが溢れ出てきたのだ。

「いつてらっしや〜い」

満面の笑みを浮かべているリズに見送られながら席を立った葵は、

彼女のあからさまな態度に苦笑いしながら奥へと続く扉を開けた。扉の先はすぐ行き止まりになっていて、T字になっていて通路を右手に折れると住居部分へ、左手に折れると作業場へと行き着く。ザックが作業場へ向かったと思われるため、葵は迷わず廊下を左手に曲った。

ザックは『仕事があるから』と言って姿を消したものの、溶鉱炉がある作業場へ近付いて行っても体感温度が上がることはなかった。ザックが仕事をしている時は通路にまで熱波が押し寄せてくるのが普通なので、葵は一抹の不安を抱きながら作業場の中を覗いてみる。いないかもしれないという葵の不安をよそに、ザックは作業場の中にいた。しかし彼は外出着のままできて、溶鉱炉にも火が入っている気配がない。こちらに背を向けて座っているのでどのような表情でいるのかは分からないが、呆けているようなザックの様子に不安を感じた葵は控えめに声を発した。

「ザック？」

葵の声を聞きつけたザックは慌てた様子で立ち上がり、こちらを振り返って目を丸くする。

「アオイ、どうしたの？」

「うん……なんか、ちよつと元気なさそうだなって思ってた」

葵が後を追ってきた意図を明かすとザックは苦笑いになり、それから小さくため息をついた。座るよう促されたので、葵はいつかの箱に腰を落ち着ける。彼女がまたしても直に腰を下ろしたのでザックは呆れたような顔をした。

「何か敷いて使えばいいのに」

「私のことはどうでもいいから。それより、大丈夫？」

「……うん、大丈夫だよ」

どう見ても大丈夫ではなさそうな顔つきで頷いて見せた後、ザックは再び苦笑いを浮かべた。

「仕事がつまづいなくてさ。納得のいく作品が作れないんだ」

「ザックが納得する作品って、どうなの？」

「言葉にするのは難しいよ。それが形にもならないんだから」

「だったらまず、頭の中にあるイメージを絵にしてみればいいんじゃない？」

「図案なら、そこにあるよ」

ザックが作業場に隅に置かれているテーブルを指差したので葵は立ち上がってその傍へ寄った。テーブルの上には紙面に描かれたデッサンが山積みになっていて、一つ一つ目を通していった葵は感嘆の息を吐く。

「すごいじゃん、こんなに沢山」

「数をこなせばいいって物でもないんだ。特に鑑賞品は」

ザックの口から鑑賞という言葉聞いた葵はリズの言っていた独創性の話を思い返した。葵にとってはどのデッサンも目新しいものだったのだが、この世界では特に珍しいものではないのかもしれない。ならば『普通』が『独自』に変わるのではないかと発想を逆転させた葵は、あるデッサンに目を留めて興奮を露わにした。

「ザック、これ！ これ作ろうよ！」

葵が急に騒ぎ出したため、ザックも何事かと図案を覗き込んできた。そこには口が狭くなったガラスのような物が描かれていて、デッサンを見たザックは眉根を寄せる。

「アオイ、これは基礎の形を描いたものだよ。これじゃ何の面白味もない」

「だったらこうすればいいじゃん？」

ザックにニヤリと笑って見せた後、葵は図面をひっくり返した。

上下が逆さまになってはガラスとして使うことも出来ないため、ザックはぼかんと口を開けている。

「これは何？」

「ペン、貸して」

呆けているザックに一応の断りを入れ、葵はテーブルの上に転がっていたペンで図案に書き足しをしてみた。上下が反転したガラスから垂れ下がるガラスの棒が加われれば、それでもう風鈴の完成で

ある。

「これ、作るのむずかしい？」

完成した図案を見せながら葵が尋ねると、それまで呆けていたザックは我に返った様子で表情を改めた。真剣な面持ちで図案を注視したザックはさほど時間をかけずに顔を上げ、葵に答えを告げる。

「形状的には複雑じゃないから、作るのは簡単だけど……」

「じゃ、作つてよ。説明はそれから」

葵に急ぎたてられたザックは不思議そうにしながらも彼女の言葉に従った。沈黙していた溶鉱炉に火が入られると、作業場はあつという間に蒸し風呂へと姿を変える。魔法で炎と水を巧みに操ったザックは宣言通り、いとも簡単そうに作品を完成させた。

「それで、これにどんな呪文スベルを封じるの？」

この世界での道具には大抵、使用者が無属性魔法を使うことによつて物が自動で事を成すように呪文が組み込まれる。今までそうだった常識の中でもものづくりをしてきたザックにとっては当然の質問だったのだが、葵は即座に首を振った。

「呪文なんていらんよ」

そう言い置くと、葵はザックの手を引いて作業場を後にした。作業場には窓がないため、店舗部分へ戻った葵は開きっぱなしになっている窓辺に出来上がったばかりの風鈴を吊るす。葵の意図が分からずに困惑していたザックも、汗だくで現れた二人を訝っていたりズも、窓から吹き込んだ風が風鈴を鳴らすと閉口して耳を澄ました。

「暑い中で聞くとさ、涼しげでいいでしょ？」

ザックとリスが風鈴の音色に聞き入っていたので、葵は頃合を見計らって二人に話しかけた。我に返った様子のザックとリスは二人で顔を見合わせ、それから興奮気味に喋り出す。

「魔法がいらんなんて面白いね、お兄ちゃん」

「ああ。鑑賞用だと派手な仕掛けばかりが目を引くけど、これはこれで新鮮だ」

「つていうか、盲点よね。よく気付いたわね、アオイ」

リスに賞賛されたものの深い考えがあつてのアイデアではなかつただけに、葵は誇らしげな気持ちになることもなく笑つて追及を凌いだ。だが観賞品に魔法を使わないということは大発見だつたらしく、ザックとリスはまだ興奮している。

「ありがとう、アオイ」

幾度も礼を言いながら葵の手を取つたザックは、憑き物が落ちたようなスッキリした表情をしていた。ザックが喜んでくれたことで自分も嬉しくなつた葵は胸の奥がきゅつと締め付けられるような感覚を味わつてはに cand 笑みを浮かべる。さつそく仕事の話を始めたザックとリスを眺めながら葵は改めて『好きだなあ』と胸中で独白を零した。

つながる世界（4）

オレンジの色味が強い二月が虚空に浮かぶ夜、屋敷の周囲を取り巻くように広がっている花園は暖色の光に染め上げられて穏やかに色彩を変えていた。太陽が天空を支配する昼間ほどではないが、二つの月が浮かぶこの世界の夜は人工の明かりがなくても十二分に明るい。黄昏時から黒色を抜いたような透明感のある空の下、葵は寝室に面しているテラスでぼんやりと庭を眺めていた。

（……まだ寝られそうにないなあ）

月が中天にかかっているこの時分、このところ規則正しい生活をしている葵は平素であれば、キングサイズのベッドで眠りに就いている。だが今夜は妙に頭が冴えてしまっているため、寝返りを打つことに飽きた葵はベッドを抜け出してきたのだ。夜風に当たれば気分も変わるかと思われたのだが、実際にそうしてみても心境の変化はあまりない。それは眠れない理由が憂鬱感からきているのではなく、どちらかと言えば幸福感からきているものだからだ。

軽く息をついた葵は瞼を下してから空を仰いでみた。そうしていると、ほのかな明るさを帯びている闇の中にザックとリスの姿が浮かび上がってくる。彼らと過ごす一時が本当に幸せで、日中の出来事を思い返した葵は自然と頬を緩ませた。落ち込んでいたザックが水を得た魚のように復活し、嬉しそうに『ありがとう』と言った時の笑顔が忘れられない。

（私、ザックのこと好きなのかもしれない）

自分の零した吐きが腑に落ちて、葵はスッキリした気持ちになりながら目を開けた。

葵はつい先日、初恋の人への未練を再確認したばかりだが、ザックへの想いはハルに感じていたそれとは種類が異なっていた。初恋の時のような激しい感情の昂りはなく、ザックへの好意はただ穏やかに胸の中で存在しているのだ。その気持ちは、恋とは違うのかも

しれない。だが友情という感情とも、また微妙に違っていた。何故ならザック達との関わりを、周囲の誰にも知られたくないと思っ
ているからだ。

葵がまだトリニスタン魔法学園に編入して日が浅い頃、アルヴア
はよく『マジスターには関わるな』ということをお口にしていた。貴
族でもない一般人のザックと親しくすることにマジスターの時のよ
うな特別な事情は存在しないだろうが、それでも葵は彼らに関わる
など誰かに言われることを密かに恐れていたのだ。共同生活をして
いるクレアにさえ彼らのことを話してはいないのは、周囲の異常な状
況からザックとリズを切り離しておきたかったからに他ならない。
そのことに気が付いてしまった時、葵はザックとリズが特別な存在
になっていたことを実感したのだった。

(でもなあ……)

オレンジの光で辺りを照らしている二月を瞳に映した葵は目線を
下げてから小さく首を振った。ハルヤステラの時もそうだったのだ
が、葵がこの世界で誰かを好きになることには大きなネックがある。
どんなに大切に思っている人でも、いつかは必ず別れなければな
らないからだ。そのことを改めて考え直した葵は、少しザックの所
へ行くのを控えようと心に誓った。

(……寝よう)

幸せに包まれていた気持ちがいつの間にか物思いに変わってしま
ったため、葵は踵を返そうとした。しかし何気なく見やった後庭に
動く物の影を捉えてしまったため、テラスで体勢を立て直した葵は
月明かりに照らされている庭を凝視する。距離があつたので顔を確
認するには至らなかつたのだが、その人物がメイド服を身につけて
いたため、葵は庭にいるのがクレアであることを確信した。

(こんな時間に何してるんだらう)

葵に見られていることなど知らないクレアはキョロキョロと周囲
を窺っており、何かを探しているかのような素振りを見せている。
クレアの言動には以前から不審なところがあつたため、葵は疑心暗

鬼に駆られてしまった。

(……よし、)

人知れず疑いを強めるよりも疑問を率直にぶつけてみようと思つた葵は、クレアの元へ行くこうと勢い良く踵を返した。しかしその勢いは、廊下へと続く扉に辿り着く前に失われてしまう。夜の静寂を切り裂く異音が突如として室内に響き渡つたため、ちょうど寢室を横断していた葵はビクリとして動きを止めた。音がする方向を振り向いた葵は、机の上で激しく振動している携帯電話に目を留めてホツと胸を撫で下ろす。

(なんだ、ケータイか)

しかし今は着信に構っている暇はない。そう思つた葵は再び走り出したのだが、扉に手をかけたところでピタリと動きを止めた。

「……電話!？」

事の重大さに気がついた葵は大きな独り言を零し、慌ててデスクに向かった。携帯電話はまだ激しく震えていたので、急いで取り上げると同時に電話を耳に押し当てる。

「もしもし!!」

電話口で声を張り上げても、すぐには反応が返ってこなかった。焦る気持ちを引きずつたまま電話に出た葵はさらなる言葉を重ねようとしたのだが、その前に通話相手が口火を切る。

『……葵?』

電話の向こうから聞こえてきた声は懐かしい友人のものだった。三ヶ月ぶりにその声を聞いた瞬間、感極まつた葵は涙を滲ませながら言葉を失う。すると今度は電話の向こう側にいる人物が声を張り上げてきた。

『あんた何してんのよ!!』

「や、弥也あ……」

『今どこにいの!? 迎えに行くからさっさと教えな!』

それが怒鳴り声ではあつても弥也の発する言葉は全てが感動的で、胸がいっぱいになってしまった葵は泣き出してしまった。それも激

しくしゃっくり上げているせいで言葉を発することが出来ない。葵が泣きじゃくっている間も弥也は一人で喋り続けていたが、やがて彼女も声の調子を落としてきた。

『ケータイもずつとつながらないままだし、心配してたんだよ。今どこにいるの？ 何で急にいなくなったの？』

弥也の声音が落ち着いた頃には葵の気持ちもだいぶ静まってきたが、この問いには返す言葉が見当たらなかった。今いる場所が異世界で、異世界の人に召喚されたせいで帰れないなどと言っても弥也はおそらく信じないだろう。葵が言葉を探していると、弥也はさらに声の調子を落として話を続けた。

『まさか、誘拐されたんじゃないよね？』

「違う。誘拐とかじゃないんだけど、今は帰れないの」

『はあ？ 何言ってるの、バカ！ 今すぐ帰って来い！』

「帰れるならとつくに帰ってるよ！ 帰れないんだから仕方ないじゃない！」

葵が怒鳴り返すと電話の向こうで息巻いていた弥也もさすがに口をつぐんだ。沈黙が訪れたことで冷静さを取り戻した葵は深呼吸をしてから話を再開させる。

「とにかく、今は帰れないんだ。でも誘拐とかじゃないし、無事だから、心配しないで。こつちから連絡取れないから、お父さんとお母さんにも伝えてくれると嬉しい」

『……葵が三日も行方不明だからおじさんとおばさん、すごく心配してたよ。事が警察沙汰になってビビる気持ちも分かるけど、早く帰って来た方がいいって』

弥也の口調は諭すものに変わっていたが、そんなことを言われても帰れないものは帰れないのである。だが弥也の言い分がもっともなものだっただけに、葵には返す言葉が見当たらなかった。弥也も押し黙ったので、再び沈黙が訪れる。会話がなくなったことで他のことにも考えを巡らせることが出来るようになった葵はハツとして携帯電話のディスプレイを見た。すると充電の表示が一本になって

いたので、葵は慌てて話を再開させる。

「とにかく、帰れるようになったら絶対に帰るから。また連絡する」
一方的に通話を切り上げた葵はそのまま携帯電話の電源をオフにした。しかし自分から電話をかけようとしても繋がらなかったことを思い出し、すぐに電源をオンにする。着信履歴から弥也の番号を選択した葵は発信を試みたのだが案の定、電話の向こうからはコー
ル音さえも聞こえてこなかった。

(やっっちゃった……)

電気の通っていないこの世界では充電が出来ないため、一度充電が切れれば携帯電話はその機能を失ってしまう。そのため少しでも長く持たせようと考えた葵は急いで通話を切り上げたのだが、そもそも異世界同士では通信など不可能なはずなのだ。

(でも、弥也からの電話がかかってきた)

世界を跨いで友人の声を聞くことが出来た。それはつまり、不可能と思っていたことが本当は不可能ではないということだ。それが極めて稀な出来事であったとしても、再び繋がる事が出来る可能性はゼロではない。そうした可能性が目の前に示されたことに葵は希望を感じた。

再び電源をオフにした携帯電話を胸に抱き、葵は目を閉ざした。闇の中では姿の見えない友人の声が鮮明に蘇ってくる。怒鳴りっぱなしだったなと笑いながら目を開けた葵は沈黙した携帯電話を丁寧に鞆に収めてからキングサイズのベッドに転がった。

Break (1)

「お嬢様、朝でございます」

誰かの声が降ってくると同時にカーテンが退けられ、室内に夏の朝日が差し込んできた。閉ざしていた瞼の裏に光を感じた宮島葵は、平素なら上掛けを頭までかぶってベッドの中で丸くなるところを、今日はすんなりと目を開けて起き上がる。顔を傾けた窓辺でメイドのクレア＝ブルームフィールドが柔らかな斜光を浴びながら紅茶を淹れていたので、葵は彼女に微笑みを向けた。

「おはよう」

「おはようございます」

挨拶を返しながら、クレアは葵にソーサーごとティーカップを差し出した。淹れたての紅茶から立ち上るハーブの香りが清々しく、一口含んだだけで寝起きの頭を冴えさせていく。だが今日に限って言えば、アーリーモーニングティーの力を借りずとも葵の意識はすでに覚醒していた。

「食卓でお待ちしております」

そう言い置いてクレアが姿を消したので、ベッドから下りた葵はティーカップをテーブルに置いて身支度を始めた。彼女がいつになくキビキビと動いているのは、昨夜の出来事で邪念が取り払われたからだだった。

昨夜、生まれ育った世界の友人である弥也^やと話をしたことによって葵は様々な情報を得ることが出来た。特にあちら側の世界での動きを知ることが出来たのは非常に有益である。自分の失踪が誘拐事件として警察沙汰になっていたのは尻込みしてしまうが、それ以上に幸いなことがいくつもあった。中でも二つの世界には時間の流れに差異があると判明したことが一番の収穫だったと言えるだろう。二月が浮かぶこの世界に葵が召喚されてから、早三ヶ月。橙黄^{とうおう}の月が終われば四ヶ月となってしまうわけだが、弥也の口ぶりからす

ると、葵が元いた世界ではまだ三日ほどしか経過していないようだった。単純計算すればこの世界の一ヶ月が葵のいるべき世界の日であり、丸一年この世界に留まっていたとしても元の世界で経過した時間は一ヶ月にも満たない。年単位と日単位では不在の重みがまったく違ってくるため、葵にとってこれは非常にありがたいことだった。

時間の流れが違うことに安堵を覚えはしたものの、葵はそれと同時に『早く帰らなくちゃ』という想いを強くした。それを実行するための第一歩として、クレアに送ってもらってトリニスタン魔法学園に登校した葵は一階の北辺にある保健室を訪れた。

(……まだ帰って来てない)

保健室の扉が鍵を使って開かれる時、葵はこの学園において唯一彼女の事情を承知している青年に会うことが出来る。だがこの日も差し込んだ鍵は回らず、嘆息した葵は引き抜いた鍵をスカートのポケットにしまった。その場所には鍵の他にも大切な物が入れられており、布地の上からその感触を確かめた葵は気分を入れ替えて踵を返した。

トリニスタン魔法学園の生徒は冬でも夏でも白いローブを纏っているが、葵はワイシャツにチャックのスカートという出で立ちをしている。元いた世界で通っていた高等学校の制服に身を包んでいる葵はただ廊下を歩いているだけで異質な存在であり、四方八方から視線が飛んでくる。それは好奇心と嫉妬を孕んだもので、大半の生徒が葵のことを快く思っていないのだ。そのため時にはあからさまな悪口を叩かれることもあるが、今の葵にはそのどれもがまったく気にならなかった。昏い感情が渦巻く校舎を平然と歩いてきた葵は、目的地に到着して歩みを止める。二階にある二年A一組の扉を開けると、それまで歓談の声にあふれていた室内は水を打ったように静まり返ったが、葵は意に介せず窓際の自席へと向かった。

本日から鞆を持って登校することにした葵はその中から魔法書を取り出し、ブラックボードに視線を据えたまま担任教師が姿を現す

のを待った。程なくして校内には本鈴が鳴り響き、それから少し遅れて教室の扉が開かれる。姿を現したロバート「エーメリーは教壇に立つとすぐ授業を開始したので、葵は昼休憩に入るのを待って席を立った。

「ロバート先生」

廊下に出たところでロバートを捉まえた葵はまず、魔法書を届けてくれたことに対する感謝の気持ちを伝えた。ロバートが微笑むだけで応えとしたので、葵もつられて笑みを浮かべる。

「私の魔法書、どこにあったんですか？」

「君の机の上に置いてあった。誰かが届けてくれたのだろうが、中を見られたらうことは覚悟しておいた方がいい」

笑みを収めたロバートは声の調子を落としながら囁きかけてきたが、葵には未だに『魔法書の中身を知られる』ことに対する恐ろしさが分からなかった。そのためその話題は軽く聞き流し、葵は次いでロバートの怪我に言及する。ロバートはもう何ともないと言って、再び笑みを浮かべた。

「メイドの彼女が昼食を用意して待っているのだろうか？ そろそろ行きなさい」

トリニスタン魔法学園では昼食を自宅でとるのが一般的なので、大抵の生徒は昼休みに一時帰宅をする。クレアが屋敷に来てからは葵も昼休みに帰ることにしているため、ロバートに頷いて見せた彼女は踵を返した。しかしすぐ、言い忘れたことを思い出した葵は歩みを止めて再びロバートを振り返る。

「先生、今日からよろしくお願いします」

葵の言葉には主語がなかったが、ロバートにはそれが補習のことを言っているのだと伝わったようだった。ロバートがすぐに頷いて見せたため、葵は彼に一礼してから歩き出す。廊下にたむろしている数人の女子生徒が視線を投げかけてきていることに気付いていたため、葵は彼女達に絡まれないうちにと足早にエントランスホールへ向かった。

トリニスタン魔法学園では授業が終わるとすぐに生徒達が下校するため、放課後の校舎は夜の静謐に劣らない静寂に支配される。そのため終わりも始まりもないドーナツ型の校舎に立ち並ぶ教室は夕暮れ時には物悲しい顔を見せるのだが、この日は少々勝手が違っていた。

「少し休憩するか」

窓の外に目をやったロバートがそんな科白を口にしたので、今までにない集中力で紙面と向き合っていた葵はぐったりと椅子の背もたれに体重を預けた。窓際にある葵の机の上には元いた世界から一緒に連れて来られた、無属性魔法のかかっているノートと筆記用具が散乱している。魔法の存在するこの世界で勉強と言えば当然のように魔法道具マジックアイテムが使われるのだが今はアルヴァが不在のため、葵には魔法自体を使うことが出来ない。そのため仕方なく全てを手作業でやっているのだが、特にロバートから質問を投げかけられるようなこともなかった。

「疲れたか？」

椅子を支えにしてのけぞっていた葵はロバートに話しかけられたので姿勢を正した。元の世界にいた時でさえこれほど真剣に勉強したことは数えるほどで、主に頭の疲労を感じていた葵は素直に頷いて見せる。

「今はまだ基礎的なことしかやっていないからな。面白さが分かってくるようになれば疲れなど気にならなくなる」

ロバートの言う『基礎的なこと』とは、彼の用意した魔法書をひたすら書き写す作業を指していた。それがどうして魔法の勉強にな

るのか、実は葵には何一つ理解出来ていない。だが余計な質問をして痛い腹を探られてはたまらないので、大人しく従っているのだ。た。

（そのうち分かるようになる、のかなあ？）

ミミズがのた打ち回っているような文面を睨みつけた葵は道のりが果てしなく遠そうだとということの本能的に察した。だが葵は魔法を学ばなければならぬ。そのためには勉強の仕方さえ分からない葵を指導してくれる存在が必要不可欠であり、そういった意味でもロバートの存在が非常にありがたいものだった。

「先生、ちよつと聞いてもいいですか？」

「何だ？ 質問はいつでも歓迎する」

「あ、勉強のことじゃないんですけど……」

ロバートがそれでも構わないと言っているので、葵は実習の時から気になつていたことを尋ねてみることにした。

「あの竜巻みたいな風が発生する前に、皆が私を見てましたよね？ あれって何だったんですか？」

葵が質問を口にする、ロバートは難しい表情になって口をつぐんでしまった。しばらく考えをまとめているような間があった後、空を仰いでいた彼は葵に向き直つてから口火を切る。

「実習の際、グラウンドに魔法陣が敷かれていたのは覚えているか？」

「はい。ロバート先生がやったやつですよね？」

「そうだ、実習を始める前に私が敷いた。あの魔法陣には様々な効用があるのだが、その一つに外部からの干渉を防ぐという目的がある。そういった魔法陣を敷いた場合、通常であれば魔法陣の外側からかけられた魔法は弾き返されるか吸収される。だがあの時、魔法陣の綻びを縫うように、何者かの魔法が外部から侵入してきたのだ」

「え、えっ……」

「図にして説明した方が解りやすいか」

葵が理解していないことを見て取ったロバートは、そう独白を零

すとペンを手にした。無属性魔法が刻まれているペンはロバートの呪文に反応して光を帯び、何も無い空中に光の線図を描き出している。絵図があれば説明も理解しやすく、先程ロバートが言っていた内容を理解した葵はさらに首をひねった。

「つまり、誰かが授業を妨害しようとしたってことですか？」

「授業を妨害しようとする意識があつたかどうかは分からないが、実際に彼らのせいで授業は中断してしまったわけだから。困ったものだ」

「彼らって……先生は誰がそんなことしたか知ってるんですか？」

「教師の敷いた魔法陣を外部から崩すことの出来る者は限られている」

「……まさか」

ここまで話が進めば、葵にも誰がそんなことをしたのか察することが出来た。ロバートと一緒に保健室へ向かう途中、グラウンドに何故かキリル^{II}エクランドの姿があつたことを思い出した葵は頭を抱えたい思いで呻き声を発する。

(なに考えてんのよ、あいつ)

嫌われていたはずなのに近頃はやたらと付き纏われたりと、キリルの言動には理解不能な点が多い。それだけでも頭が痛かつたのに、葵はさらなる頭痛の種に気がついてしまった。

「先生、今、彼らって言いました？」

「ああ。何が目的であるような風を起こしたのは分からないが、マジスターの狙いは君だったようだな」

「あ、あの竜巻みたいな風！あれもマジスターの仕業だったんですか!？」

「風の魔法を得意としているのはウィル^{II}ヴィンスだ。十中八九、彼の仕業だろう」

ウィルに狙い撃ちされたと知って、葵は絶句してしまった。マジスターにとっては只の戯れなのかもしれないが、自然属性の魔法が使えない葵には笑い事では済ませられない問題である。ロバートが

庇ってくれたおかげで無傷で済んだが、下手をすればあの一撃で死んでいたかもしれないからだ。

(し、信じられない……)

ウィルが何故そんなことをしたのかは分からないが、悪質すぎる。そう思った葵が静かに怒りを煮えたぎらせていると、顔色を読み取ったかのようにロバートが宥める言葉を口にした。

「腹を立てる気持ちも分かるが、マジスターには関わらない方が君のためだ。さて、そろそろ再開しよう」

どうにも腹の虫が治まらなかったが、ロバートの言っていることは正論である。そう思った葵はやり場のない憤りを補習にぶつけることで気を紛らわせた。

Break (2)

大きくとられた窓から差し込む朝日が室内のいたる所に置かれて
いる観葉植物の葉を青々と照らしていた。その部屋では風の通りを
意識して窓や扉は全て開け放たれているので、一見ただけでは室
内というよりも植物園の様相を呈している。早朝のため真新しい酸
素にあふれたその部屋に、転移の魔法によって一人の少年が姿を現
した。その少年は漆黒の髪に同色の瞳といった、世界でも珍しい容
貌をしている。切れ長の目が冷たい印象を抱かせる彼の名は、キリ
ルⅡエクランド。魔法陣ではなく魔法書を介しての転移を完了した
キリルは手にしていた魔法書を別次元へと収納してから改めて空を
仰いだ。

「ウィル」

キリルが口にしたのは、この部屋の主の名前である。彼が見上げ
た先にはハンモックがあり、そこでは誰かが眠りに就いている気配
がある。呼びかけても反応がなかったため舌打ちをしたキリルは螺
旋階段のように渦を巻いている飛び石を昇り始めた。

身軽に飛び石を渡ったキリルは天井付近に吊るされているハンモ
ックを覗きこみ、もう一度舌打ちをした。ハンモックの中ではおそ
ろしく女顔をした赤髪の少年が微かな寝息を立てており、キリルが
寝顔を覗き込んでも起きる様子はない。彼は室内を吹き抜けていく
風に身を任せながら眠っていて、その幸せそうな寝顔がムカつくと
思ったキリルは体を揺さぶる代わりにハンモックを焼き切った。支
柱を失ったハンモックはすぐに落下を始め、その衝撃で少年の体が
宙に放り出される。しかし少年は寝起きにもかかわらず機敏な反応
を見せ、風をその身に纏いながらキリルの前まで浮上してきた。

「ひどいよ、キル」

寝ぼけ眼をこすりながら平然とそんな科白を言っただけの少年の
名はウィルⅡヴィンス。彼らはトリニスタン魔法学園アステルダム

分校のマジスターであり、互いにある程度の悪行をされても瞬時に対応が出来る間柄だった。

「オレが呼んでんのに起きねえからだ」

「まだ早朝じゃない。いつたい何の用？」

「イラついて眠れねーんだよ」

「ふうん？」

アクビをしながら気のない返事を寄越したウィルはゆっくりと降下していく。その後を追って、キリルも一番上の飛び石から身を投げ出した。キリルが床に足をつく頃にはウィルがテーブルを呼び寄せ、椅子に腰かけた彼は茶器に紅茶を淹れると命じている。勧められはしなかったが椅子が二脚用意されていたので、キリルはどっかりと空席に腰を落ち着けた。

「イライラしてるって、何で？」

「決まってるんだろ、あの女だよ！」

「あの女って……アオイ？」

頷くのも苛立たしかったため、キリルは無言を貫くことでウィルに肯定の意を示した。キリルは現在、ミヤジマ「アオイ」という少女の心を操ろうと試みている。だがこれが、なかなかうまくいかないのだった。

「誰かが立てた計画はことごとく失敗するしよ」

先日、またしてもウィルに肩透かしを食らったキリルは恨めしげな視線を彼に投げかけた。しかし当のウィルは素知らぬ顔で、ゆっくりと紅茶を口に運んでいる。ティーカップをソーサーに戻してからも明らかに面倒臭そうに、ウィルはキリルを見ることもなく口を開いた。

「僕、もう飽きちゃったんだよね」

ウィルがため息混じりに零したこの一言が、キリルの癪に障った。一気に怒りのボルテージを上昇させたキリルの体からは紅蓮の炎に似た魔力が迸り、周囲の緑に飛び火していく。

「てめえ、ウィル。このオレをさんざんけしかけといてオレより先

に飽きてんじやねえ」

「キルもそろそろ飽きたらどう？ 意外につまらない女だったよ？」
「知ってるわ！」

キリルの咆哮と共に炎が勢いを増し、ウイルの部屋は本格的に炎上を始めた。しかし熱風が渦を巻くように吹き荒んでいても、ウイルの態度に変わりはない。魔法で発生させた冷風で自身の周囲を護っているウイルは、悠然と脚を組んだままふうとため息をついた。
「分かったよ。その無遠慮な魔力をさつさと体に収めてくれたら、いいこと教えてあげる」

ウイルが折れたので、怒りに任せて魔力を放出していたキリルは周囲で踊り狂っている炎を体に引き寄せた。炎が消えると共に吹き荒んでいた熱風も止み、開け放たれたままの窓からは朝の冷涼な風が吹き込んでくる。だが植物は全て燃え尽きてしまったため、室内の眺めは随分と殺風景なものに変わってしまった。しかし様変わりしてしまった風景を嘆くこともなく、この部屋の主であるウイルは『アン・レトウル』と呪文を唱え、光を宿した人差し指で空中に図形を描き始める。完成したそれは転移の魔法陣だったのだが、見覚えのない形状にキリルは眉をひそめた。

「どこの魔法陣だ？」

「アオイの家。防御魔法が厳しくて、調べるのに苦労したよ」

ウイルの意図を理解したキリルは彼の言葉が終わる前に異次元から魔法書呼び寄せた。ページをめくったキリルはそのまま、空中に浮いている魔法陣を魔法書の中に閉じ込める。一度は閉ざした魔法書から光が零れなくなってから、キリルは改めて魔法書を開いた。
「まだ家にいると思うけど、気をつけてね。あの家には……」
「じゃあな」

次の行動が決まったため、キリルはひとの話をまったく聞かずに別れを切り出した。そのままの勢いで転移の呪文を唱えたキリルの姿は一瞬にして室内から失われる。室内に一人取り残されたウイルはしばらくキリルが去った後を眺めていたがやがてアクビを零し、

無残な有り様になった室内を『アン・ルコンスウトウルリユクスイオン』の一言で復元してから再びハンモックで眠りに就いたのだった。

夏^{かげつ}月期中盤の月である橙^{とうけい}黄の月の十九日、その日も夏の夜は穏やかに明けた。飾り窓から差し込む柔らかかな斜光が大理石の床に影をつくっている室内にはキングサイズのベッドが中央に置かれていて、天蓋の内側ではこの部屋の主が未だ深い眠りに就いている。その部屋に、メイド服を身に纏った少女が軽いノックの音と共に姿を現した。

「お嬢様、朝です」

いつものように主に声をかけながらカーテンを開けたクレアはその後、窓際に置かれているテーブルでアーリーモーニングティーの準備を始めた。しかしこのところ寝起きの悪い主はなかなか起き上がってこない。ついには紅茶がティーカップを満たしてしまったので、クレアはベッドに歩み寄ると勢いよく天から垂れ下がっている薄布を退けた。

「お嬢様、起きて下さい」

クレアに体を揺さぶられた葵は朝日を嫌うように寝返りを打つと頭まで上掛けを引っ張り上げた。しかしクレアは容赦なく、夏掛けを引っぺがして葵を陽光に晒す。使用人であるクレアがここまでの荒業をやったのけるのは、そうして欲しいと葵に頼まれているからだ。

上掛けを剥がされてからもしばらくベッドの中で呻いていた葵は、やがてぼさぼさの髪を掻き上げながら起き出してきた。それを見た

クレアは一礼して朝の挨拶を述べた後、葵にティーカップを差し出す。まだ半分寝ぼけながらソーサーごとティーカップを受け取った葵は冴えない頭に強烈なハーブの香りを注ぎ込んだ。しかし喉の渴きは癒えても、頭と体の疲労は抜けない。

「……だるい……」

アーリーモーニングティーの効果も薄く、一口含んだだけのティーカップをクレアに返した葵は重い頭を振りながらベッドを抜け出した。言葉通り怠そうにしている主人を見て、クレアは軽く眉をひそめながら言葉を紡ぐ。

「体調が優れないようでしたら学園はお休みなさいますか？」

「ううん、行く」

「では、食卓でお待ちしております」

そう言い置くとクレアはアーリーモーニングティーに使用した茶器をワゴンに乗せ、葵の寝室を後にした。クレアの姿が消えてからもしばらくベッドの端でボーッとしていた葵はやがてのっそりと立ち上がり、顔を洗うために室内にある別室へと向かう。その後、重い体を引きずりながら身支度を整えた葵は鞆を持って寝室を後にした。

（だるいなあ……）

廊下の窓から差し込む光さえきつく感じるのは、単なる寝不足が原因である。それでも、いくら眠くても学園へは行かないといけないため、葵は一階の片隅にある食堂へと足を向けた。

「お嬢様、昨夜も遅くまで勉強なさっていたのですか？」

食事中にクレアが話しかけてきたので、フォークを手にながら半分寝ていた葵は我に返って目を開けた。

二月が浮かぶ異世界に召喚されてからなりゆきで日々を過ごしてきた葵は、ある出来事をきっかけに魔法の勉強に打ち込むようになった。それは放課後の補習だけに留まらず、近頃は屋敷に戻ってからも常に魔法書を片手にしている。屋敷での先生はクレアであり、葵は毎日のように解らないところを彼女に教えてもらっていた。昨

晩もクレアが終わりにしましょうと言っただけで付き合ってもらい、その後は一人で勉強に励んでいたのだった。

「うん、まあ……」

「集中力を維持するためには適度な睡眠が不可欠です。夜はちゃんと眠って下さい」

言葉を濁した葵が予想していた通りの科白を言っただけでクレアは食後の紅茶をティーカップに注ぎ、葵の前に置いた。苦い気持ちでティーカップを手にした葵はマスカテルフレーバーを楽しみながら赤褐色の液体を一口含む。二、三口でカップをソーサーに戻した葵はクレアにこれ以上の苦言を呈されないうちに学園へ行こうと思いい、席を立った。

「まだ予鈴が届けられておりませんか？」

葵が早々と席を立ったのでクレアが次なる行動を問いかけてきた。葵の通うトリニスタン魔法学園では校内で鐘を鳴らすとそれが生徒の元へ届けられる仕組みになっており、それを目安に生徒達は学園へ登校するのである。まだ時間にはなっていないが教室で勉強しようと思った葵はクレアの転移魔法に送られてトリニスタン魔法学園に登校した。

Break (3)

クレアに送ってもらってトリニスタン魔法学園へと登校した葵は、校舎に入るとまず一階の北辺にある保健室を目指した。そこで目当ての人物が未だ不在であることを確認した後、今度は二階にある二年A一組の教室へと向かう。この学園では予鈴が届けられると共に生徒達がいつせいに登校してくるので校内にはまだ誰の姿もなく、至る所がしんと静まり返っていた。

(なんかこの静けさ、久しぶりかも)

クレアがやって来るまで予鈴が自宅に届けられることすら知らなかった葵は片道一時間ほどかけて徒歩で通学していた。この世界には時を計るものが存在しないので、そうして登校すると大抵は遅すぎるか早すぎるかのどちらかだったのである。早すぎる時は暇を持って余し、こうして人気のない早朝の校舎をよく歩き回っていたものだ。だが今は無駄にする時間などないため、窓際の自席に腰を下ろした葵はすぐに魔法書を広げる。初めのうちは順調だったのだが早朝の静けさがやがて眠りを誘い、葵は睡魔と闘いながら勉強を続けた。

頬杖をつきながら魔法書に目を落としていた葵はいつの間にかウトウトしてしまい、自身の手が顎から外れたことでハッと我に返った。机に顔面を打ち付ける前に体を起こした葵は限界を感じ、魔法書を閉ざしてから鞆を探る。携帯電話を取り出して電源をオンにした葵は久しぶりに愛しの芸能人の顔を見て口元をほころばせた。

(カッコイイなあ、加藤大輝……)

イケメン若手俳優である加藤大輝はバラエティやトーク番組には出演しない人物なので、葵にとつての彼のイメージは映画の中の役どころそのままである。クールで、不器用だけど優しく、いざという時には頼れる男^{ひつ}。めったに本心を口に出さないが、このこという時にはストレートな感情をぶつけてくることもたまらなく魅力的

である。葵がそうした印象を抱いているのは、彼の代表作が恋愛作品だからだった。

（映画、見たかったなあ……）

夏休みには加藤大輝が出演する新作映画が公開されるはずだったのだ。見逃してしまったことにため息をついた葵はすぐ、あることに思い当たって瞳を輝かせた。

（そうだ、まだ三日しか経ってないんじゃない）

二月が浮かぶこの世界と、葵が元いた世界では時間の流れ方が異なる。この世界での一ヶ月が向こうの世界での一日に相当しているため、映画の公開前に元の世界へ戻れば加藤大輝の勇姿を見ることが出来るかもしれないのだ。そのことに気付いた葵はやる気を取り戻し、再び魔法書を広げる。机の端に立てた携帯電話を時々振り向いては加藤大輝に元気をもらい、葵は人気のない教室で黙々と勉強に励んだのだった。

ウィルに教えてもらった魔法陣で転移したキリルは郊外にある屋敷に立ち寄った後、トリニスタン魔法学園の裏門付近に出現した。その理由は、葵の家にはメイドから聞き出した彼女の居場所がここだったからである。本鈴どころかまだ予鈴さえも届けられていない状態なので、朝の学園は静謐に包まれていた。その静寂を破るように大股で歩き出したキリルは一路、葵が所属する二年A一組へと向かう。

（ふざけやがって、あの女）

マジスターは王立の名門校、トリニスタン魔法学園が誇るエリート学生である。貴族の中でも最上位にある公爵家の血筋に連なる者

が一般の生徒に声をかけてやるだけでも稀有なことなのに、一生徒に過ぎないミヤジマ「アオイという少女はそれをありがたがった例がなかった。むしろ彼女はキリルが姿を見せるとあからさまに迷惑そうな顔をし、あまつさえ逃げようとすらするのだ。とっつかまえて話をしようとしても、葵は『忙しいから』と言っては逃げ去って行く。

(どこがいいんだ、あんな女)

キリル自身はそう思うのだが、彼が仲間と認めたハル「ヒューイットとステラ」カーティスがミヤジマ「アオイを好きだったのだ。彼らの気持ちを知るために我慢を重ねてアプローチしてきたが、それももう限界に近い。今日こそは無理にでも口を割らせるつもりで、怒れるキリルは二年A一組の扉を開けた。もしいなければ待ち伏せをするつもりでいたのだが、人気のない早朝の教室には異質な出で立ちをした少女の姿が見える。しかし彼女は机に突っ伏しており、どうやら正体を失っているようだった。

「どこまでもバカにしゃがって」

それだけでなくとも怒っていたキリルは眠りこけながら迎えられたことに腹が立ち、葵を蹴り飛ばそうと足を持ち上げた。しかしウィルヤオリヴァーに言われた『暴力は絶対にNG』という一言が頭をよぎり、行動を起こすことなく地に足をつける。煮えたぎっている腹の底にさらなる怒りを沈み込ませたキリルは嘆息してから葵の寝顔を覗き込んだ。腕を枕にして眠りこけている葵は、その下に開きっぱなしの魔法書まで敷いている。机の上には他にも文字が書かれた紙片やペンが散らばっていて、彼女の身の回りは雑然としていた。少し離れた場所から声をかけてみてもいっこうに起きる気配がなかったので、キリルは葵の体を揺り動かそうと腕を伸ばす。その直後、こちらに顔を傾けながら眠っていた葵が不意にヘラツとした笑みを浮かべたので、鳥肌が立ってしまったキリルは慌てて手を引っ込めた。

「……気色わりー」

どんな夢を見ているのか知らないが、眠りながら笑わないでほしい。そう思ったキリルはますます、このミヤジマ「アオイ」という少女の価値が分からなくなってしまうた。

(やっぱ分かんねーよ。あいつら頭おかしいんじゃないの)

難しい表情をしながら空を仰いだ後、再び葵に視線を戻したキリルは机の片隅に置かれている異様な物体に目を留めた。

「なんだ、これ？」

その物体は縦に長い形状をしていて、直角に折れ曲がっていた姿は手に取ると同時に真っ直ぐになった。見たこともない、用途も不明の未知の物体に遭遇したキリルは、好奇心でもってそれを観察する。色々な部分を触っているうちにそれは反応を示し、それまで真っ暗だった画面に男の顔が映し出された。

「……ほー」

見知らぬ男の顔に気分を害したキリルは感情の赴くままに行動し、椅子や机ごと葵を蹴り飛ばした。

「痛いっ!! 何!?!」

のしかかっている机を退けてすぐに起き上がった葵は、周囲をキョロキョロと見回しながら奇声を発した。その意識を自分の方へ向けさせるため、キリルはもう一度彼女を足蹴にする。涙目になつて振り向いた葵はキリルの顔を見るなり怯えたような表情になった。だが他人の感情に無頓着なキリルはまったく臆することなく、手にしている物体を葵に突きつける。

「これ、誰だ」

「私のケータイ!!」

キリルが手にしている物を見るなり顔色を変えた葵は、それを取り戻そうと腕を伸ばしてきた。葵の腕を邪険に払い除けたキリルは再び同じ問いかけを繰り返す。

「これ、誰だ」

「そんなのあなたに関係ないでしょ! 返してよ!!」

「この前までハルが好きだったくせに、もう他の男に目移りしてん

のか」

「いいから、返して!!」

葵があまりにも必死に取り返そうとしてくるため、キリルは手にしている物体を真つ二つにへし折った。ベキツという嫌な音と共に壊れた物体はキリルの手を離れ、床に落ちて再び砕ける。目を見開いた葵は自分の所有物が壊れていく様を、呆然と眺めていた。

「あ、ああ……」

無意識のように声を出しながら床にへたりこんだ葵は、目に涙をためながら壊れた物の破片を集め始めた。物を壊したことで少しスツキリしたキリルは、このクラスの誰かが使っているだろう机に腰を下ろし、蔑んだ目で葵を見下ろす。

「ハルと二股かけようなんていい度胸じゃねーか。身の程知らずの尻軽女が」

寄せ集めた破片を胸に抱いて泣いていた葵は、キリルの一言をきっかけにがばつと顔を上げた。そのまなざしがあまりにもきついものだったので、今まで誰にもそんな目を向けられたことのないキリルは思わず怯む。その隙を見逃さずに立ち上がった葵は思いきり、グーでキリルを殴り飛ばした。

「くそバカ!! 死ね!!」

到底少女とは思えない捨て台詞を残し、葵は声を上げて泣きながら走り去って行く。周囲の机や椅子を巻き込んで床に倒れたキリルは葵の背を見送るところか立ち上がることも出来ないまま、しばらくその場で埋もれていた。

Break (4)

泣きながら教室を飛び出した後、葵はそのままの勢いで裏門から丘を下り、気がつけば徒歩で家路を辿っていた。夏の日差しが容赦なく照りつける中を走ってきたために汗だくで、思いきり泣いたせいで頭も痛い。目は腫れぼったく気分も最悪だったが、それでも葵は黙々と足を動かしていた。

(あ、鞆……教室に忘れてきちゃった)

鞆だけでなく魔法書やノートまで、壊れた携帯電話以外のものは全て置き去りにしてきてしまった。それなのに、他の全てを失念してまで持ち帰ってきた携帯電話は役に立たないガラクタと化している。もうこれで生まれ育った世界と連絡をとることも、加藤大輝の顔を見ることすら出来ないのだ。世界を隔てても連絡がとれるのだと判明した後だけに、悔やんでも悔やみきれなかった。

渴いたはずの涙がまた零れそうになってしまい、葵は慌てて顔を拭いた。しかし泣かないよう努めていても絶望感が胸に広がっていく。ついこの間、この携帯電話のおかげで懐かしい友人の声を聞くことが出来た。携帯電話に保存されている加藤大輝の顔を見るだけで、頑張ろうという気にもなれたのだ。それらを失ってしまった傷は、簡単には癒えそうもない。

(直せないかな……)

ひとしきり泣いた後に浮かんできた考えを実現する方法はないかと、葵は必死で頭を働かせた。幸い、壊れた破片は手元にある。自分で直すことは不可能だとしても、誰か機械に強い人の力を借りることが出来れば直るかもしれない。そこまで考えたところで葵は再び絶望した。

(この世界のどこに機械があるっていうのよ)

魔法というものが存在している世界では機械などなくとも物が自動的に仕事をしてくれるのだ。そのためこの世界に存在する『物』

は非常に古めかしいものが多く、葵の想像する『機械』とは似ても似つかなかった。

どうしようもない絶望感と闘いながら帰路を辿っていた葵は妙案を生み出せないまま屋敷へ帰り着いてしまった。嘆息しながら玄関口へ向かおうとした葵はふと、異変に気がついて伏せていた目を上げる。すると見慣れたはずの屋敷は出掛けに見た姿とはまったく違う様相を呈していた。

(な、なにこれ……)

前庭にある噴水は枯れ、美しく咲き誇っていたはずの花は灰になり、屋敷も一部が破壊されている。大惨事だと思つた葵は居ても立ってもいられなくなり、慌てて屋敷へと向かった。すると玄関先でクレアの姿を見つけたので、葵は勢いを緩めることなく彼女の傍へ寄る。

「お嬢様」

驚いたように目を睨りながら振り向いたクレアは、葵の姿を見るなりさらなる驚きを露わにした。また葵も、クレアの姿を見て目を丸くする。

「お嬢様、そのお姿はどうされたのです？」

「クレア、一体どうしたの？」

相手を気遣う発言がかぶってしまい、葵とクレアは同時に口をつぐんだ。一呼吸置いて同じ科白を繰り返そうとしたところまで考えが同じだったようで、またしても相手の言葉を聞き取れなかった二人は黙りこくる。三度目はアイコンタクトをして、結局はクレアが先に口火を切った。

「そのお姿はどうされたのですか？」

クレアに言われて自分の体を改めて見下ろした葵は、あちこちに痣があることに気がついて愕然とした。どうも教室で机の下敷きになった時、しこたま体をぶつけたらしい。

「大丈夫、痛くないから。それより、クレアこそどうしたの？」

自身にふりかかった災難を説明するよりも、葵はクレアの身を案

じた。何故ならクレアは真新しい包帯を巻いていたり、髪や衣服が焼け焦げていたり、葵よりも凄まじい様相を呈していたからだ。

「実は、お嬢様がお出掛けになられてから一悶着ありました」

苦い表情をしながらも口調は平然と、クレアはそんな風に屋敷が破壊された経緯を明かした。揉め事があったのは見れば分かることであり、その先を聞いたかった葵は急いで言葉を重ねる。

「これ、誰がやったの？」

「名前は、存じません。ですがおそらく、あの少年は爵位を持つ貴族でしょう」

少年と聞き、葵はにわかに嫌な予感を募らせた。とある人物が頭に浮かんだので彼の容姿を説明すると、クレアは黒髪に同色の瞳というところで頷いて見せた。

「エクランド公爵のご子息でしたか。お嬢様と同じ学園に通われる方でしたら、そう仰っていたらよろしかったのに」

短く嘆息したクレアは葵をトリニスタン魔法学園へ送り出した後、転移魔法を使ってやって来た見知らぬ来訪者を迎えたのだと語った。漆黒の髪に同色の瞳といった珍しい容貌をした少年は名乗りもせず、ミヤジマ「アオイ」という者の所在を尋ねてきたのである。失礼極まりない来訪者に対し、クレアは再三にわたって名乗るよう警告したが少年はクレアの諫言を聞き入れず、あまつさえ力づくで言うことを聞かせようとしたのだ。少年を敵と認めたクレアも応戦し、その結果がこの有り様なのだった。

「申し訳ございません。お屋敷を破壊したうえ、お嬢様の居場所を明かしてしまいました」

「そんなのいいよ。それより、大丈夫？」

「傷のことでしたら問題ありません。わたくしより、お嬢様の傷を手当ていたしましょう」

傷だらけのクレアが玄関に向かって歩き出し、葵も手当てなどいらないとは言えずに彼女の後を追った。クレアは頭にも包帯を巻いているので、後ろ姿からでも痛々しさが伝わってくる。彼女に

傷を負わせたのがキリルだと知って、葵は改めて腹を立てた。

(何なのよ、あいつ)

もともと葵は、傍若無人ですぐに手を上げるキリルを好きではなかった。それは嫌いというよりも苦手に近い感情だったのだが今は、憎悪のような強い感情が湧き上がってくる。大切な携帯電話を壊されたからという理由だけでなく、それ以上に他人の気持ちを理解しようとするしない横暴ぶりが嫌なのだ。自分と、自分の認めた仲間さえ良ければあとはどうでもいいというものではないだろう。

(サイッテー)

クレアに手当てをしてもらっている間も憤っていた葵は、彼女が表の片付けに戻ろうとしたところでハッとして呼び止めた。

「ねえ、これって直せないかな？」

携帯電話の残骸を一つ残らずポケットから取り出した葵は、それをテーブルの上に並べてクレアの反応を窺った。大小様々の破片と化した携帯電話を見るなり、クレアは眉をひそめる。

「見たところ復元の魔法はかけられていないようですが、元はどのような物だったのですか？」

「ほら、前にベッドシーツを交換した時に拾ってくれた、アレ」

葵がヒントを与えるとクレアは記憶の糸を辿るように空を仰いだ。どうやら元の形が頭に浮かんだらしく、クレアはさほど間を置かずに頷いて見せる。

マジックアイテム

「魔法道具でしたら職人に頼めば何とかなるでしょう。明日、パンテノン市街へ行って参ります」

「職人……？」

「こちらはお預かりしておきますね」

「あ、待って！」

クレアが携帯電話の残骸を手に取りろうとしたので、葵は慌てて彼女の行動を制した。訝しそうな表情をしたクレアに、葵は拝むように手を合わせる。

「ちょっと心当たりがあるの。こっちは自分で何とかするから、パ

ンテノン市街まで送ってくれない？」

「かしこまりました」

葵に了承を告げたものの、クレアはすぐ行動に出ようとはしなかった。彼女は傍にいる葵にも聞き取れないほどの小声で何かを呟き、肩口にいるマトの口の下へと手を運ぶ。クレアの動作に応えるように細長い口をがばつと開けたマトは、彼女の手の上に何かを吐き出した。

「これをお持ち下さい。お役に立つはずです」

クレアが差し出してきたのは小さなカプセル状の物だった。しかし、それがマトの口から出てきたものということもあって、葵は手を伸ばすのを躊躇してしまう。すると痺れを切らせたクレアが半ば強引にカプセルを握らせてきたが予想に反し、カプセルは汚れていなかった。

「では、参りましょう」

「あ、うん」

クレアが先立って歩き出したので、渡されたカプセルをワイシャツの胸ポケットにしまった葵は不思議に思いながら彼女の後を追いかけた。

Break (5)

トリニスタン魔法学園アステルダム分校では敷地の一部分がマジスター専用の領域とされていて、彼らの空間には花園や塔など、幾つかの建造物が点在していた。中でも、マジスターが好んで集う場所といえば内部が美しい庭園になっているドーム状の建物である。

『シエル・ガーデン大空の庭』と呼ばれているその場所で、マジスター達は花を愛でながら紅茶を飲むのが日課なのだ。そのためシエル・ガーデンは上流階級の者が使用するに相応しい雅な雰囲気醸し出しているのだが、今はその場所に場違いな抜け殻が一体、膝を抱えて座していた。
「おーっす」

気安い挨拶を口にしながら花園に姿を現したのは、長い茶髪を一括りにしている私服の少年。スポーツマンタイプのがっちりとした体格をしている彼の名はオリヴァー。バベッジという。言わずと知れた、アステルダム分校のマジスターの一員だ。オリヴァーはその場所に先客の姿を認めたら声をかけたのだが、それに対する反応はどこからも返ってこなかった。

「何かあったのか？」

空いている席に腰を落ち着けながら、オリヴァーはマジスターの仲間であるウィル。ヴィンスに話しかけた。片手で頬杖をついているウィルはテーブルの上に広げている魔法書から目を上げることなく、ある方向を指差す。ウィルの指先を辿って円卓の斜め前に視線をやったオリヴァーはビクリとして上体を引いた。

「き、キル？」

オリヴァーの視線の先では、魔力も生氣も体から抜けきってしまったようなキリル。エクランドが椅子の上で膝を抱いていた。平素であれば燃え盛る炎を宿しているかのような瞳が死んだ魚のように濁っており、ぽかんと口を開けたままの彼はどこかを見つめているが明らかに何も目に入っていない。こんな放心状態の彼を見るのは

初めてのことで、オリヴァーは声の調子を落としながらウィルに顔を寄せた。

「どうしたんだよ、一体」

「さあ？ 僕が来た時からその調子なんだよね」

「何か、心当たりはないのか？」

「まあ、ないこともないけど」

それまで魔法書に目を落としたまま話をしていたウィルは、そこでぱたんと本を閉ざした。魔法書を異次元へとしまいこんでから、ウィルは改めてオリヴァーを振り返る。

「実は今朝早く、キルが僕の部屋に来たんだよ。安眠妨害するからエサをやれば大人しくなるだろうと思って、アオイの家を教えてあげたんだ」

「アオイの、家？ へえ、よく分かったな」

トリニスタン魔法学園においてマジスターの称号は特別待遇を受ける者の証である。彼らには学園内における全ての情報を知る権利があり、その気にさえなければ一生徒の住所を調べ上げることなど朝飯前なのだ。だがミヤジマ・アオイという一人の女子生徒に限り、その常識は通用しなかった。彼女については住所はおろか、試験の成績や素行についてなどの個人記録が一切存在しないのだ。自身でも調べようとした経験があるだけに、オリヴァーはウィルの発言に驚きを示したのだった。しかしウィルはそのことには触れず、さつさと話の続きを口にする。

「その後は何があつたのかは知らないけど、十中八九、キルがこんなになつたのはアオイ絡みだろうね」

ウィルがチラリとキрилを見たので、オリヴァーも抜け殻のようになっている彼の方へ視線を傾けた。仲間はずれにされることを何よりも嫌うキрилは平素であれば必ず会話に参加してくるのだが、今はその気配がまったくなくない。膝を抱えて、相変わらずどこを見ているのか分からない瞳で一点を見据えているだけである。まるで廃人のようになってしまったキрилから視線を外し、オリヴァーはさ

らに声の調子を落としながらウイルに顔を寄せた。

「アオイが何したらキルがここまで我を失うんだ？」

しつこくつきまとつていながらも実際には葵のことを何とも思っていないキリルが、彼女の些細な言動で我を失うほどのシヨックを受けるとは思えない。ならばよほどのことがあつたのだろうが、オリヴァーにはその理由がさっぱり分からなかった。しかしウイルには半ば答えが見えているらしく、彼は片腕で頬杖をついたままキリルを指差す。

「キルの左頬、よく見てみなよ」

ウイルから意味不明な助言を与えられたオリヴァーは、とりあえずキリルに視線を戻した。するとウイルが指摘した場所が明らかに周囲よりも赤くなっている。それはまるで殴られたような痕であり、オリヴァーはまさかと思ひながらウイルを振り返った。

「殴られたんじゃない？ アオイに」

まさかと思つたことをウイルがあっさりと言葉にしたのでオリヴァーは苦笑いを浮かべる。

「いくらアオイがキルのこと嫌いでも、さすがにそれはないだろ」

「本人に聞いてみればハッキリするよ」

そう言つて、ウイルはゆっくりと腰を上げた。円卓に沿つてキリルの元へと向かうウイルの姿に嫌な予感を覚えたオリヴァーは自らも立ち上がり、少しテーブルから距離をとる。オリヴァーの予感は見事に的中し、ウイルが傷のある左頬に人差し指を突きつけた瞬間、キリルはカツと目を見開いた。

それまで死んだ魚の目をしていたキリルが開眼した刹那、彼から発せられた怒りがシエル・ガーデンを炎に染めた。ウイルは炎の魔手がその身を焦がす前に上空へと逃げ出し、テーブルから距離を置いていたオリヴァーは水の薄膜でつくつた球体で自身の周囲を保護する。美しく咲き乱れていた花々は灰となり、円卓は炎の柱と化していたが、ウイルとオリヴァーは傷一つ負わずに荒れ狂う炎の只中にいた。

「オリヴァー、出番だよ」

自在に空中を泳いで水球の中へ入ってきたウィルがそんなことを言つてのけたのでオリヴァーは大きなため息を吐いた。

「復元はお前がやれよ？ 俺は鎮火するところまでだからな」

「いいから、早く」

「つたく、俺はお前らの専属執事パトラーじゃないんだぜ」

日頃から尻拭いばかりさせられているオリヴァーはぐちぐちと不満を零しつつも異次元から魔法書を召喚した。手にした魔法書の背を片手で支え、オリヴァーは素早くページをめくる。高速でページをめくる手が静止した時、彼は呪文を唱え始めた。

「我が血肉に刻まれし古の盟約よ。契約を交わせし英霊を我が前に召喚し、我が意に従わせよ。英霊フィオレンティーナ・アヴォガドロ、オリヴァー・バベッジの名において汝に命ずる。まずは消火だ！」

呪文を終えたところで即座に命令を下し、オリヴァーはシエル・ガーデンの天頂を指差した。するとオリヴァーの指先から放たれた光が薄膜で出来た水の球体を貫いていき、ドームの天頂付近に上がったと同時に四散する。初め放射状に放たれた光は瞬く間にその形状を変え、局地的な激しい雨がシエル・ガーデン内に降り注いだ。

「雨が降るなんて迎夏けいかの儀式以来だね」

「黙ってる！」

何もしていないウィルが悠長なことを言つてのけたので、オリヴァーは彼を一喝した後すぐに魔法へと意識を戻した。英霊の召喚は精霊よりも扱いが難しく、通常の魔法より何倍もの集中力を要するため、本来であれば会話をしている余裕などないほどの代物なのだ。大雨が降り注いだおかげでシエル・ガーデンを焼き尽くした炎は鎮火されたが、無残な様相を呈している元花園の中には未だ消えぬ熱がある。紅蓮の炎をその身から進らせている人影がゆつくりとこちらへ近付いて来ていたのでオリヴァーは熱源となつている黒髪の少年を真っ直ぐに見据え、次なる魔法を発動させた。

「氷縛！」

オリヴァーの言葉に従い、シエル・ガーデンに激しく降り注いでいた雨が液体から固体へと変化を遂げる。一点集中で降り注いだツララは砕けると同時に寄り集まって巨大な氷柱となり、あつという間に熱源を呑み込んだ。炎を撒き散らしていたキリルが氷柱の中で動きを止めたため、オリヴァーはそこでやつと息をつく。その頃には大気中の水分までもが氷結してしまったため、シエル・ガーデンは氷の園と化していた。

「あゝ、疲れた」

周囲を保護していた水球を消した後、オリヴァーは魔法書を閉ざしてそれを異次元へとしまいこんだ。魔法書を閉ざしたことが魔法終了の合図となり、シエル・ガーデン内から英霊が姿を消す。それは目に見える変化ではなかったが英霊の放つ気配は実在する人間に匹敵するため、消え去ったこともはっきりと分かるのだ。

「お見事」

ウィルが気楽な拍手を送ってきたので一息ついていたオリヴァーはけっきょく何もしなかった彼を横目で睨みつけた。

「氷が溶けたらちゃんと復元しとけよな」

「分かってるよ。いつ溶けるの？」

「それはキル次第……」

オリヴァーの言葉が終わらぬうちに、静かなシエル・ガーデンに何かが砕けるような音が響き渡った。とつさに顔を傾けたオリヴァーとウィルはキリルを捕縛していた氷柱が消え去っているのを目にし、彼の元へと歩み寄る。そこにいたのは抜け殻ではなく、いつものキリル。エクランドだった。

「何だこれ。何がどうしてこうなった」

周囲を見回しながら眉根を寄せているキリルには自分がシエル・ガーデンを焼き払ったという記憶はないようである。だが暴走後の彼はいつもこんなものであり、オリヴァーとウィルは特に気にすることもなく本題を口にした。

Break (6)

クレアに転移魔法で送ってもらってパンテノン市街にやって来た葵は街の中心部にある魔法陣に出現するとすぐ、フィフスストリートを目指した。多くの人で賑わうアベニューを横切り、迷路のようになっている脇道を抜けていくと、そのうちに物が人の手を介さず自在に動き回っている光景が目に見え込んでくる。魔法が息衝く職人街で葵は脇目も振らずに進み、やがて一軒の工房の前で歩みを止めた。

「こんにちは」

通いなれた場所の扉を少しだけ開き、そこから顔を覗かせた葵は店内に向かつて挨拶を口にした。その扉の奥は工芸品を扱う店舗になつており、店内には少女の姿がある。彼女が葵の顔を見るなり軽く手を振ってきたので、葵も扉を開ききって店内に進入した。

「あ、アオイ？ 一体どうしたの？」

驚きを露わにしながら葵を指差している少女の名はリズ。彼女はこの工房の主であるザックという少年の妹である。リズが何に驚いているのか分からなかった葵は改めて自分の出で立ちを確認し、ああ……と苦笑いを浮かべた。

「ちょっと、ハデに転んじゃって」

葵はワイシャツにチェックのミニスカートという格好をしているため、露出されている手足に手当ての跡が目立つのだ。腕にも足にも真新しい包帯を巻いている葵をぶしつけに見回し、リズは眉をひそめながら言葉を次いだ。

「ずいぶんハデに転んだのね。大丈夫？」

「うん、痛くはないから。それより、ザックは？」

「お兄ちゃんなら作業場。最近こもりっぱなしなのよね」

「仕事中かあ……行ったらジャマになるかな？」

「へーきだよ。行く？」

席を立ったりリズがさつさと歩き出したので、葵も彼女の後に続いて奥へと向かった。作業場には確かにザックの姿があったが、まだ作業前の段階のようで溶鉱炉に火が入れられていない。魔法を使っていなかったもので、彼はすぐ葵と妹の存在に気がついた。

「いらつしやい」

ザックに笑みで迎えられた葵は穏やかな気持ちになり、自然と口元を緩ませながら彼に応えた。しかしすぐに笑みを消し、真顔に戻った葵は作業場の隅に置いてあるテーブルにザックとリズを招き寄せる。そこで携帯電話の残骸を広げた葵は藁にも縋りたい気持ちでザックを仰いだ。

「これ、直せないかな？」

「これは何？」

残骸を見たザックから返ってきたのは、至極当然の疑問だった。

だが何と問われてもどう答えていいのか分からず、葵は難しい顔をして空を仰ぐ。

（携帯電話って言っても通じないし……どう説明したらいいんだろう）

そもそもこの世界には電話というものが存在しない。存在しないものを説明するのは至難の業で、葵は長いあいだ考えこんだ末『近くにいない相手と話が出るもの』ということだけを伝えた。それだけの説明でザックとリズが理解を示してくれるか不安だったのだが、彼らは意外にもあっさり頷く。

「アン・ルコンスウトウルリクスイオン」

不意に、リズが携帯電話の残骸に指を突きつけながら呪文を唱えた。しかし残骸は何の反応も示さず、沈黙を守っている。それを見て、リズは兄を振り返った。

「これ、復元魔法がかかってないみたい」

「復元の魔法がかけられているなら、わざわざアオイが持つてくることもないだろ」

「あ、そっか」

「アオイ、これの元の形はどんなの？」

ザックに目を向けられた葵はテーブルの上にあった紙とペンを手にし、魔法を使わずに絵を描き出す。しかし美術の授業でもなければ絵を描くことなどしない葵が生み出したものは、平面的な長方形でしかなかった。

(何でヘタクソなんだろう)

自分の絵のヘタクソ加減に、葵は絶望しなくなった。見かねたザックが代わりにペンを取ってくれたものの、葵がうまく説明出来ないせいで元の形を描き出せない。葵とザックが四苦八苦している様子をしばらく眺めていたリスが、やがて腰に手を当てて大きくため息をついた。

「元の形がわかんないんじゃないよ」

「アオイ以外に、これの元の形を見たことある人っていないの？」

ザックに問われ、葵の頭にはすぐ二人の人物の顔が浮かんできた。携帯電話を破壊した張本人はすぐさま頭から消し去り、葵はメイド服姿の少女だけを脳裏に浮かべる。そこで、あることを思い出した葵はワイシャツの胸ポケットを探った。

「あ、それ！もしかして形状記憶カプセル！？」

葵が手にしている消しゴム大のカプセルを指差し、リスが驚いたような声を上げた。リスの声につられてスケッチから顔を上げたザックも、妹と同じものを見て目を丸くする。一人だけ話が呑みこめないでいる葵はカプセルを指で挟んだまま小首を傾げた。

「なに、それ？」

「説明する前に、試してみよう」

ザックに「貸して」と言われたので、葵は彼にカプセルを手渡した。掌でカプセルを受け止めたザックは空いている方の人差し指をカプセルに突きつけ、短い呪文を唱え出す。「アン・フォルマスイオン」の呪文^{スベル}に反応したカプセルは光を発しながらその形状を変えていき、やがてまったく別の形へと変化した。

「元の形って、これ？」

ザックの手にはカプセルに代わって二つ折りタイプの携帯電話が乗っており、葵は驚きに目を見開いた。

「そう、これ!!!」

「じゃあやっぱり、形状記憶カプセルだったんだね」

驚喜する葵とは対照的に、すでに驚きをおさめているリズが平静的な声でザックに話しかけた。妹に頷いてみせたザックは携帯電話をテーブルの上に置き、葵に向き直ってから改めて口火を切る。

「形状記憶カプセルっていうのは物の形を記憶しておくものなんだ。魔法に反応するんだけど魔法道具マジックアイテムじゃなくて、魔法ともまた違うものなんだよ」

生まれ育った世界でファンタジー小説なども愛読していた葵には魔法やマジックアイテムという単語自体はすんなりと受け入れられるものの、いかんせん、ザックの説明を理解するには絶対的に知識が足りなかった。葵が難しい表情をしながら首をひねっていると、見かねたようにリズが横から口を出す。

「魔法道具マジックアイテムは人間が作り出すものだけど、形状記憶カプセルみたいなレア・アイテムは人間の手じゃ作れないものなのよ。そう考えれば解りやすいんじゃない？」

レア・アイテムの全てがそうだというわけではないのだが形状記憶カプセルに限って言えば、それは魔法生物の体内で生成される。これは魔法生物の特性である変態メタモルフォーゼに起因する能力だと言われているが、大陸では魔法生物自体が珍しい存在であるため、まだはつきりしたことは分かっていないらしい。しかしリズからそういつた話を聞いた葵は魔法生物であるマトが実際にカプセルを吐き出した現場を見ているため、納得して頷いた。

（そっか、だからクレアが持って言って言ったんだ）

葵の画力は未知数だったとしても、壊れた物の復元を試みるのならば実物に近い模型があった方が話が早い。そのことに思い至った葵はクレアの機転に密かな感謝を寄せた。

「で、直りそう？」

葵が核心を口にすると、珍しい形状記憶カプセルに意識を注いでいたザックとリズは面を上げ、そのまま顔を見合わせた。どう見ても色好い反応とは思えず、葵は不安を募らせながら眉根を寄せる。

「やっぱり、ダメ？」

「専門じゃないから、僕には解らない。ジャンクストリートの知り合いに聞いてみるよ」

「私も行く！」

なんとしてでも携帯電話を直したかった葵は少しでも可能性があるのならば、必死で声を上げた。初めは驚いていたザックもテーブルの上にある残骸が葵にとって大切なものだと分かるとすぐに頷いて見せる。

「じゃあ、行こうか。リズ、店番よろしく」

「行ってらっしゃい」

ひらひらと手を振るリズに送り出され、葵とザックはジャンクストリートに向かうべく工房を後にした。

天空にオレンジがかかった黄色い二月が浮かぶ夜、ジャンクストリートでザックと別れた葵は市街の中心部から外れた人気のない通りの片隅でスカートのポケットから取り出した小さな呼び鈴ベルを軽く振った。するとしばらくの後、目の高さの空中が不意に光を放ったので驚いた葵は反射的に後ずさる。突然の発光はすぐに消え、光を放っていた辺りから何かが地面に落下した。ポトツという音と共に落下した物体に目をやった葵は、その正体に再度驚いて目を丸くする。「マト？」

葵の足元に出現したのは、いつもクレアが肩に乗せているワニに似た魔法生物だった。呼びかけに反応を示したマトは長い顎を持ち上げ、闇の中で異様な光を放つ双眸を葵へと向ける。その様が怖かったので、葵はもう一步後退してしまった。

葵が持っているベルは、厳密に言うくとクレアを呼び出すためのアイテムではない。人間には聞こえない音を発するのだというベルの音に反応するのはマトであり、クレアはパートナーが捉えた呼び出し音に従って行動しているだけなのだ。そのためクレアが近くにいない時に葵が呼び出しをかけてしまうと、マトが単体で姿を現してしまう時がある。以前にもそのようなことがあっただけに、頭はすぐ状況に対応した。しかし人語を話せないマトとは意思の疎通が出来るないため、葵は微かに眉根を寄せる。

「屋敷に帰りたいんだけど……」

困ってしまった葵は、とりあえずマトに希望を伝えてみた。するとマトが大きく口を開けたので、その仕種に怯んだ葵はさらにもう一步後ずさる。だがマトの動作にはちゃんとした理由があったらしく、大きく開いた彼の口からは何かが生み落とされた。

(あ、これ……)

見知った形の物体は、どうやら形状記憶カプセルのようだった。

だがそれをどう処理すればいいのか分からず、またマトに近寄るとも躊躇われたので、葵はその場から動けずにいた。するとマトが体の向きを変え、長い尾で自らの生み出したカプセルを叩き潰す。潰れたカプセルは筋状の光となって地を這い、やがてマトを中心とする魔法陣が完成した。

（魔法陣の形状を記憶してたカプセル、ってことだったのかな）

そう考えた時、葵の頭の中で何かが繋がった。仮説を立ててみたことで解消した疑問は、クレアが転移魔法を使う時に見せる不可思議な動作である。アルヴァなどは変則的に転移魔法を使いこなしているが、クレアは必ず転移魔法を使う際に魔法陣を介する。魔法陣が近くにない街中などに迎えに来てもらう時は、わざわざ魔法陣を描き出してから転移魔法を使うのだ。そして魔法陣を描く際、クレアは何かを地面に叩きつけることでそれを成している。

（そっか、クレアもこうやって魔法陣を描いてたんだ）

便利な使い方が出来るものだと感心した葵はその後、自分の前に出現した魔法陣の意味について考えを及ぼせた。クレアの代わりに現れたマトが描き出したものならば、この魔法陣の用途は移動用だろう。むしろそう思いたいと思い、葵はおそろおそろマトに近付いて魔法陣に足を踏み入れた。

葵とマトを乗せた魔法陣はやはり移動用のものだったらしく、目をくらませた光が収まった頃には見慣れた風景が目前に広がっていた。屋敷の玄関と前庭にある噴水の間に描かれた魔法陣に帰って来た葵は、そこでメイド服姿の少女に迎えられてホッと胸を撫で下ろす。足元に這い寄って来たマトを軽々と肩に乗せてから、クレアは葵に向かって一礼した。

「おかえりなさいませ。お迎えにあがれず、申し訳ございませんでした」

クレアの物言いかから察するに、マトが単独で迎えに来たことは彼女の意向によるものようだ。クレアが代理を寄越したのは今回が初めてであり、また日中に騒動があったばかりなので、嫌な予感を

募らせた葵は眉根を寄せながら口火を切った。

「それはいいけど……何かあった？」

「お嬢様にお客様がお見えです」

この世界で自分を訪ねて来る者がいるとは思ってもいなかった葵にとつて、クレアの一言は首をひねるものだった。やがて、ある嫌な想像を巡らせた葵は恐る恐る口を開く。

「まさか……キリル」エクランドじゃないよね？」

携帯電話を壊されて逆上していたとはいえ、葵は力いっぱいキリルを殴って逃げ去って来たのだ。あの時は安心していただけだが正気に戻ったキリルが復讐を考えてもおかしいことではない。葵はそんな危惧を抱いたのだが、クレアは至つて冷静に首を横に振った。

「お嬢様の担任の先生です。客間でお待ちですので、どうぞ」

クレアが道を開けたので、葵は拍子抜けしながら歩き出した。日中には半壊状態だった屋敷もすでに復元が成されていて、今ではもう激しい争いがあつたことすら分からない状態になっている。魔法の便利さと凄さを改めて実感した葵はキョロキョロしながら歩を進め、やがてエントランスホールを抜けてすぐの所にある客間の前で歩みを止めた。すると少し後ろを歩いていたクレアがさかさ扉を開いたので、葵も再び歩き出す。豪華なインテリアで彩られている客間のソファーには紅茶を前に座しているロバートの姿があり、クレアに促された葵は彼の向かいの席に腰を落ち着けた。

「大方の事情はメイドの彼女から聞いた。災難だったな」

問いかけようとした矢先にロバートが口火を切つたので、何が何だか分からなかった葵は大きく首を傾げた。

「事情つて何ですか？」

「キリル」エクランドが派手に暴れたらしいな。そのせいで彼女も怪我をしたとか」

ロバートが手作業で紅茶を淹れているクレアに視線を移したので、そこでようやく話が通じた葵は胸中で「ああ……」と呟きを零した。携帯電話の修理で頭がいっぱいだったためすっかり失念していたが、

今朝は教室を派手に荒らしてしまったのだ。

「すいませんでした。何も言わずに勝手に帰って」

「私は君を咎めるために来たのではない。教室で何があったか、話してくれないか」

やはりロバートは朝の惨状を目の当たりにしているようである。

整然としていた机や椅子が薙ぎ倒されていて、さらには葵の私物が教室内に散乱していれば、何かがあったと思うのは当然のことなのだ。ロバートが自分を案じて訪ねて来てくれたのだということが分かるだけに、葵は渋い表情になりながら事の顛末を語った。

「それで、キリル「エクランドを殴り飛ばしたのか?」

葵の話聞いたロバートはしきりに目を瞬かせながら念を押すように確認してきた。ロバートが『キリルを殴り飛ばした』という部分を選んで、ピンポイントに繰り返したのは何やら意味がありそうである。そう感じた葵はにわかには不安を募らせながら小さく頷いて見せた。しかし葵の予想に反し、ロバートは愉快そうに笑い出す。何故笑われるのか分からなかった葵が困惑していると、やがて笑いをおさめたロバートは口元を手で覆いながら言葉を紡いだ。

「日常的に授業を妨害するなど彼の言動には問題があったからな、いい薬だろう。ミヤジマ「アオイ、君は気にすることなく堂々としていればいい」

ロバートはそう言うが、葵は密かにキリルから仕返しをされるのではという危惧を抱いていた。携帯電話を壊されて頭にきていたとはいえ、ずいぶんと考えなしな行動をしてしまったという後悔もある。そうした葵の不安を見透かしたかのように、ロバートは気持ちを和らげるような微笑みを向けてきた。

「不安か?」

「……少し」

「大丈夫だ。私が君を守る」

今までにも幾度か庇ってもらった自覚があるだけに、ロバートの言葉には絶大な効力があつた。彼の力強さに安らぎを覚えた葵は自

然と微笑み返しながら感謝の思いを言葉にする。ロバートに巡り合うことが出来て本当に良かったと、葵は心底そう思いながら暇を告げた彼を魔法陣まで見送りに行った。

「良い先生ですね」

ロバートの姿を消し去った発光が収まってから、クレアがぼつりとそんな呟きを零した。彼女は葵と並んで玄関口に佇んだまま、屋敷前の魔法陣を見つめている。普段は自分の思いを言葉にしないクレアがロバートについての『感想』を零したことに、葵は少なからず驚いた。しかし今は、そんなことで驚きを露わにするのは無粋である。そう感じた葵は彼女の意見を肯定するべく、力一杯頷いて見せた。

「うん。すごく、いい人だよ」

クレアはもう話には応じなかったが、どうやら彼女もロバートにはかなりの好印象を抱いているらしい。それが自分のことのように嬉しくて、葵は明るい口調のまま言葉を重ねた。

「そういえば、ありがとね」

葵が急に礼を言ったため、クレアは不可解そうに眉をひそめながら振り向いた。その表情から話が伝わっていないことを察した葵はすぐに補足する。

「あのカプセル、クレアの言った通り役に立ったよ」

「壊れた物は直りましたか？」

「それが、まだ分からないんだよね」

ザックと共にジャンクストリートに赴いてはみたものの、ザックの知り合いである職人達は初めて目にする携帯電話に一様に首を傾げていた。そのため詳しく調べてみないと直せるかどうかも分からないということ、結論はいったん保留ということになったのである。携帯電話の残骸と携帯電話を模した形状記憶カプセルをジャンクストリートに置いてきた葵は、三日後に再びザックと落ち合う約束をして帰宅の途についたのだった。

(直るといいな)

そう切望しつつも心のどこかで諦めを抱いている葵は、あまり期待はしないでおこうと思い、クレアを促して屋敷の中へと引き返した。

雲一つない夏の空にオレンジの色味が強い二月が浮かぶ夜、青年は窓のない部屋の中で壁に向かって設えられたデスクに向かっていた。窓のない部屋では常に魔法の明かりが室内を照らしていて、煙草をくわえながら作業をしている青年の横顔をぼんやりと映し出している。鮮やかな金髪にブルーの瞳といった容貌をしている美しい面立ちの青年は名をアルヴァ・アロースミスといい、彼は夜仕様の薄暗い照明の中で真剣な表情をして実験器具と向き合っていた。デスクの上に並べられているのはピーカーやフラスコ、試験管やメスシリンダーといった実験器具の数々である。立ち並ぶ試験管の中には色とりどりの液体が注がれていて、簡易ベッドの並ぶ室内はいかにも怪しげな空気を醸し出していた。

眼鏡越しに細い目盛を注視していたアルヴァは背中に来客の気配を感じ、手にしていた器具をゆっくりとデスクの上に置いた。振り返る前に引き抜いた眼鏡もデスクの隅に置き、ついでに煙草も揉み消してからアルヴァは行動を起こす。椅子ごと回転して背後を振り返ったアルヴァは、そうして何食わぬ顔で深夜の来訪者を迎えた。

「邪魔をしたか？」

そんな言葉を口にしながらもすでにベッドに腰を落ち着けている青年の名はロバート・エーメリー。彼はエーメリー公爵家の一員であると同時に、彼らが相対している部屋が存在するトリニスタン魔法学園アステルダム分校の若き理事長でもある。ロバートは夜の正装である燕尾服を身にまとっていたので、アルヴァは彼が夜会帰りにふらりとこの場所へ立ち寄ったことを察した。

「とんでもない。貴方のおかげで楽をさせていただいていますよ」

「と、言つと？」

「余計な仕事がなくなつたので研究に専念させてもらっています」

「……暗いな」

呆れたように言った後、ロバートはわざとらしく嘆息して見せた。作り物の笑みを顔に貼り付けているアルヴアは外部仕様の口調を崩すことなく話を続ける。

「不幸な少女の様子はいかがです？ そろそろ貴方に純潔を差し出しそうですか？」

「今はまだ舞台の準備を整えている段階だ。極上の主演女優ヒロインにはそれに見合った最高の舞台を用意してやらねばな」

ロバートがさらりと気障な科白を言つてのけるので、アルヴアは胸中で「おやおや」と呟きを零した。

（ミヤジマもまた、ずいぶんと高く評価されたものだ）

言いつけには従わない、自分の意見が通らないとすぐにヘソを曲げるような子供に、アルヴアはそこまでの魅力を感じることが出来ない。子供の相手はやはり、異常心理ロリコンの持ち主に任せるに限る。胸中でそう毒づいたアルヴアは思考をまったく面に出さずに言葉を紡いだ。

「それで、その最高の舞台はいつごろ仕上がりそうなのですか？」

「主人に忠実な僕を懐柔してからと思っていたのだが、残念なことに悠長なことを言っている場合ではなくなりました。つい今しがた、定例会の招集令状が届けられたのでな。伽羅茶カハラチャの月の初めには王都に向かなければならない」

ロバートが口にした定例会とは、一部の魔法使い達が王家に研究の成果を発表するプレゼンテーション会である。プレゼンテーションをするしなにかかわらず、トリニスタン魔法学園の本校に通う生徒はこの会に参加しなければならない。そのため、肩書きの一つに本校の教員を有するロバートも必然的に駆り出されるのだ。だがアルヴアの意識はそんなことよりも、ロバートが発したある一言に注がれていた。

「しもべ？」

「いくら私でも、メイドの了解なくして不幸な少女の純潔マルシャンス・フイークを奪うことは不可能だ。下手をすれば王家に直訴されて、爵位を剥奪されか

ねないからな」

世界使用人派遣協会であればそれくらいのことはやりかねないと、ロバートは愚痴っぽく独白を零した。ロバートはあくまで淡々と語ったが、明かされた事実にはアルヴァは愕然とする。

「待て、ミヤジマ」アオイが住んでいる屋敷にメイドがいるのか？」

「なんだ、知らなかったのか？」

「メイドなんて知らない。誰がいつ、そんなものを手配したんだ」

「私に訊かれてもな。そういうことは本人に直接尋ねてみたらどうだ」

アルヴァが行方をくらませてからというもの、葵は甲斐甲斐しく保健室へ足を運んでいる。そういった話をロバートから聞かされてもアルヴァの混乱がおさまるわけではなく、彼はついに頭を抱えてしまった。

メイドとは、世界使用人派遣協会に属する使用人のエキスパートである。女性の場合はメイド、男性の場合は執事と呼ばれるのだが、彼らを雇うには高額の資金が必要となるため、大貴族でもなければまず雇用は不可能である。そのメイドが屋敷にいたとなれば、そこには必ずレイチエルかユアンの意思が働いているはずなのだ。そうなつてくると、ロバートの好き勝手な行動を許している現状は非常にまずい。

「ロバート」

頭を抱えているうちに考えをまとめたアルヴァは焦りを募らせながらロバートに視線を据えた。アルヴァに真剣な瞳を向けられたロバートは、相変わらずベッドで脚を組んだまま後に続く言葉を待っている。思わず席を立ったアルヴァはロバートの傍へ歩み寄り、必死の形相で訴えかけた。

「すまないが、ミヤジマ」アオイから手を引いてくれないか」

「それは出来ない相談だな」

「頼む、ロバート！」

形振り構わず、アルヴァはロバートに向かって頭を下げる。しか

し低頭して得たものは、ロバートが愉快そうに笑う声だけだった。

「初めに言っただけだ、アル。邪魔をするなと」

ロバートに拒絶された瞬間、アルヴアはこの世の終わりを垣間見たような気分になった。呆けてしまったアルヴアの顔をわざわざ下方から覗き込んで、ロバートはさらに愉快そうな表情になる。

「先日、件の少女にアルヴア・アロースマスという人物を知っているかと訊かれたのだが、その様子では知らないことにしておいた方が良かったらしいな」

「まさか……僕との繋がりをミヤジマに明かしたのか？」

「まさか。私が君の不利になるようなことを好んですると思うか？」

見事なまでの肩透かしを食らい、アルヴアは何も反応を返せなくなってしまった。アルヴアの反応を見て面白がっているロバートは顔を背けて口元に手を当て、小さく吹き出す。

「君のことは誰に喋る気もない。安心したまえ」

「……脅しをかけられた後にそのようなことを言われても信用なりませんね」

「なに、ただの交換条件だよ。君はこの件に無関係だ。そういうことしておく代わりに私の邪魔はしないでほしい」

頼みごとをするかのような表現をとっけていても、ロバートの言っていることはけっきょく脅しである。だがアルヴアにも事情があるため、彼は自身が無関係で済むのならと渋々承諾を伝える。早くこの話題から離れたかったアルヴアはその後、自ら言葉を重ねた。

「それで、そのメイドっていうのはどういう人物なんだ？」

「初々しい少女だよ。難があるとすれば、メイド服のスカートがロング丈であることだな。あれが若々しさを強調したミニスカートであれば言うことなしだ」

「君の主観タイプを尋ねたわけじゃない」

「名前は忘れてしまったが、彼女については一つ、面白い事実がある」

含みを持たせて一度言葉を切った後、ロバートはアルヴアを見据

えてニヤリと微笑んだ。嫌な予感を覚えたアルヴァは顔をしかめながら椅子に腰を落ち着けたのだが、あくまで事態を楽しんでいるロバートは喜々として続きを口にする。

「私の前では隠しておきたかったようだが、ミヤジマ・アオイの傍にいるメイドは魔法生物を連れてくる」

「……へえ。なら、その少女は坩堝島るつほの出身者というわけか」

魔法生物とは、生まれながらに魔法をその身に宿した天然の生物のことである。彼らは人間とは違う形で魔法を使うことが出来、高い知能を有しているという特徴がある。魔法生物は何故か坩堝島という孤島でしか生まれることがなく、その島で生を受けた人間にか心を許さない。故に、魔法生物を連れてくるということは出身地を無言で明かしているようなものなのだ。

（坩堝島か……）

坩堝島に生を受けた者が島を出ることは珍しく、ましてメイドをしているなど聞いた例がない。だが彼女が珍しい存在であればこそ、その本当の雇い主が誰であるのかがハッキリしてくる。過去にその人物が、坩堝島に尋常ならざる興味を抱いていたことがあるからだ。（……仕方がない）

不測の事態が生じてしまったものの、走り出したロバートを止めることはもう誰にも出来ない。彼が交換条件などと甘いことを言っているうちに条件を呑んでおいた方が得策だと思ったアルヴァは、この件に関しては一切関与しないことを彼に約束したのだった。

裏切り（1）

夏月期中盤の月にあたる橙黄とうこうの月の二十日。夜空に二月が浮かぶこの世界では夏の間に雨が降ることはないため、この日も夜は穏やかに明けた。飾り窓から差し込む朝の日差しが広々とした室内の一角を照らしていて、開閉可能な窓辺では薄手のカーテンが微風に揺れている。室内に差し込む光は少しずつ斜光面積を広げていき、やがて部屋の中ほどにある天蓋つきのベッドにまで至ったが、あいにくその場所に日差しを浴びる人物は存在していなかった。ベッドの主はすでに寢所を抜け出していて、まだ日の当たっていない壁際でひっそりと机に向かっている。ネグリジェ姿のまま早朝から勉強に励んでいるのは黒髪に同色の瞳といった、世界でも珍しい容貌をしている少女。彼女は名を、宮島葵といった。

それまで静かだった室内に軽いノックの音が届けられたので、葵は魔法書から目を上げた。彼女が振り返ると扉が開くのが同時であり、扉を開けて現れたメイド服姿の少女は葵の姿を見るなり驚いたように声を上げる。

「もう起きられていたのですか」

そう言うなり、急いで紅茶の準備を始めた少女は名をクレア・ブルームフィールドという。クレアは葵が暮らしている屋敷のメイドであり、主人にアーリーモーニングティーを運ぶのが彼女の朝一番の仕事なのだ。

夜が明ける少し前から机に向かっていた葵は一息つくことにして、持っていたペンを置いてデスクから離れた。薄手のカーテンが揺れる窓辺にクレアが茶の席を設けたので、そちらへと移動する。クレアに礼を言つて紅茶を口に運んだ葵は、ハーブの香りが立ち上る紅茶に癒された気になって深く息を吐いた。

「そつえば、マトは？」

葵が口にしたマトとは、いつもクレアが肩口に乘せているワニに

似た魔法生物の名である。だがどういうわけか、今朝は彼女の肩にマトの姿が見えない。クレアは使用した茶器をワゴンに乗せ、その上に白い布を被せてから改まって葵を振り返った。

「今は人目につかない場所に隠れております」

「何で？」

「お嬢様にお客様がいらつしやったものですから」

客人と聞き、葵はおもむろに眉根を寄せた。まだ夜が明けて間もない時間帯であり、来客が訪れるにしては早すぎる。また自身に来客があること自体を不審に思ってしまう葵にとって、その報せは悪いもののように感じられた。

「まだこのような時分ですので一度はお断りしたのですが、お嬢様起きられるまで待つと仰られたもので……」

それで様子を見に来たのだと、クレアは微かな戸惑いを見せながら説明した。クレアの様子にますます不信感を募らせた葵は眉間のシワを深くしながら疑問を口にする。

「お客って、誰？」

「バベツジ公爵のご子息です」

「バベツジ？」

とっさにはピンとこなかったものの、すぐにその名が表す人物の顔が脳裏に浮かんできた。その想像が正しいかどうかを確かめるために、葵は恐る恐るクレアを仰ぐ。

「もしかして、オリヴァー＝バベツジ？」

クレアが頷いたので葵は息を吐きながらこめかみに指を突きつけた。朝から厄介な名前を聞いたため頭痛がしてしまったのだ。

「やはり、お断りいたしましたでしょうか？」

「いいよ、行く」

仕方なく立ち上がった葵は着替えのために室内にある別室へと移動しようとした。しかしあることに思い当たり、すぐに足を止めてクレアを振り返る。

「どこに行けばいい？」

「お客様には客間でお待ちいただいています」

「エントランスホールの横の部屋ね。りょーかい」

クレアに投げやり気味な返事をした後、葵は手早く着替えを済ませて二階の片隅にある寝室を後にした。その後は踊り場のある階段を下り、エントランスホールの横にある客間へと足を向ける。昨夜担任教師であるロバート・エーメリーと面会したその部屋で、今度はトリニスタン魔法学園が誇るマジスターと顔を合わせる羽目になった葵は茶髪の少年の顔を見るなり嫌な表情を作った。

「何でここが分かったの？ 教えた覚え、ないんだけど」

挨拶もなく第一声から皮肉を発した葵に、オリヴァーは苦笑いで反応を返してくる。

「やっぱり、不機嫌だな」

「当たり前でしょ？ ひとに攻撃しかけておいて、よくぬけぬけと顔出せるよね」

「あ、そっち？」

オリヴァーが妙なことを言い出したので、葵は怒りを忘れて眉をひそめた。葵が発言の真意を問う前に、オリヴァーの方から率先して説明を始める。

「昨日、キルが何かしたみたいだったから。そっちのせいで不機嫌なのかと思った」

オリヴァーが発言の真意を明かしたことで、彼がこんな朝早くに訪れた理由まで察してしまった葵は小さく息をついてから話に応じた。

「そのことが聞きたくて来たの？」

「まあ、単刀直入に言えばそういうことだ」

「そんなの、私じゃなくてあっちに聞けばいいじゃない。仲、いいんでしょ？」

「それが出来ればそうしてるって」

葵の所へ来る前にオリヴァーはウィルと共にキリルに直接、彼が抜け殻のようになっていた理由を尋ねたらしい。しかしキリルは知

らないの一点張りで、決して口を割ろうとしなかった。その強硬さを崩すためにオリヴァーとウィルは彼に憂さ晴らしを勧めたのである。酒に酔えば口が軽くなるだろうという彼らの試みは結局のところ失敗に終わり、浴びるように飲み明かしたキリルは真相を語ることなく酔い潰れてしまった。当事者の一人が使い物にならなくなってしまうため、オリヴァーは徹夜で飲み明かしたその足で葵の元を訪れたというわけらしかった。

「……呆れた」

顔も態度も口調も、満身で胸の内を表現した葵は本気で呆れかえって首を振った。キリルが頑として自らの非を認めようとしないことも、他人の迷惑も顧みず友人のために奔走しているオリヴァーも、すべてがくだらない。さつさと帰ってもらいたかったので、葵は昨日の出来事を手短に語った。

「あいつが私の大切な物を壊したの。だから殴った。それだけのことよ」

事のあらましを知ると、オリヴァーは面白いくらいに目を剥いた。しかし驚きに反して、彼は冷静な調子で言葉を次ぐ。

「そうじゃないかとは思ってたけど、本当にキルのこと殴ったんだな」

「分かってるならわざわざ聞きに来ないでよ」

「いや、いちおう本人の口から聞いておこうと思ってな」

「オリヴァーはあんまり関係ないかもしれないけど、マジスターに関わっているとロクなことがないの。だから悪いんだけど、もう放っておいて」

葵が率直な胸の内を伝えると、それまで苦笑いを浮かべていたオリヴァーはふと真顔に戻った。オリヴァーが思いのほか真剣に受け止めてくれたため、自分の発言に少し罪悪感を抱いた葵は渋い表情になる。葵の表情に気付いたオリヴァーは再び苦笑を浮かべて場を和ませた後、話を続けた。

「分かった。俺も、実はちょっとやりすぎだと思ってた」

何がどう『やりすぎ』だったのか、実際のところマジスターの悪行を全て把握しているわけではない葵にはよく分からなかった。だが意見を聞き入れてくれたオリヴァーが謝罪を口にすると同時に頭を下げたため、それを見た葵は複雑な気分になる。しかしオリヴァーにとつては頭を下げることも何でもないことらしく、顔を上げた彼は淡々とした語り口で話を再開させた。

「ウィルはもうちょっとかい出さないと思うけど、キルがどう出るかは俺にも分からない。出来るだけ止めるように頑張ってみるけど、また迷惑かけたらごめん」

「……もう、いいよ。それはオリヴァーのせいじゃないし」

「そう言ってもらえるとありがたいぜ。キルを止めるのは苦勞するからな」

冗談半分のように言つて、オリヴァーは爽やかな笑みを浮かべた。オリヴァーが見せた表情には邪心がなく、つい先程まで彼の来訪自体を迷惑に感じていた心がほどけていく。改めてオリヴァーに好意を抱いた葵は彼との関係を失うことを少し惜しく思ったが、それはそれ、これはこれである。

「ところで、キルが壊した物つて何だったんだ？」

「大切な、もの」

葵の発した言葉には壊れてしまった携帯電話に対する深い想いがこめられていた。それが何かは分からなくとも葵の想いは伝わったようで、オリヴァーは真面目な表情で言葉を次ぐ。

「その壊れた物、俺に預けてくれないか？ キルが迷惑かけたお詫びに直すよ」

「ありがと。でも、手元になんだ」

すでに別の人に修理を依頼していることを明かすと、オリヴァーは「そつか」とだけ言つて立ち上がった。

「じゃ、帰るわ。朝早くに押しかけてごめん」

去り際に再び爽やかな笑みを残して、オリヴァーは客間を出て行った。その後、廊下で控えていたらしいクレアと言葉を交わす声が

聞こえたあとは足音が遠ざかって行く。廊下からも人の気配が失せてから腰を上げた葵は勉強に専念しようと思ひ、二階にある寢室へと戻った。

裏切り(2)

夏真つ盛りである橙黄とうきゆうの月の二十一日、丘の上に建つトリニスタ魔法学園アステルダム分校の校舎は満身に夏の強い日差しを浴びていた。熱せられている校舎の中ではちょうど授業が行われている時分なので、アステルダム分校が有する広大な敷地内はどこもかしこもひっそりと静まり返っている。それはマジスターの領域である大空の庭シエル・ガーデンも同じことだったが、季節に関係なく咲き乱れている花園の中には二人の少年の姿があった。静謐の中でゆっくりと紅茶を口に運んでいる赤髪の少年は、名をウィル・ヴィンスという。恐ろしく女顔をしている彼の表情は他人の話聞き流している時のものであり、ウィルの向かいに腰かけているオリヴァー・バベツジは渋面を作りながら先程と同じ科白を再度繰り返した。

「もうアオイにちょっとかい出さないでやってくれって、聞いてるか？ ウィル」

「オリヴァー、もしかしてアオイに惚れた？」

「はあ？」

ウィルから返ってきた言葉はまったくもって質問の意図にそぐわないものであり、オリヴァーは素っ頓狂な声を発してしまった。それまでティーカップと向き合っていたウィルはカップをソーサーに戻し、改まってオリヴァーに視線を据える。ウィルはよく真顔のままジョークを言うので、からかっているのかどうか判断しかねたオリヴァーは少し眉根を寄せながら真面目に答えを口にした。

「可哀想、だろ？」

「そう？」

「知らなかったとはいえマジスターが、魔法の使えない一生徒を傷つける目的で魔法を使っただぞ？ 教師が庇ってくれたからいいようなものの、下手したら重症じゃ済まなかったかもしれない。少しは罪悪感とか抱かないか？」

「自業自得でしょ。どんなに強力なコネクションがあるのか知らないけど、魔法を学ぶ場所に魔法を使えない人間がいること自体がおかしいんだから」

ウィルの意見はある意味では正論であり、返す言葉に詰まったオリヴァーはそのまま閉口してしまった。

数日前、ミヤジマ「アオイが所属する二年A一組がグラウンドで実習を行った。ウィルはその際、葵の心を掴みたいキリル「エクランド」という友人を応援するという名目で、彼女に向かって魔法を放ったのである。しかし実は、ウィルの真意は友人の恋路を応援するなどという生易しいものではなかった。彼が本当に確かめたかったことは『葵は魔法を使えるか』という一点だったのである。案の定と言っべきなのか、ウィルから攻撃を仕掛けられた葵は魔法を使わなかった。トリニスタン魔法学園に通う生徒であれば魔法には魔法で対応するのが普通なのに、彼女は魔法を発動させるような素振りすら見せなかったのだ。さらに葵の持っている魔法書の中身が初歩的な魔法しか収められていないことも判明したため、ウィルとオリヴァーは『葵は魔法を使えない』という結論を導き出したのだった。

葵が魔法を使えないことが判明してから、ウィルとオリヴァーの対応は真つ二つに分かれた。ウィルは魔法の使えない人間には興味がないというスタンスなので、彼の好奇心は一気に熱を失った。だがオリヴァーはまだ、葵の謎めいたバックグラウンドに興味を残している。しかし葵を可哀想と思っっているのも本心なので、以前のよ

うな強行的な探り方をしようという考えは抱いていなかった。

「そんなに念を押さなくても、もう飽きちゃったから僕は大丈夫だよ。アオイの心配をするなら僕よりキルじゃない？」

「そう、なんだよな」

キリル「エクランド」という少年は基本的には他人に無関心なのが、それが仲間と認めた者のこととなると執拗なまでに知りたがる葵に殴られたことが抑制力になってくれればいいのだが……。そこまで考えたところで、オリヴァーは魔法陣がある方角へと顔を傾け

た。転移魔法が使われた気配を感じ取ったウィルもまた、オリヴァーと同じタイミングで遠くへ視線を投げかける。花園の片隅に現れた炎のような紅の魔力は、今日は安定感のある質感でもってこちらへと近付いて来ていた。

「今日は怒ってないみたいだな」

「怒ってはいないみたいだけど、気分が悪そうだね。二日酔い、かな？」

親しい者であれば、魔力を見るだけで気分や体調までも察することが出来る。キリルの魔力からウィルと同じような感じを受けていただけに、オリヴァーは苦笑を浮かべながら姿を現した魔力の主を迎えた。

「あつたまいてー」

空席にどっかりと腰を落ち着けたキリルは、そんな独白を零しながらテーブルに突っ伏した。やって来るなりテーブルに頬を寄せたキリルを見て、ウィルが呆れた表情になる。

「調子が悪いのなら寝てればいいのに」

「あの女に会って、確かめたら帰る」

キリルが妙なことを口走ったので、オリヴァーとウィルは顔を見合わせた。昨今、キリルが『あの女』呼ばわりする人物は一人しかない。それが先程まで話題に上っていた少女を指していたので、オリヴァーは恐る恐るキリルに問いかけてみた。

「あの女って、アオイのことか？」

「今は他にいないでしょ。それで、アオイに会って何を確かめるの？」

オリヴァーの問いに答えたのはウィルであり、彼は至って平静な調子で話を先に進めた。まだテーブルから顔を上げないキリルが一日のことだと言うので、オリヴァーとウィルは再び顔を見合わせる。

「キル、もしかして何も覚えてないの？」

ウィルの発した問いかけに、キリルは無反応でいることで答えを

返した。それが肯定の意であることを知っているオリヴァーは微かに眉根を寄せる。何も覚えていないのでは、いくら酒を飲ませたところで口の割りようがなかったというわけだ。

「アオイが言うには、キルがアオイの大切な物を壊したんだと。それで、たぶんアオイがキレちまって、キルを殴ったんじゃないかと思う」

出来るだけ葵の手を煩わせないようにしようと配慮したオリヴァーは、彼女から聞いた話に憶測を交えてキリルにあの日の真相を伝えた。話を聞いたキリルはがばつと上体を起こし、意外そうな面持ちでオリヴァーを見据える。

「殴られた？ オレが？」

「あれだけ頬を腫らしてたのに、それも覚えてないの？」

つい先程までキリルの記憶力を疑っていたウイルも、今では完全に呆れを取り除いている。こうまでキリルの記憶が抜け落ちているようでは、忘れっぽい性格の問題というよりも別の理由が考えられそう。ウイルはすでにそちらに考えを移しているようだったが、当事者であるキリルはしつこくオリヴァーに食い下がった。

「オレがあの子に殴られたって、マジなのか？」

キリルの形相が鬼気迫るものだったので、オリヴァーは少し身を引いた。本当にそうなのかと問われても、当事者ではないオリヴァーには本当のところは分からない。だが状況を考えるにほぼ間違いないのではないかと思っただけで、オリヴァーは、その旨をキリルに伝えた。オリヴァーからはつきりした返答を得た後、キリルは顎に手を当てて考えこむ。

「……あの女、」

許さねえ、という突然の咆哮と共にキリルの体から具現化した魔力が噴き出した。危うく焼き殺されそうになったオリヴァーとウイルは、それぞれの魔法で身を護りながらキリルから距離を置く。紅蓮の炎を身に纏ったキリルは一瞬してシエル・ガーデンを灰にした後、転移魔法でどこかへ移動してしまった。

魔力の持ち主が姿を消すと、炎に包まれていた花園は静寂を取り戻した。しかしそれは以前の静謐ではなく、焼け野原と化したシエル・ガーデンには荒涼とした雰囲気漂っている。あまりに突然の出来事に体は対応しても思考が追いついていかず、オリヴァーはしばらく焼け跡に佇んだまま呆然としていた。風の魔法を巧く使って上空に避難していたウィルが、やがてオリヴァーの近くにふわりと下り立つ。呆けているオリヴァーを仰いだ彼は至って平静な調子で口火を切った。

「行かなくていいの？」

ウィルのこの一言で、オリヴァーの頭は一気に現実を理解した。あの雄叫びから察するに、キリルが向かった先は間違いなく葵の元である。そして怒り狂ったキリルは、誰かが止めるまで暴走を続けるのだ。

「僕は帰るから。あとよろしく」

すっかり葵に興味を無くしているウィルは淡白に言い置くと、帰還を意味する「アン・ルヴィヤン」の呪文を唱える。ウィルがシエル・ガーデンから姿を消す頃にはオリヴァーも転移の呪文を唱え終えていたため、人間の姿を失った元花園はその後、いつそう物悲しい様相を呈すことになった。

裏切り(3)

トリニスタン魔法学園アステルダム分校の校舎二階にある二年A一組の教室では、いつもと変わらぬ静けさの中で授業が進行していた。時折、このクラスの担任であるロバート「エーメリー」に指名された生徒が口を開いている他は皆、静かに彼の授業に聞き入っている。窓際の自席で魔法書を開いている葵もまた、真剣な面持ちで教室前部にあるブラックボードを見つめていた。ロバートが今解説しているのは『魔法陣』と『魔方阵』の違いについてである。円形が主流の魔法陣は広く普及しているものの、方形の魔方阵は一部の魔法士たちの間でしか使用されていないため、大半の生徒は理解が追いつかずに頭を抱えている。だが魔法陣の基礎知識がない葵は逆に、ロバートの説明をすんなりと受け入れることが出来た。

(へえ……数学みたい)

魔方阵とは方阵に数字を配置し、縦・横・斜めの合計がいずれも同じになるもののことである。ロバートがブラックボードに最小の魔方阵を描き出していたので葵はそれを真似、私物のノートにオリジナルの魔方阵を描き出してみた。もともとパズルなどの細かい作業が好きな葵にとって、これがなかなか面白かったのだ。しかしそんな楽しい授業は、突如校舎を揺るがした衝撃で中断となった。

(な、何!?)

直下型地震のような振動が収まった後、狼狽した葵は机の下に身を潜ませた。それは反射的な行動で、幼い頃から年に一度は経験していた防災訓練の賜物だったのかもしれない。しかし防災訓練というものが存在しないこの世界では、そんな行動をとったのは葵だけだった。

机の下から周囲を窺った葵は誰一人として自分と同じ行動をしていないことに気付き、恥ずかしくなってしまう。しかし机の下から抜け出そうにも、周囲の異様な雰囲気それを許さない。まるで

恐怖に直面した時のように凍りついたまま動かないでいるクラスメイトたちを見上げた葵は、そこで改めて眉根を寄せた。

(何だろう、この感じ)

葵がそんなことを考えているうちに、二年A一組の扉が勢い良く破られた。開かれたというよりは廊下側から体当たりでも食らわされたように扉が倒れこんできたのだが、そこに立つ人影はない。代わりに廊下から炎が流れ込んできて、二年A一組の生徒達は思い思いに避難を開始した。

「あつっ!!!」

机の下に潜っていたせいで状況の変化に気付くのが遅れた葵は悲鳴を発しながら机の下から抜け出した。その頃には教室中に炎が回っていて、すでに他の生徒達の姿はない。だが唯一教室に残っていたロバートが助けしてくれたため、葵は事なきを得た。

「大丈夫か?」

「は、はい。ありがとうございます」

ロバートに答えを返しつつも葵の意識は周囲の異様な光景に向かっていた。炎が燃え盛っている教室の中で、葵とロバートの周囲だけが薄い膜のようなもので覆われている。ついさっきまでは熱くてたまらなかったのだが、どうやらこの薄膜のおかげで熱さを感じなくなっただけだ。ロバートが傍に居るおかげで平常心を取り戻した葵は私物を燃やされてはたまらないと思い、慌てて荷物を鞆へと詰め込んだ。

「……目的地はここか」

私物をひとまとめにした鞆を抱いたことでホッと一息ついていた葵はロバートの零した独白で我に返った。振り返って見ると、ロバートは真顔のまま扉がなくなった出入口を見据えている。しばらくの後、そこに紅蓮の炎を纏った人影が姿を現した。ロバートの背中から少し顔を覗かせた葵は教室の出入口に佇んでいる人物を目にし、おもむろに顔を歪める。校舎全体を焼き払うほどの炎を纏って二年A一組に姿を現したのは、マジスターの一人であるキリ

ル「エクランドだった。彼は誰がどう見ても怒っていて、その怒りの原因に心当たりのあった葵は再びロバートの背へ身を隠す。それは恐怖心からくる反射的な行動だったのだが、葵は逃げ出したことをひどく悔やんだ。

（あつちが殴られるようなことするから悪いんじゃない）

携帯電話を壊された時のことを思い返して心を奮い立たせた葵は、今度こそロバートの背中から飛び出した。葵の姿が露わになったことで怒りにギラついたキリルの目が彼女の方へと向かう。戸口に佇んだままだったキリルがゆっくりと歩き出すと、ロバートが再び葵の前に体を割り込ませた。

「授業中だ。お引取り願おう」

冷静に呼びかけたロバートに対し、キリルは腕を一振りすることで応えとした。刹那、葵達の背後で教室中の窓ガラスが割れ、室内に轟音を響かせる。とっさにうずくまって頭を庇った葵は、しばらく経っても変化がなかったので恐る恐る顔を上げてみた。

「退け」

キリルが短い言葉を口にしたのと同時に、ロバートの体が宙に飛んだ。教室の前方にあるブラックボードまで飛ばされたロバートはそこに強か体を打ちつけ、そのまま力なく倒れこむ。

「ロバート先生!!!」

慌ててロバートに駆け寄ろうとした葵は、しかし一步を踏み出す前に動きを止めた。その理由は、突如として出現した炎の壁に行く手を阻まれてしまったからである。もはや誰がそれをやっているのかは明白だったので、葵はありったけの怒りを含んだ視線をキリルへと投げつけた。すると、それまで冷酷なまでの無表情を保っていたキリルがビクリと体を震わせる。予想外の反応を返されたことで葵が眉をひそめた刹那、キリルは糸が切れた操り人形のようにその場にへたりこんでしまった。きれいに脚を折って座り込んだキリルはそのまま、ものすごい勢いで上半身を倒して額を床にこすりつける。

「すみませんでした!!」

生まれて初めて土下座による謝罪を体験した葵は驚きすらも感じることが出来ないほど呆気にとられてしまった。いつの間にか教室を燃やしていた炎も姿を消していて、室内には冷え切った空気が流れている。口を開くことも動くことも出来ないような異様な静寂は、廊下の方から聞こえてきた第三者の声によって破られた。

「キル!!!」

慌てた様子で二年A一組に駆け込んで来たのは、オリヴァーだった。教室の惨状を目の当たりにしたオリヴァーは顔を歪めながら葵に何かを話しかけようとしたのだが、彼はその前に、葵の足元にいる人物に目を留めて動きを止める。土下座しているキルルに目を注いだまま口を開けずにいたオリヴァーはやがて、ピクリとも動かないキルルに向かって恐る恐る声をかけた。

「き、キル……?」

仲間と認めた者の声に反応してなのか、土下座の体勢のまま固まっていたキルルがゆっくりと頭を上げた。彼と向かい合う形で立ち尽くしていた葵はキルルの顔に浮かんでいた驚愕を目の当たりにして、さらに困惑の度合いを強める。何故、自分から頭を下げた人物が一番驚いているのか。その理由は、呆けたように座り込んでいるキルルにも、彼の顔を覗き込んだオリヴァーにも分からないようだった。

「何でだ? どうしてこのオレが頭を下げなくちゃならねんだ?」

「キル、しつかりしろ!」

引きつった笑いを浮かべながら独白を零しているキルルの肩を、オリヴァーが激しく揺さぶっている。その衝撃で我に返ったのかどうかは定かでないが、泳いでいた視線を立ち尽くす葵に定めたキルルは鬼のような形相になって立ち上がった。キルルが拳を振り上げたので、ビクツとした葵は数歩後退する。しかしキルルの拳は葵に届くことなく、彼はまるで定められたプログラムを実行する機械のように葵の足元で再び頭を下げた。

「すみませんでしたっ！！」

屈辱に満ち溢れた口調でキリルに謝罪を叫ばれた葵は、救いを求めてオリヴァーに視線を移す。しかしオリヴァーも誰かをフオロースするどころではないようで、目を合わせてはくれなかった。

「ミヤジマアオイ」

力なく床に座り込んで反応を示さなくなったキリルを我に返そうと必死になっているオリヴァーを眺めていると、どこからか呼び声が聞こえてきた。聞き慣れた者の声にロバートのことを思い出した葵はハツとして声の主を振り返る。

「先生、大丈夫ですか？」

「ああ、私は問題ない。君は平気か？」

「あ、はい。私は何も、されてませんから」

そして何も、していない。言外にそう付け足した葵は未だ床で呆けているキリルを見た。ロバートも同じ方向へ顔を傾け、抜け殻のようになっているキリルを一瞥してから再び葵に視線を戻す。

「今日はもう授業にならないな。後のことはやっておくから、君ももう帰りなさい」

葵にそう言い置くと、ロバートはマジスター達の元へと歩み寄って行く。これ以上厄介事が増える前に逃げた方が得策だと思った葵は床に転がっていた私物の鞆を拾い上げ、ロバートに一礼してから二年A一組の教室を後にした。

裏切り（4）

夏^{かげつ}月期の中間の月である橙^{とうきゆう}黄の月の二十二日、いつも通りトリニスタン魔法学園アステルダム分校に登校した後、葵は放課後の補習を蹴^くってパンテノン市街を訪れていた。

「深いため息だね」

隣を歩いている少年から不意にそんな言葉を投げかけられたので、知らず知らずのうちにため息をついていたことを知った葵は苦笑いを浮かべた。市街でよく見かける、地味な色合いをしたズボンとジャケット、ベストにベレー帽といった出で立ちをしている少年の名はザック。葵は彼と、街外れにあるジャンクストリートを目指して歩を進めていた。

「疲れてるみたいだけど、何かあった？」

「まあ、ちよつとね……」

マジスターとは関わらず平穩に日々を送りたいという願いとは裏腹に、葵は昨日、またしても騒動に巻き込まれた。それは本日も確実に尾を引いていて、キリルがたびたび二年A一組の教室に怒鳴り込んできたのだ。しかし結局は昨日の再現にしかならず、最終的にはオリヴァーがキリルを回収するという出来事が一日の間に五度ほどあった。この奇妙な出来事が生徒達の関心を引かないはずもなく、葵はまたしても時の人となってしまったのだった。

葵は以前にもマジスター絡みの騒動に巻き込まれているのだが、その時は生徒達が敵と味方にはつきりと分かれた。しかし今回はキリルの態度が定まらないため、生徒達も葵への対応に迷いを見せている。近頃やたらと絡んできていたシルヴィアでさえ話しかけてこなくなつたが、常に生徒達からの監視にだけは晒されているのだ。この状態がストレスにならないはずがなく、葵は渦中の人になつてからたつた一日で疲弊しきつていた。

（ほんと、勘弁してほしいよ）

話を聞いてくれる相手がいるなら愚痴の一つでも零したいところだが、ザックと彼の妹のリズにはトリニスタン魔法学園とは無関係でいてほしい。そう考えている葵は気分を変えることにして、ザックに笑みを向けた。

「リズも待つてることだし、早く行こう」

兄のザックが戻るまで、リズは一人で工房の留守番だ。葵は早くに帰ってあげないと可哀想だと思ったのだが、ザックはまた違う考えを抱いているようだった。

「あいつのことは気にしなくていいよ。どうせ店番に飽きたらアレックスの所へ行くだろうから」

「アレックスつてリズの彼……恋人、だっけ？」

「そう。いい奴なんだけど押しに弱くてさ。いつもリズに押し切られてるんだ」

「へへ、会ったことあるんだ？」

「新しい恋人ができるたびにリズが連れて来るから。アレックスで六人目だったかな？」

「……リズつて、確か十五歳だったよね？」

「そうだけど？」

ザックはあっけらかんと答えたが、葵はリズの年齢と恋人の数を比較して改めてシヨックを受けた。

（でも、そっか、それがフツウかあ。弥也やもしょっちゅう彼氏が変わってたしなあ）

自分の経験がなさすぎるのだと実感してしまった葵は複雑な気分になってしまった。しかしすぐに他人は他人、自分は自分と気分を切り替え、深く考えることなくザックとの話を再開させる。

「ザックは？」

「え？ 何が？」

「今までどのくらい恋人いたの？」

葵は特に意図するところもなく気軽に尋ねたのだが、ザックは何故か閉口してしまった。ザックの反応が悪かったので葵は慌ててフ

オローを入れる。

「あの、答えたくなかったら別に答えなくてもいいからね？」

「……そういうアオイは？」

「え？ 私？」

唐突に尋ね返されたため、葵は返す言葉に詰まってしまった。葵の反応が悪かったからなのか、ザックは心なしか真面目な表情で黙り込んでいる。ちょうどジャンクストリートに到着したこともあり、葵は苦笑いで話を切り上げることにした。

葵とザックがジャンクストリートを訪れたのは、ザックの知り合いに壊れた携帯電話の修理を依頼したからである。修理が可能か不可能か、その答えを知るのが今日なのだ。そして結果は、やはり思わしくないものだった。しかし最初から半ば諦めていただけに、葵は素直にその結果を受け入れた。

（電話すらないだもん。しょうがないよね）

固定電話すら存在しない異世界で携帯電話を直そうなどというのは、初めから無謀な試みだったのだ。それでも携帯電話の残骸が手元に戻って来ると少し物悲しい気分になってしまい、葵は心配そうな表情をしているザックに苦笑いを浮かべて見せた。

「ありがとね、ザック」

携帯電話は結局直らなかったが、葵は何とか直せないかと奔走してくれたザックに心から感謝していた。しかしザックは、この結果に納得がいかなかった様子で小さく首を振る。

「それ、僕に預けてくれない？ なんとか直らないか、もう少し考えてみるから」

「ありがと。でも、もういいんだ」

「良くないよ。大切なものなんだろう？」

ザックの口調がいつになく強いものだったので、驚いた葵は目を見開いた。葵が大袈裟に驚いたからか、ザックは決まりが悪そうな表情になって視線を逸らす。

「力になりたいんだ。アオイには仕事が行き詰ってた時、助けても

らったから」

「ザック……」

この世界へ連れて来られてから理不尽ばかりを押し付けられてきた葵にとつて、ザックのストレートな優しさは涙を誘うくらい嬉しいものだった。思わず涙ぐみそうになってしまった葵は顔を背けて慌てて目元を拭い、それから笑顔でザックを振り返る。

「ありがとう。じゃあ、お願いします」

葵が差し出した携帯電話の残骸を、ザックは深く頷いて見せながら受け取った。それをジャケットのポケットにしまったザックは葵に笑みを返した後、急に気恥ずかしそうな表情になる。

「アベニューで買物をしてから帰ろう。はぐれると大変だから、その……」

言葉を濁らせながらザックが所在なさげに手を動かしていたので、何となく彼の言いたいことを察してしまった葵も顔を赤らめて俯いた。しかし嫌かといえはそうでもなく、葵は差し出された手にそつと自らの手を重ねる。葵の手を引いて歩き出したザックは耳まで真っ赤になってしまい、二人して黙々と歩を進めた。

(そういえば昔、ハルとも手をつないだことがあったっけ)

初恋の相手であるハル「ヒューイットと不可抗力的に手をつないで歩いた時は緊張のあまり動悸が激しく、嫌な汗をかいてしまった。あの時のようなときめきはないものの、掌から伝わってくるザックの温もりには不思議な安心感と妙な照れくささがある。黙っていることに耐えられなくなってしまった葵はザックの隣に並び、はにかんだ笑みを浮かべながら口火を切った。

「リスに何か買って帰ってあげようよ」

「それは別にいいよ」

「え〜？ 可哀想じゃん、店番してくれてるのに」

「じゃあ、賭ける？ 僕達が帰った時にリスがちゃんと店番してるかどうか」

「あ、それいい」

ひとたび会話を始めてしまえば気まずさも消え、葵とザックは自然と手を繋ぎながら買い物客で賑わうフォーニアベニユーの雑踏に吞まれていった。

夕刻、パンテノン市街はアベニューやストリートの区別なく、買い物客で賑わう。月末の市ほどではないものの通りを容易く移動することは難しくなるほどの人出があるため、往來に面しているテラス席を設けている飲食店では夕刻になると、人目と騒音から來客を保護するための魔法を使うのが一般的である。そんな富裕層向けのテラス席の中でも、店内からも干渉を制限されているようなVIP席に二人の少年の姿があった。

「最近のキルはおかしい」

どういった点がどうおかしいのか、滔々とつとつと語った末にオリヴァーはそんな一言で話を締め括った。しかしオリヴァーの向かいの席に座って、静かにティーカップを口に運んでいるウィルの反応は素っ気ない。

「ふうん」

そのたった一言で話を聞き流されてしまったため、本日はトリニスタン魔法学園に姿を現さなかったウィルを探し出すだけでも相当な労力を必要としたオリヴァーはがっくりと頭を垂れた。

「なんか、こう、もっと反応の仕様があるだろ？」

一緒に悩んでくれる気配さえ見せないウィルに対し、このところキリルに振り回されているオリヴァーは恨めしげな視線を投げかけた。しかしそれでも、やはりウィルの反応は素っ気ない。

「僕にどうしろって言いたいのか？」

「キルを何とかしてくれ」

「放っておけばいいじゃない。僕らに害があるわけじゃないんだし」
「キルがあのもんまだと困るヤツがいるんだよ。それに俺も、あんなキルは見えてられない」

唐突に変調をきたしたキリルは葵に土下座をして以来、明らかに様子がおかしくなっていた。その理由は、変調の原因が本人にも解らないからだと思われる。キリルはもともと気性がひどく不安定な性質のため、このままでは本当に壊れてしまうのではないかとオリヴァーは心配しているのだった。

「まあ、キルが土下座するなんて只事じゃないよね」

手にしていたティーカップをソーサーに戻したウィルは、少し関心のある素振りを見せながらオリヴァーに向き直った。彼がようやく話に応じてくれる気になったことを察したオリヴァーも、喋りっぱなしで渴いた喉を紅茶で潤してから再び口を開く。

「キルがアオイに悪いと思って謝ってるならともかく、本人の意思とは無関係に土下座してるのはおかしいだろ？」

「僕としてはキルが心を入れ替えて謝ってる方が驚きだけど」

「そういう問題じゃないだろ。話を逸らすなよ」

「分かってるよ。それで、キルがおかしくなる時に魔法が発動してる形跡はあるの？」

ウィルが核心を口にしたので、オリヴァーは眉間に寄せていたシワを解いてから小さく首を振った。

魔法とは本来、炎や風といった自然界の力を制御したり増幅したりする代物である。大きなカテゴリとして考えれば人体も自然界の一部には違いがないので、人体に作用する魔法が存在しないこともない。だが人体に働く魔法はまだ研究途中のものであり、一介の魔法使いが汎用出来るようなものではないのだ。それはトリニスタン魔法学園のエリートであるマジスターとて例外ではない。オリヴァーが「分かるわけがない」と言うと、ウィルは苦笑いを浮かべた。

「まあ、とりあえずキルの様子を見てみるよ」

「頼んだ」

そこで話が一段落したので、オリヴァーとウィルは同時にティーカップへと手を伸ばした。オリヴァーはそのままカップを口元へと運んだのだが、ウィルはカップが唇に触れる前に動きを止める。世界の片隅でウィルの異変を捉えたオリヴァーは首を傾げながらティーカップをソーサーに戻した。

「どうした？」

「噂をすれば、だよ」

そんなことを言いながらウィルが指を差したので、オリヴァーは大きく体を回転させて背後を振り向いた。すると偶然にも、フォーニアベニユーの雑踏に葵の姿を見つけたのでオリヴァーは瞠目する。驚きの理由は人混みの中に知己の姿を発見したことよりも、葵が見知らぬ男と仲睦まじくしていることの方だった。

オリヴァーとウィルがいるVIP席はマジックミラーのような仕様になっていて、すぐ傍を通過して行った葵達はこちらに気付かなかったようだった。そのため彼女の笑みは素顔であり、学園では決して見せることのない幸せそうな表情を目の当たりにしてしまったオリヴァーは複雑な思いで独白を零す。

「……恋人、いたのか」

「ハルよりずっとお似合いだったね。やっぱり庶民には庶民が似合うよ」

ウィルの辛辣な発言は嫌味でも何でもなく、ただの本心である。そのことを知っているオリヴァーは驚きの余韻を残しつつもウィルに苦笑いを向け、何となく所在なげにティーカップへと手を伸ばした。

裏切り（5）

夏月期のちようど真ん中の月にあたる橙黄とうおうの月の二十三日。その日、学園からの予鈴が届けられる前にトリニスタン魔法学園アステルダム分校に登校した葵は転移が完了するなり眉根を寄せた。その理由は、朝も早くからマジスター達と顔を合わせる羽目になったからである。正門付近に描かれている魔法陣の前にはキリル、オリヴァー、ウィルといった現在のアステルダム分校のマジスターが雁首を揃えていて、彼らはまるで葵を待ち構えていたかのようにさつそく歩み寄って来た。

「おはよ」

引きつった笑みを浮かべながら片手を上げて見せたのはオリヴァーである。葵は彼を一瞥した後、深々とため息を吐いた。葵の反応などすでに予測済みだったらしく、オリヴァーは苦笑いになりながら言葉を続ける。

「悪い。ちよつとだけ付き合ってくれよ」

「……付き合つて、何に」

「ちよつとした実験だよ」

オリヴァーの代わりに答えを述べたウィルが、まるで「おあずけ」を食らっている犬に対するようにキリルに指示を出した。ウィルの意を受け、不機嫌そうな顔をして佇んでいたキリルが心得たとはかに葵に掴みかかる。突然胸倉を掴み上げられた葵がどのような感情も示せずにいると、キリルは振り上げた拳と共に額を地にこすりつけた。

「……なるほど。これは重症かもね」

葵の足元で土下座しているキリルを冷静に観察した後、ウィルはそんな独白を零しながらオリヴァーを振り返った。彼の言う『実験』の内容を把握したことで平静さを取り戻した葵は不機嫌になりながら緩んだ胸元を正す。その直後、足元で蹲っていたキリルが勢い良

く体を起こしたので、驚いた葵は思わず身を引いてしまった。

「っ、ざけんなー!」

屈辱に満ち溢れた声でそう叫ぶと、キリルは再び葵に掴みかかってきた。しかし拳を振り上げようとすれば、彼の体は地へと吸い寄せられる。ありったけの恨みがこもっているかのような「すみません」という言葉をキリルから投げかけられても、葵にはどうすることも出来なかった。

「何とかしてよ」

げんなりしてしまった葵は足下のキリルから外した視線をオリヴァーとウィルに向ける。葵の視線を受け止めたオリヴァーとウィルは一度顔を見合わせ、オリヴァーの方が口火を切った。

「俺たちだって何とかしたいんだよ」

だが原因が分からないので対処の仕様が無いのだと、オリヴァーは苦い表情になりながら語った。ウィルは特に表情を動かすこともなく、葵から外した視線を未だ地に蹲ったままでいるキリルに落とす。

「精査が必要だね」

ウィルがぼつりと独白を零した直後、地に描かれている魔法陣が光を帯び始めた。まだ魔法陣の上に佇んだままでいた葵は何となく焦りを覚え、急いで外円の外へと出る。何かの魔法に反応した魔法陣はやがて光を収束させ、その上に一人の男子生徒の姿を浮かび上がらせた。たまたまその場に出現してしまった男子生徒はマジスターの姿を見て驚きを露わにし、低頭しながらおそおそと歩き出す。

しかし校舎に向かいかけた彼を、ウィルの声が引きとめた。
「ちようどいい。君、僕に協力してくれない？」

「えっ……」

呼び止められた男子生徒は明らかに狼狽えていたが、ウィルに拒絶を示すようなことはしなかった。言葉一つで有無を言わせぬ強制力が、マジスターにはあるのだ。

「そこに立ってるだけでいいから」

男子生徒にそう言い置いた後、ウィルはふてくされて地に座り込んでいるキリルへと向かった。ウィルが耳元で何かを囁くとキリルは真顔に戻りながら立ち上がり、体についた砂を払う。その動作を終えた後、急に走り出したキリルはウィルに言われた通りに立ち尽くしていた男子生徒を思い切り殴り倒した。

「あゝ、スツキリした」

他人を殴ったことに対する罪悪感など一欠けらもなく、清々しい表情のキリルはブラブラと手を振っている。オリヴァーは少しだけ顔をしかめながら倒れた男子生徒を見ていたが、助け起こすような素振りは見せない。顎に手を当てたウィルはキリルと男子生徒を見比べ、至って平静なまま考察を口にした。

「やっぱり、アオイだけなんだね。あ、君、もう行っていいよ。ありがとう」

殴られ役の男子生徒に一応の謝意は示したものの、ウィルの態度にはにべもない。放心したままの男子生徒がフラフラと遠ざかって行くのを見送った葵は嫌な気持ちになって顔をしかめた。

足止めを食っているうちに生徒達がやって来る時間帯になってしまい、正門付近に描かれている魔法陣には白いローブを纏った生徒が姿を現し始めた。彼らは一様にマジスターに目を留め、男子生徒は恐縮し、女子生徒は歓喜の声を上げる。その生徒達の反応もマジスターもやっぱりおかしいと思っただ葵は密やかにその場を立ち去ろうとした。しかし遠巻きにマジスター達を取り囲んでいる女子生徒の輪から外れた行動を取った者の姿が視界に入り、目を引かれる形で顔を傾ける。突如として輪の中心に躍り出た一人の女子生徒のせいで、それまで華やいでいた場の空気が一瞬にして凍りついた。

「ウィル様」

オリヴァーと話をしていたウィルに声をかけたのは葵のクラスメイトであるシルヴィアだった。優越感たっぷりといった表情で静まり返った周囲を見回した後、彼女はウィルに向かってさらなる言葉を重ねる。

「近頃、あまり学園にはいらしていないのですね。お会いしたかったですわ」

シルヴィアが親しげな関係をおわせる口調で話しかけたからなのか、ウイルの隣にいたキリルが途端に不機嫌な顔つきになった。

「ウイル、こいつ誰だ」

「誰だっけ？」

小首を傾げたウイルは考えようとする素振りもなく、キリルの質問に問いかけの形で答えた。刹那、それまで水を打ったように静まり返っていた周囲から失笑が沸き起こる。目を見開いていたシルヴィアは周囲からの冷やかな笑い声で我に返ったのか、焦ったようにウイルに縋りついた。

「そんな！ 以前デートをしていたときに、わたくしに愛を囁いてくださったではないですか！」

「あ、思い出した」

必死の形相をしているシルヴィアとは対照的に、傍で成り行きを見守っていたオリヴァーが軽い調子で手を打った。

「ほら、前にアオイを連れて来たら言うこと聞いてやるって言っただろ？ その時、お前とデートしたいって言ってた子だよ」

「ああ……そんなこともあったっけ」

事情を知っているオリヴァーに説明されてようやく、ウイルはシルヴィアの存在を思い出したようだった。しかしデートの時に愛を囁いてくれたというシルヴィアの話とは裏腹に、ウイルの冷静さは崩れる気配すらない。

「もしかして、僕が君を愛してるって勘違いしちゃった？」

縋り着いて来ているシルヴィアを引き剥がした後、ウイルは淡々とした調子で彼女に問いかけた。その一言にシルヴィアは絶句し、周囲からは愉快そうな笑い声が沸き起こる。それまで事態を静観していた葵は輪の中心へと歩を進め、無言でウイルの頬を張った。

「ウイル!!!」

「ウイル様!!!」

キリルと、マジスターを取り巻いている女子生徒達から同時に驚きの声が上がった。シルヴィアが虚ろに顔を上げてきたが、葵は彼女を見ることなくウイルだけを見つめている。無表情のウイルは叩かれた頬に手を当て、それから改めて葵に視線を傾けた。

「てめえ!!!」

怒りを露わにしたキリルが介入してきたが、彼は葵の胸倉を掴み上げたところで地に平伏してしまった。そんなキリルの矛盾が波紋を呼び、周囲がどよめく。しかしウイルが口火を切ると、ざわついていた生徒達は一様に口を閉ざした。

「説明してくれる？ どうして僕が叩かれたのか」

「分からないの？」

「分からないから訊いてるんじゃない。納得のいく説明をしてよ」

「……サイテーだよ、ウイル」

そこまで話を通じないのかと、葵は絶望に似た気持ちを抱きながら苦く独白を零した。するとウイルは、何がどう最低なのかと問いを重ねてくる。ウイルとシルヴィアから向けられる質の違う視線の板挟みに合いながら、葵はそのどちらも見ないように目を伏せながら答えを口にした。

「デートした時に何があつたのかなんて知らないけど、期待を持たせておいて笑いものにするなんてあんまりじゃない」

「僕は、約束したことはない。それなりの対応をすることにしてるんだ。あの時はその彼女が僕に理想の恋人を求めてきたから、それに応えてやった。むしろ親切じゃない？ それを、彼女が勝手に勘違いしたんだよ」

「好きな人から優しくされたら勘違いでもしたくなるんだよ。恋愛って、そういうもんでしょ」

「それ、誰の話？」

思いを言葉にしている途中から薄々自分でも気が付いていただけに、葵は返す言葉に詰まって唇を引き結んだ。シルヴィアのウイルへの想いは、一般的な恋愛感情というものとは種類が違う。また彼

女はマジスターとデートをしたということをはひけらかしていたため、笑いものにされた一因は彼女自身にもある。加えて葵は過去にシルヴィアからさんざんな目に遭わされていて、彼女のことを好きではなかった。それでもシルヴィアの乙女心がないがしろにされたことに怒ってしまったのは、葵にも同じような経験をしたことがあるからだった。

「それが、僕が殴られた理由？」

ウィルにももう葵が自分のために怒ったのだと分かっているようで、彼の口調は冷ややかだった。反論は出来ないがウィルの行為が最低であることも確かであり、葵は悔しさのあまり奥歯を噛みしめる。するとウィルは仕方がないというように小さくため息を零した。「僕は恋愛っていう感情を知らないから、アオイの意見に納得が出来ない。でもそれは、僕が知らないのが悪いのかもしれない。だから、教えてよ」

「……え？」

「なんなら、ここでキスでもしてみよう？」

呆気にとられて顔を上げた葵の反応を待たず、ウィルは彼女の肩に手をかけた。刹那、周囲の女子生徒から絶叫が上がる。

「ちよ、待て!!」

ふてくされた様子で地べたに座り込んでいたキリルからもそんな抗議の声が上がったが、ウィルは意に介した風もなく葵のおとがいに手をかけた。そして彼はそのままゆっくりと葵の口唇に顔を近づけていく。

「……やっ!!」

ウィルの瞳に自分の困惑顔が映った瞬間、我に返った葵は全身でウィルを拒絶した。こうなることなど初めから分かっていたようで、葵から手を離れたウィルは冷ややかな目で彼女を見下す。

「説得力がないよ、アオイ。教えることも出来ない人間が偉そうなこと言わないでくれる？」

恥ずかしさと困惑で真っ赤になった葵は溢れそうな涙を堪えるた

めに唇を噛みしめた。とてもその場にはいられないと思った葵は逃げ出そうとしたのだが、彼女が行動を起こすより先にウィルが葵の手を拘束する。

「殴られ損なんて僕は御免だからね。これで無かったことにしてあげるよ」

顔を背けたままにいる葵にそう言い置くと、ウィルは唐突にキリルを振り返った。おそらくはウィルの行動を抑制しようとした時のまま動きを止めていたキリルは我に返った様子で体勢を立て直す。キリルが平素の状態に戻ったのを確認してからウィルは言葉を次いだ。

「キル、皆にお願いしてみなよ。アオイを自分の前に跪かせてみせろってさ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3264p/>

etc.ロマンス

2011年12月25日01時48分発行